

超なオイラのヒーロー 記録

アゴン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは、個性溢れるヒーロー社会の中で頑張る一人のヒーローの活動記録である。「なんか、エンデヴァーさんの視線が怖いんですけど?」

※1月9日、記録26の前半部分を大きく改編しました。

目次

記録 1 2	記録 1 1	記録 1 0	記録 9	記録 8	記録 7	記録 6	記録 5	記録 4	記録 3	記録 2	記録 1
161	144	132	115	103	93	77	62	49	33	16	2

記録 2 5	記録 2 4	記録 2 3	記録 2 2	記録 2 1	記録 2 0	記録 1 9	記録 1 8	記録 1 7	記録 1 6	記録 1 5	記録 1 4	記録 1 3
331	319	306	294	281	269	255	243	233	222	210	191	175

記録 3 8
記録 3 7
記録 3 6
記録 3 5
記録 3 4
記録 3 3
記録 3 2
記録 3 1
記録 3 0
記録 2 9
記録 2 8
記録 2 7
記録 2 6

489 476 464 452 439 428 416 405 391 379 364 355 345

記録 5 1
記録 5 0
記録 4 9
記録 4 8
記録 4 7
記録 4 6
記録 4 5
記録 4 4
記録 4 3
記録 4 2
記録 4 1
記録 4 0
記録 3 9

655 643 631 621 609 597 581 563 551 542 530 517 505

記録
6
4

記録
6
3

記録
6
2

記録
6
1

記録
6
0

記録
5
9

記録
5
8

記録
5
7

記録
5
6

記録
5
5

記録
5
4

記録
5
3

記録
5
2

823 815 803 790 779 769 758 745 729 716 700 688 675

記録
7
7

記録
7
6

記録
7
5

記録
7
4

記録
7
3

記録
7
2

記録
7
1

記録
7
0

記録
6
9

記録
6
8

記録
6
7

記録
6
6

記録
6
5

979 958 944 934 921 905 894 883 872 863 854 841 831

記録
8
4

記録
8
3

記録
8
2

記録
8
1

記録
8
0

記録
7
9

記録
7
8

105910501040102810191007 995

記録1

——超常社会。その事の始まりは、中国のとある病院にて発光する赤子が生まれ
たというニュースだった。

以降、世界各地にて超常的な能力を有する人間が発見され、その原因は不明とされつ
つも時は過ぎ、いつしか超常は日常へと浸透され、夢は現実のモノへと変化していく。

世界の総人口の約八割が、何らかの特異体質である超人社会は現在、混乱渦巻く世の
中にて誰もが空想して憧れた一つの「職業」が脚光を浴びていた。

【ヒーロー】、超常たる能力を有する個人が起こす事件事故に対抗するべく、有志の人々
が立ち上がった事を機に世界から認められた超人気職業。

悪意と暴力を振り撒く敵ツインから人々を守る——警察とは全く別形態の法の力を持
つ彼等の存在は、人々に認められる形として超常の能力を持つ「個性社会」と同時
に、世界に浸透していった。

これは、そんな超常の力を持つ個人達の中でも、【超スーパー】と称された一人のヒーローの——



「センサー、さよーならー!」

「はーい。個性を使ったり寄り道せず、気を付けて帰るのよー」

子供達の声で賑わう小学校。最後の授業も終え、帰りのチャイムと共に学校を後にするチビツ子達は、現在担任の先生の言葉を素直に聞き入れるお年頃。

今日は授業も午前で終わり、帰宅中の子供達は余った午後の時間の間に友達と遊ぶ約束をしながらそれぞれ帰宅を目指す。

そんな中、一人の少年が家に続く横断歩道に差し掛かった時、朗らかだった表情を一

変させる。

「——げっ、今日もいる」

「いや、開口一番に『げっ』は酷くない?」

横断歩行者の誘導旗を持って下級生達を誘導する一人の男、少年はこの男が嫌いな部類に入る程に苦手だった。

逆立った黒髪、民族衣装の様な格好をした独特な衣服を身に纏っているが、はだけた胸元からは鍛え抜かれたであろう見事な肉体が垣間見える。

“ヒーロー”。個性という個人が有する能力を法的に使用する事を許された存在、少年の目の前に立つこの男もそんな超人の一人だった。

「こんな所で油売ってないで、さっさと敵の一人でも捕まえてこいよ。それでもヒーローか」

「いやいや、将来を担う若い雛鳥達を見守るのも、ヒーローの大切なお仕事さ。そう邪険にしないでくれよ」

「うるせー能無し。そう言つてこの街にやつて来たけど、一度だつてヒーローらしいこととしてないじゃないか! 俺知つてるんだからな! お前みたいな奴の事『キューリョードロボ』って言うんだろ!」

「いや、ヒーローは基本的に歩合制だから、言う程お給料貰つてないだけだね」

目を鋭くさせ、男にアレコレ難癖を付けてくる少年に、男は苦笑いを浮かべていた。しかし、ヒーローは敵に対しての抑止力としての側面が確かに存在している以上、少年の言葉は暴論とは言えなかった。

「いいからさっさと敵を倒しに行けよ！ 他のヒーローは皆やつてるぞー！」

「いやあ、俺つて力尽くとか苦手で。敵だつて痛がつたり、泣いたりするだろ？ 俺も殴った拳とか痛いし、あんまりそう言う事はしたくないかなーつて」

「なんだよそれ！ 敵を倒せないヒーローなんてヒーローじゃないだろー！」

「いやいや、何も敵を倒す事だけがヒーローの全てではないぞ少年。こうやって君たちの事を見守るのもヒーローの役目、それにこう見えて俺は災害救助の時とか結構重宝されてるんだ——」

「うっせえバーカ！ この役立たず！」

敵を倒せと追求してくる少年に、男はただヘラヘラと笑いながら言い訳してくるだけ。自分がどんなに話しても積極的に敵を倒そうとしない男に、少年は臆て相手をするのもイヤになり、最後に男に罵声を浴びせて立ち去って行った。

「相変わらず、元氣だねー」

そんな少年の背中を微笑ましく男が見守るのも束の間。

「ま、まってエリザベース！」

「ワフン！ ワフン！」

男から少し離れた所で、一匹の大型犬と老婦人が駆けていく。散歩の途中で手綱から手を離してしまったであろう老婦人は愛犬の名を呼んで制止を促す。

しかし、お気に入りの散歩によって少々テンション高め的大型犬のエリザベスは止まらない。聽てその大型犬が交差点へと差し掛かった時——それは起きた。

トラックが迫る。規模的に「トン」はあるであろう運搬車の接近に、老婦人は目を見開いた。このままでは愛犬が危ない。誰か助けてと叫ぼうにも周囲には誰もいない。人通りの少ない所だから散歩コースにしていたのに、完全な失敗だ。

誰か、誰か助けて。このままでは愛犬のエリザベスが、見るも無惨な挽き肉に変えられてしまう。誰でもいいから助けてと、口を開けて叫ぶ老婦人——

「つと、今のは危なかったな。大丈夫か、ワンコ」

——よりも早く、事態は既に変化し、終わっていた。暴走していた愛犬は突然現れた男の腕に抱えられ、巨大な運送用のトラックは男の片手に乗せられていたのだから。

「はい、お婆さん。愛犬を大事にするのはいいけど、自分の事も考えな。可愛いワンコに振り回されているとあつちや、ご家族も心配するぜ？」

「は、はい。ありがとうございます」

その光景に半ば放心しながらも、老婦人は愛犬の手綱を手に取り、来た道へ戻つていく。大型犬の方も余程衝撃的だったのか、以降は大人しくなつて老婦人と共に帰路に就く。

そんな飼い主と飼い犬を見送ると、男はトラックを地面へゆつくりと下ろし、手の甲でドアを軽く叩き、運転手の安否を確認した。

「おい、運転の人、大丈夫かー?」

「あ、え? 今、視点が高くなつてた様、な?」

「おい、大丈夫? どつかぶついたり気分が悪くなつてたりしていないか?」

運転をしていて、脇道から大きな犬が飛び出してきたかと思つたら、体が車体ごと浮いた。そんな奇妙な体験を味わつたドライバーは目を点にさせて愕然としている。

そんな運転手は声を掛けられるとハッと我に返り、ヒーローらしき男から嚴重な注意を受けると、その後は安全運転を心掛け、スピードも落として去っていく。

そんな、何事もなかつた日常に満足しながら、男は再び数百メートルは離れている横断歩道へ戻つていくのだった。



「何だよアイツ、敵を倒せないヒーローとか、ヒーローである意味ないじゃん！」

不機嫌な様子を隠しもせず、年相応の癩癩を起こしながら、少年は先程の男への悪態を吐き続ける。

自分達のいる町は、敵もいなければヒーローもない。良く言えば平和で、悪く言えば退屈なト田舎だ。

だから、最初にヒーローが新たにこの町へやって来たとは知った時は大いにはしゃぎ、期待した。自分達の身近にヒーローが来てくれると、子供ながらに喜んだ少年は友人達と共にヒーローを迎え入れた。

最初は、とても嬉しかった。やって来たヒーローはそのコスチュームから異彩を放っており、鍛え抜かれた肉体も合わさって、上手く言葉に出来なかったが………兎に角、格好良かった。

しかし、その感動も長くは続かなかった。男は日がな一日中パトロールと称して町中をフラフラしているだけで、仕事をしているかと思っただけならお年寄りの荷物持ちや、低学

年の子供達の見守りをする程度。

地味。折角自分の町にやって来たヒーローは、やることなす事地味なだけの、ただの見栄だけの存在だった。

もう、自分達の友人の中に男に期待するものはない。せめて自分だけは彼を応援しようとするが、当の本人は全くその気にならず、ただ無為に日々を過ごしているだけ。

本人は災害救助を活動の主だと言うが、それも今となつては疑わしい。

ヒーローなのに戦わず、敵も倒せない。そんな奴がヒーローを名乗るのはおかしい。「あんな奴、さっさと出ていけばいいのに」

そうしたら、今度こそ強く格好いいヒーローが来てくれるはず、と。根拠のない理屈を思い立つ少年だが……。

「おいおいなんだよこの湿気た町は、完全にド田舎じゃねえか」

見上げる程の巨漢が、退屈そうに其処にいた。

少年は知らなかった。今日、ヒーローが飽和状態となるまで存在しているように、悪意もまた吐いて捨てる程あるのだと。正義の味方が身近にあるのと同じく、おぞましき悪意もまたすぐそこに存在しているのだと。

「つたく、こんなんじゃあ暴れ足りねえな。……まあ、ガキの一人や二人殺せばヒーローもやってくるだろうよ」

「あ

ニヤリと、捕食者の笑みを浮かべて自身に視線を向けてくる男に、少年は子供ながら理解した。

この男はヴィランダ。それも、ただのチンピラの様なモノではなく。本当の、本物の
—— 秩序の、敵。

「っ！」

「お？」

殺される。その事を本能で察した少年は背負っていたランドセルを男に向けて放り投げ、一瞬だけ視界を塞いでその場から全速力で逃げ出した。弱冠9歳の子供にしては、この判断力は大正解と言えるだろう。

「おっと、待て待て待てって、折角第一町人と出会えたんだ。もっとコミュニケーションを楽しもうぜ」

男の体から筋肉繊維が生える。それを鎧の如く身に纏うと身体能力を爆発的に向上させ、逃げ足の速い少年の前へ容易く先んじる。

凶悪な笑み、獲物は絶対に逃がさないという肉食動物とは違う悪意に満ちた笑み。この瞬間、少年の抵抗の意思は完全にへし折れ、涙を浮かべながらヘタリ込む。その座った所には湿った水溜まりが出来ていた。

「おー、怖いか？ 小便漏らすほどビビったか？ 安心しろオ、俺はガキをいたぶる趣味は……まあ無いこともないが、お前は比較的楽に殺してやるからよお」

嗤う。死にたくない足掻く子供を、無駄だと嘲笑う悪意が、この世界は存在している。なんで、なんで自分がこんな目に。そう叫びたくて仕方がないのに、恐怖で震えて声が上手く出ない。

代わりに出てきたのは、か細い疑問の声。

「——を——だ」

「ああ？」

「この町に来て、何を、つもりなんだよお」

涙声で、どうして自分の住む町にやって来たかと訊ねる少年に、男はやはりニヤリと嗤う。

「ストレス解消オ。此処んところ、本気で遊んだ事がなくってさあ、もうこの際なんでもいいからぶっ壊したくなつた訳よ。シケた詰まんねえ町かと思つてたが、気が変わった。この町は徹底的にぶっ潰す」

「な、なんで……」

「そりゃあ、お前。ガキは良く泣くだろ？ ホラ、彼処に学校があるじゃんか。つまり彼処を中心に暴れたら、ガキどもの悲鳴の大合唱は確実じゃん」

心底楽しそうに嗤う男に、少年は怒りよりも恐怖が勝った。この男は狂っている。他人との共存より、己のエゴを追求し、そして周囲を巻き込んで破壊の限りを尽くす。

目の前にいるこの男こそ、正真正銘のヴィランだ。

「んじゃあ、改めて記念すべき被害者のガキよ。お前は精々派手に……死んでくれや！」

膨らんだ巨腕が振り下ろされる。コンクリートの大地は碎かれ、更に下にある地盤が割れる。轟音と砂塵が舞う最中、ヴィランの男は違和感に気付く。

手応えがない。本当なら指先から脳髓まで肉と骨の碎ける感触がダイレクトに伝わってくるのに、それが全くない。

「——いない、だと？」

個性？ 分身、或いはそれに関連する何かの個性かと男は一人考えるが、それはない。何故なら、その原因となる者がすぐそこにいるからだ。

「なんだよ。なんだよなんだよ、ちゃんとしているじゃねえかヒーローがッ！」

「お、お前……」

吼え猛る敵の声に怯えながら、少年は自身を抱える男を見る。それは、先程まで自分がこれでもかと罵倒した横断歩道にいたヒーローの男。うだつが上がらず、日頃から地味な所しか見ていない、ヒーローらしからぬヒーロー。

そんな奴が、自分を敵から守っている。あの恐ろしいヴィランを背に、自分を庇っている。

「よお、大丈夫だったか少年？　危なかったなあ」

「あ、ああ………あの！」

「でも、俺が来たからもう安心していいぞ。オールマイトやエンデヴァー程ではないけど、俺もヒーローだからな」

命の危機に瀕し、そして救われる。人生で二度もあるものじゃない体験を経験した事で、少年の緊張状態は極限のモノとなり、それ故に言葉を口にする事は難しい。

少年が言いたいのは礼の言葉か、それとも逃げの言葉か。いずれにせよ、普段見せている彼の姿を見ていてはあのヴィランに勝てる姿は想像できない。

格好付けてないで早く逃げろ。そう言いたい少年の心情を知ってか知らずか、ヒーローはヴィランへ向き直る。

「ヒーローなら、俺の相手をしてくれよ！　俺と一杯遊んで、楽しもうぜエツ！」

ヴィランの選択した行動は突進。避ければ背後にいる子供に直撃し、必然的にヒーローには受け以外の選択肢は無くなってしまう。己の筋肉を操作しての突進攻撃、その大きさと迫力から少年は顔を青ざめさせる。

「ッ!?!?」

筋肉の肥大化で極限まで高めたぶちかましを、ヒーローの男は片手で受け止めてみせた。受ければヒーローですら死は免れないヴィランの突進、これまで幾人ものヒーローを地に沈めてきた自慢の一撃が、造作もなく受け止められている事実。

ヴィランの脳裏に浮かぶのは、平和の象徴と謳われる最強にして最高のヒーロー。このヒーローはまさかあの怪物と同格のパワータイプだと言うのか。

「だからって、止まれるかよオっ!!」

関係ない。相手が平和の象徴に匹敵する力の持ち主だろうと、今更ヴィランの男が自分の生き方を変えられる筈がない。この身は爪先まで屑に染まった出来損ない、その思考回路ゆえに人間社会に馴染めず、他者を壊す事ではか生を実感できない愚かな存在。

ならば、最後までその在り方を貫き通す。止められた掌に向けて、男は地につけた脚に力を入れようとして………吹き飛んだ。

「——な、あ? んだ、コレ?」

炎が吹き荒れた。ヒーローの全身から湧き上がるように溢れる黄金の炎、幻想的且つ力強いその輝きにヴィランは一瞬目を奪われ。

「ハッ、炎まで使えるとかエンデヴァーかと思つてちと焦つたが、大した熱さじゃねえ。こんな虚仮威しに、俺が怯むわけ………ッ!?!」

炎自体に熱さは感じない。ならば改めて自慢のパワーをぶちこんでやると息巻いて……今度こそヴィランの足は立ち止まる。

その目に映るのは………困惑と畏怖。鎧のように自身を包んでいる筋肉すらも震え、微動だに出来なかった。

怖じ気、震え、愕然となるヴィランに対して……少年の顔にはもう、恐怖は無かった。あるのは、目の前のヒーローに対して抱く憧憬だけ。

「すっげえ………」

逆立った黒髪に黄金の光が宿り、頭髮と同じ黒だった瞳が翡翠色に瞬いている。

「……………」俺はオールマイトでもエンデヴァーでもない。俺は貴様を倒すものだッ

！」

これは、穏やかなヒーロー生活を願って活躍する……とある一人のヒーローの、活動記録である。

記録2

諸君、私はゴジータが好きだ。

諸君、私はゴジータが好きだ。

諸君、私はゴジータが大好きだ。

ジャネンバ戦が好きだ。フリーザ戦が好きだ。

ブロリー戦が好きだ。セル戦が好きだ。

魔人ブウ戦が好きだ。超一星龍戦が好きだ。

地上で。海底で。空の上で。宇宙空間で。

ゲーム、劇場版、アニメの中で活躍するあらゆるゴジータが大好きだ。

悟空とベジータ二人がかりでも倒せないジャネンバを、登場から数秒でフルボッコにした時は心が踊る。

宇宙そのものを終わらせる超一星龍の攻撃を、肩凝りを解す程度にしか感じていないゴジータには感動すら覚える。

さて、そんな大のゴジータスキーマである自分こと今世の後藤甚田は、「個性」なんて能力を当たり前に持っている世界にゴジータとして転生した。

——いや、この言い方は正しくはない。正確にはゴジータにそっくりな顔と体つきをした自分が、超サイヤ人になれるようになった「個性」という方が正しい………と、思う。

正直な所は不明。本当はサイヤ人の生まれなのではと、自分が施設暮らしのことも重なって風呂呂に入る時とか密かに調べたりしたのだが、臀部にはサイヤ人の証である筈の尻尾はなく、生えていた痕すら見当たらなかった。

故に自分はサイヤ人ではない。そう判断したいのだが、個性を使わない素の状態も中々に強く、並みの衝撃ではビクともしない。腕力や脚力といった身体能力も総じて高く、施設では良く荷物運びとして重宝された。

そして、これが一番の理由だが、自分にはサイヤ人特有の大食いの気質が無いのだ。確かに人よりは食べるかも知れないが、ただそれだけ。店の食料を食べ尽くしたりなんか出来ないし、あくまで多少人より胃袋が強く大きいだけ。

そんな、サイヤ人だか何だか良く分からない出自の自分は取り敢えず横に置いて、施設の子供として第二の人生をスタートした。幸いにも施設の大人達は皆いい人で、何かと手間のかかる俺達子供を嫌な顔を一つしないで面倒を見てくれた。

個性を発現した際も素直に喜んでくれたし、将来はヒーローだと持て囃してくれた。そう、「ヒーロー」。この世界にはヒーローという存在が職業として人々に認知されている。個性という力を以て悪行を成すヴィラン^敵に対して、過去の人々がそれに対抗するべく立ち上がった事をきっかけに始まった……警察や自衛隊、各国の軍とも違う全く新しい正義の味方。

正義の味方という職業に興味はないが、自分の個性を最大限に活用できる場は其処しかない。そう子供ながらに確信した自分はその日を境に個性と肉体を鍛え、有名ヒーローを多数輩出しているとされている「国立雄英高等学校」へ入学した。

個性豊かな学友達と先輩達に揉まれ、一年の内にヒーロー活動の仮免を取得。その後もインターン先で某猫な四人組の人達から災害救助のノウハウを叩き込まれ、また別のインターン先では対人戦闘について眼鏡のヒーローに教え込まれた。

結果、お陰様で自分は雄英高校を主席で卒業。学生という身分もあつてあまり世間に公表されていないが、この頃から結構な事件や事故に遭遇し、他の学友達より少しばかり経験豊富だったりする。

ただ、そんな巻き込まれ体質のお陰か一年の体育祭の時、自然災害に巻き込まれた為に出場出来なかったんだよね。主に当時まだ慣れていない救助作業に追われていたからね、仕方ないね！

尚、この時の出来事であるの四人の猫ヒーローと出会えたのだから、人生とは分からないモノである。

さて、そんな色々な経験を味わった自分は卒業後、ある先輩ヒーローの事務所でサイドキックとして一年ほど世話になった後に独立。都心から離れ、ヒーローのいない地方の田舎へ赴く事になった。

この際、先輩ヒーローからしつこく私と組めとせがまれたが、もう一人の先輩ヒーローの口添えもあつて無事に事務所から脱出できた。

いやーホント、あの時は世話になったよな。今度羽繕いの薬とか聞いてみよ。
閑話休題。

さて、そんな自分の半生を振り返ってきた所で今日も【ゴジータ】としてのヒーロー活動に、励むと致しましょうか。



「なーなー、もう一回アレやってくれよゴジータ！　ゴウゴウつてなつてシユインシユインつてなるヤツ！」

「なりません」

町にヴィランが襲つてきたという話は、田舎故に瞬く間に広がり、更にその敵が非常に狂暴にて凶悪、そしてトドメにそれを倒したのがこの町にやって来たヒーローだという事で、町はちよつとしたお祭り騒ぎと化していた。

今日も、そんなヒーローを一目見ようと町中から人が集まつてきている。

「ほー、あれが例のヒーローかー。確かに強そうだ」

「体も鍛えてるっぽいし、頼りになりそう」

「でも、そんなヒーローがどうしてこんな田舎に？」

「本当にアイツが倒したの？　襲つてきた敵、メチャクチャヤバイ奴だつて聞いたんだけど？」

賛否両論。ワイワイと騒いでいる人々の反応は、やや賛の方が多い模様。やはりヒーローは第一印象も大事、前世も含めてそれなりの人生経験を経て辿り着いた一つの真実

である。

「ホーラ、そろそろ学校も始まる時間でしょ？ この間の件で君のお母様も大分心配されていたし、あまりご家族を心配させるんじゃないよ」

「うぐぐ、分かったよ。でも今度ちゃんと見せてよね！ 友達と約束してるんだから！」
ヴィランと遭遇し、危機に直面した少年。幸いなことに彼の心は傷を負った様子はなく、今日も元気に学校へ向かう。

以前とは打って変わって懐いてくる少年に若干呆れるゴジータだが、一人の少年の平穩を守れたと思えば安いもの。勝手に約束とやらをしている事も子供特有の我が儘と思えば……まあ、仕方がないといえる。

さて、問題は残った野次馬達だが……。

「はいはい！ 散って散ってー！ 交通ルールを守ってー！」

やって来たのは一台のパトカー、ヴィラン騒動以降巡回をいつも多くしていた警察の介入によって、集まっていた野次馬達は文句を垂れながらその場を後にする。人散らしをしてくれた警官に会釈すると、気付いた警官が帽子を上げて会釈を返してくれる。

昨今。個性社会が浸透し、ヒーローという職業が台頭し始め、基本的に個性の使用を禁じられている警察はヒーローとの戦いで負傷し、動けなくなったヴィランを輸送する

ヴィラン運送と揶揄される事もある。

しかし、ヒーローとヴィランの戦いを舞台の一つとして見られている今の時代に、彼等の存在はヒーローにとってなくてはならないモノとなっている。

ヴィランと戦う時は命懸け。ヒーローと同様にヴィランもまた個性を振りかざしてくる以上、現場は常に巻き込まれる危険性を孕んでいる。

その可能性から人々を守るために尽力してくれる警察の存在は、ゴジータにとっても有り難かった。インターン時代からお世話になっている警察に感謝の念を抱いていると……。

「——なんだ？」

ふと、違和感を覚えた。向けられる視線の先は遥か空の彼方、警官達も釣られてそこへ視線を向けると——。

巨大な隕石が、顔を覗かせていた。



「何故この事態に気付けなかった!？」

海面上を高速で飛翔する猛き炎、脚から炎をジェット噴射の様に放出し、空を飛ぶのはNo. 2のヒーロー「エンデヴァー」。

その猛き炎と同様に怒りを昂らせる男の耳に、イヤホン越しでヒーロー委員会からの淡々とした声が響く。

『恐らく、長年宇宙開発を進めなかった影響でしょう。今回の隕石は完全な自然災害、悪意の無い意図せぬ災厄に、我々人類に打てる手立てはあまりに少ない』

「泣き言はいい! 応援はどうなっている!？」

『既に各国のヒーロー委員会に打診を送っています。それまでにどうか——頼みます。ヒーロー!』

「分かっている! その為に——」

「私が——行くッ!!」

飛行するエンデヴアーの横を、別の何かが追い抜いていく。彼こそが最高にして最強のヒーロー、No. 1「オールマイト」。全能という名を冠し、全ての脅威から全てを救うという意思を込めたヒーローが、隕石破壊の為に海面を駆けていく。

「オールマイト!」

「済まないが文句は後だエンデヴアー! 時間がない!」

「そんな事は分かっている! 状況は何処まで把握している!」

「もうじきアメリカから応援の第一弾が来る頃合いだ! その間は我々が……!」

「この隕石を、どうにかしなくてはならないという訳かッ!」

隕石の落下予想地点へ辿り着いた二人、そこで目の当たりにした光景に長年前線を張り続けてきた二人の顔が歪む。

巨大。ただただ大きな石の塊が二人の……否、周囲の海面を覆っている。目測で見ても数キロ弱、このまま海面に激突したら有史以来の大災害が引き起こされる。

恐竜絶滅と同じ規模の災厄が、今自分達の目の前にある。何故この危機を見過ごした。何故この危機を予見出来なかった。計り知れない未曾有の災害を前に、二人のヒーローの意識は即座に切り替わる。

出来る出来ないじゃない、やるしかないのだ。

「俺の炎で僅かでも速度を落とす！ その間に貴様が砕け！」

「しかし、それでは君がッ！」

「言ってる場合か！」

エンデヴァーはその個性ゆえに火力は大きく、強力。しかし同時に体内に熱を溜めてしまうというデメリットも存在し、長時間の炎の放出はエンデヴァー自身の肉体をも燃やしてしまう。

それを危惧して一瞬躊躇するオールマイトだが、エンデヴァーのいう通り時間がな
い。この災害をどうにかするにはこの場にいる自分達が死力を尽くすしかないのだ。

炎が燃える。大海原の真上で、赤く大きな焰が燃え盛る。しかし、落ち行く隕石は更に巨大。

けれど、だとしても、それでも……………！！

「やるしか、ないだろおおがあっ!!」

「プロミネンスバーン」

エンデヴァーの自爆覚悟による最大火力。空高く吹き荒ぶ炎は巨大な隕石と激突し……………。

「ツツツツツツ!!??」

その衝撃に、意識が一瞬飛びかける。なんだこの重みは、これが、宇宙から飛来して

きた隕石の重さか。初めて体験する感覚にエンデヴァーは一周回って感心していた。

だが、このままでは炎の柱が持たない。オールマイトが隕石を壊すまでの時間が稼げない。せめて、せめて後一人誰かいないか、自分がヒーローであることを自覚しながら、それでも藁にも縋る思いを抱いていると。

「間に合ったアアッ!!」

空から声がする。朦朧しかけた意識の中、エンデヴァーが目にしたのは星条旗のマーク。

『キャスリン！ 大統領からの指令だ！^{オーダー} 機密もクソもない。あの隕石を何としてでも止めて、人類を守れってさ！』

「オツケイ！^{マスター} 師もいるんだ！ 上げていくよー！」

数機の高速飛行物体。そこから誰かが飛び降りると、隕石に向けて声を張り上げる。

『『大気は、私の100倍の大きさに固まる！』』

瞬間、新たな秩序によって、ヒーローらしき女性を中心に大気が唸りを上げて形を変えていく。聴て現れるのは一つの人の形、巨大な人の形を成した何かが、隕石に向けて拳を向ける。

「フィスト・バンプ・トゥ・ジ・アース!!」

振り抜かれた大気の手は隕石と激突し、周囲の空間を軋ませる。そして、エンデ

ヴァアの炎と融合したその一撃は隕石の落下速度を僅かに緩ませ……。

「ありがとうエンデヴァー、キヤスリン！ 行くぞオオオオツッ！」

未曾有の災厄、大災害の前に最高のヒーローが吼える。

「DETROIT SMASHッ!!」

繰り返されるは最強の一撃。如何なるヴィランをも打ち砕き、平和の象徴と謳われた

男による——最大の一振り。

おおよそ、人の出せる出力を大きく凌駕した超破壊の一撃は……しかして。

「なん……だと……!?」

巨大な隕石を完全に砕くには至らなかった。

想定していた事態の中でも最悪の事態。最高最強のヒーローによる一撃が通じな

かった事実には、観測していた人間達は勿論、エンデヴァーもキヤスリンなるアメリカN

O・1ヒーローも驚きを隠せなかった。

しかし、それでもN・O・1ヒーローは挫けない。此処で自分が折れてしまったら、この世界に生きる人々はどうなる。明日がまた必ず来ると信じている人々の希望はどうなる。

この身は平和の象徴。折れることも、曲げることは己自身が許さない。故に、オールマイトは砕けた拳をもう一度振りかざす。

「エンデヴァー、頼む！ 今のをもう一度！」

「軽く言うなアツ！ 今やっている！」

既に、エンデヴァーは限界を迎えている。その身に溜めた熱量は周囲の空間を歪める程に発熱し、エンデヴァーの体を焼いていく。

だが、それでも止めるわけには行かない。ヒーローである以上、彼の心情に逃げるといふ選択肢はないのだ。

それに、どのみち逃げた所で何もかもを失うだけ。ならば…………。

「全く、嫌な校風だよ！」

「更に向こうへ」。かつて己が在籍していた高校、そこに掲げられた理念がエンデヴァーは嫌いだった。

けれど、だけど、それでも！ やるしかないのなら、やるしかないのだ！

「プロミネンス——」

命を燃やし尽くす。その覚悟を以て今一度最大火力を放とうとした時。

それは聞こえた。

『かあ——』

「！」

「な、なに!？」

『めえ——』

声が響く。このざわつく海で、荒れた大気の中で、その声は不思議な程に透き通っている。

『はあ——』

「誰だ、一体この場に我々以外のヒーローがいるのか!？」

今、この場に駆け付けられるヒーローは世界中を見ても限られてくる。最速のヒーローしかり、火力の出せないヒーローも手が出せない今、一体どんなヒーローが駆け付けるといふのだ。

そんな、疑念のエンデヴァアの耳朶にヒーロー委員会からの声が届く。

『い、今！ そちらに新たに一名のヒーローが本州から飛び立ちました!』

「本州からだどつ!?! どれだけ離れていると思っている!」

現在、エンデヴァア達がいるのは太平洋のご真ん中。オールマイトは兎も角、エンデヴァアは先にも述べた最速のヒーローの手を借りて漸く現地へ辿り着いたもの。アメリカの様な高速飛行を可能とした代物が用意出来ない以上、日本にこれ以上の増援は見込めない筈。

しかし、インカムから聞こえてくる委員会からの通信に誤りは考えられない。一体誰が来るというのか。と、そんな時だ。黄金の炎が、エンデヴァアの横を横切った。

「ッ!?!」

エンデヴァアの脳裏に焼き付く。それは、自身のような相手を燃やす炎ではなく、誰かを照らす導きの光。

『——めえ』

黄金の炎がエンデヴァアの横を素通りすると、直角に上昇し、瞬く間に隕石に向けて接近する。馬鹿げた速さ、瞬間移動だと思える程の速さにエンデヴァアの目は大きく見開く。

炎を纏った何かはオールマイトの前に辿り着くことでその姿を頭にする。

「君は——ッ!?!」

オールマイトが驚いているのを余所に、黄金の炎を纏うヒーロー——ゴジータは。

「波アアアアアッ!!」

その両手に溜めたエネルギーを、隕石に向けて解き放つ。極光、空を埋め尽くす程の大きなエネルギーの奔流は、オールマイトの一撃によって入った亀裂へ浸透し、拡大。

止め処なく溢れる力の奔流は、纏て巨大隕石をも呑み込みそして——粉々に打ち砕き、蒼白い巨大な光は空の彼方へと消えていった。

砕かれた隕石の破片はより細かく砕かれ、海面へと落ちていく。その光景に誰もが唾

然とするなかで……。

「ふいー、危なかつたア。けど、まあこれで……一件落着だな」

ヒーローゴジータは、一仕事をやりきった感を出しながら、帰路に就くのだった。



ヒーロー“ゴジータ”は、ヒーローで在ることよりも、個性を使って強くなることを望んでいた。

自分がゴジータを名乗る以上、敗北は許されない。強くなることに貪欲である為、鍛練や修行に集中したいが為に人目に付く対ヴィランのヒーローではなく、対災害のヒーローを目指していた。

穏やかで、それでいて満ち足りたゴジータライフを満喫する為に、自分がゴジータの

名を語るのに恥ずかしくない戦士でいる為に、後藤甚田は名声よりも強さを選んだ。

なのに、それなのに……………。

「さあ、皆に答えてやれよヒーロー！ 今日から君が、N.O. 1だ！」

何故、自分は此処にいるのだろうか？ どうしてオールマイトが隣に立ち、満面の笑みで自分の腕を掴んで掲げさせているのか。

どうして、ヒーロービルボードの一番上に、自分の名前があるのをお？

(もう、訳が分からないよ)

この日、新たなN.O. 1ヒーローが誕生した。平和の象徴を超えた新たなヒーローの登場に、人々が歓声を上げるなかで。

当の本人たる新たなN.O. 1ヒーローは——白目を剥いていた。

記録3

“ヒーロービルボードチャートJ.P.”。

事件解決数、社会貢献度、国民の支持率などを集計し毎年二回全国に向けて発表される現役ヒーロー番付け。

つまり、このチャートランキングの上位に名を刻んだ者程、人々に笑顔と平和をもたらしたヒーローなのである。

そして、その年最初のランキング発表の当日。発表される会場には異例の事態が起きていた。

これ迄の発表では、会場にヒーロー本人達が登壇する事は無かった。しかし、先の巨大隕石の件以降ビルボードチャートは大いに荒れ、この事を色んな意味で重く見た各関係者達が意を決して行われた異例の発表会なのである。

既に、会場にはトップ10のヒーロー達が君臨していた。

No. 10ヒーロー “ヨロイムシャ”

No. 9 ヒーロー “ウオツシユ”

No. 8 ヒーロー “クラスト”

No. 7 ヒーロー “ミルコ”

No. 6 ヒーロー “エツジシヨット”

No. 5 ヒーロー “ベストジーニスト”

No. 4 ヒーロー “ホークス”

いずれも、日本の平和維持と人々の安寧に貢献し続けた選りすぐりのヒーロー達。錚々たる面々が登壇していく中で、中央部分だけが不自然に空いている。すると、穴の底から一つの舞台が競り上がってきた。

『——皆さん、今回のヒーロービルボードチャートは、正に嵐の如くでした。誰もが予想出来ていたランキング、今回も然程代り映えはしないのだと、誰もが信じ、疑いませんでした』

徐々に姿を現す三人のヒーロー、彼等の姿が頭になるにつれて、司会進行役の男性の声が震えていく。

『故に誰も、そう誰もが！ この事態を想像出来ませんでした！ 誰が予想出来る!?! 誰が予想できた!?! 少なくとも、私には頭に描くことすら出来ませんでした。ですが、現実にそれは起きた。………それでは、一人ずつご紹介しましょう!!』

『No. 3! フレイムヒーロー、"エンデヴァー"!!』

一人、炎を纏う大柄の男が前に出る。その顔は燃える炎の所為かよく見えない。だが、その事に触れる者はいなかった。……………いるわけがなかった。

『長年座していたNo. 2、転げ落ちた衝撃は彼自身が一番強く、重い。それでも私は、彼の一ファンである私は信じたい。いつかまたNo. 2へと返り咲き、更にその向こうへ届くのだ!!』

空気が重苦しくなる。本来ならば頑なに公の場に出たくはない筈なのに、それでもこの場に留まっているのは、偏にこの先の展開を無視できない為か。

空気が静まり返る。エンデヴァーの紹介も終わり、いよいよ次が回ってきた。日本中の……………いや、世界中が注目しているのはこの時の為。

絶対不動のNo. 1、それを頂く何者かを。

『……………いよいよこの時が来ました。正直、私自身震えが止まりません。長年この仕事を続けて来ましたが、今日だけはどうか新人の様なミスをする事をお許しく下さい』

司会の男性の声が裏返る。緊張で冷静さを欠くなど、長年この仕事をしているのなら許されざるミスだ。

しかし、今は誰も咎めはしない。何故ならば、誰もが同じ思いを抱いているのだから。

『それでは、改めてご紹介致しましょう。——No. 2!! ヒーロー、平和の象徴

『オールマイトオオオツ!!』

拳が天を衝く。人が認め、他のヒーローが認め、ヴィランすら認めざるを得なかった最強にして最高のヒーロー、オールマイト。彼の登壇により場の空気は最高潮に盛り上が……：らなかつた。

拍手はある。喝采も、惜しみ無い賛辞も、しかし誰も今はその口を固く閉ざしてしまっている。

——決まっている。全ては、彼をNo. 1の座から引きずり下ろしたとあるヒーローに注目しているからだ。

それは、登壇している他のヒーロー達も同様。一方で二名ほど新たなNo. 1ヒーローに心当たりのある者はニヤニヤとその時を待っていた。

『——さあ、遂に此処まで来ました。我等が平和の象徴を超えた新たなNo. 1ヒーロー、先の巨大隕石破壊の立役者であり、世界中から支持を得た謎のヒーロー。独立してからの活動期間は僅か1ヶ月、ついこの間まで殆どの人達が認知してこなかった無名のヒーロー』

『No. 1【超】ヒーロー!! ゴジイイイタアアアツ!!』

照明が一人に集約される。現れた一人のその男は、オールマイトやエンデヴァーに比べれば頭一つ分程小柄で、身に纏っている覇気も並みのヒーローのそれ、一体この黒髪

のヒーローの何処に注目できる余地があるのか。

そんな、誰もが懐疑的に見つめて来るなかで渦中の中心人物であるゴジータは
.....。

(あば、あばあばあばあば.....)

混乱の極みに立たされ、頭の中が真っ白に染め上がっていた。

(どうして、どうしてこんなことに!?! 助けてゴジータ!!)

お前じゃい。



ああ、今すぐ空を飛んでこの場から逃げ出したい。

どうも、修行鍛練ばかりでマトモに公に出る練習をしてこなかった中身陰キャの後藤甚田です。

何故、どうして自分はこの場にいるんだろう？ 確か、事の発端はヒーロー委員会からの手紙からだった気がする。

ヒーロー委員会の人達はなんか人を値踏みしたりするから、最初は手紙を開けることすら抵抗があった。

すると、何処からか手紙の事を聞き付けた先輩が、折角だから受けてみるよって言うから、仕方なく了承のサインを書いたんだっけ。

ここ最近書類仕事も多かったから、殆ど読まずにサインをした自分も悪いんだろう。……いやだってさ、先輩ってばやたらと急かせるんだもの。お陰で手紙の内容は殆ど分からずじまい。

で、後日やって来た黒服のニーチャン達に連れてこられてあれよあれよとこの会場に通されたと言うわけ。先輩、絶対これを狙ってただろ！ あ！ 今視線合つたのに露骨に逸らした！ しかも笑ってやがる！

クソが！ 以前世話になったからって言うこと聞くんじゃない無かった！ 今度ケン

タツ〇〇のフライドチキンを送り付けてやる！

ああ、どうしてこうなっちゃったんだ。俺はただ、穏やかなヒーロー活動を続けて、慎ましく生きて修行に明け暮れる日々を送りたかっただけなのにイ…………。



「先ずは、No. 1ヒーロー、おめでどうございます」

「っ！ あ、ああ、ありがとうございます」

ヒーロー達が登壇している場に、一人の女性が近付いてくる。どうやらヒーローの一人一人にインタビューをしていた様で、内心現実逃避を続けていたゴジータはその事に全く気付けなかった。

視界にマイクが飛んできた事で漸く気付き、美人アナウンサーにドギマギしながら応

えてしまう。

だが、幸いにもその事を指摘する者はこの場にはいなかった。

「ヒーローの活動期間は一年と一ヶ月、うちその一年はとあるヒーローのサイドキックを勤めていたそうですが？」

「ひや、ひやい。先輩方にはいつもお世話になってましゅ……」

「二」——「二」

（か、）

「二（嘸んだアアーツ??）二」

なんと言う事でしょう。ゴジータの皮を被ったクソ陰キヤは、あろうことか公衆の面前で嘸んでしまった。これにはエンデヴアも愕然、オールマイトは微笑ましそうに見守っているが、鳥と兎のヒーローは今にも吹き出しそうにしている。クソが。

既に、会場の空気は笑いが渦巻き掛けている。主に嘲笑の方面で。ネット上ではオールマイト信者がこれでもかと叩き出し、既にお祭り規模の炎上に発展してしまっている。

司会側もこの冷めきつた空気を何とかしたいが、本人が既にどうしようもなくなくなっている。幾ら力がゴジータとなっても、その性根は前世から引き継いだ生来のモノ、千人

規模の視線を前にこれまで碌に公に出てこなかった人間が、上がらないというのは土台無理な話だった。

その内、誰もが彼に興味を示さなくなっていた。ヨロイムシヤは勿論ながら、ウオツシユも既に興味を失くし、視線を逸らしている。多くのヒーロー達にも未熟なヒーローに呆れの空気が充満しつつあった。

しかし、だからと言って司会側も今更止めるわけには行かない。緊張と現実逃避で白目を剥いているゴジータから何とかしてマトモなコメントを得ようと、マイクを突き出した時。

一人のヒーローがそれを遮った。

「失礼、少しマイクを借りてもいいかな？」

「お、オールマイト?」

オールマイト。平和の象徴と謳われ、多くの人々とヒーローから絶大の信頼と実績を持つ、最高のヒーロー。

彼のスタンドプレーを咎めるものはいない。他ならぬオールマイトの言葉が貰えると判断したアナウンサーは、手にしていたマイクを一旦預けて壇上を後にする。自分の我が儘に付き合ってくれた女性アナウンサーにフォローの手振りも忘れずに済ませると、今度は件の人物であるゴジータへ向き直る。

「H e y H e y H e y!! なんて様だよヒーロー! そんなんでN o. 1だなんて、一体誰が認めるよ!」

「ッ!?!」

突然のオールマイトによる挑発を込めた怒声、会場全体が震えると思える程の声の振動に、周囲の人間が震え上がる。

当然、それはゴジータにも通じた。突然の怒声に困惑しながらも、それでも緊張状態から脱したゴジータはその目を嘗てのN o. 1に向ける。

「ゴジータ。ヒーロー活動の短い君は、運であれ実力であれ日本のヒーローのトップの座に君臨している。今後、君の背中を指して多くのヒーローが追い抜こうとするだろう。当然、私もその内の一人だ」

「否応無く。君は全ての人々、全てのヒーロー、そして………全てのヴィランから狙われる立場となった。だからこそ聞こう」

「君にとって、ヒーローとはなんだ?」

「――」

圧が放たれる。今までN o. 1の座に座り続けた男からの、本気の圧力。その余波を受けて現地にいる多くのヒーロー達が尻込みする一方、一番その圧力プレッシャーを受けているだろうゴジータは、純粹に驚いた様子を睨み開いていた。

「ゴジータ——後藤甚田にとって、ヒーローとは何なのか。それは、きつととくに決まっています、だからその答えに行き着くのはある意味当然とも言えた。」

「——人は、屈する者だ」

「——」

「悪意に、暴力に、権力に、理不尽な現実に。打ちのめされ、膝を折る」

オールマイトは、茶化すこと無く静かに聞いている。

「悔しくて、悲しくて、辛くて、苦しくて、もうダメだと、諦めるのが普通だ。それが当然なのだ、俺は知っている」

「けれどその中で、それでも立ち上がるものがあることも、また知っている。もしもヒーローになるのに条件があるとすれば、きつと其処なんだと俺は思う」

嘗て、男はそれを見てきた。幾度となく現れる強敵、一人では決して敵わない怪物達。何度も負けて、何度でも立ち上がる。自らを決してヒーローとは認めない彼等だが、それでも男にとって彼等こそが英雄ヒーローなのだ。

「だが、現実是非情だ。ありとあらゆる壁が立ち上がり、立ち上がった君を再び追い詰めるだろう。それでも君は立ち上がるだけの者をヒーローと呼ぶのかい？」

オールマイトは敢えて問う。これは、必要な事なのだ。No. 1に一度でもなつてしまつたら、その重責に耐えねばならない。ヒーロー活動一年弱のヒーローに務まるの

かと、嘗てのNo. 1にはそうしなければならぬ理由があった。

理想を体現するのか、それとも現実的に示すのか。それを遠巻きに訊ねてくるオールマイトに対し、その意図を知ってか知らずか、ゴジータは不敵な笑みを浮かべる。

「現実という壁は、可能性という扉で破壊して抉じ開ける。何度でも、何度でも。泥にまみれ、涙鼻水を垂れ流しても、立ち上がって壁にぶつかれば良い」

「何故なら、壁を壊した先に——無敵の自分^君が、そこで待っているのだから」
 気付けば、オールマイトは笑っていた。

「ならば聞こう、No. 1ヒーロー！ 其処で君は何を成し遂げる!？」

「何だかんだ言ったが、結局の所俺に言えるのはこれだけだ」

炎が舞い上がる。キラキラと輝き、ギラギラと目映い、光煌めく黄金の炎を纏い、黄金の戦士はオールマイトからマイクを又借りする。

「刮目せよ」

それは、全てに対する宣戦布告だった。全てを見ている人々に、全てを目にしているヒーローに、そして……全てに暗躍しているヴィランに。ゴジータは宣戦布告をしたのだ。

静まり返る空気、啞然としている観客達の様子を前に我に返ったゴジータ^{後藤 甚田}は、自分の言葉を振り返り……。

(し、しまったーっ!! つい何となくそれっぽい事を言ったら場の空気が死んだー!!)

再び悶絶、からの大後悔。ヒーローとは何ぞやなるオールマイトからの禅問答についてそれっぽい事を言ったつもりでいるが、全然問いの答えになっていないかった。

これが、頭を空っぽにして夢だけを詰め込んだ者の末路か。静まり返る会場の空気に、いよいよ本気で逃げ出すことを考えたゴジータだが……。

ふと、拍手が聞こえた。見ればオールマイトがパチパチと手を叩いている。それに伴い、会場からもチラホラと拍手の数が増え始めた。

其処には、四人の猫なヒーローがいた。

其処には、眼鏡を掛けたヒーローがいた。

そこには、黄色いマフラーを着けた年老いたヒーローがいた。

エンデヴァーを除いた登壇しているヒーロー達もゴジータの言葉に納得したのか、惜しみ無い拍手を贈っている。

聴て拍手は喝采となり、喝采は嵐となつてゴジータに叩き付けられる。そして歓声が爆発し、これ迄の静寂が嘘のように大歓声となつている。

「かっけえよゴジータ!」

「私、ファンになったかも!」

「俺も、頑張ろうって気持ちになれたよ!」

まさかの掌返し。しかし、それを咎めるものはやはりいない。予想していなかったゴジータの答え、オールマイトからの問いに対しても崩さなかつた堂々とした佇まいに惹かれ、大衆達はゴジータに注目し始めた。

ただ、当の本人たるゴジータは未だ戸惑いの中にいる。

(え、ええ? なにこの歓声、え? 俺はどうすればいいの!?)

生まれて初めて体験する拍手喝采の嵐、前世を含めても経験したことのない事態の前に、再びパニックに陥っていると。

「さあ、皆に応えてやれよヒーロー! 今日から君が【No. 1】だ!!」

オールマイトがゴジータの腕を掴み、天へ掲げる。それに伴って歓声は更に爆発し、会場全体を震わせていく。

嘗てない体験、経験の前にして……………。

(もう、訳が分からないよ)

ゴジータは今度こそ、現実逃避の海へと飛び込んだ。



「無敵の——自分」

その日、一人の少年は立ち上がった。テレビの中で堂々と佇む新たなNo. 1に、くせつ毛が特徴的な緑髪の少年は、その言葉を何度も反芻していた。

転んでも良い、泣いても良い、泥だらけになつて、挫けても良い。それでも立ち上がれば、それだけで人はヒーローになれる。

勿論、それが理想論なのは分かっている。でも、それでも…………。

「母さん、ゴメン！ ちょっと走ってくる!!」

「いい、出久!!」

ジツとなんて、していられなかった。

少年は走つた。転んでも、転んでも、傷だらけになつても、無意味だと分かっている。涙を滲ませながらひたすら走り続けた。

だって、言われた気がしたんだ。こんな僕でも、無個性な自分でも、ヒーローになれ

るんだって、そんな自分を信じてもいいのだと、そう言われた気がしたから。

この日から、少年は憧れるだけだった自分から卒業し、最初の一步を踏み出した。

記録4

それから1ヶ月。件のヒーローランキングの目を境に、世間は新たなNo. 1ヒーロー【ゴジータ】の話題で持ちきりだった。

先代No. 1ヒーロー、オールマイトも認めたヒーローとしての素質、その強力な個性にも関わらず傲慢な性格に至らなかつた謙虚な人間性。

そして、如何なる脅威からも人々を守り抜ける強さ。ただ己を高め、母校である英雄校の理念を抱き続ける向上心。人間として、ヒーローとして、人々の話題に上がるには充分過ぎていた。

その年、ヒーローを志して雄英校に進学を決めた生徒達は例年の100倍近く増加し、激増した仕事量にとあるアングラなヒーローを筆頭に、在籍している教員のヒーロー達はゴジータに対して怨み節を呪文の様に口ずさんでいたとか。

閑話休題。

しかし、話題に上がるという事はそれだけ人々の視線が集まるという事。現在、ネッ

ト上では未だにオールマイトやエンデヴァアの古参ファンがポツと出のゴジータを敵視している。僅かでも欠点が見付ければ鬼の首を取った勢いで扱き下ろす為に。

そんな、良くも悪くも大衆から注目を浴びている新たなNo. 1ヒーローはと言うと……。

「注意一秒怪我一生。仕事で疲れているかもしれないが、居眠り運転はただけでないな」

「は、はいい……」

「帰ったら会社の上司に伝えておけ、ゴジータから注意を受けたってな」

「は、はいい！」

とある街中にて、交通事故を未然に防いでいた。通報を受けていた警察に居眠り運転をしていたサラリーマンを引き渡していた。

被害も出ておらず、居眠り運転をしよう程に劣悪な会社の方に問題があると判断し、嚴重注意で済まされているサラリーマンを確認すると、ゴジータは白い炎を纏って跳躍。そのまま空を飛翔して去っていった。

「スゲー、マジで空を飛んでる」

「ホークスみたいに羽生えてないのに、どういう個性なんだ？」

「空を飛んで変身して、力も強い」

「噂ではメチャクチャ大きなビームとか出せたりするらしいぞ」

「それ、もしかして例の巨大隕石を壊したゴジータの必殺技って奴？」

「あ、俺それ知ってる。確か“かめはめ波”って言われてる奴だ」

「かめはめ波あ？ 何だソレ、ハワイのカメハメハ大王となんか関係あんのか？」

「つーかかめはめ波って、ダサくね？」

「いや、でも近所の子供達は皆真似してるぞ？ 確かこう、かーめーはーめー……」

「いや、こんな所でやってんなよ恥ずかしい」

「でも、何て言うか分からないけど……」

「ああ」

「「格好いいよな」」



某所。拠点となる田舎町の一軒家、自らの事務所兼自宅に帰ってきたゴジータは、帰ってくるや否やソファアに腰掛け、変身を解いて黒髪へと戻っていく。

「ア、あああ……疲れたああ」

ヒーローコスチュームを脱がないまま、だらしなくソファアに身を預ける。No. 1ヒーローとしてあるまじき光景だが、本人にとつてはそれ処ではなかった。

何せ起床してからこつち、常に日本全土を飛び回り各地で起きている事件事故を手当たり次第に対応していたのだ。先に解決した車の居眠り運転から既に8時間、今日だけで100件近くの人為的問題を解決したゴジータは、体力面では余裕であっても精神的に参っていた。

特に憂鬱にさせているのは、デスクに積まれた書類の山。ヒーローは現場に出撃する際、個性を使用するにあたって様々な手続きをしなくてはいけない。戦闘による被害、その規模と損害の報告。国から個性使用の自由を認められている以上、この規則には従わなければならない。

そういう手続き関係が面倒だから、ヴィランによる被害の少ない田舎でヒーロー活動する事にしたのに、ゴジータの目論見は完全に裏目に出ていた。正直、そこいらの敵を相手にするよりよっぽどしんどい相手である。

それでもゴジータの体力と身体能力を以てすれば、ほんの一、二時間程度で終わる作業だ。……いや、今から二時間は普通に苦行だが。

「これも、No. 1ヒーローって奴の宿命なのかなあ……」

別にヒーローランキングに興味はなかったが、誰かが困っている以上無視はできない。責任やトップヒーローとしての矜持と言うより、人としての大事な所を優先したい。後藤甚田は、自分の今置かれている状況を主観的にはあるものの、ある程度は理解していた。

今、日本は一つの節目を迎えつつある。平和の象徴と謳われたオールマイトがNo. 2となり、ゴジータという新たなヒーローが頂点に座している。

そんなゴジータを侮るヴィランが一人でも現れると、つられてオールマイトをも侮る輩が増えていく。事実、先のヒーローランキングから今日まで犯罪の件数は少しずつではあるが上昇しつつあるのだ。

謂わば、これは一つの試練だ。ゴジータというヒーローが、オールマイトという最高のヒーローに取って変われる存在なのだと、世間に……いや、世界に示さなければいけない。

理屈も分かるし、ゴジータ本人もその事は理解している。自分への侮りは即ちオールマイトを始めとしたヒーロー達への侮蔑に繋がる。だからこそ、ゴジータはヴィランに

対する新たな抑止力でなければならぬのだと。

「重いなあ。重いのは鍛練の為の重力負荷だけにしてくれよ」

予想以上に重いN0.1ヒーローとしての重圧。そりゃオールマイトもあんな風格になるなど、ゴジータは密かに理解した。

チラリと、地下へと続く階段へ視線を向ける。ヒーローランキングから1ヶ月、マトモに鍛練も出来ていないことを思い出したゴジータは、気分転換も兼ねて少しだけ修行に没頭しようとソファアから立ち上がった時。

来訪者を告げるブザーが鳴った。マジか、なんてゲンナリするのも一瞬。他人に対して八つ当たりするのもみつともないなどゴジータは頭を振って気持ちを切り替え、玄関口の戸を開ける。

「はい。後藤です」

「ワーターシーが……お土産のケーキを持って、来たーッ!!」

玄関の前に佇むのは、筋骨隆々とした大男。嘗てのN0.1であり現在N0.2の平和の象徴、オールマイトが私服姿で其処にいた。

「」

突然の大先輩ヒーローの突撃に固まる後藤、目をパチパチとさせて目を擦るも、目の前の現実は何一つ変わらない。一先ず後藤甚田は……。

“パタン”

無言で扉を閉めることにした。

「え？ あ、ゴジータくん？ いきなり来てゴメンねー！ サプライズとか苦手だったかなあー!! ちよつと話したい事があって……………その、開けてくださいーい！」

アワアワと慌てふためく平和の象徴に、一先ず中に入れる事にした超ヒーローだった。

◇

「いやー、本当にゴメンね。急にお邪魔しちゃって」

「いや、それは別に構わないですが……………一体どうしました？ 貴方程のヒーローがワザワザ此処まで来るなんて」

それから少しして、ヒーローコスチュームから部屋着に着替えたゴジータは、上座に

オールマイトを座らせて自分と彼の席へそれぞれコーヒーを置く。

今の自分は後藤甚田だ。故に先達であるオールマイトを敬うつもりで敬語で言葉を話す。オールマイトは気にしなくて良いのにと変に残念がっていた。

「その前に、まずはケーキでもどうだい？ 行き付けの店に美味しい新作が出来たんだ」「え、良いんですか？ ならお言葉に甘えます。ならコーヒーにお砂糖は……：要らないか」

「……………」

「あれ、もしかしてお砂糖は入れた方が良かったですか？」

「いや、なんかこう言う対応が新鮮だね。いつもは話しかけただけで邪険にされてたりしたから、ちょっと嬉しくなっちゃった」

「ええ？ オールマイトを？ 一体誰です？」

「……………エンデヴァー」

「……………ああ、あの人って気難しそうですものね」

親しげに話し掛けてくれるオールマイトは、甚田にとって割と救いとなっていた。ヒーローランキング発表の場にいた時は厳しい先輩かと思っていたが、ゴジータで在る時は基本的に誰が相手でもタメ口である事を決めている彼にとって、フレンドリーなオールマイトは色んな意味で助かっている。

対して、エンデヴァーというヒーローは後藤甚田にとつて一種のタブーとされている。近付くだけで分かる拒絶の意思、向けられる視線はライバル視というより敵視に近かった。

そんな気難しそうな彼とも進んで親しくなろうとするオールマイトに、甚田は素直に感心した。

「俺も後輩として挨拶しようと思つたんですけど、近付くだけでメチャクチャ睨んでくるんですよ」

「そうそう、私もそうだった」

その後、話はエンデヴァーから互いのヒーロー活動に関する話へ移る。互いに日本全土で活動しているヒーロー、陸地から海上、そして空の上など様々な場所で活躍している二人の会話は自然と馬が合う様になっていく。

「——それで、座礁し掛けたタンカーを持ち上げたんですけど、持ち方が悪かったのか船体から悲鳴が聞こえてきたんですよ。ギギギ、バキンッ！ てな感じで。あの時はやっちまったかと、内心焦りまくりましたね」

「分かるー！ タンカー船つて頑丈そうに見えるけど、意外と繊細なんだよね。私も力任せで持ち上げたら似たような音を出してメッチャ焦った事があるもん！」

「後は崩壊し掛けた橋なんかも持つてて怖かったですねー。アーツ持つ支点ミスったー

！ みたいな」

「そうそう！ 支点力点作用点ー！ って、パニクリ過ぎて何故か数学の授業内容が頭に浮かぶんだよね」

「で、その度に当時の先輩ヒーローに叱られるんですよ。力任せにするなっ！ て」
「私もお師匠から良く叱責されたっけなあ。バカ力を上手く使えなければ唯のバカだつて。うう、思い出したら寒気が……」

次第に、過去の自分のやらかした話を暴露していくようになっていく。互いに似たような失敗をしているのか、共感できる部分に次第に二人は笑みを浮かべた。

尤も、話の内容を理解できるモノは二人以外誰もいないのだが。

楽しい一時。N o . 1 ヒーローになってから誰かと談笑していた記憶の無い後藤は、オールマイトとの会話は楽しかった。共感できる話題、共感できる失敗。自分以外にも似たことをやらかしていると知った後藤は、オールマイトの来訪を純粋に楽しんでいった。

だが、いつまでも楽しんでばかりもいられない。折角来てくれた彼の時間を無為に終わらせない為に、後藤はそろそろ話を進めることにした。

「——それで、結局オールマイトは何しに俺の家へ？ まさか、本当に雑談をしに来た訳では無いのでしょうか？」

」
笑みを浮かべていたオールマイトの表情が引き締まる。その迫力にやはり平和の象徴は伊達ではないかと、改めて後藤は思い知った。

「——後藤君。いや、超ヒーロー【ゴジータ】。私から君へ一つ頼みたい事がある」
「それは………何です？」

「——私と、一時だけチームを組んでくれないか？」



「ヒヤツハー奪え奪えー!!」

「異能最高! 個性最高! 使わなかったら勿体ないゼエツ!」

「俺が、俺達が、ヴィランだ!!」

街中で暴れる個性の集団。社会に苛立ち、個性を持て余し、遂に理性と共に弾けた意思の集団。自分はちっぽけな存在じゃないと、下らない承認欲求が爆発し、周囲を破壊して人々を巻き込んでいく。

逃げ惑う人々、怯え、喚き、泣き叫ぶ彼等を前にして悪漢達の顔が喜悦に歪む。

故に……。

「——あ」

「ん? おいおい急に止まんよ。しらけるだろう……? が?」

彼等は、来るのだ。

「な、ななな何で……ツ!」

「なんで、ここに!」

「「N.O. 2とN.O. 1がいるんだよおおっ!」」

逃げ惑う人々の足は止まり、ただその光景に啞然とする。親とはぐれて泣いていた幼い子供すら、言葉を失い目を奪われていた。

並び立つN.O. 1とN.O. 2、時代を背負う両者が肩を並べているその光景に、人々

は勿論ヴィラン達ですら圧倒されていた。

「さあ、組んで初めてのお仕事だ。恥ずかしい所は見せられないぜ、気合いを入れていこうか。ゴジータ！」

「当然。上げていくぜ、オールマイト」

「私達俺達が………来たッ！」

この日、日本が震えた。

記録5

「チームを組む？ 俺と、オールマイトが？」

「ああ、尤も期間限定と付くがね」

目の前のヒーローからの提案に、ゴジータは表情にこそ出さないものの愕然としていた。如何にN.O.1の座からまぐれで落とされたとしても、相手は依然と平和の象徴。その実力の高さはヒーロー歴の浅いゴジータからみても相当なモノだと認識している。

ヴィラン退治もそうだが、なにより彼は人々を救うことに躊躇はせず、いつも最短距離で結果を出している。如何にインターンで下地を築いてきたゴジータであっても、彼処まで綺麗に人助けをするのはまだ難しい。

勿論、いずれは自分もその領域に迫り着くつもりだが、それでも目の前の人物がヒーローとして自分の数歩先にいる事は紛れもない事実だ。

平和の象徴オールマイト。彼とチームとして組めば、ヒーローとして大きく成長出来るだろう。

「その、申し出は素直にありがたいのですが……でも、何故俺なんです？ 俺は確かに今でこそNo. 1ヒーローとされていますが、経歴の浅い新米。貴方にメリットを持たせるのは難しい事かと思えますが？」

「メリットなら、もう受け取っているよ」

「え？」

チームとして組んだとしても、得られるのは新米ヒーローである自分のみ。得られてばかりで何も返せないのであれば、それは果たしてチームを組む意味があるのだろうか。

そうゴジータが疑問に思うのも束の間、意味深に笑みを浮かべるオールマイトの身体から突如、煙が吹き出して来る。

「オールマイト、煙が!？」

「ああ、大丈夫だよ。ちょうど“時間”が来ただけさ」

オールマイトの身体から吹き出てくる煙の様な不思議な現象、何事かとソファーから立ち上がるゴジータを余所に、オールマイト本人は極めて冷静だった。

聽て、煙がオールマイトの身体を包み込んでいく。何が起きるのかと固唾を呑んで見守っている……。

「これが、今の私の本当の姿トゥルフフォーム。ゴジータ」

「なん……だと……?!?」

萎み、まるで枯れ木の様な華奢な身体。筋骨隆々なマッチョマンが、途端にひ弱なガリガリ君へビフォーアフターを遂げている。なんと言う事でしょうなんてレベルじゃない変わり様に、ゴジータは……。

「オールマイトは、ガリブウだった!?!」

「いや誰それ」

一二つに分かたれたガリガリな某魔人が脳裏に過っていた。



「ワン^o・フォー^F・オール^Aとオール^A・フォー^F・ワン^o。個性社会の黎明期からそんな因縁が

……」

「突然な話で信じられないかも知れないが、事実だ。現にこの事は私の他にも知る人はいる」

「ああいや、別に疑っている訳ではないですよ。ただ、純粹に驚いていただけです」

個性の力が解かれ、萎んでしまった姿を晒すオールマイト改め八木俊典。彼の口から紡がれたのは個性社会の黎明期より続く一つの悪の物語。

その人物は個性という超常の力による異能社会に先駆け、個性を「奪う」力を以て人々の頂点に君臨し、悪意を振り撒いてきた。

それに抗うのがその悪の親玉の弟、その人物から聖火の如く受け継がれてきたのが、オールマイトが有する個性「OFA」。個性社会の黎明期から続く二つの個性の戦い、それがOFAを受け継いできた者の宿命であり、この傷はその時に出来たものだと、左の脇腹の傷を見せながら締め括る事で、話は一旦止められた。

ゴジータ……後藤甚田は、眉唾に思えるその話を驚きはするものの、疑問に思う事はなかった。何せ、この身に宿る力は憧れたあの超戦士のモノ。テレビ越しで見られなかった超弩級の力が自分と言う形として現れているのだ。

転生。自分こそがこの世界に於ける特殊な事例だと自負しているゴジータにとって、オールマイトの話は充分信憑性に満ちていた。

「では、その諸悪の根源っぽいヴィランは、今もまだ生きていると?」

「可能性は低いと思うけどね。奴の顔に拳を叩き込んだ瞬間の手応えは今でも覚えてい
るからさ。この傷はその時に出来たものだ」

「じゃあ、その話を俺にした理由は? ……まさか、俺がオールマイトの後継者に?」

「E x a c t l y !! 君こそ、私の後継に相応しい! ——と、あの時、巨大隕石
を破壊した君を見た時はそう確信していたさ。でも……」

「でも?」

「それは、ちょっと違うんじゃないかなって」

寂しいような、残念そうな表情でオールマイトは笑う。

「君は、既に君だけのヒーローの『像』を待っている。泣いても良い、転び、辛くて泣い
ても良い。其所から立ち上がる者こそが、ヒーローなのだ。そう断言した君を見て思
い止まったよ」

「——」

「君は、君の思う道を進みなさい。私は、その道を往く君の背中を信じることにするよ」
「オールマイト……」

「それに私達の個性、『O F A』は否応なしにその人の人生を歪ませる。受け継いでき
たお歴々の方の意思、私の意志が次代の継承者の在り方を歪ませるかもしれない」

「じゃあ、OFAはオールマイトで終わりだど?」

「分からない。けれど、もしこの個性を誰かに受け継がせたら、必ず君にも伝えるよ」
「そう、ですか」

重い沈黙がリビングに満ちる。一つの悪意から生まれた個性と、悪の親玉との戦いの歴史。始まりも繋がりも、重くて濃い。思っていた以上にへビーな話、これでは不味いと思ったゴジータは改めてオールマイトに問うた。

「えっと、それなら結局……どうして俺なんかと組むと言う話になるんです?」

「え? だって今君、メッチャ困ってるでしょ? 特に書類関係で」

ホラ、とオールマイトが指差す方向には積み上げられた書類の山。これ迄の会話ですっかり忘れていたゴジータはしまったと頭を抱える。

「私も、事務処理的な仕事は中々苦手だね。昔はヒーロー活動との両立に苦労したよ」

「オールマイトも?」

「ああ、特に君は独立したてで分かっていない事が多いんじゃないか? 確定申告とか、その辺りの事務仕事を疎かにしていると……後で地獄を見る事になるよ?」

表情に陰を落として断言してくるオールマイトに、それが脅しの類いでないことはゴジータにも伝わった。今はガリガリな状態である為、尚その迫力が際立つ。

「君と私が組めば、事務処理も一時的に併合される事になる。私の事務所には能力的に

そういったモノに秀でた者も多い、君がNo. 1ヒーローとして人々に認知され、新たな抑止力として浸透するまでの間、私が色々教えて上げるよ」

「どうして、そこまで？」

「誰かが困っているなら、助けるのは当然の事さ。余計なお世話は、ヒーローの本質だからね」

「——」
そう言つて笑う平和の象徴にゴジータは彼の本質を見た気がした。何処までも他人本意で、自分の事を蔑ろにする人間。目の前の八木俊典なる人間はそう言う人種なのだと、ゴジータとしての本能がそう囁いていた。

今後、この人は際限なく他人の為に自分を使い倒すつもりなのだろう。助けを求める人がいる限り、ヒーローとして最期まで。『人柱』。彼の笑みを見たゴジータの頭に、ふとそんな言葉が過る。

彼は、これからも戦い続けるのだろう。たとえ、その果てに惨たらしい末路が待っているのだとしても、その歩みは止められない。なら、そんな人間に対して後藤甚田が出来るのは一つしかない。

「—— オールマイト、ちよつと此方に来てくれますか？」

「そつちは………階段？　もしかして、地下室かい？」

「貴方に一つ、見せたいモノがある」



「へえ、お洒落なりピングの地下はこんな風になってるんだ」

「雄英の技術班にお願いで、ある研究者に頼み込んで作らせたモノです。一応、敷地内から出ない範囲での作りになっています」

細身になったオールマイトを連れて、やって来たのは地下室。普段は修行鍛練に集中する為に雄英の技術職員に頼み込み、その伝でインターン時代の貯金で支払って造って貰った特別製の修行空間。

無機質ながら明るいゴジータの修行場、その作りにどこか既視感を覚えたオールマイ

トがあちこちを注目していると、彼の歩みはある壁際まで進んでいく。其所へ辿り着くと、壁から音声が鳴り響き、顔認証やら網膜認証等の仰々しいやり取りが続くと、壁の一つの空間が空いた。

取り出されるのは小さな小箱、小道具程度しか入らないであろうそのその箱を、ゴジータは後生大事に抱えてオールマイトの下へ戻る。

なんだと不思議に首を傾げるオールマイト、そんな彼に対してゴジータは真剣な表情のまま箱の蓋を取り外す。

「これは……豆、だよな?」

蓋の下にあるのは数粒程の豆、瑞々しい翡翠色をした枝豆と思わしき豆だった。

「これは、俺がある技を完成させる過程の際に作った特殊な豆、「仙豆」。その下位互換になる代物です」

「仙豆?」

「仙人が食するとされる豆、その効能は空腹を満たし、あらゆる傷も立ち処に治すとされる秘薬。それを、我流で造ったモノです」

「せ、仙人? それ、食べて大丈夫な奴なの?」

「既に効果は俺が試しています。これを食べたら食欲が四日以上抑えられ、胃痛も治りました。消化も良いですし、今のオールマイトでも何とか食べられるかも知れません」

「いや、流れ的にそうなるかなーとは思っていたけど……本気？」
 「俺を信じてくれるのなら、是非」

一粒を手にし、オールマイトの掌へ渡す。仙人が食するとされる豆、見た目はただの枝豆なのに今は何故か毒々しく見える。不安だ。ゴジータと豆、それぞれを二、三回程往復して見やると、平和の象徴は遂に決心した。

「——分かった。他ならぬ君の言葉だ、信じよう」

手にした豆を握り締め、頬張る。コリコリと噛み砕くと、久しく味わっていなかった枝豆の味が口内に広がっていく。

特にエグミも苦味もない、ごく普通の豆の味。久し振りにお酒が呑みたいなあ、なんて考えながら呑み込んで……特に変化無し。

あれ？　もしかして効果無し？　これ迄の流れがシリアス全開だっただけに少し拍子抜けした——その時だ。

全身の細胞が、脈打つのを感じた。

「——ゴッ、プッ？」

「オールマイト！」

喉の奥から汲み上げてくる異物感。それに抗う暇もなく、オールマイトの口から大量の血が吐き出されていく。

黒く、ドロツとした重い血。床一面に吐き出される大量の血は既にバケツ一杯分の量を超えている。明らかに致死量……なのに、苦悶の表情で血を吐き出しているオールマイトの顔色は、悪くなる処か明るくなっている様に見えた。

聽て、悪い血を全て吐き出し終えたオールマイトは、自身に感じる新たな違和感に愕然となる。

「——呼吸が、軽い!? ゴジータ、これは、一体?!」

これ迄、僅かに呼吸を繰り返すだけで己を蝕んでいた苦しみが嘘の様に軽くなっている。息苦しさも前とは比較にならない程に軽くなり、なにより……空腹を感じられない。

「恐らく、一番酷いと思われる呼吸器官の修復を優先したのでしよう。この黒い血は、貴方の内で死んでいた細胞そのもの。それを吐き出して新しい臓器を造っている最中なのだと思います」

「ぞ、臓器を造るって、そんな簡単に出来るわけ……」

「ええ、ですからこの豆の存在は他言無用なのです。元々は俺が目指しているある技を完成させる為に、町の八百屋さんから買った枝豆。そこに俺の気を注入する事で、この様な『仙豆擬き』が生み出された」

ゴジータ——後藤甚田が目指している技とは、ゴジータの代名詞と言われる」

あの必殺技”の事である。邪悪なるモノだけを廃し、囚われたものを解き放つ浄化の神業。未だ完成には程遠い後藤甚田が、別視点から理解しようとは半ば趣味で完成させたモノ、それが“仙豆擬き”である。

擬きである事から、本物の仙豆の様に完全に再生されている訳ではない。オリジナルなら四肢の欠損すら回復させる代物だが、あくまでこれはゴジータが自らの気を送ることと育てた謂わば別品種。

効果も効能も本家と比べれば微々たるモノだが、それでも常に重症状態のオールマイトには効果があつた様だ。

「今の貴方の状態は悪い細胞を吐き出し、新しい細胞を造っている最中の筈、これから定期的にこの仙豆擬きを食べれば、全快には至らなくとも日常生活には困らない程度には回復出来る筈だ」

「———どうして、私に其所まで？」

自分にこれ程まで親身になってくれるのか？ 戸惑うオールマイトに今度はゴジータが不敵に笑う番だった。

「オールマイト、平和の象徴よ。アンタにはこれから俺を本物のNo. 1ヒーローにして貰う為に色々と手を借りることになるだろう。これは、その前払いと思ってくれ」

「け、けれどこれは……余りにも破格すぎる！ それに釣り合うモノなど、私には———」

「——
「おいおい、どうしたんだよN o. 2。今さっきアンタは俺に言っただろ？ 余計なお世話は、ヒーローの本質だと」

「ッ!？」

「俺は、【超】ヒーローのゴジータだ。アンタの理想には何一つ応えられないが………それでも、アンタから渡される重いバトンを受け取れる様なヒーローにはなってみせるつもりだ。それを見届けて貰うまで、宜しく頼むぜ、先輩」

大胆不敵。生意気で、小癩で、それでいて力強いゴジータの言葉。差し出される掌に、愕然となりながらも、オールマイトも笑みを取り戻していく。

「——全く、生意気なヒーローだとは思っていたが此処までとは！ してやられたよゴジータ！ 良いぜ、その挑発に乗ってやろうじゃないか！」

煙が、八木俊典の身体から噴き出していく。細身の身体は太く頑強になっていき、垂れた前髪が再び天を衝く。

「改めて、君にチームアップを要請する！ 応えてくれるだろ、N o. 1!!」^{後 章}

「望むところだ。N o. 2!!」^{先 章}

N o. 1とN o. 2。これが、天下無敵の最強チームが誕生した経緯である。

「……さて、じゃあ先ずは」

「この掃除から、始めよっか」

【超ヒーロー】と【平和の象徴】、二人のヒーローが組んで最初に行った仕事は………床一面にぶちまけられた吐血の処理だった。



「クソオツ！ 何が新たなN.O. 1だ。何が【超ヒーロー】だっ!!」

荒れる。炎が渦となり、周囲のトレーニングの機材を焼いて、家を荒らす程に燃え散らかしている。

嘗て、N.O. 2と呼ばれた炎の男。その足下には紅白に別れた頭髮を持つ少年が横たわっていた。

「いつまで寝ているつもりだ！ 立て！ お前には奴等を超えねばならん使命があるん

だぞー！」

「お父さん、もうやめてよ！ これ以上は焦凍が死んじゃうよ！」

「うるさい黙れッ！ お前は引つ込んでいろ！」

「姉ちゃん。俺は、大丈夫、だから……」

「止めて、焦凍も止めて！」

男の怒号に女性の悲鳴にも似た叫びが、少年の耳を叩く。

目の前の男の事は普段から心底軽蔑しているが、最近は度を越して酷くなっていく。今此処で下手に反抗してしまつたら、その矛先が姉に向けられると確信出来る程に、このNo. 3ヒーローは正気を失っている。

耐えろ。今は兎に角耐えて、この男の矛先を自分に集中させるしかない。泣きじやくる姉を守るために、顔に火傷を負っている少年は、疲弊した顔で猛り狂う男へ向かう。

その光景を見ている事しか出来ない姉は、ただ祈る事しか出来なかつた。

“——誰か、助けて！”

記録6

超常の異能を個人が持ち、社会に浸透された「個性社会」。全人類の約八割以上が何らかの「個性」を持つとされるこの世界は、ヴィランとヒーローという二つの個性を扱う者達によつて分かれたれていた。

ある者は一般的に個性の使用を禁止する社会に鬱憤を持ち、ある者はその個性故に迫害された者。経緯は様々であるが、今の社会に不満を持つて他者に悪意と暴力を振り撒く者達を、人々はヴィラン敵と呼んだ。

人を壊し、殺める力を躊躇なく振るうヴィラン達。その悪意に人々は翻弄され、恐怖する。

しかし、悪意を振り撒く者達がいるように、この世界にはヴィランを止めるヒーローの存在も実在している。無遠慮に振り撒く暴力に対して真つ正面から打ち砕く者達が人々に安寧と安心を齎しているのだ。

「く、くるな、来るなあーッ！ ブベラ!?」

「スジー!? く、クソオツ! ガツペ」

「ターバもやられた!? なんだよ、なんだよこの強さは!? こんなのかないつこ——
タワンバ!」

「ムクーリツ!?」

「こ、こうなつたらその辺の人間を盾にして——ムツキユ」

「ニューギさんツ!? そ、そんな、速すぎて人質を使う暇も……アベジツ!」

日本の街のとある銀行、金欲しさに強盗を図ったヴィランの集団は、ものの数秒も経たない内に全滅。自身に備わった個性を使用する間もなく地に倒れ伏した。

倒れ伏すヴィランを見下ろすのは、金髪の髪を逆立てた翡翠色の瞳。平和の象徴とは違ふ雰囲気纏う男の正体は、先日新たにN.O. 1ヒーローの座に就いた最強のヒーロー「ゴジータ」。

ヴィラン達が銀行を襲つて僅か数分、通報を受けて駆け付けたゴジータによつて、事件は僅か数秒で終息した。

現N.O. 1の圧倒的な力を前に、巻き込まれた人々が啞然とする一方。

「——コイツら、なーんか見覚えがある気がするんだが、気の所為か?」

ゴジータは倒したヴィラン達に妙な既視感を覚えながら、外で待ち構えている警察に連中を引き渡す。

「氣絶させた。生憎と縛るものが近くなかったからそのままだ。目覚める前に早く拘束してくれ」

「あ、ああ。ゴジータ、ヴィラン退治に感謝する」

「氣にするな。アンタ達にも世話を掛ける」

氣を失い、対抗する意識そのものを刈り取ったヴィラン達を引き渡すと、ゴジータは耳に付けたインカムから聞こえる通信内容に従い、その場から飛翔する。

感謝を受け取る暇もなく、賛美の声を届ける間もなく、次の現場に向かって文字通り飛んでいく。しかし、余裕なき活動に疲弊の色は見えず、次の現場に秒で駆け付けたゴジータはまたもや秒で事件事故を解決していく。

その在り方は正にオールマイトの再来。されど、彼に重ねる者は誰一人としていなかった。何故なら彼は「超」ヒーロー、人々の平和と安寧を支えるものではなく、その在り方で人々に希望を与える者。

何者も寄せ付けない圧倒的力と速さ、その勢いは瞬く間に日本中に浸透し、既に犯罪に対する抑止力になりつつある。だが、彼の話題性はそれだけではない。

「おっと、どうやら今回は私の方が一足早かったようだね！ お疲れさんだ相棒！」

「そつちこそ人命救助お疲れさん、相棒」

何より、嘗てのNo. 1とチームを組んだこと、それ自体がヴィランに対して大きな

抑止力になっている。既に災害救助を終えたオールマイト、相変わらずのスマイルを浮かべている平和の象徴にゴジータもまた笑みを浮かべる。

「しかし、チームを敢えて分けて活動するのはいいが、現場が被るのはこれで四度目か。通信の連携も中々上手く行かないな」

「H A H A H A！ まだ組んで一月も経っていないんだ！ そう言うこともあるさ！ 互いに焦らず、地道に行こうぜ！」

「ああいや、別に報告してくれる事務の人達を責めてる訳じゃないんだ。事前にアンタがいることを気付けなかった俺にこそ責任がある」

「くー、このストイックマンめ！ 相変わらずクールじゃないか！」

オールマイトとゴジータが組んで既に二週間。その強さと頼もしさは日本中に轟き、その話題は海を越えて世界中に響き渡っている。平和の象徴と肩を並べられる実力、足手まとい処か時にはオールマイトすら凌駕する機動性、パワーも折り紙つきでチームアップ二日後には誰もゴジータの実力に異を唱えるものはいなかった。

「熱い！ 熱すぎるッス！ ゴジータ、迷惑で無ければ俺にサインを——」

「お、俺にも！」

「私も！」

「これでいいか？」

「速ッ!? てかいつの間にも!」

加えて、不器用ながらもファンサービスは欠かさず、サインを求める者には拒むことなく即座に対応する。即座過ぎていつ書かれたのか知覚すら出来ず、サインを貰った者の何名かは驚きと喜びでテンションが可笑しくなっていた。

「おいおいゴジータ、サインをするならちゃんとして受け取ってやらないと。相手を混乱させちまうぜ?」

「なに? そうなのか? 向こうにも予定があると思ったから可能な限り迅速に済ませようかと……」

「んー、善意の空回り……!」

そして、この天然さ。ゴジータの中身である陰キャ風味の強い後藤甚田は他者を変に氣遣う余り、時折変な氣遣いを発生させてしまうキライがある。しかし、そんな氣遣いの空回りも、ゴジータのクールな外観と合わせてギャップを生み出し、世間ではある種の天然キャラとしても受け入れられつつあった。

「さて、そろそろお喋りはおしまいだ。ゴジータ、本日最大の修羅場が来たぜ!」

「ああ、俺の方にも連絡が届いた。沖合いの海で大型客船の破損事故だつてな!」

「そうだ。分かっていると思うが……」

「支点力点作用点、だな!」

「その通り。私達が揃えば出来ないことはない、が！ 慎重且つ丁寧に！」

「大胆且つ迅速に、だろ？ じゃあ——」

「行こうか」

飛ぶ。オールマイトはその脚力で、ゴジータは自前の飛翔能力で、互いに現場に向けて飛翔する。その姿はこの先の未来を指し示しているようで、その姿を目の当たりにした人々は期待と希望に胸を膨らませ。

「——いや、助けてくれるのは有りがたいんだけど」

「もう少し、手加減してください」

強すぎる二人のトップヒーローに、他のヒーロー達は辟易としていた。



『では、オールマイトは単純にチームを組んだのではなく、ゴジータにN.O. 1ヒーローの何たるかを教える為に組んだと?』

『N.O. 1ヒーローと言つても、ゴジータは未だ新人ヒーローの域を出ておりません。実力は問題なくとも、その経験の浅さから不安に思う人々も出てくることでしょう。今回のチームアップは偏にゴジータにN.O. 1ヒーローとしての貫禄を付けさせる間の救済処置だと、そう認識している人も多いようです』

『成る程、ではゴジータにとってチームアップの解消した後こそが真価を問われる時だと?』

『その時こそ、彼の勇姿を刮目する事になるでしょう。まあ、私は其処まで心配してはいませんがね』

『なんですかその言い方、何処から目線ですか?』

『後方師匠目線ですが?』

『思っていたより図々しい!?! アンタ、この間までゴジータのアンチだったでしょうが!?!』

『知らんもんねー、娘がゴジータのファンだから乗っかっただけだしー』

『アンタって人はあーっ!』

「……………なにこれコント?」

ゴジータとオールマイト、二人のトップヒーローの話題になっていた筈なのに、いつの間にかコント染みたやり取りが出来上がっている。

テレビ越しから聞こえてくるアナウンサーと解説者の乱痴気騒ぎをスルーし、ゴジータ……………後藤甚田は玄関口から入ってくる人物に声を掛ける。

「お帰りなさい八木さん、診断結果はどうでしたか?」

「いやあ、医者の方が驚いてたよ。これ迄完全に無くなっていた器官が、僅かにだけど快復しつつあるってさ。胃と肺、どちらも小さいけどちゃんと機能しているって、このまま順調に進めばもしかしたら日常生活に支障が無い程度には快復するかもって!」

「そうですか。そりゃ良かった」

ニコニコと、病院からの診断結果を語るオールマイト改め八木俊典に後藤甚田もホッと胸を撫で下ろした。八木の通う病院は口が固い信用できる所で腕の立つ医師も多い。

そんな病院からのお墨付きを頂いた事で、八木俊典のテンションはいつもより高い。これからの生活次第でこれ迄諦めていた食生活に戻れると思うと、色々と楽しくなってくるのだろう。

「こんなに明日が楽しみだと思えたのは久しぶりだよ! ありがとう、後藤君!」

「困った時はお互い様ですよ。実際、事務処理の仕事に関しては全くと言って良い程任

せちやつてますし」

現在、オールマイトとチームを組んだ事でゴジータの事務的問題はその殆どが彼の事務所に送られる流れになっている。ゴジータの下に残るのはその日に起きた事件の報告書を数枚書き上げる程度だけ、ゴジータからすれば豆一粒で仕事の大部分を処理して貰っているモノ。

そして、オールマイトの事務所に勤めている人達も平和の象徴の仕事を支えるだけあつてその手腕は超一流。彼等から見ても普段からオールマイトが持つてくる書類とそんなに変わらないので、さほど苦労なく処理出来ている。

寧ろ二人の活躍が世の中に浸透している分、犯罪件数が減少しつつあるので、全体的な仕事量は減っている部分もあるのだ。

そんな、所謂Win-Winな関係の両者だが、オールマイトの方はやや不服そうだ。「おいおい。人の臓器と書類仕事を同列に語られたら、此方の立つ瀬がないぜ！　こんな時くらい素直に礼を受け取れよ相棒！」

「はいはい。分かったから手を洗ってきなさい。今日八百屋さんから美味しい茄子を戴いて、消化のいい茹で茄子を作りましたから」

「マジで!?　それ私も食べていいの!?!」

「聞いた感じ、消化のいい奴で少量なら大丈夫かと。多分、医師の先生も似たような事を

言っていたのでは?」

「その通りだよ! くー! 素の君も中々にクールだな!」

久し振りの食事、健康重視で少量とは言え人並みのモノが食べられると知った俊典のテンションはPlus^更 Ultra^向にかけていた。幾ら田舎とは言え近所迷惑だと軽く注意し、甚田は食卓を用意する為に台所へと向かう。

「しつつかし、君が料理上手なのは驚いたよ。それも施設の職員さんから教わったのかい?」

「ええ、世話になった人の作る料理が好みの味付けだったので、暇な時にちよくちよく教えて貰っていました。お陰でこうして元気でいられてますし、今の生活が落ち着いたら一度顔を見せに行こうと思っています」

「そうか。うん、その方がいいね」

「オールマイトの方はどうです? 此方の生活には慣れましたか?」

「ああ、都心と違う田舎独特の静けさ。最初はちよつと戸惑ったけど、今ではすっかりこの空気に癒されてるよ」

オールマイトは事務所がゴジータ分の事務処理をしている分手狭になり、現在彼は甚田の家に仮住まいという形で同居をしている。元々が武家屋敷をイメージした自宅だから部屋数は多く、部屋も殆どが畳だから俊典としても落ち着ける環境となっていた。

「此処に住まわせて貰ってから眠りも深くなったし、朝もすっかり元気さ！」

「それは良かった。さ、用意できたので食べましょう」

「わーい！」

「あ、オールマイトは此方のお粥で」

「……はーい」

「ちゃんと出汁取って味付けしてありますから、ちゃんと食べてくださいね」

「分かりましたー！」

子供かな？ 出された料理を前に目を輝かせる平和の象徴に、【超】ヒーローは苦笑いを浮かべた。

さて、食事を楽しんでいる中、話はヒーロー活動の話題へと移る。主な内容は二人が組んで爆発的に増えたメディアへの対応である。

「しっかし、組んでからある程度覚悟はしてましたが、増えましたね。メディア関係の仕事が」

「あむあむ……うん、人々に安心と安寧を届けるには我々というヒーローの存在を理解して貰うのも大切だ。こういうヒーローがいる。そう思わせるのも大事なヒーローとしての役割さ」

「いや、そうなのかもしれませんが……この間なんてお互いの衣装を交換した上で

写真撮影されちゃってましたよ？ 一体何に使われるんですかアレ？」

「なんでも、カードゲームの資料に使われるみたいだよ？ とあるゲーム会社が開発しているカードゲーム、そこで期間限定の一品として出すんだって」

「……………なんだろう、企業の闇を聞いた気がする」

そのカードが世に出てくる頃、多くのオールマイトファンがそのカードを欲しさに全
国のカードショップを渡り歩くのだろう。その光景を想像すると、企業の闇を見た気が
した。



「オラア！ 近付くんじゃねえ！ このガキが死んでも良いのかアツ！」

ヒーロー飽和社会。ヴィランの抑止力でもあるヒーローが数多く存在していても、犯罪と言うものは起こる。ゴジータとオールマイトというトップヒーローがいるこの日本でも、ヴィランという災害は起きてしまう。

巨大化の個性を持ち、街中を暴れる男。その手に一人の少女が握られている所為で誰も手が出せないでいる。

「一佳、一佳アツ！ 誰か娘を、娘を助けてくださいー！」

「おかあ、さ……………」

男の手に握り締められ、項垂れる少女。全身に及ぶ痛みと息苦しさに意識が朦朧となり、助けを呼ぶ声も出せやしない。

しかし、少女は願わずにいられなかった。誰か、助けてと。悔しさと辛さで涙を流した——瞬間、少女は自身の体に軽さが戻るのを自覚した。

気付けば、少女は男の手から解放……………いや、放り投げられていた。

誰もが目を見張る。何故なら暴れる大男の巨大な体が、たった一人の人間の蹴りによってくの字に曲がっているのだ。その衝撃によって男の意識は断ち切られ、少女を

握っていた手も弛緩し、その結果、少女は空中へ放り投げられる事になった。

街の様子が一望できる程に高く投げられる。だが、少女にはまるで恐怖がなかった。何故なら、黄金の炎を纏う最強のヒーローが、既にこの身を抱き抱えてくれているのだから。

「おい、大丈夫か？」

「え？ あ、はい！ だだ、大丈夫です！」

あまりの衝撃、あまりの出来事に少女——拳藤一佳の思考がバグる。自身の顔を覗いてくるヒーローに戸惑い、どもってしまふのは決して恥ずかしいことではない筈。

しかし、これではダメだ。ヒーローを志す自分としてはお礼の言葉を言わないままにいるのは、剩りにも格好が悪い。

せめて、せめて礼の一つでも口にしようとして。

「そうか、良かった」

フツと、笑みを溢すその表情に少女は何も言えなくなつた。ヴィラン相手なら眉間に皺を寄せて睨み付けているのに、子供相手ならこんな風に笑ってくれるのか。

メディアで目にする不敵な笑みとは違う自然体なゴジータの微笑みに、拳藤一佳はそれ以上彼の顔を直視する事はできなかつた。

そうこうしている間に、地面へと着地する。さて、後はこの娘を親御さんの所へ帰し

てやるだけだと思つた矢先……。

「こおの、クソヒーローがあ、舐めんじゃねえ!!」

大男が再び立ち上がつて、此方に走つてきた。どうやら少女を救出する事に意識したあまり、力加減を誤つたらしい。

(もう少し力を入れても良かったか? いや、あれ以上力を込めたら最悪爆散させちゃうし……うーん、難しいな)

自分の未熟さを痛感しながら、それでも迎撃態勢を忘れない。抱えた少女には申し訳ないが、次の一瞬まで我慢して貰おう。

と、泡を吹きながら襲つてくるヴィランに対して身構えた次の瞬間……。

「踵^{ルナリング}月輪ツ!!」

空から降つてきた何かが、ヴィランの脳天を蹴り落とした。脳天を蹴り飛ばされ、今度こそ意識を吹き飛ばされたヴィランは、そのまま地面へと倒れ込む。

砂塵が舞い上がり、舞い上がる塵が少女の視界を遮るが、ゴジータだけはその人物に視線を向けて離さなかつた。

ヴィランを蹴り倒した何者かが、倒れ伏すヴィランに着地する。見下ろす形で此方を見やるその人物は、大きな特徴を有していた。

眩しい褐色の肌、血のような紅い瞳。兎のごとく長いその耳は下衆なヴィランの声を

決して聞き逃さない。

「よお、久し振りだなゴジータ。相変わらず生意気そうで安心したぜ」

「ミルコ……………先輩」

その人物の名は「ラビットヒーロー」ミルコ。先のヒーロービルボードにて登場し、女性ヒーローの中では唯一トップ10のヒーローランキングに刻まれた女傑。

そんな、色んな意味で苛烈なヒーローを前に。

(メツチャ嫌そうな顔してる!?)

拳藤一佳は、本日二度のゴジータの素顔を目撃した。

記録7

ゴジータこと後藤甚田には、一年と言う短い期間ではあるものの、他のヒーローのサイドキックを勤めていた経験の日々が存在した。

プロのヒーローとして一人立ちする前に、先ずは一年と言う期間で独立したヒーローの活動を覚えようとして、中身陰キャの後藤が考えを巡らせて思い付いた妥協案。

当然、連絡を入れれば大抵のヒーローは快く受け入れてくれるだろう。それこそ、インターン時代で密かに顔見知りとなったヒーローの中には、トップヒーローの名前がちらほら存在している。

そんな中でも後藤が選んだ人物は、同じ接近戦を得意としているとある女性ヒーロー。インターン先でも一番即興で組んだ事のある人物だし、現場で一番息が合った行動が出来ると思っていた故の選択だった。

だが、後藤甚田はこの選択を色んな意味で後悔する事となる。女性ヒーローの中でも屈指の強さを有するラビットヒーロー“ミルコ”、後藤甚田ことゴジータは彼女に対し

て苦手意識を持つこととなる。



「見てたぜえ、テメエとオールマイトの活躍はよお。私と組んでた時より随分と楽しそうじゃねえか。アタシが相手じゃ不服だったか？ ああ？」

「倒れ伏す大男のヴィランを踏みつけて、凶悪な笑みを浮かべて見下ろしてくるのは、女性のトップヒーローであるミルコ。嘗てゴジータがサイドキックとして、一年程組んでいた相手。」

そう言えば、この地区は彼女が担当していたな。既視感のある街並みに気付くのが

遅れたと、内心でゴジータは己の迂闊さを呪う。

しかし、まだ巻き返しは出来る筈。未だ笑みを浮かべてくる凶悪な兎を前に、ゴジータは抱えていた女子を親御さんの所まで連れていく。

「悪いな、救助が遅れた。一応怪我のない範囲で終わらせたから大丈夫だと思うが、念の為に病院へ行つて見て貰うといい」

「あ、ありがとうございます！　ありがとうございます！」

無事救助となった我が子が助けられた事に喜ぶ母親、泣きながら感謝してくる彼女に助けられて良かったと内心で安堵したゴジータは、踵を返してその場を去ろうとする。

そんな彼の背中を、幼さ残る少女が呼び止める。

「ゴジータ！　あの、私！　ヒーローになる！　雄英に入つて絶対にヒーローになるから！　だから！」

一度だけ立ち止まる。少女の必死な言葉に何か思う所があったのか、振り返るゴジータは……。

「ああ、お前がヒーローになる日を楽しみにしている」

少女がヒーローを目指し、そこに至る道のりは決して簡単ではない。しかし、そんな彼女の夢をゴジータは不敵な笑みで応援する。そこには侮蔑的意味合いはなく、新たなヒーロー誕生を楽しむ戦士の顔がそこにはあった。

少女——拳藤一佳は、その笑みに高揚した。自分の様な夢見がちの子供の言葉を本気で信じてくれている。現N.O. 1から届いた誰でもない自分だけのメッセージ、ヒーローを志す者ならば震わずにはいられない一言だった。

そんな喜ぶ少女にゴジータもまた満足し、その場を去ろうとした所を……。

「何勝手に終わらせようとしてんだ。無視すんなゴラァーッ!!」

自分を無視して終わらせようとするゴジータの背中に、兎の跳び蹴りが炸裂した。



「——で、そのまま逃げて来ちゃったと?」

「逃げたんじゃないツス。次の助けを求める人の所へ駆け付けた。ただそれだけツス」

その後、無事に凶悪鬼から逃げおおせたゴジータは、本日のヒーロー活動を切り上げ、オールナイトこと八木俊典と共に夜の食卓を囲んでいた。

今夜の夕食は鍋。最近寒くなってきたし、本日も八百屋のおじさんから新鮮な野菜を提供された事で、温かく胃にも優しい野菜主軸の鍋を振る舞うことにした。

「いやいや、助けを求める人々を修羅場からの逃げ道にするのはヒーローとして良くないよ？」 特に相手は女性なんだ。下手に引き伸ばさず、キッチンと話し合った方が良くて、ドラマでも言ってたよ」

「いやドラマなんかいい。……でも、流石に一言も言葉を交わさなかったのは不味かったか。今度顔を合わせたら謝っておきます」

「と言うか、どうしてミルコが苦手なんだい？ 一年もサイドキックとして組んでたんだろ？」

「そうなんですけど……その、ミルコ先輩って結構庄の強い人なんですよ。しかも覚悟ガンギマリはやべー人。一生懸命なのはいいんですけど、『死ぬ気で』息をしてるんだと断言しちゃう人なんで、次第に彼女の言動に付いて行けなくなっちゃって」

「それで離れたと……？」

「いや、それだけじゃなくて……」

「？」

珍しく歯切れの悪い言い方をする相棒に、俊典も不思議に思い首を傾げる。甚田は良くも悪くも人の良い人間、そんな他人の覚悟を聞いただけで付いていけないとその人から離れるとは思えなかった。

が、その疑問は次の彼の言葉で納得に変わる。

「その、ミルコさんって結構距離感の近い人で、すぐ人に抱き付いてくるんですよ。別に蹴ってくるのは良いんですよ、痛くない様に加減してくれるし。単なるスキンシップで済ませられるし、けれど急に抱き付いてくるのは……その」

「心臓に悪いと? ……あー、まあ確かに彼女は女性ヒーローの中でもトップに座る人だからねえ。下手に騒がれると経歴に傷が付くからとか、そんな感じ?」

「あの人が他人の評価に左右される人じゃないのは分かっているんです。ただ、彼女いない歴〓年齢な自分としては、少し刺激が強すぎて……」

「逃げるようにサイドキックを解消したと? ……なんてピュアピュアだよ純情ボーイ!」
要するに、この男はミルコというトップヒーローからの絡みに堪えかねてしまい、彼女の事務所から逃げ出したのだ。俊典はそんな彼をピュアだと揶揄するが、中身陰キャである後藤甚田としては、割とキツイ話だったりする。

実力も容姿も、トップに相応しい女性ヒーロー。そんな女性に急に抱き付かれると、誰だって困惑し、緊張してしまう事だろう。

そんな訳で、ミルコからの過剰なスキンシップに堪えられなくなった結果、同じ先輩ヒーローであるホークスに相談し、諸々の経過を経て無事に彼女の事務所から逃げ出す事に成功したのだ。

「ですので、今度会った時は必ず謝るようになりますよ。俊典さんと組んだ事も含めて」「あれ？　もしかして私も巻き込まうとしてる？」

自分を盾にして説得を試みようとしている甚田に苦笑いしつつも、ふと八木俊典は思う。果たしてあのミルコがなんの意味もなしに突然異性に抱き付くのだろうか？　仮にも後輩相手に。

一体、彼のサイドキック時代でどんな日々を過ごしてきたのか……正直、色々と気になりすぎて出歯亀根性が出そうになるが、そこは元No.1ヒーローの矜持として堪えきる。

二人の事は彼ら自身に任せる事にして、今はこの鍋の味を存分に楽しもう。胃に優しい白菜を頬張り、シャキシャキとした食感を楽しみながら呑み込むと、じんわりとした暖かさが胃の奥から巡ってくるのがわかる。

自分の体調を配慮してくれた相棒に感謝しながら、八木俊典が次の具に箸を伸ばそうとした所で、呼び鈴がなった。

「あれ、この時間に誰だろ？」

「甚田君、何かネットショッピングで買ったたりした？」

「俺、基本的に現地買いなんですよ」

「じゃあ、もしかしてミルコ？」

「ホント止めてそれ」

笑いながら揶揄してくる俊典に辟易としながらリビングを出て玄関に向かう。外はそろそろ肌寒い時期に差し掛かり、夜は冷える。

あまり客人は待たせてはならないと早足で玄関の戸を開けると……。

「ハイハイ。どちら様です………か」

「久しぶりだなゴジータ。いや後藤甚田、貴様の活躍は良く耳にしている」

「さ、サー・ナイトアイ？ 何故、貴方が此処に？」

「それは、僕が連れてきたのさー！」

扉の前に立っていたのは細身で眼鏡を掛けたスーツ姿の男性と、彼の肩からニョキツと顔を覗かせるクマカネズミか分からない未知の小動物だった。

「根津校長まで!? え、マジで一体何があつたんです？ 何かヤバイ案件でも起きまし

た？」

「現在、日本の犯罪件数は貴様とオールマイトの活躍のお陰で例年より大きく下回っている」

「今回僕達が来たのは、君達にある話があつてきたのさ！」
「話、ですか？」

目の前に立つゴジータが見上げる程の長身な男の名は佐々木未来。ヒーロー名をサー・ナイトアイで登録されている……嘗て、インターン先でゴジータが世話になつた人物でもあつた。

「あ、じゃあ取り敢えず中で話しましょうか？ 丁度今、同居人と鍋をつついていたので」

「同居人？」

「本当かい？ じゃあお言葉に甘えちやおうかな」

「甚田くん、お客さん誰だった？」

先に述べた通り、时期的に外の空気は冷え込んでおり、玄関口で立ち話をするのは色々と気が引けた。学生時代に世話になつた人達という事もあり、甚田は取り敢えず彼等を家の中へ通そうとする。

そこへ現れたオールマイトこと八木俊典。鍋の具材を頬張りながらやつて来た彼は、ナイトアイの事を見るや否やその場で凍り付く。

「な、ナイトアイ……!? 何故、君がここに!？」

「オールマイト……!!」

「ん？ ん？」

何やら愕然としている二人に甚田は訳が分からず二人を見る。何やら不穏な空気になりつつある後藤宅に白い獣の小動物だけが癒しとなっていた。

固まる二人、そろそろ鍋を見たいんだけどなんて考えていると……。

「ゴジータ……」

「ん？」

「この瞬間、貴様には色々と言きたいことと言いたいことが出来た。先のヒーロービルボードでのNo.1ヒーローとしての在り方、他にも色々あったが、今の私は貴様にどうしても言いたいことがある！」

「な、ナイトアイ？」

「オールマイトと一緒に住んでいるとか、聞いてない上に羨ましいぞ貴様アツ!!」

「なんか面倒くさい事を言い始めた!？」

取り敢えず、目の前の眼鏡の男が重度のオールマイトオタクであることを思い出したゴジータは、適当にあしらう事に決めた。

記録8

「オールマイト!? その、傷は……!?」

ゴジータ改め後藤甚田の自宅、訪れたサー・ナイトアイと雄英高校の校長である根津をリビングまで招くと、鍋を囲みながらナイトアイ改め佐々木未来からオールマイトについて色々話を聞いた。

内容自体はオールマイト本人から聞いていたものとはほぼ同じモノだったから割愛するが、彼の視点から耳にするオールマイトの戦いは中々に壮絶でハードなモノだった。

恩師を死なせ、多くのモノを代償として支払った果てによくAFOという巨悪を倒し、その後も人々の安心と安寧を守る為に平和の象徴として己を犠牲にし続けた。

故に、彼は言う。もう良いだろうと、新たなNo.1というヒーローの登場により、オールマイトの背負う荷物半は減った。これ迄は人々の為に戦ったのだから、これからは自分の為に生きるべきだと、佐々木未来は八木俊典にヒーローの引退を勧めるが

……答えはNO。

まだやるべき事は終わっていない、と諭す俊典に未来は声を上げようとして……。

徐に捲った服の下から覗かせる腹部を見て、愕然となった。

「ば、バカな！ 医師からは匙を投げられた傷が……薄くなっている、だと?！」

「あー、でもまだ赤黒い所が多く残ってますね。ここら辺押すと痛そう」

「だね。医者先生からは脂っこいモノはまだ控えておきなさいって念を押されちゃった」

「だから言ったじゃないですか、肉系のご飯はまだ早いって。幾ら治りが早いからといって、まだ重症状態なのは変わり無いんだから」

「いやー、昨日テレビで見た回鍋肉が凄く美味しそうで……つい」

「いや、てへ」じゃねえよ。それで腹下してたら世話ねえツスよ?」

和気藹々としているトップ二人のヒーローに、ナイトアイの顔はヤバイ事になっていった。既存とされてきた情報はその根底から覆され、更にそれが憧れの人の安否に直結している事だからその衝撃は大きい。

根津校長も流石に動揺を隠しきれないが、ナイトアイはその比ではない。眼鏡を割りそうな勢いで目を見開いているその様は、これ迄の彼のキャラ付けをこれでもかと破壊し尽くしていた。

「——と、まあ彼のお陰で私の体は快復の兆しを見せている。ヒーロー活動している負担も少しずつだが軽くなっているんだ」

「え、いや、しかし……………そもそもどうやって!？」

「それは……………」

「これッス」

「豆エツ!？」

今度こそ、ナイトアイの眼鏡は彼自身の目で破壊された。ついでに顎が外れそうな程に口を開き、その様相はさながらコミカルなギャグキャラの様。

インターン時代の頃はユーモアを大事にしておきながらシリアス全開の顔付きをしていたのに、今ではその面影が微塵もない。キャラ変したのかな? テーブルに突っ伏すナイトアイにゴジータは鍋の具を頬張りながら見下ろしていた。

「えつと……………後藤君、その豆は君が造ったモノかい?」

「ええはい。近所の八百屋さんから好意で貰い、俺の力を与えた事で変化した。仙豆擬き」です。現在は俊典さんにモニターをして貰ってて、何時かは四肢欠損にも効果のあるモノに仕上げたいと思っています」

「……………なんて?」

今度は、根津校長が可笑しな顔をする番だった。

「その反応……あー、やっぱりコレ不味いツスカね？ 医療技術に革命起こしちゃうかな？」

「革命処か土台から吹っ飛ぶよ」

普段は優しい風貌の校長が、この時ばかりは真顔になっていた。平時は生徒の事を第一に考え、現在の個性社会の中で最も人徳者として知られる根津校長も、この男のやらかしには真剣にならざるを得なかった。

「全く、君って子は。昔から色々とやらかしているけど、最近特に酷くなつてないかい？」

「え？ 甚田君って、そんなヤンチャしてたんですか？」

「彼の『やらかしの時代』は、雄英どころかヒーロー委員会の伝説だよ。入学試験では筆記試験はギリギリ合格だけど、実技試験では圧勝処か全ターゲットの破壊を完遂。途中で転んだ受験者を救援したりと、初っ端から雄英の歴史に彼の名が刻まれたものだよ」

「ちよ、校長」

「特に恒例の0ポイント仮想敵なんか、ぶっ飛ばし過ぎて別会場まで巻き込んでしまったものさ！ いやー初めてだよ、高校入学試験をやり直しする羽目になったのはさ！」「ふわー、ジンタンってばやるう〜」

「まだまだ他にもあるさ、職場体験では体験先でのヒーローの心をへし折ったり、仮免試験では同校の生徒を除いた全生徒を脱落させ、仮免試験すらもやり直しさせたんだからさー！」

止まらない根津校長の口から語られる後藤甚田の学生時代に行つたやらかしの歴史の数々、自棄糞気味に語る根津校長に対し、オールマイトこと八木俊典は相棒の武勇伝に目をキラキラさせて聞き入っていた。

「ちよつと待つてくさいよ。それについては俺からも異議がありますよ！ あの後、俺だけを別会場に連れていって、いきなり救助試験をやらされたんですよ!? 俺一人です！」

思い返すのは苛烈だった救助試験、地震による災害、落雷からの停電、火事により家屋は倒壊し、遠くから津波が押し寄せてくる等。考えられるありとあらゆる災害救助を、押し掛けてくるヴィラン込みでゴジータ一人で対処する事になった。

あの時の様子はまさに地獄だった。泣きわめく被災者役の老若男女、一分一秒が命取りになる極限の状態を自分一人の手で切り抜ける。重くのし掛かる責任という重圧の中、それでも誰一人犠牲者も出さず当時のヴィラン役のヒーローすら圧倒したゴジータは、見事仮免試験を一発で合格した。

「しかも！ あれだけの事をやらされたのに、当時の俺の活躍は完全に秘匿状態だった

じゃないですか！ て言うか今もか。幾らヒーロー委員会でも横暴過ぎるでしょ！」

「その委員会の人達を煽っていたのは他ならぬ君だよな？」 俺に出させてくれよ、本

気を。だったかな？」

「ジントゥン？」

「……………」

甚田の追及を笑いながらいなし、そして鋭い返しを本人へ返す。明らかな自業自得、戸惑いながら視線を向けてくる俊典に甚田は顔を背ける事しか出来なかつた。

「——まあ、そんな雄英始まって以来初の大問題児だった君が、今ではNo. 1ヒーローであるオールマイトと肩を並べている。過程はどうあれ、その姿を僕は……誇りに思うよ」

「校長……………あの、大の所が多分に感情が入り込んでいるように感じるのは、俺の気の所為ですかね？」

「なにか言ったかい？」

「あ、いえ……………なんでもないです」

恐らく、余程苦勞してきたのだろう。後藤甚田を見る根津校長の目が感情が無いように見えるのは、教員故の愛の鞭だとオールマイトはそう解釈する事にした。

「……………貴様のやらかしは、この際どうでも良い」

「ナイトアイ?」

すると、これ迄沈黙していたナイトアイが動き出す。割れた眼鏡をかけ直し、佇まいを直す彼の瞳には、安堵の表情が浮かんでいた。

「ありがとうゴジータ、君のお陰でオールマイトに新しい未来が出来た」

「ナイトアイ。まさか、また私の未来を……」

「不透明でした」

「え?」

「あの時、私は貴方の未来を見て絶望した。凄惨な死、それはもう逃れられぬと、私自身が諦めていた。その未来は……もう、見えない」

「ん? ん?」

「ですが、その不透明の未来では微かではありますが……笑っている貴方の姿が見えました。オールマイトではなく、八木俊典としての笑顔が」

何やら二人の間で色んな感情が渦巻いているらしい。自分の家なのに何故か疎外感を覚えた甚田は、お代わりを所望する小動物からお椀を受け取った。

「無断の未来視、誠に申し訳ありません。罰は受け入れます。ですが、どうかこれだけは聞いて欲しい。……ありがとう、オールマイト。生きていてくれて。ありがとう、ゴジータ。彼を生かしてくれて」

涙と鼻水を流し、礼を口にするナイトアイにオールマイトは微笑みを浮かべ……。
「おう、どういたしまして」

ゴジータは決め顔でメのうどんの袋を開けた。



「と、そうだったそうだった。話の本題がまだだった！」

「え？ まだ何かあったんです？」

「もうメのうどん食べちゃいましたよ？」

「貴様は一旦食い物から離れろ」

鍋も食べ、メのうどんも完食した所で、改めて根津校長から話題が振られた。

「いや、後藤君のトンでもやらかしの所為で忘れちゃったけど、本題は此方だったのさ！」

「え？ 俺、何かやつちやいました？」

「それやめろ」

本気で分かっていない様子の甚田に、ナイトアイが真顔で諫める。

「早速だけどゴジータ、そしてオールマイト、君たち二人にはヒーロー委員会から活動休止の指令が出ているのさ」

「——ファッ!？」

マスコットみたいに笑いながらトンでもないことを宣う小動物に、ゴジータとオールマイトの表情が驚愕の色に染まる。

「か、かかかか活動休止!？」

「私達、何か不味いことをしてましたかっ!？」

これ迄、オールマイトとゴジータは日本の治安と平和を守る為に互いに役割分担をしながらヒーロー活動を行っていた。

元々単独で日本中を渡れる超人オールマイトと、同じ事が出来る超人ゴジータ。二人の活躍は既に日本中に知れ渡り、今年の犯罪発生件数は例年を遥かに下回っている。

ヴァイラン犯罪だけでなく、自然災害の時も同様で、彼等二人の活躍により、災害の被害件数も軒並み例年を下回っている。

そんな、実績を上げ続けている二人に対する突然の活動停止の指令。納得がいかないと立ち上がる二人に、根津校長は冷静になるように促した。

「落ち着いてくれ、別に君達に不備があつたわけではないんだ。君達の功績は既にヒーロー委員会にも知れ渡っているし、ゴジータ君に至つては【希望の象徴】として日本社会に浸透しつつある」

「え？ では……………どうして？」

「上げすぎたんだ。二人とも」

「……………どゆこと？」

「二人とも、ヒーローとして活躍し過ぎていて。二人が活躍するという事は、確かに日本の平和と治安の維持に大きく貢献している事だろう」

「……………あ、もしかして」

「俊典さん？」

「だが、それは同時に他のヒーローの活躍の場を奪っている事に他ならない」

既に新しい眼鏡にかけ直したナイトアイの奥の瞳が、二人を射抜く。オールマイトとゴジータ、二人がいれば日本は安泰だという意見が出始めた昨今、この言葉に危機意識

を覚えたヒーロー委員会は、急遽今回の指令を下すに至った。

二人の活躍はまさに日本にとつての宝、それは確かに多くの人間が思い、抱いている事だろう。だが、それは同時に他のヒーロー達の活躍の場を、成長する機会を奪っている事にも繋がっている。

ヒーローもまた人間。人である以上、糧となる経験が足りなければ迅速な対応には至れないし、いざと言う時に対する初動にも遅れる事に繋がる。

それは、何時か何処かで誰かを殺す事に繋がるし、誰かを死なせる事に繋がるかも知れない。そんな可能性の未来を危惧したヒーロー委員会は、ゴジータ&オールマイトのチームに活動休止と言う名の休暇を与える事にしたのだ。

「——と、簡潔に言えばそんな所だ」

「はえー、お偉いさんも色々と考えているんだなあ」

「じゃあ、その間私達は休んでいろと？」

「いや、オールマイトにはまだ別の用件があるのさ」

活動休止という名の休暇、つまりは鍛練が出来るかと甚田が浮かれるのも束の間、根津校長はオールマイトに目線を向けて、真剣な顔付きで一つの提案を挙げる。

「オールマイト、君は我が校の先生になる気はないかい？」

それは、OFAを継承する後継者を探す為の儀式。嘗ての母校からのスカウトに、八

木俊典は目を見開いた。

記録9

——オールマイト、及びゴジータのヒーロー活動の一時的な休止。そのニュースは日本中へ瞬く間に広がり、そして激震させた。

日本の平和と希望を担う二人の存在は、既に人々に取って無くてはならない存在になりつつあり、誰もがその活動休止に嘆き、惜しんだ。

しかし、中には強力過ぎる二人の影響力を知っている者もおり今回の活動休止に一定の理解を示し、其処にヒーロー委員会の思惑も何となく汲み取り、人々は不承不承としながら二人の一時的な活動休止を受け入れた。

No. 1とNo. 2の不在。彼等がいなくても日本の平和は守れると言う事を証明する為、No. 3以下のヒーロー達は死に物狂いで奮起奮闘し、ヒーロー活動を行う事となった。

生活の為、名声の為、或いは自分の原点を振り返ったりと、平和と治安の維持と災害救助に他のヒーロー達が活躍した結果。

日本の犯罪件数はトップ二人が不在であっても、例年より低くなっていた。それでも、二人が活躍していた時期程ではないのが、改めてトップ二人の凄まじさを物語っている。

ゴジータとオールマイト、二人がいなくても日本の平和と治安は守れるのだと、不完全であるもののそれを証明した日本のヒーロー界限は、必然的に世界中から注目される事になる。

対してその頃、No. 1ヒーローであり「超ヒーロー」であるゴジータ本人はと言うと……………。

「へい、ゴジータ！　なんて事をしてくれたんだ！　ハリケーンを吹っ飛ばすなんて真似、誰がしろと言ったよ!?　これじゃあ私は明日も会社に出勤しなくちゃいけなくなっただじゃないか！」

「いや貶すか喜ぶかどっちかにしろよ。テンションたけし」

現在、単身アメリカにて対災害のヒーローとして活躍していた。フロリダ州に迫る脅威的な自然的災害^{ハリケーン}を拳の一振で消し飛ばしたゴジータは、押し寄せる人集りに内心でてんやわんやとなっていた。

相棒であるオールマイトから教わったファンに対する対応の仕方を駆使しながら、ゴジータの脳裏に数日前の出来事が思い浮かぶ。

あの日、雄英の校長からオールマイトに一つの提案が出された時の事。根津校長はオールマイトだけではなく、ゴジータにも一つの提案を授けていた。

それは世界の各地を巡り、見聞と視野を広める事。世界中のヒーローと人々に触れ合う事で、今後ヒーローとして活躍できる土台を磐石にして欲しいという根津校長の提案に、流石のゴジータも言葉に詰まった。

後藤甚田は、前世も含めて日本から出た経験がない。英語も雄英基準でいつも赤点ギリギリだったし、会話にしたって何となくニュアンスで分かったつもりでいるだけだ。

そんなゴジータに、根津校長はあるアプリを携帯へ送信する。そのアプリは起動すると、携帯と連動しているイヤホンから日本語で翻訳された言葉が流れてくるという地味に凄い代物だった。

オールマイトの知り合いとされている……ある博士号を持つ科学者が作り出したモノらしいが、聞こえてくる日本語の翻訳精度は極めて高く、携帯越しで自分の音声も通じるように訳されている為、渡米（自力）してからは常に肌身離さず身に付ける事になっている。

そんな事があつた訳で、ゴジータは休止期間中の息抜きと、外国での良さげな修行場を見付けるべく、文字通り単身でアメリカへと乗り込んだ。

日本の外の国々は未だ個性を悪用した犯罪に歯止めがかからず、依然として颯ごっこ

に似た対応に追われている。この状況を打破する為、先の巨大隕石の破壊に多大なる貢献を果たしたゴジータに各国は協力を要請、日本のヒーロー委員会は「各地でゴジータ関連で起きた出来事は現地の責任」と、幾つかの条件を提示した事でこれを承諾。

そんな色々目論見の絡んだ裏の事情など露知らず、「まあ、それくらいなら……暇になつたし」なノリで請け負つたゴジータは、本日はアメリカで活動する事になつた。

「でも、無事で良かった。折角綺麗な家が並んでいるんだ。ハリケーンなんかにぐちゃぐちゃにされたら、勿体ないもんな」

「ゴ、ゴジータアア……」

大気が唸り上げる程のハリケーンを退け、小粒となつた雨粒を受けながら、ゴジータは一人溢す。それを聞いた一人の男性が涙を流しながら喜んでる様子を見て……少し引いた。

「やれやれ、流石は日本のNo.1ヒーロー。此方の迷惑を悉く上回るとはね。日本のヒーロー委員会の方々、が苦い顔をする訳だ」

「アンタは……アメリカのヒーロー委員会の人か？」

「まあね。ゴジータ、先ずは君の活躍に敬意を表すると同時に皮肉を言わせて欲しい。君の活躍のお陰で我が国の経済の数%は守られた。尤も、避難用に用意していたモノが全て台無しになつたがね」

「それ、絶対後半のが本音だよね？」

「冗談さ」

他のヒーロー達と共に現地へ赴いたアメリカの支部のヒーロー委員会、黒いスーツを身に付けていて身なりは整えているものの、その表情は何処か暗い。確か日本にも常に眠たそうにしている人もこんな感じだったな、なんて既視感を抱いていると、USAのヒーロー委員会の男性は改めてゴジータに向き直り、垂れた右手を差し出してくる。

「——改めて、礼を言わせて欲しい。ゴジータ、君のお陰で我が国の宝が守られた。ありがとう」

自国の国民を宝と口にする男性にゴジータは一瞬面食らうも、呆れたように笑みを溢して差し出された手を握り返す。

「じゃ、何かあったら駆け付けるから、気軽に声を掛けてくれよ。最速で終わらせてやるからよ」

「その大胆不敵な生意気さも、ここまで来ると気持ちが良いな。だが、暫くは遠慮させて貰うよ。君に頑張られてしまうと、我が国のヒーロー達の面目が立たん」

今回の件で既に三度目。対ヴィラン、対災害と幅広く活動してきたお陰で、アメリカの平和と治安は以前よりも大分改善されつつある。自由の国アメリカにもNo. 1ヒーローは存在しているが、彼女の個性はその特殊さと稀少さ故に公に出す事は出来や

しない。その事を重々承知しているからこそ、日本から直々に駆け付けてくれるゴジータにアメリカは頭が上がりなかつた。

「後は我々自身の問題だ。ゴジータ、本当にありがとう。君の活躍に私達は全力で応えてみせよう」

「ああ、楽しみにしてるぜ。じゃあな」

それだけ告げると、ゴジータは白い炎を纏つてその場から飛び立つ。瞬く間に遙か上空へ飛翔すると同時に加速し、次の瞬間には音速を超えた音だけを残してフロリダ州から離脱していた。

そんなゴジータを見送る男性は懐から鳴る着信音に気付くと、次のコールが鳴る前に通話に出る。

『———どうかね、彼の様子は?』

「駄目ですね、彼は我々の手に負える相手ではありません。あの出鱈目さはまるでいつかのオールマイイトですよ」

『そうか、それは残念だな。彼がこの国のヒーローとなるならば、我が国のアドバンテージは他国よりも先んじられたらだろうに』

「全く残念そうには聞こえない声をしてますよ大統領、めっちゃ弾んでるし。そもそもそんなつもりなんて全然ないんでしょ?」

通話の向こうで快活に笑う男性の声に、ヒーロー委員会の役員は呆れるしかなかった。

『ヒーローに国家間のしがらみなんぞ、邪魔でしかない。ヒーローとは彼等の“義”、心の内から発せられる衝動によつて成り立つ者。そういう意味ではうちのNo. 1にはいつも窮屈な思いをさせてしまっているがな』

「今度、チャリティーイベントに参加させても良いのでは？　ゴジータという規格外が
いる以上、彼女の存在は然程問題視はされないと思われます」

『ホント、彼には色んな意味で助けられているな。今度、何か礼をした方がいいかな？』
「では、ハンバーガーを奢るのが宜しいかと。彼、我が国のハンバーガーに興味があった
ようですので」

『ハハ、なら特注のモノを作らせねばな』

快活な笑い声を受けて通話が切られる。自分の言葉にどこまで本気になったのかは
知らないが、どうやらアメリカの大統領はゴジータに特注のハンバーガーを奢る腹づも
りらしい。

相変わらず自由な大統領に苦笑いを溢すと、役員の男性はゴジータが飛び立った空へ
視線を向ける。既に彼の姿は青空の彼方へと消えていて、その向こうには虹が橋を掛け
ていた。

「ヒーローには、青空が良く似合う」

現在の日本のN.O. 1ヒーローは、問題児の意味合いでもN.O. 1だった。それでも、彼に畏敬の念を抱かずにはいられない。既に数多くの事件事故を解決してくれたゴジータに、役員の男性は敬礼で虹の彼方へと突き進むゴジータに返礼するのだった。

まあ尤も。

「出来れば、正規の手続きで来て欲しかったなあ」

彼のお陰で出来た仕事の事を思うと、ゲンナリしてしまう役員さんだった。



『へえー、じゃあゴジータは今アメリカにいるんだ』

「今そのアメリカから出た所。日本にはあと数分で着く予定だ」

太平洋上空。音速を超え、眼下の海面を挟りながら突き進むゴジータ。その手には携帯が握られていて、通話の先にいる相手はこれ迄幾度となく世話になった先輩ヒーローの一人だった。

名を《ホークス》。翼を持つ個性を持ち、世間では速すぎる男と称されている男である。

『いやー、相つつ変わらずバカ速いねー、これは俺も最速の名を捨てた方がいいかな？』
なんて事も口調明るく振ってくれる。そのお陰もあってヒーロー相手でも物怖じする事がなくなったゴジータは、ホークスとのこのやり取りはある意味救いにもなっていた。

それこそ、ゴジータとしてだけではなく、後藤甚田として振る舞える程に。

「それで、何か用事があったんじゃないのか？ 生憎と今日は土産物を何も買ってないんだが……」

『え、そうなの？ 本場のフライドチキン食べてみたかったんだけどなー』

「今からでも戻ろうか？」

『あ、嘘ゴメン止めて。天下のNo.1ヒーローをパシリに使ったなんて知られたら、フアンの人達に怒られそう』

「ははは……」

恐らくはNo. 1となり、オールマイトと組むことになった自分に対しての気遣いのつもりなのだろう、何気ない会話で緊張を解きほぐそうとしてくれる辺り、ホークスも中々器用な男である。

『ああ、そうそう。この間相談されたミルコさんについてなんだけど、今の所君の事を探している素振りは無いみたいだよ』

「そ、そうなの？」

『……………露骨に声音が変わったねえ。そんなに彼女が怖いのかい？』

「ええ、まあ……………サイドキック時代の頃、事務所に泊まらせようとしてきましたし」

『——うん？』

ふと、ホークスはこの会話に違和感を覚えた。

(……………あれ？ ミルコさんって事務所持っていないよね？)

ラビットヒーローミルコは、事務所もサイドキックも持たないとされる。これ迄のヒーローとしての在り方を、根底から覆した女性ヒーローだ。基本的には対ヴィラン戦を得意としていて、*“取り敢えず蹴る”* 事を信条にしており、自他共に認める凶暴兎である。

そんな彼女が……………事務所に連れ込む？ 食い違いのある会話に何となく嫌な予感を覚えたホークスは、恐る恐るゴジータに訊ねた。

『えっと……その、ゴジータ君？ 因みにだけど、ミルコさんとこの事務所ってどんな感じだったけ？』

「え？ 自宅ツスよ。あの人なんか自分ん家を事務所にしてるっぽくて、これなら楽で良いなと思って俺も真似することにしたんす。まあ、No. 1になつてからはほぼ意味がなくなりましてけど」

（——あつ）

聞いたことがある。兎は個体によつては差異があるものの、対象となるモノを自分の物にしたがる習性があると。

ベタバタと必要以上にくつついたり、アゴを擦り付けて自分の臭いを擦り込んだり……もしくは、自分の巣に持ち帰ろうとしたり。

其処まで思考を巡らせたホークスは、泥沼に入る気がしたので、今後この話題に触れる事を止める事にした。

（つーかコイツ、あのミルコさんにそこまでさせるとか、マジで何やらかしたんだ!）
ゴジータだからね。

「ホークスさん？」

『つと、悪いね。ちよつと考え事してた。それで？ No. 1ヒーロー様はこの後どんな予定で？』

「取り敢えず家に帰ってシャワーを浴びた後ヒーロー委員会に報告する事にします」

『りよーかい。んじゃ、その事は俺からヒーロー委員会に伝えておくよ。お疲れさん』
「お疲れー」

ピツと、此方の言葉を聞き届く丁度良いタイミングで通話が切れる。こう言う辺りも人の良さが窺えるなど、変に感心するゴジータだが……。

「……………ん？」

ふと、前方から影が見えた。もうすぐ日本に着くだろうという距離で、何かが此方に向かって突っ込んでくる。そこそこの速さ、ホークスには遠く及ばないだろうソレは、ゴジータに向かつて一直線に突き進む。

(なんだ?)

挙動も何処かおかしい。明らかに普通じゃないソレに目を凝らした瞬間……………。

「ピギユアアアアアアアアツ!!」

剥き出しの脳を晒す、翼を持つ黒い怪物が襲ってきた。



「はい。本日の勉学工程は全て終了です。お疲れ様でしたオールマイト」

「ぶはあ。つ、疲れたー……」

都心にあるオールマイトとゴジータが共有しているヒーロー事務所、その一室で教員試験に備えての勉強がサー・ナイトアイの主導の下で行われていた。

嘗てオールマイトのブレインとして活躍していたナイトアイ、その知識の深さは教員関係に關してもずば抜けており、オールマイトの教員資格試験に充分過ぎる程の助けとなっていた。

ただし、資格取得までの期限が短い事から彼から下される内容はスパルタの一言に尽きており、体は殆ど動かささないのにオールマイトは既に精神的に満身創痍となっていた。

「これで、一通りの内容はこなしました。後はオールマイト、あなた次第です」

「ありがとうナイトアイ、君には助けて貰つてばかりだ」

笑い合う二人の間に、既に嘗てのような蟠りはなかった。オールマイトの身体はゴジータが造つた奇跡の様な豆を定期的に食している事で徐々に快復していき、今では週一であれば油モノの料理を食べられる程になっている。

加えて、根津校長の提案を受けて次代の後継者を探す事を決めたオールマイトは、既に分身の背負う荷物を下ろす準備を始めている。サイドキック時代から遡つても、ここまで穏やかな日々を送れたことはなかっただけに、ナイトアイの表情も何処か明るかった。

それを齎したのがあの問題児だというのが、僅かな不満点ではあるのだが……いや、今は素直に感謝しよう。

「しかし、彼も随分と名が広がったモノだ。エジプト、ドイツ、イギリス、フランス、オーストラリアにアメリカ。既に幾つもの国々がゴジータというヒーローを認知している」
「奴の実力は、インターン時代から既に異次元でした。奴が世界的に有名となるのはある意味必然と言えるでしょう」

「本人はそのつもりはなかったみたいだがね」

ナイトアイから渡された甘めのコーヒートを啜り、快活に笑うオールマイト、実際ゴジータはヒーローさながらの名声に固執はしておらず、生活が出来る給料と鍛練できる

場を確保できればそれで良かった人間だ。

それが、今では日本の代表的ヒーローの片割れで、世界的に認知されつつあるヒーローだ。相棒の躍進にオールマイトは嬉しさと寂しさで中々の複雑な心境を抱いていた。

「私と彼のコンビの解散まで後少し、次の代へOFAを継承してその成長を見届けた後、でしゃばる事なくひっそりと表舞台から消えるとしよう」

まだ次の継承者の目処はないが、次代のヒーロー達が集う嘗ての母校なら、トップヒーローの卵が見付かるかもしれない。そうなればいよいよ自分の役割は終わり、ヒーローに拘る理由もなくなる。

後は次代のヒーロー達を育てる一助になれるよう、ひっそりと自分なりの活動を続けるだけ。これ迄のヒーロー活動を思い返したオールマイトは、その時が来るのを楽しみにしていた。

「——悔しいですが、オールマイトを変えたのは奴のお陰です。ですが、そんな奴もヒーローとしてはまだまだ未熟な点が多い。奴を真のNo.1ヒーローに育てる意味でもオールマイト、貴方の力を貸して欲しい」

「はは、相変わらず手厳しいな。そう言いつつも君も彼の事は認めているんだろ？」

「……………ノーコメントです」

眼鏡をかけ直し、ソツポを向くナイトアイにオールマイルトはそう言う所だぞと笑みを溢す。

と、そんな時だ。オールマイルト達のいる部屋は現在の時刻は夜の為にカーテンが引かれている。閉ざされたカーテンの向こうからコンコンとガラスを叩く音に気付いた二人は、何だと顔を合わせてカーテンの前に立つ。

今にして思えばこの時、ナイトアイは個性の未来視を使うべきだったのかもしれない。

何せ……。

「あ、オールマイルト。悪いけど、コイツ調べるの手伝ってくれない？　なんかコイツ、ピギャーしか喋れないみたいでさあ」

「び、ピギイイイ……。」

「ええええええ!!　なにになになになにー!!?」

脳髓を剥き出しにした明らかに普通にやないヴィランの首根っこを掴んだゴジータが、これ迄の余韻をぶち壊してしまうからだ。

「コイツ再生の個性持ちみたいだけど、何だかそれだけじゃあないっぼくてさ。オールマイルト……: トツシーは確か知り合いに警察の人いたでしょ?　何とか連絡取れない?」

「え、ええー……、でも、なんか彼(?)が、凄く怯えているみたいけど?」

「アメリカから帰る途中で遭遇してき、俺を見付けるや否や襲って来たんだよ。で、仕方ないから応戦して、数発殴ったり斬ったりしたら大人しくなった」

「ピギイイ! ピギユウウウ!」

「いやこれ絶対怯えているでしょ。もー、またやり過ぎたでしょゴジータ。いつも言っているじゃないか、ヴィランが相手でも手加減はちゃんとしなきゃって」

「いや、してたんだって。しててもこうなったの」

「えー? 本当?」

「本当だつてー。て言うか、コイツ本当に何なんだろ? ナイトアイは何か知って……」

「この……この……!」

「ナイトアイ?」

「報連相はいつも迅速にしなきゃって、言ってるでしょうが!!」

後に、連絡を受けて駆け付けた塚内直正はゴジータを見て思う。

うん、コイツは間違いなくNo.1ヒーローだわ。

記録10

「ス——フ——」

滴り落ちる汗を拭いもせず、男は部屋の中央にて立ち尽くす。目を閉じ、空想に浸りながらイメージするのは無数の影達。

それは、宇宙の帝王だった。

それは、完全なる人造生命体だった。

それは、宇宙を恐怖に陥れる魔人だった。

それは、邪念の集合体だった。

それは、幻魔の怪物だった。

それは、伝説の悪魔だった。

どいつもこいつもふざけた力を持ち、悪鬼羅刹という言葉では足りない程の凶悪さを秘めた化物達。そんな奴等を率いる様に、七つの宝玉を埋め込んだ邪悪なる龍の頭目は
嗤う。

絶望。そこに一切の希望はなく、欠片程の慈悲もない。正しく、巨悪。しかし、そんな彼等を前にしても空想の中の男は怯まない。

『そんなじゃ、いつちよいくぜ！』

不敵に笑い、黄金の炎を纏つて絶望達に相對する。嗚呼、これこそが自分の憧れ。自分が目指す天下無敵のヒーロー。

【ゴジータ】。その名に恥じない男になる為、後藤甚田もまた戦う。眼前に現れるのは、一つの銀河を壊滅に追いやった伝説の悪魔。翡翠と金が混じつた闘気を滾らせ、その悪魔は嗤いながら自分に指を差してくる。

『先ずは、お前から血祭りに上げてやる……！』

恐怖と狂気を撒き散らす破壊の権化。圧倒的とも呼べる存在に對し、甚田もまた不敵に笑う。

上等。此処で怯めば、自分は一生彼に追い付けなくなる。追い掛ける事が出来なくなってしまう。それだけはあつてはならないと、迫り来る暴威を前に後藤甚田は正面から戦いを挑んだ。



「ふいー、良い汗かいたー」

「お疲れゴジータ、はいジューズ」

「お、サンキューオールマイト」

地下室でのトレーニングを終え、リビングに戻ってきたゴジータをオールマイトが迎える。投げ渡されたジューズ缶の蓋を開けて一息に飲み込むと、口の中に仄かに甘い柑橘類の風味が満ちていく。

冷たい飲み物に喉が潤おうと、ゴジータは体力の回復を実感しながらソファアームに座る。

「しかし、折角のお休みなのに鍛練だなんて……本当にストイックなんだね君は。もつところ、他に趣味とかないの？」

「人助けを趣味にしているオールマイトが言う？ 良いんだよ俺はこれで。そもそも鍛

練に没頭したくてこの田舎を選んだ位なんだし、体を鍛えることこそが俺にとつての休日なんだよ」

実際、最初の頃はヒーローとして誰かを助けることよりも、後藤甚田はゴジータとして常に強くなる事を目標としていた。我ながら利己的な理由だが、彼の名を名乗り、彼の力を持つ以上、余所見をしている暇はないと思つたからだ。

そんな彼も雄英の学生として日々を過ごし、同級生や先生方、他のヒーロー達の在り方を知つて、その求道者染みた思考を徐々に軟化させ、今のような感じへと変わつていった。

施設の恩師も「変わったね。良い意味で」と安堵し、施設の他の子供達も何処か安心していた様子だった。

様々な経緯をへて自分なりのゴジータを貫く事を決めた後藤甚田だが、それはそれとして体を鍛えるのは楽しくて止められず、今日も休日の日に鍛練に没頭してしまつていた。

オールマイトから出てくる言葉もそんなゴジータを案じての言、故にゴジータは不愉快に感じることもなく、心配するなといった感じでは応えた。

「そうかい？ 君が言うなら納得するけど……あまり、無茶はしないでくれよ？ 万が一君が倒れたら、ヒーロー界の損失だ」

「そんな時はオールマイトの出番、てな訳だ。悪いな、折角の引退時を引き延ばしちゃうて」

「コラ、そう言うことは冗談でも言わないの」

ゴジータの冗談にオールマイトは僅かな怒気を滲ませるが、彼自身それが冗談であることは分かっている為に、程々で済ませているが……此処にサー・ナイトアイがいればゴジータのふざけたユーモアのセンスにそれはもう怒り狂っていた事だろう。

「つと、冗談と言えば例の脳ミソ剥き出しのヴィラン。あれから何か進展あつた？」

先日、アメリカから帰還する際にゴジータが遭遇したという脳ミソ剥き出しの黒い怪物。翼を生やしていたりして明らかに普通じゃない状態のヴィランに、ゴジータは何の冗談だと思った。

その後、軽くあしらった後に無力化させて捕縛。一先ずオールマイトの知り合いという塚内警部に連絡をして、事情を話し、暴れる様子がないことから連行。現在はその実態を調べている最中なのだろうか。

「今の所はなにも。ただ、君が倒したあのヴィランは我々の間で『人造ヴィラン』と仮称される事になったそうだ」

「『人造ヴィラン』？ そりゃまた意味深な。じゃあなにか？ アレって人工生命体か何かなのか？」

「いい線行ってるぜゴジータ。その通り、現在あの人造ヴィランなる個体は何者かの手によつて手が加えられた……その名の通り人造のヴィランらしいんだ」

「おいおいマジか。何処の闇の組織が動き出したんだ？ R & Rか？ レッドリボン それとも生き残りのツフル星人の仕業？ はたまたシヨツカーか？」

「うんゴメン。全く分かんないや」

やや興奮気味に話すゴジータだが、彼の口にしてている組織に何一つ心当たりのないオールマイトは困惑するしかなかった。ともあれ、これで先の襲撃は何者かによる意志が働いていたことは間違いない。

「現在、塚内君達警察の方々が都心を中心に怪しい動きをしている輩がいなか調査中との事さ。君にも後日改めて詳しく話を聞かせて欲しいとの事だけど……」

「それくらいは全然構わないさ。俺達の代わりに情報を足で稼いでくれてるんだ。俺の情報で僅かでも助けになるなら、喜んで協力するとも」

普段からヴィラン退治や自然災害に備えて活躍しているヒーローは、組織的に動くヴィラン達に対してどうしても受け身に回る事が多い。そんなヒーロー達の欠点を埋めるように、各国家の警察組織はヒーローと協力体制を築いている。

警察組織特有の大海戦術を以て調査、情報を精査する事で敵組織の所在を掴み取り、ヒーローと結託してこれに対処する。そんな組織の垣根を超えた協力と言うのが、割と

甚田にとって熱いものを覚えるモノだった。

——因みに、ゴジータもオールマイトも大抵は一人で片付けてしまう事が多いので、そういう話をした事は殆どない。特にゴジータは同期達の警察と協力してヴィランを捕まえたという話に指を唾えて羨ましく思っていたりしている。

閑話休題。

「……さて、そろそろ私も行くとするよ」

「ああ、そう言えば来週からだっけ？ 雄英に行くのは」

リビングに並べられた荷物の数々。それはオールマイトが此処に来る際に持ってきたモノ、ゴジータとチームを組んで数ヶ月。その荷物の中にはこれ迄の日常の思い出も詰まっていた。

「ああ、ナイトアイの協力もあって無事に教員免許はゲットした。次の春からはいよいよ私も先生デビューさー！」

ナイトアイのスパルタ指導によって、無事にオールマイトは教員免許を取得。能力的に新米教師である彼は、次の春から晴れて副担任を任せられる事となった。自分の後継を探す為、教師になることを決めたオールマイト。そんな先輩兼相棒の新たな門出にゴジータも笑顔で見送る事にした。

「筋肉ムキムキのマッコが先生とか、生徒達萎縮しちゃうんじゃないの?」

「止めなさい。実はちよつと気にしてるんだから」

笑い合う二人、出会ってから今日まで一年と経っていない間柄なのにその関係性はまるで古くからの戦友を相手にしている様だった。互いにNo. 1の座に至った者同士、初めて体験した助け合う間柄に互いが親友の様に思っていた。

「ありがとうゴジータ、君には本当に世話になつてばかりだ。本来なら私が色々と手助けするつもりだったのに」

現在、とある巨悪のヴィランがオールマイトの体に負わせた深い傷。胃を摘出し、呼吸器官の大部分をやられた彼の体は、ゴジータが造った仙豆擬きのお陰でかなりの快復を遂げる事になった。

体つきは前より太くなり、抉られた傷の痕も大分薄くなっている。血反吐も吐くことはなく、体格も前より少しずつ大きくなっている。

そんな経過に伴い、活動時間なるオールマイトの制限時間も大幅に改善され、その力も全盛期程でないにしろ復活の兆しを遂げている。

その結果、一度は袂を分かった友と和解を果たし、新たな関係性を築く事が出来た。最初は自分がお節介を焼くつもりだったのに、これではまるで逆ではないか。

しかし、それを恥とは思わない。何故なら……。

「言っただろオールマイト、余計なお世話は——」

「ヒーローの本質。だったな」

彼も——ゴジータもまた、オールマイトとの出会いに感謝をしていたからだ。ヒーローとして未熟である自分が、ふとした切っ掛けでN.O.1になってしまった。

そのしがらみを枷にせず、自分なりのヒーロー像を見いだす切っ掛けを与え、未熟な自分を支えてくれたヒーローとしての大先輩。

ゴジータもオールマイトと同様に感謝をしている。だから……そろそろ、この関係性も一度終わらせる事にしよう。

オールマイトが教師になれば、必然的にヒーローとしての活動は自粛せざるを得ないだろう。その代わりを担うゴジータはそんな人々の不安を一身に背負い、その期待に応えなければならぬ。

けれど、彼ならばその重圧すらも軽く背負ってしまう事だろう。オールマイトは、今も余裕の表情を浮かべている。ゴジータに確信している。

故に、このチームは此処で終わり。寂しくもあり、惜しみはするが……後悔はない。

「じゃあ、頑張れよ、N.O.1！」

「そっちもな、N.O.2！」

来た時と同じ様に握手を交わし、家を出るオールマイトを見送る。互いに僅かな寂しさを残す一方……。

「まあ、会おうと思えば秒で会えるんだけどね」

「いや空気読んで!?!」

中々台無しな事を口走る。

その後、田舎の農家や近所の方々に野菜やら果物を大量に受け取ったオールマイトは、そのまま電車に乗り、自身の新たな戦場に向かうのだった。

「……………さて、俺ももうひと頑張りしますか」

そんな相棒の背中を見送ると、ゴジータは地下室へ戻り鍛練を再開するのだった。



——そして、春。新たな時代の訪れと人の出会いを予感させる季節に差し掛か

り、日本は大きく動き出そうとしていた。

「『没』個性処か『無』個性なお前に、一体何ができるんだ!? ああ!」

「それを決めるのはかつちゃんじゃない、僕自身じゃないか!」

ある者は憤り、ある者は足掻き。

「はあ……ああ、ダメだ。俺には出来ない。ゴジータ、お前の理念、理想は俺には眩しすぎる。偽物が蔓延るこの社会で、偽物を信じるなんて事は……俺には出来ない! だから、早く! 俺を殺しに来てくれ、ゴジータアアアアツ!!」

あるものは嘆き、憂い、血を流す。

「……平和の象徴、希望の象徴。どっちも目障りで鬱陶しいな」

ある者は静かに憎悪し。

「いいね。あの個性、是非とも欲しい」

ある者は不気味に嗤う。全てをこの手に、何もかもが己の為だと自負する自己の化身。

全てに嗤い、全てを嘲笑うその者の潰れた視線の先には……………。

『さあ、再び来ましたこの男！ 初登場にして全ての話題をかつ浚った次代のニューヒーロー！ まぐれと囃し立てられたこの男の実力を疑うものはもういない！』

薄暗い闇の中で、一際輝く黄金の炎。その主の名は……………。

『チームを解消し、休止明けも変わらず絶対好調！ 新たなN o . 1！ 【超】ヒーロー、ゴジータアツ!!』

大歓声の上がる客席の向こうで、次代のN o . 1の拳が天を衝く。

それは、どうしようもなく時代の流れを現している様で、男の目にはこの上無く滑稽に見えた。

記録 1 1

“個性” それは、人間が進化という形で発現したとされる異能。光を発したり、氷を操ったり、炎を操るなど、その能力は多岐に渡る。現状、世界の総人口の八割が何らかの個性を持つとされている個性社会にて、一つの職業が注目を浴びた。

【ヒーロー】。人々の安心と安寧を守る超常の存在は日常の存在となり、人々はその姿に憧れを抱いた。その一方で個性を己の為にだけに悪用し、人々に害を成す者は【ヴィラン】と呼ばれた。

そして、今日もまたヴィランの脅威が無辜の人々に牙を剥こうとして……。

「ゲハアツ!!」

虚しく、宙を舞った。

顎を打ち抜かれ、失神したヴィランの男。仲間の一人が一撃で倒された事に戦慄するが、彼等の目は一人の男に釘付けにされていた。

「な、なんだよこの強さ、反則だろっ!」

眼前に佇む黒髪黒目の男。独特の衣装に身を包み、不敵な笑みを浮かべるその男は、あのオールマイトを超えて新たに君臨するNo. 1ヒーロー。たった一発、拳の一振りです。でノされた仲間には他のヴィラン達は動揺する。

目の前のヒーローは自分達というヴィランがいるのにまるで本気を出していない。奴が黒髪である事が何よりの証拠、明らかに自分達を舐めているその態度にヴィランの一人が声を荒げる。

「ふざけんなッ！ たかがヒーロー一人に、此処まで虚仮にされて黙っていらられるかアッ！」

異形の男が、振り上げた拳に力を込めてゴジータに向けて振り下ろす。危ない！ そう野次馬の一人が叫ぶが、普段なら余裕で避けられるそれをヒーローは敢えて正面から受け止める。

ゴッ。

鈍く、重い衝撃と音が周囲に響く。人の頭蓋骨を粉碎して余りある余力の一撃、それが直撃したヒーローに野次馬達はまさかと青ざめ、ヴィランの男はニヤリと嗤う。

が、その嘲笑が次の瞬間には凍り付く。

「——これで終わりか？」

「ッ!？」

「なら、今度は此方の番だな」

致命傷どころか傷一つなく、静かに睨み付けてくるヒーローに、ヴィランは絶句する。喜悅から恐怖に変わるヴィランに対して、ヒーローの男が抱くのは勝利に対する確信……なんて、そんなモノではなかった。

避けてしまったら後ろの野次馬達に衝撃が当たる。それを危惧して敢えて受けを選んでしまった事への反省、これなら普通に迎撃すれば良かったと、自分の行動に対する振り返りを行っていた。

とは言え今はヒーロー活動中、余計な考えは後にしようと思つて気持ちを切り替え、ヒーローは瞬時に加速する。その周囲の光景を置き去りにして、ヒーローだけが駆け抜ける。

それは周囲にはヒーローの姿がぶれるように見え、目の前のヴィランにはヒーローが何人にも分裂し、地面を滑っている様に見えた。

—— 気付けば、ヒーローはヴィランの背後に立っている。何が起きたのか、それを把握して認識出来るものなどいるはずもなく、衝撃だけが周囲に轟いた。

大男のヴィランが仰向けに倒れると、その体には無数の拳の痕が出来ている。拳の痕、あの一瞬の内に無数の拳を叩き込んだのだと、それを周囲の人々が理解するのに数秒の時間を要する事となった。

「……さて、まだ暴れ足りない奴がいると言うのなら、俺が相手になるが?」

睨みながら続けるかを訊ねるヒーローに対し、ヴィラン達がそれ以上暴れる事はなかった。戦意を折られ、無抵抗になった所へ駆け付けた警察達が拘束していく。其処まで来て漸く事件が終息したのだと理解した野次馬達が一斉に歓声を上げた。

「すげえよゴジータ! 何やったのか全然分からなかった!」

「これが、新しいN.O. 1ヒーローの実力ッ!」

「超ヒーロー! ゴジータ!」

歓声を上げる野次馬達。本当なら大人しく避難して欲しかったし、なんなら今からでも指摘してやりたかったが、生憎と其処までの余裕は残されていない。

拳を上げて簡単にファンの人達に比べると、ヒーロー——ゴジータは白い炎を纏ってその場から跳躍。次の現場に向けて飛翔する。

活動再開から数ヶ月。N.O. 1の座を勝ち取ったゴジータは既にオールマイトとのチームアップを解消し、改めて単独での活動を続けている。

つまり、今回のN.O. 1ヒーローの座は間違いなくゴジータ自身の實力によるもの。改めて君臨する新たなN.O. 1ヒーローのその實力が確かなモノだと証明すると、日本中の人々は認める他なかった。

日本の新たなN.O. 1ヒーロー、【超】ヒーローゴジータ。彼の今後の活躍に日本中が

注目していた。

しかし、そんなゴジータだが先のNo. 1ヒーローであるオールマイトとは、明らかに異なる点がひとつある。

それは………。

「——ん？」

「此方に、此方に来るんじゃないやねえっ!!」

眼下の街から聞こえてくる男の声。巨大化の個性を持つらしきヴィランの男は線路上で吠えながら周囲のヒーロー達に威嚇している。

介入するべきか？ 否、周囲を見渡すとすぐにそれは違々とゴジータは判断する。

何故なら——。

「キャニオンカノンッ！」

この日本にも、自分以外のヒーローは存在しているからだ。巨大化したヴィランよりも更に大きな巨大なヒーロー、彼女がヴィランを蹴り倒す所を確認するとゴジータは改めて現場へと急いだ。

そう、この日本には自分以外にもヒーローはいる。自分とオールマイトが活動を休止していた間にも、ヴィランに対する抑止力として奮闘していたヒーロー達は今も活動している。それを知るからこそ、ゴジータは人々の柱としてではなく一人のヒーローとし

て道を進むことが出来るのだ。

……まあ尤も、その貪欲な活動精神故に他所のヒーローの活躍を奪ってしまう件も多々あるが、こればかりは仕方がない。その辺の問題は今後の委員会に任せるしかないだろう。

と、そんな風に諸々を割り切ってヒーロー活動を続けていると、突然の怒声がゴジータの耳朵を叩いた。

「何のつもりだゴジータッ！」

「うお、ビックリした」

次の現場でのヴィラン退治を終え、一度事務所に戻ろうとした所、ふと、ヒーローがいない所で暴れているヴィランが目についたので、道中ちよつとした寄り道気分で倒してみたのだが、今回は介入した場所が少々不味かった様だ。

恐る恐る振り返ると、燃え盛る業火が取り巻きのサイドキックを引き連れてゴジータを睨み付けている。うげえ、と顔を歪ませるゴジータを気にも止めず、紅蓮の炎の男はズカズカと歩み寄ってくる。

「俺の管轄で無遠慮な介入は控えろと、以前から話していた筈だが？」

「いや、たまたま今回は目についただけだ。周囲にヒーローがいなかったし、被害が拡大する前に終わらせようかと思って……」

「余計な世話だ」

N.O. 3、「フレイムヒーロー」エンデヴァー。燃え盛る炎を武器に戦うこの男だが、どうにもゴジータは目の前の男が苦手だった。初めて会ったのは巨大隕石が落下してきた時だったが、公式で対面したのは初めてヒーロービルボードに自分の名が刻まれた時……即ち、ゴジータがN.O. 1ヒーローになった時だ。

あの頃から、妙にこの男から敵視されているような気がしてならない。ヒーロー稼業は競争率も高いことから他のヒーローをライバル視する事も多々あるから、ある程度のギスギスした関係は仕方ないと学生の頃から教わってきたが……目の前のこのヒーローからは明らかにそれ以上の感情が込められている気がする。

別に仲良しこよしの友達になろうとは言わないが、多少のお節介くらい大目に見ても良い気がする。オールマイトとチームを組んでいた時も矢鱈と噛み付いて来たし……。

オールマイトは彼は向上心の塊だからと、なあなあで済ませていたが、明らかにこれは普通じゃない気がする。何せ、ゴジータから見れば其処らのヴィランより目の前のこの男の方が余程恐ろしい存在に見えたからだ。

「はいはい。悪かったな余計なお世話で、すぐに街から出ていくから余り吼えるなよ」
「貴様………っ！自分が若輩の立場だと言うことを分かっているのか!？」

「生憎と、俺はヒーローに年功序列を持ち込まない主義でね。あ、バーニン。このヴィラ

ンの事よろしく」

「あいよー」

「無視するな貴様アツ！」

一先ず、ノしたヴィランの後始末をエンデヴァアのサイドキックに託し、ゴジータはその場を立ち去ろうとする。相変わらずエンデヴァアは吼えているが、それが礼儀を重んじている彼なりの対応なのだろう。

とは言え、彼の場合は少々熱を入れすぎている気もする。他のヒーロー……例えば、ベストジーニストなら叱るというより諭す様に注意するから此方も聞き入れやすいし、エッジシヨットやホークスは波風を立てないように然り気無く指摘してくれる。

それに比べるとエンデヴァアのそれは頭ごなしに否定してくる頭の固い教師のようで、どうも好意的に見えなかった。まあ、ヒーローも人間である以上相性の良し悪しはあるだろうと、ゴジータは適当に受け流してその場を後にしようとするが……。

「フンツ！ 相変わらずの無礼者だ。親の顔が見てみたいな！」

「……………」

その一言にゴジータの足が止まる。明らかに彼の空気が変わった事に、周囲のサイドキック達は動揺し、目を覚ましたヴィランすら怯え始めていた。

「——おい」

「むッ」

「お前、自分の喧嘩に他人を巻き込む口か？」

頭髪を明滅させながら睨んでくるゴジータに、流石のエンデヴァーも口を閉じた。

「……………邪魔したな」

そんなエンデヴァーを一瞥し、ゴジータはそれ以降口を開くことなく跳躍。音速を超えて飛翔する。

（あー、今のは不味かったな。ヒーローとしてもゴジータとしても赤点、俺も沸点低いなあ）

事務所に戻る途中、ゴジータこと後藤甚田は自分の沸点の低さに自己嫌悪を募らせるのだった。



——その日、武闘派ヒーローとして知られるデステゴロはヒーローとして一つの岐路に立たされていた。

それはまだ彼が駆け出しだった頃、ヴィランとの戦いに慣れ始め、漸く自分のヒーロー事務所が建てられそうになるかという時期。デステゴロはある災害救助に召集されていた。

それは、崖崩れにより一つの町が丸々呑み込まれそうになるという場面。僅かでも対応が遅くなり、判断を誤れば多くの犠牲が出てしまう土壇場。最悪の事態を想定して避難誘導を優先させようとした時だった。

溢れ出る土砂崩れに崖崩れ。濁流が押し寄せてくるその光景は、パワー系の個性を持つデステゴロですら死を予見させた。圧倒的災害を前に成す術はないと、絶望するしかなかったあの時、奴は現れた。

逆立った金髪、黄金に眩い炎を纏い、災害の前に一切怯むことなく当時まだ少年だった彼は、たった一発の蹴りで状況を変えてしまった。

荒れ狂う濁流の流れを変え、土砂を吹き飛ばし、崖崩れを細切れにする。圧倒的という言葉では足りない力を前にデステゴロは呆然とその背中を見続けた。

臆て、事態は無事に終息し、災害規模の割に被災者を誰一人出さなかった奇跡的な事例。そんなオールマイイトでもなければ不可能に近い偉業を成し遂げた少年は、仮免許すら取得していない学生だと知られると、先輩ヒーロー達に叱責されていた。

そんな彼等を見て、デステゴロは自分が恥ずかしくなった。本来なら誰よりも自分が矢面に立たなくてはいけないのに、その所為で彼が代わりに立ったというのに、なぜ彼が責められなければならないのだ。

叱咤されるべきは自分達だ。だからデステゴロは少年に頭を下げた。申し訳ないと、自分達がやるべき事なのに、君に迷惑を掛けてしまったと、デステゴロは頭を下げる事しか出来なかった。

そんな彼に、後のNo. 1ヒーローは……。

『……まあ、取り敢えず被害者とかが出なくて良かったです』

なんて、笑ってみせた。本当は今頃、英雄の体育祭に出て活躍する筈だったのに、自分の為ではなく誰かの為に動いた後藤甚田に、デステゴロは歯を食い縛って湧き上がる感情に耐えるしか出来なかった。

あれから数年、現在デステゴロの前にはヴィランに取り込まれそうになっている少年が、腕き苦しんでいた。

ヴィランが暴れている場所はとある商店街。既に被害は周囲の建物を巻き込み、火災

となつてより被害を拡大させていく。

助けてやりたいが、少年の個性は近付くモノを吹き飛ばす爆破の個性。迂闊には近付かず、また他のヒーロー達も撒き散らされる火と相性が悪く、状況を打破出来ないでいる。

そんな中で、デステゴロが出した決断は……。

「お、おいデステゴロ！ 何をする気だ!？」

「決まつてる、少年を助けるんだよ!」

「止せ、お前もただじゃ済まないぞ!」

制止するヒーローの声を振り切つて、デステゴロは泥のヴィランに肉薄する。

「俺に、近付くんじゃねえよ!」

押し寄せる爆破の嵐。その強力な攻撃にデステゴロは苦悶の声を上げそうになるが……笑つて堪えた。

（怯んでんじゃねえよデステゴロ。此処で体を張らないで、何のために体を鍛えてきたんだ!）

自慢の図体のデカさで押し通り、ヴィランに捕まつた少年の腕を掴む。折らず、包むように優しく握り、ヴィランから引き剥がそうとするが……ヴィランの引き寄せる力もまた強かった。

「離れろって、言ってるんだろぅがああ!!」

「ンンンンンンンンンンンんっ?!?!」

ヴィランが暴れ、少年が抗う。その最悪の悪循環が爆破という形となつてデステゴロの肉体を襲う。周囲に被害が出ないよう、自分だけに焦点を当てるように。

「何やってんだよデステゴロ! そのままじやお前が!」

（分かつてるよ。俺のやつてゐることはバカな事だつて! でも、見ちまつたもんは仕方がないだろ!）

ヴィランに抗う少年の、助けを求める顔。あれを見てしまつたら、もう………ヒーローとして動かない訳にはいかない。

（堪えろデステゴロ、一番キツくて辛い思いをしているのは俺じゃない、目の前の少年だろうが!）

だから、掴んだこの手は離さないと、迫る爆破に今一度歯を食い縛ろうとして………。「うわああああっ!!」

一人の少年が、自分の前に割つて入ってきた。突然の介入者に目を見開くデステゴロ、しかし彼が投げ飛ばしたカバンがヴィランの目に当たり、怯んだ拍子に少年を縛る拘束が緩んだ。

「うおっしやああっ!!」

その一瞬の隙を見逃さず、デステゴロは少年の体をヴィランから引きずり出す。一瞬の虚を突かれ、強個性の隠れ蓑を取られた事に、泥のヴィランは分かりやすいくらいに激昂する。

「て、テメエエエ！ そのガキを渡せエエッ！」

「そんな、事は——」

「そう、させないとも!! 何故って——」

瞬間、伸びるヘドロヴィランの手がデステゴロと爆破の少年に伸びようとした瞬間。

「私が来たッ!!」

彼等の前に、その男は現れる。嘗てはNo. 1ヒーローとして知られNo. 2に落ちようとも、その在り方は何一つ変わらない不撓不屈の最高のヒーロー。

オールマイト。平和の象徴として知られる彼の拳はヘドロヴィランを吹き飛ばし、天候すら変えてしまう。

そのデタラメな超パワーはあの日の少年の背中と被って見えて……。

(はは………また、助けられたな)

デステゴロは、意識を手放した。

「あれ？」

気付けば、其処は病院の一室だった。ここ最近はみていなかった病院の天井に目を瞬かせると、デステゴロは起き上がり周囲を見渡した。既に空は赤い夕焼けに染まっている。

「よお、目が覚めたかよ」

「バックドラフト、あの後、状況はどうなった？」

「アンタなあ……はあ、まあいいか」

扉を開けて入ってきたのは、あの場にいたヒーローの一人であるバックドラフト。その様子から事の顛末を知っている様子の彼に、デステゴロは訊ねた。

自分の事よりも優先するその根性に呆れながら、バックドラフトは説明をした。

顛末は何てことない、No. 2の活躍により事態は解決され、ヴィランは捕まり少年は無事に家へと帰っていった。しかし、その話の中には欠けているものがあると、デステゴロは追求する。

「あの少年は、現場に出てきた緑髪のソバカスの少年は、どうした？」

「ん？ ああ、あの子供か。勿論叱り付けたよ、一介の子供が介入する必要はないと、子

供の頃から分かっている筈の常識を淡々とね」

「———そうか」

バックドラフトの何気ない言葉に、デステゴロは申し訳ない気持ちで一杯だった。全ては、自分の力不足で起きた不始末。自分達が不甲斐ないからこそ、あの正義感の強い少年を危険な場面に立たせてしまった。

勿論、一般論で言えばバックドラフトの言葉こそが正しいし、間違つてはいないのである。けれど、ヒーローを名乗っている以上、理屈だけでは通せない。

だが、倒れて一番足手まといとなつた自分には、その事を言及する資格はない。相変わらず、自分は三流だたと自己嫌悪に浸りながら………。

「———いつか、謝れるといいな」

ベッドの上から見える街並み。この街の何処かに住んでいるであろう少年の事を思いながら、デステゴロの一日は終わっていくのだった。



「ふー、今日も取り敢えず無事に乗り越えられた。明日も早いし、そろそろ帰ろうか」
時刻は既に夜の時間帯へと差し掛かり、眼下の街並みには人々の生活の光が灯っている。此処からは他のヒーローに任せようと、ゴジータは自宅への帰路を指すようにして。

懐にしまった携帯から着信音が鳴り響く、それはこのヒーロー活動の中で出来た新しい友人であり、ゴジータも最も偉大と知るヒーローの大先輩からのモノだった。
何だろうと不思議に思い電話に出ると……。

「オールマイト、お疲れさん。そっちは何かあったのか？」

『ゴジータ、見付けたよ』

その声は、何処か喜んでいるような、寂しいような、複雑な声音に聞こえた。

『——次代の、後継者を』

記録 12

超常社会。世界の総人口の八割が何らかの個性を持つとされ、超常が日常となった世界。緑谷出久はそんな個性社会の中において残る二割に該当する個性無しの人間として生まれ落ちた。

周囲が次々に何らかの個性に目覚めるなか、一人「無個性」の烙印を押された少年の心境は計り知れない。しかし、それでも少年は憧れを諦める事は出来なかった。

【ヒーロー】。己が個性を武器に戦い、あらゆる脅威から人々を守り、救う正義の味方。恐れを知らず脅威に立ち向かい、笑顔で誰かを救うその姿に……少年はどうしようもなく憧れた。

無個性の自分と、ヒーローに憧れる自分。夢見がちだと笑われ、虐げられてきた少年は一時その夢を諦めた方が楽になると、心が折れ掛けた時があった。

そんな時、彼の言葉を聞いた。長らくNo.1ヒーローだった平和の象徴を超え、無名から一気にヒーロー達の頂点に君臨した新たなNo.1ヒーロー。

泣いても良い、悔やみ、挫折し、膝を折っても良い。其処から立ち上がる事が出来れば、それだけで人は英雄ヒーローになれる。そして、たとえその先にどんな困難の壁が立ち塞がったとしても、可能性という扉で抉じ開けてしまえば良い。そうすれば、無敵の自分に会えるのだと。

嬉しかった。無個性の自分でも、なりたいたいものを目指して良いんだって、そう言われた気がして……：気が付けば、少年は走り続けていた。

その日から少年は憧れるだけの自分から卒業し、憧れに近付けけるように努力を重ねた。ヒーローの情報を集める為のネットサーフィンの時間を消し、体力と筋力を付ける時間を作り、増やした。

そんな突然の心境の変化を遂げた息子に困惑しつつも、母親は応援して可能な限り支えた。しかし、たとえ自分が変わったとしても周囲の人間達が変わる事はなく、寧ろ急に肉体改造を始めた無個性の学友に不気味ささえ覚えた。

特に、爆破という強個性を持った幼馴染みからの罵詈雑言の激しさは増していき、酷い時は教師の目が届かない所で暴行された。諦めると、無個性が夢を見てるなど、あらゆる暴言を叩き付けられた。

それでも、少年は諦めようとはしなかった。以前なら弱腰ですぐに下を向く少年が、この日初めて爆破の少年に牙を剥いた。自分の事を決めるのは他人ではない、自分な

だと、少年は口にした。

それからも続いた度重なる苛めにへこたれず、少年は自分を鍛え続けた。食生活を支えてくれた母のお陰で体つきは以前よりも太くなり、背も少しだけ伸びた。未だにソバカスだけが消えないのが悩みだが、それでも同年代より頭一つ程、体格に恵まれるようになった。

それでも、個性という壁は厚い。どんなに体を鍛えても、所詮は子供の付け焼き刃。平均よりも身体能力が上がったと言つても、所詮は平均よりも上というだけ。

爆破の少年は鍛えた少年を嘲笑うかのように、更に上へと昇っている。無個性の自分がどんなに鍛えても、爆破の少年は容易く凌駕してくる。そんな彼に爆破の少年は何度も罵つてきた。

どんなに鍛えた所で、無個性がヒーローになる事はない。そう現実を突き付けてくる幼馴染みに、少年はそれでも諦める事は出来なかった。まだ自分は、出会えていない。無敵の自分に………！

そんな日々が続いたある日、少年に転機が訪れる。幼馴染みの爆破の少年に自殺教唆紛いの事を言われ、流石に凹んだ帰り道、運悪くヴィランに襲われた少年は其処で運命の出会いを果たす。

【平和の象徴】。長い間人々の平和と安寧を守り、ヒーロー達の頂点に座していた男。 N

0. 2 になっても変わらない少年少女の憧れのヒーローが、少年の前に現れた。

堪らず少年は訊ねた。貴方のようなヒーローになれますかと、無個性でも、何の力も持っていないなくても、ヒーローになれますか。そう訊ねてくる少年に平和の象徴が口にしたのは——覚悟の問いだった。

命を懸けられるか？ 人を、誰かを救うことは即ち己自らも窮地に身を置くという事。襲い来る恐怖を笑って誤魔化し、それでも胸を張って立っていられるかと、既に薄くなった凄惨な傷痕を見せつつ、制限時間により些か小さくなった平和の象徴……：オールマイトは訊ねた。

少年は……：答えなかった。答えられなかった。力を持たない自分が、果たしてその責任ある場所に立てるのか。ヒーローを目指す以上決して避けられない現実を前に——終ぞ、少年はオールマイトの問いに応えられる事はなかった。

やはり、自分はヒーローになれないのだろうか？ 鍛え初めてから敢えて考えてこなかった疑問、憧れのヒーローに現実を突き付けられ、意気消沈した少年はその時、ある騒動に気付いた。

商店街が燃えている。燃え盛る炎の中心では先程オールマイトが捕まえた筈のヴィランが暴れまわっていた。何故、どうしてと思考を巡らせている内に少年は一つの答えに辿り着く。

——僕の所為だ。

あの時、立ち去ろうとするオールマイトに無理矢理掴まり、その所為であのヴィランを逃がしてしまった。自分の愚かな行いの所為で、関係のない人を巻き込んでしまった。

もう、少年は自分を責めることしか出来なかった。無個性で、何も出来ない自分。こんな自分が、誰かを助けることなど出来る筈もない。ごめんなさい、ごめんなさいと、口元を押さえて踞ることしか出来なかった少年は……ふと、見てしまった。

泣きそうな顔。恐怖と苦痛に表情を歪め、助けを求める幼馴染みの顔を見た瞬間——
—— 氣付けば、少年は走り出していた。

叫びながら暴れるヴィランとそれを体を張って止めようとするヒーローの間に割つて入り、背負っていたカバンをヴィランへ投げ付ける。運良く目に当てて怯ませた隙に幼馴染みを助けようと蹴く少年に、体を張るヒーローは笑みを浮かべて爆破の少年の救出に成功する。

直後、幼馴染みを奪い取ろうとするヴィランの前に平和の象徴が降り立ち、自慢の拳の一撃を以てこれを撃退。約一名のヒーローが病院に送られる事となるが、事件は無事に解決される事となった。

その後、飛び出したことを他のヒーロー達に叱られ、帰り道の途中でも幼馴染みから

良く分からない罵倒を受けた。あの後だというのにタフだと感心する少年だが、憤る幼馴染みに対して少年は晴々とした気持ちになっていた。

これで、夢を諦められる。これからは身の丈にあつた目標が持てると、生きていけると思つていた。これ迄の努力と母の献身を無駄にしてしまうけど、きつとこれで良かったんだ。

諦め掛けていた。きつとこれで良かったんだと、無個性の自分にしては頑張つた方だと、大人ぶつて夢を捨てようとした時。彼の前にオールマイトが現れた。

「お、オールマイト!? どうして此処に!? マスコミに囲まれていた筈じゃあ!」

「なあに、私に掛かれれば彼等を振り切る事くらい訳ないさ! ……それよりも少年、私は君に二つほど言わなければならない事がある」

「——え?」

「謝罪と提案さ。私は、君の事を見くびつていた。私の言葉を受け入れた君は、その上で誰かを助けようとする。その行いは誰にでも出来る事じゃない」

「で、でも僕の所為でかつちゃんを、皆を危険な目に!」

「それを言つたら私もそうさ。捕まえたヴィランを落として逃げられるなんて、嘗ての相棒に知られたら指を差されながら爆笑されるだろうさ。……でも、君はその責任から逃げなかつた。恐怖に立ち向かつた! あの時、私が駆け付ける迄の間、確かに君も

またヒーローだった！」

「ツ!!」

「だから改めて謝罪しよう、少年。そして訂正させて欲しい。君は——」

気付けば、少年の目から大粒の涙が流れ落ちていた。

「ヒーローになれる」

それは、少年が今までで一番欲しかった言葉。ごめんなさいと謝る母、無個性と罵る幼馴染み。無駄な努力だと思われてきたトレーニングの日々は………決して、無駄ではなかった。

これ迄の努力と、憧れの気持ちを認めて貰えた気がした。それが、どうしようもなく嬉しくて。

少年————緑谷出久はこの日、オリジン^原を得た。

そしてその日、平和の象徴であるオールマイトから見初められた出久は彼の個性を受け継ぐ為に彼の監修の下でトレーニングをする事になり。

「と、言うわけで、こちら特別ゲストのゴジータ君になります！」

「オッス、オラゴジータ。ワクワクすつぞ」

「ドベラツファアアツ?!?!」

待ち構えていたNo. 1とNo. 2ヒーローを前に、既に色々と限界を迎えていた。

「——で、あれが例の後継者って訳か」

「そう言うこと、どうだい？ No. 1ヒーローから見れば……」

とある浜辺の公園。無断に放棄されていた粗大ゴミの山を一人で片付けようと必死に腕く少年を見て、オールマイトは隣に立つゴジータに訊ねる。

「正直、不安しかないな。確かにあの歳にしては鍛えている方だが……同年代の子にはあれ以上の体躯を持つ奴はゴマンといる。中でも異形系統の個性持ちと比べたら、身体能力の差はダンチだろう」

そんなオールマイトに対してゴジータはただ冷静に、客観的に意見を口にす。確か

にあの年齢で彼処まで鍛えたのは見事と言えるだろう。憧れに近付きたい一心で努力を重ね、今も自分よりも一回り以上大きい冷蔵庫を一人で運んでいる。

その努力と根性は認めよう。

「中々手厳しい。けど、それだけじゃないんだろう？」

H A H A H A と笑うオールマイトに、ゴジータもまた笑う。確かに才能という点では目の前で足掻く少年は落第点も良いところだが、嘗ての相棒の話を聞いてそれだけではないとゴジータも理解する。

緑谷出久という少年は、良くも悪くもイカれている。自分の事を顧みずに誰かの為に危険に身を晒すなど、並みの人間に出来る事じゃない。

人を含めた生命体は、恐怖に対しては臆病になるモノ。それはどんなに訓練を施された人間でも例外ではなく、プロのヒーローだって恐怖に縛られる事はあるだろう。

けれど、緑谷出久という少年は恐怖に駆られながらも前に出た。偏に、助けを求める人を助けようとする為に……。恐らくオールマイトは其処にヒーローたる素質を見たのだろう。

ゴジータも、大体はオールマイトと同じ見解だ。あの緑谷出久という少年はヒーローとしての素質は充分備わっているだろう、その危うい所も師であるオールマイトが矯正するだろうし、自覚すれば自重も覚えるだろう。

仮に自重出来なくとも、その時は……まあ、自分がフォローに回れば良いか。

「ま、俺はあくまで見届けるだけさ。アンタの弟子である以上、俺が頻繁に手を出すのはちよつと違うと思うし」

「別に良いのに……じゃあ、彼を私の後継だと認めてくれるのかい？」

「認めるも何も、決めたのはアンタだ。俺はあの緑谷出久つてヒーローにちよくちよく余計な世話をするだけ、師弟仲良く二人三脚で頑張りな」

あくまで、緑谷出久はオールマイトの弟子。相棒の個性を受け継いで第二の平和の象徴として育ててるのか、それとも別の道として導くのかは二人の問題だから口出しはしない。ただ、一つだけ言えることがあるとすれば……。

「それよりもオールマイト、アンタこの事はナイトアイに伝えたのか？」
「……………」

止まった。ゴジータが危惧していたナイトアイへの連絡、それを怠っていたらしいオールマイトはいつぞやのゴジータよろしく笑顔のまま固まり、顔を逸らしていく。

「おい、まさかアンタ……話してないのか!? 嘘だろ、嘗てのサイドキックでこの間仲間直りしたばかりなんだろう!? 何で俺より先に伝えてねえんだよ!？」

「だ、だってナイトアイもインターンの子を引き受けているみたいで忙しそうだしさあ！ 塚内君も例の人造ヴィランに掛かりきりだし、君以外頼れるヒーローがいないんだ

もん！」

「いや、もん、じゃねえよ!? あの人自分がこう言う件からハブられると露骨に機嫌が悪くなるの知ってるだろ!? しかも俺あの人に色んな意味で恨まれてるし、マジで勘弁してっばー!」

「断るッ!! 何がなんでも巻き込んでやるううッ!!」

「ギャー! 抱き付いてくんない! て言うか、そんなに困ってるんならアンタの師匠に頼めば良いでしょうが! グラントリノだけ? その人に頼めば良いだろ!」

「あの人おっかないからヤダッ!!」
「駄々っ子かっ!?!」

(お、オールマイトとゴジータが、仲良く喧嘩してるうううッ!?!?)

朝っぱらからじゃれ合う二人のトップヒーロー。重度のヒーローオタクでもお目にかけられないレア過ぎる光景に、緑谷出久は早くも多幸感で気絶しそうになっていた。



「んじゃ、そういう訳で改めて……………N0. 1ヒーローをやっているゴジータだ。宜しく緑谷出久」

「……………こちつこちちらら、こちらららこそ宜しくおにやがいしまっしゅっ!!」

「いや噛みすぎ噛みすぎ、落ち着けて」

その後、一先ずは一緒にナイトアイに事情を説明しに行く事で終わりにした二人は、改めて緑谷出久の前に降りてきた。N0. 1とN0. 2、圧倒的な存在感を放つヒーロー二人に出久は必死に堪えながら挨拶に応じる。

トレーニングの為にネットに入り浸る事を止めた緑谷だが、何もヒーローオタクを止めた訳ではない。未だに様々なヒーローを追いかけてはいるし、オールマイトのグッズだつて集めている。最近ではN0. 1とN0. 2のヒーロー二人が衣装替えをしている例のブツは、どちらも最高レアのカードを揃えているし、その情熱は全く失われていない。

そんな、憧れである二人のヒーローを前に動揺するなど言うのは酷だろう。

寧ろ個性では？ そう思える程震えている緑谷に苦笑いをしながらゴジータは落ちてくよう促しながら話を振った。

「それで、緑谷はやっぱ雄英目指すのか？」

「は、はい！ オールマイトやゴジータの母校ですし、小さな頃からの夢だから……その、絶対受けて合格しようと思っただけです！」

「そうか……」

雄英高校はゴジータの活躍も相まって、ここ数年の倍率はエライ事になっている。それを知らない緑谷出久ではないし、それを踏まえて受かろうとする少年にゴジータは素直に感心した。

雄英高に挑む生徒はどれも恵まれた個性の持ち主達、そんな中で一人無個性で挑むのは彼自身とてもプレッシャーに感じる事だろう。それでも絶対に受かるんだと意気込む緑谷出久がゴジータにはとても眩しく見えた。

「……………よし、ならこうしよう。お前が本当に雄英に入れたら、その時はこのゴジータが直々に指導してやる」

「えええええッ!? っ、ゴジータがッ!?」

「おう。どんなに忙しくても、必ず時間を作ってお前の面倒を一日見てやる。オールマイトの個性は俺が一番近くで見えていたからな。色々助言をしてやれるかもしれん」

「そ、それは……でも、確かにその通りかも知れないオールマイトとゴジータは短い間だけで共に肩を並べてヒーロー活動した間柄特にゴジータはオールマイトと唯一肩を並べられるヒーローそんな人が僕の面倒を1日だけでも見て貰えるなんて幸せってレベルじゃねーぞでもそれはあくまで雄英に合格してからの話であつてもし落ちたりすれば元の木阿弥なら僕がやるべき事はやはりトレーニングしかないだろうけど……ブツブツブツ」

ブツブツと一人で呟き始める緑谷にゴジータはオールマイトを見る。苦笑いを浮かべる相棒にマジかと愕然する一方、よっぽどヒーローが好きなんだとゴジータは何となく共感した。

だって、緑谷がヒーローに憧れるように後藤甚田もまた憧れを抱いているのだから。

「まあ、取り敢えず最初のお前の目標は雄英に受かること、だな。頑張れよ、ヒーロー志望！」

「は、はい!!」

そんな緑谷に己を重ねながら拳を突き出してくるゴジータに、緑谷も慌てて拳を重ねた。

「ちよ、狡い私も混ぜてよー!」

二人のトップヒーローに見守られながら、緑谷出久の新たな一日が始まる。

記録 13

「じゃあ、緑谷は雄英に受かったんだな？」

緑谷出久というオールマイトが見込んだOFAの後継者が現れて数ヶ月。時期は既に三学期の終わりに差し掛かり、中学生が高校受験に挑む頃、ゴジータの所に一本の連絡が入ってきた。

それは、オールマイトから告げられる緑谷出久の雄英合格の通知。新たに教師という立場になった嘗ての相棒の声は、電話越しだが何となく嬉しそうに聞こえた。

『どうにかね。あ、言っておくけどこれは厳正且つ公正な基準の下での結果だから。私のコネとか鼻根とか、一切していかないからね？』

「そりゃそうだろうよ」

念入りに公平さを強調してくるオールマイトだが、出久の頑張りを自身の目で見てきたゴジータとしてはその念押しは杞憂とも取れた。

ゴジータは緑谷出久という少年の頑張りを見ている。周囲が個性持ちで溢れ、自分だ

けが無個性という環境の中、それでもへこたれず自分を鍛え続けてきた彼の精神的タフネスは、ゴジータから見ても大したものだと思える程だ。

そんな彼がオールマイトに認められ、新たに力を受け継いだ。今はまだ使いこなせていないみたいだが、近い将来必ず緑谷出久というヒーローの存在は日本中に認知される事になるだろう。

あと、何気に陰キャ気質な所もゴジータ的には好印象だった。

『ただ、OFAを受け継いだばかりの所為か、まだ完全に自分のモノに出来ていないみたいなんだ。試験の際に見せた最後の一撃も、片腕と両足を折ったみたいだしね』

「それはまた……」

携帯の通話口から聞こえてくる気落ちした相棒の声にゴジータも同情する。やはり同じ元無個性だったとは言え、オールマイトと緑谷では色々と素養が異なっているのだろう。自分の体を壊してしまう程の超パワー、緑谷出久が使いこなすにはまだまだ時間が掛かるという事か。

尤も、そんな彼を教え導くのがオールマイトの役割だ。自分もちよくちよく世話を焼くつもりでいるし、その辺りは今後うまくやっていくしかないだろう。

……話を戻す。

「でも、ナイトアイにも話を通した事だし、結果的には万々歳だな」

『あ、その節はありがとうございます』

一時はナイトアイに個性の譲渡を話して無かったことに色々と焦りを覚えたが、ゴジータとオールマイトが緑谷の知らない所で揃って頭を下げた事で何とか説得することが出来た。この件に関しては他にも色々とすったもんだな経緯があつたが……今回は割愛とする。

「じゃあ、緑谷が雄英に通う頃にアンタも新任の教師として雄英に赴任する事になるわけだ。大変だぞー、これから色々」と

『はは、問題児だつたらしい君が言うと言説力が違うな。……では、そろそろ私は打ち合わせがあるからこれで、緑谷少年との約束は後で三人で機会を調整していこう』

「了解、緑谷にも後で連絡しておくよ」

“じゃあ”と最後に言葉を交わすと、オールマイトからの通話が切れる。これでまた一つ心配事が減つたなど、彼のこれ迄の苦勞を聞かされたゴジータとしては、それが何となく嬉しく思った。

さて、今度は俺の番だと緑谷にお祝いの連絡を入れようとした所で……ふと、背中に小さな衝撃が走る。

唐突。しかしてその衝撃に心当たりのあるゴジータはウンザリとした様子で背中に抱き付く者を一瞥する。

「おいゴジータ、テメエいつまで電話してんだよ。いい加減私の相手しろやコラ」

「——ミルコ、吃驚するから後ろから抱き付くのは止めてくれ……」

ゴジータの背中に張り付くのは、トップヒーローの一人である「ラビットヒーロー」ミルコ。本日は休日なのか、私服姿での登場である。

因みに、今日はゴジータも休みだったりしている。本日はただの買い出し、その外出先でのまさかのエンカウトである。

「なあ、お前オールマイトとチーム解消したんだろー？　なら、今度は私と組む番だよな？　な！」

「しないよ。そもそもアンタ、チームを組むのは弱虫のする事だとか何とか言ってただろ」

「いーんだよそれはもう！お前は空を飛べる！　そのお前の背中に乗ってアタシが現地で暴れるヴィランを蹴り倒す！　サイドキックから続くWin-Winな関係じゃねえか！」

「うん、先ずWin-Winという言葉の意味から調べようか」

後輩が相手とは言え、仮にもNo.1ヒーローを足の代わりにしようとする辺り、ミルコというヒーローは凶々しい且つ豪胆だった。思い返されるサイドキックの時代、自分の背中に乗ったり張り付いたり抱き付いてくる先輩からの無意識なスキンシップは

ゴジータ（陰キャ）の精神にこれでもかと深い傷を叩き込んでいた。

「ともあれ、当分の間俺は誰とも組む気はないよ。申し訳ないが、聞き入れてくれ」

「チエー、ンだよ後輩の癖に。No. 1 になってからでかい顔しやがって。わあつたよ、今回はこれで引き上げてやるよ。それはそれとして甚田、肉まん奢れ肉まん！」

「いや、普通先輩が奢るモノでは？ てかいい加減離れて」

「いーだろこれくらい！ 金もってンだろ？ サイドキックで世話になった恩返しくらいしろよ！ あと離れるのは断る。お前の背中はなんか乗り心地が良いからな！」

（み、ミルコがゴジータの背中に張り付いているううツツ?!?!?)

（こ、これはゴシツプ!? ゴシツプ案件なのか!?)

（ちくしよおううつ！ オイラだつて、オイラだつてええええつ!!!)

周囲の視線に気付く余裕はなく、色々と傍若無人な先輩に振り回されて、ゴジータの休日は消えていくのだった。



その日、雄英高校は設立以来初となる前代未聞の危機に直面していた。入学試験を終え、除籍ありの個性把握テストや戦闘訓練と、入学初日から幾つもの困難を乗り越えてきたヒーローの卵達。

そんな彼等が次に目にするのは……本物の悪意、ヴィラン。初めて目の当たりにする悪の存在に、雄英の教師を兼任するヒーローは生徒を守る為に即座に応戦するも、ヴィランの仲間の内の一人である黒い霧のヴィランが生徒達を施設内に分断。施設の各所に散らばった雄英の生徒——1年A組は、入学から程なくして対ヴィラン戦闘を余儀なくされた。

外に助けを求めるべく、A組の委員長を勤める飯田天哉を逃がし、その間ヴィランの猛攻に耐え続けたヒーローとその生徒達、個性を抹消する個性を持つ「レイザーヘッド」の活躍により、チンピラなヴィランは殆ど問題にしていなかったが……。

「やれ、脳無」

全身に手をつけた不気味なヴィランの一声によって動き出した黒いヴィランにより、

ヒーロー達はより窮地に立たされる事になる。

圧倒的力、個性抜きでも地面を割る怪力を持つヴィランの猛攻により、イレイザーヘッドは為す術なく倒され、同じく教師を兼任していたヒーロー「13号」もまた、黒い靄のヴィラン——黒霧によって自壊させられた。

頼れるヒーローも敗れ、絶体絶命の窮地。緑谷出久が起死回生の一撃を放つも、その一撃はショック吸収を持つ黒いヴィランによつて防がれてしまった。もうダメだ、そう誰もが諦めかけた時……………。

「もう大丈夫だ、少年少女達。何故って？」

「私が来た！」

平和の象徴、オールマイトが来た。No. 2となった今も尚、人々からの信頼が厚い最高のヒーローの登場にヴィラン達は怯え、生徒達は安堵に息を吐く。

誰もがオールマイトの勝利を確信する中、緑谷出久だけは表情が暗かった。

「オールマイト、気を付けて！あの黒いヴィラン、僕の個性が全く効いていなかった！恐らくは何らかの個性で……………」

「成る程、それは有難い情報だ緑谷少年。恐らくアレはゴジータが倒した奴の発展型だろう。その個性は衝撃を緩和させる事に関係してるんじゃないかな？」

「ええッ!? ぐ、ゴジータが既にあのヴィランを倒してた!？」

忠告するつもりが、更なる大きな情報によつて緑谷の思考が混乱する。一方で何気なく口止めを言い含められていた話を溢してしまつた事に、オールマイトは若干焦つていた。

「さて、答え合わせと行こうかハンドマニア。私の指摘に食い違いがあれば、是非とも教えて戴きたいな」

「——調子に乗るなよオールマイト。ソイツはゴジータに差し向けた試作品とは違う。お前を殺す為に用意した本物の脳無だッ！」

「『脳無』……それが人造ヴィランの正式名称か」

「死柄木弔、あまり余計な情報は与えない方がいいかと」

「黙つてろ黒霧、どのみちコイツ等は此処で殺すんだ。結果は変わんないだらっ！」
格好が教師のモノだからそれに沿つた煽り方をしてみれば、出てきた情報の数々。まず、今回の襲撃の主犯格と思われる手だらけのヴィランと黒霧のヴィランは、それぞれ死柄木弔と黒霧と言うらしい。

更に、これ迄は人造ヴィランとしか知り得なかつた脳髓剥き出しのヴィランが、脳無という決められた個体名を持つつというのも発覚した。これだけの襲撃をこなせる相手、相当なバックが付いていると予想したオールマイトは、緑谷達に避難を促す。

「緑谷少年、蛙吹少女、峰田少年。大変かも知れないがイレイザーヘッドを連れて皆の所

へ逃げてくれ」

「お、オールマイトは？」

「すぐに行くとも、コイツ等を片付けてからな」

「やってみろよ……脳無ッ！」

「ゴガアアアッ!!」

死柄木弔なるヴィランの呼び掛けに応え、脳無が吼える。オールマイトを上回る体躯を持ち、衝撃に強い耐性のある個性を持っているであろう凶暴なヴィラン、その膂力を以て瞬間に間合いを詰めてくる怪物を相手に、オールマイトはギリギリまで引き寄せ……避けた。

「……………は？」

「……………え？」

体幹を横に置くように、流れるような挙動。標的が目の前から消え、そのまま体が泳ぐ脳無の顔面にオールマイトの拳が振じ込まれる。

ヒーローの中でもトップクラスの膂力を待つとされるオールマイトのカウンター、シヨック耐性を突き抜けて吹き飛ばす脳無を目の当たりにした死柄木弔と緑谷出久は、これ迄とは明らかに違う動きをするオールマイトに愕然としている。

「こう見えて、おじさん良い歳してるからさ。あまり殴り合いとかは避けたいところな

訳さ、だから申し訳ないがヴィランよ……：此処からは、一方的に殴らせてもらう」

後輩たちが倒れ、子供達がヴィランの危機に晒されている。泣きながら自分を呼ぶ委員長に申し訳なく思う一方で、オールマイトは不甲斐ない自分に怒りを覚えた。

そんな、八つ当たりな気持ちを叩き付ける様にオールマイトはカウンターから起き上がる脳無に肉薄する。

「の、脳無！ 殺れ、応戦しろ！」

平和の象徴。嘗ての元No.1ヒーローとしての矜持と責任がプレッシャーとして放たれる。その圧倒的存在感に後退る死柄木だが、ヴィランとしての意地が彼を奮い立たせる。脳無にオールマイトを倒せと命じ、脳無もそれに応えるが……。

当たらない。臂力をモノにした脳無の猛攻を、オールマイトは全て見切った様に避けていく。返し刀の拳が再びカウンターで入り、脳無の顎は弾けた様に跳ね上がる。

「バカな、何で脳無の攻撃が当たらない！ アイツのパワーはオールマイトに匹敵してらんだろツ！」

一方的な展開、予想すら出来なかった光景に死柄木弔は憤慨の声をあげる。オールマイトは弱っている、その情報を信じて此処まで来たというのに、これではまるで詐欺ではないか。

アイツ、騙したのか！ 憤る死柄木とは対象的に、オールマイトの心境は明るかった。

確かに、目の前の脳無なるヴィランは強い。膂力の強さも自分を殺す為に用意したと豪語するだけあってかなり凶悪だが、それでもオールマイトにとつて余裕で対処圈内だった。

(本当、頼りになりっぱなしだぜ、相棒！)

思い返すのはチームを組んで少し経った頃。

『あ？ 俺とオールマイトが組み手？』

『そう、折角こんな立派な設備が地下にあるんだ。個人的な鍛練だけでなく、対人戦闘にもある程度精通した方が良いんじゃないかな？と思つてね』

『確かに、基本的に俺の動きはイメトレだけだし、オールマイトと手合わせする事で得られるモノがあれば理想的だな』

『私も、君のスタイリッシュな動きには前から興味があつたんだ。そういう意味でも、きつと互いの為になる筈さ』

思い付きで始めたゴジータとの組み手、遊びがあつても油断なく相手を見据え、的確に相手の隙を潰して完封する彼の戦い方はオールマイトに新たな手段を与えた。

力は衰え、個性を使える時間も格段に減っている。平和の象徴オールマイトが徐々に削れて消えていく中、オールマイトは《技》という武器を手に入れた。

度重なるゴジータとの組み手はオールマイトの目を養わせ、そんなNo.1ヒーロー

の動きを見てきたオールマイトの目から見て、目の前のヴィランの動きは緩慢に過ぎた。

「最後にヴィランよ、君にこの言葉を送ろう」

シヨック吸収でも吸収しきれない打撃を浴びせられ、本来ある筈の再生の個性も機能しない。究極の脳筋、呆然となる生徒達の視線を受けながら、オールマイトは拳に力を込める。

「Plus 更に Ultra 向こうへ!!」

加速し、連打をしながら溜めていた力を解放。叩き込まれた脳無なるヴィランの体は衝撃で膨張し、熱を帯び始めた瞬間弾け飛び、漆黒のヴィランは施設から吹っ飛び、雲を幾つか割りながら空の彼方へと消えていった。

……誰かが、言葉を失った。衰え、弱っている筈のヒーローは、まるで嘘のようにピンピンしている。ヴィラン側の切り札と思われていた脳無も、一太刀すら浴びせられず轟沈。大敗という言葉では足りない現実を前に、死柄木弔が激昂するよりも早く、黒霧の働きによって雄英から姿を消した。

「——やれやれ、やはり私も衰えたな。10発程度で終わらせるつもりが、調子にのって100発以上手を出してしまった」

無傷。あれだけの凶悪なヴィランを前に、オールマイトは無傷で完勝してみせた。衰

え、個性の残り火となつて尚、仁王立ちする平和の象徴。

その後、主犯格を逃してしまつたオールマイトは、他のヒーロー達が到着する迄の間、施設に蔓延るヴィラン達を掃討し、無事ヒーローの卵達を死守するのだった。



その後、雄英襲撃から一夜明け、本日は急遽休校。未だ諸々の件が片付いていない状況下で雄英高の会議室にて教師陣達が一堂に会す。

「……………さて、それじゃあこれからの話をしようか。現在雄英は世間から好奇と疑問の目を向けられている。ヴィランの侵入を許した我々に、果たして子供達を預けるのに足り得るのか？ ってね」

雄英高の校長、根津校長は表情を崩さないまま皆に問い掛ける。

「通常ならば学校を休校し、ほとぼりが冷めるまで大人しくするべきなのでしょうが……」

「有り得ねえつての！　ここは天下の雄英だぜ？　そんな乗り気の無さじやあ、リスナー達も白けちまうぜ！」

「それに、自粛した所でヴィランが仕掛けてこない保証もない。何より、今年の雄英にはもうじき大会が控えている」

ヴィランという脅威に晒され、自粛という言葉が過るが、教師の誰もがそれを望んではいない。何よりこれから待っている雄英特有のあの行事には生徒達の今後の未来が懸かっている。

同じ意見を出し合う教師陣に頷きながら、根津校長は結論を下す。

「では警戒を上げつつ、学校行事は予定どおりに進めるといふ事で——」
「待つてくださいい」

そんな校長の言葉を包帯イレレまみれのミイライザードが呼び止める。

「校長、その提案に一つ条件を追加させて下さい」

「条件、とは？」

「昨日の雄英襲撃の件で、世間の目は厳しくなっている。メディアからの追及も鬱陶し

くなるだろうし、雄英体育祭を万全に挑むには例年以上の警備が必要だ」

「——と、言うところ？」

「幸いにも、新たなN.O. 1ヒーローに我々は幾つもの“貸し”がある。本人もその事を負い目を感じている様なので、この際そこん所を徹底的に突きたいと思います」

何故だろう、包帯まみれでマトモに表情が見えないのに、相澤先生の顔が笑みで歪んでいる様に見える。

フツフツと笑い声が聞こえる。見ればセメントスやミッドナイト、エクトプラズム、スナイプから不気味な笑みが浮かんでおり、他の教師達もヒーローとは思えない凶暴な表情を晒している。

室内のあちこちから聞こえてくる暗い笑い声、唯一分かっていないオールマイトはオロオロと挙動不審に陥っていた。

「では、雄英体育祭の警備責任者にゴジータを任命するという事で、異論はないね？」

「「はっ」」
異様な空気となった会議室。一人取り残されたオールマイトは、その迫力に泣きそうになった。

「イツキシ！ ……なんだろ、急に寒気と悪寒が」

記録 14

ヴィラン連合なる組織が雄英に襲撃を仕掛けたという事実は日本全国に瞬く間に広がり、多くの人々に衝撃を与え、同時にオールマイトが撃退したという話題で持ちきりとなっていた。

No. 2のヒーローであるオールマイトが雄英に教師として赴任し、更にはヴィランの襲撃に巻き込まれながら無事に生還を果たした一年A組という生徒達に話題と注目が集まった。

そんな、期待と不安が募る雄英生徒に新たな試練が降り掛かる。【雄英体育祭】。年に一度開催される新たなオリンピックと揶揄される雄英生徒達による“個性”ありの大会が開催される事が決定された。

ヴィランの襲撃を受けて……否、だからこそ開催されるべきだという雄英側の強い要望を受け、例年より警備を強化する事を条件に大会の開催を決行。強気な雄英の姿勢に人々は安堵と不安を抱きつつも、期待せずにはいられなかった。

体育祭まで残り一週間、多くの生徒達が大会に備えて自身の体と個性を鍛える中、ヒーロー科一年A組である緑谷出久は自身に与えられた個性に四苦八苦していた。

「どうしよう、もう大会まで一週間しかないのに個性の制御が全然出来ていない、これじゃあ……!」

オールマイトに見初められ、与えられた緑谷出久の個性である「ワン・フォー・オール」。代々受け継がれてきた個性の力をオールマイトから受け取ったと言うのに、未だ全く使いこなせていない現状に緑谷出久は焦りを募らせていた。

入学試験では手足を潰し、除籍を賭けた個性把握テストも指を壊す事で何とか踏みとどまる事になった。戦闘訓練では因縁ある幼馴染みに辛勝するが、両腕を使い潰す羽目になり、雄英の施設であるU・S・J.の施設にてヴィランから襲撃を受けた際に、一度だけ壊すことなく100%の力を引き出すことに成功したが、それ以降は特に進展する事なく、今日まで碌な結果を残せないまま時間を経過させてしまっていた。

雄英体育祭は全国区で生放送される。その視聴者の中には母も含まれており、個性を使いこなせなければ手足をへし折る我が子を見せる事になってしまう。

唯でさえ、母には自分の肉體改造に協力させて心配させたと言うのに、大会で自ら手足を使い潰す息子を見せてしまったら、心労で倒れてしまうかもしれない。

の間だけ警備を任される事になったって訳よ。今日はその下見だ」

慌てふためく緑谷に、ゴジータは快活に笑いながら腰に手を当てる。自身が雄英にいる理由を簡単に説明すると、緑谷自身も徐々に気持ちが悪く落ち着くようになっていた。

「それに、約束したろ？ お前が雄英に合格したら1日マンツーマンで指導してやるって」

「あ……………」

「既にオールマイトから了承も得ている。生憎と警備の打ち合わせとかでちよくちよく抜ける事はあるが…………それでも、今日1日はお前に付きつきりできてやれるぜ？」

「どうする？ 試すような物言いだ訊ねてくるゴジータに対して、緑谷出久が出せる答えは一つしかなかった。

「宜しく——お願いしまアす！」

「即答か、いいね。判断が早い奴は嫌いじゃない」

No. 1ヒーローが直々に自分の特訓に付き合ってくれる。こんなチャンス逃したくはないと、緑谷出久は即答し、そんな判断の早い少年にゴジータも自然と笑みが溢れた。

「んじゃあ、早速情報を整理するが…………その前に緑谷、お前今日まで個性を使うにあたって何回手足を壊した？」

「つ、その………四回です」

入学試験、個性把握テスト、戦闘訓練、そしてヴィラン襲撃。これ迄立ち塞がる多くの壁に緑谷は文字通り体を張って乗り越えてきた。オールマイト並みの超パワーを引き出す度に手足や指を何度も壊してきた。

その事を伝えると、ゴジータは腕を組んで思考を巡らせ一つの答えを導き出す………が、その前に幾つか緑谷に言いたいことが出来た。

「成る程な。色々と言いたいことは出来たが………先ず緑谷」

「は、はいっ！」

「自分でも分かっていると思うが、ヒーローはただ力を振るえば良いってモノじゃない。お前の腕の一振りでもヴィラン一人倒した所で、二人目のヴィランに勝てる保証は何処にもない。況してや、災害救助の時に腕の一振りでも状況を変えた所で、次々に変化する状況に対応できず被災者達と一緒にお陀仏だ。そのくらいの事は分かっているな？」

「っ！………はい………」

その忠告は思っていた以上に鋭く、重かった。如何にオールマイトの様な超パワーが出せても、それを代償に手足を犠牲にして動けなくなってしまうたら、元の木阿弥。複数のヴィラン相手には動けなくなつた所で袋叩きにされ、災害救助の場では腕の一振りでも使え物にならなくなる最悪のお荷物が生じ生まう事だろう。

そして、既に多くの人々が忘れかけているが、本来ゴジータは災害救助を専門として
いるヒーローだ。命を救うという事は、助ける相手以上に自分が万全で在らねばならな
い。傷だらけのヒーローを見て、一体誰が安心し、明るい未来を夢想できる事だろうか。

「相澤先生にも同じ事を言われました。一人助けたら木偶の坊になるのかって……」

「相澤先生かあ、まああの人なら言うだろうな」

ゴジータの口から相澤教諭の名前が出てきた事に戸惑うが、今は横に置いておく。

「でも、どうやっても個性が上手く使えないんです。発動する時は0か100しか出せ
なくて……オールマイトが言うには10%の力を引き出せる筈らしいんですけど」

「あんな緑谷、お前一つ勘違いしているぞ？」

「——え？」

「“個性”というのとはな、特別じゃないんだ。生まれた時から当たり前の様に在るモノ、
最初から自分の一部であり自分そのものだ」

「え、えつと……」

元々が無個性だったが故に、個性と言うものを特別視している緑谷にゴジータは先ず
その意識を取っ払う事から始める事にした。現在の超常社会の根底に根差す“個性”、
それは人に生まれた時から備わっているモノで、特別に扱ったり必殺技として重宝する
モノではない。

そんな、禅問答にも近い言葉に今一つ理解出来ない緑谷に、ゴジータはもう一歩踏み込んで教える事にした。

「お前の個性は俺の個性と似ているからな……んじゃあ、ちよつと例題を見せてやる。

——ハアツ！」

ウンウンと頭を唸らせて考えを巡らせている緑谷に苦笑いを浮かべながら、ゴジータは少し距離を置く。ここなら大丈夫だろと見計らうと、ゴジータは全身に力を込めてその身に黄金のオーラを纏い始める。

髪と眉は金色に染め上がり、瞳は翡翠色に変化していく。それはヒーローランキング以来見せることのなかったゴジータの本気形態、彼の個性である「超」となった姿だ。

間近で目にする変身したゴジータにヒーローオタクとしての本能が擦られるが、今は特訓中だという事もあり自重する。

「さて、お前からは今の俺が個性をどのように使った様に見えた？」

——

笑みを浮かべながら訊ねてくるゴジータに、緑谷は思案する。今のゴジータは個性を使っている……使っているのだが、まるで息をするかのように、当たり前前の事をするかのように個性を発動していた。

オーラを纏って底上げしているのか、それとも頭髮が金色に輝くから共通点があるだけなのか、気になることは多い……と、其処まで考えを巡らせていると、一つの答えが緑谷の頭に浮かび上がってきた。

オールマイト、OFA、10%、そして……ゴジータが見せたオーラを纏う姿。其処まで考えて自分の目指すべき姿を明確にイメージした緑谷は、両手を握り絞めて力を引き出し始める。

「ワン・フォー・オールは、個性は、使うものじゃない。それは……つまり！」
すると、赤い血管のようなものが緑谷の全身に浮かび上がり、ゴジータの瞳と同じ翡翠色の電気のようなエネルギーが迸る。それに伴い力が高まっているのを感じる。

「個性とは自分そのもの！これが、今の僕の答えです！」

「ワン・フォー・オール・フルカウル」

全身に力を行き渡らせ、滾らせている今の緑谷出久は明らかにこれ迄とは一線を画している。最大出力の100%の十分の一しかない力だが、それでも現時点での緑谷の力は……破格に過ぎた。

そんな、自分の答えに行き着いた緑谷に。

「——正解だぜ、緑谷」

ゴジータは纏っていた黄金の炎を解き、黒目黒髪に戻りながら……やはり笑みを浮

かべる。

「さて緑谷、その状態で動けそうか？」

「わか、りません！ 何分今が初めての状態なので……！」

「なら、慣らし運転で少し動いておこうか。さ、好きに打ち込んでこい」

「ッ!？」

なんて事のないように殴ってこいと言われた事に、緑谷は少なからず衝撃を受けた。今の自分はオールマイトの十分の一とは言え、尋常ならざる力を持った全身凶器人間。僅かでも加減を誤れば大怪我を負わせかねない。

と、其処まで思考を巡らせた事でそれは杞憂であると緑谷は思い直す。今、自分の目の前にいるのはN.O. 1ヒーロー、あのオールマイトすら認めた「超ヒーロー」だ。

そんな最強のヒーローを自分が心配するのは驕りが過ぎる。失礼すぎる考えを首を振って頭の中から追い払い、緑谷出久は我流の構えを見せた。

「お願い……します！」

「おう。何処からでも掛かってこい」

地を蹴り、駆ける。これ迄の走りとは明らかに違う速度に困惑しながらも、緑谷出久はゴジータに向けて拳を握り締め……振り抜いた。



「よし、取り敢えずはこんな所か」

「あ、ありがとうございまして……」

日が傾き、空が夕焼ける時間帯。仰向けに倒れて疲労困憊となった緑谷を見下ろしながら、ゴジータは満足そうに頷いた。

「一先ず、お前は本当の意味で自らの個性を扱えるようになった。上限100%、それが今のお前に許された力だという事を覚えておけ」

「は、はい！」

今日一日ゴジータというNo.1ヒーローに鍛えられた緑谷は、改めてその圧倒的さに度肝を抜かされていた。向こうは終始手を抜いていたのに一度たりとも攻撃が当て

られず、流れるような体捌きに翻弄され続けていた。

(体捌きだけでも尾白君より遥かに上！ 分かっていたけど、流石はN.O. 1ヒーロー。格が違う!!)

クラス内で唯一武術に明るい尾白と比べても、ゴジータの動きはモノが違う。尾白本人もN.O. 1ヒーローの動きはスタイリッシュ過ぎると絶賛していた。

これが極めた武術という事か。動きが速いのではなく、遅いわけでもなく、巧い。尾白という武術を識る者がいたからこそ分かる視点。しかもこれで今の自分に合わせて手を抜いた状態だから余計に恐ろしい。

あのオールマイトが認め、影響を与えたヒーロー。改めて自分は凄い人達との出会えていると、緑谷出久は自身の恵まれた環境を嬉しく思い、涙ぐむ。

「さて、そんじゃあ今日は此処まで。明日からは放課後はじゃんじゃんキツくしていくから、覚悟しておけよ」

「——えっ!?! で、でもゴジータ！ 約束は一日だけって……」

「おいおい、何を言ってるんだ緑谷。今日はまだ三時間程度しかやってないだろ？ 一日面倒見るって言うことは、つまりはそういう事だろ。じゃ、俺はまだ用事があるからこれで」

「気を付けて帰れよー」そう言葉を残して去っていくN.O. 1ヒーローの背中を、呆然

とする緑谷はただ見送る事だけしか出来ず……。

「え、ええええええっ!？」

ゴジータの言葉の意味を理解した緑谷の叫びは、森林エリア一帯に響き渡るのだった。



「はい。じゃあ替えの包帯を巻いていくよ。痛かったら、ちゃんと言うんだからね」

「いや、だから過保護過ぎますって修繕寺先生」

保健室。それはヒーローになるための訓練活動が多く、怪我の多い雄英生徒達にとつ

ての命綱。個性“治療”を持つリカバリーガールが根城にしている癒しの城。

個性だけでなく、自身の医療技術も卓越しているリカバリーガールこと修繕寺治とは、先のUSJ襲撃の際に怪我をした相澤消太の治療に専念している所だった。

個性の治療を施し、包帯を巻いていく。その過程で怪我人に負担が及ばないように処置を施していくその手腕は、まさに圧巻の一言だった。稀有な個性だけでなく、医療従事者としても一流の腕前を持つ彼女は、医療業界でも重宝されている。

そんな彼女は、全身包帯だらけのミイラ男になる事を嫌う嘗ての生徒に、プンスカと怒りながら説教を始める。

「何を言ってるんだい。先のヴィラン襲撃で、一番重傷だったのはアンタでしょうが！

生徒の前だからカッコつけたいのも分かるけども」

「いや、この有り様じゃあどのみち格好なんて付かんでしょうよ」

既に両腕に包帯が巻かれ、マトモに抵抗できなくなった相澤だが、そんな事はお構いなしにリカバリーガールのお叱りは続く。

「口答えるんじゃないよ。全く、男のヒーローはこれだから………意地の張り所を間違えるんじゃないよー！」

「……………はい、すみません」

リカバリーガールはオールマイトやエンデヴァー、そしてイレイザーヘッドである自

分の学生時代を知る雄英の重鎮だ。彼女にとつては殆どの雄英出身のヒーローは教え子であり、手間の掛かる子供達の様なもの。常日頃から問題児を多く見てきた彼女には強く反発できるものなどおらず、学生現役のプロヒーロー問わず、彼女には頭が上がりなかつた。

故に、相澤も抵抗するのを止めて為すがままにされることにした……その時だ。

「オッス、おらゴジータ。呼ばれなくても即参上」

保健室の扉が勢いよく開かれ、No. 1ヒーローが現れる。雄英設立以降最大の問題児に、相澤教諭は露骨に表情をしかめた。

「——おい後藤、お前は体育祭に備えて警備の下見に来ていた筈だろ。何を油売っている」

「勿論、下見の続きさ。幾ら懐かしの母校と言えど、ちゃんと隅々まで見て回らなきゃいけないからな。と、はいリカバリーガール、頼まれていたお菓子ツス」

「はい。ありがとうね。アンタもヒーロー活動ばかりで大変なのに悪いね」

「気にするなよ、アンタには昔から世話になつていているんだ。これくらいの恩返しはさせてくれよ」

「全く、アンタもすっかり丸くなつたねえ。入学したての頃は切羽詰まつたのに……成長するもんだね」

「それは違いますよりカバリーガール、コイツの場合は成長というより開き直っただけですから」

「やれやれ、相変わらず手厳しいなあ相澤先生は。そんなんじやあクラスの子達から懐かれませんか?」

「懐かれなくて結構、俺はそんなもの求めちゃいない。アイツ等が立派なヒーローになつてくれるなら、それだけで十分だ」

「俺みたいに?」

「はっ倒すぞ」

ゴジータが保健室に来てから、露骨に不機嫌になる相澤だが、それは愛情の裏返し。嘗ての教え子に対する歪な愛情表現なのだ、リカバリーガールはそう思うことにした。

設立から数々のヒーローを輩出してきた雄英、数々の問題児をプロヒーローとして育成、世に送り出してきた雄英だが、中でも現No.1ヒーローのゴジータは歴代の問題児の中でも頂点に君臨した逸材だった。

特に個性を一時的に打ち消せる個性を持つ相澤にとってゴジータは色んな意味で天敵であり、問題児だった。

何せ、ゴジータは【超】という個性を用いらずとも凄まじい怪力を有しており、個性

で打ち消して捕縛布で拘束しようとした相澤を物理的に振り回していた。その様は大
型犬に振り回される幼児の如く、決して制御できない怪物に相澤は何度も泣きそうに
なっていた。

そして、そんな彼を何だかんだと面倒見のよい教師だと認識したゴジータは、良く相
澤教諭に絡むようになった。同じ陰キャ同士（ゴジータ視点）仲良くしようや。という
のが、ゴジータの主張である。

「しっかし、派手にやられたなー。確か右目に障害が残るんだったか？ 大丈夫なのか
？」

「お前が気にする話じゃない。て言うか、そろそろ出ていけ。お前に課せられた責任は
此処で駄弁っつていられる程軽いものじゃ——」

「ほい」

「ングッ!? カ、ハ……! お前、いきなり何を、飲ませ……!?!」

いい加減自身のやるべき事をやらせようと、半ば苛立ちながら説教しようとした相澤
の口にゴジータは指で弾いた何かを振じ込み、強制的に吞ませる。突然の出来事に咳き
込み悶える相澤だが、張本人足るゴジータは悪びれなく言つてのける。

「今のは俺からの見舞い。じゃあな相澤先生、あんま無理すんなよー」

「ま、待て……!」

相澤の制止も聞かずに保健室から飛び出していくゴジータ、相変わらず破天荒な元雄英生徒にリカバリーガールはニコニコしながら見送っていた。

因みに、ゴジータが相澤教諭に何を吞ませたのかはリカバリーガールには事前に知らされていた模様。



翌日、本日も警備の打ち合わせ兼緑谷の指導にやってきたゴジータだが、目の前に広がる光景に啞然としていた。

「……………これは、どういう事だ?」「す、すげえっ!本物のゴジータだ!!」「私、生で観るのは初めて…………!」

やってきたのは山岳エリア。今回はこの開けた場所で緑谷の個性の扱いを指導していくつもりだったのだが……其処で待ち受ける生徒の人数にゴジータは目を見開いて驚愕する。

「す、すみませんゴジータ！ 実は昨日の帰りに切島君達に見つかっちゃって、質問の勢いに負けてついうっかり……！」

横の緑谷から告げられる事情の内容に、ゴジータはそう言えばと自分の不手際を思い出す。あの時の自分は久し振りに思い切り個性を出した事もあって、結構派手にオーラとか出しちゃってたっけ。そりゃあ、目撃した生徒とかいる筈だよな。

で、その見かけたオーラのあった場所から緑谷が現れたとなれば、そりゃあ質問責めに遭うわ。と、ゴジータは内心で納得。平謝りしてくる緑谷に気にするなど宥めた。

……見た感じ、此処にいるのは一年の生徒達だけ。午後には他の学年の生徒達が来るかもしれないが、この程度なら多分対応可能。

期待に眼を輝かせる生徒達、一部の生徒は睨み付けてくるが……それを気にする余裕はゴジータにはない。

「——い、良いぜ。上等だ。お前達まとめて面倒見てやるよ！」

自棄糞気味に応じるゴジータに、一年の生徒達は沸き立った。

「わ、私の事、覚えてくれてるかな……？」

「——あれが、今のNo. 1ヒーロー、か」

「超えてやる。ぜってエに、超えてやる……!!」

その身に様々な感情を受け止めながら、ゴジータによる一日指導が始まった。

記録15

今年の雄英は、波乱に満ちていた。

新一年生が入学して数日、ヒーロー科の一年A組はヴィラン連合という敵組織に襲われ、雄英が設立されて初となる脅威に晒された。担任の教師達やオールマイトの奮闘により大事には至らず、無事にヴィラン襲撃という危機を乗り越えた。

そんな、彼等、彼女等の前に現れた新たな脅威。それは……。

「遅い！ お前の個性は確かに万能に近いが、全能には程遠い！ 一人で脅威に立ち向かう時、為す術なく死ぬぞ！ お前に足りないのは経験と適応力だ！ 頭でっかちで通用する程ヒーロー稼業は甘くないぞ！」

「は、はい！」

「それと電気小僧！ お前はただ電気をブツパすれば満足か!? 一発屋を目指したいなら他当たれ！ 違うと言うのならまず自分の許容量限界値の底上げを目指せ！」

「ひゃ、ひゃいいいい！」

「硬くなることしか出来ないだあ？ 阿呆！ 自分の力も極めて無いヤツが生意気抜かすな！ それしか出来ないならそれだけを突き詰める！ 何物も通さない盾になれ！ それはヒーローの一つの本質、護る事に特化した力！ 悩むのは其処まで至ってからにしろ！」

「お、オオッス！」

ゴジータ。オールマイトを超えた新たなNo. 1ヒーローであり、体育祭の間だけ雄英の警備を任された人物である。オールマイトからも認められ、既に周知の実力者として見られるようになった。

No. 1ヒーローゴジータ。超ヒーローとして知られる彼が、雄英に來ている。一目だけでも会って話がしたいと、希望に胸を膨らませて会いに向かった有精卵達を待つていたのは……。

「その獣坊主！ 個性が獣になるからって思考まで獣に近付けるな！ 思考を常に回転させろ。鈍らせるな！ それだけでお前は他の奴より一步先んじる！」

「は、ハイですゾオオッ！」

No. 1ヒーロー直々によるシゴキだった。

シゴキ、と言うよりも雄英の一年生全員に対してゴジータが怪我の無いように相手取るだけの、〃なんちやって組み手〃。一人が倒れたら即次の生徒が挑む基本的ダイマンに一對一

の方式だ。

当然、雄英入学したての有^一精卵^{年生}が勝てる道理はなく、ヒーロー科普通科問わず全員が地に転がる有り様となっていた。

一人に対して凡そ十秒。それでも生徒一人一人に対して的確なアドバイスをする辺り、流石No.1ヒーローだと言えるだろう。

「わ、分かっていたけど………やっぱすげえよNo.1」
「格が………違いすぎる!!」

そして何が一番恐ろしいかって、誰よりも動いている筈のゴジータが土埃一つ付けず、汗一つ流さずに生徒達の相手をしているという事。手加減し、手厚く丁寧に接し、その上でアドバイスを送り生徒のやる気を引き出していく。

日本のヒーロー達の頂点に君臨する男は、自分達の想像の遥か上を行っていた。生徒達からの羨望の眼差しを受けて全く動じないゴジータに、改めて雄英の一年生は自分達の幸運に感謝した。

「ハンドガール——拳藤だったか？ 攻め手の勢いは感心するが、自分の手で相手を隠しちまったら世話ねえぞ、もうちよい工夫を凝らせ」

「は、はい！」

「とは言え、有言実行出来るそのガッツは大したもんだ。これからも頑張れよ」

「——つ、あ、ありがとうございます！」

「……………なんか、B組のあの娘に対してだけコメント違くない？」

「ちよつとー！ No. 1ヒーローが鼻負して良いんですか？」

「うっせ、俺は教師じゃねえんだ。面識ある子にコメント残す位大目に見とけ！」

加えて、意外なノリの良さ。テレビで見ている時はカツコ良さ故に近付き難い雰囲気
を纏っていたが、実際は結構悪のりもイケる口らしい。清濁併せ呑む……………なんて大し
た事は言わないが、生徒に過ぎない自分達に対して対等に接してくれるゴジータに、生
徒達は色んな意味で見直していた。

「——さて、これで大体対応し終えたか。後残っているのは…………」

「俺だ」

そんな時、生徒達の中から見るからに強気な少年がゴジータの前に現れた。疲れてい
る生徒達にぶつかっておきながら謝罪すらせずにズンズンと近付いてくる少年、謝れよ
と糾弾してくる他生徒の声を無視して、勝ち気な少年はゴジータの前に歩み出る。

「次の相手は俺だゴジータ。その鼻柱、正面からへし折つてやるよ」

「か、かかかかかっちゃんんん?!」

No. 1ヒーロー相手に萎縮する処か挑戦状を叩き付けてくる好戦的な笑みを受か
べた勝ち気な少年、その愚行とすら取れる態度に緑谷は口の下顎に指を引つ搔けながら

ガタガタと震えていた。

「ほう？ 随分と挑戦的じゃないか。いいぜ、元気のある奴は嫌いじゃない」

「オールマイトすら認めたNo. 1ヒーロー、アンタの強さは知っている。俺は他の雑魚どもとは違い、同じように見ていると痛い目に遭うぜエ……？」

「へー？ ならお前は俺に出させてくれるってのか？ 本気を」

「当たり前だわクソがッ！」

加速……両手の掌から発せられる爆破の勢いで、一気に間合いを詰めてくる少年。爆速で迫る少年の思考には、既に次の行動へのプロセスが組み込まれていた。

回避、防御、受け流し。これ迄ゴジータを見せてきた行動の中からあらゆる対応を即座に構築する。性格は既に色々アレな少年だが、その分析能力と知性の高さは緑谷出久並みである。

（さあ、どうすんよNo. 1！ 避けるか、防ぐか、それとも受け流すか!? どちらにせよその顔に絶対一撃は喰らわせてやる!）

自分は他とは違う。幼い頃から授かった強い個性と、自身の能力の高さ故に増長した少年の自尊心。次に自分の一撃がゴジータに入れば、その時点で自分は他の連中より格が違うことが証明される。そうすれば……。

（其処で見てろやクソデク！ テメエは永遠に俺より下なんだよ!）

脳内に浮かぶのは、忌々しき過去。誰よりも弱い癖に、誰よりも優しい幼馴染み。自分の事を顧みずに他人を気遣い助けようとする緑谷が、少年——爆豪勝己には目障りで仕方がなかった。

これは、その傷つけられた自尊心を満たすための挑戦。さあ、次はどうするかと爆豪が獰猛に笑みを浮かべた次の瞬間………！

「ほい」

パチン。と、爆豪の目の前で小気味の良い音が弾けた。瞬間、爆豪の体から力が抜け落ち、グツタリと力尽きたように気絶している。

「お、おい爆豪の奴、急にどうしちまったんだ!？」

「気絶………しているのか?」

白目を剥き、力無く倒れる爆豪。突然の学友の気絶に困惑する他の生徒達がどよめく中、一人の生徒が肩を震わせる。

「まさか今のは………猫だましか?！」

「知っているのか尾白!？」

「ああ、俺の見立てが確かなら、ゴジータがやったのは猫だまし。昔、日本の国技である相撲の技が始まりとされる脅かしの技だ」

「いや、にしては猫だましって……ネーミング可愛すぎない?」

真剣な顔付きで語り始める尾白なる尾が生えた個性持ちの少年。武術を識るだけあってその知識は豊富だが、猫だましという可愛らしい技名に、耳がプラグとなつている少女は若干引き気味だった。

「実際は、そんな可愛らしい代物じゃないよ。ゴジータに肉薄している爆豪の精神は極限状態にまで高まっていた筈だ。其処へ意識外からの音、端から聞けば大したモノじゃないが、当人からしたら——目の前でプレゼントマイク級の音の爆弾を浴びた様なモノだ」

「そ、そんなにか？」

「勿論、普通の人間にはほぼ無理だ。極限状態と言つてもそれはあくまでそうなった時の刹那しか通じない。今の目の前で起きた出来事の中で一番恐ろしいのは、あの一瞬の中で爆豪の意識の隙間を見切ったゴジータだよ」

額から汗を流して解説する尾白に、周囲の少年少女が息を呑む。卓越……なんてモノじゃない異常なまでの技の冴え、あの爆豪ですら一蹴してしまうゴジータに少年少女達の視線が羨望から畏怖の類いに切り替わる。

一方、対するゴジータはと言うと……。

(いや止めて、人の前でタネ明かしされるの結構キツいんだから！)

淡々と語られる自分の戦い方を解説する尾白少年に、その瞬間は色んな意味で目が離

せなかつたゴジータだった。

「さ、さあこれで本当に最後かな？」

「……………俺が」

話題を変える意味を込めて、他に手合わせを希望する生徒はいないか。これまで見てきて何だかんだ粒揃いの生徒達に感心するゴジータが改めて周囲の生徒に訊ねると。

一人の少年が手を上げた。白と赤の頭髮、一見すればクールなイケメンの少年。しかしその左顔には痛々しい火傷の痕がこびりついている。無感情に無表情、けれどその瞳の奥にある何かに気付いたゴジータは……………。

(……………うん、なんか物凄く地雷の臭いがするぞお)

取り敢えず、誠心誠意向き合う事にした。



雄英高校三学年。一、二年の期間を経てプロヒーローに最も近いとされる卯達。中でも廊下を歩く三年は雄英の中でもトップの実力を有していた。

「ねーねー通形知ってる!! 今雄英にゴジータが来てるんだって!」

「テンション高いね、ねじれ。そんなに噂のゴジータが気になるのかい?」

「うん、だって翼が無いのに空を飛べるんでしょ? 金髪に変身するんでしょ? 手からビームが出るんでしょ? どうやるのかな? どうなってるのかな? 天喰くんは気にならないの?」

「ぼ……俺は、別に。ミリオはどうなんだ?」

不思議な雰囲気醸し出している少女と、引つ込み思案な少年。そんな二人を引き連れる様に歩く金髪の少年……通形ミリオ。

三人の話題に上がるのは、現在雄英に來ているとされているNo.1ヒーローの事。既に噂で広まっているゴジータの有無は、「ビッグ3」と呼ばれる彼等の耳にも届いていた。

「え、俺?」

「ミリオのインターン先って、サー・ナイトアイだろ? 嘗てのゴジータのインターン先と一緒に」

「ゴジータの事について、何か聞かされていないの？」

「……………あー、うん。ソウデスネ」

しかし、興味津々な少女に対してミリオの反応は悪い。興味がない？ いや、あのミリオに限ってそんな筈はない。珍しく歯切れの悪い返事をする親友に二人が首を傾げていると…………。

「何て言うかその……………トテモユニークナヒトデスヨ」

なぜか片言になる親友に、やはり二人は首を傾げる。

脳裏に浮かぶのは、今まで見たこと無い程に冷静に激昂するナイトアイと、そんな彼に怯えた様子で頭を下げる二人のトップヒーロー。

『ミリオ、分かっていると思うが……………この事は他言無用だ』

『さ、サー!!』

彼等の名誉を護るため、口を閉ざすことにした通形ミリオ君だった。

この話題は色々と危ない。露骨でも話を逸らそうとミリオが二人に違う話題を持ち掛けようとした時、曲がり角から急に現れる少年と僅かに接触する。

「あ、ごめんねー」

「……………」

咄嗟に謝るミリオだが、相手の紅白の少年は呆然とした様子で通路の先を歩いてい

く。変わった様子の少年に三人は訝しく思うが……………。

「今のつて、一年の子かな？ 大丈夫かな？ なんか心ここに在らずって感じだけど」

「ミリオ、多分今の子は推薦入学の子だ。噂で聞いたことがある」

「え、じゃあ彼がああN.O. 3の？」

遠ざかっていく背中、既に声を掛けるには遠い位置。ただならない様子に心配に思う

三人だが……………対する少年、轟焦凍は不思議な気持ちに包まれていた。

『……………悪いが、お前の相手は出来ねえよ』

『ツ……………それは、俺がアンタより弱いからか……………？』

『うんにゃ、本気でやってねえからだよ。俺が教えることが出来るのは、本気でやってい

る奴だけだ。自分の限界を勝手に決めて、三味線引いている奴に教えられるモノはな

い』

『っ！』

『舐めるなよ、これでも俺はN.O. 1ヒーローだ。本気か全力かの違いなんて見て分か

る』

『……………俺は、俺は！』

『まあ、お前が何を抱えているのかは知らないが……………そう、自分を追い詰める必要は

ねえよ。此処は雄英、お前がなりたいモノも、ちゃんと見付けられる筈さ』

ポンツと、頭部に感触が伝わってくる。ゴツゴツしてて、固くて、けれど温かい。凍った心が少しだけ溶けた気がした。

「頭を撫でられるのは……初めてだな」

人の手は、あんなに温いモノなのか。これまで焼けるような熱さしか知らなかった轟焦凍にとって、ゴジータの出会いには僅かではあるが、確かに影響を与えていた。

記録16

「悪いな緑谷、結局学校では満足に鍛えてやれなかったな」

「い、いいいいえそんな！ ゴジータが謝る事なんて！」

人気の無い浜辺。夜明け前のその場所は、緑谷出久がオールナイトから個性を受け取った場所であり、ゴジータと約束を交わした場所。

本当なら施設の整った雄英で面倒を見てやりたかったが、現在ゴジータは体育祭に向けて警備の準備に忙しく、普段のヒーロー活動と重なって中々緑谷との約束を果たせずにいた。

仮にもNo.1ヒーローが約束を違えるのは流石のゴジータも気が引けた。だから妥協案として、ゴジータは早朝の時間の空いた日に緑谷との一对一の組手をする事になった。

相変わらず緑谷の攻撃は一度たりともゴジータには当たらず、影を捉える事も出来なかったが、緑谷自身は全く気落ちはしていない。元々この組手は緑谷出久に個性の扱い

を馴れさせる為の慣熟期間であり、体育祭に向けての最終調整に過ぎないからだ。

緑谷はあくまでオールマイトの弟子、であれば自分が必要以上に手を出すのは間違っている。O. F. A. 100%の力、それが今の緑谷に許された許容限界値。肩で息をしている相棒の弟子に、ゴジータは改めて告げる。

「さて、今日で本当に俺からの約束は終了だ。O. F. A. の力にも少しずつ慣れ、今ではそれなりに動けるようになった。これで意図して100%の力を使わない限り、お前の体は簡単には壊れないだろう」

「は、はい……これもオールマイトやゴジータのお陰です……」

純粹に尊敬の眼差しを向けてくる緑谷にこそばゆくなるが、大事な話はそれだけではない。ゴジータは無駄なことだと理解しつつ、それでも自分が言うべき事だと、緑谷に指を突き付けて言い含める。

「いいか、O. F. A. の100%はお前が体を鍛えながら徐々に慣れさせていくようにしていけ。仮に危機的状況に陥っても、安易に使うのは極力控えろよ？」

「は、はい……」

返事は良い。〃返事は〃。

「相澤先生からも似たような事を言われているから何度も言いたくないが……：助けられた人間ってのは、助けたヒーローの背中を見つめるもんだ。自分を助けたヒーローが

死にかけているのを見て、助けられた人間は素直に「ありがとう」と言えると思うか？」

「つ、そ、れは……………」

緑谷出久が理想に思うのは、笑って人々を救ってみせるヒーロー。泣いていた子供も、暗い顔をする大人も、皆笑顔にしてしまう最高のヒーローだ。

そんなヒーローに近付く為には、自分の身を守る事も大事。人を助けるという事は、自身もまた窮地に身を置くことを意味している。その言葉の意味を改めて重く受け取った緑谷は、ゴジータの顔を真っ直ぐに見据えた……。

「いいか、ヒーローに与えられる最も嬉しい言葉が「ありがとう」なら、最も悔しい言葉は「ごめんなさい」だ。その事をよく覚えておけ」

「——はい！」

「よし、じゃあ行ってこい。明日はいよいよ体育祭だ。俺も見ているから、しっかりとやるんだぞ」

「はい！　ありがとうございます！」

一礼して浜辺を後にする緑谷を見送り、ゴジータは一先ずこれで釘を刺せたかと安堵する。

緑谷出久とオールマイトは良く似ている。それは二人が元々は無個性というだけで

なく、その精神性と狂気と呼べる程の危うさまでもが、驚く程に酷似していた。ナイトアイがこの事を知れば、別の意味で個性の譲渡を勧める程に。

だが、これはあくまで彼等の問題。外野の人間が指摘をしても、意思決定は二人に委ねるしかないのだ。

……それに、まだオールマイトにO・F・A・が宿っていた頃から僅かに感じた“気配”。それが今の緑谷に渡ってから徐々に大きくなっている気もする。これは二人が無個性だから感じる違和感なのか、それとも別の要因が関係しているのか。

いずれにせよ、O・F・A・に関する情報が極端に少ない今、確証を得るにはゴジータに取れる選択肢は静観しかない。そういう意味でも、今回の雄英体育祭への警備主任としての参加は丁度良かった。

体育祭でもし緑谷が譲渡されたO・F・A・に対して不信感を抱いたなら、その時は相談に乗ってやろう。相棒の弟子なのだ、それくらいの面倒を見てやる気概はゴジータも持ち合わせていた。

「さて、それじゃ俺も打ち合わせに行こっかな」

……………と、その前に。

「——オールマイト、一体いつまで其処にいるつもりだ？」

これ迄ずっと、木陰の中から此方を様子見していた人物に声を掛けると……。

「ぐぎぎ、ズルいぞゴジータ。私も緑谷少年に色々教えたり導いたりしてみたかったのに！」

悔しそうにハンカチを嘔む、嘗ての相棒が恨めしそうに此方を見ていた。

「いや知らんがな」

そんな相棒に、すっかり気安くなったゴジータの言葉は、何処までも辛辣で友愛に満ちていた。



——そして、当日。ヴィラン襲撃の事件による不安をはね除け、雄英体育祭は遂に開催された。観客席には訪れた多くの見物客や現役のヒーロー達が詰め掛け、各マスメディアはヴィラン襲撃の被害に遭った一年A組をこれでもかと露骨にピックアップしてくる。

そんな中、会場の外では出店が多く立ち並んでいる。何れも雄英高校から認可の下りた正式な店舗、各出店はわたあめや焼きそば等お馴染みの品目で溢れていた。

「うわー、分かっていたけど凄い人気ですね。雄英体育祭は。毎年こうなんですか?」
「まあな。お前は出身が北海道だから馴染みがないかもしれないけれど、雄英体育祭は毎年こんなもんだ」

「でも、本当に開催しちやつて大丈夫なんですか? ヴィラン襲撃の件に未だ懐疑的な声だつてあるんですよ?」

「だからこそだ。たかがヴィランの襲撃なんぞ恐るるに足らんと、それをアピールする意味での今回の開催。故に今年の警備は例年よりも遥かに——」

「あ、すいませーん、たこ焼き一つくださいーい」
「聞けよ」

そつちから話を振っておいてそれは無いだろうとツツコむ樹木ヒーロー「シンリンカムイ」。先輩からの話を途中で聞き流すマイペースなヒーロー「Mt.レディ」、両

者とともに今年の春から劇的にデビューを果たした新人達。

そんな彼等が今回の雄英体育祭の警備に任命されたのは、偏にキャリアの為かそれとも——。

「はいはい！ 5000円ね！」

「——え？」

高つ。意外といいお値段しているたこ焼きに固まるMt.レディ、数秒の逡巡の後に彼女が出した答えは……。

「あの、今持ち合わせがなくなつてえ……」

普段は凶太い性格の彼女は、自前のプロポーションと流し目による色仕掛けで、値切りを交渉し始めた！

「じゃ、じゃあ只でー！」

そして、そんな色仕掛けに屈した出店の店主は勢いで無料で渡すことにしてしまつた。これには色々とがめついMt.レディもニツコリ。

「ありがとう——つたあ！ 誰よいきなり！」

「いや、ありがとうじゃねーよ。ちゃんと金を払え」

「ツ!?!」

有り難く差し出されたたこ焼きを受け取ろうとして、その脳天を手刀で叩かれる。突

然の予期せぬ衝撃に、両手で押さえながら恨めしそうに振り返ると、現役ゴのNo. 1ジーが新人ヒーローレディを見下ろしていた。

「ゴ、ゴゴゴゴジータさんっ!? なんで!? 担当区は此処ではない筈じゃあ!」

「いや、俺普通に警備の責任者だから。普通に全区画担当だから、最初の顔合わせの時に説明したろ?」

「ヤッバイ。緊張してて聞いてなかった。その昔、とある事情で一方的に面識のあったMt.レディは、憧れのゴジータと同じ仕事場に入れることに浮かれ、今回の仕事の詳細を聞き逃していた。」

「あのあの、その……」

「さては聞いてなかったな……はあ、仕方ない」

「——っ!」

吐き出される溜め息、明らかに失望されたその態度にMt.レディは少くないショックを受けた。嘗て憧れたヒーローから失望され、らしくない自己嫌悪に陥つていくMt.レディに、シンリンカムイとデステゴロは見守る事しか出来なかった。

「おっちゃん、たこ焼きを四つくれ。二千円でいいな?」

「お、おお、まいどありー!」

すっかり意気消沈となったMt.レディを放置し、ゴジータは出店の店主からたこ焼きを四つ程購入。何をするのかと様子を見守っていると、その内の一つをMt.レディに差し出してきた。

「ほれ、その様子だと仕事ばかりで碌に飯食ってねえんだろ？ 警備とは言え体力を使う仕事だ。時間の合間に食っておけ」

「え、イヤでも私、本当に持ち合わせがなくなつて……」

「普段ヒーロー活動で頑張っている同業者を労つてやるくらいの甲斐性はあるつもりだ。アンタはまだ新人みたいだし、これくらいのお節介は別にいいだろ。ほれ、シンリン先輩とデステゴ先輩も」

「あ、ありがとう」

「いやデステゴ『ロ』な？ いい加減ちゃんと呼んでくれよ」

Mt.レディの事を日頃のヒーロー活動で疲れた良くあるミスだと認識したゴジータは、たこ焼きを奢ることで自分なりの労いをする事にした。嘗ては多くの人達にフォロワーされてきたゴジータは、こうして良い先輩後輩の関係が生まれるのだなど、一人たこ焼きを頬張りながら納得していた。

一方で、No.1ヒーローから奢つてもらえた事に色々と思考が追い付いていないMt.レディは、手渡されたたこ焼きを見つめたまま固まつてしまっている。

「そーいや聞いたぜシンリン先輩。アンタって俺と相棒が活動自粛していた頃、ヴィラン退治やら災害救助に大分活躍してくれたらしいじゃないか」

「きよ、恐縮です！」

「いや何故敬語？ 頑張ってくれるのは嬉しいが、あんまり無理すんなよ。ヒーロー活動も身体が資本だからな」

「お、お気遣いありがとうございます！」

「だから何で敬語？ そんなでそつちの………Mt. レディだっけか？」

「ッ!？」

自分のヒーロー名が呼ばれ、Mt. レディの意識は一気に現実へ引き戻される。

「新人で実際のヒーロー活動に戸惑う事も多いと思うが、あまり張り詰めるなよ。何かあったらすぐに頼っていいからな」

じゃあ、と。たこ焼きを食べ終えたゴジータは空となったプラスチックの容器をゴミ箱に捨て、次の区画へ向かう。

そんな彼を、Mt. レディが一瞬だけ呼び止め。

「あ、あのゴジータ！」

「ん？」

「が、頑張ってください！」

「おう、サンキューな」

まるでフアンのように慕ってくる彼女に、ゴジータはサムズアップで応えて飛翔。一瞬で空の彼方へ消えていった。相変わらず凄い人だと、恍惚とした表情で見送るMt.レディ。

「さあ！ ちやつちやと食べて警備行くわよ！」

「ちよつとコイツ現金すぎない？」

「まあ、今回ばかりは大目に見ましよう」

すっかりやる気を取り戻したMt.レディ。分かりやすいその性分に呆れながらも、今日一日だけの三人の警備は続く。

記録 17

『さあ、遂に始まったぜ個性社会のオリンピック！ 今回は噂の一年A組が出てくるから、注目が集まること山の如し！ 刮目しろよりスナーども、今回の雄英体育祭は一味違うぜ！』

雄英体育祭。人類が“個性”という異能を持つようになって、スポーツの祭典であるオリンピックが形骸化しつつある中、個性を大つぴらに使用されることを許された雄英体育祭は、日本中から注目されていた。

そして、この体育祭はヒーローの卵である雄英生徒達のお披露目を見るだけでなく、有望な生徒達を自分の事務所に引き込もうとする現役のプロヒーロー達のスカウトの場である。

メディアだけでなく、ヒーロー達からも注目を浴びるようになり、例年の雄英体育祭はかなりの盛り上がりを見せていた。

『さて、そろそろ開会式が始まるんだけど……レイザーヘッド、一つ質問していい？』

お前って確か……結構な重傷者だったよな？」

『そうだな』

『いや、なんで既にほぼ全快してんの？ 特に右目、後遺症が残るって俺聞いてただけ

ど………トウルツトウルじゃね？』

『そうだな』

『なんで？』

そんな誰もが体育祭に注目する中、MC担当のプレゼントマイクは半ば強引に連れてきた相澤に改めて疑問を吐露した。目の前の親友は先日ヴィラン襲撃に遭い、重傷を負った。

両腕はへし折られ、中でも彼の最大の武器である目は眼底から骨を折られてしまい、個性使用に影響が出る程の後遺症が残るとされていた。

なのに、現在の相澤は片腕にギプスが巻かれている程度で殆どの傷が完治同然になっている。特に目の方は眼底の骨処が元々あったドライアイすら治療され、その瞳は少女漫画に出てきそうな位にトウルツトウルとなっている。

これには流石のプレゼントマイク——山田ひぎしもツツコミを入れざるを得なかつた。

『聞きたいか？』

『ヒェツ』

首をギョルンとさせて振り向いてくる相澤に、思わず口から変な悲鳴が漏れた。

『聞きたいなら教えてもいいが……その時はお前も、俺と同じ所まで落ちてもらおうぞ？』

『ええ？ ええ？ なに、どうしたの消太？』

『一度聞いたら絶対に逃がしはしない。墓場まで持つていつて貰う事になるが……それでも聞きたいか？』

『いい、いえ結構です！ もう詮索しないので……その目で迫って来ないでー!? 怖い、物凄く怖いから!!』

少女漫画に出てきそうな瞳をしているのに、血走っている相澤の目に恐怖した山田ひざしは、自分の好奇心を呪いながら強引に話を反らした。

『さ、さあ！ 遂に始まった雄英体育祭！ 最初の種目は障害物競争！ 雄英きつてのド派手な障害に、果たして有精卵達はどうか切り抜けるのか、見物だぜ!』

額に冷や汗を流しながら司会進行役を全うしようとするプレゼントマイク、そんな彼の横顔を静かに見つめる相澤の絵面は、軽くホラーチックだった。



雄英体育祭の最初の種目、多くの生徒達が篩に掛けられると知られる障害物競争。毎年様々なギミックが施され、例年の盛り上げに必要不可欠な催し。

既に入入り口は出場する生徒達でごった返し、体格の小さな生徒は人混みの中で揉みくちやにされている。いち早くゴールを目指そうと、誰もが前に行くことを欲張った結果である。

早く始めてくれ、人混みに揉まれる生徒達の祈りが通じたのか、遂にプレゼントマイクからのスタートの合図が出された。これで漸く進めると、生徒達がいち早くゲートから抜け出そうとした時……………。

地面が凍り付いた。

『アーツと！ 開始早々早速ハプニング！ ゲートが氷漬けにされたあ！ これにより前に出ようとした多くの生徒が文字通りの足止めを喰らったあ！』

地面が凍り付き、物理的に足止めを受けた生徒達が寒さと痛みに悶える中、一人の少年がゲートから現れる。赤と白の頭髮が特徴的な少年、雄英に推薦で入学した少年——
轟焦凍である。

『ゲートからいち早く出てきたのは轟焦凍！ 雄英に推薦で入学したエリートは初っ端から見せ場を見せ付けていくう！』

『当然だな。ゲートでみんな仲良くはいスタートな時点で、アーツの間合いに入っているのと同然。この結果は予想出来た』

他の生徒達が必死に氷の足止めから抜け出そうとする中、轟は涼しい顔で前をひた走る。初っ端から初見殺しを見舞う容赦のなさに舌を巻くプレゼントマイクだが、相澤の方は当然だなど息を吐く。

しかし。

『だが、そんな単純な作戦が通る程、雄英の生徒は甘くはない』

多くの生徒達が足止めを受けるなか、幾つもの人影が続いてゲートを抜け出していく。それはいずれも一年A組の面々、ヴィランの襲撃という窮地を潜り抜けてきた雄英創設以来の注目株達。

八百万百は棒形状のモノを創造し、高跳びの要領で抜け出し、爆豪勝己は自前の個性で飛び抜ける。他のヒーロー科の生徒達も続々と抜け出す中、一つの影が更に飛び抜けた。

全身に翡翠色の放電を纏わせ、ほんの一部だが個性を上手く使いこなせている、同じくヒーロー科一年A組の……緑谷出久である。

プレゼントマイクのスタート宣言と共に個性を発動させて跳躍した緑谷は生徒達の垣根を飛び越え、轟達を追い抜くべく追走する。

『おおっと！ 他の一年A組と同様に此処で緑谷も前に出たあ！ と言うか、なんかアイツ凄くね？ ついこの間まで碌に個性を使いこなせてなかったって聞いてましたけど!?!』

『……………』

全身に力を纏わせ、駆け抜けていく緑谷にプレゼントマイクは驚愕し、相澤は目を細くさせて観察に徹している。

緑谷出久の個性は自らの肉体すらも破壊してしまう【超パワー】の個性だ。腕を奮えば腕を折り、足を振り抜けば足を折る。まさに諸刃の剣であり、その危険性に相澤は常日頃から緑谷に個性の慣熟を焦らせた。

まだ使いこなすのに時間は掛かるだろうと思っただけに、目の前で元気よく走り

抜ける緑谷に相澤は感心以上に不思議に思っていた。一体緑谷の身に何が起きたのか、思考を巡らせている内に相澤が辿り着いたのは……一人のヒーローだった。

ここ最近、警備の下見と称して雄英のアチコチで姿を見せていた元雄英^Bの生徒。雄英に在学していた頃から色々とやらかしていた彼は、その頃から生徒達にアレコレ吹き込んでいたと聞く。

自分の怪我をサラツと治した国家機密レベルの豆の件といい、本当にやってくれるなと、相澤は人知れず頭を抱えた。とは言え、これで緑谷も漸く他の生徒達に追い付いたと見ていいだろう。

ここからが本当の意味で緑谷の実力が試される事になる。今はただ見守る事しか出来ない相澤は一先ず生徒達の奮戦を見守る事にした。

『さて、早くも第一関門に差し掛かるぜえ！ 最初の関門は雄英生お馴染みの仮想敵！ 押し寄せるヴィラン擬きの群れに、どう対処するよ有精卵どもッ！』

煽るプレゼントマイクに対し、ヒーロー科の生徒達は瞬く間に仮想敵を倒していく。入学時には脅えていた緑谷も、強化した拳で薙ぎ倒していく。

既にトップとの距離は僅か、聞こえてくる幼馴染み^{*}からの罵声を聞き流しながら走り抜ける緑谷を見守っていると、相澤の携帯にメッセージが届く。

一体なんだと、やや鬱陶しそうに携帯を覗くと……………。

【よくよく考えれば、有精卵って普通にセクハラじゃね?】

雄英以来初となる伝説の超問題児からのメッセージに……………。

【仕事しろ馬鹿野郎】

相澤はトゥルツトゥルなジト目で辛辣に返すのだった。



「相変わらず厳しいなー相澤先生、ちょっとはノツてくれてもいいのに」

場所は雄英体育祭の会場。休憩時間に送り、そして即返ってきた返事に、ゴジータは苦笑いを溢しながら携帯を懐にしまう。どうやら相澤もゴジータが作った仙豆擬きの効果で傷の大部分が癒され、後遺症が残るとされていた目も回復し、ついでにドライアイも解消された。

そんな万々歳の結果に当の相澤は納得出来ず、ゴジータを雄英の敷地内で見掛けた際は問答無用で詰問した。一体自分に何を飲ませたのかと、迫る嘗ての恩師にゴジータはトウルツトウルの目になった相澤に爆笑しながら説明した。

仙豆擬き。あらゆる傷を癒し、治す不可思議な豆。ゴジータが目指しているところある技の副産物として生み出された奇跡の一粒。オールマイトの古疵を癒したのもコレで、現在は改良されて更に質が向上していると自慢気に語るゴジータに、相澤は軽く眩暈を覚えた。

そして、トドメにこの事を知るのには一部の人間だけで、雄英にも知る者は根津校長とリカバリーガールしかおらず、恐らくは国家機密レベルの代物になると語るゴジータは、ヘラヘラしながら「そんな訳で相澤先生、あまり人に言い触らすなよ」なんて宣言始末。

聞いた自分も悪いだろが、そんなこれ迄の医学技術を嘲笑うかの様な代物をホイホイ生み出し、スナック菓子の感覚で食べさせてくるゴジータに、バツクドロップを見舞った相澤は決して間違つてはいない。

—— 閑話休題。

ともあれ、元気になった恩師に機嫌を良くしたゴジータは次の見回り場に向かうため会場を後にしようと会場内を歩いていくと、曲がり角から見知った男が現れた。

灼熱の炎を威嚇の様に纏わせ歩くその男は……エンデヴァー。『努力』の名を冠するNo. 3ヒーロー、2mに迫る巨漢がゴジータを見ると、一瞬目を見開いて固まった。対するゴジータも、先のエンデヴァーとのやり取りもあって何となく足を止めてしま……結果、体育祭の会場にトップヒーローが二人も出会ってしまう形になった。「……………なんだ貴様、俺に用でもあるのか?」

「ああ? そつちこそ、人の顔見るなり足を止めてんじやねえか」

邂逅から険悪な空気、互いに睨み付けるその空間に、進んで関わろうとする人間はそうはいないだろう。

「あれ? ゴジータにエンデヴァー、二人とも何してるんだい?」

そして、そんな二人の所に現れるオールマイト。奇しくも、ヒーローのトップ3が集う。ファンが見れば大興奮間違いなしのその現場に――。

「するわ。するわよ! 男達による青い匂スメルいが!!」

影から覗いていたミッドナイトが、鼻息を荒くしながら携帯の連写機能をフル活用していた。

記録 18

—— 走る。障害物として設置された仮想敵や、巨大な落とし穴を乗り越え、今日まで個性と己を鍛え続けてきた緑谷出久は、前を行く二人のクラスメイトに追い付き追い越すべく、最後の関門である地雷原（仮）を突き進む。

翡翠色の放電が全身から迸り、踏めば炸裂する地雷の爆風を利用し、加速し続けること数秒。遂に両者の背中を捉えた緑谷は、ここで初めて彼等から妨害を受ける。

「邪魔だ！ クソナード!!」

「お前の相手は後だ、緑谷！」

爆破と氷。視界を覆う衝撃と冷気を前に、緑谷は停滞でも迎撃でもなく、前進を選んだ。
Plus Ultra
更に向こうへ、雄英の校訓を胸に刻んで爆破の衝撃と凍てつく冷気を前に、緑谷出久は一步踏み込んだ。

瞬間三人を中心に地雷が爆発し、その音と衝撃に二人の距離が開く。閉ざされた扉を

決じ開けた様な錯覚を覚えた緑谷は、そのまま己の脚に力を込めて一直線に駆け抜ける。

周囲の歓声も、MCであるプレゼントマイクの言葉も、今の緑谷には届かない。このまま突っ走れと叫ぶ自身の心にだけ耳を傾け、背後から猛追してくる二人を引き離す。

そして――。

『来たあッ！ 多くの関門と難関を潜り抜け、最初にゴールに辿り着いたのは、ヒーロー科一年A組の緑谷出久だあッ!!』

最後の会場に続く一本道を走り抜けると、会場に備え付けられた巨大なモニターに自身の名前と姿が映し出されるのを目にした緑谷は、自分の実力が十分に発揮できた事やその末に得られた結果に、感情が爆発しそうになった。

が、その感情は会場を埋め尽くす歓声と共に引いていく。追い付いた爆豪と轟も、急に静かになった会場に面喰らっていると……。

「お、おい、アレって……エンデヴァー、だよな?」

一人の観客席にいるヒーローが呟くのを皮切りに、ざわめきは広く伝播していく。一体どうしたんだと観客達が向ける視線に顔を向けると。

「オールマイイトもいるぞ」

「それで二人の間にいるのって……ゴジータじゃないか!？」

No. 3 ヒーロー、エンデヴァー。

No. 2 ヒーロー、オールマイト。

No. 1 ヒーロー、ゴジータ。

日本のヒーロー界の頂点に君臨している三人が、横並びになって腕組をしている。ただそこにいるだけで圧巻で、圧倒されそうな存在感。何でヒーローのトップ3が揃い踏みなのか、彼等の迫力を前に誰一人疑問の言葉が出せていない一方で。

(何故……)

(一体……)

(どうして……!)

(「こっとなった!」)

日本の平和をその背に背負っている三人のヒーローは、揃ってほぼ白目を剥いていた。



(おい、どうするんだ貴様！ 折角焦凍の様子を見に来たと言うのに、貴様の所為でいらん注目を浴びてしまっているではないか！)

(うっせえ知るか！ て言うか息子の応援に来たつて言うならコスチューム脱いでから来いや！ 忍ぶという気遣いが出来んのかテメーは!?)

(本当に目上の人間に対する礼儀がなつとらん貴様は！ 俺はあくまで警備の補充要員に過ぎん、貴様がボロを出すまでの間の、な。尤も、この分だと俺の出番は近いようだがな)

(ハッ、そりゃあそうだろうが。アンタの所の事務所は数を武器にしている。数十人規模のサイドキックを従えてりや、大抵の事は出来るだろうよ。尤も、俺みたいな新人ヒーローと張り合っている時点でアンタの程度が知れるがな)

(そ、其処までにしようよ二人とも！ 周りのヒーロー達も怯えちやつているから！ コラ！ メンチを切り合わないの!!)

ほぼ白目を剥きながら睨み合うゴジータとエンデヴァーを諷めるオールマイトだが、彼の制止の呼び掛けの声は届いた様子がない。何故ゴジータとエンデヴァーが此処ま

で険悪な関係になってしまっているのか。初めて目の当たりにする光景に、流石のオールマイトもどう仲裁するべきか悩んでいた。

雄英体育祭の主役である生徒達を差し置いて注目を集めてしまった事、流石にこのままでは不味いと退出を促すオールマイトだが、どういう訳か二人の間に因縁があるらしく、オールマイトの声も中々聞き入れようとしなかった。

故に、互いに引かない二人に引き摺られる形で観客席にまで来てしまった訳だが……。

(小僧、あまり凶に乗らん方がいいぞ。お前の様な青二才が座っていられる程、No. 1ヒーローの座は安くはない。己の恥を晒す前にさっさと退くがいい)

(退かせてみるよ。アンタに出来るものならな)

「——俺じゃない」

「……………なに？」

睨み付けてくるエンデヴァーに、不敵な笑みを浮かべるゴジータ。互いに引かない意地の張り合いだったが、その張り合いはエンデヴァーが唐突に引き下がることで幕を引く。

「お前を、お前達を超えるのは俺じゃない。俺の息子が、必ずお前達を超える。そうなるために育ててきた」

「エンデヴァー、君は……」

「アంత、何を言つて……………?」

背を向け、その場から立ち去るエンデヴァー。一度だけ二人に向けて振り返るその横顔は狂気染みたモノに歪んでいた。一抹の不安さと不気味さを残して去り行くエンデヴァーに、二人は声を掛ける事が出来なかった。



雄英体育祭の次なる種目、ポイントとなるハチマキを奪い合う騎馬戦は、個性の使用を勧めるだけあって白熱した展開となっている。歓声が会場を震わせるのを尻目に、改めて警備に勤しむゴジータは先のエンデヴァーの異様な雰囲気気が気になっていた。

（エンデヴァーの息子、か。確か轟……………焦凍だっけ？ 今年雄英に推薦トップで入学し

たつていう。そうか、あの子が彼の……)

思い返すのは先の警備の下見に雄英に赴いた時出会った、紅白に分けた髪と顔の左側に火傷を負ったクールなイケメン風の少年。初対面の時から何かと闇深い印象だったから覚えているが、彼がエンデヴァアの息子だと知ると、ゴジータの頭に嫌な予想が思い浮かぶ。

“個性婚”。親同士の個性を混ぜ合わせ、より強い個性の子供を“作る”という名目で、個性社会の黎明期に行われた行為。現在は既に風化し、個性目的で結婚することを忌避されており、禁止とされている悪しき風習。

もし、あの時エンデヴァアの言っている事がその事を意味しているのなら、万が一それが世間に露見した際、ヒーローの世間に対する信用の失墜に繋がりがねない。仮にもエンデヴァアはNo.3のトップヒーローの一人、そんな彼が個性婚で子供を自分の目的の為に作っている奴だと世間が知ればそれは、その制裁はバッシング処では済まなくなるだろう。

勿論、これはあくまでゴジータの推論であり、断言できる要素は何一つない妄言だが、先のエンデヴァアの様子を見る限り一概に否定出来ない。

(い、いやでも！ 家庭の方は円満かもしれないし！ 喻え生まれる子供の個性を狙った結婚だとしても、後から愛ある家庭に変わったのかもしれないし！)

そんな可能性に過ぎない話を、ゴジータはそういう風に思い込むことで否定しようとする。そう、エンデヴァーがあんな態度を取るのも、偏に息子の焦凍に対する愛情があつての事。焦凍君の将来性を考えたからこそ、あの様な態度になつてしまったのだから。

焦凍君の顔の火傷？ ……個性訓練の際に出来た傷なんじゃないかなーと、ゴジータは思った。と言うかそつうであつて欲しい。これで本当に自分の考へている通りだつたら、今後エンデヴァーに対する見方が色んな意味でネジ曲がりそつうな気がする。

（——と、あまり関係ない事ばかり考へてもいられないな。一先ず警備を続けとこ）

今頃騎馬戦の方は終わりを迎えている頃だろうか、歓声は止まり、プレゼントマイクから次の種目を準備している間に簡単な休憩を挟む報せが届く。

恐らく、例年通りなら体育祭最後の種目は生徒達による個性ありの試合になるだろう。殴つてよし、蹴つてよし、投げたり絞めてよし等の何でもあり。過剰攻撃以外何でもありな体育祭。悔しくも高校一年の時は参加できなかったが、続く二年三年の頃には連覇を成し遂げていたゴジータにとって、今回の目玉種目は最終種目だと予め予想を立てていた。

さて、どうやつて緑谷の応援に向かうとするか、それとも会場の屋根付近から密かに

見守る程度に留めておくべきか、昼休憩に備えて今の内に相棒の弟子をどう見てやるか——なんて考えながら会場の方へ足を進めていると……。

「そして、追い詰められた母はある日俺の顔に煮え湯を浴びせた」

「——ん？」

何だろう、向こうの通路から不穏な言葉が聞こえた気がした。恐る恐る通路口から覗き込むと、自身が気に掛けていた緑谷と轟が向かい合う形でそこにいた。

二人の間にある空気は険悪の類いではない。が、別の意味で緊迫したモノになっている。偶然二人の会話を聞いてしまったゴジータだが、火傷を負った自分の顔に手を当てる轟を見て、ゴジータの足は止まってしまっていた。

「——お前がオールマイトとどういう関係にあるかなんて関係ねえ。俺は、母さんから受け継いだ右^{*}だけでテメエに勝つ。俺が言いてえのはそれだけだ」

しかし、自分の言いたいことを言い終えた轟が此方に近付いてくる事を察したゴジータはその場から跳躍して姿を消す。幸いゴジータの存在は気付かれる事はなく、轟はその場から立ち去っていく。

「僕は……多くの人達に支えられ、導かれて此処にいる。恵まれただけの人間だ。でも、それでも僕は言うよ。『君に勝つ』、それが今の僕に出来る最大の敬意だと思うから」

その際、ビビリながら拳を握り締め、歪に笑みを浮かべる緑谷を一瞥すると、今度こ

そ轟は振り返る事なくその場を後にする。

緑谷もその場から離れていく。気配が遠退く二つの気配に安堵しながら降り立つゴジータだが……………。

「いやー、マアジかぁー。轟さんちの焦凍君の家庭環境。あの色々ときマった表情を見るに……………ガチっばいなあ」

轟焦凍が抱える闇、自身の顔に火傷を負わせた母に対する憎悪ではなく、其処まで母を追い詰めたエンデヴァーこそ元凶であることを分かっているから、母を憎まずにいられたのだろう。

優しい子だ。そして、その優しさ故に拗れてしまった彼の歪みを解きほぐしてやるのも……………ヒーローの役目だ。

但し、その役目は自分ではない。轟焦凍の歪みを糺せるのは父親でもN.O. 1ヒーローでもない、彼と正面からぶつかってやれる——友達だ。

そして、その友達として並び立てる者もまた、雄英には数多くいる。嘗ての自分がそうだったように、凝り固まった彼の価値観も、きつとなんとかしてくれるだろう。

問題は……………。

「エンデヴァー。アンタ、マジで何やってんだよ……………」

家族を追い詰め、伴侶を追い詰め、息子は自分達を超える為の存在。そう言い切るエ

ンデヴァーに、ゴジータは落胆せざるを得なかった。

「こりゃあ、波乱がありそうだな。お前はどう思うよ、ボンバーマン」

「誰がだ！ アンタのボキヤブラリーどうなってんだ？」

鬱屈とした空気を無理矢理にでも変える為、ゴジータは今まで隠れていたであろう人物に声を掛ける。すると、奥の通路から掌から爆発を発しながら爆豪勝己が現れた。

「いやなに、お前のクラスに色々と拗らせた奴がいるなーつてよ。首席入学者であるお前の忌憚なき意見って奴が聞きたいだけさ」

「……………関係ねえよ」

「あ？」

「クソデクも半分野郎も、何を抱えてんのかなんて俺にはどーでもいいんだよ！ 今回の雄英体育祭では、俺が優勝するって決めてんだ。完膚なき勝利と言う形でなア……………」

「！」

「お、おお、向上心があるようで結構」

「ケツ、見てろよ。俺はもつと強くなる。今よりずっと強くなって、いつかオールマイトやアンタを超える最強のヒーローになってやる！ 覚悟してろや!!」

そう息巻いて、会場内へと戻っていく爆豪。勝ち気を通り越して追い詰められた様子の少年に、ゴジータは頭を掻いて……………。

「……………なんか、拗らせてる奴多くね？」

そう、愚痴を溢さずにはいられなかった。

一先ず、警備を続けよう。自分は他のヒーローより自由に動ける分、担当を任されている区画が多い。この後は三年生の所にも顔を出さなくちゃいけないのだと、自分もこの場から離れようとした時、ゴジータの携帯に着信が入る。

事務所からだ。オールマイトとのチームアップを解消した後、何人か優秀な事務員を紹介してもらったゴジータは、此方からお願ひした形で新たに立ち上げた自分の事務所にて働いて貰っている。

そんな、色々と頭の上がない事務員からの連絡。何事かと思い出てみると……………。

「此方ゴジータ、どうした？——なに？ 保須市でヒーロー殺しが現れた？ 被害者は……………インゲニウム、だと？」

それは、嘗てゴジータが雄英生一年の時、職場体験先で世話になったヒーローの名前。そんな彼が、ヒーロー殺しなるヴィランの襲撃を受けて重傷。衝撃的な報告にゴジータは驚きを顔にしていた。

記録 19

「インゲニウムが………重傷………」

雄英体育祭も終盤。騎馬戦も終わり、上位4チームが最後の種目に挑む一方、レクリエーションで盛り上がる会場の空気を他所に、事務所から告げられる恩人の悲報にゴジータは内心動揺していた。

ヒーロー「インゲニウム」、ゴジータが学生の頃、職場体験の際に世話になった面倒見の良いヒーロー。当時から自身をゴジータとして追い詰めていた甚田を、少なからず気に掛けた人物。

この頃から既に他のヒーローとは隔絶した実力を有するゴジータに、インゲニウムも一度は心がへし折れたが、後藤甚田の危うい部分を見てからは何かと世話を焼いた苦勞人。

そんな恩人とも呼べる人物が、ヒーロー殺しによって重傷を負っている。場所は都心の某大手の病院、現在は一流の医療スタッフ達による集中治療中との事。

峠こそ越え、危険な状態からは抜け出せてはいるが、恐らくヒーローとしての再起は絶望的だと、事務員からの報告はそう締め括られる。

これは、またもやこの豆の出番か。ゴジータがコスチュームの胸ポケットにしまった箱を取り出して開けると、中には残り二粒の仙豆擬きがあった。

警備の主任を任された時、念の為に自宅から持ってきた仙豆擬き。大怪我をした生徒が出てきた時を想定して持ってきたが、本来の目的とは違う用途で使うことになりそう
だ。

だが、現在インゲニウムは手術を受ける真つ最中で、とてもではないが豆を頼張る余裕はない。命の危機から脱したのなら、体育祭が終わった頃にでも向かうとしよう。オールマイトから教わった焦った際の心の落ち着かせ方を試しながら、ゴジータは自身の胸中を落ち着かせる。

世話になった恩人を必ず助けることを誓いつつ、ゴジータは改めて警備の仕事に戻るのだった。

そして……………。

「あ、あのゴジータ！ 今お時間良いですか？」

「お前は……………拳藤？ なんだどうした、お前はレクリエーションに参加しないのか？」

警備の最中、会場へ続く通路口でレクリエーションに参加している生徒達を見守って

いると、一人の少女が此方に気付いき、迷いながら走り寄ってきた。

拳藤一佳。先のヴィラン人質の件から、何かと顔を合わせているヒーローの卵である。

「いえ、現在参加している最中なんですけどその……………今借り物競争中で、私の課題をクリア出来る人がゴジータしかいないから」

何やらモゴモゴと口ごもり、快活な彼女らしからぬ態度だが、要は借り物競争に自分の手を貸して欲しいとの事。子供の競技に自分が参加して良いのか悩み所だが、チラリと進行役のミッドナイトを見る限り、レクリエーションだから問題ない様だ。

サムズアツプしてくる嘗ての教師。それなら良いかとゴジータも納得すると、不安そうにしている拳藤の側に寄る。

「分かったよ。けど俺も仕事中の身だ。申し訳ないが、速攻で終わらせるぞ」

「え？ きやつ!？」

抱き抱えられ、拳藤が困惑の声を上げるのも束の間。ゴジータの超スピードにより会場内を瞬く間に駆け巡り、順位的に下だった拳藤は一瞬の内に一位へ返り咲いていた。

「ほい、おしまい。じゃあな」

「え、え、……………あれ?」

そしてそのままゴール。あまりにも一瞬だった為、何がなんだか分からない拳藤。そ

んな彼女を丁寧の下ろすと、ゴジータはボンボンと頭を叩いて正気に戻す。

『一位おめでとう拳藤一佳ちゃん！ て言うかゴジータ、アンタそんなファンサービスが出来るならもうちよつと堪能させて上げなさいよ！ 一佳ちゃん呆然としてるじゃない！』

「出来るわけ無いだろうが、No. 1ヒーローとはいえ、いい歳した野郎が長時間女子高生の体に触れるとか、普通に問題案件だわ」

後藤甚田キヤ的に考えても、女子との密着は心臓に悪い。幾らミルコの過剰なスキンシップを経験してきたと言っても、中身は未だ恋愛未経験のクソザコ陰キャ。生の女性に長時間触れていられる程、精神的タフネスさは持ち合わせていないのだ。

今回は一瞬の接触の為に耐えられたが、緊急の案件以外女性の柔肌に触れたことの無い後藤甚田にとって、今の時間は色んな意味でキツかった。華がないとブルー垂れるミツドナイトを尻目に、ゴジータは別の所へ向かう為に空へ向かって飛翔し、瞬く間に消えていった。

一方その頃。

「ゴジータに……お姫様だっこ、されるだど？」

血走った目でモニターを食い入る様に見つめるMt.レディ、彼女の周辺にはデステゴロとシンリンカムイ以外、誰も寄り付かなかったという。

「……………もしかして俺ら、今後も組まされる事があつたりする?」

「その可能性は、極めて高いかと」

若手実力派のヒーローの達観に満ちた言葉に、デステゴロはやれやれと肩を落としたりした。



その後、レクリエーションも終えて遂に雄英体育祭最大の見せ場がやってきた。雄英生徒達同士によるガチンコバトル、個性の使用を認められた日本中が注目する場面。多くのヒーロー達が見守る中、ヒーローを志す卵達がそれぞれの想いを抱きながらぶつかった。

多くの卵達が鎬を削る中で、一際輝くダイヤの原石達。中でも緑谷出久、爆豪勝己、轟焦凍の三人はその個性故か多くのヒーロー達の目に止まった。

爆豪は爆破の個性で相手を蹂躪し、轟は氷の個性で封殺。緑谷は最近になって個性の扱いになってきた所為か、一回戦で危ない場面はあったものの圧倒的パワーで完勝。

いずれも障害物競走や騎馬戦で活躍した卵達。今度はどんな戦いが見れるのか、プロヒーロー達の注目が集まる中始まる第二回戦。

結果は——。

「結果は……まあ、その様を見れば一目瞭然だわな」

「あ、あははは………」

体育祭の会場、そこに備え付けられた医務室のベッドで寝かされている緑谷を見て、ゴジータは呆れた顔を浮かべるしかなかった。

先の二回戦、優勝候補である焦凍と戦うことになった緑谷は、大会直前に教わったフルカウルを駆使して奮戦。推薦入学者を相手に善戦以上の戦いを見せた。

O・F・Aの力を10%引き出したの戦闘。オールマイトの10分の1程度とは言え、それでも単純なパワーでは他より頭一つ抜きん出ている緑谷は、持ち前の分析能力も駆使して徐々に轟を追い詰めていった。

このまま行けば緑谷が勝つ。以前までは何かをする度に身体を壊していた同級生が、

今では推薦入学者を相手に圧倒している。クラスメイト達が驚き、爆豪が面白くなさそうにしているなか、試合の行方は予想だに出来ない方へ進みだす。

「君の力じゃないか！」　この啖呵まではかっこよかったんだけどなあ……」
「う、うぐう……………」

本来の全力を出さずに戦う焦凍を見て、遂に緑谷の中にある何かが切れた。どんな経緯で生まれ、どんな境遇で育ち、母から煮え湯を浴びせられたとしても、持つて生まれた力は君の力だ。そう語る緑谷の言葉が轟の琴線に触れたのか、轟焦凍は感情的に左の力を解放させた。

長らく封じていた父親の個性、それを遂に自分を受け入れたと錯覚したエンデヴァーはこの時凄まじい雄叫びを上げたのをゴジータは覚えている。周囲の人間が親バカかな？　と思っている一方、轟家の闇深さを断片的に知っているゴジータは、エンデヴァーを其処まで微笑ましく見ることは出来なかった。

—— 閑話休題

それで、自身の言葉で何か吹っ切れた様子の轟に改めて挑む緑谷は、禁止されていた100%の力を解放して轟と肉薄。轟も解放された炎の力を使い、全力の一撃を緑谷に見舞う。

衝突の破壊力と規模を危惧したセメントスが瞬時に緩和材のコンクリを用意するも、ぶつかり合った衝撃は収まらず周囲に分散、ミッドナイトも爆風で吹き飛ばされて大惨事——には、ならなかった。

「全力で相手とぶつかり合うのも結構だが、周囲の事も考えておけよ？　俺がいなかったら、今頃大騒ぎだ」

「そ、その節は本当にありがとうございますー！」

何故ならば、雄英体育祭の警備主任であるゴジータが事前に防いだからだ。周囲を巻き込む大爆発、それをゴジータが単独で拳を振るうことで相殺し、場外へ吹き飛んで壁に叩き付けられる緑谷を寸前で抱き留めていたからだ。

緑谷出久と轟焦凍、二人による白熱したバトルは炎の力を解放した轟の勝利で終わった。終了直後の緑谷の評価は低くなく、限られた力で上手く立ち回って見せたその判断力は、多くのプロヒーローを唸らせる程だった。

ただ、挑発した割に負けてしまったのがマイナスな所で、なんにも知らない連中はダサいなんて言いたいことを吐き捨てる始末。ま、そんな連中はこの先ヒーロー稼業を長く続けていられるとは思えないので、捨て置くんだけどね。

「つたく、轟の奴を助けたいからって、お前が文字通り骨折ってちゃ、轟も罪悪感で素直に受け止められねえだろ？」

「え？ ゴジータ、なんでその事を……」

「盗み聞きをするつもりはなかったがな。それは謝っておく、許せ。ただ前にも言った通り、一人を助ける為に手足を折ってたら世話ねえぞ？」

「それは……はい、すみません」

「よし、ならそんな反省したお前に残念賞をくれてやる。ほれ」

自分の忠告を無視して100%の力を引き出した緑谷、結局自分の忠告は聞き入れず……否、聞き入れた上でやらかす緑谷に呆れながら、ゴジータは彼の口に指で弾いた仙豆擬きを押し込んだ。

「っ!? ご、ゴジータ!? いきなり何を!? ……て、あれ? 腕、痛くない?」

突然豆を食べさせられた事に動揺する緑谷だが、折れていた筈の手足からスーッと痛みが引いていく事に、驚愕に目を点にして固まってしまう。

「やれやれ、アンタの作った仙豆……だったかい? 効果は凄いが、多用するのは控えた方がいいかもね。これじゃあ、この子の為にならないよ」

「それは無理だ。コイツは助けを求める奴がいれば、自分なんてどうなってもいいと思う人間だ。そんな人間は言葉だけじゃ止まらない。その事を本当の意味で理解するまで、俺達でフォローしてやるしかないんだよ」

「……………全く、本当に困った子だよ。アンタにも言ってるんだよ、聞いているのかい、

オールマイト！」

混乱に固まる緑谷を尻目に、医務担当のリカバリーガールの怒声が響く。すると、扉の陰に隠れていた男が、苦笑いを浮かべながら現れた。

「い、いやーハハハ、本当にすみません」

「仮にもこの子はアンタの弟子なんだろう、だつたらちゃんとしてやらないとダメじゃないか！ 教育つてのは、発破を掛けるだけじゃ成り立たない。時には自分で考えて、自重する事も覚えさせないと、泣くのは自分だけじゃ済まなくなるよ！」

「胆に、銘じておきます」

流石のオールマイトも、リカバリーガールには頭が上がらないようで、咤り付けてくる彼女にただただ頭を下げ続ける事しか出来なかつた。

と、そんな時だ。通路の外からバタバタと慌ただしい気配が近付いてくるのをゴジータは察知した。オールマイトも活動限界にはまだ余裕がありそうだし、少し位なら良いかとゴジータは人知れず退室。引き続き警備の任務へと戻っていった。

そして、それから暫くして。

「——ん？ 電話、根津校長から？」

携帯から発せられる着信音、手にとつてみると其処には散々世話になつた根津校長の名前が映っていた。

『あ、もしもしゴジータ君？ 今大丈夫？』

「ウツス、此方は特に異常はないツス」

『アハハ、君の仕事振りに不安を抱くことはないさ。今回電話したのは別の件でね、次の一年生達の行事に君も参加して欲しいのさ』

「次の行事？ ……ああ、職場体験か」

『そう。本当は任意で希望して欲しかったんだけど、今年のNo. 1ヒーローは君だ。オールマイトを超えたヒーローである君の生の仕事振りを間近で見せて上げてたくてね』
「それは別に構わないが………いいのか？ 折角の将来有望なヒーローの卵の心をへし折っちゃうかもしれないぜ？」

『そんな君だからこそ、卵達は更に向こうへ至ろうとするのさ。それじゃあ、希望する生徒はいるかい？』

「誰でも構わないさ。が、生半可な奴が来ても面白くない。そうだな………せめて、今回の体育祭で優勝を決める奴が来て欲しいもんだな」

『了解。じゃ、そゆわけで！』

自分のゴジータとしての在り方に文句の一つも言わずに受け入れてくれる根津校長に感謝しながら、ゴジータは通話を終える。現在残っている生徒は四名で全員が一年A組であるが、その全員が優勝できるポテンシャルを秘めている。

本音を言えば緑谷が来て欲しいが……まあ、その辺は仕方がないと諦めよう。何より彼はオールマイトの弟子。ならば今後の彼の指導は相棒に任せる事にして、ゴジータは未来のトップヒーローの卵を鍛える事にしよう。

そうして優勝する生徒にワクワクする事約一時間、遂に体育祭の予定の全てが終了し、壇上にかかる三名の生徒を前にして。

『さあ、それではゴジータ、此処まで奮闘してトップスリーに輝いた生徒達にメダルを授与してあげて!』

「光の戦士との邂逅か……フフ、昂る……!」

「……どもッス」

「ッ!!!」

中央の一位の座に鎖やら拘束具やらで縛られた優勝者爆豪勝己に、ゴジータは溜息をついた。

????????????????



急ぐ。体育祭の終盤、惜しくも敗退した飯田天哉は母から届いた兄の悲報に逸る気持ちを押し殺しながら、急ぎ兄のいる病院へと向かう。

兄がヴィランに襲われ、重傷。飯田の憧れであり目標である兄が、ヒーロー殺しなるヴィランに襲われて瀕死の重傷と知った彼の胸中はとても言葉にし難いモノだった。

願うのは、ただ兄の安否のみ。焦りとショックで気持ちちが昂ってしまった飯田は、病院のある街へ新幹線で移動する際、白い炎が新幹線を抜いて飛んでいく様を幻視してしまいう程に動揺してしまっていた。

どうか、どうか兄が無事でいてくれます様に。藁にも縋る思いで病院へと辿り着いた飯田天哉は、看護師の制止も聞かずに病院を走り抜け……そして、兄のいる病室の扉を開けると……………。

「兄さん、無事か!？」

「あ、天哉。ちよつと待っていてくれ、今この問題児にお仕置きしている所だから」

「いたたたた……おい止めてくれてってインゲンニウム。照れ隠しに後輩を痛め付けるのは、らしくないぜ？」

「黙らっしやい！ 毎度毎度お前さんは済ました顔でとんでもないことをやりやがって！ こっちの心を少しは労れやバカヤロー！」

「イヤでも、終わり良ければすべて良しって言うじゃん」

「過程も少しは省みろ！」

重傷患者である筈の兄が、元気な様子でNo. 1をコブラツイストで締め上げていく。その傍らには気絶した母が。多すぎる情報を前にした飯田天哉は……眼鏡を割りながら母と同様に気絶した。

記録20

「——じゃあお前ら、くれぐれも先方に失礼の無いようにな」

雄英体育祭から数日、トップのプロヒーローを志す雄英の生徒——一年A組の面々は、無愛想な担任の言葉に頷き、それぞれスカウトのあったヒーロー事務所を目指す。

「切島はフォースカインドってヒーローの事務所なんだよな？」

「ああ、折角のご指名だからな。ビシツと漢らしく決めてくるぜ！」

生のプロヒーローの活躍を間近で見られる。その機会に恵まれたことに流石の雄英と感じる一方、何処か浮き足立つ卵達。やる気に満ちているのはいいが、相澤としては空回りしないことを祈るだけだ。

それに、気掛かりなのはそれだけじゃない。

「あの、飯田君、本当に大丈夫？」

緑谷が気遣い、声を掛けるのは今日まで何処と無く暗い雰囲気を纏う少年、クラスの

委員長でもある飯田天哉。普段は真面目ながらも明るい委員長が、変わったと思ったのは先の雄英体育祭の時、兄でありヒーローのインゲニウムの悲報だった。

彼の兄であるインゲニウムが、ヒーロー殺しに襲われて負傷。現在は大手の病院にて入院中との事。その放送でお茶の間を騒然とさせたのは緑谷の記憶にも新しい。

飯田天哉にとって、兄である天晴は緑谷にとってのオールマイトと同じ。憧れであり指標であり、目標。いつか自分もそう在りたいと思い、願っている星。

その憧れが、ヴィランによつて重傷を負っている。肉親であり憧れであるインゲニウムが倒れたという事実は、緑谷が思っている以上に飯田の背中に重くのし掛かっている事だろう。

そんな飯田に自分達がしてやれるのは声を掛けて自分達がいることを示す事だけ、そんな、緑谷達に対し……。

「————え？ あ！ 濟まない緑谷君！ 何か言つたかい!? 全然聞いてなかった！」

緑谷に声を掛けられていた事に気付かず、凄まじく動揺していた。

「い、飯田君、本当に大丈夫？」

「無理もないわ。お兄さんの痛ましい事件、私も悲しかったけど、飯田ちゃんももつとずっと悲しかった筈。上の空になるのも仕方がないわ」

そんな委員長の飯田に何を思ったのか、同じクラスメイトである麗日お茶子と蛙吹梅雨も気に掛けてくる。

「あ、うん………ソウダネ」

そんなクラスメイト達の心からの心配に、飯田天哉は遠い目になる。

言えない、言える訳が無かった。ヴィランであるヒーロー殺しに襲われたのは事実だし、兄が一時は意識不明の重体で、生死の境を彷徨っていたという話も本当だし、何より飯田自身も病室に着くまでそう思っていた。

そんな兄が今では病院の中で筋トレしているなんて、一体誰が想像できる。しかも、それを成したのは医療系統の個性なんて微塵も持ち合わせていない現N₀・1ヒーローだ。

もう、既に飯田天哉の許容量はイッパイイッパイである。母に至っては兄の重傷から快復の一連の流れを間近で見ている所為か、白目を剥くのが一芸と化してしまっている。

とは言え、結果はどうあれ兄の体は重傷前の体に戻りつつある。色々とアレなN₀・1に言いたいことは山程あったが、真面目な性格である天哉もその事自体には喜んだ。しかし、兄の快復の報に喜んでいられたのは一瞬だけ。翌日病院に訪れてきた黒服の集団——ヒーロー委員会の公安達からの話に身体を固くせずにはいられなかった。

まず、ターボヒーローインゲニウムである飯田天晴の長期間の活動自粛、期限は一月から二ヶ月。その間、病院から抜け出すことは許されず、不自由な生活を余儀なくされた。

加えて、家族と親戚、そして病院への徹底した箝口令。No. 1ヒーローの事も、彼によつてもたらされた影響も、何一つ口外してはならないという誓約をほぼ一方的に呑まされてしまった。

文面だけ見れば横暴な内容……だが、公安からの徹底した要求に天哉も天晴も、その家族や病院関係者達の誰一人文句を言うものはいなかった。

何故なら……。

『私だって、私だってこんな事を言いたくありませんよお！ でも、仕方ないじゃあないですか！ 其処にいるアンボンタンが、トンデモ回復アイテムをスナック菓子感覚で乱用しまくるとか、誰が予想できるって言うんですかああ!!』

その要求を呑ませに来た公安の人が、物凄く泣きじゃくっていたのだから。

『なんで瀕死の人間が豆粒一つで快復するんですか!! なんて人体の重要な神経が都合良く治るんですか!! 何ですか仙豆擬きって!!』

『イヤでも、これでも完成には程遠いんだぜ? 本当なら一粒で全快する筈なんだけど、大事な部分だけ快復しているってだけでまだ斬られた何カ所かは完治してないぞ』

『あ、ホントだ。まだ腕とか痛いや』

『兄さん!』

『——ふう』

『母さん?! 母さーろーん!!』

『だから無理に動かなくなって言ったじゃん。インゲニウムといい、公安といい、相変わらずそそっかしい人達だなあ』

『喧しいわ!!』

その後もすったもんだがあり、兎に角兄である天晴は暫くの間入院。彼に関係する人達には、暫くの間今回の件に関する徹底した箝口令が敷かれ、飯田にもその命令は下される事になった。

あの疲れきった年配女性公安の顔、暫く忘れられそうにない。短期間の間に色々とりすぎて、飯田天哉の脳はすっかり疲れきってしまった。短期間の間に色々とりすぎて、飯田天哉の脳はすっかり疲れきってしまった。

しかもその疲れが抜けきっていないから、此処の所暗い表情が出てきてしまったらしい。訂正したい所だが、下手に説明すれば例の件に触れてしまう気がして、飯田としては口をつぐむ他なかった。

「だ、大丈夫さ! 僕の事は心配せず、君達も自分のするべき事を成し遂げようじゃないか!」

心配してくれるクラスメイト達に対して、凄まじい罪悪感を覚える天哉。申し訳なく思いながらその場から立ち去る事を申し訳なく思いながら、彼はマニュアルなるヒーローの下へと急ぐ。

そんな飯田を見て……。

(頑張れよ、委員長！)

既に色々と察している相澤は、心の中でエールを送っていた。

「————にしても、爆豪はやっぱスゲエよな。体育祭優勝者として、この上ない特例じゃん！」

「上鳴じゃねえが、確かにな。No. 1ヒーローの職場にいけるなんて、滅多にある事じゃねえからな」

「……………」

一方で、爆豪と良くつるんでいる切島と上鳴は雄英体育祭の優勝者として、No. 1ヒーローの事務所に受け入れて貰えるクラスメイトを、純粹に羨ましく思った。

一度だけの組手、顔や名前を覚えて貰えているかは定かではないが、それでもあの時間はヒーローの卵達にとつて有意義な瞬間となっている。切島は自分の目指すヒーロー像を、上鳴は自分のやるべき事をそれぞれ教えて貰っている。

他のクラスメイトも同様で、生徒達一人一人に対して的確なアドバイスをしてくれた

ゴジータに、誰もが改めてその姿に惹かれたモノ。

そんなゴジータにマンツーマンで見つめられる。その事を思うと、二人が羨ましく思うのも無理もないのかもしれない。

だが、今の爆豪は盛り上がる二人とは正反対に静かだった。殺る気に満ち溢れているのではなく、苛立っている訳でもない。

「イチイチ騒ぐな。……………俺はもう行く、ためえ等もとつと行け」

「ちよ、爆豪？」

「なんか、今日の爆豪大人しかったよな？　もしかして、No.1ヒーローの事務所に行くからナーバスになってんのか？」

「アイツが？　……………そうは思えねえが」

静かに目的地に向かう新幹線に向かう爆豪を、二人は神妙な面持ちで見送る。普段とは様子の違うダチを不思議に思うが、二人にもそれぞれ向かうべき所がある以上立ち往生のままではいられない。次に乗り込む新幹線に向かう為、二人は急いでその場を後にする。

そして、無事に新幹線に乗り込んだ爆豪はと言うと……………。

（——負けた。あの日、No.1ヒーローに向かった俺は、何一つ刻める事なく完膚なき迄に敗北した）

思い返すのは初めてゴジータと対峙したあの日。多くの同級生達がN.O. 1ヒーローにボロボロにされた時、爆豪は目の前の「最強」に目と心が奪われた。

他者を寄せ付けない圧倒的強さ。オールマイトとは別方向の強いヒーローの姿に、爆豪勝己は目が離せなかった。如何なる相手も完封し、圧倒する。有無を言わせない強さ、その全てに釘付けだったのだ。

新たなN.O. 1ヒーローゴジータ。オールマイトと唯一肩を並べ、同時にオールマイトすら超えたとネット上で騒がれる規格外。そんなヒーローの事務所で自分が何を得られる？ 何を見出させる？ ゴジータに何一つ示せず、拍手だけで地に伏せた自分が、今更何ができると言うのだ。

(……………考えたって仕方がねえ、か)

どうやら、今の自分は思ってた以上にナーバスになっていたらしい。切島と上鳴にそれとなく気を遣われていたし、ダサイのは結局自分だけか。

自嘲し、乾いた笑みを浮かべながら、爆豪はゴジータのいる事務所に向かい……………。

「「ようこそ、爆豪勝己君!!」」

「」

ゴジータ、並びに事務員総出で横断幕やらケーキやらを用意している目の前の光景に、言葉を失い白目を剥くのだった。



「いやー、職場体験を迎える側なんて初めてだから緊張しちゃって、つい張り切り過ぎたぜ」

「なに初っ端から宴会開いてんだ!? 遊びで来てるんじゃないぞこっちは!!」

ゴジータの事務所に来て初日、爆豪が体験したのは事務所総出の歓迎会だった。職場体験の子を迎える手前、これ迄そんな体験をしたことのないゴジータが考え抜いた結果生まれた案である。

尚、他の事務員は一度は止めようとしたものの、誰かを祝うことなど施設の子供達以外に経験がないというゴジータ、彼が屈託のない笑みを浮かべて楽しみだと口にした為、なにも言えなかった。

「まあそう言うなって、お前だって何だかんだ堪能してくれたじゃん」

「……………あんな空気の中で、断れるかよ」

「意外と律儀だな、お前」

そして洗物も終わり、後片付けも終えた爆豪。口は悪く態度も悪いが、素行そのものは品行方正な爆豪にゴジータは素直に感心した。

「つて言うかよ、この事務所には他のヒーローは居ないんかよ」

「他の……？ ああ、相棒サキキックの事ね。いねえよ、この事務所にいるのは俺と事務処理担当の人達だけだ」

ヒーロー飽和社会において、チームアップは良くあること。自分には解決できない案件に、他所のヒーローと組んで事に当たるのは普通にあり得る事だ。

その内の一つがサイドキックというシステム。複数のヒーローが一つの事務所に所属し、トップのヒーローを中心に据えて社会に貢献するというモノ。それはヒーロー社会のトップに立つヒーロー達も同様で、あのエンデヴァーもこの制度を大いに活用している。

だが、ゴジータの事務所にはそれが居ない。何故か？ いや、その理由は分かっている。

「それは、あんた一人で全部事足りているからか？」

「ん？ まあそうだな。色々があるが、一番の理由は其処だな」

んーと上を見上げ、考える素振りを見せながらあっけらかんと答えるゴジータに、爆豪は改めて目の前のヒーローの規格外さを思い知る。

日本中……いや、世界中の何処であろうとも駆け付けるヒーロー。そんなヒーローに、自分は果たして付いていけるのか？

思い返すのは体育祭閉会の時。自分の順位に納得出来ない爆豪が、ゴジータに食って掛かった時だ。

『ゴジータ、俺あこんな一位なんて要らねえんだよ。たとえ周りが認めても、俺自身が認めていなくちゃ、ゴミなんだよ！』

『あつそ、なら止めるか？ 俺は一向に構わねえぞ。まあ、目の前の現実を受け入れず、イヤだイヤだと癩癩起こしているだけのお前じゃあ、確かにこのメダルはゴミかもしれないしな』

『!?!』

『爆豪勝己。このメダルを今のお前がゴミだというのなら、次のお前で“金”にしてみせろ。それが、お前に送る最初のアドバイスだ』

『……そ、れって……』

『この間の組手、お前にだけは言っちゃれなかったからな。遅くなったがまあ許せ』

『……………』

『んで？ 結局このメダルはどうするんだ？』

『……………貰つとく』

…………いや、付いていけるのか、ではない。付いていくのだ。必死に食らい付き、泥に這いつくばつてでもその背中を追い掛ける事を、爆豪勝己は自身とあのメダルに誓うのだ。

「——上等だ。殺す気で食らい付いてやるから、覚悟しやがれNo. 1!!」

「え、唐突にどうしたのこの子？ 怖っ」

鋭い眼光で睨み、不敵に笑う爆豪。其処らのヴィランより余程恐ろしい顔付きの彼に、ゴジータは軽く引くのだった。

「——ハア、例の雄英襲撃犯が、一体俺に何の用だ？」

「決まっている。オールマイトとゴジータ、目障りなヒーローを殺すためだ」

記録 2 1

「ほう、という事はアレか？ お前さんがOFAの力を怪我せずに引き出せるようになったのは、N.O. 1ヒーロー様のお陰という訳で、俊典はなんの役にも立てていないって事か？」

「い、いいいえそんな!? そもそも僕にこの個性カを授けてくれたのはオールマイトであつて——いやでもゴジータのお陰で引き出せる方法を見出せたのも事実ですし……」

某市、道路沿いに建てられた小さな事務所。雄英体育祭での活躍のお陰で、数多くのヒーロー達から指名が来ているにも関わらず、緑谷出久が選んだのはグラントリノなるヒーローだった。

ヒーローオタクである緑谷ですら知らないヒーロー名、オールマイトによれば古くからの知り合いで、その人物はオール七代目マイトのF.A継承者の前任の盟友だったそうだ。

謂わばオールマイトの師の一人。そんなすごい人物からの指名と言うこともあり、当

初の緑谷は嬉しく思いながら緊張していたが、出会った瞬間そのスパルタに初日から心が挫け掛けていた。

この老人、見た目からは想像できない程に速く、そして上手い。高速移動系の個性でありながら、室内という限られた空間で自由自在に移動し、高速の一撃を叩き込んでくるのだ。

しかも、緑谷が10%の力を常時展開出来る事も可能と相まって、彼の実践形式での扱きは更に苛烈さを増していく。流星はあのオールマイトにトラウマを植え付けた師匠、容赦のなさも凄まじい。

そんな訳で、職場体験の二日目からも扱かれる事になった緑谷は現在休憩中。グラントリノから彼の好物であるタイヤキを分けて貰い、頬張りながら緑谷のこれ迄の経緯を聞いていると、話題はゴジータの所で止まる。

緑谷がOFAの力を怪我させずに引き出せるようになったのは、ゴジータという現N.O.1ヒーローの助言のお陰という所、その話しになった途端グラントリノはその表情を鬼のような形相に変化させる。

自分の愛弟子でありながら、弟子の為に何一つ出来ていない。緑谷が言うには時折組手には付き合っているとの事だが……それにしたって酷すぎる。

「——まあ、いい。俊典には俺が後日個人的に話をするから良いとして、取り敢え

ず小僧にはこれからOFAを使いこなす許容上限を引き上げること为目标にして貰うぞ」

「は、はい！」

「幸い、お前さんの体は当時の俊典程で無いにしろ、そこそこ仕上がっている。多少の無茶が出来る今の内に可能な限り追い込んでいくぞ」

「お、押忍！」

「目標は常時20%！ 最大瞬間威力は40%前後！ 此処から先は更にキツく行く。死に物狂いで足掻けよ、受精卵小僧！」

「は、はいいい！」

その後、宣言通りにグラントリノによる扱きはより苛烈さを増し、緑谷出久は嘗てのオールマイトと同じトラウマを受け継ぐ事になるのだった。

一方、その頃。同じくトップヒーローを目指す受精卵の一人である爆豪勝己はというと……。

「そら、まだまだ遅いぞ。ほれ、脇ががら空きだ」

「ブフウ!!」

奇しくも、緑谷と同種の地獄を体験していた。



「うし、取り敢えず今日はこんな所か」

職場体験の開始から今日で二日目、雄英体育祭の優勝者である爆豪勝己は、現 No. 1 ヒーローであるゴジータの自宅……その地下にてマンツーマンでの指導を受けていた。

それは、指導というには余りにも苛烈。挑んでは地に叩き付けられ、這いつくばり、立ち上がったのは叩きのめされる。そんな事を繰り返していると、いつの間にか時刻は夜の時間帯となっている。

しかし、ただ打ちのめすだけでなく、着実に爆豪の糧となるよう、仕向けるようにしているのがより爆豪のやる気に火を付けている。次はこうしてこい、次はこうだと、ま

るで挑発するように導いてくるゴジータに、爆豪は只管食らい付く事でイツパイイツパイだった。

「んじゃあ、俺は上で飯の用意してるから、お前も着替えたら上来て風呂に入つてろよ」

「…………ゼエ…………ゼエ…………ゼエ…………」

そんなゴジータのキツイ扱きを受け、心身共に限界を超えている爆豪は、ゴジータの言葉に返事を返す余裕もなく、ただ呼吸を整える事しか出来なかつた。

これが、No. 1の鍛練。勝つことを望み、誰よりも強くなることを望んでいた爆豪にとつて、この環境は渡りに船に過ぎた。

今、着実に自分は強くなっている。No. 1に抜かれてまだ二日程度の時間しか経っていないが、そう感じる程にゴジータとの組手は刺激に満ちていた。

そのお陰か、爆豪の爆破の威力は徐々に強くなっていき、今では一発の威力が雄英入学前の倍近く跳ね上がっており、威力を上げる溜めの時間も半分近く減少しているのは、偏にゴジータの超反応とも言える反応速度に追い付こうと、爆豪が無意識に攻めた結果とも言えた。

自分は、まだまだ強くなれる。その為に此処に来て、その甲斐があつたのだと、仰向けになりながら爆豪は笑みを浮かべた。

「——今日はチキン南蛮か」

「近くの商店街から良い地鶏を貰つてな。下味も仕込んでいたから、味は悪くない筈だぞ」

その後体も動けるようになった爆豪は、シャワーを浴びて上へと戻ると、既に食卓にはゴジータの手料理が並べられている。家庭的なNo. 1ヒーローに最初こそは戸惑ったが、男の独り暮らしならこういうものかと納得する。

「——この皿を並べりゃいいのかわ？」

「おつ、お手伝いとは感心だ。親御さんの教育の賜物かな？」

「世話になつてるんだ。これくらいやるわ」

並べられた皿をテーブルへ手際よく並べる爆豪に、ゴジータは素直に感心する。と言うか、目の前の勝ち気な少年は自分と一緒に過ごすようになってから、かなり丸くなつた気がする。

今でも、組手の際は殺す気で勝ちに来る所は変わらないが、目上の人間に対しても傲慢な姿勢を崩さなかつた彼にしては、ここ最近は大入しく言うことを聞いている気がする。

低姿勢という程でもないが、刺が少なからず取れた気がする。手際よく食器を並べていく爆豪に、ゴジータは不意に笑みが溢れた。

やがて食卓は進み、テーブルに挙げられた料理の全てを平らげた二人は、皿洗いをしながら今日の反省会を開く。

「さて爆豪、俺の所に来て本日で二日目だが、何か参考、或いは聞きたいこととかあるかな？」

「……………速すぎて何が何だか分からなかった」

思い返すのは職場体験の初日、歓迎会もそこそこにお開きとし、早速No.1ヒーローの仕事振りを見せて貰おうとやる気……………否、殺る気満々で挑んだ爆豪だったが、目の前で起きた現実に啞然とした。

まず、街中を移動する際のゴジータが見えない。目で追えないのではなく、ただただ見えない。その動きは瞬間移動の如く、気付けば全てが終わっていた。

遠くの現地へ向かう時も、基本的に爆豪はゴジータに抱えられての移動となつていく。しかも抱えられている爆豪に影響されない程度の移動速度。文字通りのお荷物となつた爆豪だが、それを糾弾出来る程の活力は既に失われていた。

次元が違う。たつた一日で持ち前の大きすぎる自尊心は碎かれ、既に借りてきた猫な状態の爆豪に、ゴジータはやり過ぎたかな？ と、頬を搔く。

（一応、これでもコイツに合わせて色々とセーブしていたつもりなんだがなあ）

今回、ゴジータは職場体験に合わせて普段のヒーロー活動より仕事量を減らしている

が、それでも爆豪には色々としょくが大きかった様だ。目の前の少年も潜在能力は結構高そうだし、このまま戦意喪失させたまま返すのもゴジータとしては憚られた。

「なあ爆豪、お前つてひよつとして自分の能力の高さに驕っていた口か？」

「ッ!？」

「あーやつぱり、時々いるんだよなあ。お前みたいに下手に恵まれた個性を持つ所為で自分を特別だと思い込んじゃうヤツ」

「――」

「それが悪だと決め付けるつもりはねえが、確実に視野は狭まる。狭くなった視野は近くのモノに気付けずに、やがて自分が何を取り零したのかさえ分からなくなる」

ゴジータの言葉に、爆豪は何も言い返せなかった。恵まれた個性と身体能力、これ等を用いて必ずやオールマイトを超えるヒーローになると、小さな頃から息巻いていた爆豪は、同じ頃から周囲からチャホヤされていた。

俺は凄い。他の奴等は凄くない。自身の能力の高さ故にその思考に行き着いてしまった爆豪は、幼い頃から他人を見下すようになっていった。

中でも、無個性と断じられた幼馴染みの事は特に偏見と嘲笑の目を向け、何度もなじり、迫害染みた事をした。

「――デクは」

「あん?」

「あのクソナードは、道端の石ころの筈だったんだ。無個性で、何も出来ないデクで、ヒーローなんぞになれる筈もねえ。そう、思っていたんだ」

「――」
今度は、ゴジータが大人しく聞き入れる番だった。

「なのに! 個性が出て、雄英に合格して、オールマイトみたいな超パワーを出すようになって……!」

「見下していた相手が、自分より遥か先にいると思ったか?」

「ッ!?!」

爆豪の口から吐き出される感情の吐露、それを聞いて何となく横から口を出してみれば、怒りやら苛立ちでぐちゃぐちゃとなった爆豪が、必死の形相で睨んできた。

分かりやすい奴。睨んでくる爆豪を笑いながら見下ろすゴジータだが、其処に侮蔑の類いはない。尤も、恐らくはデクに相当な事をしているのも、その口振りから何となく察せるが、敢えて此処では指摘しない。

それは爆豪自身が認め、彼自身が贖罪しなければいけないからだ。故に、ゴジータが示せるのはほんの細やかな指針だけ。こういう道もあるのだという、標を示すだけだ。

「爆豪、お前は確かに強くなる。強くなれるだけの素質がある。けどお前の事だ、ただ強

くなるだけじゃ物足りないんだろ？」

「……………ああ」

「なら、俺から言えるのはこれだけだ。『自分に克て』。ヴィランだけじゃなく、同じ道走るライバル達だけじゃなく、自分自身に勝ち続ける。喻えそれが、受け入れがたく、見向きもしたくない自分だとしても、だ」

それっぽい言葉。とは、爆豪は笑えなかった。ヴィランやクラスメイト、デクだけじゃなく、勝つべき相手は他にもいて、それこそが他ならぬ自分自身の事だと爆豪自身が何処かで分かっていたから。

これが他の人間に言われたとしても、爆豪は認めなかっただろう。けれど、目の前にいるヒーローはオールマイイトすら認めた最強のNo. 1。爆豪が目指す理想の体現者、ならば彼が領かない道理はなかった。

「さて、洗い物も終わったし、明日も早いんだ。早く寝ろよ」

「———なあ」

「ん？」

「アンタにも、認めたくない自分ってのは、あったんか？」

ゴジータの言葉は、何処か経験に基づいてのモノに聞こえた。だから爆豪は興味本位でゴジータにもそういう時代があったのかと訊ねるが……。

「ばーか、教えてやらねえよ」

「ンなツ!？」

当然のごとく、ゴジータは笑って却下する。悔しそうにギリギリと歯を食い縛る爆豪にゴジータは可笑しく笑い。

「この職場体験中、一度でも俺に攻撃を与えることが出来たら、考えてやるよ」

振り返り、不敵な笑みと共に挑発するゴジータ。そんな彼に爆豪は一瞬目を丸くさせるが……。

「上つつつつ等!!」

凶悪な笑みを浮かべ、気持ちを持ち直す。相変わらずタフな爆豪に感心しながら、ゴジータは明日からの職場体験を楽しみにするのだった。

(しかし、自分に克て。か、我ながらそれっぽい事を口にしまつたな。これも、あの人の影響かね)

『喩え貴方が何者だろうと、貴方は貴方じゃないですか!!』

脳裏に甦るのは、自身がまだ学生だった頃。誰よりも“ゴジータであろうとした”あの頃の自分は、きつと他の連中と同じく色々と拗らせていたのだろう。

教師達の制止も聞かず、クラスメイト達の心配の言葉にも耳も貸さず、ただ只管に自己を高め続けていた頃。端から見れば自殺願望とも取れる特訓に、後藤甚田は毎日挑み

続けていた。

ゴジータならば天下無敵で在らねばならない。誰にも理解されない信条を、誰にも溢せなかった頃。固く閉ざされた自分の心に最初に触れたのは……とある一人の教師の脚教育実習生だった。

「そう言えば、名前……聞いてなかったな」

白い髪に赤が混じった眼鏡の女性。きつと、何処かで元気に教師をやっているのだろうなど、縁側から見える空を眺めて、当時の思い出に耽るゴジータだった。

「ただいま冬姉、ん？ またゴジータのグッズを買ったのか？」

「あ、うん。なんかたまたま目に付いちやってね。お父さんには……その」

「分かってる。黙っているから、冬姉も気を付けてな」

「うん。ありがとう、焦凍」

机に並べられる幾つものグッズ、それは今話題沸騰中のNo. 1ヒーローの人形。オールナイトやエンデヴァーと並べて、可愛らしくデフォルメされた人形に、女性は笑

いながら指でつつく。

「……………あの時の子が、今ではN.O. 1ヒーローかあ」

きつと、もう自分の事など覚えてはいないのだろう。けれど、それでも良いのだ。テレビに映るN.O. 1ヒーローを見て、女性は寂しく思いながら、逞しく成長した男の子を前に女性——轟冬美は微笑んだ。

記録 2 2

「ブゲラッ!」

透き通る青空を、一人のヴィランが舞い上がる。自身の個性を使って大きな事を成し遂げようと画策した自信過剰なヴィランは、運悪く遭遇したNo. 1ヒーローの手によってその力を一瞬披露するだけに終わった。

マンホールの蓋を操るという色々と反応に困る個性を持ったヴィラン、しかしその個性はゴジータの拳の一振りでも粉碎され、その脅威を世間に認知される前に終了する。

「しかし、こここの所ヴィランの出でくる頻度多いな。他のヒーロー達も頑張っているのに……何でかね?」

警察にヴィランを預け、パトカーに乗せられる様子を眺めながら一人溢す。昨今のヴィランの増加傾向はゴジータも聞き及んでおり、少なからずその事実を憂慮していた。

オールマイトとゴジータ、ヒーローの二大巨頭がいるにも関わらず、少しずつだが

ヴィランによる犯罪件数が増えつつある。ヴィランによる被害自体はヒーロー達の活躍によりそれ程ではないが、それでも発生そのものが増えつつあるのは、ゴジータに僅かながらの違和感を与えていた。

「やっぱ、例の敵連合とやらの連中の影響かね、其処んところどうよ爆豪」

「ぜえ……ぜえ……んなの、……はあ……知るか」

原因となつているのは、恐らく先日雄英を襲撃したという敵連合なる組織。天下の雄英を襲撃したという話は裏世界に浸透し、それが他の雑魚ヴィランの野心に火を付けてしまったのではないかと、ゴジータは分析する。

オールマイトや塚内警部から一応話は聞いているが、当事者の一人にも話を聞いておきたい。そんな訳で職場体験に来ている爆豪にも話を振るが……どうやら、彼自身はそれどころではないようだ。

肩で息をして、全身から汗を噴き出している爆豪。それでもゴジータの質問に答えられる程の元気が回復している辺り、流石のタフネスと言えた。

ゴジータの職場体験に赴いて四日目、残る体験学習も折り返しに差し掛かり、ゴジータはプロヒーローとしての活動を直に体験させるべく、爆豪を抱えて飛び回ったりせず、比較的近い街で一緒に行動を共にすることにした。

近場とは言え、そこはゴジータの自宅から数十キロ先の他県。普段より九割以上力を

抑えても、未だ学生である爆豪では追い付けず、彼が追い付く頃にはすべての事件は終わった後だった。

「んー、お前の潜在能力的にこの程度のスピードには充分追い付けると思ってたんだがな。やっぱ数日程度の稽古では身に付かないか」

「——」

両膝に手を当てて肩で息をしている爆豪、彼なりに頑張っているのは分かるが、本人の潜在能力的にまだまだ上があり、爆豪の爆破の個性も様々な用途を待つように進化していく事だろう。

昨日も、組手をする際に爆破の威力を一点に集中させたものや、スタングレネード染みた発光現象を起こしている。次の段階ステージに行ける下地は徐々に出来上がりがつつあるが、その場面に立ち会えないことにゴジータは少なからず寂しさを感じていた。

そんなゴジータの様子を知ってか知らずか、爆豪はその顔に笑みを張り付ける。

「……………慌てんなよ」

「ん？」

「帰る頃には、アンタに新しい俺を見せれるようにしてやんよ」

「——」

「はは、そうこなくちやな」

凶悪に、且つ鮮烈な笑みを浮かべる爆豪にゴジータも嬉しそうに笑みを浮かべる。

「それじゃあ、そんな努力家の爆豪君に朗報だ。これから俺達は新幹線に乗ってとある街へ向かう。その間、存分に体を休めるといい」

「……いらねえ世話だ」

「強がんなよ。個性を酷使して痛むんだろ、手とか腕とか」

「頑張っている爆豪を労ろうと、次に向かう街には新幹線を使う。そんな自分に気遣つての言葉に爆豪は突っぱねたかったが、ゴジータが言うように爆豪の腕や手は個性の酷使により限界を迎えつつある。それを見抜いた上で、ゴジータは爆豪の肩を叩く。

「俺も、久し振りに文明の力に肖りたくなつてな。ほら、とつとと行くぞ」

「くそ、分かったから引つ張るんじゃないやねえ！ ……いや持ち上げようとすんな!」

子供扱いをしてくるゴジータに、爆豪は終始不満そうにしていたが、明確な実力差もあることから、爆豪はゴジータにされるがままだった。

「で？ 結局何処の街に行くんだよ」

結局、自分達は何処に向かうのか。そんな素朴な疑問に対して…………。

「ちよつと、例のヒーロー殺しを捕まえるのに保須市までね」

サラッと、そんな事を口にするのだった。



「——で、何でテメエまで此処にいんだよデクウツ!？」

「ヒイツ！ 完全なる偶然だよかつちゃん！」

「いちいち威嚇すんな」

「ゲプウ!？」

「かつちゃん!？」

そして、保須市に向かう為に新幹線に乗り込んだゴジータと爆豪だが、其処で思いがけない出会いを果たしていた。乗り込んだ一般車両の中、偶然空いていた席に座ろうとした時、前の座席にはデクこと緑谷出久が保護者らしき老人と座っていたのだ。

偶然の出会いに当然ながら嘸み付く爆豪だが、保護者であるゴジータがそれを遮る。軽めの手刀^{チョップ}を脳天に叩き込み、物理的に黙らせると沈黙した爆豪を問答無用で席に座ら

せる。

その、如何にも手慣れた手際のゴジータに緑谷が戦慄していると、今度は隣にいた老人が顔を覗かせる。

「ほう、お前さんが噂のゴジータか。成る程、若いのに良い面構えをしていやがる」

「アンタは？」

「ワシは『グラントリノ』、そう名乗れば分かるか？」

「……ああ、アンタが相棒オールドマイトの言つてた鬼の様に恐ろしい教官殿か」

「はは、俊典に聞きたいことがまた増えたな」

ケラケラと笑っているが、目は全く笑っていない。どうやら本当の意味でオールマイトの言う通りだと理解したゴジータは、自身の失言を内心で相棒に謝った。

その後、他の乗客達から理解を得て折角だからと椅子を向かい合わせる事にした二組のヒーロー達。周囲はNo. 1ヒーローがいることに好奇心を隠せないでいるが、彼等の話が気になって話し掛ける余裕がない。

好奇の視線に晒されながらも平然としているゴジータは目の前の小さな老人のヒーローとの話を睨かせている。

「はは、流石のオールマイトも昔は若造か。アンタ程のヒーローなら、そう言われても仕方がないか」

「ま、この歳になれば大抵のヒーローなぞ小僧同然よ。マトモな修羅場を経験したこと
の無いひよつ子のヒーローばかりが目立つこのご時世、それでもNo. 1の座をアイツ
から奪い取ったと知った時は驚いたがな」

「No. 1という称号に興味はないが……まあ約束もしたしな。当分の間はこの座を
譲るつもりはねえよ。折角のアンタの教え子から奪い取っておいて失礼な話だが」

「気にする必要はあるめえよ、今お前さんが立っている場所は、他ならぬお前さん自身
の力で勝ち取った場所だ。飽きたならとつと退けりやあい、気負いすぎるなよ、若造」
「……………そっか」

不敵に笑みを浮かべる二人だが、会話の流れが進むにつれて二人の表情が変わってい
く。グラントリノは教え導く教師のような顔で、ゴジータは柔らかな少年の様にそれぞ
れ笑う。

そんな神妙な会話の中、周囲の人間の誰もが口を出せずにいる一方で、緑谷と爆豪は
こそこそと話をしていた。

（そ、それにしても凄いよかつちゃん。まさかNo. 1の所で体験学習なんて！）

（黙れカス、話し掛けん）

（ひ、酷い……………でも、本当に凄いよ。あのゴジータと一週間でマンツーマンでいられる
なんて、やっぱり色々教えてもらってたりしているの？）

(……………ああ)

短い、その返事には多くの意味が込められている。たった数日、しかしその数日は雄英だけでは決して埋められない濃い時間がこれでもかと詰め込まれていた。

それが分かるからこそ、緑谷も何も言わなかった。

しかし、爆豪が言いたいことはそれだけではない。

(クソデク、テメエは確かに強くなった)

(……………え!?)

(個性が出てきて、超パワーを使いこなしつつある今のテメエは、確かにクラスの中でも頭一つ抜けてンだろうが……………)

『自分に克て』

思い返すのはNo. 1ヒーローから受け取った薫陶。簡単なようで、実はとても難しい。爆豪にとって最も屈辱且つ苦痛を伴う選択、苦虫を噛み潰したように、泥水を呑み込むように言葉を吐き出しながら、それでも己の勝利の為に爆豪は宣誓する。

(それでも、俺が勝つ)

(……………)

変わった。何がとは言わないし分からないが、確かに爆豪の中で何かが変わったのを緑谷は感じた。相変わらず凶悪な笑みを張り付けているが、それでもそこに以前のよう

な自身を追い詰めた力みはない。

自然体、或いはそうあろうとする姿勢。いずれにせよこの短期間で恐ろしく成長を遂げているであろう幼馴染みに、緑谷は言葉に出来ない何かを感じた。

そんな二人を微笑ましく見つめるヒーロー二人、緑谷と爆豪、色々と危なっかしい所があるが、これで一つの区切りとなればいいなと、ゴジータが背凭れに身を預けた瞬間。新幹線の壁が、何かによって砕かれた。瞬く間に広がる悲鳴、混乱は津波のように伝播し、車両の内部の乗客達がパニックに陥り掛ける。

更に、其処へ剥き出しの脳を晒す怪物——脳無が覗き込んでくる。恐怖と混乱に包まれる中、一人のヒーローが瞬時に反応し、これに対応する。

動いたのは、当然のごとくNo. 1。

「ッッ」

「ッ!?!」

狭い空間の車両内を動き、脳無の顔を蹴り飛ばす。最小の動きで最大の効果を叩き出すゴジータに、乗客全員が魅せられた。

そんなゴジータに次いで反応したグラントリノが、止めと脳無を蹴り飛ばし、車両から完全に引き剥がす。直後、新幹線が停止したのを確認すると二人のヒーローは空いた壁から外に出る。

外に出て、車両の天井部分に降り立った二人が目にしたのは……惨劇だった。

街が燃えている。悲鳴の音があちこちから上がっていて、炎と暴力が街を蹂躪している。

保須市。自分達が向かう筈だった街が大規模な災害を受けている。災害をもたらしているのは怪人脳無、それを認識したゴジータは、全身に白い炎を纏う。

「爆豪！ お前は此処に残って乗客達を守れ！」

「ああ!？」

「小僧、お前もだ！ 此処で待ってろ！」

「そんな!？」

尋常ではない事態だと即座に判断したヒーロー二人は、ヒーローの卵に待機命令を下して街に向けて飛翔する。グラントリノなるヒーローも飛べた様で、最初こそはゴジータと並走するが、次の瞬間には引き離されていた。

(これが……!?)

ゴジータの実力。出会ってまだ一時間も経たない間柄だが、ゴジータの実力を目の当たりにしたグラントリノは、若いヒーローの援護から自分のやるべき事を模索する方へ切り替える。結果、行動を共にするよりそれぞれ対応した方が効率的だと判断し、歴戦のヒーローは一足早く現地に降り立つ。

そして、対するゴジータもグラントリノと同じ判断をし、結果最も脳無達が集まる場所へ降り立つ事にした。

「っ！ アンタは——」

「ゴジータ……」

右も左も脳無だらけ。他のヒーロー達が苦戦するのを一瞥して認識した瞬間……：……風が走った。

そして、気付けば脳無達は倒れていた。市民を襲おうとした脳無、ヒーローを追い詰めていた脳無、他にも十数体規模の怪人達が、延焼している火災の炎と共に吹き飛んだ。地に倒れ、動けなくなった脳無達。それらを見下ろすとゴジータは近くで駆け寄ってくる女性のヒーローに後処理を頼もうとして……。

彼女を抱えて、その場を跳躍。何が起きたか分からない様子の女性ヒーローに対し、ゴジータの目は冷たく女性の居た場所を見る。

其処には、白い無数の何かが地面を抉っている跡があった。直撃すれば致命傷は避けられない、殺意を込めての不意討ち。

着地し、女性ヒーローを地面に下ろすと、ゴジータは静かに振り返る。

「脳無つてのは、色んなバリエーションがあるんだな」

「——エへ、エへへへ！」

「イタ、No. 1、ヒーロー、イタ!!」

「強ソウ、強ソウ!」

「気持チヨ、ク! ナレソウ!」

影から這い出る様に現れるのは四つの影、いずれも脳髓を剥き出しにした異形の怪物達。ゴジータというヒーローを前にして畏れる処か舌なめずりをしている怪人達に……。

「……………え、お前から喋れたの?」

ゴジータの口から出てきたのは、率直な感想だった。

記録 2 3

「クソ、飯田君てばこんな時に何処へ行ってしまったんだ!？」

燃え盛る炎、既に数多のヒーローが対処に当たっている中、飯田天哉の引き受け先であるノーマルヒーローマニユアルは、騒ぎの中ではぐれてしまった飯田の事を気に掛ける。

彼の兄、インゲニウムの事についてはマニユアルもメディアアを通じて知っている。ヒーロー殺しのヴィランであるステインに襲われ、重傷者として今も大手の病院にて治療を受けているのだという。

恐らく、再起は絶望的。兄であるインゲニウムを尊敬している飯田天哉にとって、それは誰よりも受け入れがたい事実だろう。

きつと、飯田はステインを憎んでいる。奴を追い、復讐する為に自分の所に来たのだろうと、彼が自分の所へ来たがっているのと知った時は、マニユアルはそう確信していた。此処で彼を拒絶してしまったら、この先の彼がどうなるかなんて分からない。故にマ

ニユアルは飯田を自身の事務所へ受け入れ、様子を見ながらそれとなく説得を試みる事にした。

一度だけ、マニユアルがインゲニウムとステインの事で追及すると、飯田は頑なに口を閉ざして表情を見せまいと顔を反らした。それを見たマニユアルはやはり今の飯田は精神的に不安定な状態であると察し、可能な限り側において見守ろうと思っていた。

そんな矢先に起きた今回の事件。既に街一つを巻き込んで起こっている争乱は多くのヒーロー達を駆り出し、対処に当たっているが……。

「くそ、このヴィラン手強いぞー！」

「何処から現れたんだコイツら!？」

現れる幾体もの怪人ヴィランである脳無の進撃が止まらない。複数人のヒーローを纏めて吹き飛ばす様はヒーロー側にとつて悪夢に思えた。このままではじきに此方が押されてしまい、更に被害が拡大してしまう。

飯田を探しに行きたくても、目の前の状況がそれを許さない。何とかしてこの窮地を乗り越えねばと、マニユアルもまた目の前のヴィランに集中した時。

「あ、そこ危ないぞー！」

「へ? ドワアアツ!？」

突然、頭上から物凄い勢いで何かが降ってきた。マニユアルは横に飛び退いたお陰で

間一髪逃れたが、ヒーローの言葉など解する知能の無い脳無は落下してきた何かに巻き込まれ地に沈む。

あれだけ手こずった脳無が一瞬で倒された事にあ然となるマニユアルと周囲のヒーロー達だが、砂塵の中から現れるヒーローによつて場の空気は弛緩する。

「やれやれ、四体纏めて襲つてきたのは良いものの、肝心な連携がお粗末とか笑い話にもなんねえぞ。唯でさえ被害気にして手を抜いたつてのに……三分も掛からねえとか、お前らの製造元半端な仕事し過ぎだろ」

「ア、アアアア………」

「コンナノ、キイテナイ、キイテナイイイイ……」

「キモチヨクナイ、キモチヨクナイヨオオオ……」

「」

No. 1 ヒーロー、日本のヒーロー界の頂点に君臨しているヒーローが其処にいた。両手には他の脳無とは明らかに異なる風貌の脳無の首を鷲掴みにし、その足元には同じ二体のヴィランが踏みつけられている。

その内一体は完全に沈黙しており、他の個体も戦意が根刮ぎへし折られている。その風体と人語を話す特異性から、明らかに性能の異なるヴィランである事はマニユアルを始めとした他のヒーロー達も十分理解できる。

理解できないのは、そんな個体のヴィランを複数相手に圧倒している目の前のゴジータだ。彼の手に捕まっているヴィラン達は総じて他の個体より手強い筈、唯でさえヒーロー数人がかりでやつとの相手を、このヒーローはたった一人で圧倒し、捕らえてみせた。

これがNo. 1の【超】ヒーロー、ゴジータの実力か。周囲のヒーロー達が騒然とするなか、マニユアルはゴジータへ一歩進んで近付く。

「ゴジータ、手を貸して欲しい！ 俺の所にいる雄英の生徒の姿が見えないんだ！」

「え、そうなの？」

「ああ、恥ずかしい話だが俺一人の力じゃこの状況を打破できない。だから頼む！ アンタの力なら……！」

自分の無力さを棚上げしての他人頼み、それはヒーローとしてあるまじき姿だが、同時に人として間違っていない判断。自分の力量を知っているマニユアルは、自身の名譽よりも預かっている雄英の生徒の安全を優先した。

天秤に掛けずとも導き出したマニユアルの決断、恥も外聞も捨てて頭を下げる彼に……。

「おう、任せておけ。はぐれた場所へ案内できるか？」

「ッ！」

No. 1 ヒーローもまた、即答で了承する。

「あ、でも待つて、その前にコイツらふん縛らないと……おい、誰か捕縛系統の個性持ちいない？」

「あ、そ、それなら俺が！」

「助かる。一応全員の戦意をへし折っているけど、何も出来ないように丹念に縛り上げてくれ。んじゃ、そっちの用件を済ませようか」

「ああ、頼……!?!」

黒い四体の脳無を近くのヒーロー達に預け、ゴジータはマニュアルの下へ駆け寄る。頼もしい援軍に安堵しながら、飯田とはぐれた場所まで引き返そうとした時、マニュアルとゴジータの前に脳無達が立ち塞がる。

「こ、コイツらまだこんなにいるのか!?!」

無尽蔵と思われる脳無の群れ、ゴジータが戦った黒い奴とは違うが、それでも一体一体が厄介な個性と耐性カを持っている。厄介な事になったと、焦るマニュアルを他所にゴジータはそんな彼の肩を掴んで前に出る。

「ほら、こんな奴らに後退っている場合じゃないだろ。アンタは雄英の生徒とはぐれた場所に案内することに集中してくれ」

「で、でもこんな数相手じゃ……!」

「大丈夫。何故って？」

多勢に無勢、覆せない脳無の数に足踏みしているマニユアル。そんな彼の不安を吹き飛ばすように……。

「この、俺がいるからだ」

黄金の炎を纏い、金髪碧眼の戦士へと変わる。

「さあ、悪いがこっちは急いでいるんだ。——瞬で終わらせるぞ」

知性もなく、理性も失われた脳無の群れが襲い来る。奴等を前にゴジータは不敵に笑みを浮かべ……次の瞬間、ゴジータは向かってくるすべての脳無に打撃を叩き込み、沈黙させた。



(我ながら、運が悪い！)

兄からのアドバイスを受け、職場体験先はマニュアルの事務所にした飯田はこの日、自分の運の悪さを心底呪った。

兄も無事に快復し、真摯な気持ちで待ち望んでいた職場体験。ただそこはヒーロー殺しステインが現れ、兄を襲った保須市という因縁ある場所だった。

当然ながら、体験先であるマニュアルに復讐目的で自分の所に来たのではないかと怪しまれたり、実際に質問されたりもした。確かにステインには言いたい事もあったし、思う所は多々あるが、日々筋トレに明け暮れている兄を見て、復讐やら恨み等の気持ちは殆んど持ち合わせてはいない。

ただ、幾ら自分がそう思った所で相手に伝わる事はなく、寧ろ兄に関する話はヒーロー委員会の公安から固く口止め(懇願とも言う)を受け、安易に話せなくなっている。故に、飯田は口を閉ざして顔を背ける事しか出来なかった。罪悪感で一杯になる飯田、そんな彼を見てより疑惑を深めるマニュアルという色んな意味で厄介な悪循環が出来上がった瞬間である。

自身に疑惑の視線が向けられているのを知った飯田は、真摯に職場体験に向き合うこ

とで信頼を勝ち取ろうとした。常にマニユアルの目の届く範囲に控え、彼の許可を得て個性を使う。

使う内容も迷子の子供を手を引いて親元へ届けたりという、兄が信条としている行動を率先して活動していった。

いつか自分も堂々とインゲニウムの名を受け継ぎ、その名に相応しいヒーローになるのだと、そう改めて決意した矢先だった。

燃え盛る街並みと暴れる脳無達。保須市に突如として訪れた危機、当然飯田はマニユアルの指示に従い、避難誘導の手伝い位はしようと考えていた。

しかし、この騒ぎに巻き込まれてすっかりマニユアルとはぐれてしまった飯田は、彼のヒーローを探しながら自分のすべき事を模索する。困っている人はいないか、何処かで泣いている子供はいないか。名を継いでいないものの、インゲニウムとして誰かを助けようと奮戦している飯田の耳に……ふと、ある声が聞こえてしまった。

それはくぐもった声、痛みと苦しみに悶えて息を吐く人間の声だ。騒ぎの中でもやけに耳に届くその声に振り返ると……そこは人気の無い路地裏へ続く道。飯田は嫌な予感を感じた。

人は、明らかに不味い状況に対面すると大抵は足を止めてしまう。今回もそれに該当し、生き物としての本能が飯田にその先へ進むなと警告している。

だが、助けを求めている人がいるかもしれない。この騒ぎに巻き込まれて怪我をして、身動きが出来ない人がいるかもしれない。ならば、インゲニウムとして見過ごす訳にはいかない。

少し覗くだけ、覗いてみて、誰もいなかったらすぐ戻る。そう自分に言い訳をしながら暗い路地裏の道を進むと……。

「く……そ……」

「……………はあ、お前も、この社会に蔓延る偽者。肅清対象だ」

「——ッ！」

いた。ポロポロの格好に赤いマフラーと目元を隠す布のマスク、メデイアでも取り上げられているヒーロー殺し、ステインがヒーローの口元を抑えて刃を突き付けている。

何でよりにもよってこの街にいるのか、困惑と疑問が浮かんでくる飯田だが、既に状況は差し迫っている。此処で自分が動かなければ、待っているのは彼の死だけだ。

彼を押さえ込んでいるヒーロー殺しステイン。奴の敵意と殺意は本物だと、飯田はステインの殺気を目の当たりにして確信する。奴は自分の目的の為なら、殺しすら厭わない本物のヴィランだと。

ならば、自分のやるべき事は一つ。内心で気に掛けてくれているマニュアルに謝りながら、飯田は己の脚に力を込める。

相手はプロのヒーローである兄ですら打ち負かす怪物、万が一も自分に勝てる要素はない。それならと、僅かな可能性に掛けて飯田は個性である「エンジン」に火を入れる。

「——なんだ？ エンジンの音？」

「その人から——」

「ッ!？」

「離——れろオツ!!」

フルスロットルからの強襲、死角を突いての飯田による渾身のドロップキックは、見事にステインの虚を突いた。全体重を乗せた一撃はヒーロー殺しを退け、彼の手に捕まっていたインディアン風のヒーローを解放させた。

「大丈夫ですか!？ 動けますか!？」

「だ、ダメだ。体が……動かない。君も、逃げろ」

ぐつたりと地に倒れ、動けないヒーローを見た飯田はステインによる個性かと察する。

どちらにせよ此処にはいられないと、未だ倒れるステインに目もくれず、飯田はヒーローを抱えて路地裏からの脱出を試みる。

格上のヴィランを相手に飯田が選んだのは、ステインの打倒ではなく、とらわれた

ヒーローの救出。ヒーローとしての本質を雄英から学んでいる飯田は、ステインを倒すことより目の前の苦しんでいる誰かを助けることを選んだ。

今の自分の勝利条件は、この人を連れて人気のある場所まで逃げることに意識を集中させ、一気に路地裏を駆け抜けようとした時……突如、自身の体が動かなくなる。

倒れ、地に這いずる飯田。一体何が起きたのだと混乱する彼の頭上から……奴の聲が聞こえてくる。

「——はあ、相手と自分の力量を凶った上での一撃離脱。自分の個性を把握した上でその選択……悪くない」

「ッ!？」

「だが、少々焦りが出たな。踏み込みすぎだ」

「ヒーロー、殺し！」

不気味な笑みを浮かべながら此方を見下ろしてくるヒーロー殺し。兄を襲い、今もなお社会に影を落とすヴィラン。奴の的確な指摘に悔しさよりも納得し掛けてしまう自分に腹が立ちながらも、飯田はこの状況を何とかするためにしがき始める。

「安心しろ。お前は殺さん。偽者の中でも時たま見掛ける本物の原石を砕く程、俺は見境なしではない」

「偽者……だと？ 何を、言っているんだ!？」

「お前のような子供には分かるまい、今の社会の在り方を。ヒーローという存在を、客商売の手段として乱用している奴等。そんな歪な偽者を持って囃す人々、その結果今の歪んだ社会が生まれた」

ヒーローとして合格点らしい飯田に気持ちをよくしたのか、ニヤニヤと笑みを浮かべながら語り始めるステインに、飯田はただあ然となつた。ヒーローを、社会を正す。そんな事を本気で望んでいるステインの狂気に当てられ、飯田は顔を青ざめさせていく。「ヒーローとは、偉業を成し遂げた者にのみ許された称号!! 断じて、他者を喜ばせるだけの道化に与えられるモノではない!」

「だったらなんで、何で兄さんを襲つた!? お前から見れば兄さんも偽者だつて言うのか!？」

「……………なに？ 兄だと?」

「僕は、ターボヒーローインゲニウムの弟、飯田天哉! 答えろヒーロー殺し! 僕の兄は、泣いている子供の手を引いてあげるヒーローは、お前から見て偽者と呼ぶのか!？」

「……………」

涙を流しながら訴えてくる飯田に、今度はステインが口を閉ざした。何かを思い返しているのか、今まで浮かべていた笑みは消え、静かに見下ろすステインに飯田は睨み返

している。

「……………それでも、誰かがやらなくてはならない。この間違った社会を糺し、真のヒーロー……………オールマイトやゴジータの為に、あるべき在り方を取り戻す為に!!」

どんなに言葉を重ねても、どれだけ訴え掛けても、ヒーロー殺しは止まらない。刃毀れしている刃を手に、倒れているヒーローに歩み寄る。

「や、止める!」

「俺を止めたければ、お前が俺を殺しに来い。俺が求めるのは、真に強いヒーローのみ」
「止めるオオオツ!!」

振り上げた刃が鈍く光る。飯田の制止の叫びも虚しく、凶刃がヒーローに振り下ろされた時。

「SMASHッ!」
スマアツ シュ

「死ねエツ!!」

拳と爆発が、ステインを吹き飛ばした。突然の事に驚く飯田。彼の前には同じクラスで共にヒーローとしての道を歩く学友達。

「助けに来たよ、飯田君!」

「ぶっ飛ばしに来たぜえ、イカれ野郎!」

緑谷出久と爆豪勝己が其処にいた。

記録24

逃げ遅れた人がいないかせめて避難誘導はしてみせようと、担当のヒーローから離れてしまい一人行動することとなった飯田天哉は、人気のない路地裏にて不運にもステインと遭遇してしまう。

兄を襲った恐ろしきヴィラン。しかし、ヒーローとして立っている今の自分はこのままにもせず逃げ出すわけには行かない。勝ち目のない怪物を相手に飯田が選んだ戦法は、一撃離脱というシンプルなモノだった。

最初こそ、虚を突いてステインに捕まっていたヒーローを助け出すことに成功したが、奴の個性によって動きを封じられた飯田は、捕まっていたヒーローと共に拘束されてしまう。

そんな時だ。頭上から現れる二つの影が自分達を庇うように降り立った。それは飯田自身が良く知る相手、同じヒーローを志す友人達だ。

「緑谷君と爆豪君!?! 何故二人が此処に!?!」

「たまたま近くを通り掛かった……じゃあ、通用しないよね」

「話は後だ。今は目の前のクソヴィランに集中しろ！」

突然現れた級友の二人に驚くが、経緯を説明できる程の余裕は目の前の二人にはない。今、彼等が対峙しているのは多くのヒーローを襲い、再起不能にしてきた恐るべきヴィラン、ステイン。

奴を前にして目を反らす訳には行かない。雄英襲撃の際に本物のヴィランというモノを体験したが故の警戒心、子供ながらヴィランとの対峙を理解している二人にステインは内心で感心した。

「——はあ、また子供か。今日は良く、子供と出くわすな」

「っ、二人とも気を付けろ！ 奴の個性は相手を拘束する類いのもの、条件は恐らく奴に斬られる事だと予想する！」

「……………あれ、意外と飯田君てば冷静？」

自分が動けず、且つ偶然この現場に鉢合わせてしまったのなら、二人の気質を鑑みて、飯田は逃げる事を促すよりも対処への助言を優先した。

緑谷としてはてつきり再起不能にされたであろう兄の敵討ちに来ていた飯田の事を心配していただけに、意外と視野の広い様子の彼に軽く驚いた。

「余所見してんなクソデク！ 来るぞ！」

「ッ!？」

「来てしまった以上、仕方がない。事を終わらせるまで……お前達は寝てろ」

瞬間、ステインの体がブレて見えた。それは一般的な動きを凌駕する挙動、地を這って体を左右に振りながら進んでくる様子はさながら獲物を追う蛇のよう。

個性によるものではなく、純粹な人体の挙動。人は体術を極めればこんな動きも出来るのかと、緑谷と爆豪は一瞬間喰らうも、二人とも日頃から超人の動きを目にしてきた者。地を這うのなら上から潰せば良いと、二人は個性をもって高く飛び上がるが……。

「なッ!？」

「跳ね……!？」

飛び上がる二人に追従するように、ステインもまた飛び上がる。ほぼ垂直に、直角に跳ね上がるステイン。

そんな奴の下には長刀の刃が突き刺さっている。恐らくはあれを足場として利用して跳び跳ねたのだろう。突如間合いを詰めてきたステイン、その両手に握られた鈍く光る二本のナイフに動揺するが、それでも二人は負けじと対処する。

「~~~~ッ、死ねエッ!!」

「こん、のオッ!!」

振るわれる二振りの刃、これをマトモに受けたら不味いと知っている二人は受けるよ

りも回避を優先する。爆豪は爆破で、緑谷は指で宙を弾いて回避するがそこは狭い路地裏。このまま行けば直ぐ様壁にぶつかって自滅だろうとステインは一瞬だけその表情に落胆の色を見せる。が、互いに壁を足場にして再び飛び跳ねる二人にステインは予想を裏切られて目を丸くさせる。

次の瞬間、爆破と拳のそれぞれの一撃がステインの体に叩き込まれる。地に叩き落とされるステイン。明らかに学生の動きではない二人に、捕らわれていた飯田とインディアンの風のヒーローは愕然としている。

「嘘、だろ？ 君たち本当に学生？」

「凄いな、二人とも！」

「……………」

並みのヴィランが相手なら今の一撃で戦意は喪失するだろうし、なんなら気絶だつてしている。确实に入っているであろうダメージに二人は驚きながらも称賛するが、対する緑谷と爆豪の表情は暗い。

「……………おいクソデク、分かってんだらうな？」

「うん、もう次に備えてる。いつでもいいから、何かあつたら直ぐ言って」

「二人とも、何を言つて……………まさか」

表情の険しい二人に訝しげになる飯田だが、その可能性に思い至ると、まさかと青ざ

める。そんな飯田に対して、爆豪も忌々しげに口を開いた。

「ああ、あの野郎、あのタイミングだったのに受け身取りやがった」

手応えはあった。勝ったという確信もあった。しかし、地面に叩き付けられた僅かな挙動を目にした二人は、嫌な予感を沸々と感じていた。

奴は、手を抜いている。その事実を目の当たりにした爆豪は、今にも襲い掛かりそうな雰囲気を出すのが、No. 1ヒーローの言葉を思い出して努めて冷静さを保ち続ける。

そして……………。

「良いぞ、お前達は筋が良い。一日に三人も原石に出会えたのは僥倖だ。……………その爆発小僧は少々不安だがな」

「ああ!?!」

ヌルリと、何事もなく立ち上がるステインに緑谷と爆豪はやはりと身構える。耳もなく、鼻もなく、剥き出しの双眸だけが相手を見据えた信号になっている。

マトモに目が合えば、それだけで肩が竦み上がる。それでも緑谷が握り締めた拳に余計な力みが入らずに握っていられるのは、隣にいる幼馴染みのお陰か。

緊迫した空気。相手は何人ものヒーローを血の海に沈めてきた凶悪ヴィラン。そんな超危険なヴィランを相手にしても全く怯む事なく対峙していられる。そんな二人を前に飯田は頼もしく思えると同時に申し訳なく思った。

だって、絶対緑谷君てば自分の事を兄を襲ったステインに対して復讐心を燃やす者だと思つているもの。先の素の反応が何よりの証拠。

確かにステインは危険なヴィランだと思つているし、少なからず思うところはあつたりする。けれど憎しみがあるかとなると……正直、ちよつと分からない。

だって、兄は今も元気に筋トレに励んでいるんだもの。襲われた本人がステインに対してそんな感情抱いていないんだもの。

苦笑いで「まあ、負けちまつた俺にも責任はあるさ」なんて言われたら、理解は出来なくとも納得するしかない。

いつか、兄に関する箝口令が解かれたら、クラスの皆に謝ろう。心配し、氣遣つてくれた皆に真摯に向き合つて謝罪しよう。飯田天哉は心の底からそう決めた。

閑話休題。

「ち、マジで大して効いてねえなクソが。何処で覚えたそのふざけた体捌き」

「他のヒーロー達が氣付くまで凡そあと数分弱。外の異変が片付くまで、僕達でなんとか時間を稼がなくちゃ！」

「あのNo. 1が数分も手間取るとは思えねえがな」

今こうしている間にも、現地のヒーローやグラントリノ達、何よりNo. 1ヒーローが街中に現れた脳無達の対処に当たっている。脳無達を鎮圧するまでそう時間は掛か

らない事だろう。

そうなれば、ステインを捕まえに来たと豪語しているゴジータが、必ず自分達を見付けに来る筈だ。飯田を見付けるまで共に行動していた緑谷と爆豪が予め決めていた戦いの流れ。

爆豪はヒーロー殺しに勝つ気であるが、緑谷としてもそのくらいの気概でなければステインを止められないと思っている。緑谷は後ろの二人を守る為に、爆豪は目の前の敵を勝つ為に、それぞれ動きやすい構えを取る。

「——ゴジータ？」

しかし、そんな二人の覚悟がブレる程の悪寒が全身を駆け巡る。目の前のステインの紅く光る眼が、目の前の二人……ではなく、この街の何処かにいるNo. 1に向けられている眼が、どうしようもなく狂っているからだ。

「来て、いるのか？　ゴジータが？　あの、No. 1が、オールマイトすら認めた超ヒーローが……？　俺を捕まえる為に？　——くは、クハハハハハ、クヒヤハハハハハハ!!」

啜う。狂氣的に、狂喜的に、或いは歓喜に。爆豪の口から溢れるゴジータの単語を拾ったステインは、その口元を三日月に歪め、ユラリと体を揺らしながら爆豪に問う。

「爆発小僧、貴様の言葉……はあ、嘘はないな？」

「ああ？ 当たり前だわ。そもそもゴジータはテメエを捕まえる為に此処に来てんだよ」

突然笑いだすステインに軽く怯んだ爆豪だが、そんな自分を悟られない為に強気の姿勢は崩さない。だが、今のステインにはそんな事などどうでも良かった。

「そうか。はあ……あのゴジータが俺を捕まえに来たか。ならば——」

「ッ!？」

「此方から出迎えねば、無作法と言うものだな」

走る……ではなく、疾る。風というにはおぞましく、恐ろしい程に鋭い疾走が二人の間を駆け抜ける。反応出来なかった。これ迄とは明らかに異なるステインの動きに緑谷も爆豪も僅かな挙動しか認識出来なかった。

二人の間を抜けて、飯田達の方へ向かう。飯田は微かに動ける体を使って、未だに動けないヒーローを庇うように覆い被さる。緑谷の悲痛な叫びが聞こえてくる。このままでは飯田が危ないと緑谷が一瞬だけ上限を越えた力を引き出そうとした時、緑谷はステインの行動にあ然となった。

無視したのだ。現在のヒーロー社会に憤り、ヒーロー達に強い敵意を抱いているヒーロー殺しが、無防備な飯田と庇われているヒーローを無視し、路地裏から出ようとしている。

N o. 1ヒーローの名前が出てから、明らかに動きが変わったヒーロー殺しに緑谷が戸惑う一方、爆豪勝己の行動はブレなかった。

「待てやイカれ野郎！」

爆発。反応ではなく、反射的に個性を使い、目の前のヴィランを倒す為に爆豪はステインへ迫る。もつと速く、もつと疾くと、鈍足な自分に苛立ちながら爆豪勝己は己の肉体を加速させる。

このヴィランは逃がしてはならない。逃がしてしまえば、また多くのヒーローが犠牲になる。その事を理解し、それを止めるのは今の自分達しかない。

一瞬、ほんの一瞬だけ爆豪の脳裏にN o. 1ヒーローの背中がよぎる。ああ、確かに彼ならば凶悪なヒーロー殺しだって難なく捕まえてしまえる事だろう。

けれど……………。

(ふざけんな！ 俺は、N o. 1ヒーローを超えるヒーローになるって決めてんだ!! 頼つてばかりで、守られてばかりで……………いられるかよオツ!!)

それは違うと、爆豪勝己は否定する。今此処にいるのが自分達しかないのなら、自分達でどうにかするしかない。そう自分に言い続けている爆豪はこの時、無意識ながら一つの変化を身に付けた。

爆発の質が変わった。これ迄の様な広がる爆発ではなく、一つ一つが収束されていく

かの様な感覚。発煙と煙幕を撒き散らすだけだった己の個性が、この一瞬だけ光り輝いている様に見えた。

（かつちゃん!?)

その光景に緑谷は驚愕する。幼馴染みの個性が、これ迄とは明らかに違う事に。そして、爆豪がステインに追い付こうとした時……。

「——邪魔だ」

「ッ!?!」

「かつちゃんああんッ!!」

回転し、振り抜かれる凶刃が爆豪の肩を切り裂いた。鮮血が舞い、地に倒れ伏す爆豪に感情の爆発した緑谷が殴り掛かる。

しかし、そんな緑谷を嘲笑うように緑谷もまたステインの刃によって切り捨てられる。交差する視線、怒りに満ちた緑谷に対してステインは何処か冷めた眼で倒れる二人を見下ろす。

「級友が斬られて我を見失う、か。人としては問題ないが、ヒーローとしてなら些か減点だぞ学生。ヒーローたるモノ、頭ではなく心を熱くさせろ」

「こ、こん……のお!!」

「チイツ……!?! 舐めんよ、この程度で俺が止められるかアッ!」

斬られてはいるものの、二人とも傷の深さは思った程ではない。焼けるような熱さこそあるものの、骨は斬られていないことを察した緑谷と爆豪は負けられないと意思を強めて立ち上がろうとする。

そんな、若くありながらそこらのヒーローよりガッツのある二人に、ステインは内心で感心する。だが、彼の目的が別にある以上、既に二人には用はない。

ペロツ、両手に握られるナイフにそれぞれこびりついた血をステインが舐め取ると、二人の体は突然石の様に硬直する。

「な、んだと!？」

「体が!？」

「お前達は筋が良い。まだまだ青く、未熟な点が多々あるが、それでもそこいらの偽物達より余程素質がある。そこは素直に認めよう」

「く、ソ……がアツ!!」

「だからこそ、此処までだ」

「そうだな。此処までだ」

「——ツ!？」

突然聞こえてきた声。爆豪でも緑谷でも飯田でもない別の誰かの声が、今度はステインの体を硬直させる。

ドクンと、波打つ心臓の音が跳ね上がる。汗が噴き出し、舌が渴いていく。極度の緊張状態に達しながらも、それでも平静を装うステインはゆっくりと声のした方へ振り返る。

「お前は……エンデヴァーか？ それとも、オールマイトか？」

あえての問い。建物の影で輪郭しか見えないヒーローに、ステインは問いを投げ掛ける。すると、影の中からフツと笑みが溢れるのをステインは確かに聞いた。

「俺はエンデヴァーでもオールマイトでもない。——俺は貴様を倒す者だ」

暗闇から現れる黒髪黒目の超ヒーローに、ステインの全身が震える。それは畏怖か歓喜か、その心境はステイン本人にしか分からない。

記録 25

「さて、これで粗方片付いたか。御老人、協力感謝する」

「ああ、即興のチームアップにしては良い連携だった」

突如、平和な保須市に現れた無数の脳無。無造作に暴れ、一体一体が並みのヒーローでは分が悪い凶悪な怪物の群れは、偶然騒動に居合わせたNo.3ヒーローと、グラントリノの連携によって鎮圧しつつあった。

自慢の火力で脳無を灼くエンデヴァーと、高機動で三次元な動きをするグラントリノに翻弄され、次々と倒れていく脳無達。その圧倒的な強さは正しくトップヒーローと周囲のヒーロー達は感嘆の声を漏らしていく。

そんな周囲の反応に対し、エンデヴァーは少し不機嫌だった。本当は自分の活躍を息子に見て欲しかったのに、その息子が此処にはいない。何か緊急の用件が出来たと言っていたが、それは自分の活躍を見るのを後回しにする程なのかと、エンデヴァーは人知れず凹んだ。

「では、俺は息子——焦凍の行方を探さねばならん。御老人はどうする？」

「ああ、俺も預かっている奴がいてな。そいつと合流するつもりだ」

此処での騒動が片付いたのなら、二人は次の目的に即座に動こうとする。エンデヴァーは息子を、グラントリノは弟子の弟子を、それぞれ探しに向かおうとした時。

黄金の炎が、二人の頭上を通過する。

「ッ!？」

圧倒的な存在感、その光に見覚えのあるエンデヴァーは黄金の炎を纏うそれを目を見開いて睨んでいる。何故奴までもが此処に？ そう不思議に思うエンデヴァーの足が止まると、背後の方から声が聞こえてきた。

「くっそ、重たいなコイツら。一体どんだけいるんだ？」

「知らねえよ！ 兎に角、早い所他のヒーロー達を呼んで警戒態勢を敷かねえと、幾らゴジータが戦意を折ったからって、いつまでも大人しくしている保証はねえぞ！」

複数のヒーロー達の呻き声。何事かと思ひ振り返ると、今度はエンデヴァーだけでなくグラントリノまで目を見開いた。

脳無。エンデヴァーとグラントリノで連携して打ち倒した数よりも多くの脳無が巨大な台車に積み上げられている。その中には明らかにこれ迄のタイプとは異なる黒くおぞましい様相の脳無が四体、その姿も確認されその全てが打ちのめされている。

10や20では利かない脳無の数。自分達が倒したモノより一回り以上多い数の脳無に、エンデヴァーは愕然としながら歩み寄る。

「これを……全てゴジータが？」

「あ、え、エンデヴァー!? えっと、その……はい。例の金髪碧眼となったゴジータが暴れたらしく、気付いた時には……こうなっていました」

近くで見えていた筈なのに、ゴジータの動きがまるで見えなかった。瞬く間にヴィラン達は倒され、気付いた時にはこんな風に何処からか持つてきた台車に積み上げ、あとは宜しくと去ってしまったのだ。

その言葉を濁しながら説明するヒーローの一人に、エンデヴァーは拳を握り締めて俯く。

(くそ、此処でも、ここでも俺は……!!)

突き付けられる力の差。自分が幾ら努力を重ねても決して埋まらない深くて大きな溝、あれだけ足掻いても埋まらなかった溝を、たった一人の若造が飛び越えていく。

悔しい。悔しくて悔しくて堪らないと、沸き上がる悔しさと醜い嫉妬、自身の心の衝動を、歯を喰い縛って堪え忍ぶ。

自分を、そして嘗てのNo.1すらも飛び越えていく超新星。奴が次に何をするつもりなのかと、見届ける意味も含めて、エンデヴァーは黄金の炎の軌跡を追った。



「ゴジータ……ハア……No. 1……ヒーロー……」

月明かりの下、照らされて現れる現ヒーロー界最強のヒーロー。ゴジータを前にしてヒーロー殺しであるステインは啞然となつて立ち尽くす。

ダランと力なく立ち尽くすその姿は、凶悪なヴィランには似合わない程に無気力で、隙だらけだった。噂のヒーロー殺しがまさかの無防備を晒している事に怪訝に思うゴジータは、表情には出さずにステインを見据える。

「さて、この状況に色々と聞きたい事はあるが、その前に一つ聞いておくとしよう。……お前がヒーロー殺し、ステインで間違いないか？」

「ッー」

スツと、目を細めて訊ねてくるゴジータにステインは全身から汗が吹き出るのを感じ

た。圧倒的威圧感、数々のヴィランを震え上がらせてきた迫力。成る程これは凄まじいと、生で受けた体験にステインは冷や汗を流しながら笑みを浮かべた。

「ゴジータ。オールマイトを超え、オールマイトが認めた次代のNo. 1ヒーロー。俺は、お前に殺されるなら……本望だ!!」

両手の刃の柄に力を込めて握り締める。低く身構えて掛けるその姿は地上を飛ぶ黒い鳥。先程よりも速いステインに緑谷達は驚愕に目を開く。

瞬く間にゴジータとの間合いを詰め、その刃を振るう。避ける余地も防ぐ暇もない。太刀を前に、ゴジータはただ呆然と立ち尽くす……様に見えた。

空を切る。何の手応えもなく、ただ虚空を切り裂く刃にステインは一瞬理解が及ばなかった。何故自分は何もないところを斬っている？ 意味の分からない現象を前にヒーロー殺しの思考が鈍った時――。

「よお爆豪、ちよつと目を離れた隙に随分とやられたなあ」
「ッ!?!」

背後からの声に、ステインは愕然としながら振り返る。其処には先程自分が切り捨てたヒーローの卵達、己の個性によって身動きを封じられている少年達のそばに座り込む形でゴジータが其処にいた。

何も見えなかった。避ける素振りも、その挙動も、何もかもがステインの知覚からす

り抜け、感知出来なかった。速い、というより巧い。多くのヒーローを倒してきたステイン。対人技能をこれでもかと培ってきたこの男でさえ、ゴジータの動きはまるで見えなかった。

唾然とするステイン。しかしその表情は驚愕から歓喜へと移り変わる。これがN.O.。1ヒーローゴジータの強さなのだ、ステインは恐ろしい笑みを浮かべて震える。

「うわあ、結構バツサリいかれてんじやん。幸い骨とか内臓には達してないみたいだが……大丈夫か？」

「……………うるっせえ！ 俺は、俺はまだ戦える！ 俺は、負けてねえ……………」

ステインに斬られ血を流す爆豪だが、その瞳は全く変わらなず闘志を燃やし続けている。斬られた事に対する恐怖より、ヴィランにしてやられた自分に怒りを抱いている爆豪。ヒーロー殺しという本物のヴィランと遭遇しても決して折れないその心に、ゴジータは笑みを浮かべた。

「ならいい。お前自身が敗けを認めていないのなら、お前はまだ敗けちやいない。たとえ膝が折れて地に這いつくばっても、お前の心は折れちやいない」

「……………」

「だから、今はまだ其処で休んでいろ。緑谷、お前もな。たとえば体が動けたとしても、今は少しだけ休んでいろ」

「ゴジータ、でも！」

「ガキが体を張ったんだ。なら、今度は大人である俺の番だろ？」

動けない爆豪の頭を撫でて、ゴジータは立ち上がる。その際に動けるようになった緑谷が加勢しようとするが、ゴジータは予め見越していた様に休んでいろと釘を刺す。

立ち上がり、爆豪達を庇うように前に立つゴジータは改めてステインへと向き直る。

「さて、状況的に考えて間違いないだろうが……改めて訊ねよう。お前がヒーロー殺し、ステインで間違いないな？」

「……………ハア、そうだ。俺がステインだ。お前が探しているヒーロー殺しは、俺で間違いない」

「成る程。じゃあ、一応理由を聞いておこうか？ 何でこんな事をする？ ヒーローを殺し、ヴィランを殺し、それでお前は世間に何を問う」

「真の、ヒーロー社会。ヒーローの存在、その是非を、今一度世間に問わんが為」

理由を訊ねるゴジータの言葉に、ステインはあるがままに答える。今の社会は間違っている。ヒーローに溢れ、偽善ばかりが栄えるこの時代にヒーローとしての本質を訴えるのだと、血走った目でステインは語る。

「ヒーローとは、偉業を成し遂げた者にのみ許された称号！ 自己犠牲の果てに許されたモノ！ 地位や名声、利益等に意地汚い贗物達が称しているいいモノでは……………断じてな

「いー」

ヒーローとは人を助け、自己を厭わずに戦う英雄達の事。個性社会黎明期、嘗てヒーローは見返りなく戦い、そして今の立場を築いていった。

しかし、それこそがステインには許せなかった。ヒーローとは誰かの為に戦い、傷付いても尚誰かを救う英雄の事である。

今のヒーロー社会は誰かを助けることを商売として消費し、ヴィランを倒すことをショーの様に民衆の娯楽の様になっているのではないかと、ステインは吐き捨てた。ヒーローとは社会的資格を持つ公務員ではない、誰かを助け、命懸けで綺麗事を実行する者達の総称である。

そう語るステインの目は、狂気を孕んでいながらも真摯で、だからこそゴジータもまた真剣に聞いていた。目を細め、目の前のヒーロー像を語るステイン。そんな彼をゴジータは静かに見据えていた。

「それが、お前の言い分か？」

「ああそうだ。これが俺の理由だ。誰も言葉だけでは決して聞き入れない。言葉だけではダメだと言うのなら、行動で示すしかない。たとえ、それが血を流す事になるのだとしても」

「……………ステイン。お前、もしかしたら以前はヒーローを目指してたんじゃないのか

「？」

「ッ!？」

「ステインが………ヒーローを？」

今のヒーロー社会について憤りを感じながら語るステインにゴジータは何となく彼もまたヒーローに憧れた一人なのではないかと推測した。結果はビンゴ、目を見開いてあからさまに動揺するステインに、爆豪や緑谷達は素直に驚きを露にしている。

「そんなにヒーローについて熱く語れるんだ。ならヒーローについて憧れていたとしても不思議じゃない。けれど、お前はその道から自分から外れた。今のヒーロー社会が、自分の思うモノとは違っていたから………違うか？」

「……………」

「成る程、客観的に見ればお前の言うことも一理あるんだろう。名声や地位、そこから発生する利益。ヒーローという存在を職業にまで落とし込んでしまった今の社会そのものをお前は嫌悪しているんだな」

ステインの主張し、求めているモノはゴジータとしても理解できなくはないモノだった。今のヒーロー社会は何処か歪で、まるでヒーローの活躍をショーか何かと勘違いしている民衆は、ゴジータから見ても時折気持ち悪く見えた。

ステインの主張もその事を含めているのだとしたら、ゴジータもある程度ではあるも

のの、理解出来た。

「ああ、そうだ。その通りだとも、だからこそ俺は——！」

「それでも、間違っているのはお前の方だ」

けれど、それでもゴジータはステインの言葉を鵜呑みにはしない。確かにステインの言葉には真実味があり、今のヒーロー社会の歪さを突いている。

ステインの言葉は奴が握り締めている刃同様に鋭かったが……肝心の説得力が欠けていた。

「ヒーロー殺しステイン、お前が今のヒーロー社会を本気で変えたいと言うのなら、先ずはお前自身がそうなるべきだった。言葉だけでなく、その姿勢、その在り方で人々を、ヒーローの意識を変えさせるべきだった」

「……な、なにを……」

「だが、お前は諦めた。言葉では届かないと諦め、他者の血を流すという最も簡単な道を選んだ」

「違う!! 俺は、汚い泥になるつもりなどなかった! 今の醜悪で、汚泥のごとき贗物のヒーローにはなりたくなかった。だから……!」

「泥にまみれる覚悟もない奴が、ヒーローの真贋を語るな」

「ツ!!」

バツサリと、ゴジータはステインの理論を正面から両断。泥にまみれるのではなく、血を流す道を選んだステインを間違いだと否定する。ゴジータにステインは息を呑んで後退る。

「けれど、どれだけ言葉を重ねた所でお前が立ち止まるつもりがないのなら……」

瞬間、ゴジータの体から炎が舞い上がる。黄金に輝き、柱となって夜の空を突く黄金の炎。金髪碧眼の超ヒーロー、ゴジータ。

ゴジータがNo. 1ヒーローとされる由縁。その黄金の炎を纏う姿が、どうしようもなく希望の光に見えた。誰かが付けたゴジータの異名、「平和の象徴」と呼ばれるオールマイトと対となる「希望の象徴」。強く鋭い碧眼の瞳に射ぬかれたステインは自身の全身に雷の如く衝撃が駆け巡っていった。

「俺が止めてやる。掛かってこいよ、ステイン！」

「お、お………おとおおおッ!!」

駆ける。ゴジータに自身の信念を否定され、ヴィランとして本気で相手をしてくれるNo. 1ヒーローに、最早ステインは口にする言葉などなかった。あるのは、失意と喜びの狭間で揺れるグチャグチャとなった感情だけ。

理解はされたが受け入れられず、それでも進むしかないステインは、全霊を懸けて目の前のNo. 1最強に挑む。両手に握り締められた刃を以て、再びゴジータへ肉薄する。

「ゴジータアアアッ!!」

繰り出される無数の斬撃、爆豪達には軌道しか追えない速く鋭い凶刃は、しかしてゴジータに呆気なく潰される。

ゴジータの手が一瞬だけふれると、パパンとステインが手にしていた二振りの刃は弾け飛ぶ。粉微塵に吹き飛んだ己の得物にステインは一瞬目を丸くさせるが、それどころだと笑みを深くさせ、後ろへ跳躍。

「しまった、あれは!」

飯田が叫ぶ。ステインが着地した場所は奴が一番の得物として振るい、多くのヒーロー達を血に沈めてきた長刀のそば。自身が最も得意とする得物を手にしたステインは静かに構えてゴジータを見据える。

「ハア、ゴジータ! お前は言ったな、俺の信念は間違っている! ならば聞かせてくれ……お前の思うヒーローは、お前の願うヒーローとは、一体なんだ?」

「立ち上がる者。たとえ泥にまみれ、血で汚れ、挫折し、屈しても、それでも立ち上がれる勇氣ある者。喻えみつともなく、無様と蔑まれようと、立ち上がって自分の足で前に進める者。それこそがヒーローだと俺は信じてる」

「——ハア、成る程。お前にとってヒーローとは本物も贋物もない、立ち上がれる全ての者をヒーローだと、そう言うのだな……?」

「ありきたりだと思っうか？」

改めて訊ねるゴジータのヒーロー像、返ってきた返答にステインは嗤うことはなかった。何故なら、彼もまたヒーローに憧れた人間の一人なのだから……。

「否定はしない……だが、それでも俺はこの道を選んだ。ならば、最期まで突き進むのみ……！」

再び、ステインは走る。低く、鋭く、何処までも一直線に……鈍く光る刀剣を手に、ヒーロー殺しステインは駆ける。

小細工も殺人技術もないただの突進。ただ心臓目掛けてひた走るステインにゴジータは拳を作り力を込める。

「ゴジータアアアッ!!」

「——じゃあな」

狂気と狂喜に彩られ、突き進む血黒い怪物に向けてゴジータは拳を振り抜いた。最後に溢した言葉は憐憫か同情か、残念がるゴジータの言葉はしかしてステインに聞こえる事はなく。

(はあ、やはりゴジータ……お前こそが、希望の光……)

眼前に迫る光を前に、ステインは見失うことなく突き進んだ。

その後、事態を取扱させたヒーロー達も駆け付け、無事に緑谷達は保護された。緑谷も爆豪も飯田も、今回の件には警察から嚴重に注意をされ、飯田も世話になったマニユアルに対し深く謝罪し、今回の処罰を甘んじて受け入れた。

結局、ヒーロー殺しステインはゴジータが倒し捕まえたと報じられ、それが事実であるが故に緑谷達も強く反発する事はなかった。

ただ一つ不可解だったのは確保された時のステインだった。他のヒーロー達が駆け付ける頃には決着が付いており、全てが終わった後だった。

自ら信じて疑わない信念を否定され、得物を破壊され、一撃でノされたヒーロー殺し。胸元にはゴジータの拳の痕がくつきりと残っており、とても痛々しく見えるというのに、白目を剥いて仰向けに倒れるステインの表情は、何処か満ち足りた……幸せそうな表情をしていたという。

記録 26

保須市襲撃。脳無という凶悪なヴィランによる日本の平和を脅かす脅威は、N o. 1 ヒーローを筆頭に数多くのヒーロー達の活躍によって制圧、鎮静化された。

一つの街が機能不全間際にまで追い詰められた今回の事件で、人々は強い不安を抱くことになったが、先にも述べたN o. 1ヒーローの活躍によってその不安は大部分が解消される事になった。

金色の炎を纏い、金髪碧眼の姿へ変身したゴジータは多くの人々の希望となっていた。久方振りに目の当たりにした人々は歓喜し、同業のヒーロー達ですらゴジータの活躍に目を奪われていた。

そして、そんなゴジータを筆頭にヒーロー達が活躍した翌日、現在N o. 1ヒーローのゴジータは同市内にある大手の病院へ駆け付けていた。

「いやー、しかし振り返ってみればダセーなお前ら。揃いも揃ってヒーロー殺しにやら

れるとか、チョーつとカッコ悪いんじゃねえの?」

「うるっせえええ!! ンなの分かってンだよこっちはよおおお!!」

「か、かつちゃんここ病院! 落ち着いて!」

主に、入院している二人の雄英生徒をおちよくる為に。

ベッドに寝かせられている二人の少年、爆豪と緑谷は傷の見た目こそ派手ではあるが、傷口の深さは大した事はなく、後日訪れるだろうリカバリーガールの力を借りれば即座に完治、退院するだろうとのこと。

リカバリーガールがやって来るのは凡そ二日後、その間二人は大人しく病院生活を余儀なくされた。

「つーか、何で俺がクソデクと同室なんだよ!? 部屋変えろや!!」

「だってお前ら同じ学校の生徒じゃん。学生がヴィランの襲撃で怪我を負ったと知られば、ヒーロー社会に対する不安を煽る材料になりかねない。これは、必要な秘匿処置である——だとき」

「それって、もしかして公安からの指示ですか?」

「お、流石に分かるか。そう言う訳でお前らは反省も込みで二日間入院な」

本来ならゴジータ特製の仙豆擬きで一日と待たずに退院まで二人を回復させる事が出来るが、今回二人の負った怪我は生徒の身分であるにも関わらず、独断で動いた結果

によるもの。

最初はゴジータも仙豆擬きを使おうかと迷い、リカバリーガールへ相談した所、即座に駄目だと却下された。今回二人の怪我は自業自得。怪我自体大した事ではないのなら、自分の行いを反省させる意味も含めて、仙豆擬きによる回復は止めておけと忠告された。

「ま、そういう俺もお前達同様に暫くの間は活動自粛の身だから、あまり強気には言えんがな」

「あ、その……………本当に、ごめんなさい」

ハハハと笑いながら自らの境遇を語るゴジータ。如何にNo. 1ヒーローと云えど、職場体験に来ているだけの学生に独断を許す権利はないし、怪我を負わせてしまった以上相応のペナルティが課せられるのは当然の帰結だった。

爆豪の受け入れ先だったゴジータ、緑谷の受け入れ先であるグラントリノ、そして飯田の受け入れ先であるマニユアル。3人のヒーローは今回の件の罰として、揃って一週間の活動自粛を言い渡される事になった。

「ま、俺は元々どつかで休みを入れるつもりだったし、今回の自粛期間を有給の代わりとして受け取るさ。グラントリノ……………あのじいさんも似たような事を言ってたし、それ

「についてはお前らが気にする事じゃない」

「そ、そうは言っても……………」

「なら、今回の件を教訓にこれからは自分の行動を顧みる様にしような。……………俺はしなかつたけど」

No. 1 ヒーローの活動自粛。それ自体はオールマイトとチームを組んでいた時に体験していたし、他のヒーロー達の成長を促す意味を含めて、今回の自粛のペナルティは広い視野で見れば日本のヒーロー界を盛り立てる必要処置とも言えた。

その辺りの大人の事情は暈しながら説明し、緑谷を納得させたゴジータは、いつの間にか大人しくなっている爆豪へ向き直る。

「……………実はな、ヒーロー殺しを見つucker際に決め手となつたのは光る爆発のお陰だつたんだ」

「!」

「幾らこの俺でも、街一つをくまなく探し回るのは骨が折れるし、それが夜の時間帯なら尚更時間が掛かる。そんな時さ、街の一角でド派手な火花みてえな爆発を目にしたのは」

「……………」

「爆豪、今回のお前等の行いは独断専行による自業自得。警察の人達から説教はあるし、

俺が庇うことはほぼない」

「……………分かってる」

「だが、あの爆発のお陰でお前らを見つけることが出来た。だから……………良くやったな、爆豪。宣言通り、新しいお前の姿、見せてもらったぞ」

今回の二人の行いは決して褒められる事ではないし、公にされたら大問題になる一件だが、それとは別に爆豪が自力で個性の新たな領域に到達した事をゴジータは心から喜んだ。

そんな笑いながら爆豪の頭を撫で回すゴジータだが、やがて恥ずかしくなったのか、爆豪はゴジータの手を乱暴に振り払うと、不貞寝を決め込みベッドの毛布へと潜っていった。

「さて、そんな頑張ったお前にご褒美をくれてやりたいが……………生憎と今はこれくらいしかなくてな」

くるまった毛布の隙間に一枚のカードを差し出す。何かと思いき爆豪は何となく受け取ると、次の瞬間ガバリと起き上がった。

輝き煌めく一枚のカード。それは巻でトップクラスの稀少さと価値を示す某カード、オールマイトの衣装を着たゴジータが描かれていたモノだった。しかも、直筆のサイン入り。

目を大きく見開かせる爆豪。そんな少年の如くの反応を示す彼にゴジータは喜んでくれたと認識し、ハツハツハと笑う。

「気に入ってくれたなら幸いだ。……んじや、俺は一旦帰るから、お前達は大人しくしておけよー」

そう言いながら病室を後にする。部屋に残された二人、特に緑谷の方はカードをジツと見て動かない幼馴染みに軽く困惑していた。

果たして声を掛けて良いのか迷う緑谷だが……。

「——シツ」

小さく、ガッツポーズをする爆豪に何だかホツコリした気持ちになった。

「……………ああ？ なに人の顔見てニヤニヤしてンダクソデク！ ブツ殺すぞ!!」
「理不尽すぎるよかつちゃん!!」

爆発する病室、直後に聞こえてくるナース達の叱責の音が轟くのを聴きながら、ゴジータは出来た時間の潰し方を模索する。

二人が退院し、無事に職場体験を終えても数日は暇な時間が出来てしまう。その間に何をすべきか、少しの間考え込んだゴジータは久し振りに実家への帰省を思い付く。

思い付いたのなら即行動。携帯を取り出しゴジータは登録されている番号に連絡を入れると、数秒足らずに応答があった。

『久し振り甚田。活躍、いつも見てるわよ』

通話越しに聞こえてくる懐かしい声。穏やかで、優しい声音の女性。聞いていて落ち着くその声に耳を傾けながら、ゴジータも自然と笑みが零れた。

「久し振りだ先生。急で悪いんだが……次の週末、そっちに行っても良いか?」

懐かしい我が家^{施設}。久し振りに見たくなつた恩師と子供達の顔を思い浮かべながら、ゴジータは青空へ向けて飛び立った。



「クソッ! 結局はNo. 1の一人勝ちかよ……!」

人気の無い酒場、カウンターテーブルに座る一人の青年は首を掻きむしりながらテレ

ビに映る N O . 1 を睨む。

先の保須市で暴れた脳無達は軒並み倒され、青年すら知り得なかつた喋る黒い脳無達もゴジータによつて無力化された。

本当なら敵連合こちら側に引き込むつもりだったステインも、ゴジータによつて沈められ、逮捕されている。何もかもをぶつ壊すつもりだったのに、結果的にはボヤ騒ぎ程度にしか広まつていない。その事実が青年の苛立ちを更に募らせている。

「ステインのクソ野郎、ゴジータを殺す話をしたらいきなり斬りかかつて来やがつて……次に会つたら必ず殺す。先生も先生だ、あの喋る脳無も結局はゴジータに一蹴されてんじゃねえか……!」

「死柄木弔、気持ちは分かりますがどうか落ち着いて。そろそろ、志願者の方達が来る時間です」

「ああ?」

ステインに斬られ、今もまだ治らない事も合わかり更に不機嫌さを増していくが、弔と呼ばれる全身ハンドマンは扉の向こうからやつてくる顔ぶれに視線と殺気を向ける。

「おいおい、初対面の人間に向けて良い顔付きじゃねえだろ」

「あ? 誰だお前。喧嘩を売りに来たのなら良いぜ、買ってやるよ。誰でも良いから殺したい気分なんだ」

「怖いです。本当にこの人が私達のボスなんですか？」

体の半分近くの皮膚が焼け爛れた青年、彼の皮肉混じりの煽りに甲の苛立ちが最高点に達し掛けた時、仲介人らしき一人の男性が笑いながら仲裁に入る。

「おいおいお前ら、折角同じ組織に属するんだからもうちつと愛想よくしてやれよ。そんなんじゃ、No. 1ヒーローに勝つことは出来ねえぞ」

「義爛、この二人が貴方の勧める人材なので？」

「おうよ、男の方は茶毘、女の方は渡我被身子。どちらもイカれたお前らに相應しい人材」
「x」

「て言うか、お前今No. 1ヒーローを倒すつつたか？ あのゴジータを？」

「正確には倒すしかねえって話だ。奴は強い、遠巻きでしか見たことがねえが……あありやオールライト以上のバケモンだ。何せ自由に空を飛べる。あんなのが常に目を光らせていたんじや、俺達日陰者はそのうち息をすることすら儘ならなくなる」

義爛と呼ばれた男は語る。オールライトという規格外のヒーローにより裏社会は縮小し、今ではゴジータというトンチキヒーローがトドメを刺そうとしている。

「俺達にはもう後がねえ。全てを変える【革命】を行うにしろ、全てをぶっ壊す【崩壊】を起こすにしろ、それを成し遂げるには今まで以上に【力】が必要だ」

「……………」

これは、生存のための戦略、全ての裏を集めて光り輝く平和と希望の象徴を叩くために。

「やるなら、徹底的にだ。頼むぜ敵連合」

一人の闇のブローカーは頼み込む。全ては裏社会でしか生きられない自分達を守るために。

「ゴジータを……殺してくれ」

希望の象徴の抹殺を依頼するのだった。

記録 27

保須市で起きた一連の出来事、無数の改造ヴィランによる襲撃とヒーロー殺しステインの暗躍。一つの街で起きた二つの大きな事件は、そのどちらも駆け付けたヒーロー達の手によって鎮圧された。

特にNo. 1ヒーローの活躍は目覚ましく、多くの改造ヴィラン達を退け、ステインを無効化した報せは多くの人々の記憶に新しく刻まれる事になった。

圧倒的な強さを誇り、凶悪なヴィランを一蹴するゴジータの存在は、既に日本に住まう人々にとって無くてはならない「希望の象徴」として確固たるモノとなっていた。

そんな裏も表も、ヒーローもヴィランもゴジータに対して色んな意味で関心を向けている頃、雄英高校に通うヒーローの卵達は自分のなるべきヒーローを志す為に、今日も学校側から出される課題を乗り越えていく。

「う、おおお……何だよ緑谷の奴、動きがヤバすぎるだろ」

「何でジャンプ一回で諸々の障害物を飛び越えてんだよ。前の体育祭からそんなに時間

経ってねえだろ」

「あれが、本来持っていた緑谷の個性か。何っーか……うん、やべえ」

本日のヒーロー基礎学は救助訓練。工場地帯にて孤立した市民役（オールマイト）をいち早く助けるべく、競争と言う形式で行われる事になった今回の訓練。

障害物を難なく飛び越える個性を持った瀬呂や、優れた機動力を持つ飯田を差し置いて緑谷出久が圧倒的パワーを用いて障害物を飛び越えていく様は、他のクラスメイトの度肝を抜くには充分だった。

現在、緑谷が使えるO・F・A.の許容限界は30%程。常時20%を維持しており、瞬間的には30%を引き出している。

ゴジータやグラントリノ、そして空いた時間で可能な限りオールマイトとの組み手を経験してきた緑谷は、個性の扱い方を熟知し始めていた。まだまだ拙く粗さが見えるが、それでもO・F・A.の後継として目覚ましい成長を遂げている緑谷に、オールマイトは内心喜んでいた。

結果、今回の組分けでの緑谷は見事一位を獲得した。クラスメイトの躍進に一部を除いて大いに盛り上がるA組の面々。職場体験を経て獲得した今の自分の出来映えに緑谷は取り敢えず満足しながらオールマイトの下へ走りよる。

「おめでとう緑谷少年、入学してきたばかりの頃とはまるで別人のようだ！」

「あ、ありがとうございます。でも、まだちよつとコントロールが甘い所がありますから、これからも精進していきたいと思えます！」

「うんうん、その意気だ！ ……この分なら、あの事を話しても問題ないか」

「オールマイト？」

「何でもないさ！ さあ、次の有精卵達！ 準備は良いかな!?」

少々露骨だったかなと反省し、それでも授業を続けるオールマイトは緑谷に皆の所へ戻るよう促し、次の組の開始を告げる。

未だに他のクラスメイト達が緑谷の話題で盛り上がっている中、その一方で爆豪は飛躍する緑谷に対して自身でも驚く程に無感情になっていた。

関心が無いわけではない。ただ、体育祭で抱いた焦りの感情が今は嘘のように静かになっっている。

『いいか爆豪、俺N.O.1を超えるつもりでいるなら、他の事にかまけている余裕はねえぞ。お前が超えるべき相手はいつだって———』

「自分自身だろ？ わあーってんよ」

脳裏に浮かぶゴジータの言葉、他者だけでなく自分自身に克ち続ける。その言葉は爆豪の胸の中に深く刻まれていた。

「クソデクがどんなに強くなろうと、んなことは関係ねえ。俺は、俺の限界を超え続ける

だけだ」

その先で無敵の自分に会える筈だからと、爆豪は凶悪な笑みを浮かべて構える。

「それでは第三組——スタート!!」

両手の掌から爆発させ、その勢いのまま真上へ飛ぶ。その際、佇んでいた地面が深く抉れ、No. 1ヒーローとやり合っていた感覚のまま個性を使用した爆豪は、訓練の場となつている会場を一望出来るほどの高さまで飛んでしまった。

クラスの全員が驚きを露にする一方で、その威力の高さに他でもない爆豪自身が戸惑っている。これが今の自分の実力か。一週間という短い期間の中で此処まで自分の個性が強くなつていた事実は、クラスメイト達だけでなく爆豪自身に大きな衝撃を与えていた。

何せ、此処まで威力を上げてもあのNo. 1ヒーローの足下にも及ばないのだ。そんなふざけた事実を前に、爆豪はただ不敵に笑った。

上等。自身が目指す遥か頂まで手を伸ばし続ける事を誓った爆豪は、改めて自身の新領域を披露する。瞬き光る爆発、これ迄とは明らかに違う爆豪の個性にクラスメイト達がどよめく。

加速する世界、ゴジータとの特訓で得た動体視力は救助を待つオールマイトを捉えて離さない。個性を調節し、着地まで見事に完遂した爆豪はなんて事のないようにオール

マイトへ歩み寄る。

「——コイツは、ゴジータからの受け売りなんだけどよオ、災害時では時間そのものをヴィランとして認識するヒーローが多いみてえだな」

「——」
「確認してくれオールマイト、俺はこの授業でどれだけ時間を取り零した？」

見据える先は遙か彼方。自尊心に満ち、しかし落ち着いた様子の爆豪にオールマイトは破顔した。

「安心しろよヒーロー、君のお陰で私は救われたよ」

「———そうかよ」

それだけ聞いて立ち去っていく爆豪。まだまだ自分の実力に満足していない彼の今後の飛躍を楽しみにしつつ、オールマイトは他の生徒達の到着を待った。

「凄いやかつちゃん!! 今の爆発、前にも見たけど明らかに今までのモノとは別物だよ! もしかしてあれは個性を進化させたかつちゃんの新しい技!」

「うるっせえ! なに分析しようとしてんだカス!! 失せる!!」

相変わらず口の悪い爆豪だが、それでも確かに変わった部分はある。何処までも向こうへ、更なる高みへ至ろうと歩み続ける生徒達にオールマイトは次代への移り変わりを感じ取った。



「ふう、やっぱ地元は落ち着くな」

某県の、とある街から少し離れた田舎道。畑に囲まれた小さな集落の片隅に現在活動自粛中のNo. 1ヒーローが降り立った。

自身がこの世界に生を受け、今世の中で最も古い記憶の詰まった思い出の場所。自身のオリジンが始まった土地であり、同時に黒歴史の始まりでもあった思い入れの深い場所。

児童養護施設「星の都」。それは後藤甚田を受け入れて育ててくれた恩師が経営する施設。今は訳あって施設そのものが新しく建築されているが、それでも甚田には懐か

しい今世での我が家であった。

敷地内に入ると、教室らしき部屋からピアノの音と子供達の歌声が聞こえてくる。どうやら今は音楽の時間らしい。楽しそうに歌う子供達の歌声を耳にしながら、甚田はインターホンを押す。

「ただいまー、先生います——」

「甚田ッ!? 甚田なの!?!」

扉から出てきてタツクル気味に突撃してくるのは異形の形をした女性。狐とも犬とも異なる特徴的な顔をした女性は、眼鏡が割れる勢いで甚田へと激突する。

そんな女性の勢いある突撃を、難なくいなして抱き上げる。

「よー先生、久し振り。相変わらずちっこいなー」

自分の腰にも届かない小さな恩人を受け止めると、改めて元気そうな恩師に笑みを浮かべる。そんな甚田の笑顔に感化されたのか、先生と呼ばれた女性は安堵したかの様に頬を弛ませるが。

「じ、甚田だあ〜! 本物の甚田だよ〜! 良かったあ〜!! まだ会えだ〜!!」

心配そうな顔から一転、今度は嬉しくて泣き始める恩師に後藤甚田は相変わらずだと苦笑いする。

「おいおい、そんなに泣くなよ。つたく、変わんないなアンタも」

「相変わらずなのは甚兄もだろ?」

「ホントだよ、葵先生の苦惱を少しは汲み取ってあげなよね」

ワンワンと泣きじやくる恩師。変わらない育ての親に懐かしさを感じていると、背後からの声に再び懐かしさを覚えた。

「御幸、恵、久し振り」

顔立ちの整った二人の男女、その顔立ちから兄妹と思われる二人は甚田にとつての弟であり妹でもあつた。

「全く、帰ってくるのはいいがもう少し事前に話を通してくれないか? 幾らN.O. 1 ヒーローと言えど、それくらいは出来るだろ?」

「いやー悪い悪い、ちよつと色々あつてな。訳は話せん。察してくれ」

「……………はあ、仕方ないなあ。取り敢えず甚兄さんも上がっちゃつて。お昼ご飯まだ飲んでしょ? カレー、作つといたからね」

「お、今日は恵が当番か。相変わらず甘口かな?」

「残念でした、子供舌はとつくに卒業済みですう。……………甚兄さん好みの辛口にしたんだから、ちゃんと食べてよね」

何処か冷めた印象の恵に、御幸はそれじゃと彼女の後を追う。相変わらずの兄妹だなどと、二人を見て帰ってきたのだと安心した甚田は、未だに自身の胸に顔を埋める恩師に

目を向ける。

「ほいほーい。んじゃ、葵先生、そろそろ俺達も行こつか」

「ぐす、ぐす、……………甚田」

「ん？」

「お帰りなさい」

顔を上げて鼻水を垂らしながらも、満面の笑顔を向けてくる恩師に……………。

「ああ、ただいま」

後藤甚田もまた笑顔で応えた。

記録28

『其処で私も焦っちゃってさ、昔学校で習った数学とか物理の授業を思い出して、そのお陰で何とか乗り切った訳さ！』

『なー、当時は支点力点作用点とか日常生活で使う機会ねえだろってタカを括ってたけど、意外とバカに出来ないよな。タンカーを持ち上げた時とか、真っ先に支えるべき支点は何処だつて探したもの』

『さ、流石は超パワー個性の二人。話の内容の規模も桁違いです！ それでは、同じ増強系統の個性の子達に何かアドバイスをお願いします』

『勉強はしておいた方がいいかな！』

『重いモノを運ぶ時は、必ず二人でする事！ タンカーとか、デビューしたての頃は絶対に一人で持ち上げようとすんなよ！』

『それ出来るのアンタらだけだよ!?!』

テレビに映る自分自身、コメディな会話をしている自分の姿を目の当たりにしたゴ

ジータは、不思議な気分で眺めていた。

先の事件から数日、未だに活動自粛の期間が抜けていないゴジータは久し振りに自分の育った施設、児童養護施設「星の都」へ里帰りをしていた。

テレビに写っているのは先日相棒と一緒にトーク番組に出演した時の事。この頃になるとテレビに出るのも慣れたもので、然程どもらずに済んだが、流石にオールマイトの様な小粋なジョークとかは言い出せず、ひたすら過去の苦労話とかをする事となった。

幸いそれで受けが良かったらしく、ディレクターや他のスタッフ達からも好評で、本日、無事に放映される事になった。

「きっかけ、不思議な気分だなあ。テレビの中で俺が喋ってらあ」

「甚兄、人前に出るの苦手だったもんな。良くこんな公の場で人前に出られたなと思うよ」

「良くみると、手とか脚とか小刻みに震えている所あるしね」

「え、マジで？ うわ、本当だ」

施設の職員達が使うような所で、久し振りの団欒を過ごす甚田。相変わらず鋭い兄妹の指摘にゲンナリするも、安心できる空気によってその表情は何処までも安堵に満ちていた。

そんな甚田を後ろで見つめる星の都の施設長である姫野葵は、そんな三人の様子を慈愛に満ちた表情で見守っている。

「あーもう、俺の恥ずかしい粗探しはもう勘弁してくれよ。顔から火が出そうだ。俺の事よりもお前達の近況を聞かせてくれよ」

「とは言っても、俺も特別大した話はないなあ。精々他国の生徒達との交流会があったってだけさ」

「え、なにそれ凄そう。因みに何処のお国の人？」

「イタリアだよ。いやー、俺あつちの言葉あんまり話せないからさ、交流すると決まった時はマジ焦った。生徒会の皆がいなければ余計な恥を搔くところだった」

「おにいてもそろそろイタリア語くらい覚えようよ。因みに、私は最近フランス語をマスターしました」

「…………俺達の妹がどんどん国際化していく件について」
「いや、アンタそもそもリアルタイムで直に現地に行けるだろ」

自慢の弟と妹が顔を合わせる度に立派になっていく。それが自慢であり、甚田として数少ない誇りであった。別にヒーローになったからといって、人としての幸せを手放すつもりは無いが、自分と違って頭が良い二人が頑張って成長していく姿は年長者として嬉しく思えた。

「でも、あの甚兄が今ではN.O. 1ヒーローとはなあ。まあ、甚兄の凄さは昔から分かっていだから其処まで驚かないけど」

「お陰で、甚兄さんの給料も物凄く増えて、施設の資金も無事に潤うことになりました」
「恵ちゃん、ちよつと生々しくない？」

「でも、実際凄く助かってるよ。お陰で子供達もひもじい思いをさせずに済んでるし、施設も新しく大きいのが建てられたしね」

「まあ、N.O. 1になったお陰か金回りだけは不自由しなくなったな。その分、色々と重圧がやべーけど」

恵ではないが、実際生々しい話であろうとも星の都の財政はゴジータの活躍によって賄われ、そして潤っている。元々災害や人災に於ける人命救助を優先して活動していたが、ヴィラン退治の件数も相まってゴジータの年収はちよつと大声では言えない程になつていた。

そんな自分の努力で子供達が笑顔でいられる。目立つことが苦手な甚田だが、その笑顔を見ただけで報われた気がした。

「まあ、あれだけ自分を追い詰めていたんだから、これくらいやって貰わないと困るんだけどね」

「ちよ、恵ちゃん。その話は触れない約束じゃないか」

「だって仕方ないじゃん。あんだだけ先生を泣かしておいて、雄英の先生達にまで迷惑を掛けたんだから」

「ははは、その節は本当にご迷惑をおかけしました」

腕を組み、頬を膨らませてそっぽを向く妹に御幸は困惑し、甚田は素直に頭を下げる。でも、本当に無事で良かったわ。甚田が無事に帰ってきてくれて、それだけで私は満足よ」

「先生……………」

「もー、先生は甘すぎ」

「恵ちゃんも、お兄ちゃんの事が心配なのは分かるけど、あまり苛めちゃだめよ？ ほら、前に欲しがってたサインも結局そうやって素直になれなくて後悔してたんだから」

「ちよ!?! 先生!?!」

「あれ？ そうだったの？ 前に書こうとしたら滅茶苦茶拒否られたんだけど？」

「そうなんだけどね、あれから部屋で塞ぎ込んで大変だったのよ？ 学校にはちやんと行ってたし、ご飯も食べてたからあまり心配しなかつたけど……………」

「~~~~~ツ!!」

顔を真っ赤にして、その場から逃げるように自室へ逃げ込んでいく恵。妹の久しく見せなかつた激情の表情に甚田は戸惑っていると、横では恩師である葵がオロオロしている

た。

「ど、どうしましょう。私また怒らせる様なことを言っちゃったかしら?」

「まあ、難しい年頃だからな。そう言う事もあるんだろう」

「いや、うん。それだけじゃあないと思うんだけどね」

天然気質な葵と乙女心を理解できない甚田、二人の悪意なきやり取りの犠牲になった実妹の不憫さを嘆きながら、それでも久し振りの話は進んでいく。

「御幸の方はどうなんだ? 恵もそうだが金持ちの通う学校だし、何か色々と言われたりしてないか?」

「いや、今は特にそう言うことはないかな。最初の頃は編入生という事で色々と煽ったり弄ったりしてくる奴がいたけれど、全国模試で一位になったり、生徒会長になったらピツタリと止んだよ」

「御幸は昔から頭が良いからな。生徒会長になれたのも、お前の人望あつてのモノだ。聞けば、生徒会の子達も仲良さそうだしな」

「ああ、アイツ等は俺にとつて自慢の仲間だよ。まあ、一人困った奴もいるけど……」
ひきつった笑みを浮かべる御幸の脳裏に『絡まった恋愛現場も、このラブ探偵リカにお任せえ!』なんて嘯く厄介な生徒会書記が重い浮かぶ。

「うーん、やつぱし何度聞いても面白そうな学校だよなあ。……なあ、今度三者面談と

かあったら俺が行っていいか？ ちよつと一度見てみたいんだけど」

「パニックが起きるから止めてくれ」

以前から聞かされる御幸の生徒会の面々、いずれも楽しそうな話でいつか弟分が世話になってる事も含めて一度話をしてみたかったが、流石にN.O. 1ヒーローがアポ無しに訪れるには敷居が高かった。

バツサリと切り捨てられ、ちえーと口を尖らせる義兄に御幸はやれやれと肩を竦めた。

「それに、将来の事なんてもう決めているんだ。俺は、甚兄の事務所に入る。雑務でも何でも確り手伝って、少しでも甚兄を支えてやりたい」

「御幸……………」

「御幸君……………」

先程とは変わって、真剣な表情でそう語り出す御幸に甚田は驚いた。葵の方はあまり驚いていない様子から、どうやらこの話自体は前から聞いていたのだろう。

実際に、御幸の処理能力は頼もしいし、実際にこの施設の経営にも大きく携わっている。彼が自分の事務所に入れば確かに助かるし、今の事務員達の負担も軽くなることだろう。

しかし……………。

「御幸、お前の気持ちは大いにありがたいが……俺は反対だ」

「どうしてだ？ 弟が兄貴の役に立ちたいだけなの？」

「役に立つ、立ちたいの話じゃない。お前の本当にしたいたいことの話だ。御幸、お前の人生はお前だけのモノ、決して誰かに使われる為にあるんじゃないんだ」

「これは俺の意思だよ」

「だとしても、自分の将来は即席で決める事じゃあない。焦るな、御幸。お前はきつと自分の本当にやりたいことを見付けられる筈だ」

「――」

甚田に諭され、何も言えなくなった御幸は俯いたまま部屋を出ていき、自室へ戻っていく。見るからに落ち込んでいる弟の背中を見て、言いすぎたか？ そう頭を掻く甚田に葵はクスクスと微笑みを浮かべている。

「フッフ、お兄ちゃんは大変ね」

「全く、二人とも中々に面倒な性格になっちゃって。一体誰の影響かね？」

「さあ？ ……でも、きつと大丈夫よ。二人とも賢いし、何より優しい子達だもの」

「そうだといいんだけどなあ」

「私としては二人よりも貴方の方が心配よ。ヒーローのお仕事、大丈夫？ この間も例

のヒーロー殺しと戦ったんでしょ？」

「相変わらず心配性だなあ先生は。俺、今は天下無敵のN.O. 1ヒーローよ！」

「N.O. 1ヒーローだろうと、私にとつて大事で大切な可愛い子供なの。それに……子供を心配に思わない親なんているもんですか」

諭すように言いながら、甚田の頭に手をのぼす。体格的に届かないから、甚田が進んで屈むが、それを甚田自身は可笑しいとは思わない。頭に触れる手、その手から伝わる優しい温もりに甚田は改めて自分が帰ってきた事を実感するのだった。

「あー！ ゴジータだ!! 本当に帰ってきたんだ!!」

「ゴジータ！ いつ帰ってきたの!?! お土産は!?!」

「あの、また、お空、飛んで欲しい、な」

そんな時だ。昼寝から目を覚ました子供達が一斉に職員部の部屋へと雪崩れ込んでくる。一気に賑やかになる施設の空気、立ち上がった甚田は葵に視線で訊ねると、察した葵が微笑んで笑みを浮かべた。

「よし、このゴジータが久し振りに相手をしてやる。外に出ろー！ 遊ぶぞー！」

“オー！” とじゃれついてくる子供達に全く動じず、ゴジータは久し振りの子供達との一時を楽しむのだった。



そうして子供達との一時も終わり、夕食も食べ終えて夜の帳がスツカリ降りた頃。用意された部屋から抜け出した甚田は一人でとある場所へ向かう。施設を出て、敷地内を歩くこと少し、やってきたのはとある建物。

それは甚田が最初に自己を認識し、ゴジータとして生きていく事を決めた場所、旧星の都である。

今はもう使われなくなって久しいが……手入れはされている様で中は意外と綺麗な形で保たれていた。電気も通っているし、恐らくは葵達の手によるモノだろう、相変わらず真面目だと笑みを浮かべつつ、ゴジータは一人奥へと進む。

廳で通路の突き当たりまで差し掛かると、其処にはこれ迄の内装とは場違い感のある無機質な扉が不気味に佇んでいた。さながら伏魔殿への出入口だと、我ながら冗談にならない単語を重い浮かべながら甚田は扉に触れた。

触れた所からカシユンと機械的な音を立てて、現れたタッチパネルに数字を入力する。変更されていないならこれで開く筈だと、然程期待しないでいると………呆気なく扉は開かれ、扉の先には地下へと続く階段が伸びていた。

カツンと足音を立てながら下へ降りる事数分。漸く開けた所に出ると、その光景に甚田——ゴジータは苦笑いを浮かべた。

「流石に、其処まで変わっちゃいねえか」

床、壁、天井。その空間の至る所にこびりついている夥しい量の血の跡。惨憺たる光景に乾いた笑みしか浮かべられない甚田だが、その胸中に羞恥心の他に同時に懐かしさも込み上げ始めていた。

「やっぱり此処にいた」

「先生か」

「もう、急に外へ出ていくから驚いちゃったわよ」

「ははは、ゴメンゴメン。つい、昔の事を思い出しちゃってな」

不満そうに頬を膨らませる恩師に、自然と甚田から笑みが溢れた。

「もしかして、此処に来るために帰省したの？」

「まさか。天下のN.O. 1がホームシックだなんて知られたら大きなイメージダウンだったの。……………ちよつと、俺の原典オリジを確認をしに……………な」

隣に来る恩師を拒むことなく受け入れるゴジータだが、鍛練場を見つめるその表情は硬く、少し暗い。

此処に立てば、嫌でも思い出す。嘗て自分が抱き、夢想し、突き進んだ日々。

『お願い、もう止めて!! これ以上無理したら……………甚田、死んじやうよお』

『大丈夫さ先生。俺は、ゴジータは負けない。死なないんだ。だから……………安心して笑ってくれよ』

血塗れになり、腕や手足を折りながら鍛練を続けた日々。泣きながら止めてくる恩師を、笑いながら大丈夫と言いつつ切った過去の自分は……………我ながら狂氣的に思える。

『さあ、いよいよ重力負荷1000倍の大台に突入だ。見てくれよ先生、アンタのお陰で俺はもつと強く……………ゴジータに近付ける』

『ダメ、ダメよ甚田! ダメエエエツ!!』

それでも、なりたい夢。叶えなくてはならない夢を叶える為に、後藤甚田は進むしかなかった。喩え、それが虚構でしかないものだとしても。

「あの時の私は何も出来ず泣いている事しか出来なかった。雄英に入学を勧めたのだっ

て、ヒーロー志望の子供達に囲まれば貴方が変われると思つたから」

「……………まあ、俺自身も修行の場が変わる程度の認識しかなかったからなあ」

実際、実技での甚田の成績は雄英始まって以来の記録を幾つも打ち立てており、その記録は未だに更新されてはいない。尤も、その殆どはゴジータのやらかしの記録として認識されているが……………。

「でも、雄英に行つて、色んな人達と出会つて……………貴方は変わった。ううん、元の甚田に戻つてくれた」

雄英は、ただ生徒に試練を与えるだけの場所ではなく、子供にヒーローとしての導しほを示す学舎でもあった。散々悩んだ果てに選んだ道、その道のりは決して楽ではなかったが、結果として甚田は人の歩む道へ引き返す事が出来た。

「ただ肩の力を抜いただけさ。俺がゴジータを目指しているのは依然として変わらな
いし、変えるつもりはない。けど、それを踏まえた上で俺らしく生きていく事を選んだ
だけさ」

「うん。それでいいと思うよ」

多くの人達と繋がり、関わつた学生時代。接する多くの人達が決して自分を見放さな
かつた。ドライアイの教師も、口喧しい教師も、色仕掛けの達人教師も、小さなネズミ
の校長も、ヒーローとして、人として、決して理解されない道を進む自分を、見放す事

はしなかった。

力を得ることだけに固執し、その結果一時期は荒み、心的要因で個性が使えなくなつても、クラスの連中は変わらず接してくれた……今思えば、自分は助けられてばかりいる。

その結果、今の自分がある。なりたい自分を見付け、進みたい道を進む為に。

だから……。

「先生、俺は強くなるよ。ゴジータとして、後藤甚田として、その両方を見失う事なく」
改めて誓う。自分の道は、自分で決める。ゴジータの力に翻弄される事なく、この世界に生きる後藤甚田として、この力と共に生きていく。

それが、自分なりの恩返しだと思うから。

「うん。——甚田」

「ん？」

「頑張れ」

「——ああ」

笑みを浮かべ、手を握ってくる恩師の手に甚田も力強く握り返す。温かく血の通った人の暖かさ、この温もりに救われたことを忘れる事なく、甚田の休日は過ぎていく。

「無敵のNo. 1ヒーロー、弱点発見^{はっけん}♪」
離れに離れた獣道、公安の視線を搔い潜り、妖しく光る青い焰が双眼鏡片手に薄ら笑いを浮かべていた。

記録 29

春も過ぎ、夏本番を前にして雄英高校に通うヒーローの卵達は、一つの大きな困難を前にしていた。

期末テスト。ペーパーテストだけでなく、ヒーロー科の生徒達には実技での試験も課せられていた。それも、より実践的な形式の過酷なモノ。

昨今のヴィラン連合による被害、雄英への襲撃だけでなく先の保須市襲撃の件も含めて、危機感を募らせた雄英の教師陣達による提案。それは教師達自らが生徒達の壁として立ちほだかる事だった。

これから先、生徒達はより凶悪なヴィランと対峙していく事になる。これ迄の経緯を省みてこれからの事を予見した雄英側は、敢えてより高い壁を生徒達に課す事を決断した。

教師達による守り手がない時、生徒達の自己防衛力を鍛える為、現段階では尚早なものも踏まえた上で、雄英は生徒達の早急なレベルアップを望んだ。

尤も、教師達が自ら生徒を相手にする事自体は今回が初めてではない。とある理由、事情から数年前に一度だけ似たような試験内容を用意した事のある教師達は、根津校長の提案に然程違和感を感じる事なく受け入れた。

とは言え教師達は現役のプロヒーロー。公平と公正さを保つ為に、当然ながら教師側には相応のハンデを今回は背負う事になった。

サポート科が開発したウェイトリング。身に付けた者に自身と同じ体重の負荷を与えるハンデを背負いながら、教師達はヴィランとして立ち塞がり、生徒達はヒーローとしてこの難題に立ち向かうのだった。

「——いよいよ、デク君達やね」

「相手はあのオールマイトだ。二人とも、無事であれば良いのだが……」

既に試験を終えた二人、麗日と飯田がモニターに映る爆豪と緑谷を見守る。既に試験も終盤、残る二人の試験に麗日も飯田も心配そうに眺めていた。

この試験が始まってから、無事に合格した者と惜しくも不合格になった者が出てしまっている。切島と砂藤は個性の時間の短さを突かれ、上鳴と芦戸はハイスペック校長の策略に翻弄された。

生徒達の天敵となるような采配。それでも何とか機転を利かせて逆境を乗り切ったり、ヴィラン役の教師から逃げ切ったりとしているが、皆自分の個性の欠点に注視せざ

るを得なかった。

今回、緑谷と爆豪の前に立ち塞がるのは現役のNo. 2ヒーローであるオールマイトだ。先の体育祭から目覚ましい成長を遂げている緑谷と、職場体験にて更なる飛躍を果たした爆豪。

そんな二人を前に純粹な強さで相対する事になったオールマイト。壁とするには分厚く、それでいて高い。

「更に言えば、緑谷君と爆豪君の相性の悪さだ。あの二人が果たして協力も連携も出来ずにオールマイトに太刀打ち出来るかどうか……」

「で、でもこの頃爆豪君は少し丸くなってきたし、上手く行けばワンチャンあるんじゃないかな!」

「ケロ、確かに今の爆豪ちゃんは前より比べて大分落ち着いてるわね」

「流石の爆豪も、ゴジータの言葉は無視できねえか」

「轟君もそう思うか?」

「ああ、本当に羨ましく思うよ」

治療も終え、続々と控え室に戻ってくるクラスメイト達。これ迄の爆豪の成長を目の当たりにしてきた彼等の言葉、特に轟は羨ましそうに爆豪を見ている時が何度かあった。

エンデヴァー
 No. 3の所での職場体験も得難いモノではあったが、より濃密な経験を積んでいるらしい爆豪に轟は体育祭での自分を責めずにはいられなかった。

あの時からもつと真剣に、がむしやりに挑んでいれば何かが違っていたかも知れない。今更な話ではあるが、それでも轟は羨まずにはいられなかった。

「でも、ちよつとひねくれた感じは増してない？ ほら、例のB組の……」

「ああ、物間君ね」

耳朗の言葉で思い返すのは先日の食堂での出来事。ヒーロー殺しに遭遇した緑谷達を煽る物間に対して、タイミング悪く出くわした爆豪は淡々と反論をかましていた。

『ああ？ テメエ、ヒーローの癖にトラブルを忌避してんのか？ そんなんでよく此処に立っていられるな』

『は、はあ？ 何君、そんなんで自分の未熟さを無かった事にする訳？』

『俺が未熟なのは俺自身が良く分かってんだよ、テムエごときに言われるまでもねえ。………本当、心底テムエみたいなのが羨ましいぜ。他人に気を取られている余裕があるんだからよ』

『んな!?!』

ヒーローとはトラブルに自ら飛び込み、解決する者。それを否定する物間に対して皮肉で返すのは褒められた行いではないが、それでも彼の言う言葉に間違いはなかった。

他人からの評価に敏感で、自己顕示欲と自尊心に満ちていた以前の彼からは決して出なかつたであろう言葉。これがゴジータによる薫陶の賜物かと、当時この様子を見ていたA組はそれはそれは戦慄したという。

「今の爆豪ならきつと緑谷とも上手くやれるさ」

「そうですね。今は、そうなることを祈りましょう」

後数分で最後の試験が始まる。緊張感の漂う二人にA組の面々は祈るように見守るのだった。



「かつちゃん、本気なの？」

廃墟と化した街並み、今回の試験に用意されたステージを堂々とした振る舞いで歩む豪に、緑谷はただ困惑していた。

「何度も言わせんじやねえよクソデク、相手はあのオールマイトだ。生半可な策略じゃ正面から潰されて終わり。だったら、手数もあつてテメエより立ち回れる俺が囀役をするしかねえだろうが」

「でも！ 幾らかつちやんでも、オールマイト相手に一人で立ち向かうのは無謀だよ！」
 「だから逃げることしか考えられねえってか？ ハ、随分と及び腰じゃねえか。そんなんでテメエはオールマイトみてえなヒーローになれるのかよ」

「――！」

嘲笑い、挑発的な物言いの爆豪に緑谷は言葉を詰まらせた。目の前の幼馴染みの言ひ方は相変わらずドギツイが、それでも的を射ている部分があった。

なりたい自分を目指すのに、果たして此処で逃げるのは本当に正しい選択なのだろうか。勿論、強敵且つ危険なヴィランを相手にするには緑谷の選択が最もセオリー通りなのは確かだ。

相手はあのオールマイト。ゴジータが現れるまでNo.1の座に君臨し続けてきた不世出のヒーロー。幾らハンデを背負っていても自分達に勝てる見込みは僅かしかない。

けれど、緑谷自身も解つてはいた。此処で逃げる事に徹しても、オールマイトから逃げ切れる保証はない。勝ち筋が薄く、勝算が限り無く低くとも、爆豪の言う通りそれぞれがやるべきことに徹した方がまだ勝率は高い。

それでも緑谷がオールマイトと戦うことを忌避しているのは、O・F・A. という力を与えてくれた事に対する負い目か。これ迄の組手とは全く違う本気の勝負、オールマイトというヒーローに心酔すらしている緑谷に果たしてこの選択は受け入れられるのか。

俯き、悩む緑谷を一瞥しながら爆豪は進む——と、その時だ。試験開始の合図が鳴り、ゴール地点から尋常ならざる気配が爆誕する。

『さあ、行くぞヒーロー共』

声など張つてはいない。相手とは未だに数百メートル程離れているというのに、まるで目の前に現れた様な威圧感。

来る。そう爆豪が認識し身構えた瞬間、遙か向こうから膨大な力の唸りが炸裂する。コンクリを捲り、周囲の建物を破壊しながら突き進んでくる恐ろしき力の暴風。

その迫力に歯を噛み締めて耐えようと身構えた時、爆豪の視界の前に影が出る。微弱な放電のように翡翠の光を迸らせ、体をくの字に逸らしながら……。

「セントルイススマッシュ、エアフォース!!」

制御しつつある超パワー、その四割近くの威力を込めた蹴りが力の暴風に向けて放たれる。激突する力と力、拮抗した力の奔流は……しかして、緑谷の放つ圧を呑み込んでいく。

それでも威力を殺し、幾分か相殺した事に爆豪は僅かに目を開く。自身の前に立つてく、その背中に嘗て抱いていた劣等感が滲み出る。

やはり、爆豪は目の前の幼馴染みの存在が心底気に入らない。気に入らないが……それでも、認めざるを得ない。今の緑谷出久は嘗て自分が虐めて痛め付けたクソナードではない。

「——おいデク、前に出たつて言うことはそう言う事でいいんだな？」

ならば、自分には出来る最善を模索し、検討し、即座に実行する。荒ぶり昂る自尊心を食い殺し呑み込む爆豪は、目の前の幼馴染みへ問い掛ける。

「……………うん。本当にゴメン、かっちゃん。いつまでもウジウジしてて。でも、もう大丈夫」

爆豪の問いに、緑谷は力強く応えた。逃げに徹するだけでは駄目、戦いに視野を狭めるのも駄目。どちらも目指して始めて自分達の勝ち筋は見えてくる。

それを成すには爆豪だけでも緑谷だけでも叶わない。二人が力を合わせて初めて、その可能性を掴める。

静かに構える二人。砂塵の向こうから現れるヴィラン役の教師に、嘗て無い程に闘志を滾らせる一方で。

「いい面構えになつたじゃないか二人とも。うん、実にいい。それなら——先生、頑張つちやうぞ♪」

満面の笑みを浮かべたオールライトが、正面からダツシユで襲い掛かってきた。



「そんじゃ、そろそろ行くわ。二人とも、先生と施設の皆の事、頼んだぞ」

「分かつてるよ。甚兄も、余り無茶すんなよ」

「ちやんとご飯食べなよね」

謹慎期間も明け、再びヒーロー活動に勤しむ為に甚田は本日をして元の配属地へ戻る事にした。久しく会えてなかった家族と再会し英気を養ったゴジータは、世話になった弟達に一時の別れを告げる。

「うう、ぎを、ぎをづげでね〜!」

一方で、滝のように涙を流す恩師に苦笑いを浮かべ、子供達にも別れを告げた甚田は星の都から歩いて離れていく。

相変わらずの様子で安心し、しつかり帰省気分を満喫した甚田は、軽い足取りで最寄り駅へと向かう。

その途中、ふとある事を思い出した甚田はとある山の方向へ視線を向ける。先日、微弱ながらも感じた気配。あれはこれ迄敵対し、捕まえてきたヴィランと同種のモノ。いや、先日感じたアレは通常のヴィランの気配をより濃く、どす黒くしたモノだった。

邪悪な気というのは、恐らくああいう類いのモノなのだろう。微かに感じた気配だけれども、甚田の頭の片隅に残るには充分だった。

意識をヒーローのそれへと切り替える為に甚田は空へと飛翔し、一瞬にしてコスチュームへと着替える。さて、このまま公安本部へ乗り込んで用件を伝えようとした

時、とあるコンビニが目についた。

「——手ぶらでも何だし、公安にハーゲン○ッツでも奢っておこうか」

客観的に見て、ここ最近は公安に迷惑を掛けている事をそれとなく自覚しているゴジータは、せめてもの感謝の気持ちとして、日々忙しく暗躍している公安の人達に贅沢なアイスを贈る事にした。

そろそろ夏本番だし、時期的にも丁度良いだろ。と、良く分からない持論を展開しながらコンビニ付近の地上へ降り立つ。さて、幾つ買っておこうか？ 仮にも公安上層部をハーゲ○ダッツで買収しようとするゴジータの視界に……ふと、奇妙な光景が移り込む。

「素敵！ 今回も素敵よジェントル！ これで今度こそ100万再生間違いないわ！」
「ハツハツハ、余り悠長にはしてられないよラブラバ。では諸君、次の動画でまた会おう——」

この時期に暑苦しい格好をした二人組、ジェントルと呼ばれる男性は目の前のN○.1ヒーローを目にすると、ビシリと石のように固まり。

ラブラバと呼ばれる女性も固まった相方に不思議に思い、彼の視線の先を辿ると同じ様に石化し。

ゴジータはゴジータで、コンビニ前で転がっているヒーロー達を目撃し——。

「あー、取り敢えず君達。話、聞かせて貰ってもいいかな？」

謹慎明けのN.O. 1ヒーローの最初のお仕事は、明らかに不審者な二人組の職務質問から始まった。

記録30

——飛田弾柔郎は嘗て、ヒーローを志していた。弱きを助けて強きを挫く、その活動で世間に名を示すヒーローに、弾柔郎はどうしようもなく憧れた。

こんな風になりたい。憧れを憧れのままに抱き、夢を追い続けてきた彼は、しかしその夢に挫折する事となった。

度重なつて刻まれる落第の烙印。退学を勧められ、聽ては自分の未熟さの所為で人を傷付け、家族を傷付けた。

何もかもを失つた弾柔郎だが、ただ一つ。『歴史に自分の名を刻む』という野心だけは捨てきれなかった。このまま、何者にもなれずに消えていくのは嫌だと、強迫観念にも似た衝動が彼を弾柔郎という青年からジェントル・クリミナルというアウトローへ変貌させる。

自分の活動を義賊と称し、世間に問い掛ける形で始めた動画撮影。ハイテク技術に乏しく、それでも活動を続けてきた彼はいつしか一人のファンを得ることになった。

ラブラブという理解者であり、協力者でもあり、共犯者でもある女性。互いに過去に傷を持つ二人は、今日も今日とで義賊活動に勤しむ………筈だった。

今日とはあるコンビニの製品偽装に関する指摘。市民を騙し、訂正する事を伝える動画を無事に撮影し、連絡を受けて駆け付けたヒーロー達も相方の個性のお陰で退ける事が出来た。

今回も自分達の活動に満足し、いざ帰宅しようとした所で………ジェントルにとって一番会いたくて、最も会いたくないヒーローと遭遇してしまった。

No. 1ヒーロー、ゴジータ。【平和の象徴】であるオールマイトと対を成す【希望の象徴】。その圧倒的強さ故に世界中のヴィランから恐れられている次世代のヒーロー。

そんなヒーローが目の前にいる。ヴィランにとっては絶望の象徴とも言えるヒーローの前に、それでもジェントルは心の内で自身の幸運さを喜んだ。

「一応言っておくが、抵抗しないことをお勧めするぜ。見た所そつちは二人とも戦った後で疲弊しているみたいだし、その状態で俺とやりあえるところ程、思い上がってはいねえだろ？」

「ツッ！」

(ば、バレてるー!!? 何もかもがバレてるわジェントルツ!!)

見れば、ジェントルの背後には数人のヒーロー達が地面に転がっている。仮にも個性

扱いのプロとも呼べるヒーローを数人相手に、一端のヴィランが完封出来るとは思えない。

ならば、恐らくは隣の小柄な女性が紳士然としている男に対して、何かしらの補助をもたらしているのだろう。あくまで推察でしかないが、残念なことにその推察はぐうの音が出ない程に的を射ていた。

「俺としては大人しく警察へ一緒に来て欲しいが……さて、どうする?」

ゴジータとしては早くアイスを買って公安達に事情説明を果たしたい所だ。向こうも自分が誰なのか知っているみたいだし、大人しく投降してくれる事を願いたいが……。

「——一つ、質問をしていいかな?」

「良いぜ」

目の前の男の眼を見て、それは叶わないと確信する。

「ゴジータ、君は立ち上がる人間は尽くヒーローの素質があると、そう断言したな」

「ああ、言ったな」

「では、過去に挫折し、それでも尚みつともなく足掻き続ける者を、君は笑うかい?」

「人の努力を嘲笑う程、俺は高尚な人間じゃねえよ」

「では、その過程で誰かを傷付ける事になったら?」

飛田弾柔郎は、自分の名前を世間に、或いは世界に名を刻むことを望んでいる。何も成し遂げられないまま、知られないままに消えていくのが怖かった。

だから、暴力に訴えない範疇で、どんな事もやり遂げるつもりでいた。喩え世間から、傍迷惑な小悪党程度の認識しかなくとも、この義賊の活動に誇りを抱いていた。

自分の行いに間違いがあることは認めよう。それでも、今更この道を進むのを止める事は有り得ない。

「——夢というのは競争だ。抱き、夢見るだけで叶う程、この世界は優しくも甘くもない。そう言う意味で言えば、誰も傷付けずに理想を叶えるのは喩えヒーローでも無理がある」

「——」
「けどな、それを理由に誰かを泣かせるのは………筋違いだと、俺は思う」

「それでも、私は止まらない。そう決めたのだ!!」
「ジェントルツ!!」

相方の個性が力となって己の体に注ぎ込まれていく。一度使用し、時間こそは短いものの、そこに含まれる“愛”の深さは変わらない。

目の前のヒーローはこれ迄相對してきた者達とは次元が違う。故に、ジェントルは最初から全開で出し惜しみ無く挑む。

ラブラバ
相手の個性である【愛】。それを向けられた相手に絶大な力を与えるとされている。自分の個性と合わさった時のジェントルは無敵であり、決して負けはしないと、ラブラバ自身信じて疑わなかった。

しかし――。

「成る程な、お前の気持ちは解った。なら……俺も、そのつもりで相手をしよう」

目の前の男が黄金の炎を纏った瞬間、衝撃がジェントルを貫いた。腹部から伝わる痛みと衝撃。強化された自分の五感すらすり抜ける速さ。何もかもが自分達とは違うと、ジェントルはN.O. 1ヒーローの強さに直に触れ……。

（ああ、此処が私の終わりか。それも……悪くは……）

最後に立ち塞がったのがN.O. 1ヒーロー。世界最強も過言ではない英雄と対峙し、倒れる。何もかもが半端者で、落伍者な自分にしては上等な終わり方ではないだろうか。

自嘲気味な笑みを浮かべて地に倒れ伏す。自身の敗北を悟ったジェントルが最後に気掛かりに思ったのは……こんな自分を、最後まで信じて付き合ってくれた心優しい相手。

カメラをかなぐり捨てて駆け寄ってくるラブラバを尻目に、ジェントル・クリミナルの意識は暗闇へ落ちていった。



「へ？」

気が付けば、ジエントルは見知らぬ天井を見上げていた。一体自分の身に何が起きたのか。意識を失う直前の出来事を思い返していたジエントルは慌てて布団から飛び上がり、襖を開けて廊下に出る。

バタバタと忙しく動き回るジエントルはやがて広々としたリビングへと出る。其処では、寛ぐゴジータと疲れ気味の男性、そして……頼れる相方がいた。

「ジエントルーッ!! 良かった! 起きたのね! 大丈夫? 何処か痛い所はない!?」

「だーかーらー、心配しすぎなんだよ。ちゃんと手加減はしたんだし、死ぬわけ無いだろ」

「うるっさいわねこの脳筋バカ!! 人の体から衝撃波が出てくるなんて現象初めて見たのよ!! 普通死ぬからね、アレ!!」

涙と鼻水でグシヤグシヤとなった顔をジェントルに押し付け、呆れるゴジータにキシヤと牙を剥くラブラバ。何が起きているか訳が分からないジェントルは、ただ呆然としているだけだった。

「……それは、一体? ゴジータ、一体ここは……いや、そもそも何故私は警察に捕まっていない?」

「その事をこれからこの人と一緒に話していくつもりだ。ま、先ずは座ってお茶でも飲んでくれ。紅茶、好きなんだろう?」

未だに自分の置かれている状況に理解が追いつかないジェントルは、言われるがままにソファアーに座り、紅茶を啜る。

(——あ、美味しい)

差し出された紅茶の深い味わいに心が少しだけ暖かくなつた気がした。隣に座るラブラバも疑う事無く飲んでいる事から、これが善意からの施しであることは疑いようがなかった。

ただ、だからこそ正面に座る男性の沈黙が重い。明らかに一般人とは異なる気配。自分達とは違って珈琲を嗜んでいる男性はこれ迄相對してきたヒーローとは別種の人間

であると、ジエントルは察した。

「ああ、この人は塚内直正さん。日本を守る警察官で、将来は警視總監になる人さ」

「おいおいゴジータ、その紹介は止めてくれと言ってるだろう？ 其処までの野心を持ち合わせてはいないぞ、俺は」

「生涯現役ってか？ 格好いいじゃん塚内さん、相棒も頼る訳だ」

「……………まさかだとは思うが、そんなヨイシヨで私が公私を混同するとも？」

「思ってる訳ないだろ。アンタはあくまで第三者、冷静に見極めて冷静に判断してくれただけでいい。まあ、一番の理由は警察関係の知り合いがアンタくらいしかないって話だけだね」

「——公安には？」

「何か門前払いされた。酷くね？ 折角人がハー○ンダツツ持参で来たのに、話も聞かずに追い返されちゃった」

不服そうに肩を竦めるゴジータに、塚内と呼ばれる警官が顔を手で覆った。友であるオールマイトが心底信頼し、信用しているヒーローだから彼の言う相談に応じてみたものの、ゴジータの口から出てくる言葉に塚内は早くも安請け負いをした事に後悔し始めた。

「それでゴジータ、ワザワザ僕を呼んだ理由は何だ？ どうやら、其処にいる義賊気取り

のヴィラン擬きと関係しているみたいだが？」

瞬間、場の空気が冷たくなる。昨今の警察はヴィランの輸送役わりと押搦する者が多くいるが、それは大きな間違いであると、ジェントルとラブラバは認識を改めざるを得なかった。

嘗て、人類が個性に目覚める前、日本の治安を守っていた法的機関。凶悪な犯罪者を相手に戦ってきた警察。その者達は皆、凶悪犯罪者に劣らぬ強い気迫を持っていたという。

目の前の警官もその一人だと、塚内の眼の奥底で燃える冷たい炎に、ジェントルは身を竦ませた。

「おお、実はコイツを俺のサイドキックに迎えようと思ってな」

「「——は？」」

しかし、そんな空気もゴジータの言葉によって霧散する。ジェントルもラブラバも、塚内すらも呆気に取りられるなか、ゴジータはジェントルに向き直り……………。

「単刀直入に言おう。ジェントル・クリミナル、お前をサイドキックとして雇いたい」
不敵に笑うゴジータに、ジェントルの瞳に光が戻った気がした。



「クソがつ！ 右の籠手もイカれやがったか！」

「ゴメンかつちゃん、フオロ―遅れた！」

「要らんわタコ！ ンな事より――」

「分かつてる。来るよ!!」

目の前に現れる拳、それを未然に察知した緑谷の言葉によって爆豪は間一髪で回避する。振り抜かれた拳は大地を割り、周囲に衝撃波を放つことで、より深く破壊の痕を刻んでいく。

吹き飛んでいく建物。既に瓦礫の山と化した試験会場にて緑谷と爆豪は同様にボロボロの姿になっていた。

それでも諦めない二人は、砂塵の奥から現れるヴィラン役の教師を見る。これ迄既に

何度も攻撃してきたが、その殆どが躲され、いなされ、無力化されてきた。

マトモに受けた回数は片手で数える程。それでもビックともしない相手に流石の二人にも疲労の色が強くなっていた。

「おいクソデク、テメエそろそろ限界だろ。今の内に尻尾巻いて逃げてても良いんじゃないかねえか？」

「かつちゃんこそ、自慢のタフネスが底を突き始めたんじゃない？　ここから先は泥試合確定だよ」

「バカが、相手が相手の時点でごうなるのは目に見えただろうが。こっつからが——」

「そう！　此処からが正念場だぞ、ヒーロー共!!」

「ツ!!」

割れたコンクリの破片を踏み潰し、満面の笑みを携えてヴィラン（役）が現れる。相変わらず無傷。元のタフネスも加えて更に洗練された体捌きは、クラスの中でも頭一つ抜きん出ている二人を際限無く追い詰めていく。

既に満身創痍に近い二人。それでも笑みを絶やさずにいるのは単なる意地か、それとも……ここまで追い詰められていながら、それでも勝つ気でいるのか。

体力も限界で、試験時間も残り僅か。残された時間の中でそれでも勝つ道筋を模索する二人に、ヴィラン役のオールマイトのテンションは更に上がっていく。

「俺が攪乱する。デク、テメエは——!!」

「僕が、手錠を嵌めて、一気に駆け抜ける!!」

迸る翡翠の稲妻。その輝きがどこことなく超化した相棒の瞳と重なり、オールマイトは真つ向から受けて立つ事を決める。

これが、最後の勝負。爆豪は輝く爆破で、緑谷は翡翠の稲妻を纏い、全霊を込めてオールマイトへ挑んでいく。更に向こうへ。その言葉に込められた意思と想いを実践する二人に、オールマイトは更に力を滾らせていく。

「行くぞ二人とも!! デトロイト——」

「クラスター——」

「デトロイト——」

高まり、昂る力。更なる力を引き出して今、衝突しようとした時。

「其処までだよアンタら!!」

ドベンチャア。と、唐突に力が抜けた三人は勢い余って地面に倒れ伏す。アレ? もしかして時間切れ? オールマイトは啞然となり、緑谷と爆豪は時間にはまだ余裕がある筈だと驚愕している。

一体何が起きているのか。あわてふためく三人の前に一人の影が舞い降りる。

「…………お前ら、雄英ウチを更地にする気か?」

「へ?」

「ああ?」

個性を発動して目をギンギラさせている担^相任。明らかに怒気を孕んでいる彼の様子に戸惑っている、ふと気付いた。

崩壊した会場。元の街並みは消え失せ、瓦礫の山となった其処は既に更地一步手前。加えて、合格ラインを示すゲートも吹き飛び、最早試験は成り立たない状況となっていた。

「あ、あの相澤君? もしかしてこれって……私の所為?」

「もしかしなくても貴方の責任ですよオールマイト。試験の範疇を超えた破壊活動。これはもう、ナイトアイにも来て貰う他ありませんね」

「そ、それは勘弁してくれ相澤君!! 最近の彼ってば私に厳しいんだ!! 下手をしたら私の師であるグラントリノまで呼んできそうだから……!!」

「それは良いことを聞きました。貴方の反省を促す為に、是非とも此方に来ていただきましょう」

「NOooooooooツ!!」

「え、えつと……相澤先生?」

「俺達の試験は、どうなるんだ?」

「今回ばかりはお前達も被害を被った側だ。誠に申し訳ないが、お前達には後日改めて試験を執り行いたいんだが……構わないか？」

オールマイトに対する時とは正反対に、何処か優しさすら感じさせる相澤の雰囲気にも爆豪も素直に頷いた。

そして後日、改めて実技試験を受けた二人は無事に突破し、改めて林間学校への参加が認められ。

その一方で、グラントリノとナイトアイ。更にはリカバリーガールに根津校長を加えた説教（折檻も含む）は、オールマイトに色んな意味で地獄の苦しみを与えたという。

「助けて緑谷少年、爆豪少年！ 私達は共に真剣に戦った仲間ではないか!!」

「ご、ごめんなさいオールマイト」

「これは流石に庇えねえよなあ……」

記録31

「ゴジータ、それは本気で言っているのかい？」

「おう、その通りだ」

問い詰めるように訊ねる塚内の言葉に、ゴジータは即答する。笑い、自信満々に応えるN.O. 1ヒーローに警部である塚内は確かな頭痛を覚えた。

「……………仮にも君はN.O. 1のヒーロー。そんな君がチンピラとは言えヴィランをサイドキックに迎えるなんて、前代未聞だぞ」

「なら、今回で前例になれば良い。塚内さん、アンタだって訳アリでヴィランにならざるを得なかつた人達を、これ迄何度も見てきた筈だろ？」

「それはそうだが……………」

「それに、そう言った犯罪者の罪を軽くする制度だつて、個性黎明期前からあつただろ」「司法取引の事を言っているのか？ アレは裁判の際に刑事処分される被告人や被疑者に有利な取り扱いをする制度であつて、罪を軽くするモノではないぞ」

「それでもいいかい」

「どうやら、本気でこの二人をサイドキックとして雇い入れるつもりらしい。No. 1ヒーローが小悪党とは言えヴィランを引き入れるなんて、これまでの個性社会の中でも初めての事例。」

それをNo. 1ヒーローが行おうと言うのだから、社会に対する影響は計り知れないし、それが分からないゴジータではないだろう。それを見越した上でのゴジータの決断に、塚内はそれ以上反対の言葉を出すことは無かった。

「——ゴジータ、一つ聞かせてくれ。どうして其処まで彼等に入れ込む？ 君程のヒーローなら、声を掛けただけで無数のヒーロー達がサイドキックに立候補する筈だ」

実際、ゴジータには既に多くのファンが出てきており、その中にはプロのヒーロー達の姿もあつた。オールマイトすら認めるヒーローとしての強さ、そんな彼が一声掛ければそれだけで多くのヒーロー達が名乗りを上げただろう。

「いや、違う。それじゃ意味がない。それじゃあダメなんだよ、塚内さん」

しかし、そんな塚内の代案をゴジータは首を横に振って却下する。それでは意味がない、そう口にしたゴジータに彼の意図している事を察した塚内はまさかと目を見開いた。

昨今増加傾向にあるヴィランによる事件。それはこれ迄個性社会の裏に隠された人種差別に似た背景が大きく関わっている事も、塚内は知っている。

この世界には、制御が困難な個性によつて人生が歪んだ人達も少なくはない。現に、異形系の個性として発現した人々の中には、幼い頃から差別されてきた事例があることも少なくはない。

本人の意思に関わらずヴィランという分類にされた人達。今回のゴジータによる提案は、そんな行き場のない人達に対する一つの指標になるのではないか。

ヒーローとして人々の平穏を守るだけでなく、手を差し伸べて立ち上がる切っ掛けを作ろうとしている。ゴジータの言葉に隠された真意を察した塚内は、それ以上何かを言うことは無かった。

「……何故だ」

「ん？」

「ゴジータ、私はただの小悪党だ。ヒーローにもなれず、ヴィランにすらなれない半端者。そんな私を、どうしてNo.1ヒーローである君が其処まで庇い立てる」

「別に庇おうと思つちやいねえよ。折角優秀なヒーローの卵を見付けたんだ。プロヒーローが世話を焼きたいと思うのも、さほど不思議ではないだろ？」

「——え？」

あつげらんかんと応えるゴジータの言葉に、今度はジェントルが言葉を失い、目を大きく見開いた。ヒーローの卵。嘗て落第者と嘲笑われ、世間から罵声を浴びせられてきた自分が、ヒーローとしての素質があると他でもないNo. 1ヒーローに認められている。

衝撃的すぎて唾然としているジェントル。震えている彼の手にそつと小さな手が寄り添ってきた。ラブラブ。自分のファンだと言つて慕い、こんな自分に尽くしてくれた女性。涙を浮かべて微笑む彼女に釣られ、ジェントルの目にも涙が浮かぶ。

「ジェントル・クリミナル、お前のやつてきたことは確かに人から誉められる事じゃないだろう。諭えこれから先改心し、慈善に身を費やしても、それを嘲笑う者は必ず出てくるだろう」

「……………」

「だけど、それでも俺は断言しよう。お前は——ヒーローになれる」

「ぐ、ふ、……………うぐうう」

「来いよジェントル。今日から俺が、お前のヒーロー教官だ」

「う、ぐ……………うああああああ」

それは、弾柔郎がずっと欲しかった言葉。身の程知らずと罵られ、落伍者と嘲りを受けてきた自分に、ついで掛けられなかった言葉。

今更だと思った。今になって、とも。でも、それでも……こんな自分をヒーローになれると言ってくれる人がいる。

ジェントル・クリミナル——飛田弾柔郎にとつてこの日、決して忘れない日となった瞬間であり、彼の中の原点オリジンが更新された日となった。



「——と、言うわけで一人、俺の所から仮免の受講者を出すことにした」
『ちよつと待つて、流石に唐突すぎない？』

それから少しして、ジェントルとラブラバの二人を自分の預かりとしたゴジータは、塚内を改めて説得し、これを受け入れる事となった。終始頭を抱える塚内に流石に申し

訳なく思ったゴジータが、せめてもの誠意として自らタクシー代わりとなって自宅まで送り届けようとしたが、丁重に断られてしまった。ぴえん。

そして、相棒であるオールマイトには近況報告を含めて事情を説明しようとして電話を掛け、現在に至る。時刻は既に夜の10時を過ぎ、ゴジータは縁側に座りながら呆れた様子の相棒との会話に花を咲かせる。

『相変わらず突飛な事を思い付くなあ。でも、君の言いたいことは分かるよ。君のやろうとしている事が実を結めば、それは個性社会にとつての一つの転換期になる。ヴィランにならざるを得なかった人達に一つの選択肢を与える事ができる』

ジェントルとラブラバ。己の個性を用いて世直しという名目で社会に少なからず混乱を招いた罪は、決して軽くはない。仮に捕まり釈放されたとしても、ヴィランというレッテルはどんなに償っても簡単に剥がれる事はないだろう。

けれどプロヒーロー、その中でもトップのヒーローが監視し、更正の余地がある人達をヒーローとして活躍させる事が出来れば、個性社会にとつて大きな転機となるだろう。

尤も、その道中には大きな問題が数多くあり、そのやり方に反対する意見も少なからず出てくるだろう。しかし、やる価値はある。そう思えたからこそ電話越しのオールマイトの口からは懐疑的な意見はあっても、頭ごなしな否定の言葉は一つも出てこなかつ

た。

『けれどゴジータ、その道は決して楽な道ではないぞ。No. 1ヒーローという立場を用いての荒業、快く思わない者は必ず君に罵声を浴びせる事だろう』

「別に名も知らない奴の悪口なんて気にしねえよ。そんな連中よりもナイトアイとかの説得の方が骨が折れそうだ」

『それ私の前で言う？ いや、否定は出来ないけどね』

相変わらず軽く口を叩くゴジータにオールマイトの口調も柔らかくなる。それはゴジータならばやってくれると言うオールマイトからの信頼の証でもあった。

『でも、本当に楽しみだよ。爆豪少年もだけど、君が見出だした者は皆飛躍的な成長を遂げている。教師として、その才能は羨ましい限りだよ』

「そいつは買い被りだ。俺はただ、アイツなら出来るという事を教えてやっただけ。其処から成長できたのは偏に爆豪自身の力だ」

『ハハハ、そういう事にしておこうか』

快活に笑う相棒の声にゴジータも笑みが溢れる。

『それじゃあ、そろそろ遅いし、今日はこの辺にしておこうか。ゴジータも、なるべく早く休みなさいよ』

「ワーカホリックなアンタが言うことかよ。でも、そうだな。そろそろ俺も寝るとする

よ。……その前に一つ聞きたいんだけど、オールマイトはこの夏はやっぱり教師としての仕事があるのか？」

『いや、それも勿論あるけど、実は“I・アイランド”から招待があつてね。今度緑谷少年と出掛ける予定なんだ』

「へー、I・アイランドか。俺も空から何度か見掛けた事はあるけど、結構凄い所なのか？」

『アソコには私の親友が住んでいるんだ。いつか機会があれば、君にも紹介するよ』
「おう、そんな時を楽しみにしてるよ」

それじゃあ、と話を締め括るオールマイトにゴジータも軽く挨拶を交わして通話を切る。久し振りの相棒との会話を終えると、ゴジータは背を伸ばして体を解す。

「——さて、相変わらずやることが多いけど、No.1ヒーローとして頑張りますか」

これ迄、オールマイトはNo.1ヒーローとして個性社会に平和を築き上げた。己の生涯を懸けて日本に平和をもたらしたオールマイトをゴジータもまた尊敬している。

けれど、言ってしまうえばそれだけだ。多くのヴィランを退け、人命を守り、尊厳を守護してきたオールマイトは確かに平和の柱とも言えるだろう。

その柱に寄りかかり、胡座をかいて座っているのが、今の社会の現状。ならば、自分

がするべき事は、その平和の柱という土台の上に確かなモノを築き上げていくことだ。それが今のNo. 1ヒーローである自分のやるべき事なのだ、謹慎中に出したゴジータなりの考えである。

当然、簡単にはいかないだろうし、ゴジータ自身他のヒーローに頼る気満々でいる。新たな社会、個性に振り回される人々に対する一つの選択肢。それをもたらず事が今後のゴジータの目標だ。

ジェントル・クリミナルをサイドキックとして迎えるのは、その目的の為の第一歩。この目的を成し遂げる為にはゴジータ一人の力だけでは到底足りない。

オールマイトが築いた平和の時代、その土台の上にただ胡坐をかいているだけでは、必ず破綻する時が来る。その為にも、一人の人間が柱になるのではなく、多くの人々が支え合うシステムが必要だ。

尤も、ゴジータ本人は其処まで難しく考えておらず、あくまで「そうあればいい」という漠然としたモノ。

けれど、そうなたらきつと今よりいい世の中になるんじゃないのか。そんな未だ先の見えない未来にワクワクしながら、ゴジータも就寝するのだった。



翌日、某大手動画サイトにてある動画が投稿された。それは、これ迄見向きもされず多くの人達が軽んじてきたとある自称義賊が投稿したモノ。

投稿された日、今日も見向きもされずに数ある動画に埋もれていく筈だったそれは、しかして大きな反響を呼ぶことになる。

タイトルは「空から落ちてくるNo.1ヒーローを救出してみた」。何ともふざけたタイトル、一体この小悪党の義賊気取りがどうしてあのゴジータと関わりがあるというのだ。ツリ丸出し、タイトル詐欺も甚だしいその動画に殆どの人々が嘲笑い、釣られる事を承知の上でその動画を開くと……………。

『ちよつとジェントルー、今のタイミング遅くない？ もうちつと素早く行動しようぜ』

『いやまって、予告も無しに空から落ちてくるの普通に怖いから！ 恐怖体験だから！』

『えー？ でも、ヒーローになるためにはある程度の対応力も求められてるし、これくら

い出来ないと……あ、じゃあ午後はイタリアのマフィア退治を見学してみよっか。ちよ
うど向こうから依頼が来てたし』

『そんなコンビニへ誘うみたいなノリで!?』

本物の、マジの、ガチのNo. 1ヒーローが画面いっぱいに映し出されており、それ
を目の当たりにした多くの視聴者が吹き出したと言う。

『それでは次回も、またみてジエントル♪』

『その挨拶、何!?!』

記録32

ゴジータによるジェントルへのヒーロー訓練、その名目で投稿された動画は瞬く間に全国に広がり、大きな話題を見せた。

これ迄世間が見向きもしなかった小悪党のチャンネルは毎回凄まじい再生回数を誇り、現在では既に百万人規模の登録人数を持つ大型のチャンネルと化していた。

しかも、ゴジータが登場してからは広告等の収入要素が全くない為、No.1ヒーローを間近で見れるというこのチャンネルは、色んな意味で注目の的になっていた。

その一方で……。

「だーかーらー！ もつと個性の使い方に幅を広げろよ！ お前の個性は多様性に富んでいるんだから、イチイチ空気やら壁やらで防ぐことだけを考えるなよ。お前の個性はモノに弾力の性質を与えるモノ、めちやくちや汎用性が高いんだから、お前も頭を柔らかくして順応しろよ」

「い、イエス……サー……ガク」

「ジェントルウウウウツツ!?!?」

毎回、No. 1ヒーローにボコボコにされる様子のジェントルに最初は酷く反発していたアンチのコメント達も、今ではすっかり丸くなっている。ジェントルという自称義賊に興味本位で近付いた愚か者、以前からゴジータにやつかみを向けていた者達も、真剣にジェントルに指導しているゴジータに表面上は何も言えなくなり、大人しくなっている。

そんな世間の様子を無視しながら、今日も今日とて個性の鍛練に勤しんでいるゴジータとジェントル。その様子の一部始終を撮っていたラブラバは、満身創痍となったジェントルに涙を流しながら駆け寄った。

「この鬼、悪魔! ゴジータ! いつもいつもジェントルをボコボコにして! 酷いじゃないの!」

「え、でも……前より個性の使い方巧くなってるじゃん。今回だって訓練の場所選びで森を指定して、木々に弾力性を持たせて縦横無尽に跳び跳ねる様なんて、普通に撮れ高あるんじゃない?」

「そのジェントルの新しい技を、あなた初見で叩き潰してたじゃない!! ものの数秒で見切ってたじゃない! カウンターで黙らせたじゃない!!」

「いやー、意外としっかりした必殺技だったから……つい」

「『ついで』でジェントルの技を潰さないで！ あなたの行いの所為で最近の動画のコメント欄が『ドンマイ』で埋め尽くされてるのよ!? 滅茶苦茶憐れまれてるの！ 頑張れって、とても応援されてるのよ!」

「良いことじゃん」

「うるつつつさい!!」

自分が年下であると知ってから、意外と遠慮がなくなってきたラブラバに、ゴジータは微笑む。これ迄世間からは冷たくあしらわれていた二人が、今ではゴジータのサイドキック候補として鍛えられている。

当然、其処に至るまでには多くの困難が立ち塞がっており、その中には世間からの評価だけじゃなく、ヒーロー達の意見や公安からの意見も尊重しなくてはならないし、説得だつて儘ならない事だろう。

面倒な事が多い案件だが、ゴジータ本人は然程気にしてはいない。ヒーロー飽和社会と揶揄されている現在の社会だが、そこには実力主義の一面もある。如何なる問題も実力とそれに伴う人格があれば、これ等の問題は然程難しくはないと言うのが、ゴジータの見解だ。

「でも、実際に前よりも良くなっているぜ。個性の使い方も洗練されているし、応用力も荒いが良くなっている。このまま行けば、仮免試験の内容次第では一発合格も夢ではな

いかもだぜ？」

「ほ、本当かい？」

ゴジータからの意外な高評価にボロボロだったジェントルの瞳に光が宿る。現在公安と絶賛交渉中であるゴジータは、今年中にでもジェントルに仮免の資格を取らせようと画策していた。

「しかし、分からないのはお前のいた学校、なんでお前を確り教えてやらなかったんだ？　こんな便利そうな個性持ってて、ヒーローになれない方がおかしいだろ」

ジェントルの個性は「弾力」。それは無機物から何も無い空气中にまで一定の範囲で弾力性のある性質を付与させるという強力なモノ。

使いこなせば救出からヴィラン制圧まで、幅広く使えるであろう良個性。これ程の個性を持つていながら、それでも目の目に当たれなかったジェントルにゴジータはただただ不思議に思えてならなかった。

そんなゴジータにジェントルは申し訳なきように俯き……。

「それは……もういいんだ。あの頃の私は、身の程も弁えられなかった愚か者。自分のすべき事を見誤り、何も成せなかった半端者。それが私だ」

「ジェントル……」

自嘲気味に、力なく笑うジェントルにラブラバは何も言えなくなつた。

「いや、その半端者を教え導くのが学校だから。出来ないことを出来るようにする。分からないことを伝わるように導くのが学校だからね？」

そんなジェントル達の感傷を真つ二つにするゴジータに、二人は目を大きく見開いた。

「今度、お前の学校に凸してやろうか？ アンタらの半端な指導のお陰で、俺は良いサイドキックを捕まえたって、生配信でお送りしてやろうか？」

「止めたまえ、仮にも私の母校だぞ？」

次いで、笑うジェントルにラブラバもつられて笑みを溢す。自分では決して引き出せなかったジェントルの表情に僅かな嫉妬心を抱きながらも、それでも青年らしい屈託のない顔を見せる彼に、ラブラバはほんの少しだけゴジータに感謝した。

「よし、そんじやあ今度はラブラバの個性アリでやってみようか」

「え？ い、今から……？」

「当たり前だろ？ 折角練習したんだ。次はブーストされた状態でどのくらい動けるか試してみないと」

「で、でも私、既にもうイツパイイツパイで……」

「そんな時こそこの校訓、更P i u s U i t r aに向こうへだよ。ジェントル君」

「ひ、ヒイイ!!」

前言撤回。やはりこの男、鬼だわ。



「ほう、つまり何か？ 私にお前の悪ふぎけ動画に付き合えと、そう言いたいのか？」

「悪ふぎけって酷いな。ユーモアがあると云ってくれよ、ナイトアイ」

それから二時間程、みっちりとジェントルとラブラバに鍛練を付けたゴジータは、二人に休みを取らせると、サー・ナイトアイの事務所へ訪れていた。

アポ無し、それも窓から入ろうとするゴジータに最初は追い返す気満々だったナイトアイだったが、サイドキックとインターン生であるルミリオンの説得の下でどうにか話だけは聞くことにした。

「で、その悪ぶぎけの動画に私を出して、お前は一体何がしたいんだ？」
「ジェントル・クリミナルというヒーロー志望の男の事を、客観的な意見で以て評価して欲しい」

ゴジータが持ちかけてきた話、それは現在ゴジータの監視下に置かれているジェントルとラブラバの二人を、プロヒーローであるナイトアイに評価して貰いたいという事。基本的に暴力を進んで振るわず、あくまでヒーローに対して自衛と逃走程度にしか個性を使用してこなかったジェントルとラブラバだが、それでも世間からは小悪党のヴィランと称され、ゴジータと出会う前までは後ろ指を差されていた者達だ。

今でこそゴジータというNo.1ヒーローに連日しごかれ、その容赦のない内容に多くの視聴者が同情しているが、それでも所詮はヴィランだと蔑む者達もいる。

更に言えば、公安からも否定的な意見が少なからず挙がっており、警察側からも問い合わせが来たりしている。

ゴジータの目的もその理屈も分からない訳ではない。近年増加傾向にあるヴィランによる犯罪件数に対して一つの選択肢になり得るかもしれないと、熟考の末に公安は一つの妥協点を提案してきた。

それは、動画にて最低三人程のプロヒーローにジェントルの事を評価して貰うこと。厳正なる評価によってジェントルの進退を見定め、そこに合格する事で初めて仮免試験

への参加を認めて貰えるという事。

これを二つ返事で了承したゴジータは、先ずはナイトアイに話を持ち掛ける事にした。自分にも他人にも厳しい彼ならば、ジエントルを厳しく評価するだろうし、公安や警察も納得してくれる筈。

そう思い、アポ無しで突撃した訳だが……。

「——貴様が私を頼ろうとした理由は分かった。安直にオールマイトを頼らなかつたのも、私的に好ましい」

「お、じゃあ……」

「だが、正直言えばめっちゃ断りたい。理由は、なんか嫌だからだ」

「え、ええ……」

「滅茶苦茶私情……」

目を大きく開き、嫌そうな顔を隠しもしないナイトアイに、ゴジータだけでなく隣で控えているルミリオンまでもが引いていた。

「とは言え、貴様のやろうとしている事も理解している。だから条件として貴様に二つ協力して欲しい事がある」

「えー二つも？ ま、いいけど」

「いいんだ！ 流石はNo.1、器がデカイ!!」

「ルミリオン、茶化さないでやってくれ。コイツが調子に乗る。……………話を戻すぞ、一つ目の条件はルミリオンを鍛えて欲しい。ルミリオンはその個性ゆえに近接戦が主体になっている。お前なら適切なアドバイスが出せるだろう」

「え？ それはいいけど……………でも、ナイトアイが直々に面倒見てたんだろ？ 今更俺に何かアドバイスできるかあ？」

「俺からもお願いします！ オールマイトも認めたNo. 1ヒーローであるあなたの意見が頂けるなら、これに乗らない手はないって！」

やる気を漲らせるルミリオンを見て、一つ目の条件がルミリオンを思いやった上での事だと察したゴジータは、相変わらず面倒くさいなとナイトアイを見る。珈琲を啜るナイトアイ、湯気で曇った眼鏡の奥には人間らしい瞳があった。

「ま、ルミリオンが納得しているなら別に良いや。それで、二つ目は？」

やれやれと、素直じゃないナイトアイに肩を竦めながら、二つ目の条件の呈示を促す。すると、一枚の写真と書類をテーブルの上に出したナイトアイは、真剣な表情となってゴジータを見る。

「——死穢八斎會。水面下でなにやら動いているヤクザの調査だ」



「さて、取り敢えず協力者一人目確保、と。残る二人だけど果たして何処に声を掛けたら良いものやら」

ナイトアイの協力を取り付け、一先ず今日は帰路に就くことにしたゴジータは、自宅へ続く田舎道へと降り立つ。

ジェントルとラブラバが仮免試験に挑む前提条件であるプロヒーローの認可は残す所あと二つ。問題はその二人のプロヒーローに付いてだが……。

「ホークスはノリが良いから大丈夫だと思っけど、残り一枠かあ。流石にオールマイトに声を掛けるのは色々と不味そうだよなあ」

なるべく公平さを保てるように、自分と友好的な人選はなるべく避けたい。ホークスは何だかんだこう言うのには厳正なる判断と評価をしてくれるから其処まで心配して

ないが……問題はあと一枠だ。

折角オールマイトを頼らずに集められるのなら、最後まで頼らずにいたい。しかし、心当たりがそんなにないゴジータはどうすればいいか悩んでばかりだった。

（オールマイトの師匠の一人だつて言うグラントリノは？ ……あの人の連絡先、俺知らねえ。Mt.レディ？ いやいや、アイツ最近忙しそうにしてるし、あまり負担を強いるのは止めておくか）

他にもシンリンカムイ、デステゴロ、ベストジーニスト等、候補に幾つもヒーロー名が挙がるが、皆忙しそうなので断念。

最後にエンデヴァーの名前が思い浮かぶが……一番あり得ないので除外。仮に声を掛けた所で、怒声と共に断られるのが目に見えている。

（なら、同期の連中に声を掛けてみるか？ いや、それだと調べられて自分の同級生という事に疑問視される可能性があるか）

あれもダメこれもダメかと、一人ウンウン唸りながら歩き続けると、ふと目の前に白く長い耳が視界に映り込んできた。

誰？ 不思議に思ったゴジータが、足を止めて前を見据えると……。

「よおゴジータ、風の噂で聞いたぜ？ テメエ、よりにもよつてアタシ以外の奴と組んだそうじゃねえか」

「ヒエッ」

獯猛な白兔が、狂暴な笑みを浮かべて佇んでいた。

記録33

天下無敵のスーパーヒーロー。それがゴジータに対する世間の評価である。あらゆるヴィランを苦戦する事なく圧倒し、あらゆる災害から人々を守るその姿は、まさにN.O.1ヒーローに見合う実力を有していた。

オールマイトとは異なるが、オールマイト以上のヒーロー。若さ故に色々と未熟な所が目立つも、それすらも愛嬌として人々に受け入れられていた。

そんな、色んな意味で人気絶頂であるゴジータは……………。

「ほーん、コイツがゴジータのサイドキック候補ねえ？ ほーん」

現在、メチャクチャ居たたまれない気持ちで自宅のソファアに座り込んでいた。ドスの利いた低い声を出しているのは何故か自分の隣に腰掛けているトップヒーローの一人であるミルコ。向かい側のソファアに座っているジエントルとラブラバは、突然のトップヒーローの訪問に冷や汗ダラダラになっていた。

「ちよっとー！ どういう事なのよ！ どうしてここにトップヒーローのミルコがいる

のよ!? どうしてあんなに不機嫌そうにしているのよ!?)

(知らねえよ! 帰ってきた時には既に家の前にいたんだよ!)

(何で家に招き入れてんのよ! 普通に締め出しなさいよ! No. 1ヒーローなんでしょ!)

(バカ言うな! なんことしたら玄関ごと蹴り飛ばされるわ! あの人は俺がNo. 1になる以前から世話になってる人だぞ、恩義的にも難しいわ!!)

ギロリとジエントルを睨み付けているミルコの横で、コソコソと話し合う二人。どうしてここにミルコがいるのかと問い詰めてくるラブラバだが、そんな事はゴジータ自身が知りたいところだ。

とは言え、このまま何も言わないでは埒が明かない。ミルコの来訪の真意を知る為、あと睨まれ続けているジエントルが可哀相だからと、ゴジータは不機嫌さを全開にしているミルコに声を掛ける。

「———というか、何でミルコは俺の家を知ってんだ? 一応、機密扱いになっている筈だろ?」

ヒーローというのは、その役職柄恨みを買ったヴィランに狙われやすい。故にヒーロー業に勤しむ者達の個人情報にはヒーロー委員会によって守られ、保護されている。

ゴジータの脳裏に以前自分の情報を買った根津校長の顔が甦るが、彼は人徳で知られ

る個性社会きつての人格者。相手がナイトアイという真面目の前にクソが付く程の人
物だから、根津校長同伴という事でゴジータの家に来られた。

ナイトアイに關しても、そういう秩序を乱すことを心の底から軽蔑している彼が、一
時の感情で他人の情報を売る真似はしない………答！

では、一体どうやって？ 不思議に思うゴジータが訊ねると、一度だけミルコの視線
は彼に向けられる。

「匂い」

「――」

マジで？ と、あ然となるが、ミルコの個性は「兎」。兎の様な強靱な足腰でトツプ
ヒーローに至るまで鍛え上げてきたミルコであれば、全国を股にかける事など造作もな
い。

加えて元から野生児染みた彼女なら、嗅覚でゴジータの家を特定する事くらい………
いや、やっぱ納得出来んわ。

しかし、言い切っているミルコの様子に嘘はなく、流石に恥ずかしいのか頬が若干紅
くなっている気がする。ラブラブはそんなミルコからの漂うラブの香りに「まつ」と頬
を手で覆うが、ゴジータ本人はそんな機微に気付く事なく、自分の体を嗅いで臭いを確
かめていた。

「…………まあ、アンタが俺の家を特定した理由は後で問い詰めるとして、用件は？　ただ顔を見せに来ただけじゃないんだろ？」

「——お前、本気でコイツ等と組む気か？」

「ああ？」

先程の態度とは打って変わって、小さく絞り出すように言葉を吐き出すミルコにゴジータは戸惑う。何故ミルコがそんなことを気にする？　確かに以前から何かと理由を付けては自分とチームアップの要請をしてきたが……………。

何故、自分に固執するのか。「ラビットヒーロー」ミルコは基本的に単独で動き、単独で活躍する色んな意味で独立したヒーローだ。そんな彼女が何故自分にこだわるのか、ゴジータには理解できなかった。

「……………組む、というか俺の監視下に置くだけだぞ？　チームアップじゃなくてサイドキックだ。あくまでプロのヒーローになるまで俺の部下として扱うつもりだけ……………」

ミルコの言う“組む”というのがチームアップの事を指すのなら、それは違うと訂正する。あくまで二人はプロのヒーローになるまでの預かりであって、正式な相棒ではない。あくまで自分の監視下におくことで更正する事を目的とした間柄だ。

故に、ゴジータ本人と世間が認めたらジェントルとラブラバは晴れて自由の身とな

る。尤も、本人達がヒーローになった後もサイドキックとしてゴジータの下で活躍したいと言うのなら話は別だが……。

組む相棒というより、部下として扱う。そう訂正するゴジータに……。

「……………」

ムスーと、何処か納得したくない様子のミルコにゴジータは頭を悩ませた。頬を膨らませて見るからに拗ねているミルコ。年上の癖に子供みtainな態度の彼女に一体なんと言えば納得してくれるのか、頭を悩ませていると。

「……………あー、じゃあミルコも審査員として参加する?」

「あ? 審査?」

「そ、このジェントルって奴は個性的にも便利だし、今後ヒーローとして活躍すれば多くの人達の助けとなる存在になるだろう。問題は説得力、コイツがヒーロー活動しても大丈夫って言える説得力が欲しいんだ」

「……………」

「現時点で協力してくれるヒーローはナイトアイ一人だが、明日にはホークス辺りに声を掛けるつもりだ。最低三人、その中にミルコが入ってくれれば世間に対して強い説得力の材料になる」

ホークスにはまだ了承を得てないが、彼とミルコの前でジェントルはヒーローとして

の才覚が問われる事になる。相手がトップヒーローであることから難易度は大きく跳ね上がるが、逆にそれを乗り切り信頼を勝ち取れば、ジェントル・クリミナルは二人のトップヒーローから実力で信頼を獲得した事になり、それは否定的な世間や公安に対して力強い説得力にも繋がる。

頼む。と、両手を合わせて頼み込んでくるゴジータを一瞥し……。

「——わあーったよ」

ミルコは渋々ながら了承した。

「その代わり条件一つな。次の活動日、一日私と組むこと、いいな！」

「はいはい、いつぞやみたいに俺を足にしたいのね。いや、いいけど」

「へへ、そうこなくちやな！」

人差し指を立ててがなるミルコにゴジータもまた苦笑いを浮かべて了承する。一日限定、しかし久し振りに正式に組める事を喜ぶミルコはこの日一番の笑顔を浮かべていた。



「じゃあ、ホークスも協力してくれるという事でいいんだな？」

『うん、構わないよ。ゴジータが認めたジェントルってのがどんなのか気になるし』

「おし、なら予定が決まり次第連絡するよ。サンキューな」

『はいはい。そんじゃ、連絡来る日を楽しみにしてるよ』

既に日も落ち、夕食も終えた時間帯。庭先で一人ホークスと連絡を取っていた後藤甚田は電話の向こうで愉快に笑う先輩ヒーローに審査の参加を要請。これに二つ返事で承してくれた「速すぎるヒーロー」に感謝しながら、ホークスとの通話を切る。

これで、公安から提示された最低限の人員は確保された。ジェントルを見定める為に必要なプロヒーローの三人の内二人はトップヒーロー。難易度的に大分高難易度ルナティックよりだが、それでも認めて貰えた時の恩恵は大きい。

動画撮影の準備を終えた時、その時がジェントル・クリミナルのヒーローとしての素質が問われる大一番である。今から楽しみだと、当日の事を思いながら家へ戻ろうとする甚田の視界に件の当人を見付けた。

「ジェントル……………いや、今は弾柔郎か。どうした？ 縁側に座り込んで」

縁側に座り、一人空を見上げているジェントルこと弾柔郎。穏やかな表情で夜空の月を見上げている彼の横顔は確かに紳士的であった。

「——何だか、夢を見ているようで。眠ってしまったらこの夢が覚めてしまうよう……何だか眠れないのさ」

「意外と詩人」

揶揄するゴジータに微笑む弾柔郎だが、彼自身そう思っても仕方がない。学力が低く、昔から身の程知らずと罵られ、これ迄小悪党なヴィラン擬きとしか見られてこなかった自分のまさかの転機。

No. 1に捕まり、見初められ、ヒーローとしての力を鍛えて貰えている自分は、きつとももの凄く恵まれている事だろう。No. 1ヒーローから鍛えて貰える日々は、弾柔郎にとって辛く、厳しく、そして楽しい毎日だった。

ラブラバと出会ってからも決して味わう事のなかった充足感。自分はまだヒーローを志しても良いのだと、そう言って貰えた事に飛田弾柔郎は救われたのだ。

そんな夢のような時間が、眠ってしまったら覚めてしまうのではないか。らしくはないセンチメンタルな気持ち、我ながら気色悪いなど飛田は嘲笑の笑みを浮かべる。

「阿呆、まだ念願のヒーローになってないってのに、何を終わった気であるんだよ。そんなセンチになるのはせめて仮免を取ってからにしろ」

そんな飛田の心情をゴジータは容赦なく一蹴する。何せ、これから飛田には三人のプロヒーローの監視の下で、自身のヒーローとしての素質を示さなければならぬ。終わるところかスタートラインにすら立てていないのに、何をやりきったつもりでいるのか。

そう檄を飛ばす甚田に、飛田は目を見開いて……そして、笑った。

「ははは、本当にその通りだ。私のヒーローとしての道のりはまだ始まってすらいない」「分かったならとつと寝ろ。明日も早いんだ。無駄な時間を過ごすんじゃないぜ」

腰に手を当てて呆れる甚田に弾柔郎はただ笑みを浮かべる。この恩は必ず行動で返すと、そう誓いながら用意された布団へ向かい……。

「……………そう言えばゴジータ、君はあのミルコとはどういう関係なので？」

「……………一言で言えば、ヒーローとしての先輩後輩な関係」

ふと思いつく先程の出来事。何かとゴジータに対して距離感の近いミルコ。二人の関係性がどう言ったモノなのか、純粹に気になった飛田は思ったことを口にする、返ってきた返答に普通に納得し、それ以上疑問に思う事はなかった。

この二人、揃って良い歳の癖に男女の恋愛感情について何一つ理解出来ていないポンコツであった。

因みに、ミルコは甚田の部屋へ半ば強引に泊まり、今日の甚田は弾柔郎の部屋で眠る

ことになった。

びえん。



それから数日後、I・アイランドで起きた事件以外で特に騒がれる事がなかった日々、特訓を続けてきた二人は遂にその日を迎えた。

動画撮影の準備は万全。本日は特別に生放送で撮影する事になり、ゴジータもジェントルもラブラバも、いつも以上に気合いを入れている中、遂に待ち合わせの時間がやってきた。

指定した場所はゴジータが在住している田舎の、少し離れた所にある採石場。町の人々に協力して貰い、何とか場所と時間を確保したゴジータはジェントルと共に其処へ赴く。

今日でジェントルのヒーローとしての素質、その是非が問われ、定められる。果たして元ヴィランがヒーローとしての道を歩めるのかどうか、その緊張を抱く二人の前に立ち塞がるように佇む五人の影。

「——ん？ 五人？」

あれ？ なんか人多くない？ 具体的には二人くらい。

もしかしてナイトアイがルミリオン辺りを連れてきちゃったのかな？ そんな風に考えたのも束の間。

「成る程、彼が噂のヒーロー志望の元ヴィランか。その在り方、正にダメージデニムの如く」

「ふん、N.O. 1の育成理論とやら、見せて貰うとしようか」

何故か増えているトップヒーロー、なんで二人がここに？ 疑問に思うところは多々

あれど、取り敢えず一言。

「帰れN.O. 3、なにしに来やがった」
エンデヴァー

「何だと貴様アツ！」

N.O. 3には丁重にお帰り願う事にした。

記録34

「済まない。少々遅れた」

ゴジータからの要請を受け、仕事終わりに指定された場所へ訪れたスーツ姿のヒーロー、ナイトアイ。お洒落な車から身を乗り出すように降り立つ彼は、次に目にする人物達に驚き、僅かに目を見開いた。

「ベストジーニスト、トップヒーローである貴方まで此処に来ているとは……」

「そう言う君はナイトアイか。こうして顔を合わせるのは初めてだな。……君もゴジータからの要請を受けて？」

「君も……という事は、貴方も？」

「いや、私は——」

「あ、ベストジーニストさんと呼んだのは俺ツス」

「ホークス」

二人の間に割って入りながら事情を説明するのは、速すぎるヒーローとして知られる

ホークス。申し訳なきさそうにしている彼が語るのは簡潔にまとめれば以下の通りだった。

ゴジータの下で日夜個性の訓練に励み、ヒーローを目指す義賊被れ。世間的にはヴィラン扱いを受けている彼が、何の保証もなくヒーローの仮免試験を受けるのは社会的に問題があると言うことで、せめて世論の理解を得る為にも三名以上のプロヒーローからの保証が必要だと、公安から言い伝えられた。

本当ならミルコ、ホークス、ナイトアイという三名のプロヒーローで収めるつもりが、ナイトアイとミルコが誘われている事を知らなかったホークスが、気を利かせたつもりで同じトップヒーローであるベストジーニストとエンデヴァーに声を掛けたのだという。

「いやー、俺としては気を利かせたつもりなんですけど、まさかゴジータがオールマイイト以外に頼るヒーローがいたとは予想してませんでした。——特にミルコさん」

「私としてはエンデヴァーが此処に来ているのが意外だ。彼のゴジータに対する当たり前の強さは有名だからな」

「ああ、それは俺も思いました。ダメ元で声を掛けたら意外とあっさり承諾したもんですから、俺としても驚きです」

「——で、それが何故ああなっている？」

ナイトアイに促される形で視線を向けると、其処にはメンチを切り合うゴジータとエ
ンデヴァー。エンデヴァーは元々気も強く、民衆からもヴィランからも恐れられている
強面なヒーローであるのに対し、普段は陰キヤなゴジータも後藤 甚田ゴジータムーヴしている時
は強気MAX、しかも最近ではオールマイトと組んでいた時に色々と慣れてきた事も合
わさり、大抵の事には動じなくなっている。

そんなソリの合わない二人が鉢合わせた結果、二人の間で火花が散りそうな位に睨み
合っている。

「だあかあらあ、テメエなんぞに頼るつもりは毛頭ねえって言ってるんだ。頭でつかちの
火山親父は大人しく帰れ。お呼びじゃねえんだよ」

「凶に乗るなよ小僧。貴様程度の若輩者の思い付きで、世の中が変えられると思うのか。
人々の安寧に影を落とすと言うのなら、それは最早ヒーローの所業ではない!」

「そう言う頭ごなしでしか否定しないから余計な敵しか作らねえんだろうが。ヴィラン
は獣か? 人になり損なった出来損ないか? そうなった経緯も理由も知らないまま
に何もしていないのは、ただの思考放棄と何が違う」

「オツシヤやれー! ぶん殴れー!」

怒気どころか殺気立っている二人に対し、野生児全開なミルコは盛大に煽り散らかし
ている。これが日本のトップヒーローという事実に関わりなく、頭が痛くなったナイトアイは、目頭

を押さえながら空を見上げる。

しかし、いつまでもあのままにはしておけないと、三人のヒーローは二人へ近付き
……………。

「いい加減にしろ」

「ぶぎゅ」

「ほーらエンデヴァーさんも、いつまでもカッカしないの」

「ぬあ、いきなり持ち上げるなホークス！」

「ミルコも、あまり二人を煽るんじゃない。宜しくないぞ、違法デニムだ」

「違法デニムってなに？」

ナイトアイはゴジータの脳天にチョップを叩き込み、ホークスは個性である【剛翼】を用いてエンデヴァーを脇から掬い上げる形で抱え込む。最後にベストジーニストは極力ミルコを刺激しない形で論すが、ミルコはジーニストの独特な語録に目が点になっていた。

そんな訳で改めて集まった六人のヒーロー。六人の内、五人がトップヒーローという異質な状況の中、ゴジータが説明をする。

事前に用意された席に促され、座るホークス達。予め用意していた席は三つしかない、急遽近くの町役場へ急行したゴジータは、其処から三つ程追加でパイプ椅子を調達

してくる。

「……コホン。えー、それでは集まってくれた皆様。本日はお忙しい中、誠にありがとうございます」

「おー、意外とマトモな入り」

「では、早速本日の主題からご説明させて頂きます」

「———と思つたら早速か」

「あはは、いいね。展開が早いのは嫌いじゃないよ」

予期せぬ来客はあれど、名だたるヒーロー達に見て貰えるのは素直に有難い。これを乗り越えればジェントルのヒーローへの道のりは大きく短縮され、世間からの見る目も変わるだろう。

「それでは、此方が本日主役のヒーローの卵、ジェントル・クリミナル君です」

「よ、よよよよよよよろししくくくくくくくくくくん……」

「しっかりとしてジェントル！ 震えすぎて地面に穴を空けちゃつてるわ！」

そんなトップヒーロー達を前に、文字通り震え上がるジェントル君。No. 1からNo. 7までのトップヒーロー（No. 2とNo. 6は除く）が並び立つその光景は、並のヴィランなら裸足で逃げ出す程の圧を秘めている。

一人一人が一騎当千の強者達。そんな彼等を前にして震えるだけで済んでいるジェ

ントルは中々に大した奴なのかもしれない。

「さて、それじゃあ早速説明……の前に、ラブラバ。放送を開始してくれ」

「りよ、了解！」

「あれ、今から撮影開始かい？」

「プロヒーローがこんな集まったからな。折角だから生放送で全国に流す事にした。ナイトアイは裏方の方へよろしく、ラブラバに指示を仰ぐ形で頼む」

「些かアドリブが過ぎるが……良いだろう。例の件もある以上、あまり公に顔を出すのは控えたいからな。そういう訳で頼むぞ……ラブラバ」

「こ、こちらこそ、お、お願いするのだから」

長身の鋭い眼をしている男性に隣に立てられて、少しばかり声の上擦るラブラバだが、パソコンを打つ彼女の指の動きは止まらない。既に様々な機材を設置、設定し終えた状態で、その全てが彼女のマルチタスク技能によって完全に制御されている。

地味に凄いラブラバの特技、これを目の当たりにしたナイトアイは素直に感心した。

「よし、そんじゃあ……いっちょ始めるか！」

カメラが起動し、画面が映る。全国に流れるその映像は瞬く間に日本全土に行き渡り、一人の元ヴィランを更正させる為に集まる錚々たるトップヒーロー達の面々に、早くもネット上でバズり始めるのだった。



「成る程、ゴジータは彼を戦う為のヒーローではなく、守る為のヒーローとして育てて来たんだね」

動画撮影を開始して数十分。既に視聴者の数は数万単位で増え続けていて、コメントの数も膨大な量に膨れ上がっている。

その中にはNo. 2やNo. 6のコメントがあつたりしたが、膨大な量のコメントによりあつという間に流されてしまうとと言う珍現象が起きてしまっている。当然、コメントの方には殆んど反応していないゴジータ達が気付く筈もなく、トップヒーロー達の監修によるジェントルの評価は続いていく。

そんな中、ジェントルの動きを見てホークスはある事に気付く。現在彼は戦闘能力の評価という事で、トップヒーローの一人であるミルコが相手をしている。獰猛且つ苛烈な彼女の猛攻に怯えながらも対処しているジェントルの身のこなしは、ホークスから見ても中々に興味深かった。

「ああ、アイツの個性は相手を傷付ける事よりも相手を守る特性の方が強い。救助の場でも重宝するだろうし、対ヴィランに対しても【制圧】というやり方に頗るマッチしている」

「あらゆるモノに弾力性を与える個性、か。成る程、確かにこれは良い個性だ」

ホークスの質問に答え、プレゼンするゴジータに納得するベストジーニスト。分かりやすく解説しながらも頷く二人のトップヒーローに画面の向こうの視聴者達も関心を寄せていく。

「フン。だが肝心の個性を奴自身が把握しきれていないのはどうする。確かに有用性が高いのは認めよう。しかし、自分の意思でオンオフが切り替えられないのなら、他のヒーローとの連携や救助活動に支障がでるだろうが」

「勿論、それも今後の課題として取り込んでいく予定だ。現在ジェントルが完全に把握できる付与の数は四つ。四つ迄ならば自分の意思で個性による付与効果を消すことに成功している」

「だが、空中に付与を施した際の透明さはどうする?」

「それに関しては各サポート会社へ相談するさ。そんな訳で、応募してくれる各サポート会社の皆さんは此方の概要欄にあるURLをクリック!」

ホークスやベストジャーニストが関心を寄せる中、エンデヴァーは的確にジェントルの個性に対する欠点を述べていき、これもまたゴジータが理路整然と応える。欠点を欠点として扱い、改善点を述べた上で応用法も提示していく。

更にはサポート会社にも呼び掛けて協力者も募ろうとしている強かさ。これ等が合わさった上でコメント内では比較的肯定的な意見が多く占めていた。

ただ、それでも元ヴェイランであることに注視し、否定的な意見もチラホラ見受けられる。そんな、所謂アンチなコメントにもゴジータなりに真摯に対応する事で、その数は徐々に減っていく。

しかし、此処で一つ疑問点が浮かび上がっていく。

「——ふむ、こうして見ると確かに有力な個性であり、将来有望なヒーローの卵だ」
「ふふん、そうでしょう?」

「けど、一つ分らない所があるんだよねえ」

「え、例えば?」

「そうだねえ。まず渡されたこの資料——メチャクチャ内容がキレイじゃない?」

「そうだな。そして箇条書きにされた文章の数々には洗練された知性が感じられる。そう、まるでお仕立てのデニムの如く」

「質問しようかゴジータ。この資料纏めたの………本当に君？」

説明前にそれぞれに渡された一つの資料、そこに書かれている内容は元ヴィランだった人に対する更正方法とそれによる社会へのメリット。それらが物凄く洗練され、キレイに纏まっているという事。それがホークスとベストジャーニストが疑問に思うモノだった。

「も、勿論さあ………」

嘘である。この男、自分が良い事を思い付いた所までは良かったモノの、それを文章に落とし込む事を苦手としており、資料作成に大いに難航した。

そんな後藤甚田が最終的に頼りにしたのは実質的な弟妹達。自分とは違い、勉学に秀でている二人に土下座をする勢いで頼み込んだのだ。

世間ではNo.1ヒーローとして知られ、施設のチビツ子達からも慕われている自慢の兄が、まさかの土下座である。これには流石の二人も色々と冷めた眼で兄貴分を見ました。

そんな優秀な兄妹の力を借り、どうにか資料作りは完成するに至った。

せめて兄貴分としての威厳を保とうと、ソツポを向くゴジータ。しかし悲しきかな、そんなゴジータの態度に既に二人のヒーローは何となく察し、画面の向こうの視聴者達も懸命に秘匿しているつもりなの。No. 1を生暖かい眼で見守っていた。

因みに、ナイトアイは渡された資料に目を通していている時点で色々と確信していたりしている。

「オラア！ この程度でヒーロー志望かア!? まだまだ行くぞオラアツ!!」

「ま、まだまだああアツ!!」

「いや、もういい加減一旦止めとけ。もう一時間になるぞ」

誰もがボケに徹する中、エンデヴァーだけは常識人だった。



——その後、対ヴィランの訓練と救助の訓練を行いその成果を見せ付けた結果、それぞれのプロヒーロー達から無事に合格を言い渡された（約一名ほど渋々であったが）ジェントルは疲れ果て、一足先に就寝している。

ラブラバも本日の動画を簡単な纏めに編集したものを投稿している最中。一方で既にエンデヴァー達はそれぞれの拠点に帰り、現在自宅へ戻ってきたゴジータは事の顛末をとある人物に報告していた。

「——と、言うわけで、無事にウチのジェントルは三名以上のプロヒーローから認可を貰い、次の仮免資格へ進む事になりました」

『いいなあ、私も参加してみたかったなあ。酷いじゃないかゴジータ、そんな話を私に振らないだなんて』

「仕方ないだろ。アンタはI・アイランドでの後始末に追われてたんだから。………遅くなっただけど、弟達を守ってくれてサンキューな。事態を知れたら俺も駆け付けたんだけど」

『H A H A H A、それこそ仕方のない話さ。当時のI・アイランドはヴィラン達の手によつて通信手段の全てが断たれてしまったんだ。仮に通信が繋がっても、君が来る頃には全部終わってたよ』

「あーあ、折角御幸に格好いいところ見せられるチャンスだったのになー」

『……………しかし、一つ不可解な事もあったんだ』

「不可解？」

『ああ、今回ヴィラン達がI・アイランドを一時的に機能不全にしたとされるサポートアイテム。それを警察側が回収しようとした所、まるで此方の動きを見透かした様に自壊したんだ。粉々にね』

「……………でも、一部は回収出来たんだろ？」

『それが出来ない程に徹底的に破壊し尽くされていたらしい。現在塚内君達が懸命に解析してくれているみたいだけど……………あの様子だとあまり期待は出来ないと思う』

久々の相棒との会話、穏やかな声音から一転して真剣なヒーローとしての声を発するオールマイトに、ゴジータも自然に意識を切り替える。

『ゴジータ、君だからこそ言うが心して聞いて欲しい。——気を付けろよ、どうやら事態は我々が思っているより根深く蠢いているらしいぞ』

「上等、その為に俺達がいる」

真のヴィランは闇の中で賢しく動くもの。電話越しでそう忠告してくるオールマイト、これから訪れる暗雲に対してゴジータは不敵な笑みを浮かべて受けて立つのだった。

記録35

日本の名だたるヒーロー達からの認可を受け、ジエントル・クリミナルは公安から下される条件をクリアし、晴れて仮免許試験への受講を受理された。

動画サイトに投稿された動画は未だに再生数が伸びており、既に千万の超大台に乗りつつある。ゴジータの扱きをリアルタイムで見ている為に視聴者からの反応も悪くなく、ジエントル・クリミナルという名は、着実に良い方面で世間に認知されつつあった。そんなジエントルは現在活動を休止しており、居候先のゴジータの自宅にて一時の休みを満喫している。当分の間の彼はゴジータによってイジメ抜かれた自分の身体の静養に専念する事だろう。

さて、その一方で色々話題の中心人物であるゴジータはというと。

「だりやあああつ!!」

現在、とあるヒーローの事務所……そこに備え付けられているトレーニング室にて若きヒーロー候補の相手をしていた。

振り抜かれる拳、死角から現れるその一撃をゴジータは見向く事なく避け、返す刀の裏拳にて迎撃する。

見事なカウンターのだが、手応えはなかった。自身の身体をすり抜ける光景に眼を見開くゴジータに対して、金髪の青年はしてやったりとにこやかな笑みを浮かべる。

「へえ、すり抜ける個性か、いい個性じゃないか。いやこの場合、いい個性にした、が正しいかな？」

「そう言うこと！ さ、ドンドン行くよー！」

瞬時に自分の個性を見抜かれ、それを使いこなすに至った経緯すら暴かれながらも、青年の攻撃は決して弛むことはない。上下左右に囲まれた閉鎖的空間、限られたこの場所において青年のゴジータに対する優位性は揺るがないモノになっていた。

上から、下から或いは左か、はたまた右か。縦横無尽に仕掛けてくる青年に一見してゴジータは翻弄されているように見えた。

しかし。

「ほい」

「ッー」

左から現れる青年へ掌サイズのエネルギー弾を飛ばす。威力は最小、当たってもゴム弾程度の衝撃しかないソレを、青年は透過させて事なきを得る。

予測？ それともトップヒーローによる経験？ 対応され始めた理由を青年は分析するが、その悉くが違うと加速した思考が両断する。

目の前のNo. 1は自分の動きなど最初から見切っている。彼が今までなにもしてこなかったのは偏に自分の実力を押し測る為、ただそれだけに過ぎない。

自分の培ってきた経験や予測など簡単に上回ってしまうのが、目の前のNo. 1ヒーローだ。一瞬だけ気落ちするも、分かっていたことだと今一度気合いを入れ直した瞬間……。

「まさか、俺にこれを使わせるとはな。流石はナイトアイの秘蔵っ子だ」

徐に、ゴジータは自身の広げた両手を顔に近付け――。

「太陽拳！」

「ガッ、――ア」

突然瞬く眩い閃光に視界を奪われ、次の瞬間インターンの青年はうなじ付近に感じた衝撃と共に意識を失った。



「あー悔しい！ もうちよつと頑張れたら一発くらい叩き込めたのに！」

「はっはっは、舐めるなよ若造。No. 1の座はそう簡単には譲らないのだ」

サー・ナイトアイが経営している事務所……その地下にて、自前のトレーニング室で悔しがる青年を見下ろしながら、ゴジータは笑う。

今しがた相手をしたのは、ナイトアイの下でインターン生として活躍しているヒーロー名ルミリオンこと、通形ミリオ。

何物も透す【透過】の個性を持ち、その厄介な特性の個性を実用にまで持ち込み、更にはその個性を活かした立ち回りは彼のこれ迄の血の滲むような鍛練の成果である。それを僅かな時間の間で読み取ったゴジータは素直にルミリオンに感心した。

「しっかし、極めれば極める程応用性の高い個性だよな。その辺りもナイトアイから？」
「ええ、だからこそサーからは常に相手や周囲の動きを予測して立ち回るように言われているんです」

「だろ。お前の動きは常に相手の一手二手先を取ろうとしているモノの動きだ。加えて誘導させる能力もな」

「あはは、流石はN.O.1。あれだけの動きで其処まで見抜かれちゃったか」

「けれど、それは逆を言えば相対している奴に自分の動きとその目的を伝える事になりかねない。確かに有象無象のヴィラン未満のチンピラ相手なら問題ないが、これが組織化されたヴィラン集団、目の肥えたヴィランが相手ならお前の動きが看破され、窮地に追い込まれてしまう可能性もあるぞ」

「そうなんだよね。だから一撃離脱と一撃で相手を気絶させる様にしてるんだ。そこでN.O.1ヒーローである貴方にアドバースをお願いしたいんだ」

「ナイトアイ辺りならとづくに分かっていると思うけど……まああれだ、死角からの不意打ちが一番お前のやり方にあっているんじゃないのか？ ヒーロー的にはどうかと思うけど」

「う、やっぱりそうなる？ サーも似たような事を言ってたんだよなあ。でも、流石にヒーローとしてどうかと思うし、俺的にもちよつと遠慮したいかな」

「けど、いざそう言う手段が必要になった時は迷わずに動けるように心掛けておいた方がいいぞ。差し詰まった状況下で、お前の矜持と何も知らない民衆を天秤に掛けるような真似、したくはないだろ？」

「それもそうだ。よし、それじゃあもう一本お願いします！」
「おう、何度でも相手してやるよ」

個性に関する欠点とそれを補う思考力、ルミリオンの強みを伸ばしつつ、欠点を補える立ち振舞いを教えながら組手は夕暮れ時まで続いた。



「ミリオの相手、ご苦労だったなゴジータ」

「気にすんなよ。俺もアンタにはインターンの頃には世話になったからよ、このくらい安いもんだ」

その後、ミリオを満身創痍にまで追い込んだゴジータは、外の見回り警護を終えてきたナイトアイの所へ今日一日の報告へやってきた。

恐らく外で起きたヒーロー活動の報告を纏めているのだろう。机の上に積み重ねら

れた書類を物凄い速さで処理していくナイトアイに、ゴジータは若干引きながらも感心していた。

「うへえ、えげつない処理速度。腱鞘炎とかならないの？」

「生憎と、そんな柔ではない。貴様と違い、事務員に任せつきりではないのでな」

「さ、左様で……………」

「それよりも、貴様から見たルミリオンはどうだった？」

相変わらず色々と容赦のないナイトアイだが、そんな彼でも愛弟子は可愛いらしい。素っ気ない振りをしつつも確りと気に掛けてやっているナイトアイにゴジータも表情を和らげる。

「透過する個性、あれをモノにするには相当な修練があった筈だ。加えて周囲への対応力とそれに伴う予測。並大抵の努力ではないのは確かだな」

「その甲斐あつてか、近接戦闘では無類の強さを誇っているよ。組手をしている最中、何度か当てられそうになつたしな」

事実、ルミリオンの実力はナイトアイの下で修練を積み重ね、自己鍛練を欠かさず行つてきた為に並みのプロヒーローでも歯が立たない程に強くなっている。

他にも救助の面で見ても、障害物を無視して対象の救助に行けると言うのは、現場か

ら見ても非常に頼もしく思える。もし彼が正式にプロヒーローとしてデビューすれば、その年の内にトップヒーローに名を連なる事も夢ではない。それ程のポテンシャルがルミリオンにはあった。

「唯一欠点とも言えるのは火力の面だけ……ま、その辺りはアンタが考慮しているだろうから省いておく。アンタが目を掛けているヒーローの卵は、ちゃんと成長しているよ」

「……………そうか」

「それじゃ俺はこれで。バブルガールとセンチピーダーよろしく言うておいてくれ」

今日一日ルミリオンの面倒を見て、彼の成長具合と将来性も見る事が出来た。これで先日の協力の件の義理も果たせたと、満足したゴジータが事務所から去ろうと扉に手を掛けた時。

「オールマイトの……………O. F. A. の後継はミリオにこそ相応しい」

「……………」

「当時の私は、そう思っていた」

背後から聞こえてくる声、ゴジータは振り返ることはなかった。

「無個性の少年に自ら個性を渡すのは正気の沙汰ではない。体育祭を見るまでの私は、

オールマイトの判断を誤りだと思つていた」

「——今は？」

「……………悔しいことに、嘗てのオールマイトと重ねてしまったよ。緑谷出久だったか？

今では彼の成長を楽しみにすらしているよ」

「なんなら、今からでも紹介してやろうか？ インターンの受け入れ枠は一人だけじゃないんだろ？」

一度だけ振り返り、意地悪な笑みを浮かべるゴジータに。

「それはごめん被る。問題児を扱うのは貴様で懲りているからな」

「えー、出久はそんな問題児じゃあ無い筈だぞ」

「先日、試験場となった会場を更地にしたそうじゃないか。幾ら相手がオールマイトだからとは言え、やりすぎだ」

「いや、それ絶対オールマイトが八割原因だろ」

て言うか、学生相手になにしてんだよ、とはっちゃける相棒の姿を幻視したゴジータは項垂れ、そんな彼に今度はナイトアイが笑みを浮かべた。

「——ま、相談されれば検討してやらんこともない。さ、もう行け。例の死穢八齋會に関する話は追つて次第連絡する」

「はいよー、それじゃあナイトアイ。お先に失礼するなー」

扉を開け、屋上へと掛け登り飛翔する。瞬く間に空の彼方へ消えていくゴジータを見送りながら、ナイトアイは嘗ての彼の姿を思い出す。

『喩え未来が見えてても、対処できなければ意味がないよな』

「——ふん、あの生意気だった奴が随分と丸くなつて」

嘗てゴジータがインターン生としてやつて来た日。この日にナイトアイはオールマイト以来の衝撃を受けた。コイツならばオールマイトの後を継げるヒーローになれるかもしれない。彼の負担を少しでも軽くできるかもしれない。

当時、オールマイトの事で余裕の無かつたナイトアイは、同じく余裕の無いゴジータの内情に気付かず、彼の苦悩に寄り添う事が出来なかつた。

「だから、という訳ではないが。彼の頼み事はそれとなく受け入れることにしている。条件を提示するのは照れ隠しの表れ、それを決して他者に見せることの無いナイトアイは今日も仕事に精を出すのであつた」

「——随分と面白いモノローグを言うじゃないかバブルガール。何処で磨いたんだそのユーモア、是非私にもご教授願いたいな」

「あ、あれ？もしかしてナイトアイ怒つてる？ご、ごめんなさい！ちよつと調子に乗っちゃつて………！でもゴジータを独り占めしてて正直ずるいと言うかなんと言うか！」

「ハハハ、怒ってないよ」

「それめっちゃ怒ってるやつー!!」

夜の帳が下り始める時間帯、ナイトアイの事務所には笑い声の断末魔が響いたという。

そして早朝。小鳥の鳴き声と共に目覚めを迎えたゴジータは今日も一日頑張るゾイと意気込み、朝の支度を始める。今日はこの田舎回りの見回りからだった筈だと、欠伸を噛み殺しながらリビングへやって来ると。

「おっせーぞゴジータ！ 何呑気に寝てんだよ、さっさと起きてヴィランドも蹴り飛ばしに行くぞ!!」

何故か既にリビングにて白米をかつこんでいる兎のヒーローがいた。

朝から刺激的な光景を目の当たりにしたゴジータは、ポリポリと頭を搔いた後
 ……。

「———寝よ」

現実逃避を決め込むのだった。

記録36

夏本番を迎え、雨の回数も増え、それに比例しながら増していく日頃の暑さも鬱陶しくなってきた今日この頃。街頭でのモニターも夏に関する情報がズラリと並び、世間もスツカリ夏一色である。

「おー、あの飲料水新作出たのかー。今度買いに行こ」

「隙だらけだゴジー……ブボオツ!？」

襲い来るヴィランの顔面に拳を叩き込んで黙らせる。猪突猛進なヴィランに呆れながら、ゴジータは周囲の野次馬達に怪我が出てないか周囲を見回す……が、それも意味がないことだと思い打ち切った。

何故なら――。

「オラアツ！ どうしたヴィラン共オツ！ 根性足んねえぞ!!」

「ヒイツ！ ミルコだあ、ミルコが出たあ!!」

「あの女に蹴られたら再起不能じゃ済まねえぞ！ 逃げろ、逃げろオツ！」

「逃がす訳、ねエだろオがアツ!!」

銀行強盗の真つ只中にいたヴィラン達を一方的に蹴りまくっているミルコ、断末魔を上げながら逃げ惑うヴィランを嗤いながら追い掛けるその様は軽く地獄絵図である。心なしか、自分の背後に隠れる一般市民達の顔色が青い気がする。

「ママー、ミルコの活躍が見れないよー!」

「ダメよ、あのヒーローはまだ早いわ。性癖が歪まされたら大変なもの!」

「せーへきつて?」

「心の食指よ」

「?」

(見ろ、子供連れのお母さんてば子供の教育に悪いと思つて我が子の視界を塞いじやつてるよ。うん、その判断は間違つてませんよ)

銀行という施設、限られた地形の中で立ち回るには相応の技術が必要になる。特に人質という手段の取りやすいこの場所ではヴィラン側にとって有利になりやすい。

その限られた空間で、一般市民に害が及ばない様に立ち回り、建物に影響が出ないようにヴィランの股間に的確に蹴りを入れていく。その精密な動きのできるミルコに感心しながら、同時に執拗に股間を蹴り上げる彼女にゴジータはうすら寒いものを覚え

「このオ、調子に乗るなよアバズレがアツ！」

「—」

もうじきヴィラン達の制圧も完了する……と思われた時、一人のヴィランの仲間が折り畳み式のサポートアイテムを取り出した。これ迄の規格とは明らかに様相の異なる代物。一般向けよりもより洗練されたそのフォームは、大衆向けというより軍事向けに近い印象を受ける。

腕に嵌め込み、ミルコに狙いを定める。下卑た笑みを浮かべるその男は……。

「おっと、室内は火器厳禁。マッチ一本火事の元つてな」

「う、そお……」

いつの間にか背後へ回っていたゴジータの手刀が後頭部へ直撃。反撃の余地すら許されずに制圧されたヴィラン達、その圧倒的な戦闘能力への驚きと興奮に人々は直ぐ様沸き立ち始めた。

「ンだよゴジータ、手を貸すならもつと早くやれよ。殆んどアタシ一人で片付けちまつたじゃないか」

「アンタと一緒に暴れたら市民の人達や職員さん達の邪魔になるでしょうが。彼らは午後からも仕事なんだ、あまり余分な手間を残したくないんだよ」

「——え、俺達この後仕事すんの？」

「でも、実際殆んど被害出てないし、書類も無傷……え、これマジで午後も仕事やる流れ？」

「有能すぎだろトップヒーロー……!」

何故か愕然としている職員達を無視し、無力化したヴィラン達を外へ運ぶ。既に外で待機していた警察が待ち構えていた。

「ゴジータ、ミルコ。ヴィランの捕縛の協力に感謝する」

「助かる。それと、一人妙なサポートアイテムを装備した奴がいる。何とか外せないか？」

「なんと、それは恐らく最近噂になっている奴だな。分かった、何人か詳しい奴を回そう。此方に引き渡してくれるか」

「おう」

ヒーローにも協力的な警察を有り難く思いながら例のヴィランを運ぶ。先日オールマイイトが言っていたヴィランに配給されているサポートアイテム。その出所が知れるかもしれないと、期待したのも束の間。

「!?!」

ゴジータが警察にヴィランを引き渡す際、嵌めていたサポートアイテムが独りで瓦解した。持ち主以外が触れたら壊れるものだと思い、敢えて外さなかったと言うのに、

それでも壊れてしまった。

「——マジか、触れてなくても壊れんのかよ」

「いや、嘆くにはまだ早い。幸い爆破して壊れたのではなく、単に崩れただけだ。欠片を回収し、直ぐに解析に回そう。中の監視カメラにも手掛かりがあるかもしれん。ゴジータ、そしてミルコ、改めて市民を守ってくれてありがとう」

「——ああ、後の事は任せた」

喩え一欠片の残骸しかなくとも調査を諦めない警察に心底心強く思うゴジータは、残るヴィラン達を預けて次の現場へ向かう。勿論、本日限定の相棒も忘れずに。

「おせーよゴジータ！ さっさと次行かねえとヴィラン共が逃げるだろうが！」

「……もうちよつと感慨にふける間があっても良いんじゃないかなあ」

ヒーローとしては正しいのかも知れないが、ストイック過ぎるミルコにゴジータは少し泣きたくなった。



「んで、実際どういうつもりなんだミルコ。アンタ程のヒーローがワザワザ俺に関わろうとするなんてよ」

「あ?」

そして昼下がり。度重なるヒーロー活動で流石に空腹を覚えた二人は、現在とある街を見渡せる高台にて一時の休息を堪能していた。予め持参していたサンドイッチ（二人分、用意したのもゴジータ）を頬張る二人。人気のない場所であることもあって、ゴジータは何かと自分を気に掛けるミルコに思い切つて訊ねてみた。

「以前も言ったが、アンタは元々単独行動を好む質だろ? インターン生を受け入れるなら兎も角、チームアップを好まないアンタにしてはらしくないんじゃないか?」

ラビットヒーローミルコは、その気性の荒さ故に単独行動を好み、チームアップという事を滅多にしない。それが今ではちよくちよく自分にちよつかいを掛け、更に最近では自分の家を特定してまで自分に関わろうとしてくる。他人にそこまで興味を抱かない彼女にしては、少々違和感のある行いだ。

「……………」

しかし、そんなゴジータの問いにミルコは応えない。そもそも今は背中合わせで食べ

ているから表情が伺えない。

……覗き込んだら蹴られそうな気もするし。

「……まあ、俺の様な年下の若造がいきなりN.O. 1になったら色々と心配するのも分かるが、いい加減信用してくれよ」

恐らくは先輩ヒーローとして色々と気を揉んでくれるのだろう。口にしそしながナイトアイだって色々と気に掛けてくれてるし、先日来てくれたベストジーニストだってそうなのだ。

余計なお節介はヒーローの本質。オールマイトの格言通りならば、ミルコの干渉もその類なのだろう。しかし、心配は不安の裏返し。未だ若輩の域を出ていない自分を世間は認めても、プロヒーローがそうとは限らない。

オールマイトの様な万民が安堵するヒーローに至るにはまだまだ足りない部分も多い。だからこそ他のヒーロー達も自分の事を気に掛けているのだろう。

加えて、ミルコはサイドキックの頃に世話になった相手だ。嘗ての部下が下手な真似をしていないか、彼女としても気が気でないのだろう。

けれど流石にそこまで気遣ってもらうのも申し訳ないし、仮にもN.O. 1ヒーローがその様な体たらくでは周囲の人々に示しがつかない。

オールマイトとは違うヒーローを目指すとしても、このままでは格好がつかない。だからゴジータはもう心配は要らないと彼女の親切心をなるべく裏切らない形でやんわりと断ろうとするが……………。

「……………ミルコ？ ミルコさん？」

返事がない。蹴り処か反応一つ返さないミルコに流石に不気味に思ったゴジータがゆっくりと彼女の顔色を伺うと……………何やら不貞腐れた様な、頬を膨らませてムスツとしているミルコに流石のゴジータも困惑した。

何だか頬も赤い気がする。風邪？ いや、この万年ハイレグヒーローにそんな概念ある訳が……………見たことのないミルコの反応により頭が混乱しかけた時、ゴジータの持つ携帯に事務所からメッセージが届く。

それはとある山沿いで発生している土砂崩れ。連日の土砂降りで地盤が弛んでいた為に起きた災害、送られてくる事故の様子と巻き込まれた被災者達。そして現地で対応しているヒーローと近隣で活動しているヒーローへの救援の報せが届いた。

「ミルコ、乗れ！」

「おう！」

メッセージを確認したゴジータがミルコに同行を要請し、ミルコもこれに即快諾。両手両足でがっちりとホールドし、色々と密着状態であるにも拘わらず、ゴジータは現場

へと急行する。

喩えラブコメの波動を発しても、トップヒーロー達の活動は止められないのだ。

◇

「全員バスに乗せたな！」

「此方は完了したわ！」

「よし、Mt.レディ、頼むぞ！」

「了解！」

とある田舎町、山沿いに建てられた小さな集落。其処で起きた自然災害を前に駆け付けた数名のヒーロー達が市民の救助に専念していた。

「もー！ もうすぐ林間合宿が始まるのに、お天道様つてば酷すぎるにやー！」

「愚痴を溢すなラグドール！ 他に避難出来ていない住民がいなか探ってくれ！」

「九時の方角に二名！ 大きさから見て、子供が残されているにやー！」

「私が行きます！」

まだ駆け付けたばかりで満足に住民の避難も完了しきれしていない状況。突然起きた災害を前に後手に回るしかないヒーロー達は、己の無力さに歯噛みしながら次から次へと襲い来る災害に対応するしかなかった。

ラグドールと呼ばれる女性ヒーローが指し示すのは滑落の恐れのある場所。連日の豪雨で地盤が弛み、いつ家ごと滑り落ちるか分からない状況下でMt.レディの反応は素早かった。

巨大化した状態のまま、子供達のいる家へと駆け付ける。二階の窓から覗き込むと、其処には互いを抱き寄せながら不安と戦っている幼き姉妹が、涙を流しながら震えていた。

「良かった。無事ね！ お父さんとお母さんはいる!?」

「ふ、二人とも朝早くからお仕事で、妹とお留守番してて……」

「そう、偉いわね！ すぐにお母さん達に会わせるから、ちよつと待っててね！」

不安に怯える二人を可能な限り安心させる。笑みを絶やさずに微笑み掛けながら、Mt.レディは元のサイズへと戻り、二階の窓から二人の所へ駆け寄る。

これで一通りの救助は終わった。後は救援に駆け付けてくれるヒーローと協力して災害による被害を極力防ぐだけ。

しかし、自然というものは、何処までも人に敵しい。

「M t. レデイ！ 上だ!!」

「ッ!!」

頭上から降り注ぐ砂利、それが土砂となつて覆い尽くす。気付いた頃には逃げ場がなく、目の前の災害を前にしてM t. レデイの脳裏には否応なくあの日の光景が思い浮かぶ。

（——舐めんな、今の私はヒーローだ。今更この程度の逆境にビビるもんか!!）

今の自分は助けられる側ではなく、助ける側。乙女の時期などあの日から既に捨てている。頼れるのが自分だけなら命を賭けて自分のやるべき事を遂行するのみ。腹を括り、やるべき事を見出だしたM t. レデイは巨大化する事で二人の姉妹の盾になる選択をする。

しかし、そんなM t. レデイの決断すらも嘲笑うかのように流れる土砂の中に岩石が入り混じる。当たれば致命傷は避けられない。それでも二人だけは必ず守るとM t. レデイが自身へ襲い来る衝撃に備えた時。

「——待たせたな」

黄金の暴風が全てを蹴散らした。降り注ぐ土砂を、落下してくる巨大な岩石を、一人のヒーローが自然の脅威を蹂躪していく。

その光景に再びM t. レディの脳裏にあの記憶が想起する。ああ、あの時もこんな風に助けられたな、と。

黄金の焰を纏い、対処すべき災害を静かに見据える彼の横顔は、正しく人々が見出だした希望の象徴。

故に。

「キヤー！ ゴジータ様アーツ!!」

M t. レディの乙女回路が全開になるのも、致し方のない事だった。

「……………アーニャ落胆」

「しッ！ ダメよアーニャちゃん！」

記録37

拳を振るう。ただそれだけで自然災害を押し退け、暗雲に染まった空が蒼穹へ変わる。窮地に立たされ、自然の力に怯える人々の心の底に芽生えた不安という種すら吹き飛ばしてしまうその光景に、現地に駆け付けていたヒーロー達も驚きを露にしていた。

たった一人の人間により引き起こされた現象。それは多くの人間の脳裏に嘗てのオールマイトを想起させ、同時に認めざるを得なかった。自然の脅威すら振り伏せる圧倒的超パワー、それは正にNo. 1のヒーローを名乗るに相応しい。

地上に降り立ったNo. 1ヒーロー、ゴジータは周囲を見渡して一人頷く。被害の規模も最小限に抑え、家屋が崩れて流される等の大規模な被害も見当たらない。既に多くのヒーロー、並びに救助隊が駆け付けてくれている。

この分なら一日もあれば警戒を解いても問題ないだろう。

「よし、これで一先ず何とかなったか。Mt. レディ、そつちの子供達は無事か？」

「は、はいいい！ 二人とも怪我一つありません！」

「ならそのまま二人を安全な所まで避難させてくれ。俺は——」
「ゴジータ！」

呼ばれて振り返ると、其処には学生時代に世話になった人達。猫とメイド服を融合させた様なヒーローコスチュームを着用したヒーローが、駆け足で駆け寄ってきた。

「虎さん、やつぱりアンタだったか」

「相変わらず派手な事をする。だが、お陰で助かった。Mt.レデイ、子供達の親御さんも今避難所に到着した。早く連れて二人を安心させてやってくれ」

「了解です」

虎と呼ばれるヒーローの指示に従い、速やかに二人を運ぶMt.レデイ。振動に気を付けながら走るといふ器用なことをやってのける彼女に感心しながら、改めてゴジータは彼を見やる。

「そつちはそろそろ林間合宿の受け入れ準備が始まる頃だろ。大丈夫か？」

「なあに、これくらいこなせなくてはレスキューヒーローは名乗れんよ。とは言え、お前がいなければ危なかったのも事実。改めて礼を言う」

「よせやい、鬼教官のアンタに言われたらむず痒いぜ」

「相変わらず生意気そうで安心した。序でにと言っではなんだが、ここから上の方で幾つかの岩石が道を防いでいるらしくてな、撤去作業を手伝って貰えるか？」

「ああ、そっちの方なら——」

「ゴジータアアツ!!」

背後からの声に遮られる。目の前の虎とは違う澁刺とした声、その声に聞き覚えのあるゴジータは振り返ることなく横にズレる。飛び付く形で迫っていたらしい人影は、地面にベチャリと座り込むと、不貞腐れた様子で見上げてきた。

「もー、何で避けるのニヤー!」

「いや避けるだろ。なに学生気分で抱き付こうとしてんだよ」

「先輩からのコミュニケーションは受け入れるべきニヤー!」

「先輩って言うより最早先達の領域だろ。年齢差を考えろ年齢差を」

「ヒーローに年齢は関係ないニヤー!」

後輩とのスキンシップの無さに不満そうに唇を尖らせているのは、虎と似たコスチュームを身に纏う“サーチ”ヒーローラグドール。その個性を用いて救助者を探し当てる彼女は、レスキュー活動に主軸を置いているチームにとって無くてはならない存在である。

「そうだぞー、先輩との交遊は積極的に行うべきなんだ。そう言うわけでゴジータ、結婚しよう」

「しねーよこえーよ忍び寄るなよ。アンタそんなキャラだったかピクシーボブ。一回り

以上年の離れた年下相手に結婚を迫るとか、ヒーローとしてどうなのよ」

「うるせー！ ヒーローであると同時に一人の女なんだよ私は！ ねえ、お願いだよ、私と結婚を前提にした健全なお付き合いをしよう？」

「いやすみません、マジで勘弁してください」

ピクシーボブ、土を操る個性を持つ彼女はその利便性からラグドールと同様に救助の現場にて大いに活躍し、重宝されている。

ただ近年自身の結婚適齢期を気にしているのか、割と出会いに飢え、求めているらしい。普通に美人さんなんだから、婚活でもなんでもすれば良いのに。なんて思っても、中身が陰キャ故に声に出して指摘することが出来ないゴジータだった。

「ホラホラ、いい加減後輩イジリは止めなさい。みっともないわよ」

「えー、もう少しゴジータで遊びたい〜」

「遊びたいじゃないの。窮地を脱し、他の応援が駆け付けてくれたと言っても、まだまだ安心は出来ないんだから」

「て言うか、今俺で遊ぶって言った？ ねえ、俺で遊ぶって言った？」

そんなゴジータすらも弄ばれる状況の中で、漸く良心的な人物がやってきてくれた。彼女達と同じヒーローコスチュームを身に纏い、レッドという色合いを受け持つ彼女のヒーロー名はマンダレイ。彼女の個性であるテレパスは救助の時だけでなく、他のヒー

ローとの連携を円滑に保つ為の潤滑油となっている。

「悪いねゴジータ。アンタも色々大変だろうに、ワザワザ此処まで来てくれるなんて……」

「礼ならもう虎さんから受け取ってるからいらねえよ」

「ふふ、相変わらず生意気そうで良かった。あ、そうだ。ねえゴジータ、暇な時で良いから今度サインしてくれない？ 従兄の子がゴジータのサインが欲しいって五月蠅いのよ」

「それくらいお安いご用さ。んで、その子の名前は？」

「出水^{いずみこうた}洗汰。従兄夫婦が今ちよつと忙しくて、アタシの所で預かってるのよ」

「OK、じゃあ今度暇な時にそっちに行くよ」

「あー！ マンダレイってばゴジータに粉掛けてるー！」

「自分ばっかり狡いにやー！」

「なっ!? ちが、そんなんじゃないってば！」

「かー、みんなラグドール、イヤしか女ばい！」

「ばい！」

「……この人ら、一応三十代超えてるんだよね」

「あまり年齢の事は言っちゃらないでくれ。頼む」

良い歳してワチャワチャとしている三人娘に遠い目になるゴジータ。こんなのも

一応世話になった人達だから悪くは言いたくなかったが、流石にこれはアレが過ぎる。唯一常識的で冷静な虎はタイにて性転換手術を受けた異色の経歴を持っている。

そんな、色々な意味で個性派的な四人組。通称「ワイルド・ワイルド・プツシーキャッツ」は中堅上位の人気を誇る実力派ヒーローチームである。

相変わらずノリの良い人達だな、なんて思いつつ、ゴジータは周囲を見渡して状況の確認を急ぐ。

ジエントルをしごく一方で自身の鍛練も変わらず行ってきたゴジータは、ここ最近周囲の気配を意識的に探れるようになっていた。

「…………ラグドール、付近に取り残された人々はいないな？」

「にや？ うん、それは間違いないニヤ。この町のほぼ全員が避難所に収容済み、今頃は用意された資材でゆくり休んでいる頃合いだよ」

ラグドールの言う通り、本当に人の気配がなくなっている。感じられる気配は町の中心にある小学校に集中し、先の子供達の下へ両親と思われる二つの気配が近付いていくのが分かる。

どうやら、自分の気配感知も結構な精度になってきたらしい。とは言えまだまだ粗い部分も多く見受けられる為、今後一層の研鑽が必要になってくるだろう。

さて、そろそろ自分も避難所に向かって炊き出しの手伝いでもしよう。そう思い一歩

足を踏み出すと……………。

「よおゴジータ、人が岩を蹴り砕いている間に随分と楽しそうにして……………相方放置で女と乳繰り合ってるたア良い度胸じゃねえか」

「乳繰り合ってねえよイジられてんだよ、どんな目エしてんだアンタ」

これまた背後からヌルツと現れる影。その正体は道路を塞いでいた岩石を砕いていたミルコで、その体は雨によりびしょ濡れとなっていた。

明らかに不機嫌な様子でゴジータの背中に寄り掛かる。本当は濡れたくないから離れて欲しかった所だが、今の彼女は面倒臭い状態であることを何となく察したゴジータは何も言うことなくされるがままだった。

「あーあー、アタシ一人で雨の中頑張ってたからビショビショじゃねえか。こりや風呂でも入らねえとやってらんねえな」

「そうか。なら事務所のシャワー室を貸すから、其処で済ませてくれ」

「風呂つつつてんだろうが。つーかお前が天候ごと変えちまうから此方は寒いんだよ、責任とれ」

「いや責任で……………」

遠回しに家に泊めろと要求してくるミルコに、ゴジータは泣きたくなかった。だってこ

のラビットヒーロー、寝相が兎に角酷いのだ。

シーツはグシャグシャだし、布団も蹴つ飛ばすし、何なら匂いもする。しかもこれが甘く良い香りがするから尚質が悪い。あの匂いがとれるまで暫くの間は、ジェントルと同じ部屋で寝ることになりそうだ。

……まあ、夜な夜な二人で（ラブラバも混ぜて）トランプとかで遊んで過ごす約束してるから、そこまで辛くはなそうだけどね。

とは言え、流石に二度も自分の部屋に泊めるのは嫌だ。ここらでひとつガツンと言わないと、今後もウダウダと上がり込まれてしまいうさだ。

「あ、あの！ ゴジータ、困ってるじゃないですか！ 止めた方が良いんじゃないですか？」

「ああん？ 誰だお前？」

「Mt. レディだよ。後輩ヒーローの名前くらい覚えておけよ」

そんな自分を見かねたMt. レディが、緊張した面持ちでミルコに物申している。流石はマウンテンヒーロー、半ばヤンキーにしか見えないミルコによくぞ勇気を持って諫めてくれた。

「……………チツ、わあーッたよ。確かにみつともない真似をしたかもな。悪かったよ」

後輩からの言葉を受け、流石に不味いと思ったのか、ミルコはゴジータから離れてい

く。確かに彼女の最近の横柄な態度は若干癩に障ったし、世話になった恩があるからといってこれ迄ハッキリと物申す事をしなかったゴジータ自身にも責があるだろう。

ただ、それでもずぶ濡れた彼女を放置するのも気が引けたので……………。

「あーもー、仕方ねえなア。ウチの風呂を使わせてやるよ」

そう言うと、垂れていた耳がピンツと立つ。振り返ってくるミルコの顔が明らかに上機嫌になり、これ以上絡むのも面倒なので、後の事は他の面々に任せる事にして今日は早々に帰ることにした。

「そんな訳で、俺達はこれで失礼するよ。悪いなMt.レデイ、気を遣わせちまつて」

「い、いいえ！ 此方こそ生意気に口出ししちやつて……………」

「あと、その敬語もいい加減止めとけ、アンタの方が歳上なんだ。もちつと堂々と構えていても文句はねえと思うぞ」

「ご、ゴジータに……………タメ口!? い、いやでも……………」

「そんなじゃあ、俺はこれで。何かあったら遠慮なく連絡してくれ」

「ああ、助かったよゴジータ」

「サインの事、よろしくねー!」

プッシーキャッツに後の事を任せ、ゴジータはミルコを連れて自宅に帰ろうとする。

その際。

「「ッ!」」

「……………」

何やら衝撃的な事があつたのか、酷く唾然としているガールズヒーロー達。特に虎とマンダレイを除いた三人がより激しく動揺している気がする。

一体どうしたんだ? 不思議に思つたゴジータがどうしたのかと訊ねようとするも。

「ホラ、さつさと帰ろーぜゴジータ。体が冷えちまう。兎はな、体が冷えると死んじまうんだぞ?」

「いや、それ大体の生物がそうだから……………んじや、帰るか」

「おう」

長い付き合いだから、自分の体に抱き付かれる事に違和感を感じなくなつたゴジータは、ミルコが振りほどかれぬ程度で飛翔する。その際、後ろから悲鳴に似た声^ラが聞こえた気がするが……………気のせいだろう。

そして、ゴジータの姿が見えなくなるまで呆然としていた^ラプツシー^{ドール}と^ヒビク^{シー}の二人と
Mt. レディは……………。

「な、な、なアーツ!! 何をしてくれてんだあの泥棒兎イー!!」

「酷いニヤ! 横から見事にかつさらっていきやがったニヤ!!」

「数年前から狙っていた優良物件、インターセプトされたアアア!!」

ピクシーボブとラグドールの悲鳴に似た断末魔、ヒーローとは思えない狂乱ぶりに他のヒーロー達が何事かと駆け付ける。

本来なら諫める立場でもある虎だが、今回は流石に二人に同情した。数年前から有望なヒーローになると確信し、付かず離れず適度な距離感で関係性を保っていたのに、突然横から強力なライバルが登場してきたのだ。

しかもあのミルコなるヒーローはあろうことかゴジータが背を向けた瞬間、勝ち誇った顔をして舌まで出してきやがった。おのれ、あの耳を垂れ下げたしおらしい後ろ姿はフエイクか！

ヒーローとして、何より女性経験の無いゴジータならば、騙されるのも無理はない。

(唯一の救いは、ゴジータがそういった感情を持ち合わせていないことか)

猛り狂うチームメイト、二人を宥めるのが大変だなと、虎は肩を竦め……。

「……………あの褐色兎……………ゼツテー潰す」

新たに生まれた厄介ファン、ブツブツと物騒な事を口ずさむ彼女を全力で見ないフリをすることにした。



「やれやれ、今日は何だか疲れたなア。ジエントル、悪いけど紅茶淹れてくんねー？」
「相変わらず忙しそうだね君も。少し待っていたまえ」

帰宅し、ラブラバにミルコを預けたゴジータは風呂場に向かう二人を尻目にリビングのソファアーに腰かける。が、それも束の間、テーブルの上に置いていた携帯が音を鳴らして震えだす。

「ゴジータ、携帯鳴ってるよ」

「んあ？ ……オールマイトから？ なんだろ」

電話を鳴らしている相手は相棒であるオールマイトだった。雄英で何かあったのだろうか？ 不思議に思ったゴジータが着信に出ると。

『ゴ、ゴ、ゴゴジータ！ 大変、大変な事が起きた！』

「おいおいどうした相棒、アンタほどのヒーローが動揺しているなんてらしくないじゃないか。倒した筈の宿敵が復活でもしたのか？」

通話の向こうではやたらと慌てている相棒。その尋常ならざる様子にゴジータも困

惑するが、取り敢えず落ち着いてもらわないと話が進まない、冷静になることを促す。それでも覚めぬ興奮。マジでどうしたんだと眉を寄せるゴジータに……………。

『緑谷少年に……………他の個性が出てきたんだ』

「……………ふあ？」

思っていた以上の内容に、口から変な声が出た。

記録38

オールマイトからの要請により、後藤甚田ことゴジータは翌日の休日の時にお馴染みの集合場所になりつつある砂浜へ朝早くから訪れた。

以前は粗大ゴミに溢れ、水平線など見えもなかった場所。その景観は今も保たれており、近隣住民はこの景色を維持しようと色々対策を立てているらしい。

そんな、オールマイトと緑谷にとつて思い出深い地にお邪魔する事になったゴジータは……。

「どうですかゴジータ！ この個性！ 凄くないですか!?!」

「あーうん、そうね」

緑谷の指先からチョロツとだけ出ている黒い紐状のナニかにどう反応したら良いかわからなかった。いや、だって……オールマイトが物凄く焦った様子で言うんだから、てつきりもつとヤバそうな代物かと思つてたんだもん。

それがお前、指先チョロつてお前……。

「初めて個性が発現した時はこれの比じゃなかったんだよ。幸い雄英の敷地内で人氣があまりなかった場所だから何とかなっただけ……」

「あ、そうなの？」

パツと見てとでもそうは思えないが、オールマイトが言うには当時の緑谷は暴走状態にあつたらしく、オールマイトも怪我をさせないように抑え込むのも難しい状況だったのだという。

いつも通りの組手に勤しんでいた所へ突然発現した新しい個性。当然緑谷は持て余すし、オールマイトも緑谷が自分と同じ無個性だったと思っていた故に驚き、対処が一瞬遅れた。

そんな時、たまたま近くを通り掛かった相澤と心操人使なる生徒のお陰で事なきを得たと言う。

「心操？ ……ああ、あの洗脳の個性の奴ね。え？ じゃあその二人にO・F・Aの事が知られたの？」

「いや、その辺りの事は私が誤魔化しておいた。緑谷少年の個性について私が相談を受けていたという形でね」

「いや、それ絶対裏で色々と怪しまれる奴。 ……緑谷、空気を読んでくれる担任と友人で良かったな」

「は、はい！」

「で、俺にその新しい個性の扱い方を指導をしてくれって？ 期待してくれるのは嬉しいが、その如何にも鞭みたいなの扱い方なんて知らないぞ？」

「あ、いえ。確かに助言が欲しいのも事実なんですけど……」

「実は、それだけじゃあないんだ」

「？」

今の黒い鞭よりも大事な話があると口にして二人の空気が劇的に変わった。その表情に余程重い内容なのだと言ったゴジータもおふざけ無しで聞き入れようと佇まいを正し。

「——緑谷少年が、歴代の継承者の方々とお会いになったらしいんだ」

「……………」

オカルト方面にぶっ飛んだ話を叩き込んできた。



その後、緑谷とオールマイトからの話を纏めると、どうやらO・F・Aには故人の意志のようなものが内封されており、この時初めて具体的且つ鮮明的に顕れたのだと言う。

意識を失った際に現れたスキンヘッドの厳つい男性、自らをO・F・Aの元継承者だと名乗るその男は緑谷に自らの個性の有用性を語り、個性と感情によるメリットとデメリットを語った後に消えたのだと言う。

「——切っ掛けは、体育祭の時でした。あの時も心操君の個性で洗脳されて、場外に誘導された時、臍気だったけど、今思えばあれは歴代の継承者の方達なんだと思います」

「取り敢えず、心操君とやらには後日ちゃんとお礼言つときな？」

「は、はい！」

故人だと言う歴代の継承者達と出会ったと語る緑谷もそうだが、切っ掛けやら暴走状態の緑谷を止めてくれた心操某君には、心からの誠意を見せるべきだとゴジータは助言する。

いやだって、理由も事情も知らずに助けてくれるとか、普通に将来有望なヒーロー株

じゃん。ゴジータは継承者云々よりその子のことの方が気になった。

「んで、その継承者の人達って何で今になって顔を出すようになったんだ？ ……いや、この場合は緑谷の方が会えるようになったと言った方が正しいか？」

「相変わらず良い読みしてるぜゴジータ、私も同じ見解だ。緑谷少年は最初こそO・F・Aを持って余していたが、体育祭以降は自分の出来る範囲で習得し、今では一瞬だけとは言え50%の力を引き出せるようになってる。恐らくはそんな緑谷少年の成長に合わせてO・F・Aの奥底で眠っていた歴代の方々の意識が浮上してきたんじゃないかと思うんだ」

個性の中に第三者の意識が混じっている。医療の歴史の中では移植手術を受けた人の手足に元となった人間の意識が宿っている——みたいな話を何処かで聞いたことがあるが、それにしただって眉唾物である。

妄想、或いは妄言の類いだと切り捨てても良い話なのだが……不思議と、ゴジータはそうは思わなかったし、何なら同調すら出来てしまっていた。

何故なら、後藤甚田もまた緑谷の体験と似た経験をしたことがあるからだ。故にオカルトだと一蹴しないし、妄想だとバカにしたりもしない。

ただ、自分の体験の方がより妄想的なので口にはしないだけ。

「——ん？ じゃあ、何でオールマイトは他の個性を使わなかったんだ？」

「私はただ初代の継承者の追体験を夢と言う形で目にしたに過ぎないんだ。緑谷少年の様に、直に継承者の方と話を出来た事はない」

「え、じゃあまさか緑谷って……結構霊感体質なの？」

「急に怖いこと言わないで下さいよ!？」

口ではふざけてはいるが、割とこの考察は当たっているのでは？ とゴジータは思った。昨今、個性を持つて生まれてくるのが当たり前となっている現代、個性とはその人にとつて無くてはならない身体の一部であり、手や耳、鼻といった感覚に類するモノだという見方も存在している。

そして、先天的や後天的を問わず、その感覚を失っている者は別の器官、或いは感覚が発達すると聞く。視力を失った者が聴覚や嗅覚が発達するといった具合に、緑谷の霊感能力も個性を持たない故の擬似的な能力だったりする可能性も……？

「という考察はどうよ?」

「いや、それはどうだろ?」

「流石にちよつと突飛過ぎませんか?」

割と真面目に考察しているのに、オールマイトと緑谷は苦笑い。おい、そつちから振つてきた話だろうがと、ゴジータの額に青筋が浮かんだ時。

「あはは、流石はNo.1ヒーローだ。その発想力は大したモノだ」

「全くの見当違い……………と、言い切れないのが怖いところではあるな」

「お、塚内さんじゃん」

「グラントリノも！ 来てくれたんですか！」

遅れてやって来た二つの人影、昇ってくる朝日に照らされながらやって来たのは、オールマイトにとつてもゴジータにとつても馴染みになりつつある面々だった。

「この二人にはもう予め……………」

「ああ……………あ！ ちゃんとナイトアイにも話したからね！ 今度こそ、ちゃんと相談したからね！」

「それはそうだろうよ。……………でも、姿は見当たらないな」

塚内とグラントリノとゴジータ。相変わらず腹の内を話せる身内の少ないオールマイトだが、今回は流石にナイトアイにも伝えていた様子。だが、それにしても彼の姿が見えない。オールマイトの嘗ての相方であり、重度のオールマイトオタクでもあるナイトアイが約束をすっぱかすとは思えない。不思議に思い首を傾げるゴジータと、不安そうに指先をチョンチョンと合わせているオールマイト。

現在のオールマイトの体軀は鍛えられているおじさん程度なので、そのビジュアルからしてその振る舞いは少々笑えるところがあった。

「……………実は、ナイトアイは今回来れそうにない。代わりにあるものを預かって来てい

る」

「え、そうなのかい？」

「ありやま、ドタキャンだなんてあの人らしくないな」

「……まあ、今回は仕方ない。何せ内容が内容だ。緑谷君にはくれぐれも内密に頼むよ」
「?。」

そう言つて塚内が真剣な表情で手渡してくるのは一枚の紙きれ、折り畳まれたそれを受け取つたオールマイトは、緑谷の方へ視線を向ける。

見れば、既に緑谷の相手はグラントリノがしており、彼の新しい個性についてアレコレ相談を受けていた。古参のヒーローだけに為になるアドバイスを受けている様子の緑谷は、此方に気をやる事無く個性鍛練の励みにしている。

そんな夢中になっている緑谷を他所にオールマイトがその紙を開くと……………。

「これは……………!？」

其処には歴代の継承者の名前と個性……………そして死因が記載されていた。



「——で、それで何でこの家で話し合う事になってるの!？」

「仕方ねえだろ？ 内々の話をするんだからって、人の耳に入らない場所っていったら俺ン家くらいしかないんだもの」

場所は変わって甚田宅。オールマイト達を乗せた車をゴジータが担いでいく様は、空を飛んでいた為に衆目に晒されずに済んだ。

「ジェントルはどうしてる?」

「今は町の方でボランテニア活動をしているわ。この時間だと子供達の通学路の見回りね。ああ、勿論個性なんて使ってないわよ」

「今更そこを疑うことはしねえよ。ただ、これからこのメンツでちよつと話があるんだ。悪いんだけどラブラバは……」

「はいはい、奥の方に引っ込んで動画の編集をさせてもらうわ。ただ、今夜の夕飯だけど

と自分を大事にしても良かったんじゃないやねえの？ 特に名前と個性以外黒塗りされてる奴とか、絶対になんかあっただろ」

「それが許されなかった時代、というヤツさ。事実、当時の奴の影響力は凄まじく、相対してきたヴィランの多くがA・F・Oの手下だった」

ナイトアイがもたらした情報の殆どが既に故人となっていて人達ばかり。中でも四代目に該当する者は名前と個性以外が黒く塗り潰されている。

恐らくは調べたナイトアイが何らかの理由で消したと思われるが……恐らくは此処に彼が今回来なかった理由があるのだろう。詳しくは次に顔を合わせた時に聞くことにしよう。

「しかし個性を奪い、与える個性か。勿体ねえなあ、それを上手く活用すれば人類の躍進に大きく貢献できただろうに。どうしてこの手の奴は頭の悪い使い方しか思い浮かばないかねえ？」

「それは誰もが思うことだよ。……話を戻そう、重要なのは今後緑谷君の身に起きる出来事についてだ」

「恐らくは、歴代の継承者の個性が何らかの形で発現するだろう。今回出てきたのは五代目継承者である万縄大悟郎。黒い鞭を自在に操り、戦場を自由に飛び回ってきたという」

「へー、スパイダーマンだな。因みに、次に発現するとしたら何代目辺りだと思う?」

「……………そうだね。私としては先代の、お師匠の個性を希望したいな」

「志村菜奈……………へえ、綺麗な人じゃん」

大悟郎の隣に並べられる写真、スキンヘッドの厳つい男の隣に並ぶように差し出された写真の女性。とても優しそうで、ヴィランと率先して戦うヒーローとは思えない程の優しそうな笑顔がそこにはあった。

「七代目の個性は浮遊。もし緑谷少年にお師匠の個性が宿れば、緑谷少年は空を飛べる手段を得られる事になるな」

「ほえー、すげえじゃん緑谷。選り取りみどりで」

「い、いや、これら一つ一つを使いこなさなきゃいけないと思うと……………正直、戸惑ってばかりです」

これから七人の継承者達の個性が緑谷の身体に発現してくる。その事実嬉しさよりも、それらを使いこなせる様にならなくてはならないという未来に、緑谷は今から目が回る思いだった。

なお、もし仮に緑谷の個性について疑問視する者が現れたとしても、ゴジータという前例が既に存在している為、そこまで追求される事はないだろう。

「じゃあ、今後は緑谷に歴代の継承者の個性が顕れた時、それなりにフォローすればいい

い、という話？」

「——いや、実はもう一つ重大な案件が一つ。内容的にこっちの方が本命だ」

「先日、ゴジータが沖合いで遭遇した人造ヴィラン、通称脳無。ゴジータが捕まえた奴を筆頭に雄英、そして保須市に現れた脳無の検査が先日完了した」

「お、遂に来たか」

「結論を言えば、此方の読み通りに脳無と呼ばれる人造ヴィランは、文字通り人体実験の末に造り上げたおぞましき生体兵器だという事が分かった」

遺伝子レベルで加工され、複数の個性を保有し使用できる強い肉体。淡々と語る塚内の言葉に自然と場の空気が締まる。

「捕らえられた脳無、その悉くが死んだ人間を改造したもの。そして複数の個性の因子が検出された事から、我々は一つの結論に至った」

「……恐らく、脳無の元締めであるA・F・O。奴は今も生きて、社会の裏で暗躍している」

塚内の言葉を代弁するグラントリノ。その目には強い怒りが滲み出ており、同時に恐れに近い感情が見え隠れしている。

A・F・O。個性黎明期に頭角を現し、一時は社会の全てを掌握していたヴィラン。奴によって世界は混沌の淵に叩き込まれ、人々は目に見えない恐怖と不安で押し潰され

そうになった。

そんな、悪の大王みたいな奴が生きている。そう聞かされた緑谷の顔は緊張と恐ろしさで強張っているが……………。

「ふうん、じゃあ今後はそのA・F・Oを捕まえる方針ってことか？」

「そうは言うがゴジータ、これは言うほど簡単な事じゃないぞ」

「大丈夫さ。何故なら——俺達がいる。過去の亡霊相手に今更負けられるかよ。なあ、相棒？」

「全く、相変わらず楽観的で生意気だな。……………けど、その通りさ！」

不敵に笑う二人のヒーロー、オールマイトとゴジータを前にするとそんな不安なんて吹き飛んでしまう。

「今の日本には私だけではない。ゴジータも、そしてエンデヴァーも、多くのヒーロー達がいる。彼等が守るこの社会を、今更奴の好きにはさせないさ！」

立ち上がり、マッスルフォームへ姿を変える。最近は食事も増え、トレーニングも欠かさずに行っている事から、今の彼は全盛期から衰えてはいるものの、決して弱つてなどいない。

力強く言いきる平和の象徴、そんな彼に誰もが異議を唱えはしなかった。

「あ、でも次の林間合宿には安全面を考慮して私も参加するんだよね。場所も以前とは

違う所でやるみたいだし」

「そうなの？」

「そ、そうだったんですか？」

「これ、一応オフレコね。私も同行するっていうのも現地に着くまで秘密になってるから」

「俊典、お前なあ」

「それ、言っちゃダメな奴じゃん」

指を立ててシートという素振りを見せるオールマイトに苦笑いが浮かぶ。相変わらず何処か抜けてる相棒に肩をすくめていると。

「ただいまーって、凄い靴の数。誰かお客さんが………オオオールマイトオオオツ!」

「あ、ジェントル・クリミナル」

子供達の通学路の見回りから帰ってきたジェントル。時間も頃合いだし、あることを思い付いたゴジータは徐に立ち上がる。

「よし、話も纏まったし、ラーメンでも食いにいくか」

「お、良いねえ。私もそろそろ脂っこいのが食べたくなつたんだ」

「なら行くとするか。塚内、緑谷、行くぞ」

「ほ、僕も良いんですか!」

「まあ、たまにはいいか」

「ジェントルも行くぞー。っと、ラブラブも呼んでやらないとな」

和気藹々とした昼下がりに、とある田舎のラーメン店にて二人のトップヒーローが現れ、ちよつとした騒ぎになったとか。

「——で、その時に撮った写真がこれです！」

「オールナイトとゴジータに挟まれるとか、どんな豪運してるンすかアンタツ！」

「藤原さん、ファンの人達を敵に回したわね」

（——何やってンだよ甚兄!?!）

記録39

夏。衣替えの季節が巡り、蟬の鳴き声が響き渡る時期。雄英の生徒である1年A組の面々はとある郊外へ連れてこられていた。

眼下に広がる森林、鬱蒼と広がる緑の大地。本来なら林間合宿の宿泊施設に向かっている筈なのに、人気もなく車も通らないこの場所へ何故自分達は連れてこられてきたのか。首を傾げる生徒達に対して、引率者であり担任である相澤消太は淡々と告げる。

「さて、それじゃあ説明を始める。後悔しないようにちゃんと聞いておけよ」

合理的に物事を進める相澤は非効率的な言動を嫌う。その事を今日までの行程でイヤという程思い知っている生徒達は、その脳裏に嫌な予感が過ぎる。

今回の合宿の面倒を見てくれるというところあるヒーロー、「ワイルド・ワイルド・ブツシーキャッツ」のピクシーボブとマンダレイ。相澤の紹介から登場するベテランヒーローにより一層不安を募らせる生徒達に相澤は告げる。

「さあ、始めるぞ卵ども。林間合宿は既に始まっているぞ」

瞬間、嫌な予感を回避するべくバスへ逃げようとすると、ピクシーボブの個性である「土流」が1年A組を崖下へ流し落とす。獅子が千尋の谷へ突き落とすが如くの行い、自らの生徒達の悲鳴を耳にしながら、相澤はさて…と一人バスへと引き返す。

「しっかし、相変わらず酷いねーイレイザーヘッド。幾ら生徒が可愛いからって、此処までスパルタしちゃう?」

「まだまだこの程度では済みませんよ。アイツ等には今後も逆境をはね除ける地力が必要になってくる。ヒーローとは逆境を覆す者、であればこのくらい乗り越えてもらわなくては困ります」

「相変わらず合理的ね」

「——まあ、世の中にはその合理性すら踏みこじる化け物がいるけどね」

アハハと苦笑いを浮かべるピクシーボブにマンダレイも遠い目で嘗ての出来事を思い返す。数年前、自らの個性に対する絶対的な自信と慢心とすら言えるその在り方に当時の教師達は頭を悩ませた。

一度その鼻っ柱をへし折るべく、期末テストの実技や林間合宿の時に今回と似たような試験を課してみたものの、その生徒は嘲笑いながらその試験を超越してみせた。

今でも思い浮かぶ憎たらしい顔。寧ろこの程度かよと煽ってくるその生徒に、相澤も随分と悔しい思いをした。

「……その時の事は、あまり思い出したくないんですけどね」

「あはは、まあアイツ生意気だったもんねー」

過去の出来事に苦虫を噛み潰したような表情を浮かべる相澤だが、実際はそこまで気にはしていなかった。いや、気にはしているが、それ以上にその生徒について色々と思ふところがあつたのか、その生徒に対する不満はなかった。

「アイツの場合、生意気というよりそうしなければならぬ事情があつたんでしよう。自らをそう定め、そう在る事を自らに課し続ける。そんな呪いを抱え続けていたら、あなるのも頷ける」

呆れたように呟く相澤。何だかんだ言いながら面倒見の良いツンデレ教師に、ベテランヒーローの二人はニヤニヤ笑うのだった。



「ッだあー！ マジかよ相澤先生、相変わらず唐突過ぎるだろオ！」

「でも、流石はピクシーボブ。あれだけの土石流を操りながら誰一人怪我人は出してない。繊細な個性の扱い、伊達にベテランじゃないよ！」

「デ、デク君、さつきその手の話題でピクシーボブにシメられてなかった？」

「ケロ、懲りてないわね緑谷ちゃん」

相当な高さから落とされたというのに、誰一人怪我を負っていない。繊細な個性の使い方を絶賛する緑谷を他所に、生徒達は周囲を見渡す。

「しっかし、マジで鬱蒼としてんな。こりゃ施設に辿り着くのに結構時間が掛かるぞ」

「正に自然の迷宮……」

「すごいや峰田はどこ行つた？」

どこまでも広がる大森林、これは進むのに骨が折れそうだなと、肩を竦める上鳴。一方でいつの間にか姿を消している峰田の行方を探していると……。

「たつ、たたた助けてエエエツ!!」

いつの間にか離れた所にいた峰田が巨大な怪物に追われていた。そのファンタジー感満載の巨大な獣、正に魔獣と呼ぶに相応しい怪物の登場に1年A組が浮き足立った時。

「SMASHッ！」
スマッシュ

翡翠の放電を全身から迸らせながら、緑谷が蹴りを見舞う。直撃し、一撃で粉碎される怪物にそれが土塊であつたと知つた一同は、これがピクシーボブの個性によるものだと知る。

既に試練は始まっている。そう告げている相澤を思い浮かべたクラス的面々は、表情を引き締めて個性を発動させる。

次々と現れる土塊の魔獣、これが林間合宿の最初の試練だと確信した一同。ある者は戦慄し、ある者は不敵に笑う。

押し寄せる魔獣の群れに、1年A組もまた全力でこれ乗り越えていくのだった。



「かつちゃん、そつちに一体行ったよ！」

「わあつてるわクソデク！ テメエは目の前の土塊獣に集中しろや！」

自分達の前をひたすらに突き進む二人の男子。翡翠の電流を全身から迸らせ、超パワーで土塊の魔獣を圧倒していく緑谷。

数カ月前はマトモに個性を扱えず、手足を壊してばかりいた彼が、気付けばクラス内での実力はトップクラスの座に君臨している。

そして、そんな緑谷を引き剥がさんばかりの勢いで前を行く爆豪も、追隨を許さないとわんぱかりに魔獣達を蹴散らしていく。先をひた走る二人に対し、他のクラスメイト達は焦燥感に駆られていた。

炎と氷という強い個性を持つ轟焦凍すらも、二人に食らい付いていくので精一杯。二人は生い茂る森林を縦横無尽に駆け回り、地形を利用しながら的確に魔獣を蹂躪していく。

スタートは同じ筈だったのに、どうして此処まで差を付けられてしまったのか。遠くなつていく級友に歯を食い縛る。

（———そんなの、そんなことは）

「飯田？」

（絶対に、嫌だ!!）

瞬間、飯田天哉のエンジンに火が灯る。置いていかれるのは嫌だと、自らヒーローになる為に誓った男は、初めてヒーロー以外の目的の為に個性を使おうとしていた。

『なあ飯田、お前の個性は強い。けど、その使い方は少し勿体ねえぞ。折角分かりやすく活躍できる個性を持っているんだ。もっと日常的に使うよう意識してみろよ』

『い、いえ、ヒーローの資格が無い者による個性の使用は禁じられていますので!』

『……なあ飯田、お前にとってヒーローとは何だ？ 法律に殉ずる者？ 秩序を重んじて守る者？ だとするならば、お前にはヒーローじゃなく警察への転向を勧めるぞ?』

思い返すのはあの日、たった一日限りのNo. 1ヒーローによる立ち合い。その圧倒的強さに惹かれ、同時に速すぎる彼に絶望した。

『で、ですが! ルールを守らなければ、それはヴィランと同じなのでは!』

『何か勘違いをしているようだから言っておくぞ。ヒーローってのは社会の秩序を守る存在ではない。自分の目的の為に守るべきモノを守り抜いた人達が、結果的にヒーローと呼ばれる存在になっただけだ』

『ケロ、でもゴジータ。ルールを遵守しないものはやがて社会から淘汰されるわ』

『勿論、人に仇なす輩はヴィランと呼ばれても仕方がないだろう。けどな蛙吹、ただ社会

の言いなりになるのはヒーローとは言わん。それはただの歯車だ』

『——』

『飯田、蛙吹、そして他の連中にも言っておく。もつと利己エゴに走れ。そのエゴはいずれお前達の芯になる。芯のあるヒーローは間違ひなく強くなるぞ』

『な、なあゴジター！ それなら俺の女の子にモテてえって思いも、強くなれる理由になれるのかな?!』

『否定はしねえよ』

それは、No. 1ヒーローが口にするにはあまりにも不健全で、不誠実な物言いだった。けれど……。

『滾れ、焦れる。時間は待つてはくれねえぞ。大事なモン、人を守る様になりたいのなら、社会の奴隷に成り下がるな。お前達はヒーロー、社会とそこに生きる者達の希望になる存在だ……足踏みしている場合じゃねえぞ』

No. 1ヒーローは笑って吐き捨てる。自らのエゴに従い、自身の力を解放させろ。それこそが、強くなれる最も近い道筋だと。

もし、それが事実であるというのなら……！

(それで君に、君達に追い付けるのなら、僕は……！)

ヒーローとは誠実で社会の模範となるべき存在。幼い頃から抱いていたヒーローに

対する印象は、ゴジータによって粉々に打ち砕かれた。

けれど、そんなゴジータの言葉を否定したくても飯田には出来なかつた。ヒーローとは時に利己的に動く事も必要、その言葉の意味を本当の意味で理解する事はまだ出来ないが……。

（俺は、初めて自分の欲求に従う!!）

それでも、今の自分の望みは理解できている。目の前の友人達に追い付きたい。そんな子供の駄々にも等しい願いは、少年のエンジンに強い炎を宿した。

「レシプロ——バースト!!」

加速。景色を置き去りにし、視界が速度に狭められる。目の前には巨木、背後では呼び止めるクラスメイト達の叫び声が聞こえてくる。

しかし……。

（加速しろ、俺エツ!）

更に加速。直後に跳躍。巨木をポールにつかまる要領で掴み、襲い来るGを次の加速でいなしていく。

加速、加速、更に加速。遠心力を付けての跳躍は飯田を空の飛翔へと誘う。狙うのは二人の前方にいる二体の怪物——否、既に障害物でしかないそれに。

「どつっっっけえっ!!」

邪魔だと言わんばかりに、飯田の蹴りが貫き徹す。貫かれ、次いで起きた衝撃波に吹き飛ばす土塊の魔獣達。一足飛びに自分達を飛び越えられた二人は、今起きた出来事に然となる。

そんな、あ然となっている二人が何処と無く面白くて……。

「——お先に」

眼鏡を掛け直した飯田は、不敵に笑う。真面目な委員長にしてはらしくない挑発。しかし、二人と後続の級友達には効果覿面だったようである……。

「——上等」

魔獣の森は更なる激戦区と化していくのだった。

「——おおう、今年の1年は活きがいいねえ」

「ほほう、出水少年のご両親はウォーターホースだったのか」

「う、うん。オールマイトはお父さんとお母さんの事を知ってるの？」

「勿論、二人とは何度か現場で鉢合わせたからね！ 二人の息のあったコンビネーション」

ンにはとても助けられたよ！」

「そ、そうなんだ」

「でも、君を寂しくさせるのはちよーつと戴けないな。ヒーローである前に一人の親なのだから、息子に寂しい思いをさせちゃあいかんだろうに」

「うん。……でも、いいんだ！二人が頑張るのはそれだけ助けを求める人がいるって事だし、両親が頑張ればそれだけ救われる人達がいるって事だから！寂しいのは本当だけど、同じくらい自慢に思えるんだ！」

「クーツー！泣かせてくれるじゃないか少年！そんな君には私からのせめてものプレゼント、URの私のカード（ゴジータ衣装）をプレゼントしよう！サイン付きだぞー！」

「いりません」

「……………え？」

「オールマイトはトップヒーロー、多くの人達の憧れなんだからあまり自分を安売りしないほうが良いですよ」

「……………あ、うん」

「でも、その気持ちは素直に嬉しいです。ありがとうございます」

「あ、はい。こちらこそスママセンでした」

先に宿泊施設へやって来ていたオールマイトは、遥か年下の子供に窘められるのだっ

た。

記録40

魔獣の森にて無数の土塊の怪物達を撃退しながら突き進んで数時間、日は傾いてそろそろ夕暮れに差し掛かる時間帯。

緑谷と爆豪を筆頭に1年A組の面々はボロボロで肩で息をしながら森からの脱出を果たしていた。

委員長である飯田も轟も酷く消耗しているのに対し、先の二人は汗と泥で汚れていながらも他の生徒達より幾分か余裕を持っていた。

「はあ……はあ……や、やつと着いたあ……」

「もう無理。オイラ、もう一步も歩けねえ。モギモギも品切れだあ」

疲労困憊、満身創痍の面々。それでも例年よりだいぶ早い今年の1年に、ピクシーボブは素直に感心していた。

「へー、思っていたよりやるじゃん！ その二人といい、今年の子は本当に粒揃いだー！」

「夕方まであと30分。うん、このタイムは本当に誇つていいと思うよ」

「でも、アタシ達ならもつと早くクリア出来るのニヤー!」

褒めているようでマウントを取るプッシーキャッツ、大人気ないラグドールの言葉にも、反応出来るものはいない。疲労のあまりマトモに反論の言葉すら出せない生徒達に、流石のピクシーボブもやり過ぎたと反省した。

「……チツ、やっぱあの局面で多少のリスクを負つても強行突破するべきだったか」

「でもそれだと森に火が付いちやうし、皆も巻き込むから、僕としては皆と息を合わせる事を優先させるべきだと思うよ」

「クラス全体の連携も加味してるならそっちの方が正解か、クソが」

未だに肩で息をしている他の面々に対して、既に爆豪と緑谷は今回の森の中での行軍に対して反省会をしている。……何なのこの二人、明らかにこの二人だけ違う立ち位置にいたりしない?」

「……まあ、でもそんなに気を落とす事はないわよ。今の時点でもだいぶ動いている方だしね」

「そうそう……あのトンチキ野郎なんてスタートから三分も掛からずにゴールしてたけどね。何だよ、カップラーメンが出来るより早く片付いたとか、ふざけすぎだろ」

自分の至らなさを嘆く1年A組、そんな彼等をフォローするべく過去の話を持ち出す

ピクシーボブだが、それは彼女達にとつての地雷だったらしい。項垂れ、顔に影を落としながら当時の事を思い出すピクシーボブに、緑谷は藪蛇だと思いながらも好奇心には勝てなかった。

「そ、その話って……もしかしてゴジータの？」

「そうよ、あの超絶ドチート野郎のゴジータ。当時のアイツも今日の君達みたいにクラスごとあの森へと落としたのよ」

「ピクシーボブ、ちゃんと話は正確に伝えなよ」

「落としたんじゃないくて、落ちてくれたんだよねー」

マンダレイの横槍に言葉を詰まらせるが、構わず話を続ける。

「あの男、森にいた魔獣を全て叩きのめすだけに留まらず、クラスメイト全員を背負って森を縦断しやがった」

「しかも私達を待つていた間、呑気に筋トレをしている始末」

「施設に戻ってきた私達を見てゴジータの奴何て言ったと思う？ 『こつちだ。ウスノ口』だって！ しかも鼻で笑いながらよ、酷くない!？」

ピクシーボブは当時の事を思い出して憤り、マンダレイは苦笑する。ラグドールに至っては真似をしながら当時のゴジータのデタラメさを誇張抜きで語っている為、生徒達の衝撃は大きかった。

「す、スッゲーなゴジータ。既にその頃から規格外なのかよ」

「しかも、話はこれだけで終わらないのニャ。何とゴジータに背負わされた当時のクラスメイト達は、流石にこれはないんじゃないかと自分達から自主的にもう一度やり直すことを提案したのよ」

「流石に素人を森に二度も戻すのは気が引けるし、その日は結局軽めの筋トレだけで終わったんだけどね」

あははと、ゴジータのお陰でメチャクチャになった日程に遠い目をする三人。学生の頃から逸話を残しまくっているゴジータに、一部の生徒は目を輝かせているが、大多数の生徒はドン引いていた。

生徒達に試練を課すことで更なる強いヒーローへ導く雄英。そんな雄英を弄ぶが如くPlus Ultraしてくるゴジータ。

その光景をちよつぱり見てみたかっと思ふ爆豪だった。

「オホン。それじゃあ皆、先ずはお疲れ様。余った時間を小粋な昔話で潰せた事で、そろそろ夕飯の時間となりました」

「今日だけのスペシャルメニュー！ 明日からは自分で作るんだよ！」

「猫の手助けは今日までニャー！」

疲れて動けなくなった面々も、そろそろ動けるようになってきた。そして、言われて

初めて気付いた自身の空腹状態、余程疲弊していたのだろう。途端に鳴る腹の音に、一同は案内されるがまま食堂へと向かった。

そこで……………。

「わーたーしーがー、皆の夕御飯を作りながら、いたッ!!」

ピチピチのエプロンを着て、虎と一緒に晩御飯を作るオールマイトにA組全員がスツ転んだ。



「いやあ、まさかオールマイトがいるとはなあ」

「サプライズにしたって衝撃的過ぎるでしょ。何だよ、エプロンって」

「オイラ、暫くは裸エプロンネタは控えるわ」

用意された食事も食べ終わり、今日一日の疲れを癒しに露天風呂へやって来た男子生徒達。予想以上に大きい浴場にテンションを上げつつ、心地よい暖かさに浸っていく内に話題はクラスの話に移る。

「しっかし、緑谷強くなつたよな」。入学初日と比べるとまるで別人じゃん！」

「個性使つても体を壊さなくなつたし、マジでこの数カ月で変わったよなあ」

「う、うん。その節は心配掛けてすみませんでした」

入学式からヴィラン襲撃まで、個性を使うには体の一部を壊さなければいけなかった緑谷。それがゴジータと関わった事で改善され、今では50%の力も一瞬だけであれば反動なく使いこなすことが出来ている。

そんな緑谷がクラスの中で一番強くなっている事に対し、切島や砂藤といった肉体派の生徒達は素直に緑谷の成長を喜んだ。

「でも、やっぱり調整が難しくてさ。少しでも力んじやうと筋を痛めちやうんだ。今回の合宿で、その辺りを改善するのが今の僕の目標かな」

「うむ、そのたゆまぬ向上心、感服するよ緑谷君。俺も負けてられないな」

「——諸刃の剣の技、響きはいいのが、な」

「成長といえば爆豪、お前もヤベエ位成長してんじゃん！ 例の光る爆破、だいぶ使いこ

なせるようになってるよな！」

「ああ？」

次の話題が自分に振られ、折角心地よかった気分が害された事を微塵も隠さない爆豪。そんな不機嫌全開な爆豪に怯む素振りを全く見せず、上鳴は続ける。

「やっぱアレか、ゴジータに鍛えられたからか!？」

爆豪も、緑谷に負けず劣らず短期間で劇的な成長を遂げている。爆発の凝縮、そこからの威力の向上。威力が増せば増す程制御の難しい自身の個性を、爆豪は見事にモノにしている。

加えて、先日の期末試験の際に見せた新たに発現した光る爆破。その威力はこれ迄の比ではなく、光る爆破を利用しての推進力も桁違いとなっている。

緑谷とオールマイト、二人と並んで試験会場を更地にした光景は、今もクラスメイト達の記憶に鮮やかに色濃く残っている。

興奮気味に捲し立てる上鳴、いい加減鬱陶しく思う爆豪だが。

「なあなあ爆豪、今のお前なら緑谷と一緒にならゴジータ相手でもいいトコいくんじゃね？」

「ちよ、上鳴君!？」

突然巻き込まれる緑谷。こういう軽い所のある上鳴は、クラスの空気を明るくするの

に必要とされているが、時には地雷を踏み抜く場合もある。

自分の名前を出せば大抵は声を荒げる爆豪だが……………。

「バカか teme。あの No. 1 がプロにもなつてねえガキ相手に負けるかよ。そのクソデクがいた所で頭数にもなりやしねえ、揃って床のシミになるのがオチだ」

「で、でもオールマイトにはそこそこ巧く立ち回つてたじゃん」

「つくづくノータリンだな teme。ガキの実力に合わせて加減しているトップヒーローなんて比較になるか。そんな事も分からねえから未だに一発屋で終わってるんだろうが」

「ぐ、ぐふう……………そ、そこまで言うかよ爆豪お」

同級生を相手に一切容赦せずに言葉の暴力で叩きのめす爆豪に、上鳴は涙ちよちよ切れになっていた。しかし、誰も彼を慰めようと思わない。今のは無遠慮に踏み込んだ上鳴にこそ責がある。

それでもドンマイと無言の肩ポンしてくる切島は、やっぱり良い奴だった。

「俺ア、この合宿を経てもつと強くなる。火力の底上げと制御、それらを同時進行で極めて更に上へと進む。悪いが、雑魚の歩みに合わせるつもりはねえ」

そう口元を不敵に歪ませる爆豪。嘲笑う様な挑発的な笑み、それを向けられた男子生徒達は自分達の今の立ち位置を突き付けられている気がして表情を強張らせる。

「俺が目指す頂はもつとずつと遙か先だ。其処に挑むには用意された試練を乗り越えるだけじゃ足りねえ。だから俺は……………」

強くなる。そう静かに、自身に誓う様に呟く爆豪は自身の手を見る。ゴジータの手はもつと大きく強かった。あんな男になる為に一切の妥協はしないと決意を固める。

そんな爆豪を中心に場の空気が張り詰め始めた時。

「皆と裸の付き合いをしたいが為に、私が来たア！」

腰に布を巻いたオールマイトが満面の笑みを携えて入ってきた。あ然となる生徒達、霧散する場の空気、それを感じ取ったオールマイトは気まずそうに…………。

「えっと、その…………お邪魔でした？」

モジモジとしているN.O. 2ヒーロー、そんな彼に失礼だと承知しながらも。

((エンジョイしてるなあオールマイト))

緑谷を除いた男子生徒一同、そう思わずにはいられなかった。



「く、クソおつ！　ここまでのなのかよお！」

大阪市。古くから商いを生業としている商人達の街。義理人情の街として有名なこの街にヴィランの悲鳴が響き渡る。

ヴィランと呼ぶには小物で、いつそチンピラと称されても違和感のない木っ端者。涙混じりに街中を走る男は目の前のヒーローを見上げる。

「やれやれ、やくざ者というから某堂島の龍みたいな奴を想像していたってのに、てんで期待外れだったな」

「ふざけんなボケエ！　何でテメエにガツカリされなきゃならねえんだよ!!」

泣き喚き、当たり散らす男。凄む訳でもなく、ただ目の前の現実を受け入れていない駄々に、ゴジータは深い溜め息を吐き出しながら肩を竦めた。

「おおきになゴジータ。チンピラヴィランの拿捕、ご苦労さんや」

「空の帕特ロールしていたら偶々目についたから対応しただけさ。近くにアンタがいるのを知ってたら、手出しはしなかったよ——ファットガム」

未だに泣きわめくチンピラを無視し、背後の人垣から現れる大柄のヒーローを見る。丸みを帯びて黒いマスクを着用しているのは大阪を中心に活動しているB M Iヒーロー「ファットガム」だ。

その巨体を揺らしながら歩み寄る彼に苦笑いを浮かべ、自身の余計な手出しを謝罪する。そんなゴジータにファットガムは笑みを浮かべて応えた。

「なに言う тоннねん。お前さんが来てくれたから被害も出さずに未然に防げたんや。お前さんが最初にぶちのめしたヤクザモン達の付けていた奴、あれはどうみても昨今話題になっている違法サポートアイテムやったで」

「やっぱりそうか。………因みに、確保の方は？」

目を伏せて、悔しそうに首を横に振るファットガム。どうやら今回も詳しく調べようと近付いた瞬間に自壊したらしい。徹底的な漏洩防止の手段、此方に一切の情報を与えるつもりはないという、裏に潜む黒幕の執念深さを垣間見た気がした。

「仕方ねえ。一応残った残骸だけでもかき集めて警察側に提出しておこう。この案件は警察も追っているモノだから、きつと力を貸してくれる筈だ」

「おおきに。気を遣わせてしまつて悪かつたな」

「気にすんなよ。持ちつ持たれつ、気楽にいこうぜ」

ナハハハと快活に笑うファットガムと不敵に笑うゴジータ。座り込んで大人しく

なっているチンピラなど最早眼中になかった。

どうせこの程度の輩なら大した情報など持ち合わせてはいないだろう。そんな、慢心とも呼べるゴジータの態度に……チンピラは言葉に出来ない憤りを覚えた。

そして。

「こんのお、調子に乗んなやクソヒーローが！ おどれらまとめて地獄行きじゃあ!!」

「コイツ、まだ得物を隠し持ってたんかい！」

チンピラの個性は【隠し扉】。自身の体の一部を小さな箱へと自在に変え、そこへモノを収納し隠し持つ。木っ端ヤクザの中でも更に半端な個性しか持たない自分の唯一の有用性、隠し持っていた銃を取り出し、狙いを付ける。

狙いの対象は、勿論ゴジータだ。

「これでテメエもおしまいや！ さよならやあ、ヒーロー!!」

鼻水と涙でグチャグチャになりながら狂ったように啜う。引き絞られる引き金、撃鉄が落ち、銃身から飛び出してくるのは小さな赤い弾丸。

弾丸というより画鋏に近いソレ。まっすぐゴジータの額へ目掛けて飛来するソレに、チンピラは緩やかな世界の中でより笑みを歪める。

ちっぽけな雑魚のチンピラでしかなかった自分が、No. 1ヒーローを討ち取れる。自分の名前は間違いなく歴史に刻まれることになる。

ゆつくりと流れる時間の中で男がそう確信した瞬間……。

「あ？ 何だこれ？ ——画鋏？」

「……………ふえ？」

なんて事なく、赤い破滅の一撃は指先で摘ままれ。

「まあいいや。取り敢えず返しとくぞ、ほい」

「ブフツ」

親指で弾いて返されると、あかいはめつのいちげきはまっすぐチンピラへと向かい、吸い込まれるように額へと押し込まれた。

「いくら腹に据えかねていると言っても、流石に弾一発で俺を倒そうとするのは……………逆に舐めすぎだろ」

それもそうだ。薄れ行く自我の中でNo. 1ヒーローの台詞を反芻しながら、チンピラヴィランの意識は深い泥の底へ落ちていった。

記録4 1

「正直に言おう。俺達1年B組は、A組と違って一歩も二歩も遅れている」

森の中、A組とは別ルートで宿泊施設に訪れたB組は担任であるブラドキングの言葉に悔しさを募らせる。入学式から今日に至るまでカリキュラム通りの生活を邁進していた彼等は、学校側から見ても想定通りの成長を遂げている。

けれど、逆を言ってしまうえばそれだけで、目を見張る程の飛躍は誰一人成し遂げていない事を意味している。予想通り、想定内。【Plus^更 Ultra^向】を校訓として掲げ、目標としているヒーロー科の彼等にとって、それは停滞にも等しい事でもあった。No. 1ヒーローから直接指導を受けた生徒達は歯痒い思いを抱いている様で、特に宍田や拳藤、庄田といった一部の生徒達は未だに殻を破れていない自分達の事を不甲斐なく思っていた。

そして、そんな生徒達の気持ちを代弁するかの如く、ブラドキングは続ける。

「だが、二学期こそは我々B組が台頭する。俺がそうさせる。今回の合宿で己の個性を超克し、お前達もPlus Ultraを果たしてみせろ!!」

「ぶ、ブラド先生!!」

外見同様、熱い志を持つ担任の言葉に同じく暑苦しい位にテンションの高い鉄哲が男泣き。その暑苦しさに若干腰が引けるも、総じて同じ気持ちであるB組の面々は望むところだと気合いを入れる。

「でもブラキン先生、個性を超克しろと言いますが、具体的にはどうしたら?」

「個性とは人体における筋肉と同じ、使えば使う程に磨耗し、断裂し、再生………そして、その力を増していく」

即ち、個性を鍛えると言う事は個性を痛め付けると言うこと。酷使し続け、磨り減つても使い倒していく事。

「そして此処が、その為の場である!!」

森を抜けたその先、光と空間が広がった先に待っていたのは………地獄だった。

個性を拡大、拡張させるために個性を使用し、極限まで酷使し続けるA組の生徒達。委員長の飯田はひたすら個性を使い、時々急加速を併用しながら機動力を高め。

瀬呂は肘からひたすらセロテープを放出し続け、テープの飛距離と長さを拡張。麗日と上嶋は個性を使い続け許容量の増大。常闇は黒影の力の増強と制御を成し遂げる為

の暗闇での特訓。

他にもそれぞれの個性に見合った過酷なトレーニングを課せられる一方で。

「そうら切島少年、緑谷少年、まだまだ行くぞウ！ S M A S H!!」

「今度こそ止めて……………ブワアアツ!」

「切島君！ プアーツ!?!」

鉄哲と個性の似ている切島と緑谷が、オールマイトの放つ拳圧によって吹き飛ばされていた。

「ちよつとオールマイトさん、他にも特訓している生徒達がいるんだから、もう少し加減してやってください」

「やや、済まない。期末試験のノリでやったらつい……………」

「今回は貴方ではなく緑谷に負荷の装置を付けてるんですから、くれぐれも加減を誤らない様に、ね」

「あ、はい。ごめんなさい……………」

ジト目で睨み、心なしか少し髪をざわつかせる相澤にオールマイトは萎縮しながら謝罪した。

「く、くう……………流石はオールマイト。本気で止めようとしたのに、まるで歯が立たねえ。済まねえ緑谷、大丈夫か？」

「う、うん。大丈夫だよ切島君、気にしないで」

背中を下敷きになっている緑谷に謝りながら手を伸ばすのは、全身を硬化させる個性を持つ切島鋭児郎。自らの個性を伸ばす為、ゴジータの薰陶を参考に倒れず、何物も通さない盾としてのヒーローを目指す事にした彼は、最高のヒーローであるオールマイトから緑谷を守るという特訓を行っていた。

対して緑谷は、そんなオールマイトの攻撃を受ける切島を支える為の柱として鍛練に励んでいるが、現在緑谷の両手両足には、期末試験の時に教師陣達が付けていたハンドレ用の負荷装備が取り付けられている。

お陰で今まで以上に個性の出力調整に時間が掛かるし、維持も難しい。加えて切島を支えるために諸々の筋肉を酷使している為、緑谷も中々の地獄を味わっていた。

他にも、爆豪は汗腺を広げて威力向上する為の熱湯地獄。砂藤と八百万はひたすら甘いものを食いつけて個性を発動させまくるといふ、色んな意味で酷い仕打ちを受けていた。

ありとあらゆる意味で壮絶で、地獄と呼ぶに相応しい光景に1年B組の全員が啞然となる一方で。プッシーキャッツが各々に試験を課していく。

個性をイジメ抜き、更なる向上を目指す。今回の合宿はその為の土台作り。意地の悪い笑みを浮かべるプロヒーロー達を前に臆し、怯みながらもB組もまた歩み出る。

「……やるよ、皆。此処で追い付かなきゃ、私達は前に進めない」

「当然だぜ、拳藤！」

「おっしやあつ！ やアつてやるぜ!!」

気合いを入れ、強い決意と意気込みと共に地獄へと踏み入れる。更なる強さを得る為に、更なる向こうへ辿り着くために。

ただ、その一方で……。

「……………どうしよう、オールマイトがいるなんて、きき、聞いていないよ」

既に、暗闇に囚われてしまっている少年は眩しすぎる光景を直視できず、ただただ立ち尽くしていた。



「なんやとっ!？」

「個性が、失われた？」

大阪市にある大手の警察病院。先の暴れるヤクザ者のヴィラン達を拿捕、拘束したN O・Iヒーローであるゴジータとはある奇妙なモノと遭遇した。赤い面鉢の様な変わった銃弾、その形状から薬物が込められた特殊な銃弾だと察したファットガムの提案により、銃弾を受けたチンピラヴィランを拘束した状態で病院へ搬送。

病院の待合室に通されたファットガムとゴジータは解析を担当していた医者から話を聞かされる。

検査の結果、チンピラヴィランの持つ元々の個性因子とも呼べる部分が再生不能レベルにまでズタボロとなっていた事が判明した。

「はい。恐らくはゴジータが返したとされる特殊な銃弾、そこに込められていた何らかの薬物が針を通して注入された結果かと思われます」

「マジか。え？　じゃあもしかして俺ってば結構ヤバイことやらかしちゃった？」

あの特殊な銃弾には個性を破壊するヤバイ薬物が込められており、そのヤバイ証拠品もゴジータ本人がダメにしてしまった。

既にあの特殊銃弾の中身は空となっており、銃弾自体もひび割れてしまっている。折

角の証拠品とも言える物品をオシヤカにしてしまった事実には、流石のゴジータも青ざめた。

「いや、あれは仕方あらへんって。ゴジータかてわざとやった訳ではないやろうし、弾き返したのだって殆ど条件反射みたいなもんやろ」

「折角の証拠品を、条件反射で台無しにされては敵わんがな」

ファットガムの精一杯のフォローを第三者の鋭い言葉が突き崩す。誰やねんと振り返ると、白いスーツを身に纏うサラリーマン風のヒーローが待合室に入室してきた。

「全く、意図した事ではないとは言え、今回は些か笑えないぞゴジータ」

「ナイトアイ？ アンタがここに來てゐるって事は……もしかしてこれ、例のヤクザ組織の？」

「そうだ。とは言え、未だに調査中で確信にまでは至っていないがな」

眼鏡をかけ直し、ゴジータを見る。其処に若干の呆れを滲ませながら、ナイトアイは続ける。

「場所を移そう。ここは少々人目に付きやすい。折角だからファットガム、貴方の事務所をお借りしたいのだが……」

「おう、構わへんで。丁度インターンの子が来る頃やろうし、ついでに紹介させたる」

なしくずし的に巻き込んでしまったが、そんな事など一切気にした様子を見せず、即

答で了承するファットガム。こう言う懐の大きい所も彼の人気の秘訣なのだろう。

しかし……。

(……最近のヴィラン出現規模の頻度といい、出自不明のサポートアイテムといい、何だかキナ臭い出来事が多い気がするな)

度重なるヴィランの登場とそれに拍車をかける正体不明のサポートアイテム、そこへ個性を破壊する物騒な薬物の登場。

明らかに裏社会で何かが起きている。その事を肌で感じながら、ゴジータは二人の後を追った。



「良く来てくれたね、同志諸君。心から歓迎させてもらおうよ」

薄暗い闇の底。光の届かない裏の世界で笑うのは一つの悪意。個性黎明期より存在し続けるその男は一つの目的の為に集まった彼等を敢えて同志と呼んだ。

モニターの向こう側に佇む幾つもの影、それは男と同様に闇に潜み、日陰の中でしか生きられないはみ出しモノ。人の言葉になど従ったりはしない、傲慢で力に溺れる者達……即ち、真正正銘のヴィラン。

『それで？ 今度は一体何の用件なのかな？ 生憎と此方も公安からの追及を躲すのに忙しい。出来れば手短に頼みたい』

「ああ、君の所の商品は優秀だからね。僕もつい頼ってしまふ。けれど、今回で一つの区切りになる。どうかここは目を瞑ってくれないか？」

笑いながらの言葉だけの謝罪に、影は鼻で笑う。が、それでもこの関係性を崩さないのは、彼等も分かっているからだ。

今、世界は嘗てない程に希望に満ち溢れている。それもこれも、オールマイトを超える新たなヒーロー、ゴジータの所為だ。

奴が存在している限り、自分達に安息はない。裏で糸を広げ、いずれ来る革命の日を迎えるには彼のヒーローの存在はあまりにも邪魔が過ぎる。

そんなゴジータを何とかするには自分達だけでは到底無理だ。どれ程の数を募らせても、どれだけの精鋭を揃えても、奴には決して敵わない。

だからこそその同盟、とある解放の戦士の血を引く男も、それを理解しているから目の前の【魔王】の手を掴む事にしたのだ。

「今回、僕の知り合いが面白いものを見つけてね、君達にはそれを手に入れるための手伝いをしてもらいたいんだ」

『……………生憎と、内からは兵隊は出せないぞ。例の弾薬もまだデータが不十分だしな』
「なら、そのデータを得る為の試作品を幾つか此方に回してくれるだけでいい。その内の一つをドクターに回そう、彼ならばきつと上手く活用してくれるだろう」

』
男の言葉にその影も黙り込む。拾ってくれた恩人への恩返しのために、自ら狂った方角へ突き進むその影は、魔王たる男に視線を送った後、『良いだろう』と一言返事を返す。
『何人か兵隊を見繕ってやる。但し、其方で出来上がったブツは最優先で此方に回してもらおうぞ』

「勿論だとも。此方の我が儘を聞いてもらうのだから、それぐらいは融通するともさ」
そう言いながら男が手にしたりモコンを操作すると、壁に一つの映像が浮かび上がる。映し出されるのはとある日常風景、学校から自宅へ帰る学生達の姿。

「今回、僕達が手に入れるのは二人の学生。彼等の個性は中々に有用性が高く、是非とも欲しいと言うドクターからのリクエストなんだ」

『コイツ等、確か秀治院つて金持ちのガキ共が通うとこの学生じゃないか。こんなガキに用があるつてののか？』

「この二人には得難い個性がある。上手く利用すれば、僕の超回復の個性の代用品になれるかもしれないんだ。僕の方から何人か出すから、どうか手を貸してくれないか？」

画面に映し出される仲睦まじい兄妹、喧嘩しながらも肩を並べ、下校していく二人にはとてもこの魔王が狙うだけの価値があるとは思えない。

明らかに何かを隠している。それを追及したくとも、追及出来る程の材料が自分達には存在しない。

ならば、今は分かっているながらも従うしかない。そんな、忌々しく男を睨む複数の視線に……………。

「頼むよ同志のみんな、僕に力を貸しておくれ」

男は、嗤いながら断れない要求を突き付ける。

「しかし、本当に面白い因縁だ。折角あの時君は自分の命と引き換えに子供達を逃がしたと言うのに、結局この結末は変わらないんだね」

「でも、それも仕方がないことだ。だって全ては僕の為に在るのだから……！」

記録4 2

「さあ、いよいよやって来たぜ肝試し！ 生徒達のみんな、準備は出来てるかアツ！」

「オールマイトテンションたけー」

「て言うか、何でオールマイトも参加側？」

宿泊合宿も大詰め、辛い特訓の日々を乗り越え、漸くエンタメの時間へと辿り着いた生徒達。身体の節々から痛みを感じながらも、それでも一夜限りのイベントはそんな疲れを吹き飛ばす程に魅力で満ちていた。

特に、こう言った学校行事とは縁の無かったオールマイトは、学生に混じって体験できる事に大人気なくはしゃいでいた。今回の催しは肝試し、時期的にもピッタリなイベントに既に平和の象徴は浮かれていた。

「おっと、肝試しというイベントだからって、夜の森には危険が一杯だ。道に逸れたりしないように、くれぐれも気を付けるんだよ」

「はーい」

それでも教師としての注意喚起は忘れない。プッシーキャッツが用意した肝試しする為に用意された区画とは言え、オールマイトが言うように夜の森には予想外の危険が付きまとう。

ヒーローを志す生徒達へのサプライズ的な催しであると同時に、暗闇の中での心の平静さを保てるかを試すちよつとした試験でもある。尤も、あくまでイベントの催しであつてこの件が成績の評価に繋がる事はないが……。

「でも……うん、みんな、本当に強くなつたね」

「オールマイト?」

「個性を使えば体を壊してしまう緑谷少年、その個性故に自尊心が高すぎた爆豪少年。変わった二人を中心に、A組……いや、ヒーロー科は今後ドンドン強くなっていくんだろうな」

それをもたらしたのは自分でない事に一抹の寂しさを覚えるが、他ならぬオールマイト自身がこの場にいる誰よりも救われている。

今まで自分を蝕んでいた傷はもうすっかり癒え、自身の後継となる少年も、今ではもう見違える程に逞しく成長している。

それもこれも、あの生意気且つ最強の相棒がいたから、彼という次世代のヒーローが現れてくれたからだ。

「……………この分だと、私のカーテンコールも近いかな」

何処までも穏やかで、優しい笑みを浮かべる平和の象徴。今日までの合宿で目的を持つ少年少女達の成長ぶりに、改めてオールマイトは世代交代を実感した。

オールマイトの引退。それは決して避けられない話であり、そう遠くない時に訪れる現実。微笑みを浮かべながら、その時が来ても受け入れられるオールマイトの心境を察した緑谷は、その両目に涙を滲ませ、それでも笑みを浮かべた。

「大丈夫です、オールマイト」

「ん？」

「僕達が、います」

拳を握り締め、そう言い切る緑谷にオールマイトは目が点になる。それはこれ迄に幾度となく己が使い潰してきた言葉、助けを求める誰かを安心させる言葉であり、ヴィラン達に対する抑止力であり――。

自分自身に言い含めてきた言葉。自分がいる、自分がやらねば誰がやる。平和の柱となることを決意した自分への呪いまじなの言葉。

それが、目の前の弟子の言葉で意味がガラツと変わった気がした。平和の象徴、己だけを柱として人々の安堵と平和に費やしてきた人生。

その成果が今、初めて報われた気がした。

報われる事を願った訳ではない、見返りを求めた訳ではない。けれど、今の緑谷の言葉は何よりもオールマイトの胸に強く響いたのも事実で。

「……この緑谷少年！ 何だか最近調子にノリ過ぎているんじゃないかい!? ええ!?

次のNo. 1は僕だなんてカッコいい事言っちゃってえ!」

「え、ええ!?! いやその、別に僕はそんなつもりで言った訳じゃあ!?!」

「クソデクテメゴラアツ! No. 1ヒーローになるんは俺だと言ってるんだろうがあ!!

俺の道を阻むってんなら、今ここでぶち殺してやんよおっ!!」

「ひいひい! 飛び火したアツ!?!」

だから、オールマイトはその腕に緑谷の頭をロックする形で抑え込み、照れ隠しの揶揄を溢すしかなかった。

うつすらと嬉し泣きの雫を溢す自分の顔を、見られないために。

自分を越えた新たなNo. 1ヒーロー、そして次代を担う子供達。平和の垣根は新たな段階へ進もうとしている。ならば、自分はその礎になろう。

改めて決意を固めるオールマイト。——しかし。

悪意というのは、何処までも日常の影に忍び寄るモノで。

「我等敵連合、開闢行動隊!!」

「あらやだ。可愛い男の子がイッパイじゃない!」

「ん?」

「あれ?」

その光景は、いつそシミュールですらあった。



「『No. 1ヒーローゴジータ、今日もヴィランを瞬殺』か、No. 1になってから活躍してるなあ」

秀治院学園。個性黎明期より昔、嘗て貴族や士族を教育する機関として創立され、200年以上の歴史を持つ由緒正しい名門校。貴族制が廃止されて久しい現代でもなお、富豪名家に生まれ、将来国を背負うであろう人材が多く就学している。

日本のヒーローを育てる代表的な教育機関が土傑と雄英であるならば、秀治院学園は国の代表を育てる教育機関。

事実、この秀治院学園は各界隈の名だたるトップ、そのご子息が通う学校であり、そんな彼等を教え育てる教育のレベルも雄英や土傑より高い。

そんな、特権階級の上流階級の間人達が跋扈する学園にて、実力で生徒会長にまで成り上がってみせたのが、外部入学枠の城鐘御幸である。

「あー、会長つてばまた携帯でゴジータ見てるー!」

「ダメですよ会長、仕事中にそんな事では」

「ああいやすまん、通知の音がなつてしまつてついな」

「もー、次やつたら没収ですからね!」

「伊衣野さん、そう目くじら立てなくても良いじゃない。今日の仕事は全て終わらせているのですから」

「むむー」

頬を膨らませる後輩の役員に苦笑いが浮かぶ。これももう見慣れた光景で、御幸にとつて当たり前の景色でもあった。

「会長つて、何気にゴジータのファンなんですか? この間もゴジータに関するニュース見てましたし」

「あー、まあゴジータって日本の最強のヒーローだからな。ヒーローの数や質はそのままその国の国防に繋がる時があるからな、流石に気にはなる」

城鐘御幸には、二つの嘘がある。

一つは自分と妹の恵が、親無しの孤児であり施設育ちの人間であると言う事。唯でさえ外部入学の人間は異物として扱われるケースが多いのに、親無しの人間だと知られてしまえば、生徒や保護者問わずに学園に在籍していることに不満を覚える輩が出てくるだろう。

最悪、今の生徒会長というポストから引きずり下ろされ、学園から追放されるかもしれない。そうならないように事前に知られないように手を回してくれた校長には、感謝に絶えない。

そして、もう一つがN.O. 1ヒーローであるゴジータと義理の兄弟であると言う事。後藤甚田ことゴジータは今ではすっかり日本を代表するヒーローの一人で、その戦力は世界的に見てもトップクラスに位置付けられている。

そんな義兄と自分が繋がっていると知られたら、各界隈からどんな接触があるかわからないし、怨みを買っているヴィランから逆恨みの対象にされるかもしれない。

以上の点から、御幸と恵は頑なにこの二つの嘘を守らなければならないのだ。

「私、この間オールマイトとゴジータと一緒にラーメン食べましたよ！ ほら、これがそ

の証拠写真です！」

「それももう何回も見ましたよ。いい加減飽きましたって」

携帯に映るドヤ顔してラーメンを啜る三人、N.O. 1とN.O. 2に挟まれながら一緒にご飯とか、ファンが聞いたら血涙間違いなしの話。

相変わらず持つてる生徒会書記に良く分からない感心を抱いていると、ふと一人の女子生徒と目が合った。

篠宮かぐや。自分と同じ同年代の女子であり、生徒会の副会長。生徒会長である自分の右腕であり……城鐘御幸が告白させようとする意中の相手である。

いつか、彼女と結ばれるのを夢見て、今日も城鐘御幸はその頭脳を駆使して彼女とバトルを繰り広げようとした時……。

突如、学園全体を揺さぶる程の衝撃が彼等を襲った。何かかと思ひ窓から外を見れば、校庭を中心に二人の人間が佇み、此方を見据えていた。

一人は周囲に氷を張り巡らせ、もう一人は口許を機械仕掛けのマスクで覆っている。明らかに普通とは異なる存在感、全身から滲み出る悪意の波動。それを目の当たりにした生徒達の脳裏にはヴィランの文字が浮かび上がる。

間違った、ヴィランが攻めてきた。よりにもよって、雄英や士傑よりもセキュリティのレベルが高いこの秀治院に。

通常なら、二人のヴィランはセキュリティシステムの前に無惨に敗北し、捕まる事だろう。

しかし、それは起こらない。何故なら、この二人は残念な事に……普通のヴィランではないからだ。

「全く、リ・デストロからの指示とは言え、なんで俺がこんな奴のお守りをしなければならんのだ」

愚痴りながら隣の相方を睨む氷の男、そんな男の視線になど関知せず、男は歩み続ける。

「戴くぞ、俺の……糧……」

「我関せずか。だが、それも良いだろう。そろそろ向こうも始まる頃合いだろうしな」

血走った目、目にしたものの背筋に悪寒を与えるその瞳は、城鐘と、妹である恵を感じて外さない。

全ては、己が望む社会のために。ヴィランの歩みは止まらず。

それを目の当たりにした御幸は、自身の日常が音を立てて崩れるのを感じた。

記録43

「――?」

「ん? どうした」

ファットガムの事務所へ訪れ、昨今巷を騒がせている違法なサポートアイテムの流出、そして今回の個性を破壊する銃弾の件について、ナイトアイを交えて話し合っていた時、ふと違和感を感じた。

今自分のいる大阪から遠く離れた地域、自分にとって義理の弟妹と呼べる二人の気配が僅かに揺れ動いた様に感じ取れた。

一瞬、未熟な自分の気の所為かと思うゴジータだが、この身は不撓不屈の最強存在。自身の大事な存在の危機を勘違いする事は有り得ず、故にゴジータは話し合いの流れを断ち切つてまで、急ぎ懐から携帯を取り出す。

連絡先は義弟でもある御幸の方、しかし幾ら掛けても全く繋がらない。普段なら授業中でない限り、10コールの内に必ず出てくれる義弟が、今回に限って出る気配がない。

仕方なしに一度連絡を切ったゴジータは、今度は義妹の恵に通話を繋ぐ。此方は緊急の用事でない限り掛けてくるなど言われているが、今はそんな事を気にしている場合ではない気がする。

罵倒される覚悟でコールする事数回、御幸の時と違い今度は簡単に繋がる事が出来た。

きつと、低い声で「なに？」とか言われるんだろうな。しかし、通話の向こうの義妹の反応はゴジータの予想していたモノとは違っていた。

『に、兄さん、甚田兄さんなの!?!』

「おう、俺だ。そっちでなんか変わった事とか起きていないか？ 御幸に繋ごうとしてもアイツ全然出なくてさ」

明らかに尋常の様子ではない。普段は落ち着いている恵が取り乱しているなど滅多にない、落ち着かせるように言葉を掛けると、義妹の深呼吸の音が聞こえてきた。

『———』今、お兄は皆を避難させるために学園中を走り回ってるの、でも、アイツ等ドンドン攻撃してきて、巻き込まれた先生達を助けてたりして、ヒーローも駆け付けてくれたけど、全然敵わなくて!』

「———ッ!」

「お、おい!」

「なんや、何かあつたんか!？」

涙でグシャグシャになった声で、それでも現状を伝えようとしてくる恵、その声で向こうで何が起きているのかを察したゴジータは、呼び掛けるファットガムとナイトアイの声を振り切つて窓から外へ飛び立つ。

『今、私たちの学校……ヴィランに襲われ、て……このままじゃ、お兄が、お兄……ちゃんが!』

『このままじゃ、お兄が殺されちゃう! お願い、甚田兄さん、お兄を、皆を……』

“助けて”

「ああ、今いく」

嗚咽を漏らしながらの懇願、普段の義妹とはまるで違うその変わりように、ゴジータは施設に入ってきたばかりの頃の二人を思い出す。

両親に捨てられたと思い、誰にも心を開かずに自分達を睨み続けていた御幸と、その後ろで泣きじやくる恵。きつと二人はあの頃と似た顔で戦っているのだろう。

ならば、ヒーローである自分に出来る事は………!

「……………俺だ。悪いが少し急用が出来た。お前は予定通り例の場所に向かつてくれ」

未だに警戒を弛し続けている己の直感、神経を逆撫でする嫌な予感に対抗するべく、ゴジータもグレーな手札を切るのだった。



突然のヴィランの襲来。予兆も前兆もなく、唐突に加えられたヴィラン達による攻撃は、秀治院の生徒達に強烈な困惑と恐怖を叩き込んだ。

秀治院は、日本の未来を担う卵達が通う古くからの学園。当然防衛の為の備えはされているし、その立ち位置から公安からの繋がりも存在している。

中には個人的な契約でご子息の護衛を担っているヒーローも何名か存在している。当然ながらヴィラン達はこれ等の防衛の餌食になる………筈だった。

「………脆いな。所詮は旧体制の幼稚な設備、当然か」

「」

しかし、それら防衛システムは襲い来る二人のヴィランの手によって瞬く間に瓦解する。男の氷を操る個性によってシステムごと校舎は破壊され、迎撃に立ち塞がったヒー

ロー達は複数の個性を持つもう一人のヴィランによって蹴散らされた。

衝撃波を放ち、爪を弾丸の様に飛ばし、龍の様な怪物を喚び出し、ヒーローを蹂躪する。為す術なく倒れるヒーロー達を目の当たりにして漸く自分達の危機を実感した生徒達は、迫り来るヴィランの恐怖にパニックを起こし掛けた。

しかし。

「そのままパニックに陥れば良いものを、城鐘御幸。流星は奴の身内の事だけはある、か」

そんな状況を、生徒会長である御幸が繋ぎ止める。パニックに陥り掛けた生徒達を学園の放送で呼び掛ける事によって一時的に抑え込み、その間に避難経路を確立させて誘導させる。

その手腕に氷の男は素直に評価した。だが、却って好都合。元より二人の狙いは他の有象無象ではない、二人が狙うのは絶賛活躍中である生徒会長とその妹にあるのだから。

「さて、それじゃあ手早く片付けるとしようか。『ナイン』、お前は外からのヒーローに

……………」

「……………そこか」

「おいナイン、何をして——」

「見付けたぞ、俺の——糧エ!!」

瞬間、ナインと呼ばれる制御装置付きの男は跳躍して学園の校舎へ突っ込んでいく。此方の段取りを一切度外視した突然の行動、予め伝えられていたとは言え、こども融通の利かない相方に氷の男は頭を押さえた。

「ええい! こどもも言う事を聞かないとは! A. F. O. め、ちゃんと調整を終わらせておけ!!」

忌々しく吐き捨てながら、氷の男は周囲の氷を操って壁を作り出す。学園全体を覆う氷の壁、逃げ道を塞がれたと校舎から悲鳴の声が聞こえてくる。

煩わしい旧体制の絶滅、序でに為し遂げてやろうかと、氷の男はほくそ笑む。

「さあ、我等の望む世界の為に……礎となれ」

男は嗤う。上から見下ろし、自分達が生まれながらの特別だと勘違いしている連中に鉄槌が下せる事、その状況に男は酔っていた。

付き従い、慕う^解り・デス^放ト^者口の為に障害は全て排除する。男は未だ悲鳴の続く校舎へ向けて、相方同様に歩み寄っていく。

それが、自分達が望む世界の始まりであることを信じて……。



「うっ、くそ……なんだったんだ今のは？」

「会長！ 無事ですか!？」

「ああ、俺なら大丈夫だ。他の皆は？」

「皆、体育館の方へ逃げました。けど、氷の壁が厚くて、教師達が抑えています……
今にもパニックが起きそうです！」

避難誘導も佳境に入り、殆どの生徒が体育館へ避難出来たと安堵したのも束の間、校舎全体を揺さぶる程の衝撃が襲い掛かり、壁に叩き付けられた御幸は僅かの間だけ意識を失っていた。

時間にして一分も経たない合間、無防備でありながら無事だった自分の悪運に呆れながらも、御幸は生徒会に於ける会計士に指示を飛ばす。

「外との通信は？」

「今、副会長が緊急用の通信手段で連絡を試んでいます。繋がるまで、もう少しの猶予が必要かと……」

「よし、なら外との連絡は篠宮に任せ、お前も体育館へ急げ」

「会長はどうする気なんです!？」

「俺は他の生徒達が逃げ遅れていないか見て回る。……安心しろ、無茶はせん。すぐに戻る!」

「か、会長!？」

生徒達の長としての責務、我ながら無茶なことをしていると自覚しながらも、それでも一人の多くの生徒達を助けるべく、城鐘御幸は廊下を走る。

困難の状況、自分だつて危ないのに、それでも誰かの為に動こうとしている自分に御幸は呆れていた。これも、身内にNO.1ヒーローなんて輩がいる弊害か。

(そもそも、廊下を爆走している時点で、生徒会長としては失格だな)

取り残されている生徒達がいらないか、一通り巡って高等部に誰もいない事を確認した御幸は今度は中等部へ足を進める。

中等部や初等部は高等部よりも先に避難している筈、本来なら見て回る必要なんてないのに、嫌な予感に突き動かされた御幸は、誰もいないことを祈りながら再び廊下をひた走る。

(くそ、こんなことならちゃんとか家で携帯を充電してくるんだっ!)

今頃、自分の拘りや安いプライドなんてかなぐり捨てて、速攻で天下無敵のヒーローに救助を求めるべきなのに、貧乏性な自分の性格がここへ来て災いになってしまった。

電池切れを起こし、物言わぬ物体と化している自身のスマホ。今度からはこまめに充電することを固く決意した御幸の目の前にそれはいた。

明らか不審者、口元を制御装置らしい機械的なマスクで覆っている者。血走った目で佇むその男を見て、城鐘御幸は一目でヴィランだと確信した。

危険な相手、己の直感と生命としての本能が急いでその場から離れろと警告してくる。はね上がる心音、心臓が口から出てきそうな程の緊張感。口元を手で抑え、極力音を立てずにやり過ごそうとする御幸だったが……無理だった。

ヴィランの前にいる、見慣れた女子生徒。自分より年下の子を怯えながら庇い、その腕に付いた切り傷から血を流す妹を目にした瞬間——城鐘御幸はブチ切れた。

「ダメエエツ!!」

「!」

「っ、お兄い!? ダメツ!」

「恵ちゃんから、離れろオオツ!!」

投擲した充電切れの携帯がヴィランの頭に直撃、気を引かせ、此方に振り向いた所を

廊下の隅で落ちていたモップを拾って奴の顔目掛けて振り抜く。

喧嘩慣れもしておらず、素人である自分にしては結構な動き。しかし、目の前のヴィランには全く通用せず、御幸の渾身の一撃は片手で容易く受け止められてしまう。

「恵ちゃん！ 今すぐその子を連れて逃げろ！ コイツは俺が何とかする！」

「何言ってるのお兄い！ ヒーローでも無理だったのに！」

そう、妹の言う通りコイツは唯のヴィランではない。学園のセキュリティシステムを悉く粉碎し、駆け付けたヒーロー達を蹂躪し、学園を恐怖と混乱のドン底に突き落としている。

一学生風情でしかない自分が、逆立ちしたって勝てる相手ではない。

でも。

「家族を見殺しになんて、出来るわけないだろ!!」

そう、城鐘御幸は譲らない。此処で逃げれば、自分達を捨てた両親と同種の人間になつてしまう。No. 1ヒーローの——後藤甚田の義弟でいられなくなる。

『大丈夫よ、御幸。私達は、決して貴方達に寂しい思いをさせたりしない』

脳裏に浮かぶのは、敵愾心を剥き出しにした自分達を、優しく受け入れてくれた人。二人にとって第二の母でもあり、姉であり、泣き虫な人。

あの人を泣かせる様なこともしたくはない。あれもこれもと抱え込む城鐘御幸には、

此処で逃げると言う選択肢はなかった。

しかし、現実は何処までも彼等を追い詰める。一介の高校生でしかない御幸と、改造に改造を重ねた特殊個体のヴィランとでは、戦える土台が違っていた。

「——見付けた」

瞬間、受け止めていたモップを握り潰し、衝撃で後退る御幸の首をもう片方の手で締め上げる。

「お兄ィ！」

「見付けたぞ、俺の……糧！」

「あ、が………恵、に………げ………」

締め上げる手に力が込められ、呼吸が出来ない。視界がボヤけ、意識が遠くなる。骨を折らないのは殺さない理由があるのか、何れにせよ普通の高校生である自分にこの窮地を脱する術はない。

遠くで、妹の叫び声が聞こえる。

(ああ、(っ)めんな恵ちゃん。俺じゃあ、やっぱり………)

自分では、家族は守れない。泣きたくなる程の冷たい現実に御幸の意識が闇の中に沈み掛けた時。

「おい」

その声は、何処までも鮮明に聞こえた。

「？」

気付けば、御幸は誰かの腕に抱えられていた。太く、硬く、逞しく、それでいて暖かい。

知っている。自分は、この温もりを知っている。

いつの間にか壁には穴が空いていて、その向こうではマスクを壊され、素顔を顕にしているヴィランが、怯えた様子で此方を見ている。

「お前と、そして外にいる奴もだが、俺の弟妹達に手を出して——」

金色の炎に迸る稲妻、逆立った髪は彼の怒りを顕すかのように、更に怒髪天を突く。

「ただで済むと思うなよ」

記録44

「アトロイトオ——SMASSHツ!!」

振り抜かれる拳、N.O. 2という座に落ちようともその実力は未だ健在。次代に個性を託しつつ、少しずつ表舞台から消える事を良しとしているオールマイトは、そんな翳りなど嘘のように目の前のヴィラン達を圧倒していた。

「なんで、こんな所にオールマイトが……いるのよ」

「これが、ステインが認めたヒーロー……か」

N.O. 2に落ち、全盛期から衰えたとしても未だ変わらぬ圧倒的強さ。そんなオールマイトがいることなど露知らず、鉢合わせてしまったヴィラン達。

何故連中が此処にいるのか、色々と疑問に思う所は多々あったのに、瞬く間に返り討ちに遭ってしまった開闢行動隊なるヴィラン達に、峰田実ほんのちよつぱり同情した。

「よし、先ずはヴィラン二名の無力化に成功した！ マンダレイ、今の内に先に森へ入っ

た生徒達へテレパスで伝えてくれ！」

「本気なのオールマイト!?」 確かにこの状況下で生徒達が自身で身を守るように委ねる気持ちには分かるけど!」

既に、森へは肝試しで入ってしまった数組の生徒達がいる。彼等の身の安全を守る為にオールマイトは生徒達に一時的な個性使用を自由とした限定的な戦闘の承認をマンダレイに促した。

今からオールマイトが森に入っても、マンダレイやラグドールの支援も無しに捜索に向かうのは時間が掛かる。

そのラグドールも先程から通信が繋がらない。事態は既に一刻の猶予も許されない状況にある。いや、それだけではない。

「嫌な予感がする。すべての責任は私が取る! 急いでくれマンダレイ! 相澤君だって、きっと同じ選択をする筈さ!」

きつと、事態は此処だけに留まらない。長年のヒーローとしての直感と裏で潜んでいる悪意の存在にオールマイトは確信する。

(これも、貴様の狙いどおりか、オール・フォー・ワン A・F・O!!)

嘗て自身が代償を支払って倒した悪意の塊、それが今再び蠢き始めている事実、オールマイトは憤りを滾らせる。

「オールマイト！ 戦闘が許可をされたなら僕は洗汰君の所へ向かいます！」

「例の少年か、仕方ない。だが無茶はするなよ！ 万が一ヴィランと遭遇したら、少年を連れて逃げるんだぞ！」

「はい！」

すっかり頼もしくなった愛弟子が個性を発現させて瞬く間にその場から離脱していく。今頃はお気に入りの秘密基地で事態に直面している洗汰少年、彼の事を教え子であり弟子の緑谷に任せてしまった事に自身の情けなさを痛感しながら、オールマイトは森へ入った生徒達の救出に向かう。

その際。

「——あ、あれ？」

「どうしたの？ 峰田ちゃん」

「いや、オイラの見間違いかなあ？ 今、オールマイトの体が白い炎みたいなのを纏っていたような……ゴジータみたいに」

その変化には、オールマイトを含めて誰も気付く事はなく、事態は更に加速していく。



「げ、現在我々は秀治院周辺の上空にいます！ 突如として現れた氷の壁は、学園全体を覆うようになっていて、此処から学園の様子を伺い知る事は出来ません！」

学園の周边上空。周囲に住まう人々の通報と情報拡散により、警察機構より現地に到着したメディアの女性。興奮気味にマイクを片手に握り締め、眼下に見える氷の檻に閉ざされた日本屈指の学園という異常事態を世間に伝える。

「既に秀治院学園の警備システムは乗り込んできた二人のヴィランにより破壊され、駆け付けたヒーロー達も為す術なく倒されたという話もあります！ 未来の日本を担う若き卵達が集う秀治院、果たして中にいる生徒達は無事なのでしょう！? 安否が懸念されます！」

SNSという情報の場を利用し、現在入手できる可能な限りの情報をお茶の間へ伝え

ていく。それはデバガメ精神から来るものなのか、それとも真のジャーナリスト魂故なのか、それはきつと彼女自身も分からない。

分かってるのは、このままでは中にいる子供達の安全が保障されないという事。ヒーローを育てる雄英高校や士傑高校とは異なり、秀治院はあくまで学生達の学校。

設備や警備システムは雄英や士傑に並ぶ所もあり、場合によっては凌駕する一面もある。通常なら侵入する事すら不可能な絶対領域、世界有数のハッカーが本気でハッキングでも行わない限り、機能不全や万全な状態から切り離される事は有り得ない。

しかし、現実はその事態は起きた。日本でもトップの警備システムを誇る秀治院は、二人のヴィランによって瓦解の危機に陥っていた。

このままでは生徒達の身が危ない。へりに乗って学園を見守っていた女性キャスターが次の情報をお茶の間へ伝えようとした時、それは現れた。

「っ!? い、いま……上を何か通らなかつた?」

今、自分達は学園から離れた上空に位置している。飛行能力を有しているヒーローの数は限られている中、女性キャスターは確信する。

黄金の炎。一瞬だけ見えたその断片的な情報で、誰が駆け付けたのか、女性キャスターは一瞬で理解した。

「い、今! 黄金の炎らしきものが我々の遙か上空を通過! は、速い、速すぎる!! こ

れが、これが我が日本に於ける最強のヒーロー!!」

「ゴジータ!!」

そのヒーローの名を叫ぶ……よりも早く、垂直に落下した黄金の炎は氷の天蓋を貫き。

斯くして、怒れる黄金の戦士は降り立った。



「御幸、恵、二人とも無事か?」

背を向けながらも、此方に気を回しているヒーローに秀治院学園の生徒会長は笑う。

「ああ、どうにか。少し首が痛むけどな」

強がりだ。本当は今でも恐怖で膝が震えているし、首の骨だつて折れるかと思つた。始めて本物の悪意に身を晒し、命の危機に瀕した御幸は今も尚恐怖で心も体も震えていた。

それを表情に出さないのは、日頃からそういった事に耐性があるからか、それとも最強の義兄にこれ以上カツコ悪い所を見せたくないからか——恐らくは後者だ。

「それだけ強がれるなら上出来だ。——よく頑張つたな」

そんな、負けず嫌いで強がりな義弟を甚田は本心から頼もしく思えた。

「甚田兄さん！ お兄達の事は私が見ておくから、だから！」

「おう、頼んだぜ恵」

振り返らず、手をヒラヒラと振つて軽めに返事をする。現場に到着してから一度として振り返りはしない甚田に現場に居合わせた女子生徒は不思議に思うが、二人は気付いていた。

ゴジータは、キレている。二人に顔を見せないのは今の自分の表情を見られたくないからだ。声音で平静を装つていても、身に纏う雰囲気は全く以て笑つてない。

黄金の炎を纏い、至る所で火花を散らせているその姿はこれ迄ゴジータを間近で見たきた二人でさえも数回しか目にしたことがない。

怒れるゴジータ。その雰囲気には圧倒されながらも、それでも変わらぬ優しさを持つ兄

に改めて二人は頼もしい兄を持った事を嬉しく思うのだった。



「——さて、待たせて悪かったな」

一歩、歩み出る。穴の開いた壁、その向こうから歩み寄るN.O. 1ヒーローの存在に
ナインと呼ばれたヴィランは息を飲む。

これ迄、噂程度しか知り得なかったN.O. 1ヒーローであるゴジータ。最高のヒーローであるオールマイトと対になるように知られるようになった最強のヒーロー、力を是とするヴィランにとってこの上ない目の上のたん瘤であり、凄まじく厄介な存在。

そんな奴の身内を拐えと命じてきたのは、自分を複数の個性を操れる体へと改造した老人の盟友——否、首魁。

ゴジータの身内は活力と活性の個性の持ち主であり、その個性を奪えたら自分はより完璧な存在へと至れる。複数の個性を持つが故の弱点、肉体の限界である細胞の崩壊を防ぐことが出来るようになる。

全てはこの電撃作戦で上手くいく筈だった。周囲の人間に知られる前に、目の前の怪物に勘づかれる前に、全てを終わらせて片付けるつもりだった。

なのに……。

(バカな、早すぎる!!)

既に、No. 1ヒーローは目の前に顕現している。物理的に開きのあった距離を、瞬く間にゼロにし、現場への確に且つ速やかに駆け付けるその姿は、ヴィラン側から見て最早悪夢ですらあった。

(こんな、こんな理不尽が、罷り通ってなるものか!!)

それでも自身の野望の為、生きやすい社会の為にナインは立ち上がる。歯を食い縛り、崩壊していく体の痛みに苛まれながら、ナインと呼ばれる男はゴジータに牙を剥く。「ゴジータ、お前は、社会の、ゴミ!! この腐った社会を停滞させる、諸悪の根源だ!!」

「だから?」

侮蔑の籠った罵倒も、蔑みながら見下ろされるゴジータに一蹴される。ナインの掲げる理想の社会は強者の世界、個性と言う力を自由に行使できる社会。

生き辛いこの社会に反旗を翻す、純粹無垢な個性社会。
しかし。

「つ、死ねエエツ!!」

龍の使い魔を呼び寄せた所で、ゴジータに通じる筈もなかった。口を開き、噛み殺そうとする二頭の龍。幻想的で恐ろしい個性をゴジータは片手で振り払い、それだけで粉砕し、龍の使い魔は霧散していく。

「このおオッー!」

爪を弾丸の如く飛ばして乱射、避ければ後ろの身内に当たる事へ考慮しての攻撃。当たれば肉が抉れるだけでは済まない爪銃弾を、ゴジータは構わず前進する。

届かない。銃弾の如く鋭い爪は、ゴジータの纏う炎に消されて届く事はない。いや、仮に届いたとしても、ゴジータの体にたかだか銃弾程度で傷が付く筈もなかった。

近付くにつれて頭になるゴジータの相貌に浮かぶは呆れ、嘆き、そして怒り。確かにナインはこれ迄のヴィランとは多少毛色が違うようだが……あくまでそれだけ。ゴジータから見て、ナインという特殊な存在はそこいらのチンピラヴィランと大して変わりはない。

聽て、ゴジータとの間合いは詰められ。

「おら今度はこっちの番だ。さつきと違ってそれなりに力入れるから、しつかり防げよ」

握り締められる拳、その拳の迫力にカタカタと歯を震わせながらも、ナインは防御の態勢を取る。

瞬間、振り抜かれる。音を置き去りにし、ソニックブームを引き起こしながら迫り来るゴジータの拳は、しかして不可視の壁に阻まれる。

柔らかく、包み込むような嫌な感触。しかしこの手応えに覚えがあったのか、ゴジータはつまらなそうに息を吐く。

「見えない力場……斥力を利用してんのか？　だとしてもつまんねえな」

「っ!？」

「その程度のパワーで、俺を止められると思ってるのか？　……甘えよ」

果たして、ナインの頼りだった斥力を利用しての防御壁は呆気ないほどに砕かれた。振り抜かれた拳はナインの顔に突き刺さり、吹き飛んでいく。

更に先回りし、背中へ肘打ち。骨が砕かれる痛みに声のない悲鳴を上げながら悶絶すると、ナインは力なく倒れ付した。

多くのヒーローを一方的に蹂躪し尽くした相方が、No. 1ヒーローに呆気なく倒される。悪夢のような出来事、しかし、もう一人の襲撃犯である氷を操る“外典”は、既に布石を打っていた。

「はっ、ハハハハ！　バカが、調子に乗って俺を放置するからだー!」

学園全体を覆うほどの氷塊。長い間組織内で鍛え続けてきた己の個性、周囲の水を自在に操り敵を討つ外典は組織内でもトップレベルとなっている。

これだけの質量、迎え撃つにはゴジータの必殺技であるかめはめ波を撃つしかない。しかし、此処は都心に位置する街のど真ん中。此処でゴジータが本気に迎え撃つてしまえばその余波で周囲に被害が及ぶ。

直接持つてどこか安全な場所へ放り投げるしかない。頭上の氷塊に対策している内に自分は逃げ帰り、リ・デストロの所へ合流するとしよう。

作戦が失敗に終わったのは素直に悔しいが、ゴジータの身内が分かったのは大きい。今後はしつこく狙い打ち、ゴジータの精神を削る作業だ。

氷塊を落とし、ゴジータのアクションを待つ。さあ、どうやって対処するのだと、高みの見物を決め込んだ瞬間……。

「スター・フォール
流星群」

地上から放たれる無数の流星群が氷塊を打ち砕いていく。

地上から空に向かって伸びる無数の光の帯、薄暗い夜の時間帯の中でその光景はいつそ幻想的でしたらあった。

「別に、放置していたつもりはねえよ」

「っ!?!」

その光景に唾然となるのも束の間、外典の前にゴジータが突如として現れる。

「お前ごとき、いつでも片付けられる。ただ、それだけだ」

振り抜かれる拳。氷を操る事以外普通の人間と変わらない外典にゴジータの拳を防ぐ術はなく、迫り来る怒りの鉄拳をその身に受ける他なかった。

鼻から血を吹き出し、衝撃と痛みで涙が出る。しかし、意識を失う程ではない。追撃から身を守る為に今一度外典は己の個性を駆使して氷を操ろうとするが……。

「——ヒッ!？」

現在進行形で吹き飛ぶ自身に追い付くゴジータの顔を見て、それは出来なかった。憤怒に満ち、怒気処か殺気すら滲み出しているNo.1ヒーローの迫力に、既に外典には抵抗する気力すら失われていた。

「殺しはしない。俺はヒーローだからな、その代わり……地獄を見せてやる」

瞬間、蹴りが外典の腹部を捉える。全身に走る痛みと衝撃、それでも途切れる事のない意識に外典はゴジータの意図を理解した。

自分は、見せしめだ。己の身内に手を出した者がどんな末路を辿るのか、自分を通してすべてのヴィランに示そうとしている。

自身の命の危機に抵抗を試みるも、既にそこはゴジータの間合い。吹き飛んだ自分に更に追い付くその速さは、既にヒーローの枠組みすら越えている。

その後も、外典は空中でピンボールの如く弾け回り、地上……：……学園の校庭に落下してくる頃には童顔だった可愛らしい顔付きは原形すら留めておらず変形していた。

それでもただ地面に叩き落とさなかったのは、ゴジータのせめてもの優しさなのかもしれない。

これで二人の襲撃犯は無力化したか？ いや、残念ながらまだ終わってはいない。

「まだ、まだだ！……俺の夢は、終わっていない!!」

ナイン。己の肉体を改造し、複数の個性を持つまでに至った悪意の副産物。ゴジータにやられたダメージを脳内麻薬を加速度的に分泌させて誤魔化し、血走った目に歪んだ炎を宿らせながら、その男は吼え立つ。

「ゴジータ、お前に見せてやる!! これが俺の力、これが！ 世界を解放する破壊の一撃だああツ!!」

天が逆巻き、嵐が吹き荒ぶ。複数の個性を持ち、それ故にナインと知られるその男の本当の力は——天候操作。

文字通り、天候すら自在に操る規格外の力だ。大気を操り、雷を呼び、巨大な竜巻を生み出さんとする。明らかに個人の力に許されたモノではない力を前にして……。

「あ、そう」

ゴジータは、興味がなさそうに吐き捨てた。

「ガ？」

瞬間、ナインの腹部を衝撃が突き抜ける。見れば握り締めたゴジータの拳が深々と突き刺さり、この一撃によりナインは完全に意識を手放し、操ろうとしていた嵐も霧散。倒れるヴィランを一瞥する事なく、ゴジータは御幸達の下へ戻る。

「すまん二人とも、怖い思いをさせたな」

「いや、助かったよ甚兄。お陰で助かった」

「私は凄く怖かった。……でも、来てくれると思つてた」

怪我をし、怖い思いをさせた二人を見て、未だ未熟な己を恨む。だが、いつまでも後悔ばかりもしては行かない。己の中にある嫌な予感にケリを付けるために、ゴジータは再び空に浮かぶ。

「……………情けない兄貴分で申し訳ないが、俺はもう行かなきやならん。直ぐに戻るが、二人とも、その間は此処の事を任せてもいいか？」

「え、甚田兄さん、何処かへ行くの？」

不安そうな顔で見てくる恵に、一瞬だけ正直な事を話すか迷う。しかし、聡い御幸には迷うゴジータの顔を見て、何に懸念している事を察したのか、その表情を青白くさせしていく。

「まさか、先生の……………俺達の家が!？」

相変わらず頭の回転の早い義弟、しかし今だけはそれに気付いて欲しくなかった。



「……………ねえ、私達もナインと一緒に学園の強襲組に入ってた方がいいんじゃないかしら？」

「ナインを信じろ。アイツなら、相手がゴジータであっても、負けはしねえ」

長い赤髪の女性と、大きな体躯の狼男。既に公安の人間を蹴散らした二人の行く末には児童養護施設である【星の都】。

「けど、あのナインをAFOがそのまま解放するとも思えねえ。例のブツを回収したら、

とつととズラかってナインと合流するぞ」

「そう、ね。その通りね」

「相手はガキと女だけ、しくじるなよ」

「分かってるわ」

既に作戦は始まっている。ナインの為にも、自分達のやるべき事を速やかに成し遂げようと、二人の凶悪ヴィランは力を入れる。

施設には、まだ外で何が起きているか分からない。既にこの周辺はとある組織に属している凄腕のハッカーが掌握している。外界と連絡が通じるまで、数十分は時間を有するだろう。

自分達の目的は施設の中にあるとされるブツを回収すること。それさえ成し遂げれば、ヴィランの、力ある者の世界は直ぐにやってくる。

生き辛い今の世の中を、変えることが出来る。そう信じて施設へまた一歩近付く二人に……………。

「其処までだよお二人さん」

一人の影が舞い降りる。

「っ、誰？」

「公安の連中は、全員ぶちのめした筈だが？」

「今宵は月が美しい。そしてまた、血の繋がらない家族団欒を楽しむ子供達の喧騒もまた、美しい。悪しき目論見を掲げる悪鬼の徒よ、大人しくお家に帰りなさい。さもなければ……………」

月明かりに照らされ、それは謳う。

「No. 1ヒーロー、ゴジータの最終兵器であるこのジェントルが、キツついお仕置きをお見舞いしてあげよう!!」

恐怖で膝をガクブルさせながら、それでも嘔まずに言い切ったジェントル、遠巻きで施設の皆の避難の手助けに来たラブラバは、相棒の勇姿を脳裏に刻み込んでいた。

記録45

雄英高校ヒーロー科一年のA組とB組の合同合宿、厳しく辛い特訓を乗り越え、数少ないイベント時にそれは起きた。

肝試しという学生ならではの催し、二人一組の計算で順番に回ることになったこのイベントは、ヴィランの襲撃という最悪の形で上書きされてしまった。

特に、森の中で待ち構えているのは、他人に危害を加え、殺める事を躊躇わない凶悪な輩達。

一人は矢鱈と人を煽り、嘲り、挑発を繰り返す青い炎を操る男。一人は好きな人と同一になりたいが為に、傷を付ける行為に浸る女。

そして、人を切る事に喜びを、人の切断面に美しさを見出す狂人。男の名はムーンフィッシュ、サイコキラーと呼ばれる人種であり、脱獄を果たした死刑囚である。

「肉、血イイ、断面ンンン、見せろお、見せてくれよオオツ!!」

歯を刃の様に鋭くさせ、その切れ味は人体を容易に切断してしまう。そんな、危険極

まらない連続殺人鬼は……………。

「死ねえッ!!」

「ブブウツ!?!」

爆豪の放つ爆発に、その経歴が嘘に思える程に呆気なく倒されていた。

襲い来る歯刃を持ち前の個性の機動力で避け、至近距離で溜めた爆破を叩き込む。シンプルでありながら強力な戦法は、本物のヴィラン相手でも充分に通用する。

ゴジータとの特訓で感覚を掴み、今回の合宿で拡大と拡張、そして全体的な強化を自覚できた爆豪は、動けなくなつたムーンフィッシュを一度だけ一瞥した後、満足そうに手を握り締める。

「……………」
その爆豪の背中を複雑な表情で眺めるのは、同じクラスメイトである轟焦凍。たった数カ月の間なのに随分差を付けられた気がする。

体育祭では自分の迷いの所為で爆豪には申し訳ない形で優勝させてしまったが、今では純粋な実力であつても敵う気がしない。

「……………随分、差ア付けられちまつたな」

これが、ゴジータに師事した者とそうでない者との差。嘗てのNo.2から己の上位互換と言わしめた轟であつたが、今はその言葉すらも虚しく感じる。

羨ましい。口にこそ出してはいないが、爆豪の背中を見つめる轟の瞳はそう語っている様に見える。

「一先ず、クソヴィランは一人カタを付けた。俺達が取るべき選択は二つ、オールマイイトが駆け付けて来るまでこいつを見張りながらここで待機、もう一つはこいつを縛り上げた状態で担ぎ、元の広場まで戻る事だ」

現在、襲撃されたヴィランの人数は未だに特定されていない。どんなヴィランがどんな個性を以て襲ってきているのか、それすらも分かかっていない状態だ。

故に、ここで待機を決め込むのはヴィラン側に付け入る隙を与えるに等しい。だったら、例え救援に駆け付けるオールマイイトとすれ違う事になっても、自分達で最初に集めた場所まで戻った方が選択肢は減らない。

仮に、向かった先でヴィランと遭遇したとしても、暗闇に覆われた森の中より開けた場所で戦った方が対処がしやすい。以上の理由から、爆豪は二つ目の提案を押し付けた。

（だが、それでも分かんねえのはヴィラン側の思惑だ。仮にもオールマイイトというトツプヒーローがいんのに、なんで堂々と仕掛けてこれる？）

不思議なのはヴィラン側……偏に、敵連合の思惑だ。今回の林間合宿の場所は教師陣の間でしか知られてない筈なのに場所だけは特定出来た癖に、肝心のプロヒーロー

……つまりは、オールマイトに対してまるで警戒していないように感じる。

まるで、中途半端な情報しか得られなかった様な拙さ。感じられる違和感を前に爆豪は一つの仮説に辿り着いた。

「——まさか、裏切り者ってえのは」

USJと今回の件、二度も続くヴィランの襲撃に爆豪は雄英内部にヴィランへ情報を流している輩がいるのではないかと、内心察してはいた。

疑惑は今回で確信に至り、同時に一つの答えへと導き出す。雄英の情報をヴィランへ流している裏切り者——それは、自分達と同じ学生であると言うこと。

それも、自分達と組を同じくするA組のクラスメイト。もし自分の仮説が正しければ、自分達はヴィランに通じている裏切り者と数カ月もの間同じ空間にいたことになる。

「爆豪、どうした?」

「ッ、なんでもねえ」

嫌悪感で胸焼けになりそうなのを、歯を食い縛って平静を装う。此処で裏切り者の推理を始めた所で意味はないと判断した爆豪は、急ぎ倒したヴィランを拘束して先の広場に帰ろうと轟を促す。

「おいおい、そりゃねーだろヒーロー候補。もうちっと楽しんでいけよ」

そこへ現れる第三者、並々ならぬ殺気と悪意。向けられる悪感情に辟易としながら振り返ると……。

「オールマイト、N.O. 2の落ちぶれたヒーローが駆け付けるまで後僅か、それまで精々遊ぼうぜ、なあ？ 轟焦凍、爆豪勝己」

「俺の名前？」

「ああ？」

掌で燃える青い炎を弄びながら、狂った道化は嘲り嗤う。

その一方で。

「クッ、囲まれたか！」

「い、出久兄ちゃん！」

今回の合宿においてヒーロー談義で仲良くなった年下の男の子、出水洗汰。彼の安全を確保する為に単身で彼の秘密基地へやってきた緑谷だったが、其処で待ち構えていたヴィランと遭遇する。

全身武器だらけで、殺傷能力の塊の様な脳無。無数の腕から生えるチェーンソーや掘削機の数々はヴィランというより一種の重機にも見えた。

そして、厄介な事はそれだけではない。

「はあ、はあ、本物、本物の……出久君だあ。かあいいなあ、格好いいなあ」

蕩け、高揚し、興奮気味に頬を紅くさせる少女。年齢的に自分達と同年代らしい刃物と無数の注射針を携えた少女は、恍惚とした表情で出久を見る。

「緑谷出久君、好きです！ 付き合って結婚して血を見せてください!! 私と一つになりましょう!!」

「いきなり何言ってるの!?!」

初対面だというのにトンでもない事を口走る少女に、緑谷は真っ赤にして反論する。なんだろう、酷く緊迫した状況なのに何だか妙に肩透しをくらった気分。緑谷の後ろで震えていた洗汰はスツツと真顔になり、心なしか脳無も真顔になっている気がした。



「退けえ！ 半端野郎がアツ!!」

「やらせはしないっ!」

振り抜かれる獣の拳を、ジエントルが空気の膜を駆使して受け止める。柔らかく、包み込むような感触。自身の放つ一撃、その衝撃の全てが吸収された事に苛立ちを覚えた獣の男は、苛立ちを隠しもせず吐き捨てる。

「さつきからグニョグニョと鬱陶しい!! 戦う気も逃げる気もねえ半端野郎が、俺達の前立つんじやねえ!!」

獣の男——ヴィラン「キメラ」は、嘗てヴィランだった男に言葉を叩き付ける。自らを義賊と称し、ヒーローでは手の出せない悪事にメスを入れる。しかし、その実態はチンケな動画配信者に過ぎない。

ヒーローになることもできず、かといってヴィランに成る事もなく、ただ自己満足だけに過ごす怠惰な者。たった一度だけ、ジエントルの動画を視たキメラだが、余興にもならない詰まらないものだったと記憶している。

そんな半端者が自分の前に、あたかもヒーローの様に立ち塞がっている。怖くて膝が震えている癖に、顔だけは強気に笑っている。………気に食わない、実に気に食わない。

「No. 1のおこぼれ受けて、すっかりその気かア!? アアツ!」

「なんと言われようと、君達をこの先に通すつもりはない。——悪いことは言わないから、大人しくお家に帰りなさい」

恐怖で若干上擦った声で、それでも通さないと意思を示すジェントルに、キメラは苛立ちを更に募らせていく。

「キメラ、コイツに律儀に付き合う必要はないわ。私達の目的は変わらない。そうでしよ。」

「——ああ、その通りだ」

瞬間、赤髪の女の髪の毛の形状が変化し、鋭い刃となつてジェントルへ迫る。その速くも恐ろしい一撃を前に、それでもジェントルは対処してみせた。

掌サイズの空気の緩和材。ゴジータの地獄の扱きに耐え抜いたジェントルが編み出した小細工の技。これを二つ程重ねて受け止めると、切れ味の鋭い髪の毛の刃はジェントルに届くことなく静止する。

「っ！ 私の一撃も対応出来るの!？」

「ただおこぼれを受けただけ等と、侮つて貰つては困るよ。私が手にしたのは、紛れもない地獄への片道切符さ！」

ゴジータの情けを受けた幸運な半端者、裏世界においてジェントルという男をそう評する者は少なからずいる。陰口を叩く者達の気持ちも分かるし、そう言いたくなる気持

ちも理解できる。

けれど、甘くは見ないで欲しい。此方は君達が呑気に悪事を企んでいる間、いつも死にそうな目に遭っているのだから！

「凶に乗るなよ、道楽者！」

その時、キメラの膂力にモノを言わせた一撃が炸裂する。踏み込んだ脚力は地を抉り、ジェントルとの間にあつた空間をゼロにする。素早い動き、異形系統の個性ならではの力の強さに舌を巻くが、それでもジェントルは落ち着いて対処する。

落ち着いて間合いを見計らい、自身が一番対応できる距離へと詰める。目の前まで迫る拳を避け、キメラの腕を自身の両手で絡めとり、勢いをそのままに地面へ叩き付ける。

「凶には………乗つてないさ!!」

「ッ!？」

背負い投げ、人体が可能としている代表的な技。個性発現以来、疎かにしていた人の技を受け、キメラは初めてダメージを受ける。

地面が躍動し、ひび割れる程の一撃。流石にこれは堪えただろうとキメラから離れたジェントルは残るもう一人の女性ヴィランへ視線を向ける。

「——さて、お友達はこれでリタイアだ。お嬢さん、悪いことは言わないから、そこのお友達を連れて大人しくお家に帰りなさい」

「……………私達を見逃すというの?」

「残念ながら、今の私には其処までの権限は無いのだよ。あくまで私は万が一に備えての保険、ヴィランに対するささやかな抑止力に過ぎないのだ」

実際、ジェントルはゴジータの監視下で自由を保障されており、数名のトップヒーローから見込みがあると太鼓判を押されているが、あくまで今のジェントルは仮免すら持っていないヒーローの卵という扱いだ。

今回はゴジータの指示の下、緊急な事態に直面しているという状況下で許された特殊事例。個性を使つての撃退は許されているが、個性を使つての攻撃は許されていない。

ジェントルの個性ならば拘束も可能かもしれないが、万が一それが個性を使つての攻撃と認識されてしまえば、迷惑を被るのはゴジータだ。恩人であるゴジータに、迷惑を掛けるのは避けたい。

故に、ジェントルはスライスと呼ばれるヴィランの女性に撤退を促す。退いてくれと、切実に頼むジェントルの願いを。

「それは……………少し、性急過ぎるのではなくって?」

スライスは妖艶に微笑みながら拒絶する。

「アンタは、二つ程思い違いをしている。アンタが倒したと思ひ込んでいたソイツは、まだ全然力を出しちやいない。次に二つ目は……………私達に、もう帰る場所なんて無いって

事さー！」

「なに？」

その時、倒れていた筈のキメラが立ち上がるのを見て直感に従い個性を使つての防御に入る。―瞬間、殺しきれない衝撃が全身を襲い防御ごと吹き飛ばされるジェントル。

幸い、地面へ激突する瞬間個性で柔らかくした為にダメージは最小限で済んだが、それでも足がふらつく程度には強烈な一撃だった様だ。

どうやら、本当に目の前のヴィランは全力を出していなかったらしい。筋肉で盛り上がった肉体は身に纏う服を突き破つて肥大化していく。腕から生える翼は刃のように鋭くなり、その様相はまるで神話に登場する怪物そのもの。

「グルウウアアアッ!!」

最早人としての理性があるかどうかすら怪しい。雄叫びを上げ、血走つた目で此方を睨み付けてくるキメラに、改めてジェントルの背筋に悪寒が走つた。

そして、その予感は的中する。口を開き、エネルギーの収束を目にしたジェントルは急ぎ最大防御壁を展開させる。

空気を幾層にも重ねたモノ、キメラから放たれる赤黒い閃光を、正面から受け止める。

「ぬっ、ぐー… 流石にこれは……!」

防御は貫かれる事はないが、その防御を支えている己の体が押し負けそうになる。こ

のままでは後ろの施設にまで巻き込んでしまうと、致し方なしにジェントルは奥の手を切る覚悟を決めた。

「——濟まないラブラバ、今一度君の力に頼らせて……」

「その必要はねえよ」

瞬間、上空から何かが飛来。ジェントルの前に降り立つとカメラの放つ光を握り潰す。その光景にヴィラン側が啞然とする一方で、その背中を目にしたジェントルは笑みを浮かべた。

「悪いな、時間を取らせた」

「無問題さ、タイムिंग的には申し分無いよゴジータ」

黄金の炎と稲妻を纏い、翡翠の瞳でヴィランを射抜く。逆立った髪がそのまま怒りを現している様なゴジータの風貌に、スライスはそんなバカなと後退る。

「なん、で、なんでゴジータが此処に!?! 彼処にはアイツが、ナインがいた筈だろ!?!」
動揺しているスライスの言葉に、ゴジータが応える事はなかった。ゴジータが気掛かりになっているのは後ろにある施設の恩師と子供達の安否だけ。

気の探知で彼等の無事を再確認すると、改めて二人へと向き直った。

「さて、お互い余計な前口上はいらねえよな。お前らにも主義主張はあるだろうが………悪いが、聞く気はないぜ」

「くそ、クソツタレがアアツ!!」

パチパチと稲妻が迸り、鋭い翡翠の眼光が二人を射抜く。自分達の頭とも呼べるナインは既に倒され、自分達もその瀬戸際に立たされている。

それでも、止まるわけにはいかないと、キメラはズボンのポケットに隠していたアンブルを取り出し、自らの首に突き立てる。

「ツ!? キメラっ!ダメだそれは!」

「黙ってる! コイツを倒し、ナインを取り戻すにはこれしかねえ!!」
「?」

何やら特殊な薬物らしいモノを体内に注入したらしい。仲間の女が動揺している辺り、相当ヤバい代物の様だ。

瞬間、キメラと呼ばれる獣の男の気が膨れ上がっていくのを感じる。どうやらあのアンブルは使用者の細胞を無理矢理に活性化させ、個性を強化させる代物だったらしい。仮に名付けるとしたら「ブースト」か。先の個性消失弾といい、キナ臭い話が増えてきたなどウンザリするゴジータを余所に、キメラの肉体は更に膨れ上がっていく。

「な、ナナナインヲヲ、カカ返セエエ!!」

巨大化し、より鋭くなった爪で掴み掛かってくる。単独で一種の災害と化したヴィランを前に……ゴジータはやれやれと溜め息を溢し。

刹那、加速する。

「ッ?!?!」

「言った筈だぞ、お前達の言葉を聞くつもりはないってな」

瞬間、ゴジータの肘打ちがキメラの腹部に突き刺さり、凄まじい衝撃が突き抜ける。一撃。キメラの耐久力を遙かに越えた一撃が、タフさがウリだったキメラの意識を刈り取り、特殊な薬物の力を披露することなく地に倒れ伏した。

「そ、そんな、キメラも一撃で……これが、ゴジ……」

言い切る間もなく、背後に回ったゴジータの手刀がスライスの首もとを叩き、強制的に意識をブラックアウトさせる。流れるような作業、これがNo. 1ヒーローの力だと、改めて実感したジェントルは最早笑うしかなかった。

「よし、それじゃあコイツらは俺がふん縛るから、ジェントルはラブラバと一緒に施設の皆の所へ向かって……」

「いえ、その役割は貴方が果たすべきでしょう。ここは私に任せて、ね」

言外に、さっさと家族を安心させてやれ。そう語ってウインクしてくるジェントルにゴジータは素直に嬉しくなった。

「………済まん。すぐに戻るから、此処は任せたぞ」

「任されたとも」

駆け出し、施設へ向かうゴジータ。家族を思いやるその後ろ姿をジェントルは微笑みながら見送った。



「くふ、くふくふくふ、遂に、遂に手に入れたぞ！」

某病院の地下深く。誰も立ち入ることを許されないその領域にて、とある研究者はほくそえむ。

「これさえあれば、ワシの……ワシとAFOの夢は更に高みへ至る事が出来る!!」

手にしているのは赤い結晶。酸化し、経年劣化しても、色褪せることのない輝きにドクターは満面の笑みを浮かべている。

側に控えている小型の脳無、とあるウイルスの個性を複製し、**“倍”**にする事が出来

る個性を使い、人知れずある施設に侵入し、ある物質の回収に成功した。

その施設の名は旧星の都。現在は使われる事はなく、嘗てのゴジータの過去が眠る場所。

「まさか、ワシが昔に不要だと捨てた施設の一つがあんな様な改造をされるとはのう。姫野葵め、余計な真似をしよる。だが、今はその余計な真似に感謝しよう」

そこは、ゴジータが戒めとして、忘れてはならない出来事として封印していた忌むべき場所。その地下にはゴジータ……後藤甚田が、ゴジータになるべく長年鍛え続けた禁断の地。

壁や床に染み付いた血は拭うことは出来ず、時間の経過と共に忘れられる筈だった場所。その一部を回収する、それこそが今回のヴィラン側の思惑であり、AFOの狙いでもあった。

“ゴジータの血”。嘗てない劇薬を手に入れたドクター、その笑みは何処までも喜びに歪み、シリンダーに入っている無数の黒い脳無の培養液を震わせるのだった。

記録46

青い炎が暗い夜の森を焼き、火の粉が夜空を照らし出す。向けられる殺意と悪意に晒されながら、それでも若きヒーローの卵は黙ってやられるわけにはいかないと、迫り来る炎の波をそれぞれのやり方で回避していく。

「ほらほらどうしたヒーロー!? そんなに避けたら折角の森が炭になっちゃうぞオ!」
「チツ、あの火傷野郎、無茶苦茶しやがる。森を焼いたら追い詰められるのはダメエだつて一緒だろうに!」

自分達を焼き殺そうと、ヴィランの放つ青い炎を前に爆豪は持ち前の反射神経と個性でもって回避する。

確かに目の前のヴィランの個性、炎による攻撃は範囲が広く確かに脅威的だ。このまま避け続けても森は焼かれ、何れは此方の逃げ道を塞いでくるだろうし、何より大気が焼かれる事で呼吸できる酸素量も減らされる。

しかし、それは相手も同じ筈。加えて言えばヴィランの炎は確かに高威力ではあるも

の、肝心のヴィランが己の個性に耐えきれておらず、体の節々が焦げているのが何よりの証拠だ。

自身の体すらも焼く程の火力。だが爆豪は自らを焼いても個性を平然と使っているヴィランの精神性こそが厄介だと分析する。

社会に仇なすヴィランの中でも、トップクラスでイカれているクソ野郎。先天性にしろ後天性にしろ、こう言う手合いを無力化するには、生半可な攻撃では足りない。故に、今の爆豪に求められるのは目の前のヴィランを無力化出来る程の最大火力での一撃必殺であった。

しかし悲しいかな、その最大火力を引き出すには今の爆豪には一瞬の間が必要になる。今の自分では目の前のヴィランを倒すことは難しいと、僅かな時間の合間に思考を巡らせて……………。

「半分野郎、奴の炎を一瞬防げ。次の瞬間、俺が決めてやる」

最善の一手を模索し、導きだす。迷いながらも、今の自分に出せる最強の一手を繰り出す為に、爆豪は他者を頼るという選択を取る。

「っ、やれんのか、爆豪?」

「やらなきやジリ貧だ。オールマイトが駆け付けるのを待つだけの木偶になりたくなくやあ、俺に従え!」

やれるかやれないかではない。やるしかないのだと、凶悪な笑みでヴィランを見据える爆豪の横顔を見て、轟も腹を決める。どのみち、炎に囲まれている今、自分達に退路はない。

後ろで寝ているムーンフィッシュなる殺人鬼も、いつ目を覚ますか分からない今、この状況を覆せるのは自分達だけ。オールマイトの救援を待つのではなく、自分達で脅威を乗り越える意思と覚悟を示さなければならぬ。

「作戦会議は終わったかよ。なら、大人しく焼かれろや」

「誰がッ!!」

ヴィランの放つ炎を波を、焦凍の氷の壁が塞ぎ止める。突然現れる氷の壁にヴィランの目は一瞬だけ見開かれるが、次の瞬間その顔を喜悦に歪ませる。

「——流石は最高傑作。エンデヴァーも拘る訳だ」

「っ、テメエ、何を言って——!?!」

「話は後にしやがれ半分野郎ッ!!」

意味深な言葉で挑発してくるヴィランに、案の定反応してしまう轟だが、爆豪の怒声がそれを掻き消す。相手の言葉にイチイチ反応せずに己のやるべき事に集中しようと、暗に怒鳴ってくる級友に己の不甲斐なさを嘯み締めながらも、轟は氷の出力を上げていく。

「けど、悲しいなあ轟焦凍、それだけ恵まれておきながら、お前は何一つ成し遂げること
は出来やしない。三番手に落ちたエンデヴァーといい、本当に面白いよなあお前は」
しかし、純粋な火力では向こうが上なのか、分厚い氷の壁を瞬く間に溶かしてくる。
このままでは不味いと轟が焦りを見せた時。

「ゴチャゴチャとうるせえなあ、そんなにお喋りしてえなら——」

爆発が、氷壁ごと青い炎を吹き飛ばしていく。周囲を蹂躪する程の爆風、これ迄とは
明らかに異なる爆破の威力に轟もヴィランの男も目を丸くさせる。

「病院のベッドの上で、死にながら語れやッ!!」

遙か頭上から輝く光を炸裂させ、加速度的に迫る爆豪に、ヴィランの男は本能的に嫌
な予感を感じた。あれを受けてはならないと、学生でありながらふぎけた火力を持つ爆
豪に戦慄を覚えるヴィランは、舌打ちと共に青い炎を解き放つ。

しかし、その青い炎が届くことはない。加速し、それでいて尚持ち前の動体視力で避
ける爆豪は、離れる轟を認識して一直線にヴィランへ呐喊していく。

「くたばりやがれエツ！ クラスターインパクトオツ！」

瞬間、轟音が周辺一帯に轟き、爆風が大地を抉る。回転という遠心力を加えての威力
の底上げは、想像以上に跳ね上がり、その一撃は周辺の木々を根刮ぎ吹き飛ばし、着弾
地点は巨大なクレーターが出来上がっていた。

「はあ、はあ、クソが」

しかし、その一撃を放つことが出来ても、爆豪の表情は暗いまま。忌々しそうに歯を食い縛る爆豪の横顔を見て、轟はまさかと青ざめる。

「いやあ、危なかったねえ茶毘。おじさん、結構良い仕事したんじゃない?」

「…………おせえぞコンプレス、何処で遊んでいやがった」

クレーターの端、未だ生い茂る木々の上に佇むヴィラン。その横には新たに現れた仮面のヴィランが明るく振る舞いながらそこにいた。

「おじさんはおじさんでお仕事さ。ほれ、取り敢えず二人。此方でゲットしておいたぜ。ていうか、まずは助けしてくれたことを感謝しろよ。マジでギリギリで死ぬかと思っただけど?」

コンプレスと呼ばれるヴィランは、自慢げに懐からそれぞれビー玉サイズのそれを二つ取り出す。それらを見てまさかと爆豪と轟は目を見開く。

コンプレスの手中にある二つのビー玉、その中には同じクラスメイトである障子目蔵と常闇踏陰が閉じ込められていた。

直後、爆豪は掌のニトロを爆発させて加速。二人を取り戻そうと手を伸ばすが……。

「おっと、なんだ、やっぱりバテているか」

「あれだけの威力なんだ。そりやデメリットもあるわな」

先のクラスターインパクトは、サポートアイテムという補助があつて初めて使われるべき技。己の手と腕、更に内部の汗腺を著しく消耗させてしまった爆豪には、既にこれ迄の様な爆発的加速は見込めなくなつていた。

「爆豪ツ!!」

既に限界に差し掛かっている爆豪を助けるため、氷壁を作つてヴィランの間に割つて入る。

「爆豪! 兎に角今は此処から離れるぞ!」

「出来るかバカが! 向こうにはクラスの連中が二人も捕まつてるんだぞ! 此処で取

り返さねえでどうする!!」

「けど、その体じゃあ!」

駆け付け、助け起こそうとする轟の手を爆豪は振り払う。逃げようとする轟に対し、爆豪は逃げないと反論する。

それは、己の自尊心からではない。目の前の捕まつたクラスメイトを助けなければというヒーローとしての素養が、爆豪から撤退の選択肢を消してしまつている。

此処で自分が食らい付かねば、誰が二人を助け出す。ふらつく体に入力ながら立ち上がる爆豪に対して……。

「——悲しいなあ、轟焦凍」

「ッ!？」

轟の張った氷の壁は呆気なく脆く崩れ去ってしまう。氷壁の先に佇む二つの影、三日月のように口元を歪めるヴィランの顔には微塵も自分達の敗北を予期していない。

「お前だけだ。この状況で、お前だけが取り残されている。本当に期待はずれだぜ、それでもお前はエンデヴァアの最高傑作かよ」

「——一体、テメエは何なんだよ。なんでそんなにもエンデヴァアを引き合いに出してくるんだ!？」

先程からずっと、事ある度にエンデヴァアを引き合いに出してくる。やたらと此方に干渉してくる茶毘なるヴィランに、いい加減苛つき始めた焦凍に対し、茶毘は何処までも虚仮にするかのように嗤う。

「ウツゼエなあ、いい加減その口を黙らせてやる。掛かってこいよクソフランケン」

「ハッ、其処まで強がれば大したもんだ。だが、状況は正しく把握しろよヒーロー。そんな状態で俺の炎を避けられるのか?」

「関係ねえ、テメエはヴィランで、俺はヒーローだ。だったら、やることは変わんねえだろうが」

「ハハ、いいなお前。焼き殺してやるよ」

青い炎が迫る。この距離では外しようがないし、避けようがない。迫り来る熱の凶器を前にそれでも前にも前に進もうと前屈みになる爆豪を前に……。

「デトロイト——SMASHッ!!」

それは現れた。離れた位置から繰り出される拳、拳圧となつて吹き荒れるそれは、茶毘の放つ青い炎を蠟燭の火の如く掻き消していく。

「済まない二人とも、もう大丈夫。何故って? ——私が来たッ!!」

男が、空から降ってくる。その顔に満面の笑みを携えて、最高のNo. 2はやつてきた。

オールマイト。有り得ざる存在を前に、コンプレスと茶毘は頬をひくつかせた。



「CAROLAINA——SMASHッ!!」

交差した両手の手刀から繰り出される一撃、OFAの45%にまで引き上げたそれは、目の前のヴィランの肉体にXの打撃の痕を刻み込んで吹き飛ばす。

岩壁に叩き付けられ、動かなくなった脳無。自分の力で初めてヴィランを打ち倒せた事に戸惑いながらも、デクは傷だらけとなった自身の体を構うことなく、出水洗汰を背にして残された少女のヴィランへ向き直る。

「出久兄ちゃん、傷が!」

「大丈夫。急所は外してあるし、殆どは掠り傷さ。でも気は抜けない。ごめんだけど、もう少し僕の後ろに下がって!」

デクの体は、今倒した重機のようなヴィランと目の前の少女によって傷だらけとなっていた。しかし、何れも軽傷や掠り傷程度で済んでおり、戦闘続行には問題ない程度。

しかし、脳無の方で時間を取られてしまった所為で状況の方は把握出来ていなかった。先の大きな爆発音といい、他の皆は無事なのか。気取られないように振る舞いながらも、それでも不安に思ってしまう出久の視界に、白刃が割り込んでくる。

急所へ目掛けて奮われるそれを、咄嗟に回避する。相手の死角を突いた嫌な攻撃、これ迄幾度となく振るわれた凶刃を出久は寸前で回避する。

しかし、少女の刃はそれで終わることはない。手にしていた刃の持ち方を変えて、横へ薙ぐように振るわれる。明らかに慣れた手つきに驚くが、これも脳無と連携されて何度も見てきたモノ。体をのけ反らせ、バク転の要領で回避し、その足で少女の手にする刃を弾き飛ばす。

次の瞬間、反撃に転じようとしていた出久の動きを察した少女は、笑いながら距離を取る。その身のこなしと明らかに戦い慣れしている少女の動きに出久は戦慄を覚えた。加えて。

「——あは、格好いいなあ、可愛いなあ、傷だらけであの脳無に勝っちゃう出久君、最つつつ高にカツコかあいなあ、出来ればお持ち帰りしたいなあ。そしてそのまま結婚を前提にしたお付き合いをしたいなあ」

これである。好意なのか殺意なのか、それとも別の感情を抱いているのか、顔を赤くさせながらモジモジしている少女に出久はどうもやりにくさを感じる。

「どうして、どうして君みたいなのがこんなことをしているんだ。結婚、お付き合い？

一体、何を言ってる……」

「出久兄ちゃん……」

「僕は君の事なんて何一つ知らないぞ!!」

「出久兄ちゃん……」

相手がヴィランとは言え、自分の事を好きだとか結婚してとか宣ってくる元陰キヤな出久も、どうやら一杯一杯なご様子。若干テンパリながら見当違いな事を口にするヒーローの卵に、流石の洗汰も引き気味だった。

「トガです。渡我、渡我被身子。是非とも覚えていて下さい。出久きゅん。趣味は好きな人の血をチウチウする事。最近の専らの推しはヒーローデクこと緑谷出久君です！」

「っ！ 僕のヒーロー名まで!？」

「私、好きな人の事は全部知りたい質ですので」

ヒーローとしてデビューしておらず、クラスメイトか学校側でしか知られる筈のない情報まで掴まれている。此処へ来て事の重大さに気付いた出久は表情を引き締めて目の前の渡我被身子なるヴィランの確保に意識を切り替える。

「——このまま、君を逃がす訳にはいかない。大人しく捕まって貰うぞ、渡我被身子!」

「出久君が私の事を知りたがっている!？」 あはあ、今日は本ツツツ当に最高です!」

赤く、悦びに満ちたその顔を、更に喜悦に歪ませる渡我被身子。スカートの中で隠していたもう一本のナイフを取り出し、腰を低くさせて獣のように鋭く走る彼女に対し、出久は落ち着いてその動きを予測する。

既に、彼女の行動パターンは掴んでいる。伊達に何度も切り付けられていないと、緑

谷出久は拳を握り締めて次の一撃に備える。

そして、互いに間合いを入り、一撃を放とうとした時。二人の間に黒い靄の壁が現れる。

「ッ!？」

「これは、黒霧の!？」

USJの一件で、目の前の靄が敵連合のモノだと知った出久は巻き込まれないよう咄嗟に洗汰を抱えてその場から跳んで距離を取る。

幸い、呑み込まれる事の無かった出久だが、渡我は靄に呑まれたのか「そんなあー! もう少し出久きゅんとお話ししたかったのにイイー!!」という叫び声を残して消えていった。

残された緑谷出久と出水洗汰。二人のいる空間はまるで今までの戦いが嘘だったかのように静まり返っている。しかし、出久の全身に走るジクジクとした痛みが夢ではないと物語っている。

ともあれ、突然のヴィランによる襲撃はヒーロー側の勝利という形で幕を下ろした。しかし、被害はゼロで終わる事なく……。

プツシーキャッツの一人、ラグドールがヴィランによって連れ去られた。

記録 47

林間合宿先で起きたヴィラン襲撃事件。緑谷含めた全員が楽しみにしていた林間合宿は、最悪の形で幕を下ろした。

軽傷者多数、更にはプロヒーロー一人の行方不明。過去に類を見ない惨状を前に、世間は大いに騒ぎ、不安に震えていた。

被害はゼロではない。しかし、それでも狙われた生徒達が全員無事だという報せは、僅かだがメディアの追及を和らげる事に成功した。狙われた生徒達を守るために奮戦したオールマイトを讃える一方、他のヒーローに対し、ネット界限では心なき罵倒で扱き下ろす者達も少なからず存在している。

今日も暇なコメンテーターが、あれやこれやと難癖付けて雄英を批難している。病室に備え付けられたテレビを消して、舌打ちをしながら爆豪は通路へ歩み出る。

「あ、かつちゃん。もう起きてきていいの?」

「テメエと違って柔な鍛え方してねえんだよカス、そういうテメエは、無駄にボロカスに

なつてンじゃねえか」

通路先でバツタリと出会したのは、身体中のあちこちに手当てを受けた緑谷だった。現在、襲われた多くのヒーロー科の生徒達は同じ病院で厄介になっており、殆どの生徒達は検査入院という形で世話になっている。

爆豪と緑谷もその内の一人、爆豪としては単なるスタミナ切れでバテていただけなので、この様な待遇は正直不満だった。どこも悪くないのに入院とか、人をバカにするのも程がある。悪態を吐き捨てる爆豪に、医者達は大いに困り果てたという。

「僕もそんな大した傷じゃないんだけど……親御さんを安心させる為に、念のためにちゃんと治していけって言われちゃって」

緑谷も身体中に傷こそ付いているが、どれも軽傷で本人が言う通り入院する程の怪我ではない。それでも一応の入院を勧めてくるのは、偏にヴィランに襲われたと言う配慮と、外の人間との接触を一時的に絶つ方便でもあった。

現在、入院している者以外のヒーロー科の生徒達はA組B組問わず、自宅で待機状態となっている。家族を安心させる為と、情報の漏洩を防ぐ為である。

「……電話越しだけど、母さんに凄く心配させちゃった。かつちゃんはどうだった？

おばさん、元気だった？」

「クソみてえに元氣だったわ。あのババア、仮にも入院している息子に『あ、そう』はねえだろ。ったく」

「アハハ、相変わらずのようでも何より……」

爆豪の母親は良くも悪くも快活の人。所々息子である勝己を軽く見ている節があるが、それは息子の強さを信じているが故の態度であると……信じたい。

「……………」

そんな中、二人の会話は長く続く事はなく、気まずい空気が流れ始めていた。いや、分かっている。二人が気掛かりとなっているのは、敵連合に拐われたとされる一人のプロヒーローだ。

ラグドール。プッシーキャッツの一人であり、緑谷達の個性伸ばしの特訓に付き合ってくれた恩人。彼女の行方が分からないまま、既に一日が経過しようとしている。

「ラグドール、無事だと良いんだけど……」

「奴等は殺すんじゃないやなく誘拐を選択した。その時点で何らかの目的があるだろうから、そうすぐに始末される事はねえ筈だ」

「うん。僕もそう思う。でも、何でワザワザ誘拐なんて手段を取ったんだろう？ 身代

金？ これも雄英の信頼を落とすため？」

「No. 1ヒーローの身内を襲うには安すぎる理由だな」

そう、林間合宿を中止し、入院することになった爆豪達が次に驚愕したのは、No. 1ヒーローであるゴジータの身内を強襲した事だった。

現在、秀治院学園はヴィラン襲撃により休校中。此方も林間合宿の件と同様に大々的に報じられているが、此方はどちらかと言うとゴジータの暴れっぷりに注目が集まっている様だ。

襲つてきたヴィランを一方的に蹂躪していくゴジータ、特に氷を操るヴィランを空中でピンボールの様に弾き飛ばすその様は、お茶の間の人達を騒然とさせた。

空気が弾け、氷は砕かれ、ヴィランが吹っ飛んでいく。それに追い付いて追い討ちを仕掛けるゴジータを見て、人々は畏れ震え上がった。

更に噂ではあるものの、どうやらゴジータの出身施設も襲撃された様で、此方もゴジータ自身が対応し決着を付けたらしい。

以上から、この件もネットでは大いに盛り上がっているようだ。『ゴジータヤバすぎだの、』『ヴィラン二人を相手に大人げない』とか『容赦なき過ぎクソワロタ』など、ネットミーム満載でお祭り騒ぎとなっている。

—— 閑話休題。

学園の方はゴジータが駆け付けてくれたお陰で学校施設以外で大した損害は出ておらず、休校状態が解除されるのも時間の問題だろう。しかし、二人が問題視しているの

は全く別の事だ。

恐らく、今回の襲撃事件は予め企てられたもの。秀治院学園と雄英の林間合宿、そして施設。これら三つの場所を同時にヴィランが襲撃したのは決して偶然などではない。明らかに何らかの目的を持った同時多発のテロだ。

だが、その核となる理由が分からない。計画的でありながら何処か散漫なヴィランの動きに二人が頭を悩ませていると、通路の奥から第三者達がやってきた。

「緑谷、爆豪！ 二人とも元気そうで良かったな！」

「上鳴君！ 峰田君も！ お見舞いに来てくれたの？」

「ああ、本当は家で自粛しているべきなんだろうけど、どうもジツとしてらんなくてさ。先生に直談判してクラスメイトの見舞いという形で外出する許可を貰ったんだ」

「うちらもいるよー！」

「二人とも、思ったよりも元気そうで安心したよー！ A組から入院者出たの、緑谷と爆豪とヤオモモ位だもんねー！」

続々現れるクラスメイト達、その中には一時的とは言えヴィランに捕まっていた障子と常闇、そして一緒に戦った轟の姿もあった。

「爆豪、あの時は足引っ張っちゃまって悪かった。お前の判断がなけりやあ、俺は多分あの茶毘ってヴィランにやられていた」

「俺もだ。オールマイトから聞いたが、お前がヴィランを足止めしてくれたんだな。なに俺は………本当に済まなかった」

「誠に陳謝……！」

「ウツゼエな、雁首揃って頭下げんな暑苦しい。そこで此処は病院の通路だ。周りの迷惑にならねえように散れや！」

先日の自分のいたらなさを痛感し、思い知った三人は、爆豪の足を引つ張つたと思いき直に頭を下げる。対して爆豪は足を引つ張られた覚えはない為、純粹に彼等から頭を下げられる意味を理解していなかった。

「ケロ、相変わらずのようで安心したわ」

「B組の連中も全員無事だったし、後はラグドールを見付けるだけだな」

「その事なんだけど、オイラさつきナースの人達が話をしているのを聞いたんだ」

「聞いたって、何を？」

「今、オールマイトとゴジータが警察の人と一緒に八百万の所に来ているみたいなんだってさー！」

峰田のその言葉に、A組全員が理解する。

反撃に出るんだ。遂に始まったヒーロー達の逆襲に、緑谷はゴクリと喉を鳴らして唾を呑み、爆豪は不敵に笑みを溢した。



「そうか、君がヴィラン達への発信器を取り付けたのか」

「私はあくまで発信器を創造しただけ、あの状況下で私の言葉を理解し、信じて行動してくれたのは泡瀬さんですわ」

同・病院の別室。ヴィランの放つガスにて一時的な麻痺症状に犯された八百万やおよろずも百は軽い症状で少量とは言え、ガスを吸い込んでしまった事を危惧し、他の生徒達と同様に用意された部屋にて安静にしていた。

元々大した被害では無かった為、警察との応答が出来るだけの体力もあつた彼女は、やって来た警察に話を通し、簡単な事情聴取を受けることとなつた。

「ありがとう八百万少女、君のお陰でヴィランの根城を特定出来るかもしれない。あの緊迫した状況の中で——大したものだよ」

「私の行いは微々たるもの、それで皆さんのお役に立てるのなら安いものですわ」

あの時、ガスを吸い込み意識が朦朧としていた所を、B組の泡瀬洋雪に助けられ、幾多もの幸運のお陰で生き延び、発信器というヴィラン達の拠点を暴く最初の一手を差し込む事が出来た。

八百万のヒーローとしての矜持。学生でありながら、それでも立ち向かう少年少女達の勇氣に、オールライトは素直に嬉しく思った。

ウンウンと頷くオールライト、警察としては複雑な心境な塚内。そんな二人の間をゴジータが通る。

強い瞳で見上げてくる八百万。後は任せると、そう伝えてくる彼女に笑みを浮かべて……。

「——頑張ったな」

ワシワシと頭を撫でた。

「お前の……お前達の勇氣、絶対無駄にはしない。ヴィラン達を捕まえてラグドールも必ず助け出す。だから——安心して休んでろ」

体育祭で成績が揮わず、一時期成績不振に陥った八百万だったが、クラスの皆との生

活の中で持ち直し、期末テストでは見事合格を勝ち取った。

そんな彼女の成長を嬉しく思えたのはオールマイトだけではない。一度だけとは言え、面と向かつて指導した事のあるゴジータとしても、彼女の成長ぶりには喜んでいた。

「……………後の事、お願いしますわ」

「おう、任せておけ」

父親以外の男性に初めて頭を撫でられた。しかし、嫌ではない。何処か慣れた手付きで頭を撫でてくるゴジータの手、それが離れるのを少しだけ惜しく思いながら、後を託すただけ言い残し八百万はベッドに横になる。

そして、彼女の病室を後にした三人はそれぞれやるべき事を成すために通路を歩き出す。

「それで、実際どうなんだ塚内さん」

「現在、総力を上げて捜索中。とだけ言っておくよ。内容が内容だ。出来るだけ外に情報を漏らしたくはない」

徹底的な情報封鎖。此処まで来るといつそ分かりやすい。今現在世論の動きを鑑みれば、世間は雄英側に問題があると思ひ込み、これを指摘したい事だろう。

なら、タイミング的には雄英の謝罪会見に被せる形か。其処まで先を読んだゴジータは口にする事なく、大人しく塚内の言葉を聞き入れた。

「けれど、良いのかいゴジータ。ご家族の事が心配なら、無理に作戦に参加しなくても………」

「そりやあないぜオールマイト、身内が襲われて引つ込んでたんじゃ、No. 1ヒーローの肩書きが泣くぜ?」

「いや、そうかもしれないが………」

「家族は皆俺の家に一時的に避難している。地元の人達も協力してくれるし、次期サイドキックも守りに入らせている。今回の件を片づけるまで、誰一人近付けさせはしねえよ。………それに」

「?」

「此処で俺だけ除け者にされたら、俺自身が怒りでどうにかなりそうだ」

ゴジータの一瞬だけ見せたヒーローらしからぬ笑み、底冷えするゴジータの表情に凶悪ヴィランと何度も対峙してきた塚内すらも冷や汗が流れた。

「因みにオールマイト、アンタから見てどう思う? 今回の件、例の悪の黒幕が出てくると思うか?」

「ああ、これだけ大きな事が起きたんだ。我々の動き次第では——必ず、奴も動き出す」

「そうか、それを聞いて安心したぜ」

自然と、ゴジータの握る拳に力が入る。メキメキと骨がなり、うつつらと気を纏い始める。待機状態から臨戦態勢に入りつつあるゴジータに、塚内は気合いを入れすぎだと呆れた。

そんな時、ふと視線を感じた。なんだと思いい視線の感じる方角へ視線を向ければ、向こう側の通路で入院していた筈の爆豪が佇んでいた。

何か自分に言いたいことでもあるのか？ 不思議に思うゴジータだが、爆豪は一向に近付いてこようとはしない。

一体何なのか、そろそろ行かないと二人に置いていかれると少しだけ焦るゴジータに………爆豪はふくれた面で拳を突き出してきた。

『負けんじゃねえぞ』

一瞬、そんな台詞が聞こえた気がした。

「——ハッ、卵が、生意気じゃねえか」

そんな爆豪にゴジータもまた拳を突き出す。当然だと、先の凶悪な笑みとは違ういつもの不敵な笑み。天下無敵の超ヒーローの様子に満足した爆豪は、そのまま振り返って自室へ戻っていく。

あの様子から、どうやら二度寝でもするのだろう。これからヴィランとの決戦が始まるというのに、呑気なものだ。

けれど、これで肩の張りが少し和らいだ。いつも通り、何も変わらない。先行く二人に追い付くように、ゴジータは再び歩み出す。

病院を抜けた先の空は、少しだけ曇っていた。

記録48

某所。先のヴィランによる同時多発襲撃事件を経て、件のヴィランである敵連合に関する重要な情報を獲得した警察は、その情報を元にとある作戦を立案し実行する為にヒーロー達を集めることにした。

今、雄英側は合宿先の拠点が襲われた事に関して世論からの追及を受け止める為、急遽謝罪会見を開いており、テレビには引率者であり担任の相澤と赤慈郎の二人が頭を下げる形で映し出されている。

ヒーローとしてヴィランと戦い、生徒を守るために尽力していた二人が糾弾の矢面に立たされている。丁寧に事情を説明するも、メディア側は雄英の不誠実な発言と視聴率の為にあの手この手を使って挑発紛いの質問をしてくる。

此処でも目撃される個性社会の歪み、守られて当然と思ひ込む人々の醜悪さに目を瞑りながら、後藤甚田ことゴジータは作戦指揮を任されている塚内の言葉に耳を傾ける。

「———それでは、改めて説明させて貰うぞ。現在敵連合の潜伏先と思われる場所は二

つ、一つは神野にある今は使われていない廃工場、もう一つは正反対に位置するバー。この二つの何れかが敵連合の拠点だと思われる」

彼から告げられる作戦は至ってシンプル。明らかにされている二つの潜伏先の同時奇襲、これ迄先手を打たれていたのに、今回は此方から打って出ることが出来る。

春から続くヴィラン組織との決着を前に、集められたヒーロー達はそれぞれ気合いを入れて、約一名程この作戦に懐疑的であった。

「それで？ そのヴィラン連合を潰す為に、何故我々まで出向く必要が？ 噂の連中を叩くだけなら、そのNo. 1とNo. 2に任せればいいのではないか？」

異議を唱えるのはNo. 3ヒーロー、エンデヴァー。その問いには僅かな敵意が滲んでいるものの、確かな意図が含まれている。

確かに、敵連合の脅威と厄介さは日に日に増している。今回の作戦は電撃戦、相手に反撃の余地も許さない劇的なモノになり、その為に秘密裏且つ可能な限り多くのヒーローをかき集めたいのも納得がいく。

だが、それでもNo. 1とNo. 2がいて更に戦力を欲する意味がエンデヴァーには分からなかった。

ゴジータとオールマイト、二人の実力はヒーロー飽和社会と揶揄される現代の中でも頂点に位置する実力者。業腹ではあるものの、その事についてはエンデヴァー自身も認

めており、認めているからこそ純粹に疑問に思う。

この二人が参加しているのなら、果たして自分達の必要性はあるのかと。

「——今回の同時多発襲撃、既に何名かのヒーローには察しが付いているかもしれないが、この件には裏社会の闇が大きく関わっている可能性がある」

多少の誤魔化しはあるものの、言葉を選んだ塚内の説得の言葉はエンデヴァー達へすんなりと入っていく。

「ヴィラン自体が裏社会の象徴……という意味ではない。我々警察側は調査の末、今回の騒動は敵連合だけによる犯行ではないと断定している」

「……………そう言うことか」

塚内の説明に納得した様子の子のエンデヴァーは、顎に手を添えて頷く。今回の事件は、敵連合という一つの組織だけでなく、多くの裏の組織が暗躍して起きた出来事である。

今回の作戦は謂わば敵連合以外の組織の情報を得る為のモノ、裏で繋がっている組織の規模と内容、それを一度で把握できる絶好の好機。

そのチャンスを掴み取るには、可能な限りヒーロー達の手を借りたい。そう締め括る塚内の言葉に誰も異論を挟むことはなく、作戦の説明は恙無く終了した。

「さて、肝心な組分けだが、『バー』の方にはオールマイトを筆頭にエンデヴァー、シンリンカムイ、グラントリノ、エッジショットを向かわせ」

「廃工場にはゴジータを筆頭にベストジーニスト、ギャングオルカ、虎、そしてMt.レ
 デイを宛がわせて貰う。此方には例の脳無が多数潜んでいるだけでなく、囚われたラグ
 ドールもいる可能性が高い。充分に気を付けてくれ。———それじゃあ頼むぞヒー
 ロー達！ 作戦開始ッ！」

遂に始まった敵連合一網打尽への作戦。塚内の号令を皮切りに、ヒーロー達は急ぎ現
 場へ急行する。

その最中。

「オールマイト、そっちは任せませ」

「ああ、後輩達に尻拭いをさせてしまっている以上、私も本気でやらせて貰うよ」

現場へ向かうオールマイトに、ゴジータは一言激励を飛ばす。今回のヴィラン襲撃の
 際、生徒達の無事を確保する為に敢えてヴィランとの戦闘を促したオールマイト。

本来なら糾弾されるべきは自分にあるというのに、もし自分でも同じ判断をしたと、
 後輩である相澤達に押し切られる形でこの場に来てしまった。

画面の向こうで未だ深々と頭を下げている相澤イレザードブラドキンと赤慈郎、ヒーローとして、教師と

して最善を尽くした二人がこれ以上批難の声を浴びせられるのは忍びない。

速攻でカタを付ける。喻え其処に黒幕である奴がいるのだとしても、これ以上の悲劇
 を生み出さない為に、オールマイトは闘争心を抑えながら現場へ向かう。

「……さて、それじゃあ俺達も行くとしよう。ベストジーニスト、宜しく頼むぜ」
「面制圧なら任せて欲しい。」

エンデヴァーからの軽口も受け流し、ゴジータ達も現場へ向かう。今回で雄英襲撃から続くヴィランによる騒動も終わりにする。身内に手を出され、内心怒り心頭のゴジータに別の意味で心配の視線を向ける塚内。

彼が見つめるNo.1ヒーローの背中はいつも以上に大きく見えた。



「クソッ！　なんでこうも思い通りに事が運ばない！」

閑散とした「バー」に苛ついた様子の男の怒号が響く。男の名は死柄木弔、件の騒ぎになっている敵連合の中樞を担い、事実上のリーダーとなっている。

そんな彼の背後に立つのは同じ敵連合に属する面々、義爛という裏社会のブローカーである彼の紹介で集ったアウトロー集団。そんな彼等も痼癩を起こすリーダーの様子にゲンナリとしていた。

「スピナーとマグネは捕まり、生徒達は誰一人捕まえられず、成果は雑魚ヒーロー一人だけ。責めるつもりはねえが、この結果は少々拍子抜けだぜ」

「嘘吐け！　絶対責めてるだろ！　ごめんな、俺達頑張ったんだけどさ……」

「轟焦凍は、もう少し煽れれば上手くいったと思うんだけどな」

「いや仕方ねえよ。事前の話ではオールマイトがいるなんて情報はなかったんだ。スピナーとマグネには申し訳無いが、一先ず俺達の無事を喜ぼうぜ」

思いどおりにかず、企みの悉くが潰されている。何一つ思い通りに行かない現実に業を煮やす死柄木だが、同時に上手く行っていない現実への冷静な分析をする理性が残されていた。

一体何故、此処まで上手く物事が運ばないのか。オールマイトがいたという原因は兎も角、其処に至る経緯に思考を巡らせる。

「……………そう言えば黒霧、今雄英には先生が送ったつっすパイがいた筈だよな？」

「はい。話を聞く限りでは……………」

「マジで!?! そんなのいんの!?!」

「じゃあ理由は明白じゃねえか。ソイツが仕事をしなかった所為で俺達は危うく嵌められ掛けたんじゃねえか」

黒霧の肯定の一言に、覆面のヴィラン——トウワイスはシンプルに驚き、茶毘はソイツが今回の失敗の原因だと嘆息を溢す。

今回の襲撃失敗の原因は、そのスパイが事前報告を怠った為。明確な原因が明らかになった事で憤慨する面々に対し、死柄杓もまた怒りで震えていた。

「オールマイトといい、ゴジータといい、トツプヒーロー様達はつくづく俺の神経を逆撫でしやがる。ああマジで殺してやりてえ。粉々にして犬の餌にしてやりてえよ」

「ねえねえ弔君、なんか異能なんちゃらつて人達が抗議したいつてめつちや電話掛けてくるんですけど? オール何とかって人と連絡させろつてうるさいんですけど?」

「知るか、切つて放置しろ」

同じ敵連合の一人であるトガヒミコの言葉を乱雑に一蹴するが、ヒミコ自身は特に気にすることもなく「はいわかりましたあ」とガチャ切りする。

「……ですが死柄木弔、再三に渡る雄英への襲撃によって雄英は嘗てない程に信用を落としています。ヒーロー社会に猜疑心を抱かせるには上々と判断してもいいのでは？」

「——ああ、そうだな。悪かったよ黒霧、お前らも」

「おつ、珍しく素直、おじさん若者の成長にちよつとウルツて来ちゃった」

「私も絶賛成長期ですよー！ この間もバスト測ったら以前よりも……」

「ストオーツプ!! トガちゃんダメだから！ そう言うのは言葉にしちゃダメだから！

後で俺にだけ教えてくれー」

「———なんか、アイツだけテンション可笑しくね？」

「何でも愛しのデク様に会って感激したんだとよ」

「はあ？」

相変わらず騒騒しい連中に辟易とする弔だが、実際にそれなりに使えるし、話して楽しい時もある。

さあ、次はどんな手でヒーロー社会を追い詰めようか。社会を憎み、ヒーローを憎む男は今日も世界を崩す企みを練ろうとした時……。

「——私がツー！——来たああア!!」

そのヒーローは、呆気なく訪れた。



神野区、某所。廃工場だったそこは跡形もなく消し飛び、周囲の建物は崩れ大勢の脳無が蔓延っている。

夥しい数の脳無に囲まれ、傷だらけのヒーロー達は身構える。数は劣勢、更にはラグドールと気絶したMt.レディを守りながらの防衛戦というハンデを背負わされたベ stjornist は、それでも怯むことなく悪の軍勢と対峙する。

しかし、そんな逆境の中、彼は微塵も不安を抱くことはない。何故なら……。」「やあ、初めましてゴジータ。君の事は色々と知っているよ。親無しの孤児、何処の馬の骨とも分らない怪物君」

「そういうお前は、オールマイトから逃げた腰抜けか。尻尾巻いてみつともねえなあ、間抜け」

トツプヒーローですら尻込みする殺気を放つ悪を前に、最強に頼もしいヒーローが立っているのだから。

記録49

——数分前、神野廃工場前。

「よし、情報通りの位置取り。ここで間違いないな」

眼前に聳え立つ廃工場。夜という時間帯も相まって外観の雰囲気は如何にもな空気に包まれていた。

「なんつーか、如何にもって場所だな。何で今まで誰も気付かなかつたんだ？」

「保有する会社があつたのだろう。仮に架空のモノだとしても、書類として認知されている以上、それが架空のモノだという証明が無ければ手出しが出来ん。そして、人間は関心の無い真実の是非をワザワザ暴く事はしない。今回のケースは特にな」

廃工場を見て思い浮かんだ率直な疑問に答えるギャングオルカ、人の心理を利用した巧妙な手口だと語る強面ヒーローの説明にゴジータは成る程と頷いた。

「廃工場という一見価値の無いモノ、故にヴィラン犯罪の温床になりやすい。手入れを怠ったデニムが、カビにまみれるのと同じ理屈だな」

「そ、そうなのですか？」

「真に受けるなMt.レディ、デニムが移るぞ」

事あるごとに物事をデニムに例えるベストジーニスト。この人つてただデニム言いたいだけなんじゃねえの？ ゴジータは訝しんだ。

「ラグドール、どうか無事でいてくれ」

ふと隣を見れば、鋭い眼光で工場を睨む虎がいた。彼もまたゴジータの知人、その経緯から色々世話になり、対自然災害で諸々の知識を叩き込んでくれた恩人。

平静を装いながら、それでもチームメイトの安否を祈る虎の様子にゴジータは何も言えなくなった。

……作戦開始時刻まであと僅か、参加しているヒーローの面々が自然と言葉数が少なくなるのと同時に。

ヒーロー達に装備されたインカムに作戦開始の合図が送られる。

「合図が来た。Mt.レディ！」

「了解！」

ベストジーニストの指示のもと、巨大化して廃工場を踏みつける。初撃で建物を半壊させておきながら、周辺への被害を抑えている絶妙な力加減。ヒーローとして成長しているMt.レディにゴジータは素直に感心した。

「よし、最初の一撃は成功したな」

「Mt. レディは巨大化したまま周辺を警戒！」

「はい！」

初撃で相手の設備の大半を機能不全に陥らせたのは良かった。しかし、奥からウジャウジャと現れる人造ヴィラン——脳無の出現にゴジータ達の表情は引き締まる。

「さて、それじゃあ俺とバストジーニスト、オルカさんで制圧するとしますか。虎さんはラグドールの搜索を頼む」

「任された」

「さて、やるとするか」

「迅速に済ませるとしよう」

仕事人な雰囲気です拳を鳴らすギャングオルカ。虎にラグドールの搜索を一任し、そんな彼に脳無からの邪魔が入らないよう目の前の脳無達はゴジータ達が引き受ける。

押し寄せる脳無の群れ。しかし歴戦のトップヒーローにとつては大した脅威ではなく、同様に巨大化という強力な個性を持つMt. レディやベテランヒーローである虎にとつても其処までの障害には至らず、忽ちに討ち洩らした脳無を仕留めていく。

瞬く間に脳無の群れは制圧され、脳無の格納庫と思われる廃工場は沈黙した。作戦開始から五分も経っていない電撃作戦、此処までは順調だった。

「ラグドール！ しつかりしろ、ラグドール！ 何故目を覚まさない！」

「特殊な薬で眠らされているのかも知れない。虎さん、急いでラグドールを安全な場所へ」

培養液に浸かっていたラグドールを発見、救助に成功した虎は必死に彼女に呼び掛けるが、天真爛漫な彼女らしくない臆気な返事が返ってくるだけ、見るからに普通ではないラグドールに一先ずゴジータは安全な場所へ下がるように指示を出す。

これで施設の九割は制圧した。後は僅かばかりの敷地を調べて黒幕の尻尾を掴むだけ、この分なら早く決着は付くだろう。

あとは向こうでオールマイト達が実行犯等を取り押さえるのを待つばかり。これなら頃合いを見て自分も向かうべきか……いや。

（何だ、この気配？）

奥の暗闇から突如感じた気味の悪い気配、幾つもの気配が折り重なり、歪み、無理矢理融合したような気味の悪さ。連なる無数の気配が連鎖反応の如く膨れ上がったのを感じたゴジータは、瞬時に気を解放してベストジーニスト達を庇うように前に出る。

「Mt. レディ！ 今すぐ、締め！」

「え、ゴジータ？」

「一体何を？」

突然のゴジータの言葉に戸惑うMt.レディ、虎もラグドールの事で頭が一杯だった様で、反応が遅れてしまった。

一番速く対応出来たのは、ベストジョーニストただ一人。ギヤングオルカも次点で察して対応に掛けるが……。

「遅いよ、何もかも………」

瞬間、廃工場は跡形もなく吹き飛んだ。



——同時刻、ゴジータ改め後藤甚田宅。

先のヴィラン襲撃により、しばらくの間休校になった秀治院学園。そこに通う御幸と恵の城鐘兄妹の二人は施設の子供達と施設長である姫野葵と共に義理の長兄である甚田の家に一時的に身を寄せる形となった。

「飛田さん、相場さん、私達の為に貴重な時間を割いてくださり、本当に有り難うございます」

施設長である姫野葵、子供達にとって母親同然でもある彼女は、今回件の騒動が片付くまでの間、護衛を請け負ってくれた人物であるヒーロー志望のジエントル飛田弾柔郎とラブラバ相場愛美に誠心誠意を込めた感謝の言葉を綴りながら、深々と頭を下げた。

「いいいえ、紳士として市民を守るのは当然の義務です。礼は不要ですよマダム」

「しかし、先日のことといい、守って頂いている以上、やはり最低限の礼節は必要かと」
これがあのゴジータを育てた女性。何と真摯に人と向き合っているのか。己の事をゴジータから聞き及んでいる筈なのに、事前情報の色眼鏡に惑わされることなく自身の目で己と向き合ってくれている。

こんな人もいるのか…目の前の誠意の塊のような女性は体格は小柄なラブラバとそんなに変わらないのに、器が大きい。

誠実で、且つ真摯な女性の態度にジエントルは不覚ながら圧倒された。

「葵さん、片付け終わったよ」

「子供達はもう寝かし付けたから、皆さんも少し休んでください」

「御幸、恵、二人ともごめんね。子供達の面倒を見させちゃって」

「気にしないでくれよ。俺も恵ちゃんもただじつとしているより体を動かしていた方が気が紛れるし」

「ま、どうせ学校もなくて暇だし、甚田兄さんがゴタゴタを片付けるまでの時間潰しにもなるから別に気にしなくていい」

子供達の面倒を押し付けてしまつて申し訳無いと思う葵だが、二人としては子供達と触れ合う事で心が落ち着いたので、特に気にする事はなかった。どちらかと言えば、今頃ヴィランのアジトに乗り込んでいるゴジータに心を傾けている葵こそが二人にとつては心配だった。

「幸い、此処の周辺地域の人達は甚兄のお陰で皆協力的だ。警察の人も交代制で周辺を見回つてくれているし、葵さんもゆつくり休んでくれ」

「ジェントルさんも。守つてくれるのはありがたいですけど、ヒーローのお仕事は体が資本なんで、ちゃんと休んで下さいね？」

「うん、そうね。御幸の言う通りね」

「いやはや、その若さでしつかりしている。流石はゴジータの弟妹達、ですな」

「……………まあ、あの人無茶苦茶やるから、ちゃんとしなきゃなつて」

手放しで褒めてくるジエントルに御幸は氣恥ずかしそうに頬を掻く。けど、それでも強く否定しない辺り、本人的にも満更ではないようだ。

ジエントルも葵も事件が起きてからマトモに休んでいない。それを案じた二人に甘え、少しだけ休息しようとして席を立った時、それは聞こえてきた。

『り、臨時、臨時ニュースです！ 突如神野の一面にて大規模な爆発が発生！ 被害は甚大、繰り返します！ 被害は甚大です！ ああ、なんて事だ!!』

消していた筈のテレビから流れてきたニュース、一体何事かと駆け付けるジエントル達の目に飛び込んで来たのは、壊滅した街の一面。

ビルは崩れ、アスファルトの地面は抉り、配水管が破裂してあちこちから水飛沫が立ち上る。まるで爆心地、悲劇と呼ぶには凄惨過ぎる光景にジエントル達は息を呑んだ。

一体、何人の人間が巻き込まれているのか。いや、そもそも生存者はいるのか？ 凄惨な光景を前に誰もが愕然としていた時……。

「——大丈夫だよ」

ソファアールから、にゅつと手が伸びる。丁度御幸達の視界の死角の所に潜んでいたその子に、一同目を剝いた。

「ちよ、ちよつとアイ!?!」

「お前、寝てたんじゃ………」

御幸と恵の質問に応える事なく、少女はテレビへ指を差す。一体何だと、戸惑いながらテレビへ視線を向けると……。

『あ、あの黄金の光、まさか……：……：そう！ ゴジータです！ ゴジータが大勢の人達を後にヴィランらしき人物と相対しています！ 信じられない、まさかあの一瞬で、あれだけの人々を救助したとでもいうのか!?!』

爆心地の中心に佇む黄金の戦士、その後ろには煤だらけになりながらも傷一つ負っていない人達が困惑した様子で座り込んでいた。マジか、物理的に不可能な出来事をあつさりやり遂げた画面の向こうのゴジータに、ジエントルや御幸が愕然とした様子で口を開けている一方で。

「ゴジータ！ 最っつっつ高!!」

両の目に星を宿した少女は、その満面の笑みを浮かべ画面の向こうの最強ヒーローを見つめていた。



爆発、衝撃、襲い来る情報の海。しかし何れもゴジータにとって脅威ではなく、彼が見据えるのはこの衝撃に巻き込まれる人々の事。

ヒーローの本質は、助ける事。その事を母校から骨の髄にまで染み付けられたゴジータは、目の前の諸悪の根元を前に一つの選択を即時に下す。

———0.001秒。それが衝撃に巻き込まれた人々を救出する際にゴジータの費やした時間。残業していた者、寝ていた者、趣味に勤んでいた者、家族との団欒を楽しんでいた者、それら全てを救助し終える頃には、瓦礫は地に落ち砂塵が舞っていた。

舞い上がる砂塵が全て落ちると、頭になるこの惨劇を作り出した元凶が、一瞬驚いた様子を見せるが、次いで、まるで愉快そうに鼻で笑う。

其処から繰り出される煽りの応酬、巨悪は事実を元に、ゴジータは更に皮肉を混ぜて言葉の刃を振り下ろす。

「ふふ、強がるなよヒーロー。確かに君の強さは本物かもしれない。あの一瞬でこれだけの人々を救い出したんだ。その反動のダメージは相当のモノだろ？」

言われて初めてベストジーニストは気付く。今の衝撃は間違はなく目の前のヴィランによるもの、しかしあれだけの規模でありながら、驚く程に自分達にダメージがない。唯一巻き込まれたMt. レディも、気絶程度で済んでいる。なら、一体何が……いや、誰が肩代わりしたと言うのか。

口にするまでもない、その全てはゴジータによって受け止められていた。体のあちこちに付いた傷が、それを物語っている。

……いや、本音を言えばそれだけではない。巻き込まれた人々の救助に使った0.001秒の世界、それはまさにゴジータが身を切る思いで行った救助作業だった。

音速を超え、光に迫る速度で動き、その衝撃を外部に洩らさず、全てを己の内側に収束させる。物理法則を度外視したゴジータの救助活動は、ゴジータ自身に深いダメージを刻み込んでいたのだ。

初めて目の当たりにするゴジータの血、それを見たベストジーニストは己の不甲斐なさに歯噛みするが、元凶は更なる一手を指してくる。

「さて、ダメ押しだ。守るべき人が多いこの状況で、お荷物のヒーローを抱えながら僕のハイエンド達に勝てるかな!？」

嗤いながら、男は高らかに右手を振り上げる。瞬間、数体の黒い脳無が、巨悪と同様に笑いながら瓦礫の中から這い出てくる。

恐らく、何らかの転移系の個性を使つて送られてきたのだろう。見るからにこれ迄と違う脳無にベストジーニストとギャングオルカは戦慄する。

守るべきモノが多いこの状況で、果たして何処まで捌ける？ いや、やるしかないのだ！ 覚悟を決めた二人。

——瞬間。

「ああ、ビックリしたぜ」

黒に染まるハイエンド達は、文字通り弾け飛んだ。

「——この程度で俺をどうにか出来ると思っている、その低脳っぷりにな」

記録50

ハイエンド。目の前の鉄の仮面を取り付けたヴィランが言うには、囲んでいた脳無はその何れもが精鋭と呼ばれる個体だった。

ベストジーニストも、ギャングオルカも、長年のヒーローとしての勘で理解していたし、ベテランヒーローである虎もまた察していた。

一体一体が自分達では厳しい手強い怪物、その全てがたつた一人のヒーローによつて瞬殺された。保有していたであろう再生の余地すら残さず、跡形もなく弾け飛んだ光景に、ヒーロー側だけでなく救助された人々も、そして目の前のヴィランも固まつて言葉を失っていた。

圧倒的。普段から人々はゴジータにその言葉を送っているが、最早その範疇にすら収まらない気がする。体のあちこちが傷付き、血を流していても、当のゴジータ本人は全く堪えた様子がない。

立ち尽くすヴィラン、挑発的な煽りはナリを潜め、驚愕がその思考を埋め尽くしてい

る。

「——どうした顔面工場、お得意の挑発は品切れか？ 正直期待外れだが………タイミング的には申し分無い」

「ッ!？」

「私があ、来たッ!!」

次の瞬間、ゴジータの隣に何かが飛来する。砂埃を舞い散らしながら、瓦礫等は決して周囲に散らばらせたりしない絶妙な力加減、相変わらず上手いなと感心するゴジータの隣で、現^{オール}N^o.2^{マイル}ヒーローは立ち上がる。

「済まない。待たせたなゴジータ、皆もー」

「いや、良いタイミングだぜオールマイト。そっちの方はどうした?」

「ああ、情けないことに死柄木弔とワープ個性の黒霧、そして青い炎を操る茶毘、これら三名は突然現れた脳無のどさくさに紛れて逃がしてしまった」

「そっちも、中々に大変そうだな」

「ああ、だが向こうは塚内君達が詰めている。彼等が捕まるのも時間の問題さ。………さて」

相変わらず人を安心させる笑みを浮かべるオールマイトだが、眼前のヴィランを見るとその笑みを消す。

「久しぶりだなオールフオーワン、まさか本当に生きていたとはね」

「——オールマイト、君もまだヒーローに固執しているのか。若い次代にN.O. 1の座を明け渡したのなら、いい加減引退すれば良いものを」

「H A！H A！H Aアツ!! 言われなくてもそのつもりさ。やり残しさえ片付ければ、喜んで引退を受け入れよう」

苦々しく吐き出す呪詛も、今のオールマイトには通用しない。過去の因縁から、己には決して軽くない恨み辛みを抱いている筈なのに、目の前のオールマイトからはその片鱗が微塵も窺えない。

寧ろ、自分の姿を見て余裕すら保っている。鉄仮面の男——AFOは、そんなオールマイトの様子に内心で苛立ちを募らせる。

「それに、貴様は一つ勘違いをしている。私はN.O. 1の座を譲ったのではない。彼が、自分の力で勝ち取った結果さ」

(望んで得たものではなかったけどな)

不敵に笑うオールマイトに聞こえないようにゴジータは当時の感情を吐露する。しかし、嫌ではない。

「お前の言う通り、時代は進む。なら、私は大人しく次に託し、潔くヒーローから足を洗おう。……だがなAFO、それはお前と言うやり残しを片付けてからだ！」

「2対1だ、卑怯とは言うなよ？ 最初に数の利をかけてきたのはテメエだ」

救助された人々をベストジーニスト達に任せ、ゴジータとオールマイトは巨悪であるAFOに一歩ずつ進んでいく。並び立つNo.1とNo.2の、画面越しでメディアから流されるその光景にファンもそうでないものも期待に胸を膨らませた。

もう負ける気はしない。誰もがそう思う中……。

「——く、クッククック」

悪意は嘲笑する。

「?」

笑っている。この追い詰められた状況で、嗤っていられるその精神性に二人のトップヒーローは僅かに困惑する。

追い詰められ過ぎて錯乱したか？ いや違う。目の前の悪意の塊は自棄になって笑うなんて事はしないし、そもそもこの男は常に嗤っている。

何か隠しているのか、ゴジータが周辺に気を配り始めた時———そいつは来た。

突如飛来してくる謎の物体。黒に染まるそれはこれ迄ゴジータが瞬殺していた個体、ハイエンドと呼ばれるモノと酷似している。

しかし———。

(なんだ、この力は)

砂塵の中から振り抜かれる拳を片手で受け止めながら、ゴジータは目を剥く。これ迄対峙してきたヴィランとは一線を画す力、片手で難なく抑えられる筈のそれは、ゴジータの予想に反してグングン強くなっていく。

「仮面の脳無、だど？」

舞い散る煙の中から現れるのは、気味の悪い仮面を被った脳無。……いや、脳無にしては脳が剥き出しにされていないし、人としての規格もそこまで崩れていない。

なのに、出される出力の桁が違う。片手で抑えられる筈だった力の差は、しかして振り払われて瓦解する。

再び振り抜かれる拳、崩された姿勢で防ぐのは無理だと、ゴジータは両手を交差して防御に入る。

瞬間、激突された拳から凄まじい衝撃がゴジータを襲い、天下無敵のNo. 1ヒーローは、空高く舞い上がってしまった。

「——なんだと？」

宙に浮かび、空高く押し上げられたゴジータは仮面の脳無の力に瞠目する。

嘗て、此処まで力で圧されたのはゴジータの経験上記憶にない。イメージトレーニングではあつても、現実世界で初めて体験する力に、ゴジータは目を見開く。

これ程の力、下手をしなくてもオールマイイト以上。いや、純粋な臂力を鑑みれば——

「俺に迫る、か。不味いな……」

自分に近い強い強者との初めての戦闘、自身の経験の浅さに舌打ちするゴジータだが、言葉とは裏腹にその口元は微かに喜悦に歪んでいる。無意識レベルでの闘争への歓喜、本人には一切の自覚はなく、しかし確かな心の高揚に気持ちのモチベーションは徐々に高まっていく。

下では自分が吹き飛ばされた事に動揺しているオールマイト、しかし流石は歴戦のヒーローだけあつて直ぐに気持ちを立て直し、目の前のAFOへ肉薄している。

救助された人達もベストジーニストやギャングオルカ達のお陰で避難していく。な
こっちは自分の方で対処するでしょう。

「ッ!!」

声にならない雄叫びを吐き、脳無が迫る。一度の跳躍で此処まで到達できる辺り、本
当に目の前の脳無は特別製なんだと思ひ知る。

再び振り抜かれる拳、しかし既にその動きを見切っていたゴジータは繰り出される拳
を受け流し、返し of 蹴りを仮面の脳無の首に叩き込む。

並のヴィランが相手なら骨がへし折れる程の威力、しかし目の前の改造ヴィランはゴ
ジータの一撃にビクともせず、獣のように首を横に激しく振っている。

耐久力も並外れている。なら、もう少しギアを上げようとゴジータが気を解放した瞬間……。

「カアツ!!」

「ツ!?!」

目の前の脳無はゴジータを真似るように、ゴジータ同様に気を解放してみせた。重力に逆らわず空中に佇んでいる事といい、これではまるで自分自身と戦っているみたいだ。

けど……。

「ガアアアアツ!!」

「成る程、確かに面白いな。此処まで俺を模倣しているなら、確かにあの余裕ぶりも窺える。けどな——」

振り抜かれた脳無の拳を、再びゴジータは片手で掴み取る。脳無は…バカめ、このまま振り抜いてやると、さつきと同じ様に力で押し退けようとする。

が——動かない。掴み取られた右手は、まるで石化されたかのように動かない。なんだこれはと戸惑う脳無、対するゴジータは……。

「この程度で俺を殺れるって思うのは、ちよつと浅はかが過ぎたな」

空いた片手で眼の前の仮面脳無にストレートを叩き込む。やはりゴジータは違うと、

メディアを通してお茶の間に映し出される光景に、人々は安堵して目を輝かせた。



「ハハハハ、流石はN.O. 1ヒーローだ。虎の子のS. ハイエンドが全く歯が立たないとはね」

嗤う。悪意の源はただ笑う。楽しそうに、愉しそうに、目の前の猛るオールマイトを前にして全く感心を示さないその様は、さながら映画を前にした子供のよう。

「貴様は侮りすぎた。私の友を、N.O. 1ヒーローを。お前の願いは叶わない。今度こそ此処で終わりにするぞ、AFO！」

「終わる？ バカを言うなよオールマイト、此処からが面白いんじゃないか。僕の友人がもたらした研究の成果、最強のコピーは果たして本物に届き得るのかってね」

突撃してくるオールマイトをいなし、AFOは愉しげに笑う。

「何を訳の分からない事を！」

「なに、つい最近面白い物を手に入れてね。No.1ヒーローの血は、果たして脳無にどれ程の力をもたらしてくれるのか。僕の友人はそればかりを追求していてね」

No.1ヒーローの血、その言葉を耳にした瞬間、オールマイトの中で嫌な予感が浮かび上がってくる。

「けど、困った事にゴジータの個性因子は並の器には収まらなくてね、どれだけ希釈して薄めても、用意した空っぽの脳無に入れては、素体ごと食い散らかしてしまったよ」

まるで自由研究の成果を嬉々として話す子供のようだった。失敗と挫折を繰り返し、それでも辿り着いた一つの仮定。そこに辿り着いたAFOは鉄仮面の奥で口元を歪ませる。

「十数体の脳無が消滅した所で友は一つの仮説を立てた。脳無は元々死んでいた者、ゴジータの個性因子を受け付けられないのは、偏に器が死んでいるからではないのか？
てき」

「——まさか」

「そう！ 最初から死んでいる脳無でダメなら、生きているモノを使えばいい！ 幸いなことに、友人の所には処分するのに困った出来損ないが多くあってね、結果は成功!!

彼は記念すべき適合者第一号つて訳さ！」

悪意は謳う。

「さあ、ゴジータ。No. 1ヒーロー！ 君は、可愛い弟妹達から父親を奪うことが出来るのかな？」



——破片が舞う。キラキラと、音を立てて崩れるその仮面はまるでガラス細工の様に脆く、軽かった。

まるで防御面として機能していない。呆気に取られるゴジータだが、今までの動きを見て目の前の改造脳無の様子は見切っている。

たとえ相手が何者だろうと倒す。それが、目の前の嘗て生きた人間だったとしても。そして……。

「」
今度は、ゴジータの動きが制止した。

同時に、脳裏に浮かぶのは一緒に生活して間もない頃の弟妹達の事。

『父親に会いたくないかって？ 別に、興味ねえよ。俺達を捨てた親に。どうして今さら顔合わせなきやいけないんだよ』

『……私の家族は、此処にいる皆だけだよ』

どうして、二人の顔が浮かぶのか。どうして、目の前の改造脳無と重なるのか。

瞬間、ゴジータの直感が囁き出す。目の前のヴィランは本当は脳無などではなく……。

『み……ゆ……き……』

砕けた仮面の奥から、既視感のある顔が出てきた。

「
—
親父？
」

記録51

「その個性因子は、まるで輝きを失わない宝石の様だった」

仮面を被った脳無の振るう一撃、これ迄の脳無とは明らかに異なる空気を纏う怪物の一撃は、単純な膂力でゴジータを吹き飛ばしてみせた。

相棒のゴジータが吹き飛ばされた事実を目を剥くオールマイトだが、悔しいことに手助けに行くことは出来ない。何故なら、あの脳無を生み出したとされる元凶が、目の前で啖いながら其処にいるのだから。

「経年劣化しようとも、決して色褪せることのない輝き。しかし、その輝き故か、どれだけ希釈されようとも、決して僕の思う通りにはならなかった。まるで嘗ての君を見ている様だよ、オールマイト」

「AFO、貴様は！」

「憤るなよ、僕だって君のしてきた事には腹を立てているんだぜ？　僕の友人達を悉く潰し、僕の顔だって潰したんだから」

「よく言う！ 貴様にとって単なる捨て駒に過ぎない癖に」

猛るオールマイトを前に、余裕を崩さない AFO。オールマイトには分かっていた、どれだけ分厚い鉄の仮面を被ろうとも、目の前の悪意の塊はその下にある笑みを崩さない。

そう、この男は全てに対して嗤っている。人々を悪意で従え、なぶり、己の思いのままに操り、使い潰す。全てが自分の掌の上であり、何もかもが自分の為にあるのだと。

「私は許せない。全てを利用し、壊し、踏みにじる貴様を！ 命は、貴様の玩具ではないんだぞ!!」

吼える。拳を握り締め、憤りを隠さないオールマイトは笑う悪意に拳を振り抜く。

「貴様の目論みは此処で断ち切る！ 覚悟しろ、AFO!!」

「また僕を殺すかい？ オールマイト!!」

斯くして、両者は激突する。



「——親父?」

テレビに映し出される光景、ヘリから伝えられる神野の惨状に言葉を失う一方、城鐘御幸は一瞬だけ映った映像に思考が停止していた。

見間違いかもしれない。実際に画面は粗かったし、メディア側の安全を配慮して距離もあつた事から、城鐘御幸は今目にした人物の顔がただの見間違いだと思つた。

だつて、あの男が彼処にいるわけがないのだ。母に騙され、自分達を捨て、自暴自棄に姿を消したあの男が、今さら自分達の前に現れる訳がない。

しかし、どんなに否定したくても一瞬だけ目にしたあの人の顔が頭から離れなくて………チラリと横を見れば、顔色を真っ青にした妹が震えながらテレビを見詰めていた。

「……………お父さん、なの?」

「つ、レディ、今なんと?」

ボソリと呟いた恵の言葉、偶然耳にしたジエントルが尋ねた事で、事態は明らかになつていく。

今、ゴジータを殴り飛ばして戦っているのは自分達を捨てた実の父親だ。憎くて、嫌いで、関わりたくない。何処か自分達の知らない所で野垂れ死んでいて欲しいとすら思った。

そんな父親が、どういうわけかN.O. 1ヒーローと戦って——いや、殺し合いをしている。

ゴジータ……後藤甚田が父に負けるとは思えない。けど、それはつまり、父がゴジータに殺され——。

「はあ、はあ、はあ、はあ………」

呼吸が浅くなり、心臓の鼓動が早くなる。

『——ごめんな』

（なんで、なんで今こんなこと思い出してるの!? アイツは、あの男は！ 私とお兄を捨てたのに！）

——本当に？

脳裏にふと浮かんだ疑問。捨てられた事実ばかりに意識が向いて、大事なモノを見落としていく気がする。

果たしてあの時の父は自分達を捨てたのか。もしかしたら、自分達を守る為に、自分達の前から姿を消したのではないか？

待つて、待つて、待つて、待つて!!

逸る心臓の鼓動、これ迄の認識が崩れ、足下が崩れる様な感覚。もしかしたら、自分
はとんでもない勘違いをしていたのかもしれない。

けれど、それを訂正する事も否定する事も出来ない。堂々巡りの思考に呼吸が出来な
くなつた所で……………。

「大丈夫だよ」

「……………先、生?」

そんな時、二人を正気に戻すように普段より強い口調の葵の言葉が二人の耳を叩く。
手を握り、意識を此方に引つ張るように手繰り寄せながら、姫野葵は二人にいう。

「大丈夫。大丈夫だよ、貴方達のお父さんは絶対に二人の所に帰ってくる」

「で、でも先生、お父さんが、ゴジータとた、戦つて……………」

変わり果てた姿。肉体は不自然に膨れ上がつて最後に見た時とは明らかに異質。人
の手が加えられた怪物と成り果てた父が、ゴジータに襲い掛かっている。

噂の脳無という怪物に改造された父が、No. 1ヒーローと戦っている。それは、覆
らない事実であり、それは決して避けられない未来。訪れる現実を前に押し潰されそう
になる恵だが、そんな彼女を支える様に姫野葵はその手を優しく握り締めた。

「大丈夫、大丈夫よ恵ちゃん。きっと、二人のお父さんは戻ってくるわ。だつて……………貴

方達のお兄ちゃんは、最強のヒーローなんだから」

「先……生え……」

それは、根拠のない自信。しかし、この場にいる誰よりも姫野葵は信じていた。ゴ

ジータ——後藤甚田という男を。

何故なら、彼こそが天下無敵の最強ヒーローなのだから。映し出される画面に映るゴジータ、ヴィランに成り果てた二人の父を相手に防戦一方の彼に、それでも葵は信じて見守り続けていた。



「あ、ああああ、ああああアツ!!」

「チツ、本当に見境が失くなってきたな」

既に自我と意識は混濁し、力加減など一切顧みずに彼は暴れ続けた。

眼下に広がる街並、其処に住む人々を巻き込まないように立ち回りながら相手をするゴジータだが、端からみればその様子は防戦一方の様に映った事だろう。

現に、下を見れば此方を心配した面持ちで見上げてくる市民達がいる。ゴジータは大丈夫なのか、No. 1ヒーローは負けたりしないよな？ 確信から疑惑に変わりつつある市民達の反応にゴジータは内心憤りを感じていた。

けれど、彼等が不安に思うのも無理はない。現に自分は目の前のヴィランが改造された城鐘兄妹の父だと知ってから、一度たりとも此方から手を出してはいないのだから。

果たして自分から手を出して良いものか、あの技を出すにしても、今の自分では特別な条件でないと成功する確率は五割を切る。

可愛い城鐘兄妹達の父親を助け出すには躊躇してしまう割合。意気揚々と繰り出してダメでしたーなんて、目も当てられない。

だが、このまま防いだり避けたりするのも限界がある。何故なら………。

「???」
「???」
「?!」

このヴィランは学習している。本人の自我や意識とは別に、注ぎ込まれたゴジータの

個性因子が、この場における最適解——ヒーロー側にとつての最悪の選択を突きつけてきた。

光がヴィランの手から放たれる。其処に込められたエネルギーの密度は、同系統の技を扱えるゴジータだけが理解できたそれを、躊躇なく下の街に向けて放つ。

数は三つ、加速する光の玉を瞬時に追いついたゴジータは、それぞれを別方向の空へと打ち返す。

瞬間、夜だった街の空が突然日中に変わる。そう錯覚するほどの光が神野の街を覆い尽くし、人々を混乱の底へ叩き落とした。

やはり、籠が外れている。いや、外されている。本能の赴くままに破壊活動を行うヴィラン、人々の不安を除く為にも、早急にこの暴れまわる怪物を何とかしなくてはならない。

けれど、目の前のヴィランは御幸や恵の父親。改造され、意識も自我も奪われてしまっている彼を、果たして倒す事は出来るのか？

そして、それは二人の唯一の血縁を自分の手で踏みにじると同じ。出来るのか？今の自分に？

その思考の淀みが、ヴィランの付け入る隙となる。ゴジータの個性因子を埋め込まれ、暴走状態となった目の前のヴィランは本能の赴くままに戦う。

振り抜かれた蹴り、咄嗟に受け止めるが今のゴジータに受けきる余裕はなかった。吹き飛び、地に落ちる。

落ちた先で待つていたのは、さっきの廃工場跡地だった。

どうやら戻ってきたらしい。瓦礫を押し退けて立ち上がるゴジータは周囲を見渡すと、事態が既に動きつつある事に気付く。

目を覚ましたらしいMt.レディは、既にボロボロになっているベストジーニストとギャングオルカを庇う様に覆い被さっている。どうやら、偉そうに自分を見下ろしているのつぺらぼうにやられたらしい。

察するに、自分がああのヴィランに吹き飛ばされている間、相当事態は進んでしまったらしい。それも、大分悪い方向へ。

気を感じられる事から、まだ二人は生きてはいる。しかし、ゴジータが気に掛けた事はそれだけじゃない。

「……………オールマイト?」

更地となった大地に、膝を屈し掛けている男がいた。普段自分達を前にしていた時のようなマッスルフォームではなく、少しばかり縮み、小さくなった八木俊典としての姿。

自慢の二本の触角は垂れ下がり、その顔には絶望が張り付いていた。自分が離れていた間に何があった? 困惑しているゴジータを、今度は空中で佇んでいたのつぺらぼう

が嗤いながら声を掛けてくる。

「やあ、随分と遅かったねえゴジータ。その様子だと、僕の自慢の傀儡の相手は中々に有意義だったみたいだね」

「——お前、さっきの鉄仮面か。工場地帯みたいなの仮面の下はそんな風になったのか、仮面を被る意味が無いんじゃないやねえか？」

「ハハハ、流石は次代の No. 1 だ。そのボロ雑巾よりよほどユーモアに溢れている。でも、強がりには感心しないな、見ていて醜いから」

口元を笑みで歪める黒幕の後ろに、例のヴィランが降り立つ。先程よりも筋肉が膨れ上がり、異形というより怪物のそれに近くなっていた。

「——オールマイトがお前なんぞに遅れを取るとは思えねえ、何をした？」

「なに、少しばかり真実を語っただけだよ。後で聞いてみるといい、それまでに君が生きていればの話だけだね」

瞬間、側に控えていたヴィランが駆ける。狙いはゴジータではなくオールマイト、虚ろの瞳で命令に従うその姿は、脳無よりも遙かに怪物だった。

迫り来るヴィランの突進をゴジータが受け止める。余波も、衝撃も、何もかもを受け止めるが、ゴジータの纏う服はポロポロに吹き飛んでいく。

臆て上半身が露になり、先の救助活動で傷だらけの姿が世間に見られる。嘗て無い N

0. 1の姿にテレビを通して目の当たりにしていたすべての人々は息を呑む。

「オールマイト、おい、しつかりしろ!!」

「ゴジータ、私は……………私は……………」

背後のオールマイトに声を掛けるが、オールマイトは既に折れ掛けていた。肉体ではなく、心が。

嘗ての相棒が見たことがない程に弱っている。当然、この姿の彼も全国に中継されており、人々には大きな衝撃を与えていることだろう。

ふと、ゴジータは空を見た。自分達の上空から少し離れた所からメディアのヘリが飛んでいる。恐らくは彼処から全国に映像が流れているのだろう。

きっと、多くの人々が見ている事だろう。お茶の間で、自分の部屋で、家族と一緒に、あるいは一人で、事の顛末を見守っているのだろう。

ヒーローの卵達も、彼等を見守る教師達も、そして……………自分を見守る家族も。嗚呼、情けない事に、この期に及んで自分は未だ勘違いをしていたらしい。

自分の愚かさに気付いた後藤甚田は、やれやれと笑みを浮かべる。それがのつぺらぼう—— A F Oには不敵に笑っているように見えた。

「……………君、笑っているのかい?」

「ああ、なんだか今の自分が酷く滑稽に思えて、つい、な」

そう、弟妹達の父親を奪う覚悟やら、秩序を守る為の決断とか、見当違いの事を考えていた。

自分は誰だ？ ゴジータだ。天下無敵の最強のヒーローが、突き付けられた選択肢に従うだけか？

答えは——否。

「俺がやるべき事は変わらねえ。たとえそれがどんな奴が相手で、どんなにその壁が高くとも！」

炎が舞い、稲妻が迸る。湧き上がる力の発露に肉薄していたヴィランは弾き飛ばされ、その迫力にAFOが後退る。

「俺が掴み取るのは、何時だつて最高最善の未来だ」

笑う。不敵に、快活に、ゴジータは笑う。

「だから、オールマイト」

「——」

「俺に——刮目しろ」

歩く。膨れ上がり、既に醜い化け物になりつつあるヴィランの前に、ゴジータは悠然と歩み寄る。無防備とすら思えるゴジータの佇まいに、本能に従う怪物は、振り上げた巨大な拳をゴジータに向けて振り下ろし……。

「遅えよ」

しかし、その一撃はゴジータが振り抜かれる拳によって容易く弾かれる。今まで防戦一方だった筈、なのにもまるで対抗できていない怪物に、AFOは初めて息を呑んだ。

「さあ、ガツンといくぜー」

打つ。拳を、蹴りを、肘を、膝を、ありとあらゆる打撃を目の前のヴィランに叩き込む。目にも映らない連打、軌跡だけを描き、衝撃が夜の暗闇を照らしていく。

ボロボロに破壊される肉体、しかし素体となった人物の個性の影響か、ヴィランの破損された肉体は瞬く間に修復されていく。

「無駄だよ、彼の個性は『修復』。そのヴィランには最早自我など無い。彼を止めるには君の取っておきで完全に消すしかない。さあ、消してみなよ、その力で！ その個性で、君の大事な家族の父親を殺してしまえばいい!!」

高らかに謳うAFO、そんな黒幕の男に対して、ゴジータは何処までも平静だった。何故なら、ゴジータが見ている未来のヴィジョンは既に違うものを映しているから。

「――仕上げだ」

瞬間、ゴジータは消える。超スピードでヴィランの認識範囲から逸脱したゴジータは、背後からヴィランの後頭部に膝蹴りを叩き込む。

ついで、宙返りをしながらの回し蹴り。振り向き様に顔面に受けてしまったヴィランは物理的にゴジータとの距離を空けてしまう。

地に降りる。その姿はいつそ優雅で、その佇まいは強者の貫禄。そんなゴジータを見てAFOは漸く気付く。怪我を負い、追い詰めたと思っていたNo. 1ヒーローは、その実、まるで本気を出していなかったのだと。

ゴジータが左手を、天に掲げる。開き、なにかを求める様に伸ばすゴジータの手にヒーローやヴィラン、画面向こうの市民を問わず全員の視線が集まり……。

それは現れる。

「あれは……なんだ？」

「虹色の、光？」

「——綺麗」

それは、小さな光だった。淡くて小さい、微かな希望の光。虹色に輝くそれを確かに握り締めたゴジータは、改造されたヴィラン——御幸と恵の父へ向き直る。

——ぞわりと、ある筈の無い恐怖に身震いする。怖い、負ける。既に自我など消失しているのに、まるで体が動かない。ゴジータの眼差しに射ぬかれたヴィランは、蛇に睨まれた蛙の如く硬直する。

しかし、それも一瞬。ゴジータの個性因子による闘争本能が、ヴィランを闘争へ誘う。

掛ける怪物、腕を引き上げ、渾身の力を込めて拳を振り抜く怪物に、ゴジータは静かに握り締めた光を放り投げる。

直撃。しかし止まらないヴィランの一撃はゴジータの額を確かに捉えた。しかし、ゴジータは揺るがない。

そして……。

「なにッ!？」

ゴジータの放った光を受けたヴィランは、内側から弾け飛んでいく。それは何処か幻想的で、衝撃的だった。

光が収まり、ヴィランは光と共に崩壊していく。あとに残されたのは、一般の男性。草臥れていて、けれど努力家の義弟御弟に何処か似ている。

力尽き、倒れるその男をゴジータは優しく受け止め……。

「——少しは、近付けたかな」

確かに感じられる鼓動に、ゴジータは笑みが溢れた。



その光景に、言葉を失う。正気を失い、自我を失っていた筈のヴィランに改造された男性は、まるで何事も無いように眠っている。

意識を失っている男性―彼をM t・レディに預けると、ゴジータは改めてA F Oに向き直る。傷だらけで、血を流し、それでも尚立ち続けているゴジータにオールマイトは確かなヒーロー像を目の当たりにした。

それに引き換え、自分はどうだ？ A F Oの戯言に踊らされ、先代の孫がヴィランに仕立て上げられていた事実^{トゥルーフォーム}に心が折れ、無惨に真の姿も晒してしまっている。

これが、平和の象徴の末路か。なんと滑稽、なんと無様。A F Oが自分の事を侮蔑するのも、オールマイトには否定できなかつた。

けれど……………。

(こんな私を応援してくれる人がいる。勝ってくれと叫んでいる人がいる)

遠くから聞こえてくる声、それが遠くから現状を見ている人々の言葉なのだ、オールマイトは知った。

勝てと、立ってくれと、自分の勝利を願ひ、祈り、声援を送ってくれる人達がいる。

——情けない。この期に及んで、自分はまた忘れてしまっていた。

『——どうしても辛い時があったら、お前の原典オリジンを思い出せ。それがきつと、お前に力を与えてくれるさ』

大事なこと。当たり前で、だけど難しい師の言葉。

立たなければ。たとえOFAが使えなくとも此処にいる以上——自分はオールマイトなのだ。

力の入らない膝を叩き、立ち上がろうとする。そんな彼の前に、一羽の小鳥が落ちた。恐らく、自分とAFOによる戦いの余波で被害を受けた動物なのだろう。小さく痙攣し、ただ死を待つだけとなったその小鳥を、オールマイトは両手で包み込んだ。

「済まない。ゴジータ、グラントリノ、ナイトアイ」

自分は、多くの人達に支えられてきた。支えられ、助けられ、四苦八苦としながらそれでも平和の象徴は戦ってこられた。

今の自分は、もう無個性の人間と何ら変わり無い。しかし——それでも………！

『無個性でも、貴方のようなヒーローになれますか!？』

その答えに報いる為に――。

「うおおおあああああつ!!」

オールマイトは立ち上がる。吼えて、叫んで、雄叫びをあげるオールマイトに人々はギョツと目を見開いた。

「……………へえ」

初めて見せるオールマイトの奇行にAFOすら戸惑うなか、ゴジータは感心したように笑みを浮かべた。

「オールマイト、このタイミングでモノにしがったか。流石はナチュラルボーンヒーロー」

相変わらず、オールマイトの体軀は縮んだまま。以前のような筋骨粒々とした姿はなく、その姿は中肉中背の一般市民そのもの。

しかし、その触角は逆立っていた。強く、逞しく、天に向かって突き立つ二本の触角。手にしていた小鳥を空へ翳す。すると鳥は一瞬光に包まれると、元気に空へと羽ばたいていく。

「――なんだ、その変わり様は?」

啞然とするAFO。何もかもを知り、何もかもを知っているつもりでいた怪物は、オールマイトの翡翠の眼光に射ぬかれて、無意識に後退る。

しかし、そんな黒幕の言葉に耳を貸さず、オールマイトはゴジータの隣まで歩み寄る。白い炎を身に纏い、力強い足取りで平和の象徴は大地に立つ。

「もういいのか？ 俺が片付けるまで、休んでも良かったんだぜ？」

「そうはいかないさ、奴との因縁は私が断つ。こればかりはゴジータ、君にも譲れないよ」

「上等、なら早い者勝ちだな」

大胆に、不敵に、二人のヒーローは笑い合う。

「——何者だ」

AFOは知らない。ゴジータしか持ち得ない筈の炎、彼の個性でしか知り得ない力が——何故かオールマイトにも伝播している。

目の前にいるのは、本当にオールマイトなのか？ 咄嗟に口から出てきた言葉に対し

て——。

「とつくにござんなんだろ？」

「私達はヒーロー、人々の確かな祈りを聞き、絶望を前に尚足掻く者————そして——」

「貴様を倒す者だ!!」

おぞましき悪意を前に、二人のヒーローが並び立つ。

記録52

その光景に、少年——爆豪勝己は自身の胸の裡に燃え滾る熱いモノが宿るのを感じた。

画面の向こうに映し出された光、小さかった光が瞬く間に大きくなっていく様子に、爆豪は拳を強く握り締めて眺めていた。

ボロボロになったNo. 1、一度は心が折れ掛けたNo. 2、どちらも爆豪にとつて憧れであり、目標でもあった人物達。

そんな彼等が再び、人々の希望を背負って立ち上がる。並び立つ二人のヒーローに爆豪は自身の体が震えるのを感じた。

「———そうだよ、あんた達は何時だつてそうだ……—」

どれだけピンチに陥っても、どれ程の窮地に落とされても、笑って乗り越える。勝つために立ち上がり、助けるために勝利する。その姿に、どうしても憧れてやまないからこそ。

「俺は——俺も、こんなヒーローに！」

なりたい。否、なってみせる。

爆豪勝己は今一度誓う。他の誰でもない、自分自身の魂に——。



「——行くぞー！」

駆ける。宙に浮かび、自分達を見下ろす悪意の塊の前に、二人のヒーローは走り出す。地を蹴り、音を置き去りにしながら、ゴジータとオールマイトは事の元凶であるAFOへと迫る。

不敵に笑いながら迫る二人、白と金の炎を纏う二人の迫力に圧されたAFOは無意識

ながら息を呑み——激昂した。

「——ふざけるなよ」

それは、何に對する怒りか。絶望を簡単に飛び越えたゴジータに？ 力を使い果たし、ただの木偶となったオールマイトの謎の復活に？ 恐らくは両方。

わなわなと震え、この世の理不尽を嘆くような怒りで、AFOは叫んだ。

「こんな、こんなご都合主義な展開が、罷り通つてなるものか！ お前達のやっつけていることは、世間への歪んだプロパガンダに他ならない!!」

「自分達の行いだけを善とするその意地汚さ！ 傲慢だ。傲慢にも程があるだろ、ええ!?! ヒーロー!!」

「たとえ貴様がどれだけ言葉を吐き捨てようと!」

「此処に、お前の戯れ言を鵜呑みにする奴はいねえよ」

挑発混じりの皮肉も、今の二人には通じない。そうしている間にも、白と金の炎は悪意のすぐそこへと迫り——。

「ッ!?!」

その一撃を叩き込む。重なり合う蹴りの一撃。それはAFOには読めなかった一撃で、これ迄のオールマイトでは有り得なかつた動き。

直線的で直情的、強力無比であるがそれ故に単純。以前のオールマイトなら、少しで

もペースを乱せば容易く対応できるモノが、ゴジータという異物が紛れ込んだだけで全くの別物になっている。

長くNo. 1の座に君臨していたオールマイト、平和の象徴と呼ばれた男は、その強さ故に並び立つ者がいなかった。

しかし、ゴジータが独りだったオールマイトの可能性を拡張してくれた。短い間のチームアップ、オールマイトと唯一肩を並べて戦った日々。その間、二人は互いを高める為に幾度となく組手をしてきた。

その回数は優に百を超える。互いに全力でこそなかったものの、真剣に取り組んだ事には変わりはない。動きの癖、挙動の緩急、手先の仕草に視線の誘導。

才能に溢れた者同士による化学反応は、オールマイトを更なる段階へと引き上げる。

——即ち、【気】の習得である。

【気】とはなにか、【気】とはどういった代物で、どの様な効果があるのか。至ったばかりの今のオールマイトでは【気】という概念をそこまで深く理解することは叶わない。ただ一つだけ言えるのは、今の自分でも戦えるということ。それがたとえ、時間制限付きのモノだとしても。

「オオオオオオッ!!」

走る。地を蹴り、翔び、跳躍する。吹き飛ぶAFOに追従し、オールマイトの怒りの

鉄拳が炸裂する。

「お、が、アあああッ!？」

そんな馬鹿なとAFOは憤る。何故自分が殴り飛ばされなければいけないのか、現在の状況の元凶を模索すると……………やはり、彼に行き着いた。

（全部、全部！ お前だ！ ゴジータ!! お前が、全ての元凶!!）

オールマイトがゴジータと似た力を発現しているのも、オールマイトが予想より弱っていないかったのも、全てはゴジータが原因。ならばお前を始末してやると、指先から鋭く黒い触手を伸ばすが……………。

「なんだこれ？ 脆ッ」

当然のごとく、ゴジータはそれらを粉碎する。並みの硬度なら微塵切りも訳はない自身の爪がアメ細工の様に碎かれる様を見て、AFOは狼狽える。

（何がヒーローだ。化物め!）

確かにゴジータは見た目こそはボロボロだ。身体中から血を流し、服が上半身はだけた事でのダメージの深刻さは素人目から見ても明らかだ。

しかし、それだけのダメージを受けて尚、ゴジータは平然としている。痛みがないのか、そもそもダメージになっていないのか、それとも……………この程度の痛みは日常茶飯事だったのか。もしも最後の正解だとすれば、目の前のヒーローは間違いなくイカれ

ている。

(だつたら、選択肢を増やしてあげよう!)

背中——脊柱から生える無数の黒い触手。指先だけでなく身体中至る所から生えるその姿は、異形よりも異形だった。

だが、次にAFOの気配が強くなるのを感じ取ったゴジータは奴の目的をいち早く看破する。自身を中心に集まるエネルギーが一つの方向に向けて収束されていく、それが離れた場所の町だとゴジータが察した瞬間、AFOの背中から巨大なプラズマ波が放出される。

「ッ!?!」

「ハハハハ! 漸く表情を歪めたねオールマイト! そうさ、君はまた間違えた! 君の過ちで、まだ無関係な人が死に絶えるぞ!!」

遅れて気付いたオールマイトの顔が歪む。無関係の人間が巻き込まれる、それはヒーローである者であれば一番嫌う外道的行い。これでオールマイトの隙が生まれる。其処から崩してやろうとAFOの口元が歪んだ瞬間……………。

「舐めんなよ」

光が進る。輝き、瞬間にプラズマ波を追い抜いたゴジータは、町に向けて放たれたプラズマ波を蹴り上げる。

粒子を蹴り上げるといふ不思議な光景に、AFOを含めた全員が目を見張る。物理的に有り得ない事象、物理学者なら発狂してしまいそうな事を平然とやつてのけるゴジータに、オールマイトは笑みを浮かべた。

(ああ、本当に、本当にスゴい奴だぜ君は)

今だから分かる。気という力に触れ、扱うようになったオールマイトは、ゴジータが普段から課していた枷に舌を巻く。

(もし、もし自分の考えが正しいのなら。ゴジータ、君は……)

「っ、それがどうした。此処で君達が僕を倒そうとも、訪れる未来は変わらない。オールマイト！ 君はその力で、師の血を絶やす気かい!? 志村菜奈の孫を！ 唯一の繋がりを!!」

「ッ!?!」

瞬間、AFOの渾身の挑発がオールマイトの神経を逆撫でた。どの口が、溢れる怒りに思考が焼き付いた時、AFOの口元が喜悦に歪む。

此処だ。激昂するオールマイトが見せる特大の隙、せめてもの嫌^{抵抗}からせ^{抵抗}として、ここでこの男には致命傷を負って貰う。

狙うは心臓、どんなに奇跡が起きても確実にヒーローの命をここで断つ。悪意と殺意に乗せられたAFOの黒い一撃は……。

「させねえよ」

「ッ!？」

「さつきからごちやごちやと、狙いがバレバレなんだよ、お前」

しかして、薙ぎ払うゴジータの拳によって砕かれる。

「ゴ、ゴジイイイタアアアッ!!!」

ここでも、どこでも、何一つとして自分の思い通りにならない事に、遂にAFOは憤怒に満ちた怒声を発した。今のオールマイトを殺れた千載一遇のチャンス、それが、さも当然の様に潰された事実にはAFOの余裕は完全に消し飛んだ。

「——ゴジータ」

(ああゴジータ、やつぱり君は………)

凄い奴だ。頼もしい後輩の背中に、オールマイトは自分の迂闊さに恥ずかしくなりながら、同時に頼もしく思えた。

目の前のヒーローは、文字通り全てを守る。人も、ヒーローも、ヴィランさえも。例えそれが、抑圧された力であっても、彼は大勢の人達を救う事が出来る。

そう、オールマイトも薄々感づいていた——普段から振るわれる彼の力は……ほんの一部に過ぎないという事に。【気】という力の一端に触れたことでその事実には気付いたオールマイトは、たとえ制限された環境の中でも、それでも人々の為に立ち上がってくれる

彼に、申し訳なく思うと同時に、嬉しさを覚えた。

「——オールマイト」

「っ！」

「アンタが決めろ、俺が合わせてやる」

そう言つて振り返り、不敵に笑いながら口にするゴジータにオールマイトもまた不敵に笑つた。

「全く、本当に生意気なヒーローだよ、君は！」

「そいつは重畳、……さあ、行くぞ。気を解放しろ!!」

力を爆発させる。ゴジータに言われた通り、全身から噴き出す力の奔流を最大限に解放してAFOに呐喊する。空を駆ける白と金の流星、AFOは自身の持てる全ての個性を使って迎え撃つも……。

その悉くが砕かれる。拳で、蹴りで、技で。人が織り成す人の力で、AFOの奪つて来たモノを打ち砕いていく。

「これで終わりだ！ AFO!!」

「オールマイトおっ!! ゴジータアッ!!」

高まり、折り合い、重なる力。怨嗟の声をあげる悪意の塊に、振り下ろされるのはヒーローの拳。

「W!!」
ダブル

「デトロイトオオオ——SMAAAAAAAAAAAAAAAAA SH
!!!」

繰り出される拳の一撃の前に、AFOは最後の賭けに出る。

「筋骨発条化」

「瞬発力×2」

「臂力増強×3」

「増殖」 「肥大化」 「鋌」

「エアウオーク」 「槍骨」

他にもプラズマ化や巨大化等の無数を掛け合わせ、巨大な握り拳を作り上げる。大きな、見上げる程の巨大な肉の塊の前に。

二人のヒーローは不敵に笑う。

瞬間、ぶつかり合う力が衝撃波を生み出し、周囲の雲を吹き飛ばしていく。嵐となり吹き荒れる衝撃の暴風、他のヒーロー達では決して割って入れない光景を前に……。

「——ああ」

立ち消え間近の炎を身に纏うNo.3が、焦がれる様に見つめていた。

均衡は一瞬、勝利したのは——。

「更に——」

「向こうへッ!!」

やはりこの二人。弾き飛ばし、無防備になったAFOに迫るのは力を解放した二人のヒーローの握り拳。

「Plus——Ultra!!!」

解き放たれた一撃は、確かにAFOを捉えて。

次の瞬間。衝撃が、地球を一周した。



「———」一体、何が起きたのでしょうか。常人でしかない我々では、状況の推移に頭が付いていきません」

神野区で起きた出来事、それら全てを理解するのに、なにも知らない人々は多くの時間を費やす事になるだろう。

多くの疑問、疑念が積み重なっている現状。しかしそれでも、一つだけ、たった一つの揺るがない事実があった。

「しかし、それでも確かな事実が此処に。巨悪は倒された。二人の偉大なるヒーローに!!」

へりに乗る女性レポーターは声を張り上げる。

「勝ったのは、ゴジータ&オールマイイト!!」

陥没した大地。その中心に佇む二人のヒーロー、それぞれの拳を天高く掲げ、立ち尽くすその姿は勝利のスタンディング。

二人の姿を全国に映し出されると、日本全土から歓声の聲が上がる。ポロポロになりながらも、しかしそれでも揺るがずに聳え立つ二人のヒーロー。

朝日が昇る。漸く訪れる夜の終わり、それでも人々の歓声は止むことはなく、万雷の喝采は鳴り続ける。

(……なあ、オールマイト。これいつまでやんなきゃいけないの?)
(……わ、分かんない)

一方、素に戻った二人はやめ時をすっかり見失っていましたとさ。

記録53

神野区での激闘から一夜明け、多くのヒーローが自衛隊らと共に瓦礫撤去などの作業に勤しんでいる中、今回の戦いで傷付いたヒーローは近くの手病院へと搬送されていた。

個性社会の歴史を紐解いても希に見る大規模な戦闘、二大巨頭のヒーローの活躍に、世の市民達は未だに興奮が覚めないでいる中。

「ムグムグ、すんませーんカツ丼の御代わりくださいー」

当事者の一人であるゴジータは、呑気に病院の食堂で丼ものを頬張っていた。机には大量の空の丼が乗っている。

「君は、オールマイト以上に負傷していたと記憶していたが？」

搬送されたヒーローの中でも、比較的軽傷なベストジーニストは目の前のNo.1ヒーローに呆れていた。あれだけの傷を負いながら、まるで堪えていない様子のごじータ。

身体中にあつた傷も既に塞がっていて、あるのは申し訳程度に巻かれた包帯だけ、身に纏う入院者特有の病衣も格別に似合っていないかつた。

「んあ？　ンなもん此処に來た時点で塞がつてるつーの、本當なら俺も瓦礫の撤去作業を手伝いたかつたけど、オールマイトが入院する手前、我慢しただけさ」

「やれやれ、世の医学に正面から喧嘩を売つてるな、君は」

フーンとそつぽを向くNo. 1ヒーローにベストジーニストは苦笑いする。No. 1ヒーローが重傷と聞いて、急ぎ諸々の準備をしてきたのに、入院する必要もない程の回復ぶりに医師がエ〇ル顔を晒したのは記憶に新しい。

とは言え、ゴジータがダメージを負っていたのは事実、世間の事も考え、今日一日位は大人しく入院しているつもりだとゴジータは言う。神野区の瓦礫撤去の手伝いはその後とも。厨房から御代わりのカツ丼が出来たことを確認すると、ゴジータはウキウキとそれを取りに行く。

「俺よりもそつちはどうなんだよ、Mt. レデイが庇つてたみたいだけど、ギャングオルカもアンタも結構やられてたみたいだけど？」

「ああ、君の言う通り、Mt. レデイが庇つてくれたお陰で大事には至らなかつたよ。復帰にはある程度のリハビリを要するが……なに、すぐに前線に戻つてみせるさ」

因みに、Mt. レデイも氣絶したりしているが、怪我自体は大した事はなく、数日中

には退院も可能だという。

「頼むぜ、アンタ達ベテランはいるだけで若輩達の支えになる」

「やれやれ、No. 1ヒーローに言われては、おちおち休んでもいられないな」

「嘘つけ、そんなつもりなんてないくせに」

やれやれと肩を竦めるベストジーニストにゴジータは笑みを浮かべて指摘する。その通りなのか、指摘を受けたベストジーニストは不敵な笑みを浮かべた。

「——さて、そろそろ時間か」

何杯目か分からないカツ丼を平らげ、ゴジータは席を立つ。

「ん？ ああ、例の男性の……もう面会か？」

「形式上は、だけどな。そろそろアイツ等が来る頃だろうし、俺はもう行くよ」

これから向かう先、それが誰の面会なのか何となく察したベストジーニストは食堂から去るゴジータに一声掛ける。

「ゴジータ」

「ん？」

「君は、君のベストを尽くした。今回の件は恐らく我々が考えられる中でも最高の結果だ。だから——あまり、気負うなよ」

それは先輩ヒーローとしての助言。気を遣ったベストジーニストにゴジータは笑み

を浮かべ、ヒラヒラと手を振りながら食堂を後にした。



ピツ、ピツ、心電図の音が辺りに響き、病室に浸透していく。ゴジータの不思議な技によつて変えられていた姿を取り戻したその男性は、個室の病室にて今もなお眠りに就いていた。

死んでいるように眠る男性、そんな彼のすぐ側で男性の面影がある少年が椅子に座つて黙つて見ていた。

ゴジータとオールマイトが例のヴィランを倒してから数時間、秘密裏にゴジータから塚内へ男性の身元の情報を提示すると、塚内はすぐさまゴジータの家へと直行し、代表

者を一人決めて病院へと連れてきて貰っていた。

本当なら保護者である姫野葵も付いていこうかと思つたが、それは代表者である御幸が固辞した。

ヴィランに変わり果てた父を見られたくなかつたのか、ヴィランとなつて兄と殺し合をした父を見た自分の様子を見られなくなつたのか、眠る実父を前にして恨み言の一つや二つあつた筈なのに、今はもう、なにも考えられなかつた。

「よう、なんだ。御幸一人なのか？ 先生や恵ちゃんは連れてこなかつたのか？」

そんな御幸の耳に聞きなれた声が聞こえる。振り返る事なく「ああ」と返事をする、声の主であるゴジータは遠慮なしに御幸の隣にあるもう一つの椅子にドカツと座り込んだ。

「医者先生の見立てでは、これといった異常はないらしい。予想では、精神的なモノが原因とのことだ」

目の前の男性は外見上目立つた傷はない。骨や骨格などから異常は見当たらず、内臓も僅かな薬物反応が出ただけ。その薬物も人体に影響の無い物質だと知らされ、担当された医者からは健康体のお墨付きを貰つた程だ。

しかし、現に男性——御幸と恵の父親は目を覚まさない。医者からは体験、或いは経験から来るストレス障害の一種なのではないかと推測された。

ゴジータはその可能性を否定できなかった。間近で対峙し、戦ったあの時の白鐘父の様子は明らかに普通ではなかったし、その肉体も外側から弄られたモノでもあった。

AFOという悪意に捕まり、文字通り身も心も変えられてしまったのだろう。そうされた経験も想像を絶するし、体験した記憶も一因となっているのであれば、二人の父親が昏睡状態なのも頷くしかない。

如何にゴジータが奇跡を起こしても、起きてしまった出来事そのものを消すことは出来ない。それは他ならぬゴジータ自身が分かっていた事だ。

「――俺さ、親父の事、嫌いだったんだ。母だった人には裏切られ、なのに未練がましく情を捨てきれず、遂には俺達兄妹を捨てて何処かへ消えちまつた」

「それで、今になって化け物になって現れて、甚兄と戦って……もう、なにがなんだか分からなかった」

それは、弟分の心からの吐露。小さく、ポツポツと紡がれる言葉は、彼の心の底からの本音だった。我慢強く、頑固な弟分。そんな彼の初めて溢す泣き言をゴジータは黙って聞いていた。

「今更、この男を受け入れる事なんて出来やしないよ。どれだけ言葉を並べても、俺達を捨てた事実是不変わらない。こいつら夫婦の所為で、俺と恵がどれだけ思いをしてきた

と思う」

「……………そうだな」

「でも、でもな甚兄、こんな嫌な男なのに、こんなに憎いと思つてゐるのに……………生きていて良かったと、思つてゐる自分があるんだ」

優しい男だ。初めて会つたときから変わらない弟分の不器用な優しさに甚田は笑みを浮かべた。

憎いのも本当だろう、嫌いなのも本当だろう、それでも父親である彼が生きていた事を、喜んでいられる自分がいると、そう語る御幸に後藤甚田は嬉しく思つた。

ポロポロと涙を流す御幸、そんな弟分の頭を甚田はガシガシと乱暴に撫で回す。

「それでいい。無理に受け入れようとすんな。今は、自分の気持ちを優先しろ。なあに、これから時間は幾らでもあるんだ。じっくりと自分の言いたいこと、ぶつきたい気持ちを今の内に整理しておけ」

「……………うん」

その日、幾分か気分が晴れた様子の御幸は病院内での電話で妹と話し合い、今後の見舞いの有無を検討する事を甚田に告げると、迎えに来てくれた塚内に甚田の家まで送つて貰う運びとなつた。

車に乗つて病院を後にする御幸を見送り、自身も病室へ戻ろうとする。そんな甚田の

下へ、通知の報せが届いた。

誰から？ 不思議に思った甚田は携帯の画面にはN.O. 2であり自身の元相棒、オルマイトの実名が表示されていた。



「———やあ、来てくれたね。ゴジータ」

とある浜辺。そこは嘗て不法投棄されたゴミで溢れ、一人の少年の手によつて綺麗にされた公園。あれから近隣住民達の協力もあつて、今もその景観は保たれていた。

そんな浜辺の中心、水平線を一望できる場所にオルマイトはいた。

「良いのかよ、怪我人が病院から抜け出して。後から医者から叱られても知らねえぞ」

「ハハハ、その事なら既に私から話を通しておいたよ。かなり渋い顔をされたけど、君と

一緒という理由で、何とか外出の許可を得られたよ」

「え？ なにそれ初耳、俺ダシにされた？」

笑いながらゴメンゴメンと謝罪してくるオールマイト、久し振りの相手との軽口にゴジータもまた笑みが溢れた。

そうしてさざ波立つ浜辺を歩きながら駄弁ること数分、バディ時代の活動を肴に談笑し続けていると、オールマイトから話を切り出された。

「ゴジータ、今回の戦いで私は個性を使いきってしまった。もう二度と、私はオールマイト……平和の象徴として戦うことは出来ないだろう」

「……………」

告げられるのは、一つの事実。AFOという長年の宿敵を打ち倒し、一つの時代を終わらせたと確信しているオールマイトは淡々とした口振りでその事を告げる。

「けれど、奴は……AFOは、最後に私に呪いを掛けた」

「呪い？」

「ああ、奴が後継として育てていた死柄木弔、彼の本名は志村転弧。お師匠の……私の前の代の継承者の血縁にあたる者だ」

「……………」
「そういうことか」

あの時、柄にもなく膝を折りかけていたオールマイトの姿の訳を、ゴジータは何とな

く理解した。オールマイトの言う先代、志村奈葉はAFOとの戦いで命を落としたと言
う。

オールマイトにとっての恩師、或いはそれ以上の存在とされる彼女は、苦渋の決断で
実子と訣別し、我が子を戦いから遠ざけた。なのに、巡り巡って孫である志村転弧はA
FOの後継者として見初められてしまっている。

その事実はオールマイトにとって重すぎる真実であり、志村奈葉にとっても報われな
い話である。

……恐らく、オールマイトは死柄木弔とは戦えない。恩師の血族を自らの手で断ち
切るには、オールマイトは優しすぎる。

「分かった。死柄木弔は俺に任せろ」

「——済まない」

そんなつもりは決してなかった。けれど、結果的に彼の了承の言葉で救われたオール
マイトは頭を下げることにしか出来なかった。

「止せよ。相棒に頭を下げられるのは流石の俺も寝覚めが悪い。それに、平和の象徴と
して戦うことは出来なくても、オールマイトとして出来ることはまだあるだろう？」

「それは……うん、そうだね」

恐らく、既にオールマイトの中では一つの決意が定まっているのだろう。

「幸い、今回ヒーロー側には目立った損壊はない。俺が作る仙豆擬きももうすぐまとまった数が出来上がるし、一週間以内にはベストジーニストもギャングオルカ、Mt.レディも復帰できるさ」

「ハハハ、また公安の人達が渋い顔しそうだね」

「今後の日本の衰退が懸かっているんだ。多少の胃痛くらい抱えて貰うさ」

ハハハと、オールマイトと再び笑い合う。

憂いもある。後悔もある。無念も、悔しさも残るオールマイトの胸中を、全てゴジータが引き受ける事を決め、オールマイトも託す事を決めた。

だから、自分は一度前線を退くのだ。自分の中に芽生えつつある、新しい力を完全にモノにする為に……………。

「ゴジータ、手を」

「んっ？」

差し出される手を、軽く叩く。パンツと乾いた音が小さく鳴る、一体なんのつもりなのか、オールマイトの意図を図りかねていたゴジータはキョトンと目を丸くさせると……………。

「バトンタッチさ、後の事は——任せたまよ」

「——」

その一言に、ゴジータは目を大きく見開いた。嘗てNo. 1ヒーローとして君臨し、長い間日本の平和を守り続けてきた平和の象徴。

自分の先達であり、偉大なヒーロー。幾度となく人々の危機を救い続けてきた男からのバトンを受け取ったゴジータは……。

「……………ああ、任せろ」

そのバトンを手放さないように、強く、握り締めた。

——朝日が二人を照らし出す。笑い合い、託し託された両者はこの日、一つの時代を迎えた終わり、そして新たな時代の到来を予見させた。

即ち、オールマイトの実質的な引退。

翌日テレビの前に現れるオールマイトは、引退を口にする。多くの人々が引退を惜しむ中、オールマイトは一言言葉を紡いだ。

『——次は、君の番だ』

不敵に、大々的に告げるその一言はヴィラン達に恐怖を、民衆に期待を抱かせて、オールマイトは壇上から去っていった。

記録54

オールマイトの引退。神野区での激闘を境に次々と起こる大きな出来事は、日本だけでなく世界中を震撼させた。

世界的に見ても類を見ない社会貢献を果たしている日本最高のヒーロー、彼の引退記者会見は多くの人達の記憶に刻み込まれ、同時に惜しまれてきた。

平和の象徴と呼ばれた男の引退、今後は後進育成に集中する事を伝えて会見を終えるオールマイトを、人々は惜しみ、そして同時に惜しみ無い拍手を送った。

長い間務めてきた対ヴィランの抑止力。世界的に見てもヴィラン犯罪の少ない現在の日本社会はオールマイトの活躍のお陰と言っても過言ではない。

当然、他のヒーロー達の活躍もあるが、それ以上に柱として大きな存在感を持っているオールマイトのおかげで人々は安寧の日々を暮らせていた。

そのオールマイトが引退、では人々は今後の生活に不安を抱いているのかと言うと……別段其処まで不安に思っていないかった。

“ゴジータ”。オールマイトと並ぶか、或いはそれ以上のヒーローとして新たにN・O・1に君臨した次世代のトップヒーロー。

オールマイトの様にあつという間に駆け付け、人々を救いヴィランを倒す。その圧倒的な強さに最近ではヴィラン犯罪の件数も例年を下回り始めている。

オールマイトという平和の象徴を失っても、ゴジータという希望の象徴がいる。オールマイトと違い、若く強いヒーローが頂点に君臨してくれる事に、結果的に人々は安寧の日々を享受し続けていた。

だが、それに疑問視する人の数も決して少なくなかった。オールマイトという柱を失い、ゴジータという柱にすぎり続けるのは、果たして正しいのか。

余裕を失わず、けれど現実を落ち着いて直視した者は危機感を抱く。もし、万が一ゴジータという稀代のヒーローを失ったら……果たして自分達は、社会は、同じ様に安穩としていられるのか。

警鐘を鳴らす。今は小さい声だが、現体制に対する疑念の声は確実に増えてきている。このままで良いのか、ゴジータという大きな柱が健在している内に、自分達でも出来る事を探すべきではないか。

政府の対応、そして「個性」という超常の力に人々は今一度向き合わなければならぬ。

更に向こうへ、多くのヒーロー達が守り、オールマイトという柱に報いる為、日本は……世界は、少しずつ変わり始めていく。



「——さて、以前にも話したと思うが、これからお前達にはヒーローとして必殺技を編み出して貰う」

雄英高校。オールマイトとゴジータという二大巨頭を輩出した名門。大規模な敷地を誇り、ヒーローの卵を育てる教育機関。

先の林間合宿でのヴィラン襲撃を受け、生徒達の安全を守るために、新たに全寮制を導入したヒーロー科一年達は、残りの夏休みを使っての圧縮訓練を開催。

広大な敷地の中に組み込まれているとある施設、卵達の必殺技を編み出す一環として

作られたその施設で、一年A組は集められた。

「仮免試験までもうそんなに余裕はない。ヒーローとして一皮剥けたいのなら、確実に一人一つは必殺技をモノにしろ」

「「はい!!」」

「——で、それにもない本日は特別ゲストを紹介する。オラ、さつさとしろ」

今までの鋭い目付きから一転、途端にやる気を失くす相澤は背後の影へと言葉を投げ掛ける。そこはセメントスの個性で作られた場所、誰もいない筈の其処から、突如影が舞い降りる。

「とうーっと、そんな訳でオラ参上つと」

「「ゴ、ゴジータアツ!」」

何とも軽い気持ちで現れたのは、最強のヒーロー「ゴジータ」。緑谷と爆豪を除いて体育祭以来となるNo.1ヒーローの登場に、一年A組は騒然となった。

「うるさい」

それでも、担任の相澤の一言で鎮静化する辺り、既に色々と染み付いている様である。「さて、本日この男に来て貰ったのは他でもない。必殺技を編み出すにあたって、このNo.1ヒーローの意見を存分に参考にするといい」

「で、でもゴジータの必殺技って……」

「神野で見せた虹色の光以外あったか？」

「いや、確かもう一つ位あった筈。確か……」

「アタシ知ってる！ かめはめ波だ!!」

意外と周知されていないゴジータの必殺技。本気で知らない様子の上鳴と切島、まさかの反応にゴジータもコケ掛けたが、飯田の指摘と芦戸の答えで何とか持ち直した。

「あつぶね、危うく皆の前で実践する所だった」

「そんな事してみろ、すべての修繕費をお前の事務所に請求してやるからな」

ジロリと睨んでくる相澤に冗談だと笑うゴジータだが、対する相澤の目は何処までもマジだった。

「うおっほん！ そんな訳で今日の必殺技の訓練には俺も参加するから、アドバイスが欲しかったらいつでも声を掛けてくれ」

「「はー」」

現役No.1ヒーローに再び教えを乞う事が出来る。体育祭の時以来の交流に胸を高鳴らせながら、生徒達は自らの必殺技作りに奔走するのだった。



「——それで、上からはどう言った内容の指示が届いたんだ？」

ヒーローとしての自分を高めるべく、後の仮免試験に挑む意味合いも含め、必殺技の編み出しに精を出している一年A組。

真剣に取り組んでいる彼等を見守っていると、不意に相澤から声が掛かる。

と言うのも、本来ゴジータは自らのヒーロー活動に勤しんでいる筈の人間、未来のヒーローとは言え、卵である一年坊主達の面倒を直々に見る……なんて暇はない筈。

オールマイトが引退し、ヴィラン犯罪の増加に対して抑止力になる筈のゴジータを遊ばせておくほど、公安達は寝惚けてはいない。

しかし、現にゴジータは特別講習のゲストとしてここにいる。ゴジータが言うにはヒーロー委員会からの依頼らしく、詳しいことはあまり耳にしていない。

折角の機会だからと訊ねてくる相澤にゴジータは「ああ」と返事をして。

「なんでも、未来のヒーロー達の純粋な戦力の底上げを目指しているみたいなんだと」

「底上げ？」

「ああ、俺も聞き齧った程度しか知らないから何とも言えないが、どうやら上層部はオールマイトの引退をかなり重く見ているらしくてな、俺が現役でいる内にオールマイトに並ぶ戦力の増強を目標にしているんだとか」

「……………」

歯切れの悪いゴジータの物言いに対して、それでも相澤は委員会の上層部の目的としている事を何となく理解した。

オールマイトという大きな柱を失った事で、人々は少なからず危機感を覚え、そして疑問を抱いた。ゴジータという柱に寄り掛かるだけで、果たして平和と呼べるのかと。

昨今聞こえてくる人々の疑問の声は相澤も時々耳にしている。思い込まず、悲観的になり過ぎず、淡々と現実を見て不安と疑問を口にする。

恐らく、今回の上層部の狙いは不安を抱く世論に対する一つの回答を用意する事だろう。平和を担うヒーローの候補生達は順調に育っているのだと、それを見せ付ける事で世論に対する説得力を得たいと言うのが、今回のゴジータ派遣の裏にある真相なのだろう。

「じゃあ、まさかお前これから全国を回って？」

「そう。公平さを保つ為に仮免試験に参加する学校全部にこれから回って指導していく

「訳」

地味に面倒で疲れるわー、なんてぼやきながら肩を揉むゴジータに相澤は一先ず納得が出来た様子だった。それなら仕方がない、そう思わせるため息を吐きながら生徒達を引き続き見守っていると、二人の下へ一人の少年が駆け寄ってきた。

「あのゴジータ、今ちよつといいつスカ？」

「お前は……電気一発屋」

「上鳴電気ツスよお!!」

オズオズと近寄ってきたのは、ある意味ゴジータの記憶に残っている上鳴電気だった。どうやら先の合宿にて許容量の底上げに成功しているらしく、幾らか電気を流してもその顔にはまだ余裕が浮かんでいた。

「悪い悪い。で、どうした上鳴、なんか質問か？」

「いや、俺の個性って我ながら強い部類に入ると思うんですけど、如何せん上手く扱いきれていないってゆーか、その……爆豪や轟と比べると、見劣りする気がするんスよねえ」

上鳴の個性である「帯電」は、非常に強力で応用性の高い個性だ。文字通り電気を纏い、時には放出も可能とするその能力は鍛えれば鍛えるだけ能力の恩恵を分かりやすく受けやすい。

雄英に入るまでは自身の個性に浮かれ、時には痛い思いをしながらも、それでもそれなりの自信を持っていた上鳴だが、爆豪や轟といった本物の天才と遭遇し、更には使う度に自損していた緑谷も自慢の超パワーの個性を使いこなしている。

火力という点において、既に置いていかれた感のある上鳴。このままではいかんと思いい、ゴジータに縋る思いで相談に来たのだと言う。

「相変わらず、勿体ねえ使い方してんなあお前。何で電気という汎用性の塊をそんな狭く使おうとするかね」

「せ、狭いッスか？」

「おお。お前、自分の個性がただ溜めてブツ放すだけの代物と思っているだろ？ いいか、電気つてのは自然界の中でも分かりやすい力の結晶だ。それを一つの方向性でしか見られないってのは、極上の宝を溝に捨てるのも等しいぞ」

「ど、溝に……ッ！」

切れ味鋭く、辛辣なゴジータの指摘に上鳴はガツクリと項垂れる。流石に言いすぎたと頭を掻くゴジータだが……仕方がない。実際勿体無い力の使い方をしている上鳴に、ゴジータは仕方がないと指導を行った。

「だから、先ずはお前の固定観念をブツ壊す。上鳴、お前は自分の個性を放出か帯電しか使えない。そうだな？」

「は、はい」

「なら、先ずはその欠点を補えるサポートアイテムを用意しろ。雄英にはそこら辺に詳しいパワーローダー先生がいる。お前の悩みもきつと解決してくれるだろ」

「お、おお！」

「で、その上でお前には一つ俺から必殺技をくれてやる。セメントス先生！」

「はいはい」

「向こうに良い感じのコンクリの壁をくれ、造形は任せる」

「オツケー」

ゴジータに促され、セメントスの個性を以て少し離れた位置に2メートル程のコンクリの壁が出来上がる。厚さは凡そ60センチ程、爆豪や切島が得意気に砕いているモノよりやや太い。

自分に必殺技を授けると聞いて、戸惑いながらもワクワクし始める上鳴。No.1からの直々の指導にウキウキし始めていると。

「八百万、コインを何枚か創造してくれるか？」

「え？ か、貨幣の偽造は犯罪に当たる筈では？」

「違う違う、玩具のコインで良いんだよ。サイズは五百円玉位、デザインは………なんでも良いか」

八百万から何枚か玩具のコインを貰い戻ってくる。ほい、と上鳴の掌に独特の彫りが施された金属製のコインが置かれる。

「えつとゴジータ、これは……？」

「次に、お前のイメージの拡張を始める。上鳴電気、今のお前は人間の姿をしているな？」

「え？ ええ、そりゃあ……まあ」

「なら、その姿を捨てろ。今のお前は一つの大砲、如何なるモノも撃ち抜く最強の大砲だ」

「え？」

「右腕を伸ばせ、おら、早く」

「は、はい！」

唐突に始まるゴジータの指導。その内容も抽象的で、戸惑いながらも上鳴は指示に従う。

「伸ばした腕の先、右手の親指にコインを乗せろ」

「はい」

「返事はいい。今のお前は砲台だ。力を溜め、制御に集中しろ」

「——！」

言われて上鳴は気づく、自分の内に在る力の奔流、それがこれ迄自分が溜めてきた電気の全てであると、上鳴電気は今更ながら気付いた。

「足から練り上げ、右腕の更に先………右手の指先に力を流し込め。少しずつ、ゆつくりと、浸透させるようにチャージしろ」

言われるがままに促され、力の奔流を蠢かし始める。同時に上鳴を中心にエネルギーが脈動し、微かにスパークさせながら、一点に向けて力を収束させる。

「お前の足は大砲を支える砲台、お前の右腕は砲身で、その先にある右手は砲口でありトリガー引き金だ。さあ、臨界は其処までだ。頭の中でカウントしろ。3………2………1………」

高まる力に対して、頭の中は驚く程にクリアだ。ゴジータの指示に従い、冷静に指先をセメントスがつったコンクリの壁に向けて………。

「——撃て」

「ッ!!」

弾く。溜めに溜めた電力というエネルギーを、コインを弾く親指の指先に注ぎ込む。瞬間、周囲の空気は弾け、大気と地面の焼ける匂いが辺りに漂う。

一体何が起きたのか、突然引き起こされた現象に上鳴自身が戸惑っていると……。

「完成、とある雄英の超電磁砲」

「——ウエイ!!」

標的のコンクリートの壁は粉々に砕かれていた。あまりにもあんな光景に唾然とするなか。

「——ゴジータ、お前後でちよつとこい」

生徒を戦略兵器に仕立て上げた元問題児に、相澤はきつい一撃をお見舞いすることを決めた。



そして、その後もゴジータによる必殺技の指導は滞りなく進み、生徒達一同は自分の必殺技についてそれぞれの答えを出そうとしていた。

芦戸は自らの粘液を水と認識することでの個性拡張、尾白は自らの体術に回転の有用性を加え、常闇は意思を持つ個性との意識の同調と制御、砂藤と切島には合体技という

一つの指針を、それぞれ一つの選択肢と言う形で指導していた。

「——と、そんな訳で蛙の個性を持つお前には脚力を主軸にした蹴りが主体の技をオススメするが?」

「ケロ、そうね。ゴジータの言葉も尤もだわ。個性と言う枠に縛られず、自分のやりたいこととやるべき事の擦り合わせも大事なのね」

「やつぱりお前は筋が良いな。そう、個性はあくまで自分の体の一部に過ぎない。ならそれを主軸にするだけでなく、それを活用する程度に抑え込んで別のモノで補えば、お前がヒーローになってからの活動はより広範囲に広げられる。励めよ、フロツピー」

「ケロ、ありがとうございました」

頭を下げて去っていく蛙吹梅雨を見送りながら、ゴジータは次に指導に入る生徒を見やる。視線の先にいるのは爆発小僧の爆豪、普段の騒がしい彼とは違い、今日はなんだか口数が少ない。

「よお爆豪、必殺技の開発は順調か? アドバイス位なら出してやるぞ?」

「いらねエ」

「あん?」

「今の俺は、自分のやりたいこともやるべきことも確り見据えてる。助言はいらねえ」

既にセメントスが用意しているコンクリの塊を幾つも粉碎している爆豪。何れも独

特な壊され方をしているところを見るとどうやら本当に助言は必要ない様子だ。初めて出会った時とは比較にならない程に成長している彼に、ゴジータも笑みが溢れた。

なら、言葉に甘えて爆豪はスルーするとして、後は誰だったかと、ゴジータは周囲を見渡す。

緑谷……は、アイツもいいだろう。オールマイト譲りの超パワーの個性も大分使いこなせているし、残る問題となる歴代の継承者達の個性も今は落ち着いていると言う。

既にシュートスタイルとやらを開発し始めている緑谷を尻目に、改めて周囲を見渡している。

「ゴジータ、俺もいいか？」

「ん？ おお、そっぴやお前もいたな。轟」

目の前に立つのは、半冷半熱の強個性持ちである轟焦凍。白と赤に分かたれた左右の髪を揺らしながら、彼はゴジータの前に立つ。

「俺は、あの後に色々と一人で考えた。自分の力の事、生まれの事、父親の事、母親の事。その上で分かった、どんなに生まれが複雑でも、俺の個性は何処までも俺の力でしかない」

「ゴジータに、体育祭から続く自分の心情について説明してくる。もしかしなくてもこの子、かなりの天然さんなのでは？ ゴジータは訝んだ。

「だから、その上でアンタに頼みたい。どうか俺に、必殺技を教えてください」

必死に強くなることを望む轟焦凍、真剣ながらもどこか焦っている彼の様子を目の当たりにしたゴジータは、彼の気持ちを汲むように確りと頷き……。

「良いぜ」

不敵な笑みで受け入れた。

記録55

ヒーロー委員会の上層部から、正式な依頼を受けたゴジータはヒーローの卵である生徒達の必殺技開発の協力をする事になった。

これからの社会、世論への対策に備えて今から行うのは若い世代のヒーローに対する戦力の底上げ。今のヒーロー飽和社会に微かな疑念を抱いていたゴジータこと後藤甚田は、公安からの依頼の意図を何となく理解し、二つ返事で了承した。

そして現在、今のところ一番勢いのある母校の雄英に訪れたゴジータは、そこでヒーロー科の生徒達にそれぞれ必殺技を伝授した。

それぞれの個性にあつたやり方、或いはその補助や延長。意識の拡張など、様々な手法で生徒達の必殺技を編み出した。

そうして時間はあつという間に過ぎ、一年A組の時間が終わりを迎える頃、喰い気味にやって来たのはB組のクラス担任、ブラドキング先生だった。

「さあ！ 次は我々B組の出番だ。A組は大人しく場所を明け渡すが良い!!」

「……なんかブラド先生、気合い入ってね？ あんなに入れ込む人だったか？」

「今年のB組も中々見込みのある奴が多いからな。そいつらの為にも、色々と考えているんだろうよ」

「へー、相澤先生も何だかんだ優しい所あるし、やっぱ教師もある程度やってると似てるモノかな」

「余計な事は言わなんでいい。……んじゃ、俺達は撤収するから、引き続き頼むな」
「へーい」

生徒達を連れて、施設を後にするA組。入れ替わるようにやって来たブラドキングとB組の生徒達に目配りすると、ブラドキングは大きな声をかける。

「いいか！ 此処でお前達には自分独自の必殺技を編み出して貰う事になる。此処で生み出した必殺技は何れお前達の支えになり、ひいてはそれが社会を支える一因になる！」

「今回、特別ゲストにN.O. 1ヒーローに来て貰っている。ドシドシ質問して、自分の可能性を磨き出せ！ 目指すは全員仮免試験合格！ 気を引き締めるよ！」

「「はい！ ブラド先生!!」」

担任の激励に応え、澆刺とした返事で返すB組一同。思っていたより熱くなっていた彼等に若干惑うも、やる気がないよりは遥かにマシ。

それぞれ自分の個性を把握、認識する為に散開する生徒達。そんな彼等を見守るゴジータの下へ早速一人目の生徒がやって来た。

「ゴジータ、先ずは自分から宜しくお願いします」

「お前は……ああ、名前の響きが面白いから覚えているぞ。庄田二連撃だったよな？」

「は、はい！ 覚えててくれて恐縮です」

最初の一人は庄田二連撃という妙に耳に残った名前の生徒だった。他の生徒よりふくよかな少年は、しかして中々に動ける事をゴジータは知っていた。

「体育祭前の時、尾白並みに動けていた事もあったからな。それで、お前は自分の個性で何を成し遂げたい？」

「僕の個性は『ツインインパクト』。一度触れた対象に解放と掛け声フアイアを発すれば、二度目に数倍の威力の衝撃が襲ってきます」

「ほう、普通に応用性の高そうな個性だな」

「はい。でも、それだけじゃダメなんだと思うんです」

庄田の個性はその性質から、多種多様な状況に対応できる可能性を秘めている。地力が上がればそれだけ二度目の威力も底上げされるし、使い方次第では救助活動にだって重宝されるかもしれない。

けれど、それだけではダメだと彼は言う。人を助けるのも大事、それは庄田も理解し

ているし、ヒーローの本質的にはそちらの方があっている。

それでも、庄田は力を求めた。誰かを助ける力としてだけでなく、時には脅威を打ち倒す力も必要なのだと。拳を握り締め、見上げてくる庄田にゴジータはやれやれと肩を竦めて……。

「やれやれ、真面目と言うかなんというか……：……：良いだろ。それなら俺からお前に一つ面白い技を教えてやる。セメントス先生！」

「今度はなにー？」

「もう一個コンクリの塊を出してくれ。丸くて大きめのを幾つか！」

「はいよー」

ゴジータからの要請に応え、セメントスがコンクリートを操る。うねりを上げて出来上がった複数のそれは、ゴジータの注文通り綺麗な球体になっていた。

「よし、まずは俺が手本と例題をみせてやる。まずはコイツを普通に殴ってみるぞ」

見てろよ。そう言いながらゴジータは拳を振るうと、一個目のコンクリが砕かれた。相変わらず凄い力だと、コンクリートの塊を簡単に破壊するゴジータの腕力に改めて庄田を含めた周囲の生徒達は息を呑んだ。

「そこで、次がこれ」

だが、庄田が真に驚いたのは次の瞬間だった。振り抜かれるゴジータの動作は同じ、

端から見ればさっきの焼き増しだと言うのに、砕かれて出来た筈の破片が砂になっていた。

先の時とは明らかに違う。更々と地面に落ちるコンクリのだったモノの残骸に言葉を失っていると……。

「庄田、お前も聞いたことはあるだろ？ 物質つてのは分子同士の繋がりで出来てい
るって」

「は、はい」

「モノを砕くつてのは、その外から加えられる衝撃で物体を分解するつて事だ。今のは
それを更に先へ突き詰めた状態、分解された分子を続く第二の衝撃でより細かく分解し
た現象だ」

「こ、こんな芸当が僕に出来るのでしょうか？」

「寧ろお前の個性だから出来る。いや、出来なきやお話にならない。難易度はお察しの
通り高めだが、これを使いこなしたら、お前は対ヴィラン戦に於いて一つのキーマンに
成り得る」

ゴジータの教える技、それは理論上で言えば如何なる硬い物質も砕けるといふ優れも
の。どんなに硬く、柔らかく、剛毛の毛皮で覆われていようと、二度目の衝撃が相手
を粉碎する。

難易度は高め、ゴジータが言う通りかなり難しそうではあるが、自分の個性なら短期間の習得も可能。目の前で起きた現象が如何に非常識なのかは、理解力のある庄田自身が承知している。

それでも、これを極めて使いこなせば、自分はヒーローとして一段上のステージへ立てる。なら、後は実践あるのみ。

「だが、生憎とこれには既にちゃんとした技名があつてな、お前も使う時はそれで通しておけ」

「は、はい！ それで、その技の名称は？」

柄にもなくワクワクしている。目を輝かせて訊ねてくる庄田にゴジータは不敵な笑みを浮かべ……。

【二重の極み】



「あー、つつかれたあ！」

「お疲れ、甚兄い」

母校の生徒達を相手に数時間、幾度となく必殺技に関するアドバイスを続け、漸く解放された頃には既に辺りは暗くなり始めていた。

そろそろ秋も終わり、冬も本格化し始める季節、外気の気温もあつて久々に精神的に疲れた様子で帰ってきた兄貴分を御幸が出迎えた。

「はいこれ、ココア」

「お、悪いな。ちょうど甘いものが欲しかったんだ」

気の利いた弟分に感謝しながら受け取ると、一口だけ口に含む。ほんのりとした甘さが口の中に広がっていき、疲れた体に浸透していく。

「そろそろ、二人の学校も再開するんだよな？」

「ああ、授業自体はモニター越しで参加していたから大丈夫だけど、やっぱり学校に愛着がある生徒も多くてさ、来週から再開するってさ」

「御幸、言うまでもないだろうが……」

「分かつてる。万が一があれば、甚兄いから貰ったこれを使わせて貰うさ」

来週から学園が再開されると知り、ゴジータの頭に過るのは御幸と恵の学園生活の事。今やゴジータは存在そのものが対ヴィランの抑止力になりつつなっている。

先の一件で御幸と恵がゴジータの身内である事が露見され、No.1ヒーローの身内の安全面を考慮した公安から口外しないように強く言い含められているものの、好奇の視線までは止まる事はない。

更にはバカな事を考える過激な奴が、いつまた二人を狙ってくるか分からない。学園の再開に伴って二人の学園生活を心配したゴジータこと甚田は、二人ないし星の都の全員にあるものを手渡した。

見た目はただのバツジ。それは雄英のサポート科、その主任であるパワーローダーに頼んで作って貰った作品。端的に言えば防犯ブザーであり、発信器である。サイズは制服のボタン並みで、身に付けたモノの状態をホストに伝える優れものである。

一度身に付けた持ち主を登録し、それを外した状態で10m以上離れたら、ゴジータの携帯に連絡が届くように細工されており、使用時には握り締めるだけで作動する優れもの。

近い将来、ヒーローの身内に対する安全対策として委員会に提出し、正式な防犯グッズとして世に出す予定である。

しかし、それでも懸念に思う所はあるわけで……。

「本当なら、俺が二人の送迎をしても良かったんだがな」

「流石にそれは悪いし、何より悪目立ちが過ぎるつてもう何回も言ってるだろ？」

自分の身内にゴジータ^{No.1ヒーロー}がいる。既にその噂は学園中に浸透しており、同時に二人が施設の間であることも知られてしまっている。

そこに万が一二人の実父がヴィランに改造されてゴジータと戦わされたと知られてしまえば、世間の追及はより激しくなる事だろう。それが悪意のあるものならば、二人の心労は計り知れない。

だから甚田は二人の送迎を言い出したのだ。そうすればゴジータが二人の身内であることを証明していると同時に、御幸と恵が自身にとって大事な存在であることを示す事にも繋がる。

これからの二人の学園生活、何れにせよこれ迄通りには行かないと言うのは明らかだと思えたから。

しかし、それでも御幸は固辞する。

「大丈夫さ。いざつて時は本当に呼ぶし、何より俺は学園の生徒の長。自分の居場所くらい自分で守るさ」

「———そうか、強くなったな。御幸」

「No.1ヒーローに言われてもな」

甚田からの心からの称賛を、御幸は苦笑いを浮かべて受け止める。

もうすぐ甚田の家での共同生活も終わる。それぞれ元の生活に戻る為、自分達のやるべき事を見つめなおし、新たに明日を迎える。

そんな一回り遅くなった弟分に甚田も気持ちを入れ換える。

「なら、俺は自分のやることを進めておくかな。明日は士傑の方へ行かなきゃ行けないし」

「なら、もう休んだ方がいいな。お休み甚兄」

「おお、お休み………と、誰だ？ オールマイト？」

用意された寝室へ戻る御幸を尻目に、甚田も就寝しようとソファから立ち上がる。ふとテーブルの上に置いた携帯が震え出した。

こんな夜更けに誰からだ？ 手にした携帯画面を見ると、映し出されている名前はオールマイトだった。

「もしもし、どうしたオールマイト？ こんな夜更けに」

『夜分遅く済まないゴジータ、実は君に頼みたいことがあって』

「おう、俺に出来ることなら協力するぞ」

『———実は、近い内に君にタルタロスへの同行を頼みたい。奴に、AFOに可能な限り情報を吐かせたいんだ』

どうやら、この因縁はもう少し続くようだ。



眩しい。その景色に、その光景に、その情景に、エンデヴァーは心が燃えた。

燃えて、燃えて、燃え尽き掛けて、それでも焦がれて止まない情景。

一体、自分は何をしてきたのか。伴侶を追い詰め、家族を追い詰め、息子を殺し、その果てに一体何を掴もうと言うのか。

「俺は……俺は……」

N o. 3、フレームヒーロー“エンデヴァー”。

後にN o. 2に返り咲くその男は、あの日目の当たりにした光景に、遂に膝を折って

しまっていた。

あの日から、逃げるようにヒーロー活動を続け、休みの日は現実から背けるように自室に籠る。そんな日々を続けていたある日、閉ざされた扉は一人の息子の手によって開かれる。

「親父！　おい、くそ親父!!」

「夏雄?」

「いつまでも打ちのめされてんだクソ野郎！　姉ちゃんが、冬実姉ちゃんがヴィランに襲われてんだよ!」

「ッ!?!」

見れば、テレビの向こうにヴィランらしき男の腕の中で腕いている娘が映し出されていた。何をやっているんだと自身を罵倒し、非番でも関係ないと、個性をフル活用させて飛び出していく。

ここからならそう時間は掛からない。急ぎ現場まで急行しようとした時。

頭上を奔る黄金の炎がエンデヴァーを抜き去っていた。

瞬間、ヴィランは殴り飛ばされ、人質にされていた女性の体が宙に放り出されるが。

それを黄金の炎——超と化したゴジータが受け止める。

「つたく、最近ヴィランどもが大人しくなったかと思つたら、油断も隙もねえな」

「あ、あの——」

「つと、悪いな。年頃の女性をいつまでも抱えて、すぐに下ろして——アンタは」
「あ、あはは。ど、どうも……」

どうやら、娘とゴジータは知り合いだっただけらしい。ゴジータの腕の中で、照れ臭そうに頬を赤くしている娘に、エンデヴァーは顔から滑り落ちた。

記録56

その日、轟冬美は帰路に就いていた。念願の教師としての日々、大変ながらも充実した毎日を過ごしてきた彼女は、今日も生徒達との授業を終えて一人家族の為に料理の買い出しを行っていた。

「やばいやばい、急がないとお父さん達がお腹を空かせちゃうー！」

色々と問題の多い轟家。過去の出来事から崩壊しかけている家族を、必死に繋ぎ止めてきた彼女。その献身さ故に二人の弟から感謝されている冬美は、今日も家族の為にその自慢の料理を振る舞う。

「——でも、お父さんもすっかり大人しくなったよね。お陰で二人もここ最近食卓に良く顔を出すようになったけど……」

思い返すのは、あれ程オールマイトやNo.1ヒーローの座に固執していた父が、今はすっかり塞ぎ込んでしまっている姿。現No.1ヒーローであるゴジータを生意気な小僧だと一蹴し、活躍の場面がテレビに映る度に激昂する姿は今も記憶に新しい。

そんな父が、神野での一件以来から別人のように大人しくなっている。オールマイトの引退記者会見も、抗議する事なく受け入れてしまっている。

項垂れ、ただ静かにテレビを眺めている父を、弟である夏雄はザマア見ろと罵り、もう一人の弟である焦凍はその背中を見ている。

以前のような苛烈さが鳴りを潜め、焦凍に対して過剰なまでの訓練の強制が無くなったのも冬実は嬉しく思うが、同時に妙な危機感も感じていた。

今の父は、もしかしたら折れてしまったかも知れない。日々のヒーロー活動も以前より消極的になったと聞くし、もしかしたら父もまた引退を考えているかもしれない。

No. 1ヒーローに固執し、執着し、個性婚というやり方に手を出してまで求めていた男。そんな父がヒーロー界からの引退を考えている……かもしれない。

有り得ないと冬美自身も思うが、最近の父の落ち込み具合は酷い。だからせめて美味しいものを食べて元気になって欲しいと願いを抱いて、轟冬美は買い物を済ませ、家族のいる家へ向かう。

と、そんな時だ。

「く、来るんじゃない!!」

「ッ!?!」

突然、大きな腕が自身の首回りに巻き付く。咄嗟の出来事で何も抵抗出来なかった冬

美は、驚きのまま見上げると、恐ろしく顔を歪めた巨人が、自分を掴み上げていた。

後からやって来たのは複数のヒーロー達、その多くは父の事務所に在籍しているサイドキックであり、中にはバーニンという見知ったヒーローも其処にいた。

「へっへっへ、最近エンデヴァーのクソ野郎がヒョつているつて噂は本当だったか。思っていたよりやり易かったぜ、オラ！ 道を開けるヒーローども！ 大事な人質ちゃん死にまうだろうがアっ!!」

「っ、の野郎!!」

「よせー！ 挑発に乗るんじゃない!!」

ヴィランの挑発に乗ろうとする若手のヒーローを、バーニンが抑える。人質になってるのはエンデヴァーの娘である冬美、その事にいち早く気付いたバーニンはヴィランに気取られないように立ち振る舞う。

「あ、ああああっ!」

しかし、その間にも万力で締め上げられる様な圧迫感が冬美を襲う。加減知らずのヴィランが、このままでは冬美を絞め殺してしまう。

急ぎ救出せねばならないこの緊急事態に、エンデヴァーは何をしているのか。遠巻きに眺めている人々の口から溢れるエンデヴァーへの不信感の声がバーニン達サイドキックの焦燥感を煽る。

不味い、そう思っても目の前の状況がバーニン達に二の足を踏ませてしまっている。これ迄の自分達なら犯さなかった失態、エンデヴァーという柱の一つの衰退がこの状況を生み出してしまった。

なら、自分達で何とかするしかない。エンデヴァーを支えるサイドキックとして、ヒーローとして、人質の救出とヴィランの制圧に動こうとした時。

「おらよ」

「ブツパツ!?!」

横から現れた黄金の炎が、巨大なヴィランの横つ面を蹴り上げた。

あまりの衝撃に頬は砕かれ、脳を揺さぶられた巨大ヴィランは失神。その際に、手放された冬美は空高く放り投げられる。

突然の解放感、次いで浮遊と落下。二転三転する状況の変化に啞然となるも。

体を包み込む確りとした感触と人の温かさが冬実を現実へと引き戻す。

ヴィランに捕まる時とは違う安堵感。温かくも頑丈な揺り籠に包まれるかのような感覚、今度は何だと見上げると……………。

「
黄金の炎を纏った、金髪碧眼の男……………No. 1のご尊顔が其処にあった。」



ヒーロー委員会からの依頼を受けて早数日。雄英、士傑と続き、今日もゴジータは仮免試験を受ける生徒達に対して指導を行っていた。

何れも豊かな個性を持ち、様々な使い道が予想される将来有望なヒーローの卵達。多少の疲労を感じながらも、後藤甚田は満足そうに帰路に就いていた。

昨日まで家に住んで貰っていた施設の皆も、既に星の都へ戻っている。一部の子供達は帰るのを渋ったが、最終的には兄貴分である甚田の説得の下、渋々と元の日常へ帰っていった。

寂しくなった我が家、今度オールナイトでも夕飯に誘うかと考えていた時、ふと視界に暴れるヴィランの姿を目撃した。

神野の戦いから今日まで、目立ったヴィラン犯罪がなかっただけにその光景はいっそ懐かしくすら見えた。自分とオールマイトのあの戦いを目にしながら、それでも暴れようとする巨大ヴィランにある種の感心を抱きながら、後藤甚田ことゴジータはその場から急降下をして、件のヴィランを蹴り上げた。

一撃で意識を刈り取られたヴィランは、手にしていた人質を手放した。無視するわけにも行かず、ヴィランの確保より人質の安全を優先したゴジータは、迷うことなく人質の体を抱き留める。

所謂お姫様だっこ。人質の負担を考慮して咄嗟の抱き抱えだが、どうやら何ともないらしい。混乱しながらも、元気な様子の女性に安堵していると……ふと、ゴジータは既視感を覚えた。

自身の腕の中の女性。

——あれは確か、降り頻る雨の日だった筈。諸々の事情を抱え、一時は個性すら使えなくなった頃、学園からの退学すら頭に浮かんでいた自分に、涙混じりで訴えてきた女性。

『喩え貴方が何者だろうと、貴方は貴方じゃないですか!!』

「——アンタは」

久し振りの邂逅。突然の出来事で、会えるとは思えなかった筈の人。奇妙な縁に流石

のゴジータも戸惑うなか、視界の端でエンデヴァーが滑り落ちていくのが見えた。



「——ど、どうぞ、大したモノではないですが」

「あ、いえ、どうもありがとうございます」

場所は変わって轟邸。あの後、拿捕したヴィランを警察に預けたゴジータは、女性——轟冬美の身柄を安全な場所まで送ろうとしていた。

本来ならこの地区を担当しているエンデヴァーに預けたい所だが、何やら当の本人は憔悴しており、バーニン達サイドキックから頼まれた事もあり、ゴジータは彼女の案内

の下、彼女の実家へと訪れていた。

本当は送り届けた後すぐに帰るつもりだったのだが、どういふ訳か引き留められ、仕事終わりの空腹時だった事もあり、腹の音を聞かれたゴジータは意外と押しの強い冬美に誘われ、助けて貰った礼として夕飯をご馳走して貰う事になった。

※因みに、現在のゴジータはヒーロースーツではなく、予め用意していた年相応の私服に着替えている。

それで、用意して貰った肉じゃがに箸を通し、一口頬張ると……………。

「——うまい」

「ほ、本当？ お世辞とかじゃない？」

「いや、マジで美味しいですよ。下味もちゃんとしてて、出汁も具材に浸透している。結構手間暇掛けるんじゃないですか？」

「えへへ、うん。私って料理位しか得意なことないから、せめて家族には美味しいものを食べて貰おうと思って……………」

「そうツスカ……………」

「——」

「気まずい。冬実は兎も角、体育祭の時結果的に盗み聞きしてしまい嘗ての轟家の家庭事情を知ってしまったゴジータは、ニコニコと笑みを浮かべながら料理を出してくれる

冬実になんと声を掛ければいいか分からなかった。

献身的で優しい姉、きつと他の兄弟達からは懐かれていたのだろう。端から見れば母を除いて円満な家庭にも見えなくもない……表向きには。

(て言うか、エンデヴァアの娘さんだったんかい！ 他にも兄弟が二人もいるとか、エンデヴァアとその奥さんハッスルし過ぎじゃない!?)

諸々気になる所はあつたが、一先ず目の前の料理を楽しむことにした。既に事務所には話を通してあるし、どうせこのまま家に帰るだけ。ジエントルとラブラバも今日は一日暇を出しているから、今頃街の何処かでのんびりしているのだろう。

誰もいない家に帰るのは少し憚れるから、軽い気持ちで誘いを受けたのに、何だか少し後悔し始める甚田だった。

対して、誘った本人はというと……。

(なにやつてるのなにやつてるのなにやつてるの私イツ!? 何でNo. 1ヒーローを食事に誘つてるの!?! て言うか男! 家族以外の男の人を誘うとか、色々軽すぎない私!?)

ある意味で甚田よりもいっぱいいっぱいになっていた。久方振りにあつた顔馴染み、互いに名前も知らず、何を目的としているか分からない。

ただあの日、ポロポロだった彼を見ていられなかった。周囲を気に止まず、一心不乱

に、苦しそうに蹴く彼の姿が嘗ての兄と重なって見えてしまった。

だから、余計なお節介だと分かっているけど、放っておくことが出来なかった。

(じゃ、じゃああれよ！ あの時の君がNo. 1ヒーローになったから、遅めのお祝いとか、そんな感じで行けばOKの筈よ、うん！)

OKではない。名前も知らなかった相手を家に誘っている時点で、色々とアウトである。

(て言うか、何で夏くんは居なくなっちゃうかなあ！ お邪魔虫は退散とか、そんな事頼んでないのに！)

家に帰る前、事前に弟である夏雄に連絡した所、自分の安全を知った弟は安堵し、無事だった姉に喜んだ。

かと思えば、これから助けて貰ったお礼に料理を振る舞いたいから、夏雄にも手伝って欲しいと伝えると、普段は聞き分けの良い弟がどういふ訳か拒否してきた。

しかもその声色は何処か軽く、その口振りは電話の向こうでニヤニヤと笑う姿を幻視する程。

「遂に姉ちゃんにも春が来たか」なんて軽口を最後に通話を切る夏雄に怒りが込み上げるも、一先ず冬美は一人で甚田をもてなす事にした。

そんな事もあり、可能な限り意識しないように気を付けながら、自分の料理を食べる

甚田を見る。

(こうしてみると、普通の男の子なんだよなあ)

ヴィランと戦っている時は怖い程カッコいい癖に、平時は嘘みたいに穏やかだ。人の為に戦い、人の為に守る。そんな次世代のN.O. 1ヒーローの食事風景を冬実はポーツと眺めていた。

「あの、なにか？」

「え？ あ、ううん！ 何でもない！ ごめんね、ジロジロ見ちゃって！」

流石に見すぎだったなどと、反省しながら謝罪する冬実を、甚田は然程気にした様子もなく受け流す。しかし、それでも何だか気になったのか、会話を繋げる意味を込めて冬実は口を開いていた。

「……本当、懐かしいね。あの時の君が今ではN.O. 1ヒーローか。何だか感慨深いや」

「……………その節は、お見苦しい所を見せてしまい申し訳ありません」

「ああいや違うの！ 別に責めている訳じゃないの。本当に、嬉しかったの。あの時の君は何だか苦しそうで、私が勝手にお節介をしただけだから」

「でも、そんな君が今ではN.O. 1ヒーローになって、多くの人達を救っている。それがなんだか……とても誇らしく思っちゃうの」

「……冬美さん」

「あ、あはは、なに言ってるんだらうね私。自分の手柄みたいに言って、凶々しいよね。ごめん、本当にごめんなさい」

本当に凶々しい。まるで当時の彼を救ったのは自分のように語るその口振りが、冬美自身を嫌悪にさせた。戦い、救ってきたのは目の前の甚田なのに、まるでそうなったのが自分のお陰のように語る。凶々しさに冬美は激しく自己嫌悪した。

「——今の俺が在るのは、他ならない俺自身の積み重ねです。誰か一人のお陰とか、そう言うんじゃない」

「……うん」

「でも、その積み重ねてきたモノの中には貴方の事も含まれている。あの頃、周囲も自分すらも見えてなかった俺には、貴方の言葉はとても衝撃的だった」

「——え？」

「ありがとう、冬美さん。今の俺の中にはあの時の貴方の言葉も刻まれているよ。それに、余計なお節介はヒーローの本質、あの時の冬美さんは俺にとつて間違いなくヒーローだったよ」

「——あ」

何様だと、そう思える程に傲慢な自分の言葉を、目の前のヒーローは笑って受け入れ

てくれた。その笑顔に、轟冬美の思考は固まり……………。

「それじゃあ、俺はもう行きます。夕飯、ご馳走でした」

「ま、待って！」

「？」

気付けば、立ち上がって去ろうとする彼の手を握り締めていた。

大きい。ゴツゴツして、硬くて、それでも暖かい温もりのある手。父や弟達とは似ているけど違う、異性の初めての温もりに、冬美の顔は赤くなる。

「冬美さん？」

「……………敬語」

「はい？」

「敬語！ 次会うときは敬語とか要らないから！ 他の人達みたいに、呼び捨てで良い

から！」

「は、はあ……………？」

「分かった!?!」

「わ、分かった」

何故か、勢いに任せてとんでもないことを口走っている気がするが……………もう止まらない。食べ終えた食器を手に台所に引っ込んでいく冬実をポカンと見送ると、改めて甚

田は轟家を後にする。

その際。

「ただいまー。悪い冬姉、なんか食べ物ある……って、ゴジータ？」

「ん？ おお、焦凍か。邪魔したな」

「え？ な、なんでゴジータが、家に？」

「ちよつとお前の姉ちゃんに世話になってな。もう帰るから、ゆつくり休んでくれや」

「は、はい。ありがとうございます？」

「………良い姉ちゃんだな。大事にしろよ」

玄関前で遭遇した焦凍に簡単に言葉を交わすと、甚田は空を飛び、自宅へと帰った。

その後、用意して貰った蕎麦を啜りながら……。

「——冬姉、もしかしてゴジータと結婚するのか？」

彼の優秀な脳内CPUによって弾き出された答えは、轟冬実を噴き出させ。

「しないわよ!!」

初めて目にする顔を真っ赤にした姉に、焦凍は目を丸くした。



それから、ゴジータによる学生の戦力底上げの指導は続いた。西に東に、北へ南へ、連日仮免試験を備えて鍛練を重ねている生徒達にゴジータは自身の出来る限りのアドバイスを注ぎ込んできた。

これで次の仮免試験は面白いことになる。自身が鍛え上げてきたジェントルの事に加え、楽しみが増えたと笑うゴジータは本日、オールマイトと共にとある場所へ向かっていた。

そこは本土から五キロ程離れた沖に建てられた施設。ヴィラン犯罪者特殊収容施設と呼称される実質的な刑務所——通称“タルタロス”。

明日の仮免試験を前に個性社会の闇へやって来たゴジータとオールマイト、海風に髪を靡かせながら、二人は冥府タルタロスの奥深くへ進んでいく。

幾つもの嚴重な警備を潜り抜け、訪れた先では……。

「やれやれ、今日は僕の処刑日かい？　いつから日本は私刑を許される世の中になったのかな？」

皮肉を交えながら煽ってくる、顔面梅干し面白男が拘束された姿で其処にいた。

記録57

幾重にも重ねられた最新の防衛システム。冥府タルタロスという名称を冠された人工の島に建てられた敵犯罪者収容施設。

中に封じ込められているのは、何れも凶悪なヴィラン達。強盗殺人は勿論、人に仇なすあらゆる禁忌を犯してきた罪人達の檻。

24時間体制で常に監視は怠らず、監視員の一人一人が常に社会の平和を背負う覚悟で職務に励んでいる。

多くの闇と悪を詰め合わせ、一度開けば大災害は免れない正に冥府の檻。

そんな「タルタロス」だが、今日はまるで嘘の様に静まり帰っていた。いつもは監視下の中でも不気味に笑っている凶悪なヴィラン達も、独房の部屋の隅で大人しく座り込んでいる。

「なんだ。凶悪なヴィラン達がいるって聞いたから、てつきりもつと騒がしいもんかと思っていたけど……意外と静かなんだな」

「いや、仮にも収容施設だから。どんな刑務所を想像していただい君？」

「もつとこう、鉄格子をガンガン叩いたり、下卑た笑いを向けてきたり、意味不明な煽りとかされるものか……」

「映画の見すぎだよ」

ヴィラン達は怯えていた。凶悪な犯罪者らしいその野生の如き直感により、今のタルタロスには恐ろしい怪物が来ていることを本能的に察知したのだ。

しかも二人、その内一人はヴィラン達がよく知る平和の象徴ことオールマイト。そしてその片割れが囚人達を更に怯えさせる原因の怪物だった。

その怪物の名はゴジータ。その名を知るものは怯え、震え、竦み上がり、部屋の隅でガクブルと震えていた。

嘗てない囚人達の様子に、監視員の一人は不謹慎ながらこう思う。

「——今日は、いつもより楽できそうだな」

囚人達が怪しい行動をしていないか、逐一監視し、僅かでも見逃さない神経を磨り減る仕事を続けている施設の職員達。モニターに映し出されている囚人達の様子に、いけない事だと知りながらも職員達はいつも肩の力を抜いて職務に務めるのだった。

……いや、ただ一人だけ奇妙な動きをしている輩がいる。それは最近になってこのタルタロスに収容された恐ろしき犯罪者。

ヒーロー殺しと呼ばれ、世間から恐れられている肅清者ステイン。多くの囚人達が隅で震える中、ステインは扉の前で祈るように両手を組んで跪いていた。

「んで、このタルタロスで特に嚴重に収監されているのが、あの梅干し面なんだな」

梅干し。そう聞かされた案内役の塚内は必死に嘖き出すのを堪えた。一方のオールマイトは既にAFOを格下扱いしているNo.1ヒーローに乾いた笑みを浮かべている。

「……さて、二人とも、そろそろ面会の場所だが……くれぐれも扱いに気を付けてくれ。特にオールマイト、奴の挑発には乗らないように」

「ああ、分かっているとも」

「あれだけやられて挑発してきたら、それはそれで根性ありそうだよな」

塚内の言葉に従い、挑発に乗らない事を誓う一方で、隣のゴジータは軽口を叩く。そんなNo.1ヒーローを軽めに戒めると、改めて二人は案内された扉の先へと足を踏み入れた。

其処にあるのは真つ白な空間。隔たれた透明な壁の先には、嘗てのオールマイトの宿敵。

幾重にも拘束され、呼吸器のみを付けられることを許された時代の怪物——AF
Oが其処にいた。

『時間は予定通りとなります。くれぐれも会話にはお気を付け下さい』

アナウンスに促され、頷いた二人は用意された席に座る。対面式に向かい合う両者、オールマイトは静かに見据え、対してAFOはその口元に笑みを浮かべている。

「やれやれ、今日は僕の処刑日かい？　いつから日本は私刑を許される世の中になったのかな？」

「お前には幾つか聞きたい事がある。AFO」

「死柄木弔のことかい？」

「……………つ、そうだ。何故貴様がお師匠の、先代の血縁を取り込んだ」

「何故って、この前も言ったじゃないか！　僕は君を憎み、恨んでいる。君が嫌がることは徹底的にやり尽くすと」

オールマイトが訊ねたいのは死柄木弔のこと。本名は志村転弧、先代OFA継承者である志村菜奈の孫である彼は、何の因果かAFOの後継者として敵連合の一員となっている。

先代の志村菜奈、オールマイトにとって恩人以上の存在である人物の血縁がヴィランとなってしまうている。しかもよりにもよって宿敵の後継者という立場として……………。

憤怒が込み上げてくるの必死に抑え、その目をより鋭くさせながらオールマイトは問う。

「……………死柄木の居場所は何処だ」

「それを僕が正直に言うと思つたのかい？」

嗤う。憤怒に駆られ、今にも殴り倒そうと息巻きながら、強靱や精神力で耐えているオールマイトを、AFOは火に薪をくべる様に嘲笑う。

「もつと有意義な話をしようぜオールマイト、ここじゃあ僕の話聞いてくれる奴は一人もいないんだ。飢えているんだよ、人と話すの」

怒りに堪えながら、それでも対話を望むオールマイトに対してお前の話はずまらないとAFOは一笑する。

「なら、今度は俺から質問してもいいか？」

「……………今度は君か。正直、僕はオールマイトよりも君の方が不愉快な存在だよ。神野で見せた妙な光、あれはなんだい？」

「お望みなら今すぐにも味わわせてやるよ。……………俺が聞きたいのはただ一つ、なんでこんな真似をした？」

「? ……こんな、とは?」

「お前が行つたすべてだよ。何故人を操る? 何故踏みにじる? お前、結局何がしたいんだ?」

要領の得ない質問だと小馬鹿にしてくるAFOに構わず、ゴジータは質問を続ける。

それはAFOの目的の更に奥深くへ突き刺すモノ、ゴジータの言葉の意味を理解したAFOは、これ迄より一番深い笑みを浮かべた。

「決まっているじゃないか。愉しむ為だよ、ゴジータ。僕が人を踏みにじるのは、美味しいワインを飲みたいが為さ」

「ワインだと?」

「知らないのかい? ワインは葡萄といった果実を潰し、発酵させたアルコール酒さ!」

「———なら、お前にとつて個性を持った人間は果実か」

「そうだね。一つ違うのは果実とは違い一度踏み潰したら終わりではなく、踏み方や組み合わせによつて味も匂いも劇的に変化するつて事かな? そういう意味では、あの

二人の父親は実に良い味を出してくれたよ」

「———」

口元を三日月に歪めてそう口にするAFOに対し、今度はゴジータが口を閉じた。目の前の人の形をした悪魔が口にしたあの二人、それが自分を兄と慕う城鐘兄妹の事を指しているからだ。

「僕はね、人の未来を阻みたいんだ。どんなに輝かしい未来を待つ者も、どれだけ悲惨な過去を持つ者も、等しく僕の掌で極上のワインとなる。それは、ある意味究極の平等と言えるんじゃないかな?」

己をただ一つの頂点として君臨し、それ以外のすべての他を下にする。そこには人の優劣など存在せず、ただ全てが己を満たす素材でしかない。歪み、捻れ、破局の粹をかき集めた唾棄すべき悪。

聞かされた塚内や他の看守も絶句し、オールマイトすら言葉を失う中、ゴジータだけ反応し、立ち上がる。

「ん？ どうしたんだいゴジータ、いきなり立ち上がったりして？ まさか、僕を殺す気かい？」

明らかにこれ迄とは顔付きが違う。何かを決め、何かを悟った様な顔付きになるゴジータにAFOは察した。

「出来るのかい？ 今の僕は法の監視下に置かれている。多くの人達が見ているなか、無抵抗な人間に君は暴力を振るえるのかい？」

今、AFOは法の下に捕らえられている。だが、それは逆を言えば法によつて保護されている事を意味している。

法治国家である日本では、死刑が下される事例はあれど、それまでに至るには例外なく多くの手順が必要になってくる。

AFOもそうだ。例えどれだけ残忍で非道な行いをしてきたとしても、それを明らかにするには事前の調査が必要になってくる。それが明らかになるまで、AFOの身柄は

法の下に手出しをする事は罷りならない。

それこそ個人の感情一つで、下していいものでは決してあり得ない。それが例えN
o. 1ヒーローであつたとしても。

いや、No. 1ヒーローだからこそ、法を犯す事は許されない。

——しかし。

『ゴジータ!!?』

「……おいおい、嘘だろ?」

その手に集まる光を見て、その常識は覆る。

それは、ゴジータが見せる初めての殺意だった。静かに目の前の悪意の塊を見据え、その悪辣さを理解した上で、ゴジータは自分のするべき行いを本能で悟る。

『ダメだゴジータ!! それだけはダメだ!!』

モニター越しで見守っていた塚内が口を挟むが、対するゴジータは微塵も動かない。

「止めないでくれ塚内さん。今のやり取りで解つた。コイツは生かしておくわけにはい
かない。生かしてちやいけなない類いの存在だ」

存在。そう口にするゴジータからは既に目の前の怪物を人として認識していない事
が伺える。彼は本気だ。本気でAFOを独断で消そうとしている。

掌から集まる光、それが熱を持ち、更なるエネルギーへと凝縮されていく。目の当た

りにする殺意の力、何処までも純粹で恐ろしい力の集約に、初めてAFOの笑みがひきつる。

「正気かい？ そんなモノを此処で放つたら、このタルタロスも無事では済まないよ？

そうなつたら、システムから解放された犯罪者達も暴れだすけど、いいのかい？」

「命乞いが下手だな。そんなもん、俺がその直後にソイツら全員を抵抗できなくなるまでぶちのめせば済む話だ。タルタロスも、完全な形になるまで協力するし、その後は俺も大人しく収監されてやるよ」

『ダメだゴジータ！ そうなつたら後の社会はどうなる！ 君に期待を寄せる多くの人達を裏切る事になるんだぞ!』

No. 1ヒーローが人を殺めた。その醜聞は瞬く間に社会に大きな衝撃を与える事になり、最悪の場合ヒーローに対する不信感を煽る事に繋がりがかねない。

何より、最強のヒーローであるゴジータを犯罪者として失うリスクは余りにも大きすぎる。ただでさえオールマイトが事実上の引退を表明したのに、そうなつた時の社会への反響は塚内でも予測不可能だった。

「俺一人が泥を被る事で、巨悪から社会を守れるなら別にいいさ。まあ、死柄木弔をどうにかするまでは自由にさせて欲しいけど……」

しかし、それを踏まえた上でゴジータは目の前の悪意を滅ぼす選択を選ぶ。

施設の子供達、城鐘兄妹や恩師である姫野葵には申し訳ないが、既に目の前の悪意の塊は彼女達にヴィランをけしかけて危機に陥れている。中でも御幸と恵にはヴィランによつて怖い思いをさせてしまっている。

裏社会に潜むAFOの手先、そんな奴等に対して牽制する意味合いを含め、ゴジータは自らの手を汚すことを厭わなかった。No. 1ヒーローとしての責務、それを理解した上でのゴジータの選択に塚内も何も言えなくなった。

光がより強さを増していく。目の前で膨らむ殺意の光に、AFOが人生二度目の恐怖を知った時。

ゴジータの腕に一人の手が置かれた。

「ゴジータ、ありがとう」

「――」

「君のその怒り、その義憤は何も間違っちゃいない。誰よりも怒るその姿に、私は救われたよ。だからどうか、今だけ堪えて欲しい」

微笑み、優しい声音で諭してくるオールマイトにゴジータは殺意と共に光を霧散させた。それを目の当たりにしたAFOは、無自覚に安堵の溜め息を吐き出す。

「――分かったよ。まだ俺にはやることがあるし、それを放ったままにするのは気分が悪いしな」

オールマイトの言葉に従い、この場での私刑は一先ず止めにする。

そして、更には予定していた例の必殺技をぶつける事もやめにした。

「おいAFO、オールマイトの情けで此処にいる限り俺からお前に手を出すことはしない。約束してやる」

それは一つの口実。これから先、万が一AFOが脱獄を試みた時に対するある種の言い訳。

「……………」

「けどな、もしお前がこのタルタロスから出てくることがあれば、その時は今度こそ俺が跡形もなく消してやる」

脱獄する手段を残し、その時のぶちのめす口実を手にする為、敢えてゴジータは例の必殺技をぶつける事を中止する。

「……………」

小さな、本当に小さな悲鳴。No.1ヒーローが見せる最後にして最大の殺気を前に、長らく裏社会に君臨してきたAFOは、その表情を強張らせていた。

『……………時間です。お二人とも、速やかに退出を』

アナウンスから看守の声が届く。どうやら彼等も相当焦っていたのか、その声音から

些か震えが聞き取れた。彼等にも悪いことをしたな、そう思いながらその場を後にする二人。

最後に、オールマイトは一度だけAFOに振り返り。

「――さらばだ。AFO」

その言葉だけを残して、二人は振り返ることなく去っていった。

残されたAFOはその後、自分がゴジータによって殺されかけ、オールマイトに助けてもらった事実に関心、自我半壊する迄の合間、ひたすら己の無事という幸福を噛み締めていた。

そして翌日。一つの決着を迎えた二人は次代のヒーロー達の成長ぶりを確認するべく、気持ち新たにして仮免試験の見学に向かうのだった。

「——所でゴジータ。君、あの後例のヒーロー殺しとも面会してきたみたいだけど、何してたの？」

「なに、ちよつとしたファンサービスだよ」

「おおおお、おおおおおつ!!」

その後、特別にN.O. 1ヒーローから差し入れとしてとあるカードを『四枚程』受け取ったステインは、毎日数時間、カード達に向けて土下座という名の礼拝を行っていた。

記録58

「会長、本日もお疲れさまでした」

「ああ、篠宮もな」

秀治院学園。先のウイルス襲来により一時閉鎖されていた学園は、多くの生徒達の声もあつて再開を果たし、無事に学舎としての機能を取り戻すことに成功した。

壊された箇所も既に修復され、学園の風景は既に日常の姿を取り戻している。

そんな生徒達の纏め役でもある生徒会も、端から見ればいつもと変わらぬ時間を送っていた。

学園の運営により生まれた問題、それらを表面化させて書類として処理する。当たり障りのないいつもの仕事を終えた生徒会長である城鐘御幸は、同じく生徒会副会長である篠宮かぐやへ劳いの言葉を返す。

「一時は学園が閉鎖してどうなることかと思つたが、無事にこうして再開できたのは良かった。リモートでの授業があるとは言え、やはり学生は学校に通つてこそ、だよな」

「そうですね。単に授業内容をこなすだけならリモートだけでも事足りませんが、部活や生徒同士によるコミュニケーションの場となるのも学校の機能の一つ。そう考えれば、この学園は私達のもう一つの家と呼べなくもないかもですね」

「失い掛けて初めて解る有り難さだな。この事を教訓にして、これからはもう少し落ち着いて物事を見るべきだな」

「慧眼、流石です。会長」

「からかうなよ。篠宮」

珍しく二人きりの空間、普段は小言の多い庶務もおらず、陰気な会計も、そして一番厄介な書記も今は席を外している。

今この生徒会室にいるのは自分と城鐘御幸だけ、生徒会としての仕事を終わらせ、後には下校時刻まで談笑するだけとなった篠宮かぐやは、御幸に対して質問したい事があつた。

ズバリ、城鐘御幸とゴジータの関係性である。先のヴィラン襲来により、学園は一時機能不全となった。学園のセキュリティシステムは悉く破壊され、雇っていたヒーローも軒並み倒された。

当時篠宮は他の生徒達共々体育館へ避難していたから具体的な事は知らないが、ある日とある噂が彼女の耳に入ってきた。

それは、ゴジータと御幸が親しき間柄であるという噂。ヴィラン襲来の際、危機に瀕していた会長である御幸とその妹である城鐘恵、そして巻き込まれた一般生徒の前にかのN.O. 1ヒーローがやって来た。

そしてその時、城鐘恵は言ったのだ。ゴジータを指して「兄」と、そう呼んだのだ。そううな。

しかし、ゴジータにこれと言った肉親はいない。以前篠宮家で父が新たなN.O. 1ヒーローである彼の身元を徹底的に調べた事から、それは間違いない筈だ。なら、何故城鐘恵はN.O. 1ヒーローを兄と呼んだのか。

(考えられる可能性は幾つかあるけれど……今一つ確信には至れないのよね)

仕事終わりの一杯として、自身が淹れたお茶を美味しそうに啜る御幸を眺めながら、篠宮かぐやはその頭脳を回転させる。

(ゴジータ……後藤甚田は施設育ちの孤児。星の都出身の人間、仮に会長達が彼の弟妹だとするのなら——)

自分が慕う(友情的な意味で)生徒達の長である城鐘御幸もまた、親無しの孤児である事を意味している。

有り得ないとかぐやは否定するが、そう言えばやたらと二人に関する情報が秘匿されていたなど、思い出す。当時は然程気にしていなかったが、噂を耳にしたときから彼女

の裡には言葉には言い難い焦燥感の様なものが燻り始めていた。

もし、会長が親無しの施設育ちなのだとは知られたら、果たして彼等はこの学園に居られるのだろうか？……難しいだろう。秀治院学園は良くも悪くも名家から輩出される将来を有望視された子供達が集まる教育現場。

そこに如何に学問に秀でていようと、出自の分からない輩を放置しておく程、この学園の歴史は優しくはない。もし、二人が施設出身だと知られれば、この学園での二人の居場所が消えて無くなるだろう。

（——ダメ、それだけは絶対にダメ！）

（篠宮、さっきから難しい顔してどうしたんだろ？）

何やら真剣な顔で思考を巡らせている様子の副会長に、御幸は戸惑った。

（仮に、仮に噂が本当だととして、二人が施設の出の人間だとしても、私がするべき事は変わらない。副会長として、最後まで会長と妹さんを支える為に尽力するのみよ！）

嘘である。この篠宮かぐやは欲しいものがあればどんな手を使つても手に入れる強欲の持ち主。城鐘御幸という宝石を手に入れる為ならば、どんな汚い手段を取るのも辞さない鋼の戦乙女である。

そんな彼女はいつでも如何にして目の前の男から告らせるかを思案し、実行してき

ならばこの状況を利用し、彼の関心を自分一人に向けさせる。其処まで考えが至るまでに彼女の思考は三秒も掛からなかった。

しかし。

「篠宮、大丈夫か？」

「え？ あ、失礼しました。つい考え事を」

「……………それって、例の噂についてか？」

「ツ!! 会長、御存じだったのですか？」

「流石に直接聞かれた事はなかったがな。だが、ああも連日奇異なモノを見る目で見られては、ある程度察しはつく」

「無理もない。そして、その噂は事実だ。俺とゴジータ……………彼とは血こそ繋がってはいないが、同じ施設で育った間柄だ」

あつさりとして、一切の言い訳をせずに肯定する御幸に篠宮かぐやは息を呑んだ。

「……………何故、それを私に？」

城鐘御幸という男は、他人に弱さを見せることを良しとしない男だった。常にどんな時も凛と胸を張り、正しい事には愚直に挑む生徒達の模範となる長。そんな彼が妹の事も巻き込んだ上で自分に事実を告げている。

他の誰かの耳に入れば、自分の人生の枷になることも承知の上で。

「何でだろうな。色々理由は考えていたんだが……篠宮には嘘をつきたくないのが、一番の理由かな」

「……………え？」

「篠宮には散々世話になったからな、副会長であるお前に不義理を働きたくない。無論、この事は既に恵ちゃんも了承済みだ」

「妹さんも……………」

「もし、この学園に真実が伝わり、俺達を排斥しても、お前が気に病むことはない。今の内にそれだけは伝えておく」

「……………会長」

「俺が生徒会長としていつまでいられるか分からんが……………その時まで宜しく頼むよ」

唾然となつている篠宮かぐやの肩を、ポンと叩きながら城鐘御幸は生徒会室を後にする。少しだけ寂しそうな笑みを浮かべて、一人満足そうに退室していく彼に……………。

（なによ、なによ……………それ！）

篠宮かぐやは怒りに震えていた。

（私が懸念していた事をあつさりを受け入れて、一人満足そうに受け入れて！ 真剣に悩んでいる私がバカみたいじゃない!!）

しかし、言葉に反して彼女の心の裡には確かな暖かさが伝わっていた。それは城鐘御幸からの心からの信頼の証、誰も知らない真実を自分にだけ教えたという事実が、かぐやの胸中を満たしていた。

(いーわよ！ そつちがその気なら私にだって考えがありますからね！ 諭えお父様を敵に回したとしても、絶対にお二人の事は私が守ってあげるんだから！)

尚、そんなかぐやの思惑とは別に、彼女の父親はゴジータの大ファンである為、かぐやの心配は杞憂に終わるのだが……それを知るのはまだ当分先のお話。

——本日の勝負、ゴジータの勝ち。



仮免試験。それはヒーローを志す有精卵達が目指す一つの関門、これ乗り越えたモノにはヒーロー活動の仮免の資格を獲得し、プロヒーローへの道が大きく近づくことになる。

当然、その試験内容は厳しく設定されており、毎年多くの失格者を出していて、今回開催される試験を受ける者の中には今度こそ受かるんだという強い意思を持ったヒーロー志望者もまた存在している。

そんな多くの志望者達が夢抱くヒーローへの道。決して楽ではない道であることを知りながら、それでも手を伸ばさずにはいられない。

今日も、その日はやって来た。

「着いたぞ。全員速やかにバスから降りろ」

引率の相澤に促され、バスから降り立つのは雄英ヒーロー科一年A組。度重なるヴィラン襲撃をはね除け、世間から最も注目されている次世代のヒーロー達。

そんな彼等がバスから降り立って最初に晒されるのは……幾つもの敵意に満ちた視線。

「お、おいおい、なんか空気がおかしくねえか？」

「なんであいつらオイラ達をあんな風に睨んでくるんだよお！」

初対面の人間から突然の敵意を向けられ後退る上鳴と峰田。だが、彼等が雄英を敵視

するのはある意味仕方がないことだった。

「アツハハハハ！ そりやあそうさ！ アンタ達雄英は幾人ものトップヒーローを輩出した屈指の名門高、そんな連中が来たとあっちゃ、否が応でも関心を寄せちゃうつてもんさー！」

「あ、あなたは！」「スマイルヒーロー」M s. ジョーク！」

何故、自分達に敵意を向けてくるのか、それを親切に教えてくれたのは笑みを絶やさない女性、M s. ジョーク。傑物学園高校ヒーロー科二年二組の担任である。

「ようイレイザー！ 久し振りだな！ 結婚しようぜ！」

「しねえよ」

唐突なプロポーズも即答で返され、ジョークは笑うしかなかった。

「アツハハ！ 相変わらず返しが早いねえイレイザー、んで、その子達が噂の卵達かい？」

……成る程、噂どおり良い面構えをしているじゃないか」

しかし、その笑みは次の瞬間別のモノへ切り替わる。単純に笑いを楽しむというより、相手を値踏みしてその価値に笑みを浮かべる。決して自分達を侮っている訳ではなく、寧ろその逆。獲物を前にした獣の様な笑みを浮かべるジョークにA組の多くは戦慄する。

「先生、他校に絡むのは其処までにしておきましょう？ 雄英の人達困っているじゃない

ですか」

そんな彼女を諷める形で後ろから現れるのは、黒髪の男子。爽やかな笑みを携えて現れる彼を見て、A組の多くが緊張を和らげるなか、唯一爆豪だけは鼻を鳴らした。

「僕の名前は真堂播。此処ではライバルだけど、試験が終わったらまた改めて話をさせて欲しいな」

「あ、はい！ こちらこそよろしく！」

手を差し出してくる真堂に快く応える緑谷、そんな二人を爆豪は気に掛けることもなく横を素通りする。

「君は……爆豪勝己君、だったよね？ 君の事も知ってるよ。試験では負けないように頑張るから、よろしくね」

「ハッ、何がヨロシクだ腹黒野郎。そういう台詞は顔と一致させてから宣いやがれ」

鼻で笑い、挑発する爆豪に真堂は驚きで固まった。それは親切な対応の自分に無礼で返した事ではない、自分の性根を初見で見抜かれたことだ。

そんな爆豪を飯田が失礼だと諷めようとした時、一台のタクシーが雄英のバスの横に停まる。

試験の関係者か？ 現れたタクシーから降り立つ人影に誰もが注目し………：仰天した。

「ふう、どうやら間に合った様だな。紳士足るもの、時間には余裕を持って行動せねば」
「その通りねジェントル、一応紅茶のセット持ってきたけど……そこまでの余裕はあるかしら？」

それは、昨今N.O. 1ヒーローの下で更正の為の訓練を受けてきた自称義賊、ジェントル。その隣に相手のラブラバを侍らせながら、ヒーローの卵達の前に降り立つ。

そして、その後ろには……。

「マジで、タクシーって今はこんなにするの!? やっべえ、下ろすの忘れてたから金たんねえ……あ！ 相澤先生良いところに！ ちよつと金貸してー！ 三百円でいいからー！」

嘗ての恩師に金を借りようとしているN.O. 1がいた。

「……あの、相澤先生、呼んでますよ？」

「知らん、他人のフリしろ」

ゴジータの懇願を無視しながら会場へ進む相澤、その隣では爆笑しているM.S. ジョークが呼吸困難に陥っていた。

記録59

仮免試験。それはヒーローを志す有精卵達にとって避けては通れない登竜門。毎年、全国にある学校のヒーロー科に属する生徒達が挙って挑むヒーロー試験。

これに合格すれば条件下での個性使用が許可され、誰もが憧れるヒーローという業界に一步踏み込む事が出来る。そんな、誰しもが意気込みを露にしている中、とある試験会場はこれ迄とは違う空気を醸し出していた。

「お、おいアイツって確か……」

「ああ、間違いねえ。ジェントルだ。ジェントルⅡクリミナル」

「本当に仮免試験に参加するんだ」

試験会場の前に降り立った人物。嘗ては自らを義賊と称し、自らの行いをネットを通じて世間に問い掛けていた者。No. 1ヒーローであるゴジータに目を付けられ、今ではすっかりドンマイコールが似合うようになった伊達男。

飛田弾柔郎、またの名をジェントルⅡクリミナル。今日の為に飛びつきりの紅茶をキ

メてきた男は、集まる視線を前に若干及び腰になつていた。

「——遂にこの日が来たか。私が飛躍する時が」

「きやー！ 待つてたわよジェントル！ あの鬼畜ヒーローに苛められること数ヶ月、遂に報われる時が来たのよ！」

念入りに整えた髭を弄りながら会場を見上げる。ヒーローを指しておきながら、一度は挫折した自分が、遂にこの日を迎えた。複雑な様で、同時に何処か満たされている感覚。色々と思議な気持ちで胸が一杯なのに、嫌ではない。そんな不思議な気持ちで浸っていると、後ろから声が掛けられる。

「よー飛田、なにこんな所でノスタルジックに浸ってんだよ、まだ試験は始まつてもいいんだぞ」

呆れながらも、親しげに話し掛けてくるのは今日まで自分を鍛えてくれたNo.1ヒーロー。世間に後ろ指を指されている自分を、公安と取引を持ち掛けながら押し倒し、時には他のトップヒーロー達を巻き込んで世間に証明するのを手伝ってくれた恩人。

自身のヒーローとしての仕事をこなしながら、それでも自分の指導を止めなかったゴジータに、ジェントルは改めて礼を口にした。

「……ありがとう、私が此処までこれたのも偏に貴方のお陰だ」

「だあーかあーらあー、礼を言うのはまだ早いっての。それとも、もう受かった気でいんのか？」

頭を下げてくるジェントルに真面目なやつだと思いつつも、決してそれは口にせず、敢えてゴジータは周囲に挑発する形を取った。

「え？ ……そりゃあ、ゴジータの指導を今日まで受けてきたのだから、合格するのは当然なのでは？」

「ジェントル？」

瞬間、周囲の空気は凍り付く。ゴジータの意味深な言葉を、バカ正直に応えてしまったジェントルは自身の失言に気付かず口にしてしまう。

流星のゴジータもこの言葉には予想していなかったのか、あつけらかんとした様子のジェントルについて噴き出してしまった。

「プツククク……そうか。当然か。そいつは失礼したな。なら、俺の指導を受けたジェントル君はたかが学生程度に遅れはとらないと、そう言うんだな？」

「まあ、先日は色々あったし。私もそれなりに修羅場を潜っている。教科書通りでしか動けない学生達と比べるのは……少々酷なのではないか？」

「ジェントルー!？」

ジェントルは、何も適当に言葉を口にしてている訳ではない。仮免試験が始まる今日ま

でジェントルという男は死ぬ気でゴジータの扱きに付いていった。朝から晩まで常に汗と泥にまみれ、個性と自己研鑽の鍛練に明け暮れ、ゴジータとの組手の時はそれ以上の覚悟で望んでいった。

倒され、倒され、倒され続けてきた日々。常に向こう側へ至る事を強制されてきたジェントルは第三者から見ても色々とアレに見えただろう。

そんな地獄を潜り抜けてきたジェントルはさも当然の様にそう口にする。彼の口から出るのは嫌味の類いではない、真正銘客観的な真実なのだ。

そんなジェントルを見て、彼の肩に腕を回しながらゴジータは言う。

「さて、そんなジェントル君の鼻っ柱を是非へし折ってやりたい人は試験中いつでも掛かってくるといい。コイツは曲がりなりに俺の扱きを耐えてきた人間だ。多少の無茶は対応できる……だから」

「思う存分、仕掛けるといい」

そう笑い、会場へ足を向ける。途端に突き刺さる視線に気付いたジェントルは、此処に来て漸く己の失言を理解した。

青ざめ、脚が震えるも今更言葉を覆す訳にもいかず、この日ジェントルは虚勢を張ったまま試験に挑む事になった。

「———でもでもいいけどなゴジータ、お前ちゃんと後で金返せよ」

「あ、はいすみません」



『——えー、それでは試験を始める前に辺り、幾つか皆さんに話して置きたい事があります』

仮免試験会場。各々のヒーロースーツに着替え、試験開始を待つ生徒達の顔には不安と自信で入り混じった感情が張り付いていた。

これから始まる生徒の試練。それを前に緊張感を増している彼等を、観客席から見守る三つの影があつた。

一人はM.S. ジョーク、もう一人はイレイザーヘッド、そして最後がゴジータである。

「——さてジョークさん、アンタの所の生徒さん達はあれから元気になっていたか？」

「あはは！ お陰様でピンピンしてるよ！ 特に真堂なんかはアンタから薫陶を受けてからバリバリに気合い入っててさ、何気に今日を楽しみにしてたんだよ」

「そりゃあよかった。アイツの個性の使い方には気になつていたからな、その分だとある程度矯正出来たみたいだな」

「そうそう！ んで、そんな真堂に触発されてうちの子はみんなやる気に満ちているって訳！ イレイザー、そうなるとアンタの所の子でも危ないんじゃない？」

「それは良かった。何の障害もなく合格したんでは張り合いが足りん。是非とも健闘して欲しい」

笑みを浮かべながらのジョークからの煽りに、イレイザーは皮肉三割ましで返している。相変わらずな奴だなと、ジョークは大して気にした様子もなく笑って流していた。

「でも、アンタも無茶振りされたなあゴジータ。仮免試験受ける生徒全員って、普通に百人単位だろ？ 良く全国回れたもんだな」

「いや、割かし楽しかったぞ。色んな個性を持つ奴が見られて」
「その中で特に気になる奴とかいるのかい？」

「———おい、試験開始前だぞ」

仮にもNo. 1ヒーローが、特定の生徒一人を鼻屑にするのは褒められた行為ではない。イレイザーはジョークを諷めるが、ジョーク本人もその事は理解している。

あくまで雑談程度、これ迄多くの個性を持つヒーローの卵達を見てきたゴジータの見解を聞きたいと言うジョークの興味。

別に其処までマジの考察が聞きたい訳じゃない。そんなジョークの思惑とは別に、ゴジータは真面目に語り出す。

「そうだな。みんな極めたり他者との組み合わせ次第では一線級のヒーローに至れる可能性の塊ばかりだが、それでも目立つ奴がいるとすれば……」

視線を送るのは帽子を被った少年、目付きは鋭くてガタイも大きくて顔付きも厳ついが、ヒーローに相応しい暑苦しい気持ちを持った気持ちのよい奴。

その生徒の名は夜嵐イナサ。【旋風】という個性を持つ風を操る少年。彼もまたゴジータの薫陶を受け、個性の扱いに磨きを掛ける成長途中の段階。あの風小僧がどんな成長を遂げたのか、それも楽しみの一つにしながら、ゴジータは今回見学に徹するのだった。

「——て言うか、アイツさつきから震えすぎじゃね？ バイヴレーションかっての」「ああ？ まだ試験始まっていないのにそんなブルつてる奴いんの？ おいおい勘弁してくれよ、どこのどいつだ？ そんな緊張感丸出しな小心者は」「お前の弟子だけどな…震えてるの」

青ざめ、プルプル震えているジェントルにゴジータはズルルと席から滑り落ちた。



「——負けないっすよ」

少年の目の奥で火が燃え滾る。今回この会場にて、No. 1ヒーローが直に見に来ている。短期間とは言え自分達を真摯に向き合い、鍛練に付き合っただけで貰った生徒達は下手な所は見せられないと、闘争心に火を灯す。

けれど少年……夜嵐イナサが燃える理由はそれだけじゃない。彼の視線の先にいるのは白と赤に分かたれた一人の少年。

アイツにだけは負けない。その気持ちを胸に抱き、夜嵐イナサは戦場と化した会場を個性で駆ける。

今回の仮免の第一試験は勝ち抜き制、自分の持つ六つのボールを相手体に取り付けた

三つのターゲットに当てる。三つ当てられた者は脱落となり、二人倒した者は勝ち抜くというシンプルなモノ。

自分の個性を駆使すれば、負ける事はない。そうたかを括つて一目散に空へと掛けた次の瞬間……………。

「なっ!?!」

突如、イナサは見えない壁に阻まれる。弾力性のある見えない壁に弾かれながら地に落下すると、同時に自身の耳に嫌な音が鳴り響く。

即ち、ターゲットの発光音。自分にボールが当てられたのだと、驚愕しながら理解するイナサは慌てて辺りを見渡して……………。

「——やれやれ、まさか此処へ来てヒーローになること以外で闘志を燃やす少年がいるとはね」

「……………アンタは」

愛用の櫛で髪を整えながら、悠々と目の前に現れるその男にイナサの視線は釘付けになる。

『——えー、まずは一名脱落』

「うそだろ、速すぎだろ!?!」

「何だよ今のジグザクな動き!?!」

開始からまだ10分も経っていない時間、既に一名の脱落者を出した男は周囲の目の色を変えさせる。

開始早々から会場の視線を集めるその男は……………。

「私はジェントル。若きヒーローの目を醒まさせる、ただのお節介な紳士さ」
何処までも、紳士ジェントル的だった。

記録60

震えているその男を、その生徒は鴨と認識した。公衆の面前で自らを格上と宣言しておきながら、自身の失言に顔を青くさせている男。

ゴジータの未来のサイドキック、そう噂されている男は、他の生徒達からみても大した器には見えなかった。

おどおどしてて、挙動不審。自分の立っている場所すら分かっていないような小心者に、何故あのNo. 1ヒーローは目を掛けているのか。

あんな奴より、自分の方がもつと出来る。動画に映る涙目の男に生徒は常日頃からそう思っていた。

(そうだ。だったら先ずはコイツから脱落させてやる。ゴジータ本人からのお墨付きなんだ。此処でアイツを落としてやれば、ゴジータだつて見る目が変わる筈だ!!)

自分を見て、一日だけとは言え自分の個性を見て貰った。一時間にも満たない短い時間でも、あのNo. 1ヒーローは自分と向き合ってくれた。

あのNo. 1ヒーローは、間違いなくこれからのヒーロー社会を背負う傑物。そんな英雄にあんな男は不純物に他ならない。故に、試験開始と同時に忍者の格好をした生徒は男——ジェントルに襲い掛かった。

瞬間、視界が潰される。まるで見えない柔らかい壁にぶつかった様な衝撃、痛みのないその衝撃に視界が潰されたのも束の間。いつの間にか自分の体に括り付けていたターゲットの、全て当たりの発光が点滅していた。

「済まんね。踏み台にするつもりはなかったのだが……少々隙だらけだったモノで」
すれ違いざまに耳元で囁かれ、瞬時に生徒は思い知る。あの瞬間自分はジェントルを狙い、そして返り討ちにあつたのだと。

冷静に、そして落ち着いて対処すればもつと違った結果もあつた筈。しかし、そこまで考えが至るには忍者の生徒はまだ若かつた。

ジェントル・クリミナル。それは間違いなくゴジータが見初めた元ヴィランであり、自分達と同じヒーロー候補。

そして、士傑高校のルーキーを空から叩き落す光景に多くの生徒達は知る。この男は、真にNo. 1ヒーローに認められた者なのだ。



『えー、先ずは一名脱落』

聞こえてきたアナウンスに夜嵐イナサは戦慄し、自分のターゲットを確認する。発光しているのは三つの内の一つだけ、その事に気付き安堵したイナサは、安堵の溜め息を吐きながら帽子を被り直す。

「——ジェントル・クリミナル、ゴジータの弟子が自分に何の用ツスカ」

目を鋭くさせて油断なく身構える。自分の個性を相手に悟らせる事なく進行方向に展開、妨害させる手際は最早プロの手品師のソレ。

ぶれない体幹で淀みなく等間隔に歩み寄ってくる元怪盗紳士に、夜嵐イナサは戦闘態勢を取る。

「いやね、何やら随分と思ひ詰めているのが個人的に気になったからさ、私なりのお節介

「や」

対するジェントルは、イナサの眼を見て何となく放っておけなくなっていた。あれは認められたくないものを見て、怒りで意固地になっている者の眼だ。ああいった手合いは一度自分が決めた事に対して、中々覆そうとはしない。

そして、その怒りの矛先は恐らくはこの会場の誰かであり、目の前の彼はその誰かに並々ならぬ感情を抱いている。このままではいづれ周囲を巻き込んで自爆しかねない、そうなる前に一度話をと思い、足止めさせてみたものの……どうやら、タイミングが悪かったらしい。

「おい、テメエが噂の紳士野郎だな？　ゴジータの手解きを受けたっつーテメエの力、見せて貰うぜ」

「……………ワオ」

頭上から、弾道ミサイルの如く飛来してきた何かが、地面を抉りながら降り立つてきた。砂塵の中から現れたのは悪鬼羅刹すら逃げ仰せる顔をした少年、既に彼も一人の脱落者を出したのか、手にしているボールは三つに減っている。

『おわ、もう二人目の脱落者ですか。早いですねー』

今更伝わってくるアナウンス。それでも落ち着きを保っていられるのは前例があるお陰か。

「むう、紳士的には若者からの挑戦は受けて立ちたい所だが……後じゃダメ？」
「死ね」

どうやら避けられないらしい。光る爆発と共に瞬く間に間合いを詰めてくる爆豪に、ジェントルは否応なしに応戦する。

爆発の力を利用しての加速、其処から繰り出される回し蹴りはジェントルの顔面へと向けられるが……柔らかい壁が、爆豪の蹴りを受け止める。

「チツ、例の緩衝材か」

エラスシテイ
「弾性、私はそう呼んでいる。気を付けたまえよ、柔らかいという事は、私の個性は何物にも勝る壁になる」

「ハッ、だが破れねえ事はねえんだろ？」

「フツ、ならば試してみるといい」

「上等」

凶悪な笑みを浮かべる爆豪に、紳士的な笑みを浮かべるジェントル。互いに年齢は離れていても、抱く思いは然程変わらぬ。

激突する両者の間には、ヒーローを目指すライバルという肩書き以外、何もなかった。



「マジか爆豪、速攻で一人脱落させやがった！」

「相変わらず忙しねえなあまったく」

開始早々始まる試験。最初の内容は対人戦を指定された為、毎年他の学校から狙い撃ちにされてきた雄英は、今年も例に洩れずその洗礼を受ける事になった。

他校からの一斉掃射、様々な個性を用いての攻撃はしかして一人の生徒の蹴りの一振によって掻き消された。

“セントルイススマッシュ・エアフォース”。OFAの50%を解放しての緑谷の一撃は、他校の生徒達の攻撃を打ち消し、それどころかその風圧で瞬く間に敵対生徒達を吹き飛ばしてしまった。

お陰で他校同士が結託して作り上げた包围網は瓦解し、仕切り直しの出来た緑谷達だ

が、此処で爆豪は離脱。吹き飛ばされていち早く立て直した生徒に止めのボールを三つ浴びせると、爆豪は今回のダークホース枠であるジェントルに向かって一人吶喊していったのだ。

「まあ、かつちゃんなら大丈夫だと思うし、僕達は僕達でやっていこうよ」

「うむ、なら今の内に我々も陣形を立て直そう。幾つかチームに分けて……………」

「緑谷、飯田、悪いが俺も此処からは一人で行かせて貰うぞ」

「轟君？」

「俺の個性は他の連中も巻き込んでしまうからな。なるべく負担は掛けたくねえ」

「負担だなんて……………」

「大丈夫だ。ヘマはしねえ、ただ未完成だった技をモノにする意味でも、少し一人になりたいんだ」

「……………分かった。けど、くれぐれも気を付けてくれよ。皆で仮免試験合格が今の我々の目標なのだからね！」

「ああ」

それだけを告げて、轟は皆から離れていく。不安はない。彼もまたゴジータから薫陶を受けた一人であり、自分の個性と向き合うことを決めた仲間だ。

ならばその仲間を信じて、自分達はやるべき事を全うしよう。立ち上がり、此方を見

据えてくる生徒達に緑谷達も身構えるのだった。

◇

「オラアッ!」

「フッ!」

「ダラアッ!」

「トウッ!」

「防ぐな死ねえッ!」

「怖いな君!?!」

掌から迸るグリセリンを燃料に、爆発と共に肉薄する爆豪。爆発を利用して加速してくる彼の攻防を、己の個性と磨かれた体術で捌くジエントル。

ジェントルの防戦一方かと思えば、狙いが甘く大振りになったところを的確にカウンターで突いていく、しかし爆豪もまたそれを紙一重で躲していく。

爆豪は爆破で、ジェントルは個性で生み出した透明の膜をトランポリンの要領で駆使しながら高速の三次元軌道を描いていく。

一進一退の攻防、それを目の前で目の当たりにしているイナサは二人の差に愕然としていた。

「―――すげえ」

口に出来たのは、ただそれだけ。プロが顔負けするレベルの攻防を繰り広げる二人に、夜嵐イナサはただ圧倒されていた。

イナサもゴジータから指導を受けた身、ゴジータによる広い視点での指導は当時のイナサに大きな衝撃を与えた。

自分はまだまだ強くなると、そう言ってくれたNo. 1。しかし、今のイナサにはその言葉も今はただ空しく思えた。

「チツ、うつげえなこの柔らかかクソ壁エ!!」

「ならば突破して見せるといい、君に出来るものならな!!」

「あゝあゝ!?! 上等だクソ紳士!!」

「ジェントルだと言っている!!」

速い。凄い。目視では追い付けない攻防を繰り返している二人に、イナサはただ愕然となった。

そして、今はサバイバル。隙を晒した者が食われていくのは当然で。

「隙アリだ士傑!!」

「二年坊は、大人しく踏み台になっとけ!!」

「ッ!?!」

背後からの二人の奇襲に気付けなかったイナサは……………。

「邪魔」

「紳士的じゃないのは、感心しないね」

互いの戦いに夢中になっていた二人が、呆気なく打ち倒してしまう。

『はい、更に二名追加で脱落。合格者である爆豪勝己君と飛田弾柔郎君は速やかにその場から離脱してください』

「あ」

ついだとばかりに叩き付けたボールが、それぞれのターゲットに当たってしまった事で、爆豪とジエントルは無事に第一試験突破。本来なら喜ぶ場面だと言うのに当の本人達は酷く不満な様子。

「……………仕方ねえ、決着は次の機会だ」

「いや君、血の気多すぎない？」

個人的には不完全燃焼な結果に不満たらたらな爆豪だが、怒気を納められる程度の器量は出来上がっていた。それでも血気盛んな爆豪にドン引きなジェントルは……………。

「——少年、君の抱える事情は私には推し量れないが、ここはヒーローを志す卵達が更に向こうへ至る為の場だ。気持ちの切り替えはちゃんとしておいた方がいいぞ」

絡んでおきながらこれ迄放置してしまつたイナサに、せめてものフォローをしながら去っていく。そんな二人の背中を見えなくなるまで見つめていた夜嵐イナサは……………。

「何をやってんだ。俺は!!」

心底悔しそうに、拳を地面に叩き付けていた。

記録6 1

『爆豪勝己君、並びに飛田弾柔郎君の合格者二名は速やかに会場から退出してください』
「流石かつちゃんだ。行動が速い」

仮免資格の為の試練、その第一の関門を開始10分足らずで合格した二人。相変わら
ず即断即決な幼馴染みに緑谷は誇らしげに笑った。

しかも遠巻きで見た限りでは、例のジェントルと割りどガチめにバトって起きなが
ら、ついではばかりに脱落者を叩き出している。二人とも期間こそは異なるが、ゴジ
ータとマンツーマンでしごかれてきた者同士、その戦いは緑谷や他の雄英生徒達のやる気
に火を付けるには充分なモノだった。

「僕も、負けてられない!」

押し寄せてくる他校の生徒達、その手に幾つものボールを握り締め、自分達のター
ゲットに向かって投げ付けてくる。オレンジ色の弾幕、避けようの無い敵意の壁に向
かって……。

「セントルイススマッシュ・エアフォース!!」

OFA、その50%の力を込めた蹴りの一振が弾幕の壁を突き破る。勢い余って突風に飛ばされる生徒達、そんな彼等に向けて幾本もの白いテープが伸びる。

セロハンテープの個性、瀬呂の狙いは空中に飛ばされた生徒達ではない。緑谷の蹴りの一振で不自然に吹き飛んだ岩の数々、それにくっ付けると何処からか「解除ッ!」の聲が辺りに響く。

勢いも無くなり、重力に囚われる事になった生徒達は、瀬呂のテープに巻き取られ、麗日の無重力から解放された岩と共に落下し、予め置いておいた下へ敷き詰めておいた峰田のモギモギによって身動きを完全に封じられてしまった。

「う、嘘だろ。俺達だってゴジータから指導を受けたのに……!」

短い間とは言え、自分達もゴジータから指導を受けた者。短期間でありながら非常に有意義だったその時間は、生徒達に多くの可能性を示し、明確に実感できる程に強くなった。

しかし、それでも圧倒的な開きが其処にはあった。雄英の生徒達、例年通り最初は厄介な雄英から潰そうと躍起になったのに、今年は例年以上に圧倒されてしまった。

一体、自分達の何が悪かったのか。気持ちもヤル気も例年以上ではあったが、初動の動きだけは例年通りだった筈。

「そこまで考えて気付いた。ヤル気も気持ちも例年より上がっていたのに、合格する際のやり方だけは例年通りだった。

気持ちも、強さも、何もかもが違っていた。ならば、其処に掛けるやり方もまた、変わるべきだった。雄英を潰す事に固執せず、もっと広い視野を持つべきだった。

そんな、当たり前の事に今更気付いた生徒は、歩み寄ってくる緑谷を見上げ――。

「――完敗だよ」

「……………失礼します」

笑いながら、自分の敗北を受け入れた。



「おー、緑谷達も合格したか。流石は相澤先生、いい指導してますねー」

「ふん、嫌味はよせ。あれらが力を付けてきたのはお前の横槍があったからだ」

「いやいやそんな事ねーよ、実際に面倒見てきたのは先生なんだから、あまり自分を卑下するなよ」

次々と脱落者を出し、同時に合格者を出していく会場内。今日まで切磋琢磨の日々を積み重ねてきた生徒達の成果を目の当たりにしながら、二人の教師と一人の観戦者は呑気に談笑に浸っている。

「いや、ていうかお前等のところのジェントルと爆豪、普通にヤバくね？ アイツ等の動き並みじゃねえよ。プロでもないぞあんな風に動ける奴、どんな教育したらああなるんだ？」

これ迄の快活な笑みとは違い、頬をひきつらせているM s. ジョーク。一瞬だけ見せた二人の戦い、並みのプロを遥かに凌駕する動きと戦いのセンスを目の当たりにした彼女は、酷く引いた様子でゴジータに訊ねた。

「別に難しい事はしてねえよ。どっちも自尊心を挫けない程度にボコつただけ、特に爆豪は反骨心が強いからな。叩けば叩くだけ響く奴だから、職場体験の時は結構楽しめたぜ」

「人の生徒を玩具扱いしやがって……」

「その分ちやんと結果は出してらるでしよ？ 合理的に行こうぜ先生」

「お前は合理的云々の前に人の心を学べ」

何て事無い様に語るゴジータだが、イレイザーは知っている。この男の「叩く」という表現は、文字通り以上の意味合いを兼ねていっているという事。自尊心までは碎かない迄も、職場体験の時爆豪はこれ迄の自分の持つ常識を悉く破壊されている。

現に、職場体験後の爆豪はこれ迄肥大化していた自尊心もナリを潜め、大人しく且つ冷静に物事を見て判断している。いや、元々あつた素質と才能がゴジータの扱きという研磨剤でより磨かれたといつていい。

そんな爆豪が自分の出来ないことを把握し、出来る事を広げ続けてきた。才能持つ者がその者を凌駕する怪物に鍛えられたのだ。強くない道理がない。

ジェントルに関してもそうで、時折動画を見返していたイレイザーだが、彼に対するゴジータの指導は合理的に見えた。

トライ&エラー。詰まる所、ゴジータの指導とは相手の出来る事と出来ないことを徹底的に相手に叩き込むスパルタ方式にあつた。言葉だけで聞けば然程大した事に聞こえず、内容も学校で教えている事と然程変わりはない。

ただ、其処に実践形式という言葉が付かなければ、だ。ゴジータの教え方は基本的に肉体言語、痛みで指摘し、痛みで導く。殴り、叩き、時には蹴る。プッシーキャッツの

虎もドン引きするスパルタぶりである。

当時、生放送の動画を見ていた視聴者の一人が「もうやめたげてよお!!」と、一万のスパチャを投げたのはいい思い出である。

……………いや良くねえな。

「ま、何れにしても、アイツ等が先にいると感じたのはそれだけ自分を追い込んだって事さ。他の連中との間に差があるとすれば、そこだけどしと言えないな」

「……………うちの追い込み具合が足りなかったって事?」

「或いはその逆かもしれないぜ? 無茶を重ねれば壊れるのは自分の体だ。その線引きも分からない奴に、ヒーローが勤まると思うか?」

ただその時だけ頑張るのでは意味がない。継続する事が力を得、伸ばす為の方法だと、暗にそう語るゴジータにジョークはなにも言えなくなっていた。

「……………」

「なんだよ先生、そのジト目は」

「いや、お前が言うののかって思ってたな」

ただその横でしたり顔で語るゴジータを見て、彼の無茶無謀を間近で眺めていたイザーヘッドこと相澤はお前が言うな感が凄かったようだ。

呆れ、ジト目で睨んでくる嘗ての恩師に咳払いをしながら誤魔化し、改めてゴジータ

は会場の方へ視線を向ける。

「しっかし、残念なのは士傑の坊主、アイツどうしたん？　なんか急激に動きが悪くなったように見えるけど？」

「そう言えば、例のジェントルに落とされてからトンと動きが悪くなったように見えるね。頭とか打ったとか？」

「その割りには意識がハッキリしているように見えるが………仮にも西の士傑が体調管理が出来ていないとは思えないが」

ゴジータに促されて見るのは、帽子を被った士傑高校の若きエース、風を操る個性で一番に最初の試験を突破するかと思われる有望株である夜嵐イナサ。

そんな彼が意外にも苦戦している光景に、三人とも不思議そうに眺めていた。

「んん？　囲まれたぞ」

「風を使って抜け出そうとしているが………周りの連携で飛べそうにないな」
「危な、今ターゲットにボールがかすったぞ」

何やら不調で思っていたより動けていない様子、そんな彼を格好の鴨として他校の生徒達が押し掛けてくるが、それでも西の士傑の一員としての意地か、個性を用いて風の壁を作ることと投げ付けてくるボールを悉く弾いていく。

しかし、それでも他校の生徒達からの猛追は止まらない。弾けば弾いた分だけ数は増

していき、イナサは徐々に追い詰められていく。

「あらら、一年坊主追い詰められてるよ」

「つかしいなあ、前見たときはもつと動けてたし、個性の扱いも上手かった筈なんだけどなあ」

本来なら風を駆使してボールを巻き上げ、お返しとばかりに風と共に叩き付けていた筈なのに防戦一方のイナサ、試験前の特別指導の時はもつと動けていたし、何ならゴジータでも感心する程の個性の扱いに冴えていた彼が、まるで翼を挽がれた鳥のように追い詰められている。

らしくないイナサの様子に戸惑うジョークとゴジータ、軽く混乱している二人を余所にイレイザーだけは熟知り顔で思案を馳せていた……その時だ。

突然現れた氷の壁が、イナサに攻撃していた生徒達を囲むように現れる。試験開始から20分、どうやら漸くあの少年が動き出したらしい。

「……………というか甚田、もう一人のサイドキック候補はどうした？」
「ん？ あれ、そう言えば……………」

それはそうと、一緒に来ていた筈のジェントルの相方が見当たらない。何処へ言ったか辺りを見渡していると……………。

「キヤー！ ジェントルカッコ良すぎ!! 好き!!」

人気の少ない通路で、一人で色々と昂っていた。



「くそ、くそ、くそ！」

「いたぞ、そつちだ！」

「囲んで追い詰める！ 包囲網を崩すな!!」

飛び掛かってくる他校の生徒達からの猛攻を潜り抜けながら苦渋に顔を歪める。こんな筈ではなかったと、最初に予想していた展開とは全くの逆方向になってしまった自分の立ち位置に、夜嵐イナサは悔しさを顕にする。

自分の風を操る個性なら、この程度の逆境など訳では無い。それなのにこうも動きに

差異がでるのは、一体どういう訳か。

分らない。——否、分らないと言うより認めたくないというイナサの思いが、イナサ自身を締め上げていく。

「なんで、なんで俺は……………」

こんなところで燻っているのか、何のために憧れの雄英への入学を断つてまで此処に立っているのか。

こんな所で足踏みをしてはいられない。相打ち覚悟でボールを手にした時、氷の壁が周辺丸ごと生徒達を呑み込んでいった。

何が起こった。唐突に現れた巨大な氷壁に、イナサが唾然とするも…………。

「二人の人間相手によつてたかつて追い詰めるのは、ヒーロー的にどうなんだ？」

赤と白で分けられた髪色の少年、轟焦凍の姿に心音が跳ね上がる。

「お、お前は雄英の!?!」

「俺もヒーローなりたい自分を目指している身なんぞな。悪いが、仕留めさせて貰う」

「嘗めんな一年坊!」

「二人で来た事を後悔させてやる!」

目の前の少年の実力は、雄英体育祭で把握している。厄介な個性による範囲攻撃も、距離さえ詰めてしまえば対処可能。一人ではなく、複数人で同時に掛ければ充分に封殺

出来る。

「遅えよ」

そんな生徒達の目論見を撃ち破るように、膨張した熱の爆風が生徒達を周りごと風払っていく。圧倒的な場の展開速度、加えて急激な熱運動による衝撃。白目を剥いて倒れる生徒達を尻目に、轟は自身の成長具合を確かめるように手を握る。

「『膨冷熱波』、まだまだ精度が甘いな。例の技の完熟もしなくちゃいけねえし、まだまだ課題は多いな」

言葉ではそう言いつつも、口許の弛みは隠せなかった。ゴジータによる指導で自分の目指すべき道、熱と凍の二つの個性を持つ轟はこの二つの個性を融合させて新たな道を模索する道を選んだ。

『轟、お前の操る炎と氷の個性は真逆の様で実は同質なモノ、【熱】から来るモノだと言うことは理解しているな?』

『ああ、それは何となく俺も理解している』

『ならば簡単だ。その二つの個性を極限まで同一化させる。炎と氷、プラスとマイナス、これら二つの熱を一つのゼロに落とし込め、そうすりゃ——』

『なりたい自分になれるのか?』

『……………少なくとも、その第一歩は踏めるだろうぜ』

不敵に笑い、一つの指針を示してくれたNo. 1ヒーロー。彼に自分の答えを示す為に轟は自分のやるべき事を一歩ずつこなしていく。

「さて、後はボールで叩くだけだな。……………ん?」

言いながら手にしたボールを二人のターゲットに押し付ける。これでいいかと改めて辺りを見渡していると、轟は一人の生徒を見つけた。

「おい、アンタ大丈夫か? 巻き込まない様に加減はしたつもりだが……………」

「——」

その場で座り込んでいる少年、夜風イナサは愕然とした様子で轟を見上げている。

「おい、聞こえてるか?」

何やら酷く思い詰めた様子、顔色の悪いイナサに轟は手を伸ばして立たせようとするが……………。

「……………いいっす、自分で立てるんで」

「そうか」

直視しないように轟の手から目を逸らし、逃げるようにその場から去っていく。意気消沈となったイナサを轟はキョトンと首を傾げて……………。

「どこか、具合でも悪いのか…?」

心配した様子で天然ぶりを発露させるのだった。

それから十数分、激動の戦闘試験を乗り越えた生徒達は第二の試験、即ち救助試験へ移行していく。

記録62

『はい、最後の合格者が出ましたところで第一試験終了。合格した生徒の皆さんは次の試験の準備がはじまるので、速やかに指定の所まで戻ってください』

聞こえてくるアナウンス。最後の合格者という言葉に耳を傾けながら、既に第一試験を突破した緑谷は次の試験に思いを馳せる。

「最初の試験は何か突破出来たけど、次はどんな試験内容なんやろ」

「多分、救助関係だと思うよ。会場の規模からして大災害に見舞われた際の救助訓練、あらゆる地形で引き起こされる対災害に対して適切な行動が取れるか、的な」

「となると、救助の場に於ける連携が肝要になりそうだな。今の内に何組かにグループ分けするべきか？」

「いや飯田、それは少し早計だと思う。緑谷の言う通り災害救援を想定しているなら、監督側は俺達の対応力も見ておきたい筈だ。現場での即席のチームアップ、最悪他校の生徒と即座に組みられる様にする事も視野に入れた方がいいかも」

「確かに」

一次試験を難なく突破しておきながら、既に次の試験内容について話し合う雄英の一年達。ヴィラン襲撃から始まり、これ迄幾度となく窮地と言うものを体験してきた彼等にとつて、試練は乗り越えるべき壁でしかない。

「デク、テメエも突破したか」

「かつちゃん。うん、みんなのお陰で何とかなつたよ」

「……………何とか、ねえ」

そんな時、普段から切島や上鳴以外とはつるまない爆豪が、訳知り顔でやってきた。第一声の罵倒も出てこないのにももう慣れ始めてきた緑谷だが、すれ違いざまに耳打ちされる言葉に凍り付く。

「オールマイトから受け継いだ個性使つてんだ。コケたら殺すぞ」

「……………え」

小声で、他の生徒に聞かれていない事を配慮しておきながらハツキリとそう言われた。一瞬何を言われたのか理解できなかつたが、自分がオールマイトからOFAを受け継いだのだと悟つた緑谷は大粒の冷や汗を大量に流しながら爆豪へと振り返る。

しかし、其処には既に切島と上鳴がいる。これでは話が出来ない、オールマイトや事情を知るゴジータに話をしたかつたが、今はそんな余裕はない。

「デク君、大丈夫？」

「あ、うんごめん。大丈夫だよ、麗日さん」

もうすぐ次の試験が始まる。今は爆豪との会話を記憶の隅へ追いやり、気持ちを無理矢理にでも切り替える。

全ては次の試験を乗り越えてから。しかし、緑谷は予感していた。この試験が終わった後、自分と幼馴染みの彼とは、一つの岐路を迎える事になるのだろう、と。



「——ダメだな、俺は」

人気がない通路、もうじき第二の試験が始まると言うのに、夜嵐イナサは一人無気力に座り込んでいる。

あの後、手を差しのべてきた轟焦凍から逃げるように立ち去り、何とか目標だったターゲット二つ分を撃破したが、いずれも不意打ち気味の目眩まし攻撃によるもの。

きつと、相手側は納得していかないだろう。強風で視界が奪われた所へ強襲なんて、ヒーローの行動としては誉められない。無論、イナサ自身も納得できてはいなかった。

けれど、我武者羅だった。ズタズタにされたプライドを必死に縫い合わせて作り上げた虚像の一撃、ただ合格のみを目指して放たれた攻撃は、何処までもみつともなく、醜かった。

いや、何よりも醜いのは……。

「まさか、俺にこんな醜い感情があつたなんて……。」

自分自身、己の裡に秘められていた激情。轟焦凍を目にした時に沸き上がってきた拒絶反応、ヒーローは熱いからこそ、そう豪語するイナサにとってその感情は無縁のモノである筈だった。

しかし、あの目。自分を邪魔だと拒絶し、遙か遠くを見据えるだけの燃え滾る炎の眼差し。自分達の事など眼中にないその振る舞いは、イナサの心に深く刻み込まれた。

そして、英雄の推薦入試。憧れの英雄に入学し、熱い学校生活を夢見ていたイナサの前に、再びその眼差しは現れた。

『——邪魔だ』

何処までも恐ろしく、何処までもおぞましく、そして何処までも似ていたあの眼差し。推薦入試では自分が勝った筈なのに、まるで勝った気がしない。

此方の事などまるで眼中に入っていない当時の彼の眼に、イナサは誓った。この男にだけは負けないと。そう誓い、推薦トップだった自分は雄英入学を蹴り、西にある士傑高校へ入学したのだ。

——それなのに。

「なんで、なんであんな真つ直ぐな眼になれるんだよ」

差し伸べてきた彼の手、そして向けてくるその瞳は自分を真つ直ぐ見据えていた。打算など微塵もない、本心から自分を氣遣っていた彼の眼差しを、イナサは直視出来なかった。

これじゃあ、自分がバカみたいだ。超えるべき相手はドンドン先に行つて。自分は此処でみつともなく腐っているだけ、こんな自分がヒーローになって良い訳がない。

第二試験の辞退。イナサの頭にその選択が思い浮かんだ時、聞き慣れた声が聞こえてきた。

「あれ〜？ イナサじゃん。ここでなにしているのウケる」

「ケミイ先輩、肉倉先輩、どうしてここに？」

「どうしてもなにもあるか。もうじき次の試験が始まる。身内が無様を晒す前に呼びに

来たただけだ」

自分を迎えに来たと言う二人、ギャル風の少女と規律に厳しそうな軍人氣質の少年、何れもイナサの先輩である二人は後輩であるイナサを迎えに来たと言う。

言動はどうあれ、何だかんだ面倒見の良い二人に有り難く思うが、それ以上に申し訳なく思つた。

「——すみません。次の試験、自分は棄権させて欲しいっス」

「はあ?」

「ちよつ、イナサどういう事だし?」

「今回の試験を受けて、俺分かつたんす。俺はヒーローには向いていないんだって、だから……」

「いやいや分からんから。取り敢えずどうしてそうなったんかお話ししてみ? 愚痴くらい聞くとよ、ウチ」

迎えに来たら何やら酷く落ち込んでおり、挙げ句の果てには仮免試験を辞退するなんて言い出す後輩に、普段チャラけているギャルのケミイも比較的真面目に話し掛ける。

そんな先輩の意思を汲み取り、イナサは少しづつ話し始めた。自分の中にあるどす黒い感情、一方的に敵視していた相手への感情。嫌悪感や劣等感、他にも様々な悪感情が自身の裡で渦巻いていたことを正直に話した。

すると……。

「馬鹿馬鹿しい。何だそれは？ 貴様、よりもよつて己の心情の為にこの場に立つていたのか」

「正直に言おう。私は貴様を軽蔑している。ヒーローを志す人間が、一つの事に執着するなどあつてはならない。それが他人に対する悪感情を根底としてゐるなら尚更だ」

項垂れるイナサに、肉倉精児の鋭い言葉が突き刺さる。容赦なく罵倒を浴びせる精児に隣のケミイはドン引いているが、言われているイナサ本人が反論しない為静観している。

「ヒーローとは、他者の為に己が身を顧みない者の事。一人の人間を出し抜くことに固執している貴様に、果たしてそれが成せると思うか？ 今の貴様は肉塊にも劣る存在だと知れ」

「……………は、い」

言い返せなかつた。自分の気持ちだが、抱えている思いがヒーローらしく無いことはイナサ本人が自覚している。だから此処から去ろう、そう思い立ち上がる彼に……。

「だが、それがどうした。どれだけ未熟だろうと、貴様は未だ学生の身、半人前が如何に思い悩もうとも、それ自体何の意味もない」

「……………え？」

「自分はヒーローには相応しくないだど？ そんなもの、考えるだけ意味がない。相応しいか相応しくない等と、決め付けること自体烏滸がましいと何故気付かない」

「え、えつと……………」

「やだ肉倉、言っている事無茶苦茶過ぎ。ウケる」

「黙れ現見。……………兎も角イナサ、今の貴様には悩むよりも先に、やるべき事がある筈なのではないか？」

「——あ」

「そうだ。そうだった。自分は考えるよりも先に行動に移す人間だった筈、らしくもなくウジウジ考えて、愚考の坩堝に嵌まっていた。

「肉倉先輩、ありがとうございます！」

「礼など良い、さっさといけ」

「ハイ！」

ガバリと立ち上がり、深々と頭を下げると足取り軽やかに走り去っていく。現金な後輩に呆れの溜め息を溢すと、隣にいた現見ケミイはニヤニヤと笑みを浮かべている。

「ヤツバ、優しくてキモすぎワロタ。どうしたん肉倉、アンタにしては優しいじゃん」

「フン、仮にもヒーローを志す者が、ああも腑抜けられては此方の士気が下がる。雄英と

対する士傑の一員として、斯くあるべしと示しただけにすぎん」

「あーあ、これがちゃんと第一試験突破していたら格好良かったんだけどなあ」

「ぬぐうつ」

現見の言葉に顔をしかめる。そう、この男散々上から目線で煽っておきながら、先の試験にて脱落した不合格者なのである。

ヒーロー仮免の失格者、その事を指摘されて苦虫を噛み潰したような表情を晒す肉倉はそれでもいいと立ち上がる。

「なればこそ、奴には私の分まで活躍して貰わなければならん」

「うわー、他力本願寺。じゃ、あーしもそろそろ行くから、肉倉は大人しくしてなさいよー」

「貴様もとつとといけ。私にイチイチ構うな」

「はいはい。………ねえ肉倉」

「む?」

「アンタ、ちよつと変わったね」

これ迄飄々としておきながら、特に笑ったりしていなかった彼女が、初めて笑みを見せた気がする。同級生から変わったと言われた肉倉は、会場へ向かう現見の背中を見えなくなるまで見送ると、自身の手を見下ろす。

「――変わったか」

『お前、肉倉つて言うの？ さつきからお前の事見ていたけどさ、なんか色々影響受けすぎじゃね？ 具体的には、ステインの野郎と似たことを言ってる』

『……思念思想への干渉は、此度の指導に関係ない筈では？』

『ああ、関係ないな。お前がどんな意思を持ち、思想を持っているのかなんて興味もないが……ただ鼻に付くんだよ。お前の言ってることは他人の言葉の焼き写しみたいだよ』

『な、なんですつて!? 幾らNo. 1でもその発言は許されないぞ!』

『しかも自覚もねえのかい。……いいか肉倉、今言ったようにお前がどんな思想を持つとうと俺には関係ないし、興味もない。けどな』

『俺の知るヒーローの中で、お前みたいに自分の思想を誰かに押し付けるような真似をする奴は誰一人いなかったぞ。況してや、他人の言葉に流されるような奴はな』

『――自分が、流されるだけの人間だと?』

『……以前、タルタロスでお前の父ちゃんと会ってな。色々話をしてみたよ。何で

アンタが此処で働いているのか、アンタみたいな人間ならヒーローになって即座にヴィラン退治に乗り出していた筈だろうってな』

『そしたらよ、〃自分の職務は此処でヴィランを見張ることであり、断じて己を誇示する為ではない。人々が安寧に浸れる為に必要なことだ〃と、そう返すんだぜ』

凄いだろ？ 父の真似をしながらそう語るN.O. 1に肉倉は自分の言動を顧みていた。

『別にお前の考え方や生き方を否定するつもりはないが、父親に顔向け出来る人間になつとけよ』

そう語るN.O. 1の言葉を思い返ししながら、肉倉は笑う。変わるさ。人は、きつかけ一つで簡単に変われる生き物なのだ。



「どうやら、発破かける必要もなかったな」

気配を殺し、一部始終を死角から覗き込んでいたNo. 1ヒーロー——ゴジータは、その顔に笑みを浮かべていた。

「夜嵐イナサ。アイツのエンデヴアーに向ける感情は中々に複雑だ。だから轟と顔を合わせた時にどんな化学反応が起きるか若干不安だったが……この分だと、大丈夫そうだな」

どんなに優れた人格者でも、何処かに欠点は存在する。それが人間関係に起因するモノなら、尚更だ。

けれど、彼等ならその問題すら乗り越えて見せるだろう。この後の試験を楽しみに思いつつ、ゴジータもまた観客席に戻るのだった。

記録63

それから少しして、仮免試験における二次試験は無事に開催された。内容は災害時に於ける救助とその際に起きる二次災害、及び対ヴィランへの対処を想定した試験。

プロですら対応に悩むその試験内容に、観戦していたイレイザーヘッドやM.S.、ジョークが唸る中、ゴジータは懐かしそうに試験の様子を眺めていた。

「うわあ、ヴィラン役にギャングオルカを起用するのかよ。こりやあ今年の試験はキツイぞお」

「プロですら二の足を踏む内容だ。ヒョッコ共、動揺してなきやいいが……」
(——まさか、当時の俺の試験をそのまま使うとはなあ)

当時、色々と自分を追い込んでいた頃、仮免試験を暇潰し程度にしか捉えていなかった自分には、この試験には少々考えさせられた。

人を守り、助ける事。ヴィランを倒し、被害を抑える事。一人の人間に求められる許容量を遥かに超えたそのマルチタスクには流石のゴジータも肝が冷えた。

災害時という限られた時間の中、リアルタイムで同時進行にこなさなければならぬ状況で、ヴィランを優先して叩くのは悪手である事であり、災害時の状況は時間こそが最大のヴィランであるという事も学んだ。

人を助けて救うのはヴィランを倒す事よりも難しい。目の前で起きている試験内容を一人で対応させられたゴジータにとって、今も記憶に色濃く残る内容となっている。時間と共に悪化していく災害時の状況、統率の取れたヴィランへの対応、大きく二つに分けて求められる行動への最適解。これを当時学生だったゴジータは半ば自棄糞気味に答えを出した。

災害とヴィラン、その二つに対しての答えは——速さ。何て事ない、純粋な速さであった。

災害への対処も、ヴィランへの対応も、全てパワー&スピードを以てしてのゴリ押しである。まあ、其処には当然それなりの技術も求められるから、ゴリ押しと言うのは少し違うかもしれないが……………。

(て言うか、これだけの難易度を要求するって事は、公安達もオールマイト不在の危機感を感じているって事か)

或いは今回の試験を今後のヒーロー社会に対する布石の一つとするか。何れにせよ、ただヒーローに縋るだけでなく、社会全体で見直すという試みはゴジータとしても文句

はなかった。

「お、噂のジエントル君、ヴィラン役のギャングオルカの攻撃を防ぎながら市民を守ってる」

そんな中、M.S. ジョークの一言でゴジータの意識は試験会場へ向けられる。既に試験は中盤を超えて終盤に差し掛かり、ヴィラン役のギャングオルカの迫真な演技も重なり、試験会場は中々ハードな展開を見せている。

単独ではなく群を用いてのヴィランの侵攻、当然ヒーロー側である生徒達には動揺の波紋が広がっているが、ジエントルや雄英の緑谷達が即座に対応してから、徐々に状況は建て直されつつあった。

「限られた足場の中、音波を防ぎながらあの立ち回り……合理的だな」

「それでも流石に数では——と、成る程其処で緑谷が来るかあ、目の前の救助だけじゃなく、周囲にもちゃんとアンテナ張ってる。いい傾向だ」

顔を合わせたのも今日が初めてなのに、それでも互いに背中を預けながら状況に対応している。数多の困難に対してヒーローもまた数で対応する。其処には公安や今のヒーローが目指す、新たな社会の仕組み……その理想が試験会場限定とは言え、出来上がっていた。

平和の象徴の不在。その問いに対する答えが、限定的であるが示されつつある。その

事を確信できたゴジータはこれ以上観戦する必要はないと、自ら席を立った。

「あれ？　ゴジータ、もういいの？」

「ああ、まだまだ荒く拙い点は多々あるが、アイツ等は一つの答えを示した。俺も納得できたし、今日はもういいや。試験が終わるまでのんびり辺りを見て回っているよ」

「……………」

観客席から立ち上がり、その場を後にするゴジータを、相澤は何も言うことなく静かに見送る。嘗て問題児だった男、自分の事にだけ目を向けそれ以外に気を遣う余裕の無かった男が、随分と広く視野を持つようになった。

恐らくゴジータ——後藤甚田も薄々気付いているのだろう、今後の社会に求められるヒーローの在り方、示されるべき新しい平和の守護の形は個人に寄り掛かるモノではないと。

きっと近い将来、その時は訪れる。職業として扱われてきたヒーローが、全く別物の存在として……………。

そしてその社会世界の中にはゴジータという存在はきつと……………過剰に過ぎるのだろう。

「——合理的、か。お前の場合は結論を急ぎすぎだ。馬鹿者め」

ヒーローとして一人立ち、オールマイト先代と活動を共にした事で、ゴジータもまた己の役割を理解した。そして、その役割がもうじき終わりを迎えることも……………。

一抹の寂しさを覚えながら通路を行く元教え子に、元担任の呆れの混じった小言は届くことはなく。

『すまん夜嵐！ 力を貸してくれ!!』

『っ、ああ、分かっているっスよおっ!』

炎と風の檻が試験会場に立ち上ぼり、ギャングオルカとそのサイドキック達を封殺した。



———ヒーロー。それは強きを挫き弱きを助ける者。己が信ずる信念の為に奮起する者。

そして、どれだけ血と涙と泥にまみれ倒れようと、何度だって立ち上がる。それが、後

藤甚田の語るヒーローとしての在り方だ。

それらの在り方が何故、後藤甚田にとってヒーロー像足り得るのか。答えは簡単だ。

後藤甚田は、そのいずれにも該当しない破綻者。そもそも、彼の根底に在るのはヒーローとしての矜持でもなければ、奉仕の精神でもない。

ただの自分勝手な——自己保身。

ただ、それだけだった。



その昔、一人の子供がいた。

出生不明、出身不明、何時からいて、何処から来たのか。誰も、本人すらも分からなかった。

気付いたら両親も親族もない天涯孤独の身の上で、自分が星の都最初の子供だったという事。

そして――。

「――俺、ゴジータになってるじゃん」

自身の身に宿る力が、天下無敵の合体戦士である事。

それだけで完結した。鏡に映る自分の姿を見て、その事実だけがその子供を満たしていた。

圧倒的充足感、充実感、全能感ですら足り得ない超越的な幸福感。力、絶対的な力を幼い子供が持つにはあまりにも劇物で……故に、子供は決めた。

「――もしかして、これって鍛えなければアカンやつ？」

充足感も充実感も、ましてや幸福感も消え失せて、最後に胸中に残るのは………焦燥感。

言葉にできない焦りと、しなくてはならない使命感。圧迫感すら感じる重責を一人背

負い、その幼子は決めた。

強くなる。この先、現れるかもしれない脅威と、自分が最強のゴジータで在る為に、この日、後藤甚田という少年は自らに呪いを掛けた。

憧れという感情は、理解から最も遠い感情。故に、少年に残された選択肢は突き進むこと以外道がなかった。

——これが始まり、後藤甚田ことゴジータが最初に抱いた原典。オリジン

それは情景には程遠い、強迫観念に近い使命感だった。

記録64

ゴジータ。それは、ドラゴンボールという作品に於いて屈指の人気を博す最強キャラクターの一人。

主人公である孫悟空とそのライバルであるベジータが、フュージョンという特殊なポーリングを用いて融合した超戦士であり、最初に出番のあった劇場版ではたった数分にも満たない時間にも関わらず、その活躍で多くのファンを生み出した。

圧倒的、絶対的、同じ合体戦士であるベジットと対を為しているゴジータは、自分にとって憧れの対象でもあった。

格好いい。純粹にそう思っていた自分は、テレビに映るその姿を見て、こんな風になりたいとベッドの上で夢想した。

前世……という言葉があるが、果たしてそれが自分に当てはまるのかは今となってはもう分からない。覚えている一番古い記憶は、薬品の臭いがする部屋の中で、身動きの取れない自分がテレビに映る映像を眺めていた事だった。

前世の自分が想い、焦がれ、渴望した。こんな風になりたいという空想は、しかしして現実のものになってしまった。

後藤甚田。今世ではそう名付けられた自分は、ある日目が覚めたら孤児院の布団の上で目覚めた。今世も相変わらず両親の顔も分からないが、今回の生に於いては全くと言つていいほど苦にはならなかった。

身体に満ち溢れる力の躍動感。縮んだ手足も背丈も関係ない、完全なる健康体を手にした事に喜びを前にすれば、両親の不在など些細だった。少なくとも、この時の自分はそうだった。

孤児院の先生である姫野葵先生も、最初は動物みたいな顔をしていた為に驚きはしたが、個性という超常社会という事でそういうものもあるのかと納得できたし、なにより優しく良い人だったので、そこまで悲観的になることもなかった。

孤児院も最初は自分だけで姫野先生の負担も軽く、自分は諸々の手続きをしている先生の目を盗んでは新たな自分の身体の性能を確認していた。

如何に個性という異能を持っていても、姫野先生は一般人。ゴジータの身体能力を持つ自分であれば、視線を掻い潜る事など造作もなかった。

そうして施設の裏で軽めに運動をすることにしたのだが、この時点で自分の身体能力が桁違いな事であると思ひ知る事になる。

意識しながらの跳躍、本人的には軽くジャンプしただけなのに、次の瞬間その視界は遙か大気圏上空を映し出していった。

それだけの高度を飛び跳ね、地上に落下しても周辺には一切影響を及ぼさない足腰の衝撃吸収力。この時点で後藤甚田は確信した。

既にこの身はただの人ではなく、文字通り超人のそれである事。眺めている事しか出来なかった憧れのヒーローに自分はなれたのだと。

しかし、その喜びも束の間。身体に巡る力の奔流に目覚め、自覚した俺はその次の問題に直面する事になる。

敵。即ち、前世の自分が記憶している例の物語に登場する規格外の怪物達の事。

宇宙の帝王から完全生命体、魔人、更には邪悪龍達など星を爆竹程度にしか考えないノリで破壊しようとする化け物達。

他にも劇場版の事も考えれば、今後現れるかもしれない敵はどんなに少なく見積もっても100体。そんな奴らを相手に果たして自分だけで対応できるのか。

考えすぎだと、最初は思った。自分はゴジータの力を持っていたとしても、ゴジータそのものではない。あくまでゴジータに類似する別物、或いは偽者、そんな自分がある世界にあんな怪物達がいる筈がない。

けれど、誰もその事を否定する事など出来なかった。当然だ、その事を知るのは自分

ただだし、その事に納得できるのも自分だけ。否定できる材料なんて自分だけしかいないのに、どうやって奴等がいけないという確信が抱けるといふのだ。

もし、もしあの怪物達が現れた時、果たして自分は守れるのか？　そもそも………戦えるのか？　戦い処か、喧嘩すらマトモにしたことのない自分が、あの怪物達を相手に？

期待は不安へ転じ、未来は重圧に早変わる。いもしない脅威に怯え、いるかもしれない事実で心臓が早打つ。

「だ、誰か……誰かいないのか!？」

次の瞬間、後藤甚田は駆けた。自分以外にいるかもしれない、心強い味方探しに………。

そう、ゴジータとなった自分がいるように、この世界はベジットとして生まれている者がいるかもしれない。自身の膂力にモノを言わせ、自分を探す姫野先生の声を無視しながら、後藤甚田という少年は逃げるように地球という星を駆けずり回った。

山を越えた。一息も要らずに県境を越え、人目につかない程の速さで日本という島国を駆け抜けたが、なんの感情も沸かなかつた。

海を渡った。まだ空を飛ぶことを知らず、ただやみくもに海面を走り抜けた。其処に驚愕の意思などなく、ただすがり付く思いが胸中を駆け巡っていた。

世界を見た。前世の自分の記憶とあまり変わらない世界の光景、個性という超常が存在しても、根底としてある文明文化に一切の興味を示さず、少年は走り抜けた。

駆け抜け、走り抜け、駆けずり回り、そして……思い知った。この世界に、この地球に、自分が頼りに出来る者はいない。ベジットも、ゴテンクスも、自分の知るZ戦士達は影も形も存在しなかった。

(誰も、いなかった。ヤジロベエやヤムチャも天津飯も、チャオズもクリリンもピッコロも、悟天やトランクス、悟飯もベジータも、そして……)
悟空も。

当たり前か。何せ悟空とベジータが合体したのがゴジータである自分なのだ。……いや、自分はゴジータを模倣している偽者であって、彼等ではないから違うのか。

どれだけ世界を巡っても彼等には出会えず、同時に物語の超重要アイテムであるドラゴンボールの存在も認知出来なかった。

やはり、自分の思い過ぎか？ ゴジータという存在として此処にいる自分が異質なかだけで、実はそんなに危険な世界では無いのではないか？

なんて都合の良い幻想を抱くのも束の間、同時にもう一つの懸念が自分の裡を埋め尽くしていく。

(そうだ。奴等が、あの怪物達が実在するかどうかなんて関係ない。俺は、ゴジータだ。

あのゴジータなんだ)

疲れた思考。肉体的ではなく、精神的に疲弊した少年が至った答えは、その力を持つが故の当然の帰結。そう、ゴジータという存在をこの世界で唯一知る彼だからこそ、その答えに行き着くのは当たり前前の事だった。

ゴジータとは、最強。あらゆる怪物達が束になっても敵わない、最高のライバル二人が融合したベジットと対を為す最強格。

不敵に笑い、敵を討つ。ならば、ゴジータとなった——な^{つて}しま^つた自分もまた、それに倣わなければならぬ。

きつと、人は知れば笑うだろう。何を馬鹿な事をと、己は己であつて理想ではない。それ以外になれる事など、決してありはしない。

誰かが言った。憧れは、理解から最も遠い感情だと。その通りだ。憧れとは、理解されないからこそ憧れと言うのだ。

憧れは、その者が心に抱く情景。その者にしか抱かない心の裡が、他人に理解される事は有り得ない。故に、後藤甚田は進み続けるしかないのだ。

「甚田!!」

ふと、今世における自分の名を呼ぶ声が聞こえる。顔を上げると、目に涙を溜めた施設の創設者である姫野葵が、喜びと安堵に満ちた表情で抱き着いてくる。

「どうやら、いつの間にか施設——星の都へ帰ってきていたらしい。良かった。どうやら此処を自分の帰れる家と思える程度には、心の拠り所にしていたらしい。」

抱き締めてくる先生、彼女が言うには三日もの間行方を眩ませていた様で、地元の人達や警察の人達と一緒に探していたらしい。

（はは、なんだよ。世界中を駆け巡っておいたたつたの三日かよ。いや、それでも本家本元に比べたら雲泥の差なんだろうけど）

一見ポロポロな姿の自分を見て、ゴメンねと謝ってくる先生。彼女が悪い所など何一つ無いのに、不安にさせてしまったと泣いて謝ってくる彼女に、後藤甚田は小さくない罪悪感を覚える。

けれど……………。

「先生」

「——？」

「俺、強くなるよ」

今は、罪悪感すらも煩わしい。自分の事を心配だと気に掛ける先生も、自分の無事に安堵する大人達の善意も、何もかもが今の自分には煩わしかった。

全ては自分が強くなる為、姿形だけでなく、天下無敵の合体戦士になる為、後藤甚田は強くなる事を決めた。

(そうだ。俺しかいないんだ。俺が、俺がやらなきゃ
誰がやる)

その身に、歪んだ呪いを携えて。

記録 65

姫野葵は、子供が出来ない体質だった。異形型の個性であるが故か、通常なら有り得ない遺伝子情報を持ち合わせている所為で、彼女の肉体は命を宿す器として適切ではなかった。

家族の中で唯一異形という歪な姿で生を受けた彼女は親兄弟から蛇蝎の如く嫌われ、親族の誰からも無視されるようになった。

まるで存在その物を認めていないかの様な扱い。異形型の個性を持つて生まれた彼女は、家族からもないものとして扱われていた。

しかし、そんな彼女に一つの救いがあった。それは人並外れた頭脳、異形という人間から外れた規格である故か、文字通り人より頭の出来が異なる彼女は10歳に至る前に、既に数多くの論文を公表し、その手の界限から高い評価を得ていた。

喩え家族から忌み嫌われようと、外の人達は違う。幼いながらもその事に気付いた彼女は、自分を忌み嫌う家族と早々に決別し、外の世界へと羽ばたいた。

世界各国を渡り歩きながら自らの研究を重ね、時折政府に自分の研究成果を提出して結果を示し、充分な生活費と研究費用を獲得していた。

彼女が得意としている分野は量子物理学。特に重力に関する分野を得意としており、これにより彼女は個性黎明期、超常社会が始まって以来あまり着目されてこなかった人類の宇宙進出へ目を向ける事になった。

個性という超常社会により、他人との差異がより明確になってしまったことで、それに伴う差別……特に異形型の個性持ちの人々に対して、より一層酷くなっている。

それでも、宇宙開発が進めば人々の目や関心は広い世界へ目を向ける様になり、差別等の社会問題も一定の変化を見せるのではないか。

そんな淡い期待を抱きながら研究を続けていたある日、姫野葵は一人の幼子と出会う。

その少年はいつから其処にいたのか、何処から来たのか、十数年以上経った今でも分らない出自の分からない少年だった。

その日は雨が降っていた日、傘も指ささず濡れになりながら、その少年は街の中を彷徨い歩いていた。周囲の人間は見て見ぬふりをして、その内ヒーローが来てくれると、決して自ら動くようとはしなかった。

姫野は愕然とした。この社会で、降り頻る雨の中で、周囲の人間はおろか交番の警察

すら見て見ぬふりをするその有り様に、姫野は言葉に出来ない感情を抱いた。

それは脳裏に浮かんた嘗て己が家族親族から受けた所業を思い出した事に対する憤りか、憐れみか、或いは両方か。気付けば姫野はその少年——後藤甚田に向けて駆け寄っていた。

少年の目は虚ろとしていた。生気がなく、まるで今この世界に生まれたばかりのようなあやふや感。このまま放つてしまえば消えてしまいそうな程に儂い少年を、姫野は見捨てる事が出来なかった。

その後、その子供を連れて直ぐに近くの交番に押し入った彼女は、面倒くさそうにしている警官を怒鳴り付け、少年の身元の確認を急がせた。

しかし、どれだけ調べても少年の素性は判明することはなかった。親の存在も、名前すらも分からない。目の前にいるのに誰も少年の存在を認めるものが何一つなかった。

そして、いい加減少年をどうにかしなければいけない段階へと差し掛かってきた時、姫野は決心した。

「——この子は、私が預かります」

それは自己満足だった。同じ存在その物を否定された者同士、同情と義憤が彼女を一つの決心を抱かせた。

これから生まれてくる子供達。親親族から疎まれ、蔑まれても、せめてもの寄る辺に

なってあげよう。独善的で、偽善的と罵られようと、自分のできる限りの事をしよう。宇宙開発を進めるのは、その後でも良い。

その後、I・アイランドからのオフアーも蹴り、すべてのプロジェクトを一時凍結させて姫野葵は児童養護施設「星の都」を創設、少年を初めとした孤児達を引き取る事になる。

そして……。

「それじゃあ、あなたの名前を決めなくちゃね。何か希望があつたりする？」

「……じ……た……」

「……じた？ うーん、何かのキャラクターかしら？ なら——」

そうして、少年の今世での名前が決定する。

「甚田、後藤甚田なんてどう？」



ゴジータとして生まれ、ゴジータに成るべく俺が最初に覚えたのは力加減の仕方だった。

ゴジータに成ると息巻いておきながら、覚えるべき事は加減の仕方。全力を出したこともないお子さまが口にするにはお笑い草だと思われるかも知れないが、星を片手間で粉碎できる世界観の住人としては割りとは急務な事だと思う。

何せ、今世の俺は血の繋がりが無くとも世話をしてくれる人がいる。姫野葵さん、色々と面倒見の良い彼女に迷惑を掛けられないことを考えれば、割りとは必須な能力かと思われる。

唯でさえ先の失踪により心配をさせてしまったのだ。これ以上の心労を掛けるには忍びないし、何よりゴジータが力加減も出来ない阿呆だと思われるのは嫌だ。

ゴジータは手加減も出来ないパワー馬鹿ではない。必要な時に必要な力だけを引き出して、敵をスタイリッシュに打ち勝つ。その為には日常生活から戦闘時での力加減の差を体に染み込ませる必要がある。

そう思いイメージトレーニングやら加減を覚えての生活を試みた所……普通に

来た。剩りにも、呆気なく。

流石はゴジータボディ、力加減などデフォで付いているらしい。皿洗いも割ることは無かったし、寧ろ姫野さんが落とし掛けた皿をキャッチしてやれる程度には力加減の出力が細やかに制御出来ていた。

これならばゴジータを直指して鍛練に励むことも支障は無いだろう。その日から俺は姫野さんが寝静まった頃に施設から抜け出し、朝方まで山奥で鍛練に励むことになった。

鍛練といつても、前世含めてマトモにトレーニングなどしたことない俺には、鍛えるという概念事態あまり理解出来ていなかった。鍛えるというのは体に負荷を掛けるという事、漠然とそれくらいしか理解できていない俺は、一先ず思い付く限りの筋トレを行った。

腕立て伏せ——万回やっても何も感じない。

腹筋——同上の回数をこなしても痛み処か疲弊すらない。

スクワット——一説には、限界を迎えれば太腿が燃えるように熱くなると聞いたが、全くその様な現象は起こらなかった。

他にもうさぎ跳びや岩を背負つてのランニングなど色々試してみたものの、自覚できる程の負荷を感じる事はなかった。

ゴジータという規格外の肉体を持つが故の弊害。生半可なトレーニングではこの体を成長させる事は出来やしないのだと、俺はこの日悟り、絶望した。

このままではゴジータの名に傷を付けてしまうし、この程度の力ではいるかも知れない化物達と出会った時、為す術もなく殺されてしまう。

自分を拾い、面倒を見てくれると言ってくれた姫野葵さん。せめて彼女を守れるだけの力は身に付けないと……。

（——待てよ、確か姫野さんって結構な科学者だつて聞いたな）

それは一昨日、施設にやって来た一人の男性。彼は何とかって島からのオフアートを断った姫野さんを説得にやって来たのだという。

何でも姫野さんは物理学に精通していて、中でも重力に関する分野が得意なのだとか。

（——もしかしたら、出来るのでは？）

もし、彼女が自分の想像通り……いや、想像以上の技術力を持っているのなら、ワンチャン出来るかもしれない。

DBワールド御用達の、特訓部屋。即ち——重力室が。



その日、私は初めて母性と言うものを自覚した。

自分が保護して1ヶ月、造り上げた施設内にて必要最低限の会話しかしてこなかった少年、後藤甚田。

親も分からず、自らの出生も分からない彼。きつと自分が何者であるかも良く分かっていない彼は、それでも拾ってくれた私に報いろうと、懸命に家事を手伝ってくれた。

まだ設立したばかりの施設で、色々分からない事の多い日々。そんな私を見かねて少しでも役に立とうと、あれこれ手伝ってくれる彼を嬉しく思い、同時に申し訳なく思った。

寂しくさせないよう気を付けていたのに、気を遣わせてしまった自分の不甲斐なさと、彼の優しさに泣きたくなった。

そんな彼が、申し訳なさそうに俯きながら話し掛けてくる。どうしたの？ 不安にさ

せないように声色に気を付けながら話し掛けると……………。

「姫野センセー。俺、強くなりたい！ 誰よりも！」

そう強く決意を秘めた彼の瞳を見て、私は思った。

この子は、きつと強いヒーローになる。それこそ、現在大活躍中のオールマイイトすら越える程のヒーローに。

一ヶ月にも満たない共同生活なのに、もう保護者面か。我ながら傲慢な人間だなど、私は自分自身に呆れながら……………。

「——分かった。その夢、先生も応援するよ」

遙か高みを目指す少年の夢を、後押しする事に決めた。

けれど、この時私は……………姫野葵は決定的にズレていた。

後藤甚田が望んでいたのは、比喩ではなくそのもので。彼が目指すモノの高さとそのおぞましさを。

子供が目指すには、剩りにも痛々しい地獄なのだ。

この日の私は、想像も出来なかつた。

記録 66

幸いな事に、自身を鍛えるのに必要な環境は割りと直ぐに整えて貰える事が出来た。

自分こと後藤甚田は、来るべき脅威とゴジ^最ータ^強の証明をするために児童養護施設「星の都」の創設者にして天才科学者である姫野葵さんに、体を鍛える為の環境を提供して貰える為にゴネて見た所、少しばかりの間があつたものの、快く頷いて貰えた。

自分の身体の頑丈さを個性として認識されたのか、自分の要望も通り、三ヶ月も経つ頃には施設の地下に自分専用の鍛練場——即ち、重力室が完成した。

どうやら、姫野さんはマジモンの天才だったらしい。本人曰く宇宙開発に於ける技術の応用と言っていたが、それにしただって仕事が早い気がする……まあ、鍛練の場が完成したので、細かいことは気にしない事にしよう。

そうして遂に始まる？重力下での特訓が始まるのだが……正直物足りなかった。

何せ、姫野さんが設定した最大の重力負荷が地球環境に合わせて通常の100倍程度。確かに最初の数秒は体にのし掛かる重みを感じていたが、一分も経つ頃には完全に肉体

が10倍の重力に適應してしまっていた。

恐るべきはゴジータの肉体スペック。どうやら生半可な負荷は瞬く間に適應してしまいうらしい、高過ぎるスペックに俺自身が困惑してしまっていた。

しかし、同時に納得してしまった。ゴジータは悟空とベジータというドラゴンボールの作品内に於いて心体共に極まった超戦士。

そんな二人が融合し、合体して生まれたのがゴジータならば、その肉体強度も恐ろしく極まっている筈。分かっていた筈の事なのに、実際に体験してしまうと色んな意味で洒落にならないし、何よりこれ以上強くなれないという事実を示唆している事でもある。

俺は焦った。このままでは強くなる事が出来ない、ゴジータとしての証明が敵わなくなる。由々しき事態だし、今後の脅威に対して強くなる必要がある自分としては、重力による負荷の割り増しを急ぎ設定して貰う必要があった。

しかし、此処でも問題があった。姫野葵さん、彼女の倫理的価値観が自分の修行に待ったを掛けてきたのだ。通常の10倍、数字で見れば大したことは無いように見えるが、実際に体感するとその負荷は凄まじく、並みの人間ではその？重力に耐えきれないのだという。

自分が10倍の重力に挑戦すると言った時もかなり動揺を見せていた。どうやら姫

野さんは少しずつ？重力の負荷に馴れさせ、最終的には10倍の重力に挑戦させるとい
うつもりでいたらしい。

子供にそんな事はさせられないと、頑なに首を縦に振らない姫野さん。……：彼女の
気持ちは間違っていないし、自分の気持ちを尊重してくれた上で此処までしてくれた彼
女に、自分は嬉しさと罪悪感で胸が締め付けられる思いを抱いた。

——けれど申し訳ない話だが、その感傷は余計なモノだ。彼女の思いやりは自分
にとつて重しであり、彼女の気遣いは自分にとつて面倒な鎖でしかない。

酷い事を言っている自覚はある。けれど自分は、ゴジータは、こんな所で足踏みして
いる場合ではないのだ。今、こうしている間にも宇宙皇帝が地球を狙っているかもしれ
ない。

呑気にご飯を食べてたり、寝ている間に何処かの地下組織が完全生命体を生み出して
いるかもしれない。

こうして何もしていない間に、魔人が大気圏外から地球を破壊しに来るかもしれな
い。

考えては尽きない不安と恐怖。これ等に打ち克つには自分自身が強くなる他無い、故
に自分は姫野さんに頼んだ。もっと強くなりたい、強くなる為には今よりもっとキツク
して貰わないといけない。

そう訴える自分の言葉は、結局彼女に伝わる事はなかった。もう少し大きくなってからね、とか。焦らないでゆっくり進めましょうとか、そんな当たり障りの無い言葉を残して、姫野さんは自分の仕事を片付けにいった。

——仕方がない。彼女の言葉は正論で、間違っているのは自分の方だ。どれだけ強くなりたいたと望もうとも、所詮は10にも満たない子供の戯れ言。

仕方がない。そう、仕方がないのだ。
——だから。



私の行いは、欺瞞なのかもしれない。あの雨の中で、誰もが見て見ぬふりをする雨中、まるで世界から弾き出された様に佇む彼を、過去の自分と重ねて保護をした。

偽善だろう、欺瞞だろう、あの時の彼の姿を嘗ての自分と重ねて放っておけないと思えた私は、他人から見れば酷く歪で、傲慢にも映る事だろう。

けれど、そんな私の自己満足で彼を幸せに出来るのならそれで良かった。懸命に家事を手伝いながら、それでも人として感情を取り戻している彼を見て、私は確かに充足感を感じていた。

そんなある日、彼はあることを私に要求してきた。何でも一流のスポーツ選手は、自分の体に負荷を掛けて自らの膂力を鍛える風習があったのだとか。

超常社会黎明期よりも遙か前、個性と呼ばれる異能が生まれる以前の話。よくそんな古い情報を知っているなど感心する一方で、同時に少し不安に思った。

この子は強さと言うものに執着している傾向がある。ヒーローという職業が存在している現在に於いて、この年頃の子ならば当然の欲求なのかもしれない。そうなら微笑ましい限りだが、どうやらこの子はそれだけではない気がする。

ともあれ、目の前の子——後藤甚田は自身が強くなることを望んでいる。私が初めて保護した子、甘やかすつもりはないが、それでも可能な限り応えてやりたいと思

えた。

幸い、甚田の要望を叶える施設を作るには然程苦勞はしなかった。元々あった重力制御システムのノウハウ、それを応用すれば限定的な空間であればこのくらい何て事はなかった。

たかが10倍とは言え、生身の人間でいきなり挑めば重傷は避けられない負荷。少しずつ慣らし始め、成長と共に段階を踏んで挑戦し続ければ、きつと将来彼は強いヒーローになれる。

そう思っていた私の考えは、一瞬にして瓦解する事になる。彼は、後藤甚田は、あるうことか最初の段階で10倍の重力負荷に挑み、そして適応していた。

アラームが鳴り響く重力室にて、平然と佇む甚田。その顔には何処と無く失望感が滲み出ている、私はただその光景に圧倒されていた。

「姫野さん、もう終わりなの？」

暗に、この子は確信している。この重力室にはまだ上がある。システムに設定されていないだけで、上限など存在しない無限の負荷地獄になる事を。

本来ならば彼が10倍の重力を克服した後、粗大ゴミや不燃物を処理するために使われる圧壊室になる予定だった事。

彼は言う。強くなる為にはこのままではダメだ。もつと逆境を、もつと過酷を。もつ

と修練を。

もつと——地獄を。

黒く伽藍堂な瞳で見詰められた私は、彼の言葉を全否定して、逃げるように仕事に戻った。彼は、後藤甚田は賢い子だ。きつと私の言葉にも理解してくれる。

そう期待しながら一度だけ振り返ると……やはり、無機質な黒い瞳が自分をジツと見詰めていた。

そして、それが初めの私の過ちだった。

「——え？」

仕事が終わって地下へ戻る。きつと今頃外に遊びに行っただろうと、帰ってきた時の彼の機嫌をどうするべきかと頭を悩ませながら重力室へ戻った私が見たものは——
凄烈な光景だった。

血、赤く鈍った朱い小さな池が重力室の中心に出来ていた。そして、その池に沈んでいるのは私が初めて保護した子供。

「甚田!!」

慌てて駆け寄る。バタバタと視界を涙で滲ませながら倒れる彼を抱き上げる。見れば上半身の服が何か強い衝撃に晒された様に弾け飛んでおり、胸元を中心に酷い火傷の痕が付いてしまっている。

一体何が起きたというのか。混乱しながら、それでも甚田を救おうと懸命に呼び掛け、救急車を呼ぼうと携帯に手を伸ばそうとして……。

「う、ん……?」

「甚田!? 大丈夫!? 甚田!!」

「いつつ、なんだ俺、寝ていたのか」

「甚田、一体何が起きたの!」

「あれ? 姫野さん? 仕事は終わったの?」

(まだ、意識が……!!)

起き上がり、立ち上がった甚田。しかし此方を見る視点は未だ虚ろなまま、絶句する。姫野を余所に後藤甚田は乾いた笑みを浮かべる。

「これ以上、姫野さんに迷惑は掛けられないしな。なら、俺なりに頑張るしかないよな」

「甚田、何を言ってる!?!」

再び言葉を失う。意識の朦朧としている後藤甚田の右手には、いつの間にか光が集

まっていた。凄まじい力の波動、科学者である姫野から見ても未知なエネルギーの奔流。

そんなものがどうして甚田の手から現れるのか。これが彼の個性？ 技術者であるが故に考察する彼女が次に見たのは……躊躇なく自らに放つ甚田の姿。

光の宿る手で自身の胸元を叩き付け、その瞬間爆発が重力室に轟いた。爆風に吹き飛ばされた姫野は小柄な体の為にコロコロと地面を転がる。

それでも異形型である為、並みより頑丈に出来ていた彼女は、頭にたん瘤が出来る程度で終わった。痛む頭部、頭を擦りながら甚田の安否を気遣う彼女は急いで彼の元へ駆け寄るが……。

「――」

息を飲んだ。言葉に出来なかった。血を全身から吹き出し、視点も視界も朧気になりながらも、それでも立ち続けている甚田。

明らか死に体、辺りには致死量レベルの血が散りばめられ、甚田の体からも夥しい量の血が流れ落ちている。

しかし、それでも甚田は止まらない。再び自分の体を痛め付けようと、その手に光を集めて自身に叩き付けようとして……。

「やめて!!」

姫野葵は、抱き着くように甚田の体を制止させた。

「止めて、止めてよ甚田!! もういいから、私が悪かったから!!」

自分の何が悪かったのかなんて分からない。けれど、今の姫野にはこうするしかなかった。

「お願いだからもうこんなことは止めて!! 甚田が、甚田が死んじゃうよお!!」

涙ながらの絶叫。その訴えは朦朧としていた甚田の耳にも届き……そして。



———
なんか、体が若干重い?

ふと体に纏わり付く何かに気付いて見やると、そこには涙と鼻水でグシャグシャに

なった姫野さんが、自分の体に抱き着いていた。

何故？ 確か彼女は自分の仕事を片付けに向かった筈。そんな彼女を見送った俺は、彼女の迷惑にならないようにもう一つの強くなる方法を試すことにしたのだ。

自分の体が本来にあのゴジータなのだとしたら、彼らと同じサイヤ人としての特性も受け継いでいる筈。その特性を最大限応用する上で必要な自傷行為。

幸いゴジータとしての才能も備わっていた自分は、手に気の収束を行い、そのまま自分の胸元へ叩き付けた。流石はゴジータの一撃だけあって、その威力は桁外れに凄まじく、俺の意識はたった一撃で失っていた。

これなら、過度な負荷修行もなく強くなれる。死にかけてた状態からの復活は、サイヤ人を最も強くさせる方法の一つ。今後はこれを応用して強くなれば良い、我ながらそう思った矢先——気付けば、泣きじやくる姫野さんが自分の体を抑え込んでいた。

——つくづく、自分の愚かさに嫌気がさす。何故、自分は姫野さんを泣かしてしまっているのか。これがゴジータなら、決して有り得ない事態である。

ゴジータは誰かを泣かした事はあるか？ 否。

ゴジータは誰かを不安にさせたことはあつたか？ 否。

何故姫野さんは泣いている？ それは俺が無様を晒し、彼女を不安にさせてしまった

から。

ならば、ゴジータとして生きる自分がすべき事は。



「——大丈夫だよ、姫野さん」

「——え？」

その顔に、姫野は再び言葉を失った。

「俺は、大丈夫。この程度、なんともないさ」

生気を失っていた顔に力が宿り、その瞳には光が灯る。

「俺は、ゴジータなんだ。だから………」

痛む筈の体に鞭を打ち、子供らしからぬ振る舞いを見せ……。

「心配するな」

笑った。不敵に、大胆に、【誰か】の様に目の前の子供は笑う。

それが、姫野葵にはどうしようもなく—— “気持ち悪く” 映った。

自分は、勘違いをしていたのだと、この時初めて彼女は思い知った。

彼は、強くなることに拘っているのではない。強くなることに取り憑かれている。

他ならぬ後藤甚田、彼自身が自ら望んで。

姫野葵は間違えた。そこに彼女の非はなく、ただその運の悪さが廻ってしまっただけ。

この日、姫野葵は思った。思ってしまった。

私は—— 関わる相手を、間違えた。

不敵に笑う甚田、それを呆然と見上げる彼女が抱くのは、自らの欺瞞さと自己満足に陶醉していた……自らの醜悪さと無力さに対する絶望だった。

記録67

あの日から、姫野さんは自分の要望を素直に受け取り、修行にも非常に協力的になつてくれた。

重力室の負荷も既に100倍の大台にまで差し掛かり、俺のゴジータとしての修行の日々も漸くスタートラインに立てた……とは、断言しづらい。

ゴジータを目指し、ゴジータとして生きていくと決めている以上、妥協は許されない。何せその大台である100倍の重力負荷にも、既にこの体は適応しつつある。

まだ10歳にも届かない未成熟な体なのに、恐ろしい程の強靭さ。呆れると同時に、やはり自分はゴジータなのだ改めて思い知った。

姫野さんは……あの日以来、あまり自分とは会話をしなくなった。新たに迎え入れた子供達の面倒も見なくてはいけないのもあるのだろうか、それ以上に自分の事は避けている気がする。

まあ、強くなる為に自傷行為をするという訳の分からない事をしでかす子供とは、関

わりたくないのだろう。それは別に良い、彼女の気持ちを鑑みれば充分に理解できる。それでも自分を追い出さず、要望を聞いてくれる姫野さんには感謝しかない。

ただ、その代わりに幾つか面倒な制約も出来た。自分が修行と称して地下に籠るのは許すが、学校には必ず通つて最低でも高校は卒業することを約束させられてしまい、他にも先日行つた自傷行為に關しても、今後は絶対にしてはならないとも言及された。

正直面倒臭い。ゴジータになるべく強さを追及していくつもりでいる自分としては、学業に現を抜かしている暇はない。必要性も感じない。全ての時間を修行に割いて、徹底的に鍛えぬくつもりでいた自分としては、この制約は些か以上に厄介だった。

自傷行為に關してもそう。あの後、気を失うように眠りについた自分は、翌日には完全に回復し、それに併せて体の内側から力が溢れてくるような感覚を体験した。

やはり、この体はサイヤ人なのだろうか、彼等と同じ特性を持つこの体は修行を重ねる度に強くなり、耐久力も増していく。

だが、その割りには最も特徴的な空腹感は無く、食欲も並み程度。精々大盛りのご飯を5杯ペロリと平らげる位だが……いや、割りと食べているか？

そんな訳で自分の我儘を許して貰う一方で、色々と制約も課せられた自分は、先日から近くの学校に通うことになった。

因みに学費の件だが、何でも重力制御による技術が何処かの島に高値で売れたらし

く、自分や子供達を大学まで通わせる程度には稼げているらしい。

しかも、最近の姫野さんは株までやっているらしく、そちらの方でもかなり利益を上げているらしい。

……ヤバくね？



最近、学校に通って思った。昨今の小学生の学力、ヤベエ。人生二回目の自分が所々遅れを取る位、この時代の小学生の学力は進んでいた。

いや、元々俺は勉強は出来なかつた方だし、前世の学歴に至っては中学まで。高校は……一日、二日程度しか通えなかつたから、仕方ないのだ。

た、体育の方は満点だし。跳び箱だって余裕で10段飛べるし、てか手を抜いたって出来るし。体育の一点に絞れば、学校の連中全員が相手でも勝てるし。

——違う、何小学生相手に張り合っているんだ俺は。どうやら先日漸くあの姿に至ったお陰で変にテンションが高くなってしまうているらしい。

ゴジータとしてはこの程度で浮かれるのは憚れるが……今回だけは目を瞑ろう。何せ前世から憧れるあの「超サイヤ人」になる事が出来たのだ。

100倍の重力に適應し、いざ150倍の重力に挑もうと全身に力を入れた時、それは発現した。

黒髪は金色に逆立ち、瞳は翡翠色に輝きを宿し、全身には黄金の炎を宿す。テレビの中で幾度も見た天下無敵の最強戦士の面影が其処にはあった。

感動して震えた。何せ、これで自分は漸くスタートラインに立てたと胸を張れるのだから。この世界に生まれ変わって早一年、後藤甚田漸くの芽吹きである。

超サイヤ人になれるようになった影響は凄まじく、身体能力や飛行能力が変身前より比べ物にならなくなり、その膂力は単純な跳躍力で大気圏外を余裕で突破する程で、飛行能力に至っては秒で世界を一周する事が可能となった。

色々と規格外なこの肉体だが、肝心な超サイヤ人に至った経緯がよく分からなかった。超サイヤ人は穏やかな心を持ちながら激しい怒りを持つことで覚醒する戦士。サ

イヤ人が持つ特性の一つで、その特性は主人公達の子供達にも濃く受け継がれている。だが、自分には怒りで覚醒できた自覚がまるでない。サイヤ人特有の食欲も無いことから、自分は本当にサイヤ人なのかと疑問に思ってしまう。

けれど、この身に宿る力の奔流は最早誤魔化しは効かない。取り敢えず超サイヤ人の姿は「個性」という事にして、上手く誤魔化していこうと思う。

そして、超サイヤ人になりながら重力室での修行は剩りにも楽だった。150倍の重力にも瞬く間に適応し、修行と呼べない程にまで簡単なものになってしまっている。

やはり超サイヤ人の力はまだ使わない方がいいだろう。通常の状態での強さを極めるべく、俺は今日も血反吐を吐きながら修行を続けた。

——— そう言えば新しく来た城鐘って兄妹、なんか訳ありそうだったな。

ま、子供が施設に来るって時点で、訳ありも糞もないか。

——— そう言えばで思い出した。俺、ずっとここで修行してたけど、肝心な対人の戦闘経験がゼロやんけ。

なんとかせねば！



——城鐘御幸にとって、世界は自分と妹だけだった。

母は自分達が幼い頃に蒸発し、仕事一辺倒だった父は自分達の面倒を見るのが嫌になったのか、ある日に仕事に行ったり帰ったり帰ってこなかった。

二日か三日か、或いはそれ以上か。不思議に思った近隣住民が警察に通報し、駆け付けた警官とヒーローによって二人は保護された。

しかし、蒸発した親の子供という厄介な置物を引き取る物好きは彼等の親族にはいなかった。子供の事をあの手この手で押し付け合おうとする親族達、明らかに厄介者扱いをする大人達を目の当たりにした二人が、大人相手に不信感を抱くようになるのは然程難しくはなかった。

その後、誰の手にも借りずに自分達だけで生きていこうと決意し掛けた時、二人の前に一人の女性が現れた。

姫野葵。児童養護施設【星の都】の創設者である彼女は、親族達からの連絡を受け、自

分達の前に現れた。

異形型の個性らしく、人の枠組みから外れた容姿の彼女。しかしその小動物な外見故か、妹である城鐘恵の受けは良く、その後は転々と話が進み、二人は星の都に引き取られる運びとなった。

施設での生活は悪くはなくとても清潔で、部屋も妹と二人同じにして貰い、食事も朝昼夕とキチンと出される。姫野葵自身も優秀な学者であった為、勉強も少しづつ教えて貰えるようになった。

妹と二人で過ごさせて、親族にたらい回しされることも飢えに喘ぐ心配もなくなった。両親に捨てられるという最悪の体験をしても、どうにか生きていける目処が出来た。

しかし、そんな何かと裕福な星の都で生活して暫くして、城鐘御幸は一つの疑問に行き着いた。

後藤甚田。自分達と同じ施設の子供であり、姫野葵に最初に拾われた親無しの子。自分達と同じ、親に捨てられたであろう境遇でありながら、その事を全く気にしていない年上の子供。

そんな彼はいつも何処かへ一人ふらつと消えていく。食事時にも姿を見せず、見かけるのは然程多くはない。

学校に通つてはいるみたいだが、友達等が出来ている様子はなく、いつも帰つて来る

かと思えば何処かへと消え、夜まで姿を見せないでいる。

一体彼は何なのだろうか。不気味な年上の男子がいることもあつて、この頃妹は少し怯えてしまっている。

保護者である姫野葵に訊ねてもはぐらかされてしまう始末。個人的に気になったし、なによりも妹の平穩の為に後藤甚田の生態を突き詰める事にした御幸は、学校から帰ってきた甚田の後を追ひ、そして――。

「なんだよ、これ」

その光景に絶句した。

施設の地下とその奥にある扉、其処に備えられている小さな窓から中の様子を伺うと、血溜まりの中で体を動かしている甚田が其処にいた。

身体中の至る所から血を流している甚田、垂れ下がつて腫れ上がっている左腕に注視すると、それが折れている状態であると知つた御幸は、口を抑えて嗚咽を呑み込んだ。

良く見れば、足の向きも少しおかしい気がする。手足を折りながら、それでも体を動かしている甚田を見て、御幸は目の前の年上の少年が氣狂いの類いにしか見えなくなつていた。

彼は、一体此処で何をしているのか。この事は姫野葵は知つているのか？ いやそも

そも……この部屋は一体なんだ？

「もしかして俺達、とんでもないところに拾われたんじゃ……」

思い浮かぶのは人体実験の文字。自身が予想する最悪の事態を前に御幸が焦燥感に襲われた時……それは起きた。

大きな衝撃。地下を揺さぶり、扉が吹き飛んでしまう。幸い地面に尻餅をついただけで怪我を負う事はなかったが、扉の奥——重力室の中心にて佇む明らかに姿の異なる甚田の姿に少年は言葉を失った。

腕を折り、脚を折りながらも、それでも自分を鍛えてきた少年。その体は黄金の炎を身に纏い、その頭髮は金色に逆立っていた。

神秘的、且つ絶対的な力。個性というには剩りにも規格外な力の波動。その力を手に入れた少年は……。

「——は、ハハハ、ハハハハハ」

嗤っていた。歓喜に身体を震わせ、達成感に小さく涙を流す。何故なら……。

「やつとだ。やつと、俺は……スタートラインに、立てたんだ！」

漸く始まる。自分の目的の為の全てが、此処から始まる。

終わりではなく始まり。自らを傷付け、痛め付けてきた自分の、最初の一步が漸く始まる。そう狂氣的に嗤いながら喜ぶ甚田を目の当たりにした城鐘御幸は、言葉に出来ない恐怖を覚えた。

記録68

超サイヤ人になれるようになって早数年。既に小学校を卒業し、中学も半ばという所。後藤甚田こと今世の俺は今日も今日とて鍛練に明け暮れていた。

重力負荷も既に300倍を超え、超サイヤ人も「2」へ至った事だし、そろそろ500倍の重力にも素で挑もうかと思っているこの頃。最近の俺はとある事に頭を悩ませていた。

それは、圧倒的な実戦不足。特に対等或いは格上相手との戦闘が全くと言っていい程無いのである。

いや、ゴジータ自体格上と戦う事がなかったと言うのもあるが、それはあくまで本物のゴジータの話。偽物ではない俺がゴジータとして戦っていくには、やはりそれに見合った戦いの経験というモノが必要になってくるのだと思う。

そもそも、ゴジータの元となった悟空とベジータも戦闘民族というだけあって、その人生の大半を戦いに費やしている。積み上げてきた経験も凄まじい二人が合体したか

らゴジータという最強戦士生まれたのだ。

なら、ゴジータとして生きていく自分も、それに倣わなければお話になりはしないのだ。

けれど、自分はこれ迄殴り合いの喧嘩などしたこともない。前世は………小さい頃に一度か二度くらいはあったかもしれないが、今世に至っては一度もない。

施設の子供達ともあまり会話もしていないし、あったとしても事故に遭いそうになった城鐘兄妹の妹の方を助けた程度。あの時以降は妹ちゃんとはちよくちよく話をしていくけど………なんか兄の方はやたらと警戒されてるんだよなあ。

まあいいけど。

そんな訳で小学生卒業間際から、ちよくちよく施設を抜け出して夜の街へ繰り出し、時折暴れるヴィラン擬きを相手にしているのだけ………いやー雑魚。

幾ら加減しているとはいえパンチ一発処かデコピン一発で気絶とか、ちよつと脆くない？ しかもこっちは超サイヤ人にすらなつてないんだよ？ と、剩りにもヴィランの弱さに驚きを通り越して絶望した。

別に街を巻き込んだのバトルをしたい訳ではないが、それでもこの弱さはない。社会に反旗を翻すにしても、もう少し心身ともに鍛えてから暴れて欲しいモノだ。

個性という超常の力を持っている人口が増えてきているのに対し、それをちゃんと制

御している奴が少なすぎる。

いや、確かに個性を悪用することを危惧しているのは分かるが、ある程度自己管理出来る程度には使えるようにしておかないと、却って変な事件事故に繋がるんじゃないのか？

この間もなんかヴィランをおちよくっている奴を見掛けた。四つん這いになって滑るように走る独特な個性なのは目を引いたが、それだけ。結果怒らせたヴィランを俺が横からかつさう形でノシてしまう事になってしまった。

外見的に中学生くらいだろうか。愉快な個性以外特に目立った所の無いもやしの青年、オールマイトのグッズのパーカーを着込んでいたり、今時なヒーローオタクな彼は、ヴィランが何故倒れたのか分からないまま呆然としていた。

あのもやしの人、個性の扱いを変に解釈している所為であんな間の抜けた事になっているけど、本来の力を理解したら一気に伸びる可能性があるぞ。それこそ、トップヒーローに名を刻める程度には。

閑話休題。

とまあ、夜の街に繰り出して早二年ちよい、未だに警察すらも俺の存在を認識出来ないみたいだし。

監視カメラ程度で収まる程、今の俺の速さはトロくない。夜の街でチンピラヴィラン

と戦う時は基本的に暗い路地裏だし、俺の姿も夜の路地裏という事でマトモに見られた事もない。基本的には拾った黒い大きめのパーカーを着ているから、端から見ればダボダボのパーカーが宙に浮かんでいる様に見えるだろう。

そんな訳でチンプラヴィランを倒していく日々の俺だったが……人を殴る耐性や加減は出来るようになって、対人戦を体験した気がしないまま、小学校を卒業してしまった。

これではいかん。最近は成長期に伴って身体も大きくなってきたし、そろそろ本格的に対人戦を学ばなければ。未だにイメトレでしかない出来ていないとか、色んな意味で不味い。

姫野さんに正直に話してジムにでも通わせて貰う？ いや、これは最後の手段だ。最近の葵さんは事あることに俺の鍛練に干渉しようとしてきている。まあ、生身の人間が300倍の重力に挑戦したいとか宣っているのだから、気にかける気持ちも分かるけど。

ともあれ、対人戦を学びたいからジムに通いたいなんて言われたら、変に心配を掛けるわけにもいかない。だから、この案は最後の手段にしておこう。

ではどうするか。最近の俺は夜の街を全国規模で駆け巡った結果、面白い噂を聞いた。とある街のビル、その地下では違法な賭けが横行する地下闘技場なるモノがあるの

だとか。

しかも個性を用いてのルール無用。闘技場という事もあつて街中のチンピラ止まりのヴィランよりは手練れの連中がいる事だろう。尤も、バリバリの違法賭博の会場でもあるだろうから、当然其処に行き着く迄には時間が掛かるだろう。

そう思いながら調査する事数日。見付けちゃいました。

割りと簡単に見付けられたのは単に運が良かったのか、はたまたゴジータとしての直感が勝つたのか。いつも通り夜の街中を散策していると、ラツパとか言う如何にもな荒くれ者が、ヤル気満々で何処かの場所を目指して歩いていた。

遠巻きから見て、ラツパとか言う荒くれ者は戦える者がいたら誰彼構わず噛み付く狂犬タイプ。そんな手合いが大人しく夜の街を練り歩くなっておかしい、そう思つて着いていつてみると……ビンゴ。見事闘技場の会場を見付けた。

しかも結構な盛況ぶり、参加者も全員が如何にも血に飢えた狂犬達だった。リングで殴り合うアウトロー達も個性を用いていたので、此処が目的の場所だと言うのは確信できた。

見た限り、結構動ける人が何人かいた。格闘技らしい体捌きの人も見掛けた事だし、超サイヤ人にならず且つ超絶手を抜けば、結構な経験になるかもしれない。

一先ず場所を見付けた俺は、明日、改めて挑もうと思う。当然、施設の皆には気付か

れずに、だ。



「——ちよつといいか」

「あん？　なんだコイツ」

熱気盛んな地下闘技場。血飛沫と歓声が飛び交うアウトローの世界にて、その日、一人の黒が降り立った。

「闘技場への参加は此処で合っているのか？」

「ああ？　テメエも参加してえのか？」

「つーか、コイツどう見てもガキじゃねえか」

小学生から中学に上がった事で、体格も成長し始めた甚田だが、未だ少年の域は出ていない。幼さが残る甚田の顔をパーカーの奥からチラリと見えた闘技場関係者は、鼻息ならしながら手を振った。

「帰れクソガキ、此処はテメエみてえなガキが来ていい所じゃねえんだよ」

「いや待て、俺コイツ知ってるぞ。その黒いパーカー、お前……まさか最近噂になつて
いる死神パーカーか？」

（誰それ？）

さっさと帰るよう促してくる強面の男だが、同じく強面のおっさんがそれを止めに来る。どうやら甚田の事を知っているみたいだが、初めて耳にする死神パーカーなる呼び名に若干目を見開いた。

「死神パーカーというのは初耳だが、最近のチンピラをノシていたのは確かに俺だ」

「へー、あの死神パーカーさんが遂にアウトローデビューか。おい、今すぐカードを組め。余興になるし、場合によれば金になるかもしれないぞ」

ニヤリと笑い、男は甚田を奥の控え室へと案内する。どうやら話は通つたらしく、試合は今やっているのが終わり次第組まれる様だ。

これで漸く本物の戦いというモノを体験できる。会場の大きさやアウトローなのは

この際どうでもいい、今甚田が望んでいるのは大事なものは格闘技を扱う者と戦えること。

ゴジータとして生きるためには戦いの経験はなくてはならない。格闘技を、戦いというモノを学んだ上で勝つ。それが、今回此処へ来た理由だ。

「おい、時間だぜ。お望みの試合だ」

呼びに来た関係者に促され、リングへ向かう。黒いパーカーを羽織った自分の登場に、会場は一瞬静寂に包まれてどよめくが……。

『お待ちせしました。本日の余興試合、飛び入り参加の紹介です。本日現れましたのは昨今話題の死神パーカー！ 正体不明の死神が本日をしてアウトローデビュー!!』

いやしないが。なんて甚田の内心のツツコミとは他所に、会場内は一気に歓声に沸き立つ。どうやら自分の事はある程度認知されていたらしい、全く嬉しくないが。

しかし、今はそんな事よりも。

『対するは、美しき肉食獣。今夜もその足技は見えるのか!? タイガーかバニーか、本人曰く両方、タイガーバニー!!』

「よお、テメエが噂の死神パーカーか？ は、確かに真っ黒でなんも見えねえ、確かに正体不明だな」

虎を模したマスクを被り、褐色肌で兎の耳が生えたマスクの女子。学生服を着て明ら

かなパンピーなその女子は、甚田に凜猛な眼で見定める。

「……………」

「は、黙りかよ。良いぜ、テメエが沈黙を貫くってんなら、先ずはその黒パーカーをひん剥いてやる」

(どうしよう、帰りたくなってきた)

沈黙は金。昔の人はそんな格言を残したが、どうやらこの場合は悪手だつたらしい。無反応を装う自分に興味を失う処かより闘争心を掻き立てられたタイガー後バルミコルニー。

ゴングの開始と同時に、彼女の飛び蹴りが甚田に強襲した。

記録69

タイガーバニーの蹴りを受け、防いだ片腕から伝わって来る衝撃に、死神パーカーと後藤甚田は目を見開かせて吹き飛んでいく。

四方を金網で覆われたリング、ガシャンと音を立てて吹き飛ぶ噂の死神パーカーに、観客からは歓声の聲が上がる。

早速盛り上がる会場、しかし歓声の叫び声を上げる観客側に対し、タイガーバニーは顔を青ざめていた。

（——なんだ、今の感触は）

蹴った瞬間、タイガーバニーは違和感を覚えた。一見普通の人間と変わらない死神パーカー、これ迄通りなら今の一撃で死神パーカーはKOされていた事だろう。

だが、この時タイガーバニーは自身の足に途轍もない負荷を感じた。まるで巨大且つ頑強な肉の山に阻まれているかのような感触、これ以上力を込めれば蹴った自分の足がへし折れる。そんなイヤな未来が彼女の脳裏を過った。

そして、そんな彼女の直感を裏付ける様に、死神パーカーは派手に後ろに飛んでいった。まるで自分の足が折れないように、受けた衝撃をそのまま逃がすように、黒いパーカーの少年は吹き飛んで見せたのだ。

「——マジかよ、受ける方にも技術が必要とか、クソ過ぎんだろ」

驚愕し、唾然としているタイガーバニーとは対照的に、死神パーカーこと後藤甚田は苛立つて失望し、何なら憤慨すらしていた。

「——はぁ」

そんな失望混じりの溜め息が聞こえたのか、タイガーバニーの顔に凶悪な笑みが浮かぶ。

「上っ等だ。そのパーカー、蹴り飛ばしてやるよ!!」

兎を思わせる跳躍力を以て、死神パーカーへ距離を詰める。これ迄幾度も悪漢達をその自慢の蹴りで薙ぎ倒し、闘争心が絶えない彼女はより過激な戦いに身を置くべく、地下闘技場へと乱入していった。

喧嘩、或いは戦いへの嗅覚。野生児とすら思える彼女の本能の五感が目の前のパーカー男の存在を極上の獲物として認識した。

先ずはそのフードを蹴破って素顔を拝んでやる。意気込んで駆けるタイガーバニーは、勢いを殺さずに死神パーカーへ無数の蹴りを放つ。

拳の突き……ボクシングで言うところのジャブよりも鋭く速いその蹴りは、しかして死神パーカーに全て見切られてしまう。

「ッ!?!」

偶然か、フードに当たるとの所を連続で躲す死神パーカーに大いに盛り上がる会場に対して、タイガーバニーは更に怒りを募らせる。

「デメエツ、ワザと!!」

タイガーバニーの動き、僅かしか見せなかつた彼女の動きを見切った事で生まれた余興。プロヒーローですら難儀する彼女の蹴りを瞬時に看破した死神パーカーは、冷めた眼で彼女を見る。

最早彼女に見るべきモノはない。攻撃も単調な事からどれだけ速くても見切るには容易いし、何より彼女の俊敏スピードも大したことはない。

見るべきものも做すべき手本も無いのなら、せめて余興紙めプにはなつて欲しい。傲慢且つ不遜、しかし二人の間にはそれが成立してしまう程の差があつた。

「舐めやがって、本気でやりやがれ!!」

兎が吼える。彼女も気付いていた。目の前の死神パーカーは今の自分よりもずっと強い、それこそ、蹴つた自分の脚を折らないように気を遣う程に目の前の存在とは実力差が隔絶していた。

それでも、喧嘩相手とは対等で在りたい。自分の今の行いが、単なる弱者の遠吠えに過ぎなくとも、例えこの後にどれだけ無惨に敗北したとしても、タイガーバニー^後は対等な勝負をしたかった。

しかし。

「だったら——俺に出させてくれよ、本気を」

死神パーカーはそのフードの奥で嘲笑う。光の角度の影響か、フードの奥に隠れた黒い瞳がタイガーバニーを明らかに見下していた。

上等。凶悪な笑みをより深くさせ、両脚に力を入れて跳躍する。地面を陥没させる程の膂力、地面から天井に向けて一直線に飛び上がるタイガーバニーを、死神パーカーは静かに見据える。

天井に張り付けるように着地、ギチギチとタイガーバニーの太股から筋肉の脈動が伝わってくる。ド派手な演出に会場は更に沸き立つが、対する死神パーカーはやはり冷めていた。

「行くぜ、オラアッ!!」

天井に張り付いた時の負荷からの獲物に向けての垂直落下。諸々の勢いを乗せたタイガーバニーの一撃には、確かな殺意が込められていて、周囲の熱狂は更なる盛り上りを見せていた。

しかし……。

「軽いな」

「ツ!?!」

後のトッブヒーロー
タイガーバニーの渾身の一撃は、自分よりも年下の子供にあっさりと受け止められてしまっていた。

片手で、一切ブレる事なく、その上で彼女に反動のダメージを与える事なく、全ての衝撃を受け止めた上で、死神パーカーは彼女の一撃を受け止めて見せた。

目の前の事実には、盛り上がっていた観客達は息を飲む。今のはタイガーバニーにとって必殺の一撃であった筈、喧嘩に明け暮れたチンピラも、喧嘩を見慣れた観客達も、その事は分かりきっていた。

しかし、そんな彼女の一撃は死神パーカーを傷付ける処か、その場から一步も動かす事が敵わなかった。一体どういう事なのか、それとも相手の攻撃や衝撃を無効化するのが、死神パーカーの個性なのか。

誰もが理解できないでいる状況、そんな場に突如として乱入者が現れた。

「此処だな、個性を用いての違法な格闘技をしている現場は。全員動くな!」

「け、警察だど!?!」

「クソが、どつかの馬鹿が追けられたな!!」

突然現れた警察、中には武装した者や通報を受けて駆け付けたヒーロー達も押し入ってくる。違法な賭博も横行していた地下闘技場へのガサ入れ、予想外の事態に大慌てで逃げていく主催者や観客達とは別に、タイガーバニーこと兎山ルミは目の前の光景に唾然としていた。

「——いねえ」

既に其処に死神パーカーの姿はなかった。ほんの一瞬、警察が突入してきた時に視線が逸れた瞬間にあのパーカー野郎は影も形も無くなっていた。

速い。自分に認識することすらさせず、気配すら感じさせないで消え失せるその動きは、最早人の範疇を越えていた。

それだけじゃない、戦いが始まってからずっと自分は遊ばれていた。……否、あれはそもそも戦いではなかった。

あのパーカーは、ずっと何かを試していた。目の前の自分ではなく、全く別の事柄に意識を割いていた。

そう、奴にとって自分は対等の対戦者ではなく、有象無象の障害ですらない。ただの

（上等だ。次会った時、絶対蹴りぜってえを入れてやる!!）

初めて味わう屈辱、怒りを己の力に変え、兎もまた会場を後にする。いつか再び出逢

える事を祈りながら、一方通行な気持ちを胸に秘めて……。



「結局、あまり意味は無かったか」

帰り道、警察やヒーローに己の存在を認識すらさせずに帰路に着いていた甚田は、自分の思う通りの事が何一つ叶わなかった事に対して、憤りを通り越して失意で満ちていた。

世話になっっている恩人に迷惑が掛かるかもしれないリスクを負って、それでも挑んだ地下格闘技。謳文句にはそう呼ばれているが実際に参加して見た所、甚田には地下格闘技場というより、個性という力を持って余した子供が遊ぶ遊技場にしか見えなかった。

「どいつもこいつも自分に力があると錯覚した奴等ばかり、力を極めることも、技を磨くこともしない奴等は、ヴィラン以下のボンクラに過ぎない。」

「自分の対戦相手だった……なんだったか？ 何とかバニーは多少の心得があった様だが……それだけ。」

「やっぱ、自分の力で何とかするしかない、のかなあ……」

「成果があつたとすれば、どんなに弱い奴が相手でも、殺さずに無力化させる方法を身に付けた。という位、ゴジータとして生まれたこの肉体は、半端な攻撃は通用せず、寧ろ仕掛けてきた相手の手足を壊しかねない。」

「そうさせない為に、受ける方の工夫も学ぶ必要があり、今回はそれに対応出来るようになった。そう言う意味では今回の件は価値があつたと言えるだろう。」

「けれど、まだ足りない。ゴジータとして生まれ、ゴジータとして生きていくには今の自分には何もかも足りていない。」

「だが、なにをすれば良いのか分からない。鍛えるための環境は用意して貰ったが、未だに自分を追い詰める鍛練しか思い付けぬ甚田は、行き詰まった自分のこれからに頭を悩ませながら家に着くと……。」

「甚田、こんな夜中まで何処で何をしていたの？」

「あ、先生」

普段穏やかな彼女とは想像できない、怒りに震える恩人が玄関先で仁王立ちしていた。



「甚田、こんな時間まで何処で何をしていたの？」

「] 答えない。他の子供達は既に寝静まり、二人きりのリビングに通されて早数分。問い質してくる姫野に対して甚田は黙秘を貫いていた。

俯き、口を開こうとしない甚田に姫野は辟易とする思いだが、その感情は決して表には出さない。何せ今日まで殆んど甚田には関わってこなかった自分にそんな偉そうな事を言える資格はないからだ。

自分は、甚田から逃げている。あの日、自分を傷付けてまで強くなるうとする甚田を恐ろしく思い、避けてきた。他の子供達の面倒を見なくてはいけないという、尤もらしい言葉を吐いて。

(あの日から、甚田は続けている。自分の体を壊す程の負荷を、ずっとその体に掛けていく)

それは、まるで自戒のようで、自分自身を罰している様にも見えた。此処ではない何かを目指して、自分以外の何かになろうとしている。

そんな生き方を、これ以上して欲しくなかった。けれど、そんな彼を止める術も言葉も姫野葵は持ち合わせていない。

だから。

「——甚田。貴方が何を思い、何を目指しているのかは、私には分かりません。だから、私は貴方に一つの提案を示したいと思います」

「提案？」

自分の言葉に初めて甚田は反応を示した。それが少し嬉しくて、思わず笑みが溢れそうになるけれど、姫野は口を閉じて表情を引き締める。

「甚田、雄英に行きなさい。そこへ入学し、無事に卒業したのなら、私は今後貴方の活動にとやかく口出ししたりはしません」

それは一つの賭け。甚田の抱える悩みを少しでも減らしてやりたいと願う姫野葵が出せる唯一の提案。

日本最高峰のヒーロー養育施設であると同時に、最高峰の教育現場でもある雄英。彼処ならきつと、甚田の悩みにも寄り添ってくれる。そんな、他力本願の願い。

情けないと思いつつも、姫野は言う。其処に入学し、無事に卒業しなさいという。

ヒーローになれとは言わない。元より彼が目指しているのはそう言うものではないと、姫野葵には何となく理解していた。

ただ、知って欲しい。世界には貴方の事を考えてくれる人が、自分以外にもいるのだと、学校での生活を通じて友人を、友達を作つて欲しい新しい世界を見出だして欲しい。

そんな、彼女の密かな願いは……。

「——分かった」

取り敢えず、聞くだけ聞いて貰えた。

記録70

——あれから、幾つかの月日が流れた。

恩師である姫野葵に進学の話を受けて尚続けてきた鍛練、小中学までマトモに友人も作らず、ただゴジータとして生きていくことを目標にしていた後藤甚田は今日、ヒーローの教育機関として有名な雄英高等学校の門前に来ていた。

「……本当に来ちゃったよ」

あの日から、事ある度に勉強を教えようとしてくる恩師に内心辟易としていたが、拾ってくれた事、自分の我が儘を聞いてくれた恩と負い目の事もあり、甚田は素直に彼女の教えを受け入れた。

幸い、恩師である姫野葵の教え方は良く、勉強を不得手としている甚田にも分かりやすく通じ、お陰で中学時代の後半は割と好成绩を修める事が出来た。

その甲斐あって、甚田は無事にいち生徒として中学を卒業し、雄英試験まで漕ぎ着けたのだが……正直モチベーションはそこまで高くはない。

何故なら、甚田は其処までヒーローなる職業に魅力を感じられなかったからだ。個性を鍛え、派手に使い、ヴィランを倒して世間から注目という名のスポットを浴びる。

名声と力、場合によっては富すら築ける昨今の学生達の就職ランキングNo.1ではあるが、甚田からすればどうでもよかった。

富と名声など端から求めてはおらず、力に至っては論ずる意味もない。ただゴジータとして生き、自身を極めていく事しか頭がない甚田にとって、ヒーロー業とはあまり魅力的に映らなかった。

とは言え、恩師である姫野の出した条件は雄英を入学し無事に卒業する事。ヒーローになれなんて言われてない為、気にする必要はないだろう。

問題は目の前の毎年倍率の高い学校の難問を如何に解いていくかと言うこと、実技試験？ ああ、そんなものもあるのね。

「ま、ベストを尽くしますかあ」

ややうんざりしながら、重い足取りで甚田は雄英の門を潜るのだった。



そうして筆記試験も無事に終わり、いよいよ実技試験となった。場所は室内から屋外へ、中学時代のジャージを身に纏いながら、後藤甚田は他の雄英希望者達と共に実技の試験会場へ向かう。

有名なヒーロー育成機関だけあって、雄英の敷地は広い。広く整頓されている街を模倣した試験会場へ辿り着いた甚田を含めた入学希望者達、いよいよ始まる試験を前に甚田は予め教えられていた試験内容を思い出す。

内容は至って単純、ポイントを有するヴィランを想定したロボットを可能な限り撃破していく事。途中お邪魔な0ポイントロボなんているらしいが、要するに全てのロボを破壊するだけでいいのだ。

(なんだか簡単すぎる気がするなあ、これなら筆記試験の方がまだ難関なんじゃないか?)

筆記試験の方は……個人採点でギリ合格といった所。トップで入学しなくてはならないなんて縛りもないし、実技の方はノンビリやっつけていこうか。

なんて考えるのも束の間。

『スタート!!』

突然、試験担当者の開始の音頭が会場に響き渡った。曰く、実際のヴィランとの戦いで用意スタートなんて事態は起こらない。速く駆け出し敵を倒せと煽り、煽られた入学者希望者達は一目散にヴィランポイントを稼ぐために駆け出していく。

バタバタと慌てながら駆けていく学生達、そんな彼等を後ろで冷めた眼で見つめながら……。

「んじゃ、やりますか」

一歩足を前に進めた瞬間、後藤甚田の姿は掻き消えた。



「へえ、今年の子達もやるじゃない」

「仮想ヴィランと言えど、敵意を以て向かってくる相手に、良くもまあ正面から挑めるもんだ」

「だが、それは逆に自らの個性と相手の危険性を考慮していない事にも繋がる。要注意だな」

健闘している生徒達を別室でモニタリングしていた教師達、いずれもプロヒーローとして活躍経験のある実力者達で固められた雄英の教師陣営は、各エリアで奮戦している学生達を冷静に分析していた。

皆、様々な個性を持ち合わせている。今日という日の為に隠れて個性の訓練してきた者もいるだろう。

だが、それでもプロとして本物のヴィラン達を相手に戦ってきたヒーロー達から見れば、アマチュアも良いところだ。けれど、だからこそ鍛え甲斐がある。これから合格し、入学してくる自分達の生徒達をどう導き鍛えてやろうか、不敵に笑う教師達だが、ふと一人の教師が違和感を覚える。

「——なんだ？」

「アン？ どうしたイレイザー」

「エリアFの所、様子がおかしくないか？ 仮想ヴィランが出てきて無いように見えるが？」

「はあ？」

個性を打ち消す個性、名をイレイザーヘッドと呼ばれる雄英の教師の一人。彼が指を指す先には仮想ヴィランの反応の無いモニターが映し出されていた。

良く見れば、学生達の様子も何処かおかしい。戸惑っている彼等の様子にまさか仮想ヴィランの動作不良か？ と、試験的に最悪なケースを教師達の脳裏に過った。

「い、いや待て！ この日の為に何度も点検したんだ！ 動作不良なんて……！」

思わず向けられる視線に、サポート科を担当しているパワーローダーは手と首を振って無罪を主張する。彼の仕事振りを知る他の教師達もそれを知っているからこそ、それ以上の疑問は向けず、そうだよなあと首を傾げた。

一応調べるとその場を後にするパワーローダー、何が起きたのか未だ不明なエリアFの様子に雄英の校長である根津は一つの答えに行き着いた。

「——まさか」

「校長？」

「どうされました？」

声を掛ける教師の声に反応せず、モニターを操作する。突然の行動に戸惑う教師達だ

が、次に拡大される映像を見て言葉を失った。

無惨に破壊された機械群、その中心に佇む一人の学生、その両手に仮想ヴィランの首を掴むその姿は、ヒーローと言うより怪物の類いに見えた。

「——あり得ねえ、まだ試験が始まって一分も経つてねえんだぞ!」

嘗て無い事態、だが事実は揺るがない。あろうことかエリアFの仮想ヴィランはたった一人の学生の手によってモノの見事に破壊し尽くされていた。

エリア全体に満遍なく配置された仮想ヴィラン。裏路地、建物内、屋上、大通り、その全てが粉碎されている。

其処に一切の個性によって破壊の痕跡を残さず、ただ素手で壊されたという結果だけが残されていた。

一体、エリアFで何が起きている？ 前代未聞の展開にあ然となる教師達、誰もが言葉を失っている中で、事態は更に動き出す。



——その日、その少年は夢を見た。自分がヒーローとして活躍し、トップヒーローの仲間入りを果たすその夢を。

英雄。それはヒーローを志す者ならば、一度は挑んでみたいヒーローへの登竜門。過去にもオールマイトやエンデヴァー等のトップヒーローを輩出したこの学校で、自分もプロヒーローになるのだと、少年は今日という日を心待ちにしていた。

勉強もして、個性の特訓も隠れてしてきた。憧れのヒーロー達みたいになりたくて、少しでも近付けるように、少年は自分なりの努力を続けてきた。

そして今日、遂にこの時がきた。筆記試験は個人採点で何とか合格範囲、あとはこの試験に合格するだけだと挑み……。

気が付けば、全てが終わっていた。

一陣の風が自分達の後ろから通り過ぎたと思った瞬間、仮想ヴィラン達は音を立てて瓦解していった。え？ と、声を漏らすのも束の間、次々と仮想ヴィランのロボは破壊され、そのどれもが断末魔すら発せられずに破壊されていく。

目に映らぬ処か、状況すら頭に追いついてこない。何が起きているのだと理解できていない少年を含めた学生達が呆然としている最中、ソイツは現れた。

「———こんなもんかよ、攻撃どころか反撃すらしてこないとか、こんなヴィランじゃなくただの案山子だろ」

逆立つた黒髪、手にした仮想ヴィランの残骸を手に、呆れの言葉を漏らすのは、この試験に消極的だった学生だった。

恐らくは記念試験の一人なのだろう、ライバル意識もなく、ある意味見下していた学生が、つまらなそうに何かを呟いている。

そんな彼を見て少年の脳裏に一つの答えが過るが………認めたくない。認めてしまえば、これ迄の自分の努力が無駄になったと認めてしまう様で、少年は震えながら立ち尽くす事しか出来なかった。

そんな時、地鳴りが会場に響き渡る。見るとビルの隙間から見上げる程の巨大な仮想ヴィランが、自分達を見下ろしていた。

これが説明にあった0ポイントのお邪魔ロボ。倒すだけ徒労で終わる文字通りのお邪魔ロボ、その巨体で建物を押し退け、自分達に迫るその迫力に一人、また一人とその場から逃げ出していく。

少年も逃げようかと思つた。けど、あのやる気のなかった学生が、その0ポイントを

見上げて………嗤っていたのだ。

「最後に、いっちょ派手にやるか」

そう言うと、彼を中心に暴風が荒れ狂う。砂塵が舞い、残骸が吹き飛び、力の暴風が集約されていく。

炎。次の瞬間少年が見据えるのは黄金の炎を纏う学生が其処にいた。黒髪も金色に染め上がり、正面を見たわけでないのに、迫力が増しているのが分かる。

「とうとう」

跳躍。膝を曲げず、自然体のまま跳べば、既に学生は0ポイントロボの目の前まで飛び上がっている。不敵に笑う生徒、その姿と顔を目の当たりにした仮想ヴィランは………心なしか、怯えている様にも見えた。

「ぶっ飛べ」

瞬間、握り締めた拳が振るわれ、巨大ヴィランが宙を舞う。首だけが吹き飛ぶのではなく、巨大な身体全てがぶっ飛ぶその異様な光景に、学生達だけでなく、モニタリングしていた教師達ですら、目が飛び出す勢いで見開いていた。

声がない。一分足らずの時間で事態は動き………否、動きすぎた。情報が大きすぎる光景に脳は処理が追い付けず、スーパーストレインを持つ根津もその光景を理解するのに数秒は掛かった。

分かっている事はただ一つ、やらなければいけないことは、遠く離れたエリアまで大型ヴィランを吹き飛ばした事による試験の一時中断と、試験のやり直しという前代未聞の事柄に対する後片付けだった。

記録7 1

雄英の試験から数日、合否の事など気にも止めずに後藤甚田は今日も今日とて高重力下での鍛練日課に励んでいた。

既に倍率は800倍へと迫り、負荷だけなら彼等が行っていたモノよりも上回っている。高重力による負荷でギシギシと全身の骨が軋み、足下には幾つもの窪みが出来上がっているが、それでも構うことなく甚田は自身の追い込みを続けていく。

(今日は身体のキレもいい、このまま通常時の状態で1000倍の舞台……狙えるか?)

恩師の知らない所で幾度となく骨を折り、時には死にかけた事数回。既に自身への鑑みなさに自覚を失っている甚田は、コンビニへ赴く感覚で死地へと足を突っ込もうとしていた。

死ねば其処まで。最近そう開き直れば色々となると悟った甚田は、高難易度のゲームに挑む感覚で負荷の設定システムに手を加えようとする。いざとなれば超サイ

ヤ人となつて無理矢理にでも終わればいい、樂觀的とも悲觀的とも取れる境地の中、甚田は制御システムへ手を伸ばそうとして……。

『じ、甚田さん！ 来ました！ 来ましたよ!!』

矢鱈と跳ねた声が重力室に響き渡る。それは姫野葵がセーフティとして着けた外部からの通信システム。予定する時刻を超過し、予定の無い負荷を掛けようとすると、直ぐに外へ連絡が繋がり、重力室の全システムが緊急停止するという、甚田にとつて頭が痛くなる代物。

しかもこの声は昨今矢鱈と自分に絡んでくるとある兄妹の妹の方だ。鍛練の邪魔をされて舌打ちを打ちそうになるのを懸命に堪えながら、声の主へと返事を返す。

「——どうした恵、そんなに慌てて」

『どうしたもこうしたもないよ！ 甚田さん、今日がなんの日だったか覚えてないの!』
興奮している彼女は、なにやら凄じ劍幕で重力室に押し入ろうとしている。自分なら兎も角、並みの人間でしかない彼女が万が一この空間に入れば、その瞬間人間大の潰れたトマトが出来上がるだけである。

ドンドンと戸を叩く彼女にはあ、と溜め息を溢して甚田は此処までだなど観念した様子で自らシステムをシャットダウンさせる。

聽て重力室を満たしていた高重力の危険を伝えるレッドシグナルは消え、プシューと

「空氣が抜ける音と共に外界と繋ぐ扉は開かれる。

扉が開かれるとカンカンと音を立てて遠慮無しに入ってきたのは、甚田が恵と呼ぶ少女——城鐘恵が目を輝かせて走りよってきた。

「来た、来たんだよ！　とうとう今日が!!」

「落ち着け、主語をはしよるな。一体何が来たって?」

「合否だよ！　雄英から甚田さんの合否通知が!!」

そう言つてはい！　と押し付けてくる彼女に戸惑いながら、そう言えば今日だったなと、甚田は興味なさげにその通知を受け取るのだった。



「前も来たけど……無駄に広いな、ここ」

そうして数日後、無事に雄英への入学を果たした甚田は、広大な敷地を持つ雄英を前に感心半分呆れ半分の声を漏らす。

あの日、雄英から合否の通達を受け取った甚田は、そのまま恵に手を引つ張られ、皆のいる居間へと通された。甚田が天下の雄英に入学できるか否か、それを甚田以上に気になっていた施設の子供達は、通達書類を持つ甚田に纏わり付く。

常日頃から子供達とは必要最低限しか関わっていない筈なのに、何故か妙に懐かれてしまっている。これも雄英のブランドパワーか？ 疑問に思いながら通達の便箋の封を切った瞬間。

『熊かネズミか果たして如何ほどか、そう！ つまりは僕さ!!』

ホログラム映像から大きめのネズミがドアップで映し出されていた。自らを校長と名乗るネズミに若干引きながらも、無事に合格を言い渡された甚田はこちらも何故か妙にテンション高めな姫野に連れ回され、まだ入学まで時間はあるのに、あらゆる準備をさせられてしまった。

「なあんでどいつもコイツもテンション高いかね？ そんなにいいもんかな名門校つのは」

入学するのに矢鱈と難易度の高い筆記試験をさせられたのに、肝心の実技試験は単なるメカを相手取るだけという。

名門高と言うには大したことがない。既に雄英の底が見えた気がする甚田は、登校途中何度も溜め息を溢した。

これなら他の適当な高校に通って、暇な時に鍛練をしていた方が余程有意義な時間になるだろう。確かに前世でも高校生の生活は未経験な甚田だが、ゴジータとして生きていくと決めている以上、姫野葵の配慮は正直いつて余分とも言えた。

けど……………。

『格好いいよ。頑張って、甚田！』

目に涙を溜めながらサムズアップしてくる恩師を見てしまった以上、腹を決めるしかない。定められた期日は高校卒業まで、その時まで精々高校生活に殉ずるとしよう。

そう思い、教室に入るのも束の間……………。

「よし、なら身体測定を始めるぞ」

いつの間にか甚田はダルそうな不審者感マシマシの担任である相澤消太の案内の下、入学式もガイダンスもそつちのけで、雄英敷地にある校庭の一つに体育服を着用で連れられていた。

それも、見込みの無い生徒だと判断されれば、除籍もされるという理不尽な触れ込み

と共に。



(———アイツが後藤甚田。実技試験で脅威の記録を叩き出した問題児)

面倒そうに、或いは自分以上にダルそうにしている甚田を見て、相澤はその目を鋭くさせて観察する。

あの日、雄英は創設から初となる試験のやり直しを迫られる事になった。ポイント制のロボを全て一人で撃破し、0ポイントの巨大ロボを隣の試験会場まで吹き飛ばした【個性】の持ち主。

その前代未聞の事態を前に雄英の教師達は連日の残業を強いられる事になった。同

じ教師兼ヒーローであるセメントスや片付けのプロでもある13号がいなければ、数日程度では済まなかつただろう。

……どちらかと言えば、報告を纏める際の書類作りのの方が手を焼いた気がする。

そんな、入学前から既に顔と名前を覚える事になった後藤甚田。彼を校長である根津は将来有望なヒーロー候補と期待しているが、相澤は其処まで楽観的になれなかつた。

（あの時、奴は金髪碧眼へと変わっていた。恐らくはあれこそが奴の個性……だが、それじゃあそれまでの奴の膂力は？ 仮にも個性を使つた姿が変身した状態だとするのなら、黒髪の状態は通常の状態と言える筈。……通常状態にも影響を及ぼす個性？ 異形型とはまた違う新たな個性の在り方か）

何度もあの日の映像を見て、数少ない情報から甚田の個性を推察していく。これ迄発見されてきたどの個性とも違う型の個性、面倒事を抱えてしまった事実に辟易とする相澤だが……その考察は少々異なっていた。

後藤甚田の身体能力は、生まれ持つてしまった才と独学と自殺紛いの鍛練と自身への追い込みによるもの。個性という枠ではなく、其処から逸脱した異常行為によるものだとは……気付ける筈もなかつた。

未だに甚田は個性を使わない。使う素振りすら見せない彼に、今後の甚田の動向を見定める為にも相澤は一步進みだす。

「おい後藤、お前いつまで三味線引いてやがる」

「あ？」

「さつきから見れば、お前の記録はどれも並程度。他の連中に合わせて力を抑えているつもりだろうが……このままだと、此方もお前は見込み無しだと判断せざるを得ないぞ」

「……………」

そう、先程から甚田は他の個性を扱って挑んでいる生徒達と同程度か、或いは少しだけ上に行く程度の記録しか出してない。まるでやる気が感じられない甚田に対して、相澤は横暴とも取れる手段を選択した。

「力を出し惜しんでヴィランに殺されるのが望みか？　なら今すぐ帰れ、此処はヒーローを育成する教育の場だ。部外者をしごいてやるほど、此方は暇じゃない」

辛辣なコメント、眼の鋭さから相澤の言っていることが本気だと知る他の生徒達はその迫力に圧倒されて押し黙る。

そんな最悪の空気となったグラウンドにて、甚田の溜め息が零れた。

「……………次は、遠投だったな」

サポートのロボから測定機のボールが手渡される。次の項目はボール投げ、相澤の視線を背に受けながら、甚田はサークルの中へと入っていく。

……個性を使う気配はない。此処まで言っても改善する気のない甚田に、今度は相澤の口から溜め息が漏れる。

(後藤甚田、どうやら見込みは薄いらしい。根津校長には申し訳ないが、明日から普通科への転属も視野に入れる必要が……)

瞬間、チユドンツという砲台のような轟音が相澤の耳朶を叩いた。何が起きたと目を丸くさせるが、既に其処には投げ終えた甚田と耳を抑える生徒達しかいない。

どうやら、漸くその気になつたらしい。投球フォームを解く甚田だが、その姿は例の金髪碧眼ではなく、通常時の黒髪黒目のままだ。

これで一つの仮説は立証された。後藤甚田の素の身体能力は個性の影響もあつて既に大きく変化している。異形型とはまた別の個性の形、これからまた忙しくなるぞと相澤は自らの頭を掻くが……。

「……………? おい後藤、終わつたのなら直ぐにサークルから出る」

「……………はあ」

サークルから出ることを促す相澤に対し、甚田は先程以上に大きな溜め息を漏らした。失望、落胆、失意の感情がこれでもかと思われられた溜め息、一体何が言いたいんだと、相澤が若干の嫌悪感を抱き始めた……………その時。

「そ、危ないぞ」

「なに?」

相澤の横を何かが横切った。音を置き去りにし、勢いと鋭さを乗せたソレは、甚田の左手へと吸い込まれる。

見れば、それは先程甚田が投げた測定機のボールだった。ボロボロで、所々火花を散らせながら、何とか稼働しているそれを啞然としている相澤へと投げ渡す。

「ッ!?!」

ボールに映し出される記録、それを見て相澤は更なる驚愕の底へ叩き落とされる。

「ね、ねえ、今のってアイツが投げたボールだよな?」

「あ、ああ、でもなんでそれが反対側から飛んできてんだよ?」

「もしかして、あれが後藤君の個性?」

「自分を、或いは触れたモノをワープさせる個性か! 成る程、それなら入学試験でのあの出鱈目な速さも納得だ」

甚田の一連の遣り取りをみて、それぞれ解釈し、納得していく。一部の生徒は「皆節穴かい、今のはそんな生易しいモノとはちゃうやろ」等と冷や汗をダラダラ流しながら戦慄している。

相澤もその一人、目を見開いて驚愕している彼の肩に、ポンツと甚田の手が置かれた。

「——まあ、そう言う事だ。クラスの士気を下げる不適切な態度したのは謝るよ、悪

「かつたな。でも、俺も俺でやるべき事が多いからさ、あんまり目立ちたくないんだ」

「折角アンタ等にでも理解できる尺度でやってるんだ。……あまり、困らせないでくれよ」

それだけを告げて甚田はその場を後にする。そんな彼に何かを言い付ける訳でもなく、相澤はその記録に目が離せないでいた。

凡そ四万キロメートル。それが甚田の叩き出した記録。物理法則を無視して地球一周を果たした測定機は、そのまま音を立てて崩れ落ちていく。

「……………」

沈黙した相澤、教師として雄英に赴任した彼は、この日初めて教師としての挫折を味わう事になる。見込みを間違えたのは自分の方だと、それを正しく認識するまで、彼の苦悩は終えることはない。

記録 7 2

雄英に入学してから早一ヶ月、取り敢えず甚田は平穩な日常をそれなりに謳歌していた。

初日の身体測定であの教師から不興を買った時は多少面倒臭い気持ちもあつたが、今の所その当の本人からはなんの介入もなく、クラスメイト達とも表面上は上手く付き合えている。

あの身体測定でクラスの生徒達は自分の個性をワープ系の個性と認識しているらしいが……訂正する気はない。勝手に勘違いする生徒には肯定も否定もせず、適当に誤魔化して話を濁していた。

中には何名かの生徒は自分の事を正しく認識出来ているが、これも放置。そもそも知られた所でどうもならないし、甚田自身も何も思わない。

ただ、時折担任の相澤から何かを探るような視線を向けられるが……自分の邪魔さえしなければ此方から何かをするつもりはない。高校に進学し、雄英のヒーロー科とい

う難問を突破しても、後藤甚田のスタンスは変わらず仕舞いだった。

……いや、一つだけ感じた事はある。有名なヒーロー育成高等学校、オールマイトやエンデヴァーといったトップヒーローを輩出してきた名門高。一体どれ程の困難が待ち受けて、どんな難関が降り掛かってくるのか、甚田は少しだけ期待していた。

だが、この一ヶ月で早くも甚田は英雄に厭きていた。勉強の方は兎も角、ヒーローに關する実践的な授業は全て甚田にとつて取るに足らないモノになってしまっている。

先のクラス内による戦闘訓練もそう、他の人間の個性がどう言つたモノなのか、参考程度には楽しみにしていたのに、いざ実際に対峙すると、退屈で面倒で仕方がなかった。何せ、殆どの生徒が個性に頼つた立ち回りをしているのだ。幾ら個性が人体の一部として扱われているのだとしても、それだけを武器にして戦うのは甚田から見れば下策にすぎた。

個性も人体の一部。なら、その個性を含めて肉体を鍛えるべきではないだろうか。昨今ネット界隈で囁かれている個性終末論、世代ごとに強力になっていく個性は臆て扱いきれない代物となって人類は滅ぶ。

なら、それはね除けるだけのフィジカルを手に入れればいい。と言うのが甚田なりの結論であつた。

なのに、対峙した生徒達は何れも大したモノではなかつた。……中にはそれなりに動

ける奴もいたが、それだけ。

ゴジータとして生きる為に、幼い頃から自身を追い込んできた甚田には、今の雄英での学生生活は中々に退屈でつまらなかつた。

(まあ、ヒーローコスチュームの出来映えだけは良かったけど)

唯一感心したことと言えば、コスチュームを依頼したデザイン会社が思ってた以上に良い仕事をしてくれたこと。頑丈で破れにくい、シンプルなデザインだけど結構な作り込みに、甚田は雄英に来て初めて感激した。

だが、逆を言えばそれだけ。

(……………早く帰って修行して、いい加減超サイヤ人3へ至らないとな)

これならさっさと帰って自己鍛練に励んだ方が自身の為になる。この1ヶ月で既に雄英に対して期待を抱かなくなっていた甚田は、クラスメイト達の雑談をBGMに外の景色を眺めていた。



「後藤甚田、予想よりずっと厄介な生徒ですな」

職員会議に使われる広間。校長である根津を筆頭にそれぞれの科目を請け負っているヒーロー兼教師達は、セメントスが溢す一言に深く頷き、また困った様に唸っていた。「力、技術、共に学生の範疇には収まらず、その実力は既にトップヒーローに相当する」「しかも、イレイザーヘッドの報告ではまだまだ実力を隠しているみたいじゃないか。トンでもねえ逸材が出てきたもんだぜ」

「だが、当の本人はあまりそれをひけらかしたくないみたいだな。珍しい、あの年頃の子なら自分の力を大々的に披露して自己顕示欲を満たそうとするものだが……」
「超絶的なストイック。かっこいいけど、私としてはちよつと心配しちゃうわね」

議題が上がっているのは、教師の間で既に一番の問題児として扱われている後藤甚田について。

類い稀な身体能力と圧倒的技術力、自分達が困難な壁と想定して用意していた艱難辛苦を欠伸を噛み締めながら踏破するその光景は、あまりにも理不尽に過ぎた。

しかも担任である相澤曰く、加減してのそれである。後藤甚田は雄英の試練に手を抜いているのではない、教師達や学校の生徒達に無駄な心労を掛けない為の甚田なりの配慮なのだが……それを知る機会はもう少し先の話し。

他の教師達が頭を悩ませている一方、ミッドナイトは甚田の普段の学校生活の態度に違和感を抱いていた。

生活態度が悪いわけではない。学業に対しても真面目だし、学友達に対する態度も普通だ。適度に話し、適度に関わりを持つが……それだけ。

必要がなければ他人と関わろうとしない甚田の在り方は、ミッドナイトからみて壁のようなモノに見えた。

「先の戦闘訓練、彼は対戦相手の子に怪我を負わせることなく勝利した。そうだね？ 相澤君」

「はい校長。あの時の後藤甚田は対戦相手である二人を相手にモノの数秒で制圧してきました。同じ組の生徒と、必要最低限の会話しかせず」

深い溜め息と共に肯定する相澤。彼のその溜め息にその心労ぶりを何となく察したプレゼントマイクは慰める様に肩に手を置いた。

それを相澤自身は若干鬱陶しく思いながら。

「既に何度も伝達していますが……改めて報告させて頂きます。後藤甚田、奴の実力

は未だ未知数であり、その全容は底が知れませんが……」

「次の体育祭で、その全容が多少明らかになれば良いのだが……」

後藤甚田が優位に入学して1ヶ月。未だ個性とその実力は知られる事はなく、また理解もされていない。

もうじき始まる雄英体育祭、生徒達がしのぎを削ってアピールするその公の場にて、彼の実力が垣間見える事を期待しながら、教師達は今日も生徒達の為に超えるべき壁を用意する。

それが、後藤甚田にとって壁にも試練にも暇潰しにもならない退屈な時間ではない事だとしても、相澤は合理的主義に基づいて行動するしかなかった。



「それじゃあ、行つてきます」

「甚田兄ちゃん、頑張つてね〜!」

「テレビの前で応援してるから!」

子供達の声援を背中に受けながら、施設を後にする。

今日は雄英にとって、世間にとつても重大なイベントの一つである雄英体育祭、その開催日である。個性という超常の力を存分に活用する事を推奨されているそのイベントは、大人から子供まで幅広く注目されている。

そんな現代日本の一大イベントに甚田が出る。子供達にとつて歳の離れた兄のように慕う甚田が体育祭に出るのは望外の喜び、目を輝かせながら見送る子供達の視線を背に受けながら、若干疲れた様子の甚田は最寄りのバス停へ傘を差しながら足を進める。

「……雄英体育祭ねえ、あまり興味はねえんだけどな」

世間では専ら雄英体育祭の話題で持ちきりだが、相変わらず甚田は其処まで興味を抱いてはいなかった。程々に活躍して程々の順位に落ち着く、精々考えているのはその辺り。

優勝とか、世間やプロヒーローへのアピールとか、そんな面倒な事は考えていない。

喩え予選落ちになろうとも甚田が今回の場超サイヤ人でその気になる事はまずありえないのだか

ら。

「……………て言うか、この雨の中でも体育祭やるんだな。無駄にガッツあるな雄英」

一昨日から降り頻る雨、一部地域では土砂災害に注意と警告が出されている。甚田のいる地域は雄英から離れた場所で、バスの通路は丁度その警告が出された地域を横切る事になる。

注意と言つても簡略的なもの、あくまで起きる「かも」という話。それでもバスを通常運行するバス会社には素直に尊敬する甚田だった。

バスに揺られる事数十分。この分なら普通に間に合うなど安堵するのも束の間、突如車体が強く揺れた。

次の瞬間、バスの乗客達が目にしたのは、辺り一面呑み込む勢いで崩落していく土砂崩れと、塞き止められていた土石流。赤茶けた濁流を前に乗客達は己の死を予見した。



その日、岳山優は壮絶な雄英の体育祭における一般枠チケットの争奪戦に勝利し、願の大舞台の見学者として参加する事となった。

北海道から続く長旅、長時間の移動にもへこたれず、彼女は本日開催される雄英体育祭に強く想いを馳せていた。

本当なら、自分も雄英に入りたかった。けれど、学業面やら金銭面的な理由で断念せざるを得なかった彼女にとつて、雄英体育祭への見学は渡りに船だった。

有名な学校の大会、他にも地元とは違う都会への憧れを持つ岳山は、今日という日を心から楽しみにしていた。

………それなのに。

「………なんで?」

迫り来る土石流。土と大木、そして岩石が津波となつて押し寄せてくる。眼前に迫る死の濁流の前に、岳山は何故こんな事が起きるのか、素直に疑問だった。

(ああ、結局私つて、泥臭い田舎女だったな)

個性を使つて足掻こうとも、既に災害の規模は巨大化した自分すら呑み込んでしまうモノになり、抗えない絶望を前に岳山は自分でも驚く程に目の前の光景を受け入れていた。

結局、自分の人生はバツとしないモノだった。巨大化という派手な個性を使いこなせず、意味もなく死に絶える。ヒーローになるという野望も叶えられず、このまま無惨に埋もれて死ぬのだと、諦観しながら迫る土石流を前に目を閉じた時。

閃光が、全てを砕いた。土石流を、落ちてくる巨木の群れを、岩石の雨を、その悉くを黄金の炎を纏う誰かがその拳で破壊し尽くしていった。

周辺の集落にまで及ぼすであろう規模の災害を、たった一人で覆していく。

その光景に岳山の視線が釘付けになる。いや、視線が離れなかった。時間にして一秒も満たない刹那、黄金の炎を纏うその人は、一度だけ自分達に視線を向け……。

「——フツ」

不敵に笑った。その微笑みに岳山優——後のMt.レディの脳に決して色褪せる事のない一枚絵が刻まれる事になる。

そして、黄金の炎を纏う彼——後藤甚田は、災害の起きる広範囲の全てを一人で対処し、一人の犠牲者を出さずに乗り越える。土石流に呑み込まれ、死にかけた人も、近くの集落で土砂崩れ家ごと押し潰されそうになった人も、その全てを甚田は救い出して見せた。

プロにもなっていない前代未聞の偉業。しかし、出る杭は打たれるのも世の常であり。

全てを終えた甚田が次に見えたのは、活躍の場を潰されて憤りを隠そうとしないヒーロー達からの……いちゃもん染みた言い掛りと謎の説教だった。



「分かっているのか！ 君の行った行為は全て欺瞞！ 自己満足のそれではない！ そんな一時的な優越感の為に、周囲の全てを危険に晒したんだぞ！」

「……………はあ」

あれから既に数時間。警察もヒーローも駆け付け、編成された救助隊が市民を安堵させる炊き出し等を行っている最中、一部のヒーローに離れのテントに連れてこられた甚田は、横柄な態度を隠そうともしない巨漢とそのサイドキックにヒーローに謎の叱責を受けていた。

やれ、勝手な事をするな。やれ、ヒーローの到着を何故待てなかった。やれ、自分の行いがどれ程危険な行為なのか等、原稿用紙一枚分にも満たない薄っぺらい説教を延々と聞かされる嵌めになった甚田は、何もかもを放って帰りたくなかった。

(こりやあ、大会への参加は無理そうだなあ。チビ共、落ち込んでなきやいいけど)
 唾を飛ばす勢いで怒鳴り散らす目の前のヒーロー^{チャンピオン}など気にも留めず、甚田は大会に無断でブツチしてしまった事を気に掛けていた。

今頃は午前の部が終わり、レクリエーションが行われている事だろう。目の前のヒーローの説教もまだまだ終わりそうもないし、本格的に雄英体育祭をサボる事になりそうだ。

「全く、天下の雄英生がなんて様だ。この事は、お前の所の教師や校長に話を通しておくからな!!」

「はあ、どうぞご勝手に」

「なんだその態度は!?!」

(つーか、コイツいつまでここでくつつちゃべってんだよ。お前も、周囲の連中もヒーローなら他のヒーロー達と一緒に炊き出しの用意とか手伝えよ)

個性を許可なく使用した挙げ句全くの反省の色を見せない。そんな甚田を大柄のヒーローは気に食わずに声を荒げるが、甚田自身はただ冷ややかな視線を向けるしか

かった。

自らヒーローを名乗りながら、その責務を全うせずただ自分の活躍の場を奪った子供に見当違いの怒りをぶつけてくる。ヒーローとしては色々とお粗末な目の前のヒーローに甚田はただため息を吐くことしか出来なかつた。

そんな時、一人のヒーローがテントへと入ってきた。恐らくは横柄な態度のヒーローのサイドキックの一人なのだろう。彼の耳元で何かを囁きながら、一枚の書類を手渡すとそそくさとその場から立ち去っていく。

すると、書類を受け取り目を通すと、そのヒーローはニヤリと底意地の悪い笑みを浮かべた。

「成る程、後藤甚田。君は施設の出だったか。いやはや申し訳ない。マトモな環境で育った事のない君が、マトモな倫理観を持ち合わせていないのは道理だったな」

「しれつと人の個人情報をも本人の前で暴露する。ヒーローというより最早ヤクザの類いでは？ 甚田は首を傾げた。

「しかも創設者は姫野葵か。ふん、大人しく宇宙開発に勤めれば良いものを、偽善者め」

「あ？」

「ふん、なんだ怒ったのか？ 貴様の様なイカれたガキがいる施設なんだ。マトモな運

営をしているとは思えん、いや、もしかしたら……ヴィランを養成している可能性すらあるんじゃないのか？」

俯き、言葉が出せない。そんな甚田の反応を見て、漸くそのヒーローは満足そうに笑みを浮かべた。周囲のサイドキックもニヤニヤと嘲笑の笑みを浮かべ、ヒソヒソと嘲りの言葉を垂れ流す。

そんな彼等に……。

「アンタらさ」

「あ？」

「もう少し、言葉を選んだ方がいいんじゃないか？ —— 今際の際だぞ」

甚田は初めて、殺意というモノを解放した。

無意識に、無自覚に放たれる殺意は周囲のサイドキック達を強制的に黙らせ、昏倒させていく。中には甚田の圧に耐えきれず、昏倒した者の中には失禁している者も多かった。

だが、そんな有象無象など一瞥すらせずに、甚田は大柄なヒーローへと詰め寄る。

「俺がヴィランか、面白い話だ。なら、ヒーローであるアンタは俺を倒さないといけないんじゃないのか？」

「あ、ぐ………」

既に大柄のヒーロー………だった者に、反発するほどの余力はない。押し潰さんばかりのプレッシャーに言葉を失い、滲み出る殺意に意識すら奪われそうになる。

ヒーローならヴィランを相手に勇敢に戦えよ。そう嘲笑いながら、甚田が力の一部を解放しようとするも………そうなる前よりも早く、ヒーローだった男の意識は落ちる。

泡を吹き、股座から湿らせていくその姿につまらないと吐き捨てて、甚田はテントを後にする。

外に出ると、炊き出しや簡易な避難所を建てているヒーロー達がいる。皆、大変そうにしているが………何処か清々しい顔をしている。懸命に働いているヒーローに何故か視線が向いてしまった甚田は、急ぎ雄英に向かおうとした時。

「待ってくれ!!」

ふと、一人のヒーローに呼び止められた。筋骨粒々で、如何にも駆け出しなヒーロー。武骨なそのヒーローに呼び止められた甚田は、今度は何だと鬱陶しく思いながら振り返る。

また変なやつかみが飛んでくるのか？ ゲンナリしながらそれでも足を止めてしま
う甚田に………。

「済まない、そしてありがとう！ 君のお陰で多くの人達が救われた!!」

そのヒーローはそう言いながら、甚田に深々と頭を下げてきた。先程のヒーロー擬き

の輩とは全く違う対応に、甚田は目を丸くさせ……。

「——あー、まあ、怪我人とか出なくてなによりですわ」

それだけ答えて、その場から立ち去る。音もなく、形すら残さず消えた甚田に、若きヒーロー……デステゴロは、自分の不甲斐なさを痛感しながら今一度言葉にする。

「——本当にありがとう。お前がプロのヒーローになる日を、楽しみにしているよ」
この日、その集落の危機的状況はたった一人の少年の手によって覆る事になる。事態が事態であるが故に、決して公にされる事はない事例。

この日、一人の少年が英雄の体育祭に不参加する事になるが、その裏では一部のヒーロー及びヒーロー志望者は、今日という日が決して忘れられない一日となり。

「——後藤、お前は……ヒーローになる気があるのか？」
「あ？ ないけど？」

同時に、英雄と甚田の間に大きな溝が出来上がった。

記録73

ヒーローに興味はない。そう断じる甚田に相澤は何も言えなかった。

雄英は未来のヒーローを育成する最先端の教育現場だ。過去にオールマイトやエンデヴァーも在籍していた日本屈指のヒーロー養成学校。

この学舎に属する生徒達は全員ヒーローになる為に日々己を磨き、切磋琢磨している。

だが、目の前の後藤甚田は違う。ヒーローになる為に雄英に通っているのではなく、ただ恩師にそう約束したからというだけ。思い入れなどある訳がなく、その胸中に抱くのは諦観だけ。

そう、甚田は冷めていた。ヒーローを目指す学舎に、未来のヒーロー育成施設とも呼べる雄英を、後藤甚田はいつも冷めた目で見ていた。

何故なら、雄英が用意する壁も試験も試験も、その悉くが甚田にとって見戯にすらならない程に退屈……いや、糧にならないモノだからだ。

相澤も薄々気付いてはいた。常日頃から無意識に力を抑えていながら、更に強く意識して実力を出さないようにしている。その理由は先の身体測定の時と同様、他のクラスメイトや教師達に気を遣っているが故にである。

ゴジータとして生きていく為にゴジータとして強くなるべく、日常的に自身を死地へ追い込む甚田にとって、雄英での日々はあまりにも緩慢に過ぎた。

だから、せめて学生らしく生活する為に目立つ事なく生活していこう。それが、半年にも満たない雄英での高校生活で、既に見切りを付けた甚田の結論である。



「はい、それじゃあヒーロー名が決まった者から順次発表してつてね。ヒーロー名は一生付いて回るモノだから、慎重に考えなさいよー」

本日のヒーロー学はヒーロー名。実際のヒーロー活動をやる上で世間に知られる自身のもう一つの名前、面白半分が付けた日には割りとは本気で後悔する事間違いなしな、ヒーローを志望する者にとって必須内容。

幼い頃から自分のヒーロー像を確立していた者は迷う事なく書き連ね、ドンドン発表していく。途中で大喜利みたいなノリになり掛けた時もあったが、その時は本日の担当である18禁ヒーローことミッドナイトの冷静なツツコミのお陰で軌道修正が出来た。

「はい、それじゃあ次は……」

「俺です」

そろそろ発表する人数も少なくなり、各人のヒーロー名の御披露目は過ぎていく。そんな中次に挙手する甚田に、ミッドナイトの目が一瞬細くなる。

（後藤甚田君。ヒーローになるのに興味はないと断言した問題児、逆張りや捻くれた性格という訳ではなく、純粋に興味がない。相澤君はそう言ってたけど、何でそんな子が雄英に？）

先日、甚田は雄英が開催する体育祭を災害に巻き込まれてしまい辞退してしまったと表向きにはされている。その為、体育祭を注目している多くのプロヒーローからの職場体験の誘いが彼だけには来ず、現在甚田は宙ぶらりんの状態になっている。

最も、活躍できなかった生徒達の救済処置を兼ねて雄英側は有望なヒーローには常時

声を掛け、生徒達本人にも可能な限り希望を叶えてあげようとしているが……甚田からの希望要望は一切なく、ただ流されるままを由としており、その姿勢が甚田のヒーローに対する無頓着をより説得力を持たせてしまっている。

ヒーローに興味はないのに、雄英のヒーロー科に属している。矛盾に矛盾を重ねた甚田の在り方は相澤だけでなく他の教師兼ヒーロー達の頭を抱えさせた。

（本人曰く、約束したから、だそうだけど……それだけで雄英に入学してくるとか、律儀といふかなんというか……）

あまり個人の気持ちに無遠慮に踏み込むのはミッドナイトとしても気が引けるが、一度この問題生徒とは腹を割って話すべきなのではないだろうか。そう思いながら教壇に立つ甚田を見守ると……。

「ヒーロー名『ゴジータ』。これが、俺のもう一つの名前だ」

ゴジータ。白いボードに書かれたその名称は、一見すれば自分の名前を振っただけに見える。シンプルながら力強いネーミングにクラスメイト達もミッドナイトも良いんじゃないかと好評だった。

けれど……自らをゴジータと名乗る甚田の表情は強張っていた。緊張、或いは決意、覚悟とも取れる強い想いでその胸中は揺れに揺れていた。

（ああ、言っちゃった。とうとう言っちゃった。もう、後戻りは出来ない）

これで、もう逃げ出すことも言い訳にする事も出来ない。自らゴジータと名乗ってしまつた後藤甚田は、注視してくるミッドナイトに気付く事なく、自らを更に追い詰めていく。

(強くならなきゃ。この世界の誰よりも、いつか現れる宇宙の皇帝達を圧倒できる位に、もつと……もつと強く)

見ている視点が違う。彼等と甚田の違いとそれによるズレは、詰まる所そういうこと。しかし、誰もその差異に気付く事はなく、甚田自身も口にする事はなかった。



それから少しして、雄英の年間の恒例行事である職場体験に参加した甚田——改めゴジータは、インゲニウムが率いるヒーローチーム「IDATEN」の厄介になる事となった。

人材を適材適所に配置し、総合力で人々の安寧を守る。その理念の下に集まる彼等の
実力は、確かに理に叶っているのだろう。
しかし……。

「……この程度かよプロヒーロー」

「き、君は……」

「迷った子供の手を引いてやる。その理念理想は大変結構だが、迷った子供っていうのは一人だけじゃないだろ。ましてや、この状況なら尚更にな」

その日、とあるショッピングモールにて起きた大規模な火災が発生。火の手が早く、瞬く間に子供連れの客達を呑み込んでしまった。

助けたくとも火の巡りが早くて助けにいけない。菌痒い状況にインゲニウムが遂に強行突破を仕掛けようとした時。

突然、炎が消えた。あれだけ燃え広がっていた炎が突如として何かに掻き消されてしまった。

状況の変化に頭が付いてこない。が、それよりも人命救助が最優先と、インゲニウムは自身の個性であるエンジンをフルスロットルで加速し、救助者達の支援に回る。

ショッピングモールを駆け巡る際、彼は見た。気絶している親子を火傷一つ負わせないで助け出しているゴジータの姿を。

職場体験の最中である彼は、事務所にて待機を命じていた。その彼が一人で此処にいる。その背中を見てヒーローとして経験を重ねてきたインゲニウムは一つの回答を導き出した。

その後、事務所にて。

「……ゴジータ、先のショッピングモールの火災の時、何処で何をしていた」

「火災の消化活動をしてました」

彼——甚田は、さも当然のように答えた。ヒーローとしての資格もなく、個性の使用すら許されていない学生の身分でありながら、自らの意思だけで事をやり遂げる。

そんな、現在の個性社会のルールから真つ向から喧嘩を売る所業のゴジータに、当然サイドキック達は怒りの声を上げた。

ルールを守らない輩はヴィランと同じ。そう声高にしているサイドキック達を宥めながら、インゲニウムは再度問う。

「ゴジータ……いや、甚田。どうしてそう一人で成し遂げようとする。我々もただ手をご招いていた訳じゃない。状況に対処できるヒーローと連携し、事に挑むつもりだった。君の個性がどれだけ凄いかは知らないけど、それでも一人で出来ることには限りがある」

「君に万が一の事があれば、君の後見人だって悲しむだろ。何故、もつと自分を大事にし

ない」

目の前のヒーロー、インゲニウムは甚田の行いに警告をしている。それは先の己の欲に忠実なエセヒーローとは違う。真に甚田を氣遣つての事だった。

しかし。

「——アンタさ、自分の理念を忘れたのか？」

「なんだつて？」

「アンタが理想としているヒーロー像は、迷っている子供の手を引いてやる事だろ？」

あの燃え盛る炎の中、親を探して泣いている子は何人もいたんだがな」

「ッ!？」

ゴジータとインゲニウム、両者の間にある差異は呆れる程に広く、深かった。

ゴジータの言葉に愕然となるインゲニウム、項垂れる彼を一瞥すると。

「どうやら、此処で俺が得られるモノは何も無いみたいだな。じゃあなプロヒーロー、仕事の邪魔をして悪かったよ」

それだけを言い残し、ゴジータはインゲニウムのヒーロー事務所を後にし、残った日数はただ自己研鑽の鍛練に充てていた。

しかし、当然雄英側はそんな勝手な事をする甚田を許す事は出来ず、甚田は後日再び担任である相澤に放課後呼び出しを受けていた。

「——後藤、率直に訊ねたい。お前は一体何を目指しているんだ？」

誰もいない職員室、夕焼けの明かりが互いの半身に影を落としている中、相澤はこれ迄の生徒とはどれも当てはまらない甚田にとうとう音を上げていた。

そう、分らないのだ。ヒーロー育成校である雄英に入学しておきながら、ヒーローを目指してはおらず、なのに事故や災害には率先して駆け付けている。

資格の有無など関係なく、最悪ヴィラン認定されても可笑しくはない所業。現時点では雄英やインゲニウムの事務所が上手く誤魔化してくれているから表沙汰にはなっていないが、それでもこんなことが続くのであれば底いきれない。

「お前は何を目指している？ ……いや、何になりたくて此処にいる？」

一体後藤甚田は何を指しているのか、目の前の生徒の真意を見極めるべく、相澤は甚田に率直な疑問を叩き付けた。

しかし……………。

「決まっています。ゴジータになる為です」

「………」

その返しに、言葉を詰まらせた。

「先生は、この地球の外……………宇宙にはどれだけの脅威が存在しているかお分かりですか？」

「は？ え？ う、宇宙？」

「宇宙にはフリーザ軍を筆頭に数多くの脅威が存在している……かもしれない。俺は、そんな奴等を倒す為に日々修行の毎日を続けています」

「……………」

「先日の火災現場への介入もそう、ゴジータである俺が、出来る筈の事をやらなければ、それはゴジータの顔に泥を塗る事になる。俺は、俺がやらなきゃいけないことをやり遂げているだけなんですよ」

「待て、待て後藤、お前は……………」

「相澤先生、もし明日俺よりも強い奴が地球に侵略しに来たら、どう対処します？ 大人しく降伏しますか？ それとも戦いますか？ まあ、先生はヒーローだから後者を選びそうですか……あまりお勧めはしません。一瞬で殺されて終わりです」

矢継ぎ早に語る甚田の言葉に、相澤は付いて行けなかった。彼の口にする言葉の意味を半分も理解出来ない相澤は、語り続ける甚田を不気味に思いながらも聞き続けるしかなかった。

「雄英の授業では、強くなれる処か鈍ってしまう。だから自分で鍛えるしかないんです。俺がゴジータとして完成する為にも、どうかご理解の程を宜しくお願いします」

そうして甚田が言葉を紡ぎ終えると、これ迄の話を踏まえて相澤に反応を見る。しか

し、言葉の半分の意味も理解で来ていない相澤は、当然その期待に答えられる筈もなく……。

「お前は……何を言っているんだ？」

ただ、そうとしか言えなかった。

愕然と、心底理解できないと、若干怯えてすらいる担任の表情に、甚田も我に返る。

そして……。

「——そう、ですよね」

「——っ」

疲れたように笑う甚田に相澤は自らのやらかしを自覚した。

「すみません、意味不明な事を口走って。今のはただの冗談ですから、気にしないで下さい」

その顔は、絶望した人間のソレ。分かっていた筈の答えを改めて突き付けられた罪人の顔だった。

「俺は、どうやら自分で思っていた以上に問題児だった様です。今後はご迷惑をお掛けしないよう気を付けますので……それでは」

「ま、待て後藤……！」

頭を下げ、職員室を後にする。遠ざかる甚田を呼び止めようとするが、今の相澤に彼

を呼び止められる言葉は持ちえない。

理解できないものを、理解できないままにしておくのは、非合理的の極み。そんなこと、ずっと前から分かっていた筈なのに……………。

「何を、やっているんだ俺は」

自分の愚かしさを呪いながら、相澤はただ頭を抱えることしか出来なかった。



「そうだ。分かっていた事だ。俺のコレは誰にも理解はされない」

雄英を出て、帰路に着く甚田。その胸に抱くのはこれ迄一度も忘れたことの無い決意と覚悟。

自分の情景に理解はされない。それは当たり前な事であり、当然の帰結。

自分の悩みは共感されない。それも当たり前であり、当然の帰結。

自分の恐怖は理解されない。そんなのはずっとそうで、これ迄もこれからも、きつと理解される事はない。

理解など求めるな。共感など求めるな。元よりこれは自分だけの問題。自分にしか解決できない問題なのだ。

自分はゴジータだ。最強で、最高で、前回の自分から続く己だけの情景。決して傷を付けてはならず、汚してはならない。??????

「強くならなきや。俺が、俺がやらなきやいけないんだ」

進むしかない。もう、自分にはそれしか残されていない。最強無敵の戦士となる為に、甚田はより己を追い詰めていく。

それが例え、後藤甚田という人格を磨耗させる事になるのだとしても。

その道が、大切な恩人を泣かせる事になるのだとしても。

後藤甚田は、もう……………

止まらない。

記録74

自身の情景は理解されない。そんな当たり前の事を再認識した甚田は、今日も今日とて鍛練に勤しむ。

自らを死地に追いやり、実際に死にかけ、そして生還する。学校から帰ってきた甚田のルーティンは相も変わらず続いている。

だが、その生活にも変化が生じた。日頃から血だらけになり、手足をへし折りながら鍛練に没頭していた甚田だが、遂にこの日、保護者であり後見人である姫野葵に知られてしまった。

「甚田？ ……何を、しているの？」

「——あ？ ああ、なんだ先生か。今ちよつと手が離せないんだ。悪いが話は後にしてくれ」

「手が離せないって……貴方、その手、折れて……」

「ああこれ？ 問題ないよ。この程度の痛みなんてもう慣れてるし、直に治る。この血

だつて既に止まっているから、放っておけば勝手に治るよ」

施設の地下にある甚田専用のトレーニングルーム、それは姫野葵が開発した重力の制御装置。今は休憩中なのか稼働は停止しており、部屋を中心に勝手に手当てしている甚田は、絶句している葵を気に掛けながら、努めて穏やかな口調で話し続けた。

しかし。

「だから、俺の事は心配しなくていいから。先生は自分の仕事をしてきなよ。もうすぐチビ共も起きる頃だろ？ 後少ししたら俺も手伝うから、だから——」

「バカな事言わないでよ!!」

それを当然彼女が許す筈もなかった。その眼から大粒の涙を流しながら駆け寄ってくる姫野を、甚田はバツが悪そうに俯く。

「いつからなの、いつから、こんなになるまで……」

近付いたらより明らかになる甚田の身体に、姫野は息を呑んだ。全身の至る所にある傷、それは甚田が最初に見せた自傷行為による傷跡も幾つかあり、特に胸元回りが酷かった。

中には致命傷になつても可笑しくない程に深い傷もあつた。医療関係の知識が乏しい姫野だが、そんな彼女でも即刻病院送りだと確信出来る程度には、甚田の身体は酷い

有り様になっていた。

「なんで？」

「うん？」

「なんで、此処までするの？　なんで、甚田はここまでやるの？　甚田は一体……何がしたいの？」

「ゴジータになる為」

「——は？」

その台詞に、思考が止まる。

「先生、俺はね、ゴジータになりたいんだ。ならなきゃいけないんだ。来るかもしれない脅威を打ち倒すために、最強の存在で在り続けるように、俺は強くならなきゃいけない」

「甚………田？」

「まあ、分からないよね。理解なんて出来るわけがない。でも、別にいいんだ。それでも、俺のやるべき事は変わらない」

量子物理学の博士号を持ち、若くして天才と言われてきた姫野葵。異形系の個性を持つが故に家族から迫害され、それでも優しい人として育った彼女。

そんな彼女でも、目の前の少年の事は理解できなかった。彼の言葉が、彼の存在が、彼の抱く………情景が。

「大丈夫だよ先生、俺は大丈夫。だから……心配しないでくれ」

既に、甚田の中での線引きは済ませてある。「自分とそれ以外」それが最も分かりやすく、また守りやすい構図。

理解は得られない。得られたいとも思わない。それでも自分のやるべき事を見付けた甚田は、平然とした面持ちで立ち上がり、部屋を後にする。

すれ違う間際、葵は見た。澱み、濁っている彼の眼を。それはまるで……。

「甚田、待つ……」

振り返り、手を伸ばそうとするも届かない。何故なら、自分は一度彼から逃げた。理解できないと恐怖し、理解できないからと彼に関する思考を削いだ。

それは、他ならぬ嘗て自分を虐げてきた家族達。異形という個性を持つ自分にしてきた者達と、同じことをしている。そう自覚してしまった姫野には、彼の手を掴むところは出来なかった。

「ごめんなさい。ごめんなさい、ごめんなさい……」

座り込み、顔を両手で覆う。溢れ、止まることなく落ちて流れている涙。どれだけ涙を流し、謝罪した所で過去の自分の所業は変わらない。

それでも、姫野は謝り続けた。例えその言葉がもう後藤甚田に届かなくても、無意味な事だとしても、彼女に出来ることはもう、それしか無いのだから……。



ああ、また泣かせた。泣かせてしまった。

その日の夜、久し振りの睡眠を取るために自室のベッドで横になる甚田は、今日の出来事を振り返り一人反省をする。自分を拾い、育て、我が儘を聞いてくれた恩師。姫野葵をまたもや自分は泣かせてしまっている。

ゴジータを指し、ゴジータとして生きていく自分が、誰かを泣かせるのはあつてはならないことだ。彼は何時だって危機や不安を覆す存在で、誰かから心配されるのは決して有り得ない。

まだまだ自分は其処に至れていない。分かっていただけど改めて突き付けられる事実
に、甚田は自身の不甲斐なさに齒痒く思った。

もつと力を、もつと強さを。限界なんてモノは言い訳で、それを乗り越えて初めて自
分はこの世界に立つことを許されている。

やはり、もつと自分を追い詰めなければならぬ。よりゴジータとして振る舞わな
ければいけない。そうなると必然的に邪魔なモノがある。

そう、自分だ。ゴジータとして完成するには後藤甚田という人格は致命的な程に噛み
合わない。当然だ。自分はゴジータに憧れる偽物であつて、本物のゴジータには程遠
い。

だから、せめて強さだけでも本物に追い付こうと、甚田は我武者羅に己を鍛えた。よ
り強く、より強く、より強く。誰よりも、何よりも……ゴジータの様に。

気が付けば、季節は過ぎていた。林間合宿も、インターンも、ヒーローを目指す雄英
生にとって大事なイベントも、甚田にとっては取るに足らない雑事に過ぎない。

誰かが何かを言っていた気がするが……知らない。誰かが誰かを気に掛けるような
声が聞こえた気がするが……聞こえない。

期末テストで、何やら教師達が言っていた気がするが……聞こえない。彼等の声で
は、自分の耳には届かない。

聴て、寝る間も惜しんで鍛練を続け、身体の至る所に傷や包帯が出来ているが………
関係ない。今の自分には誰かの声に耳を傾ける余裕も、未来に眼を向ける暇もない。
ただ強く。只管に強く。限界を超え続け、果てしない頂きに少しでも近付けるため
に、後藤甚田は今日も自らを追い詰め続けた。
そして………。



——夢を見ている。そうハッキリと認識出来る程の明晰夢、どうやら自分は1
500倍の重力での鍛練を終えた後、気絶してしまったらしい。

相変わらず情けない自分に嫌気が指す。これではいつまで経っても本物のゴジータ
に近付ける事は叶わないだろう。

この明晰夢もきつとそんな自分の精神状態から来ているモノなのだろう。でなければ、目の前で佇んでいる存在の説明がつかない。

『ゴジータ。最強無敵で、あのベジットと比肩する合体戦士。見間違う筈がない、見誤る事などあるわけがない。』

自分の憧れそのものが、明確な形となつて自分の前に佇んでいる。けれど、その表情は何処か影が掛かつており、その眉間には深い皺を寄せている。

まるで頭痛がするという風に額に手を添えるゴジータに、俺は彼が何を言いたいのか何となく理解した。

『は、はは………やっぱりダメか。こんなに頑張つても、俺じゃあアンタの影すら踏めな
いって事か』

目の前の現影、自分の中にあるゴジータはきつとこう言いたいのだ。『お前ごときが
ゴジータを名乗るのは烏滸がましい』と。

どれだけ頑張つても超サイヤ人2の枠組みから抜け出せず、未だ超サイヤ人3に至れ
ていない。ゴジータを名乗るにはあまりにも弱すぎて、あまりにも情けない。

失望、落胆、ため息を吐きながら頭を抱えるゴジータに、俺はそう解釈をせずにはい
られなかった。

……ああ、分かっていた。そんな事は分かっていた。
 けど。

『分かってたんだよ、俺のやってることはただの自己満足だって、けど仕方ないじゃないか！俺は、ゴジータになっちまったんだから!!』

『知ってたんだよ、俺がゴジータになれないことは!! そんな事、俺が一番理解している!!』

どれだけ自らを追い詰め、鍛えようと、自分がゴジータになることは有り得ない。何故なら自分は悟空でもなければベジータでもない、あの作品が好きで、ゴジータというキャラクターに憧れたただの人間でしか無いのだ。

けど、だからこそ自分が許せない。弱いゴジータでいる自分が、今後現れるかもしれない脅威に怯えている事が。

情けない。こんな自分が心底嫌になる。痩せ細った自分の手足を見て、
 ??????????の眼から涙
 が溢れた。

『でも、それでもならなくちや行けないんだよ。俺が、俺がやらなきゃ………』

『誰が、皆を守るんだよ』

ポツリと溢れた眩き、その台詞は目の前の情景ゴジータにも届くが、彼がその言葉に答える事は無い。

残念そうに首を横に振ると、彼は霧の様に消えていった。

ああ、やはり自分は失望されたのだと、消え行く憧れの存在に歯を噛み締める。

翌日、いつもと変わらぬ朝を迎えた甚田はこの日以降、超サイヤ人になれる事はな
かった。

記録75

「おはよー、あれ？ 後藤の奴まだ来てねえの？ もうすぐHRの時間じゃん」

「今日もこないのかな。もう一週間になるよ」

「これ噂だけど、甚田の奴家にも帰っていないらしいぜ」

いつもと変わらない日常の日々。雄英のヒーロー科に無事に合格した生徒達は、今日も学校側から課せられる艱難辛苦を乗り越えようと息巻いていた。

しかし、ここ最近そんな彼等の日常に一つの穴が出来上がる。本来なら満席で埋まる筈の席、その中の一つにポツかりと空きが出来てしまっていた。

後藤甚田。自分達と同じ雄英ヒーロー科に在籍するクラスメイト、彼の一週間に及ぶ欠席は生徒達に言い知れぬ不安感を与えていた。

「ねえ、誰か先生から何か聞いてない？」

「さあ、俺は何も聞いてないけど……」

「アイツ、相澤先生だけじゃなく、色んな先生にも態度悪かったからなあ……まさか」

「ちよ、止めてよ。仮にもクラスメイトだよ！」

「だってよ、アイツスゲー個性持つてるみたいだし、実際それで期末試験では三人の先生相手にも圧倒してたじゃん。天狗になつても仕方がねえっつーか」

「だから、もう雄英には来なくていいって？」

クラスメイトの欠席、それも一週間も続いているとあつては、流石に生徒達の間にも憶測が飛び交った。他者寄せ付けない程の圧倒する才能とプロヒーローである教師達すら一蹴するセンス……彼の実力を羨むのに然程時間は掛からなかった。

圧倒的強者、それ故に問題児とされてきた後藤。そんな彼が素行の悪さを口実にとうとう雄英側から手がつけられないと退学処分を言い渡したのではないか？ とある一人の生徒からそんな言葉が溢れ落ちた時。

「はっ、それが本当なら雄英はトコトン見る眼が無いなあ」

「善院……おまえ」

「ドイツもこいつも憶測予想で変にビビってからに、これが天下の雄英生とは、呆れて言葉もないわ」

「け、けどお前だつてアイツには何度も辛酸を舐めさせられてるじゃないか！ この前の戦闘訓練だつて一瞬でノされてただろ！」

「俺の無様さと後藤君への陰口に何の因果があるかいボケ」

後藤に対して好き勝手言う生徒達に、一人の男子生徒が切り返した。つまりんことばかり言つてないで、少しでもヒーローになれるように努力せんかい。正論の刃でキリつける善人なる男子生だが、彼等がそれで収まる筈もなかった。

このままではクラスの空気が悪くなる一方だ。それを危惧してか、別の男子生徒が話に割つて入つてきた。

「そこまでにしよう！ 互いに言いたいことは数あれど、もうじき先生も到着する。気持ちを切り替え、授業に望むとしよう」

「え、炎獄……………」

「……………ま、クラス委員長に言われたら従うしかないな。そんなじゃ」

凛々しい顔付きの男子生徒、獅子の鬣の様な髪を靡かせながら場を収めた少年は、普段は気の良い少年の元へ歩み寄る。

「……………ゴメンな杏君、余計な面倒をかけてしもたね」

「気にするな！ とは言え、確かに今のはお前らしくなかつたな。そこまでアイツの事が気になるのか？」

クラスの委員長の言葉に少年は頷く。彼にとつて後藤甚田とは強さの象徴、それ故に傲慢な所が目につく所があるが、それは別に他者を見下している事ではない。

「……………後藤くんは、真面目なだけや。純粹に強くなることを望んでいる。それを理解

出来ないからって陰口叩くのは、筋違いやろ」

誰よりも強くあろうとし、必死になつてゐる。彼とはあまり会話をしたことがないか、同じく強くなる事に固執している少年にとつて、後藤甚田の存在は眩しかった。

「うむ、お前の言いたい気持ちは分かった。ならばこの後先生に直談判しに行くとしようか！」

「直談判つて、何を訴えるつもりなん？」

「決まつてゐる。後藤の自宅への突撃許可だ!!」

ヒーロー科一年A組のクラス委員長である彼は、彼の持つ個性に負けず劣らずに良い意味で暑苦しい男であつた。

が、その案は彼等の訴え虚しく却下される事になる。何故なら、他ならぬ担任である相澤と相方の山田が、彼の実家である星の都へ赴いてゐるのだから……。



「後藤甚田、彼が雄英に来なくなってもう一週間か」

「根津校長、本当にアイツはこのまま雄英を辞めるつもりなんスカね」

雄英の教師兼プロヒーローであるプレゼントマイク、本名山田ひざしは不安を隠しきれない面持ちで車を運転し、後部座席に座る雄英校長に訊ねた。

彼が雄英に来なくなつて一週間、既に彼のクラスでは実家である施設にも帰っていない事も知れ渡っており、彼の行方は依然として分からないままとっている。

このままでは行けないと、生徒にも教師にも自由であることを良しとする雄英もとうとう動かざるを得なかった。彼の安否を確認するためにも、先ずは彼の家である施設【星の都】に向かうことになった。

「——先日、彼から一通の手紙が渡されたよ」

「手紙？」

「直接渡された訳じゃなく、扉に挟める形でね。内容は………退学届けだったさ」

「ツ!？」

一方的に校長室に届けられた退学届け。落ち込んだ様子で語る根津校長に、これ迄無言を貫いていた助手席に座る相澤の肩が揺れた。

「た、退学って……………」

「どうやら彼、個性が使えなくなつたみたいだね。書かれていたモノもごく僅かだったよ。『自分はゴジータにはなれない。だから辞める』と」

「ンだよそれ、そんなの……………訳わかんねえよ」

「そうだね、分からないね。でも、そんな僕達では推し量れないものに彼は苦しんでいた」

「――」

退学届に掛かれていた僅かな文言、それに書かれていた内容は、山田も根津も理解が出来なかつた。しかし、その理解出来ない部分こそ甚田が苦しんでいた要因そのもの、其処に気付かず、見抜けなかつた自分達こそが彼を退学まで追い詰めてしまった。

相澤の顔に影が掛かる。あの時誰よりも早く気づき、諭すべきだったのが自分の筈なのに、理解が出来ないと突き放してしまった。その事を今更悔やんでも遅い。それでも相澤は思わずにはいられなかつた。

「あの時、俺は、少しでもいいから奴の言葉に耳を傾けるべきだった」

「け、けどよ、その……フリーザ軍だつて？ 何だよ宇宙からの侵略者とか、そんなの理解しろつて言う方が無茶振りだろ」

「……………」

山田は相澤から聞かされた甚田の言葉を妄言の類いと思つた。山田だけじゃなく、他の多くの教師がそう思い、呆れている。

山田も甚田の事は憂いてはいるが、やはり彼の言葉に信憑性は薄いと断言せざるを得なかつた。現在の人類に個性という超常が発現してから百年余り、人類の宇宙進出への夢は個性という異能と其処から生まれる新たな問題によつて、未だ先送りになつてゐる。

そんな現状の地球人類に、突然宇宙からの侵略者とか言われても実感が湧かないのは当たり前で、共感できないのは当然の事であつた。

「けど、一つだけ彼の言葉に無視できないものがある。それは、彼以上の脅威が現れた時、果たして我々に打つ手はあるのか、という話さ」

「—————」

根津校長の言葉に、二人の教師は押し黙る。

後藤甚田、既に彼の實力の高さは雄英の教師生徒問わず知れ渡つており、その圧倒的強さに誰もがトップヒーローの仲間入りを疑わなかつた。

しかも、それが甚田にとって加減した実力であり、半分どころか一割にも満たないごく小規模なモノ。本気になったら学校が耐えられない、教師達や生徒達に余波だけで怪我を負わせかねない。

そんな、恐竜がアリを踏み潰さない様な繊細な力加減。そんな彼でも敵わない脅威が敵意と悪意を持つて現れた時、果たして自分達が敵うのだろうか。

「勿論、それだけが彼の抱える苦悩の全てではない。けれど、そういう恐怖を常日頃から抱えていたのは間違いない」

普段の知る甚田からは想像出来ない恐怖というワード、もし根津校長の言うことが真実なら、彼はあの飄々とした態度の裏で並々ならぬ想いを抱いていた事になる。

彼が雄英に入学してから半年足らず。未だに後藤甚田の人物像は明らかになつていないが、今回の訪問でその全容が少しでも明らかになれば、彼への理解も深まるかもしれない。

警察や、他のヒーローに頼るのはその後でも良い。今の自分達に必要なのは、生徒に對して理解を深める事。

(待つていろ後藤、何も出来ない俺だが、生徒の一人の悩みくらい一緒に悩んでやる)
自分の非力を棚上げするのは止めて、相澤も決意を固める。

そして、彼等は遂に辿り着く。後藤甚田の原典、地下に眠る強迫観念で凝り固まった

……歪なオリジンの在り方に。



「——なんだ、これは」

星の都。親を失くし、孤児となった子供達が最低限の生活を送れるために姫野葵が設立した児童養護施設。

施設到着後、死んだ目で相澤達を迎え入れた姫野は甚田が利用していた地下へと案内し、相澤達はその光景に絶句した。

血。広がった地下空間にこびついた無数の血の跡、空間の至る所の箇所は陥没し、ひび割れているが、彼等が目についたのは生々しく、怖気がする程の血の跡だった。

「此処で、あの子は自分を鍛えていました。毎日毎日、学校がある日もそうじゃない日も、あの子は我武者羅に己を苛め続けました」

「鍛えるって……………」

「苛めとかシゴキとかのレベルじゃねえ、拷問の跡だろ、これ……………」

「——」

目の前の凄惨極まる光景に相澤も山田も言葉がなかった。相澤の肩に居座る根津校長すら、普段は見せない沈痛な面持ちで歯を食い縛っている。

「腕が折れようと、足が折れようと、あの子は立ち上がりました。自分はゴジータだから、心配は要らないと、不敵な笑みで仮面を被り続けました」

「ッ、アンタは！」

「私には!!」

「ッ!?!」

「——」あの子の気持ちを押し量れなかった。どれだけ傷付いても立ち上がり、どれ程血を流しても笑い続ける。そんなあの子を見て……………私は、気持ち悪いと思ってしまった」

姫野葵は、特異な才能の持ち主だった。1500倍の重力室という、物理法則を度外視した発明を生み出し、施設の運営の為にその技術を必要な分だけ小分けに売り出し、経営していた。

子供達の面倒を見て、慈しみ、自分なりに愛情を持って接してきた。

しかし、後藤甚田の歪んだ強迫観念に対して、彼女の想いは善性に過ぎた。

「私じゃ、あの子の仮面は剥がせない。だから、私はあの子を雄英に行かせました。私じゃなく、ヒーローを志す生徒達なら、きっとあの子の何かを変えてくれると……」

「――」

「お願いです。どうか、どうかあの子を救ってください。他力本願なのは分かっています。情けないのも分かっています。私には頭を下げるこゝししか出来ません。ですから、どうかお願いします」

「あの子を、後藤甚田を救って下さい。そうでないとあの子は……あの子でなくなってしまう」

縋る様に……いや、実際縋っていたのだろう。その目から大粒の涙を流し、甚田を憂う彼女の想いは相澤達の胸に深く刻み付けた。

しかし悲しいかな。縋り付く彼女に三人は何も反応出来なかつた。想像を遙かに越えた甚田の歪み、その根っこを目の当たりにした彼等には、ただ目の前の光景を噛みし

め、呑み込むことしか出来なかった。



「ねえ、あの子傘も差さずに大丈夫かな？」

「止めておけて、変に関わって面倒ごとに関わるのは。ああ言うのはヒーローに任せ
ておけば良いんだよ」

雨が重い。この世界に生まれて初めての感覚、人目に晒され、雨に打たれず濡れの
甚田は、その目に光を失い、街中を歩いていた。

（——結局、俺は何をしたかったんだ？）

頭に浮かぶのは、これ迄自分の行つてきた事。強くなる事にばかり必死で、ゴジータという存在になろうとして、それでも届かなかつた現実。

唯一至れた超サイヤ人になる事も出来なくなり、どれだけ力を高めても、あの姿になる事は敵わなかつた。

それも当然か、幻覚とは言え、自分は情景ゴジータに見捨てられたのだ。自分はゴジータではない、そう突き付けられ、他ならぬ自分自身が受け入れてしまったのだ。

(もう、何もかもがどうでもいい)

ゴジータに成れず、強くなれる道も閉ざされ、甚田の失意はただ深まるだけ。何もかもがどうでもいい、自暴自棄とも異なる失意の底に落ちた甚田は、ただ自分が消えてしまふ事を望んでいた。

ゴジータにはなれない。そんな分かりきつた現実は無駄に足掻き続けてきた結果、妥当な顛末だと、自らを嘲笑しながら甚田は、ひっそりと誰からの記憶からも忘れられる事を望んでいた。

自分の想いを理解されないのが辛いのではない。ただ、憧れにすがり付いていただけの自分が……恐ろしく滑稽で、みつともなく、惨めだつた。

(はは、こんなことなら、生まれてこなければ……)

いつそのこと、何処かで野垂れ死んだ方がこの世界の為かもしれない。無駄に引つ掻

き回し、迷惑を掛けるより、よっぽど……。

「あつー！」

瞬間、己の体に何かがぶつかりそうになった。相手側に怪我を負わせないよう咄嗟に自分の体を捻ったが、どうやら自分は相当弱っていたらしい。勢いに吞まれ、そのままうつ伏せに倒れる甚田。

もう、自分にはこんな簡単な事すら出来なくなつたのか。哀れや惨めさを通り越して笑えてくる自分の現状に、甚田は口許を歪ませ……。

ふと、視界の端に手が延びてきた。色白で、綺麗な手。ガラスの様に繊細でか細いその手に差し出された甚田は、一瞬訳が分からなかつた。

見上げれば、眼鏡を掛けた白髪の女性が膝を曲げて自分を覗き込んでいた。

記録76

——その雨は、いつもより重かった。

父と母は、個性婚という今では寂れた価値観の下で夫婦となった。父のオールマイトを超えるという野望、その礎として選ばれた母は幾度となく父と交え、子を成していった。

私は、そんな父と母の間に生まれた二人目の子供。轟家の長女として産まれ、他の兄弟達と同様に育ってきた。

差異が生まれたのは、長男である燈矢に個性の扱いで欠点が出来てしまった頃。自らの個性に体が適応出来ず、自身の野望が果たせないと父が思い知った時である。

父……轟炎司は自らの炎で焼かれる燈矢を止めるように促すが、彼は父の言葉を振り払い、個性の力を出し続けてきた。

何度も言っても分からない兄に、父も母も徐々に追い詰められていき……そして、悲劇は起きた。

山火事。自らの個性を扱いきれなくなった燈矢は、自身の炎に焼かれ、亡くなった。父親を振り向かせたくて、懸命に頑張っていた長男は、最期まで父の事を考えながらあの山へ消えていった。

それから父は、自らの執着を末っ子である焦凍に向け、虐待紛いの特訓を受ける毎日。そして長男を失い、それでも止まらない父の野心に心身共に疲弊した母は精神を病み、焦凍に火傷を負わせ、自身も入院した。

あの日から、ずっと我が家は狂ったままだ。父は野望に取り憑かれ、兄は死に、母は壊れ、末っ子は理不尽な痛みを毎日泣いて、次男はそんな家族に見切りを付けた。

私は、ただ繋ぎ止め……いや、そう見せるだけで精一杯だった。おかしくなってしまう私達だけど、それでも家族なのだと、特訓で怪我をした弟の手当てをしながら、そんな自己満足に浸っていただけだった。

私だけだ。皆が傷付いている中で、私だけが常人ぶっている。何も出来ず、なにもしなかった私が、それでも家族だからと言い続けている。

—— 気持ち悪い。父や兄や母でもなく、誰よりも私自身が気持ち悪い。ただ自分が嫌だからと、そんな我が儘で始めた母親ごっこ。いつか元の家族に戻れると、ありもしない幻想に縋るだけの毎日。

本当に気持ち悪い。そんな「元の家族」なんて、最初から何処にもないというのは、私

自身が良く分かっている事なのに。

——でも。

「あの、大丈夫ですか？」

それでも、私は彼の事が放つてはおけなかった。

降り頻る雨の中、ぶつかりそうになった私を寸での所で避け、雨溜まりへ倒れる彼。ボロボロで、手足に巻かれた包帯のあちこちから血が滲んでいる。

周囲の人達は………見て見ぬふり。ヒーローの到着を待てと、通報すらしないで通りすぎていく彼等に、私は言い知れない感情を覚えた。

「………ああ、何でもないよ、気を遣わせて悪かったな」

戸惑う私を余所に、彼は平静を装いながら立ち上がった。そんな彼の横顔を見て、私は嘗ての兄の顔を思い出していた。

きつと、あの頃の彼も近い顔をしたいたのだろう。認めたくても認められない、認めて欲しくて、でも見られない。

だから、せめて自分だけでも認めようと、必死に足掻くその姿。………きつと、目の前の彼もそうなのだろう。

だから………。

「待ってください!!」

気付けば、私は彼の手を取っていた。



その手は硝子よりも脆く、雪のように白かった。雑に振りほどけば砕いてしまいそうな程に弱々しい。

なのに。

「……………なんだよ」

甚田は、その手を振り払えなかった。

「そんなボロボロで、何処に行くつもりなんですか」

「別に、何処でも良いだろ」

「そんな、放っておけません！ 病院で適切な治療を受けて安静にしてない」と！
「なんだ、アンタ医者か？ なら心配すんな。これは俺の不甲斐なさが招いたもの、この傷も直ぐに治る」

目の前の女性は医者なのか、矢鱈と自身の体の事を気に掛けてくる。しかし、後藤甚田の肉体はこの世界に於ける最上級の規格外。手足がへし折れようと、その尋常ならざる回復力で直ぐに修復し、どれだけ雑に扱っても短時間で完治させてしまう。

だから、自分の事は心配する必要はないと、甚田はやんわり女性から手を離すように促すが……。

「そんなの、信じられる訳ないじゃないですか。そんな辛そうな顔しているのに、どうして強がるんですか！」

手は放さない。処か、より強く握り締めてくる女性に、甚田の苛立ちは徐々に積み重なっていく。

既に周囲に人影はなく、雨足だけがドンドン強くなっていく。自分に触れていては自分も濡れるだろうに、それでも目の前の女性は甚田の手を放そうとしない。

「……………いい加減にしろよ。何でアンタみたいな人間に此処までしつこくされなきゃならないんだ。初対面だろうが」

「だって、それは君が……………」

「俺はゴジータだ！ 誰よりも強く、何よりも強く在らなきゃならない！ そんな俺が

「喩え貴方が何者であろうと、貴方は貴方じゃないですか!!」

それは、甚田に取って地雷だった。分かっていた事、分かりきっていた事実。それでも自分に言い聞かせながら、決して目を向けようとしなかった真実。

自分は自分。そんな、誰にでも分かるような事実は甚田に取って何物にも勝る劇物、故に彼の怒りのボルテージは一気に膨らんでいく。

「……………お前に」

「ッ!？」

「お前に、何が分かる」

ヴィランですら裸足で逃げ出したくなる怒気。甚田の怒りの矛先を向けられた女性
は、その顔を真つ青にさせる。

が、それでも手を離さない。いい加減振りほどいてやろうかと、怒りで我を見失い掛
けた甚田は力を込めようとした時。

「それでも、それでも私は貴方の事が放っておけません。だって——」

「お前、本当にいい加減に……………」

「だって！……貴方が、助けを求める顔をしていたのだから」

目尻に涙を浮かばせて、それでも笑い掛けてくる。優しく、朗らかで、慈愛の微笑み。その言葉に、その微笑みに、後藤甚田は自覚した。自覚——してしまった。

「お、俺は………」

ゴジータという最強の力を使い、誰よりも強くなり、誰からも大切な人達を守るようになる。そう意気込み、自らを追い込み続けてきた少年は……。

その実、誰よりも助けを求めている。

「俺は、俺は………」

足ががくつき、力が入らない。崩れ落ちる自分を、女性は精一杯抱き止める。

手にしていた傘は、既に手放している。自身がずぶ濡れになる事も厭わず、彼女は今日まで自身を痛め続けてきた彼を労る様に抱き止めた。

だが、当然女性に甚田の体を支える程の力なんてあるわけがなく、その場に座り込むだけで精一杯。けれど、喻えびしよ濡れになろうとも、その手は決して……。

「もう、大丈夫だよ」

離すことは、しなかった。



その後手離れた傘を拾い、手を繋いだまま近くの公園にやって来た二人は、屋根付きのベンチに座る。

女性の手慣れた手腕で、甚田の体の至る所にあつた傷に手当てを施していく。その間甚田に目立つた反応はなく、抵抗の無い彼に女性の処置は瞬く間に完了していく。

「良かった。手持ちの包帯で何とかなって、私の家ってちよつと特殊で、良く怪我をする弟にこうやって手当てをしてるんです。ほら、簡単な治療の出来る先生って、生徒から見てもポイント高そうでしょ？」

「――」
今更ながら場の空気が重い。女性は少しでも雰囲気を変えようと声色を明るくして、

話し掛ける。

が、それでも甚田からの反応はなかった。無視しているのではなく、単純に此方の声が届いていない。そんな無反応の甚田に苦笑いを浮かべる事しか出来ない女性だが、これ迄の自分の言動を振り返り、その顔を瞬く間に赤くさせていく。

(て言うか、何で私こんな事してるのー!? 私、完全に変な人じゃん! しかもこの子学生!! 私もうすぐ二十歳超えるのに、一歩間違えれば犯罪者じゃない!!)

顔を真っ赤にさせて、はしたないと首を横に振る。

「——俺は」

そんな彼女の耳に漸く口を開いた甚田の言葉が届いた。

「俺は、強くならなくちゃいけないんだ。誰よりも強くなって、最強になって、アイツ等に対抗しなくちゃいけない」

「……………」

「負けちゃダメなんだ。俺が負けたら、皆が殺される。俺がやらなきゃ……誰がやるんだ」

ブツブツと言葉を吐き続け、その意味は当然女性に推し量れるモノではない。けれど、一つだけ分かった事がある。

(そっか、この子……優しいんだ。それもただ優しいんじゃない、誰かの為に頑張れる強

くて優しい子)

強く在ろうと、強くなろうとするのも、全ては守りたい人達の為。存在するかも分からない脅威を相手に諭え無駄に終わろうと鍛え続ける。求道とは異なる修練の道、それを否定するには目の前の少年は純粹過ぎた。

いや、否定なんてする必要はない。彼の想いは何処までもまっすぐで、それがほんの少し捻れただけ。

なら、自分に出来る事があるとするなら……………。

「——ねえ、貴方がなりたいモノって、本当にその先にあるの?」

その捻れた道を、自分で気付かせてあげるだけ。

それだけで……………ほら、目の前の男の子はハツと我に返っている。

「君は、今までずっと頑張ってきたんだね」

「——」

「でもさ、君の周りの人は君が休んでくれるのを待っているんじゃないかな。頑張るのは大事だけど、それと同じくらい休むのも大事だよ」

「でも、怖いんだ。俺が強くなるのを止めたら、誰が宇宙からやってくるアイツ等と戦えるんだって、きつと他の奴らじゃフリーザ達は倒せない。可能性があるのはゴジータとして生まれたのは自分だけ、だから……………」

「うーん、別に良いんじゃないかなあ？」

「……………え？」

「そんなになるまで頑張つて、それでもダメだった。別に怠けている訳でもなく、毎日を頑張つてきた君がいつか負けたとしても、私は君を責めたりしないよ」

「……………俺が負けた所為で、殺される事になつてもか？」

「なつても、だよ」

頑張っている子を貶したり、嘲笑つたり、罵倒しては決してあつてはいけない。それは教師を目指している女性だからこそ信条としているモノである。

喩え目の前の少年が凶悪なヴィランに敗れ、それで自分達が殺されるのだとしても、決して少年の所為にはしない。そう断言する女性に甚田は初めて女性に視線を向けた。

「……………そんなこと、初めて言われた」

「そう？　でも、私は其処まで不安には思わないかな。それに、喩え君が負けたとしても、多分私は殺されれないと思う」

「は？　な、何で……………」

「だって君、諦めないでしょ？」

「どうやら、これも初めて言われた言葉らしい。目に力が戻り、光を宿す黒い瞳は力強く輝いていた。」

「諦めないのなら、きつと君は大丈夫。絶対に、なりたい自分に成れるよ」

立ち上がり、傘を差す。彼はもう大丈夫だと、そう確信しながらその場を後にする女性に。

「あの！」

「？」

「———ありがとう」

甚田は、一言だけ声を掛ける。傷の手当てをしてくれた事、自分の気持ちを軽くしてくれたこと、押し潰されそうな重圧から助けてくれたこと、何より———道を示してくれた事。

自分のしたことは小さなアドバイス。それでも、目に力と光を取り戻し、ありがとうと言ってくる少年に。

「———頑張れ、ヒーロー」

女性———轟冬美は、笑顔と共にエールを贈り、その場から去っていった。
気付けば、雨は止んでいた。



「名前、聞くの忘れてたな」

一方的に絡んできて、自分の抱えてきたものをこれまた一方的に軽くしていった彼女は、もう見えない。

今の甚田にあるのは軽くなった心と体と、取り戻していく力の脈動。失っていたものを取り戻していくような、そんな感覚。

……いや、失くしていたんじゃない。きっと、自分から勝手に見失っていただけなんだ。良く見れば簡単に分かる筈の答えを、今までの自分が拗れて見えなくなっただけ。

きっと、答えはずっと前から出ていたんだ。あの日、自分がゴジータだと認識したあの日から。

ただ、それを口にするのが怖かっただけ。
でも、今なら言える気がする。口にしても、許される気がする。

「——良いかな、俺のなりたい自分ゴジータで」

きつと、万人には受け入れられない。誰もが理想し、夢想するゴジータではなく、自分が思う彼。

不敵に笑い、大胆に戦う。超絶で壮絶な超戦士。自分があの日「カッコいい」と思ったゴジータに。

『いいんだよ、それで』

「ッー」

ふと、声が聞こえた背後を振り返ると……やはり、誰もいなかった。あるのは先程まで自分が座っていた屋根付きのベンチ。

幻聴？ ただの気の所為？ それとも……。

「……………ま、いつか」

ともあれ、自分のやりたいもの、目指すべきモノは決まった。なら、後は……………。
足が進む。その足取りは軽く、いつそ空が飛べる程に。

なりたい自分を見付けた甚田は、自分のなりたいものを示す為——走り始めた。
道行く人々を、車を、風すらも置き去りにして。



「——アイツ、今日も来ないんかな」

ヒーローの名門校、雄英のとある施設。今日のヒーロー学は生徒達のヒーローとしての必殺技を編み出す時間となっている。

それぞれ自らの個性を用いて多種多様の必殺技を編み出していく生徒達、しかしそんな彼等の中に一人だけ姿が見られない。

相澤と山田、共に今回の授業で引率を勤めている教師二人は、この場にはいないあの問題児について思いを馳せる。

「俺さ、教師になってそこそこ経つけど、彼処まで悩みを抱えた奴は始めてみた。……」

いや、生徒の誰にだって悩みの一つや二つはあるんだろうけどよ」

「……………」

「でも、アイツ程自分を罰している奴はいなかったぜ。正直、軽く見てた」

山田ひぎしの独白は続く。

「いつもふてぶてしく、不敵なアイツがその裏でずつと苦しんでいた。……………情けねえ話だ。俺はずつと、アイツの内面を見ようとしなかった」

もつと自分が見てあげていけば、もつと相談や話の相手になつてやれば良かった。喩え甚田の思考思想が理解できなくても、否定せずに寄り添えていけば、何か違っていったかもしれない。

「なあ消太、やっぱもう一度根津校長に直談判して、後藤の奴を探しに行こうぜ。今度は

———」

「よせ、山田」

せめてもう一度街に出て甚田を探しに行こう。喩え徒労に終わろうとも、何処かにいる生徒を見放す様な真似はしたくない。必死に訴えてくる山田ひぎしを、相澤消太は淡々とした口調で断る。

「既に、根津校長が事態の収束に動いている。知り合いの警察に話を通すみたいだし、時期に甚田の奴は見付かるさ」

「け、けどよお！……いや、悪い。誰よりも此処から飛び出して行きたいのは、お前の方だったな。すまん」

冷静に言い含める相澤に流石の山田も反論仕掛けるが、彼の憂いを帯びた横顔によって口に出しかけた言葉を呑み込む。

生徒達に気付かれないよう、目にバイザーを掛けて誤魔化しているが、今の相澤の瞳は後悔と悔しさに満ちている。担任である自分が一番に駆け付けてやるべきなのに、それも出来ずにいる。合理的判断と感情がぶつかり合うなか、それでも自制を選ぶ相澤の選択を、山田が揶揄出来る筈もなかった。

………本当に、甚田は雄英を辞めるのだろうか。辞めるにしても、もう一度だけ話を聞いてやりたかった。喩え理解できなくても、それでも教師として何かをしてやりたい。自分の不甲斐なさに打ちのめされている二人は……。

「へー、此処がトレーニング台所ランドかあ、テンション………いや、上がんねえな」
その日、久し振りに現れた問題児に目を見開く。

「え？ ちよ、あれ甚田じゃね？」

「嘘、マジじゃん！」

「ようやくと来よったか、勿体ぶりすぎやでホンマ」

「うむ！ 元氣そうで何よりだ!! だが遅刻はダメだぞ!!」

学友達に声を掛けられ、適度に返しながら施設に入る。そんな甚田に、山田は堪らず走りよつてきた。

「お、おお前！ 甚田!! 戻つてきたのかよ?」

「何だよマイク先生、そんなに切羽詰まらせて、自慢のトークはどこ行ったよ」

散々心配掛けといて、相変わらずの生意気ぶり、毒気が抜かれた山田はガツクリと肩を落とすが……。

「甚田、お前………本当に良いのか?」

相澤は、それが空元気の類いではないのかと訝しむ。星の都で見た甚田の狂氣的な一面を見たからこそその言葉、バイザーを外して初めて見せる自分を心配している様子の相澤に、甚田は一瞬だけ面食らうが……。

そんな担任教師に甚田はあくまで不敵な笑みで返すだけだった。

「セメントス先生ツ!」

「ツ!」

「一番大きいのを頼む!」

「わ、分かった!!」

相澤の言葉に不敵に笑みを浮かべるだけ、今回の必殺技開発の担当であるセメントスに注文を出すと、甚田は言葉を投げ掛ける教師二人を無視して的確の前に立つ。

大きいのだ。見上げる程に巨大なコンクリートの的、あんな大きなモノを相手にどうするのか、教師三人は勿論、周囲の生徒達も注目する中。

「はあああああ………ダアツ!!」

暴風が、吹き荒れた。爆発の如く轟音を鳴らし、近くにいた生徒達や相澤達を吹き飛ばしていく。

爆発した中心点、そこには黄金の炎を纏った金髪碧眼の甚田がいた。

入試以来見せることがなかった甚田の個性、初めて見る者は驚愕し、二回目の者は冷や汗を流しながら見入っていた。

あれが、あの姿こそが後藤甚田——否、ゴジータの本気の姿なのだ、その場にいる誰もが理解した。

「さて、確か今日のヒーロー学は必殺技の習得だったな」

力を解放し、久し振りの高揚感に身を任せ、甚田は両手を腰に回す。

「———かあ」

それは、必殺技の代名詞。

「———めえ」

それは、後藤甚田がゴジータになって、初めて会得した基礎にして奥義。

「———はあ」

「この世界でこの技を知るのは自分しかない。そんな事実には胸をときめかせながら。」

「——めえ」

「波アアアッ!!!」

放出。自らの力に溜めて、圧縮させた光の奔流は、その悉くを吹き飛ばし、消し飛ばしていった。

廳で光が収まると、施設の半分以上が消し飛んでいて、周囲の生徒達の殆どは吹き飛ばし、目を回している。

山田とセメントスは目が飛び出る程に驚愕し、相澤も何一つ言葉に出来なかった。

ただ、一つだけ分かっている事は……。

「——今後、俺は加減も容赦もしないんで」

「其処んとこヨロシク」

このクソ生意気な大問題児に、教育的指導のプレゼントをせねばならない。ということだ。

その後、巻き込まれた生徒一同含めて、後藤甚田は盛大な歓迎を受ける事になった。

「もう、これはいらないね」

極大の閃光が現れた箇所から、雄英の偉大なる校長は、心から彼の帰還を喜んだ。

悩みを持った生徒が、悩みを抱えながら、それでも前を向いて歩き始めている。ならば、自分達はそんな彼の背中を少しでも押し上げてあげただけ。

一方的に渡された退学届け、それをビリビリと破ると、根津校長はゴミ箱に投げ入れ、上機嫌に部屋を後にするのだった。

記録 77

それから、少しだけ時間が過ぎていった。一週間何の音沙汰もなく、一時は自らを退学間際にまで追いやっていた甚田は、無事に復学を果たしていた。

心配していた担任や各教師から説教を受け、保護者である姫野葵からギャン泣きされた甚田は、その日以降無茶な特訓はしなくなり、授業にも真面目に受けるようになっていた。

その様子は年相応の学生らしく、まるで憑き物が落ちたかの様な、晴れ晴れとしたモノだと、誰かが言った。

そうして、改めて自分のなりたいゴジータとして活動していく事を決めた甚田は、取り敢えず目下の目標としてヒーローを目指すことにした。

別に今の富や名声を生業とした職業としてのヒーローを目指すつもりはなく、あくまで自分の思い描くゴジータとして活動するための………謂わば資格取得の為。

だから甚田はヴィランや犯罪組織を相手に戦うヒーローではなく、救助を目的とした

ヒーローを目指すことにした。

自然災害や突発的事故、これ等を相手にする方がヴィランを相手にするより気が楽と言う若干後ろめたい理由もあったりする。この事を担任である相澤に相談した時は、穏やかな笑みを向けられたのが何気に不思議だった。

そして、それから甚田の雄英での学生生活は加速度的に過ぎていく事になる。相澤の紹介で改めて知り合う事になったワイルドワイルドプッシーキャッツ、林間合宿での態度を謝り、救助の活動を教えを請う甚田を彼女達は笑いながら受け入れた。

当然、甚田は持ち前の超パワーとスピードで救助活動をゴリ押ししていこうとするが、こういった活動には意外にも繊細な力加減が必要である事を思い知る事になる。

崩れ掛ける橋を勢い良く持ち上げればその反動によって瓦解して二次災害を引き起こし掛け、座礁したタンカーを持ち上げようとすれば、タンカーから金属が割れる嫌な音が聞こえ、危うく中にある大量の化石燃料をぶちまけそうになる。

そんな、ヒーローとして様々な失敗を繰り返していく内に、甚田は一つの答えを得る。
(なんだ、俺ってなにも分かってなかったんだな)

全てを粉砕できる力、何者にも触れられない速さ、誰にも真似できない技巧、これ等が在ればヒーローなんてものは簡単になれる。そう思い、一人で強く在ろうとしていた甚田だが、こと救助に於いてそれは間違いであると思ひ知らされる。

出来ることはあつても、知らない事の方が出来ることよりも多い。それが、改めて勉学に励む甚田が自身に抱いた結論であつた。

救助の場に於いて誰かを助けると言うのは、その間にその誰か以外の人達を危険に晒すという事。どれだけ力と技と速さで振じ伏せても、状況という怪物は時間と共にドン・ドン変化し、肥大化していく。

救助活動にあたつて、時間こそが最大のヴィランである。これは救助を生業とするプツシーキャッツ……彼女達の言葉だつた。

だから人を救助する際に、甚田は目の前の状況だけでなく、もっと多角的に視野を広げる事を覚え、更には人を頼る事を学んだ。

そうする事でヒーローとして学び始めた甚田は、時には学友に、時には教師達に助力を請いながら、学生生活を送つていった。

ゴジータを目指し、ゴジータとして在ろうとした。今もその目的は変わらないし、目標もまたブレる事はない。

けど、そんなゴジータとして生きていく自分でも誰かに助けを求めてもいいのだと、あの日見ず知らずの白い女性に教えてもらった。

自分は自分。喻え理想に焦がれても、その根幹は変えることはない。いや、変える必要がないのだ。

だって、理想や憧れは自分だけが理解して持ち得る原典オリジンなのだから………。

そうして数々の人達の力と知恵を借りながら、後藤甚田は前世含めて初となる高校生活を満喫して行くのだった。

そして――。



「とうとう、俺も卒業かー。なんかあつという間だったな」

とある休日の昼下がり、久し振りに施設の皆で夕食をする事になり、その帰り道近くの公園に立ち寄った時の事。

甚田が雄英に入学して早三年、冬を越えて外の空気が少しだけ暖かく感じ始めた頃、かけっこしてはしやぐ子供達を眺めながら、甚田は一人ごちる。

思えば、マトモな高校生活なんて前世含めて初めての経験。同学年のクラスメイトに囲まれての生活は甚田にとって思い出という財産となっている。

それを与えてくれた恩師である姫野には、感謝しかない。子供達と一緒に遊んでいる恩師を見て、甚田は微笑んだ。

「どうしたんだよ、一人で黄昏ちやつてさ」

そんな甚田を気安く隣に立つのは、施設の中での二番目の年長者。城鐘御幸、勤勉且つ真面目な甚田の弟分は、チビツ子達の面倒を見ている妹に手を振っている。

「いや、ちよつとこれ迄の自分を振り返ってな。我ながら中々に痛々しかったなって……」

「あー、確かに雄英に入学したばかりの頃の甚兄い、かなり荒れてたからなあ。俺も先生も何度泣きを見たことか」

「——ああ、本当に悪かったと思ってるよ」

軽く揶揄するだけのつもりだったのに、目を細めて真摯に受け止めている甚田に、御幸は調子が狂うと頭を搔く。

あの一週間の音信不通から二年近く。施設の子供達との触れ合う機会も増やし、自分との関わりも増えるようになっていった。

そこに、何かに取り憑かれたように自らを拷問染みた鍛練を施す甚田の姿はなく、自

分達を本当の弟のように大切にしている長兄がそこにいた。

だからだろう。自然と御幸も「後藤さん」ではなく、甚兄いと親しみを込めて呼ぶようになったのは。

「……冗談だよ、アンタはもう立派に俺達のヒーローだよ」

「御幸……」

「別に、ヴィランを倒す事だけがヒーローの活躍の場じゃないだろ？ 誰かを助け、誰かを救う。それがヒーロー足り得る資格だって言うのなら、甚兄いはもう充分ヒーローやれてるよ」

「……そうかな、そうだと良いんだがな」

来月には甚田は施設を出ていき、一人暮らしを始める。拠点となる場所も星の都のあの田舎と雰囲気似ている地域で、そこでインターン時代に貯めた貯金で一軒家を建てた。そこは誰も甚田を知らない所で、文字通り一からのスタートである。

「ホラ、先生にも挨拶をしていくんだろ？ ちび達の相手は俺達がしておくから、ちゃんと話をしてこいよ」

「ああ、悪いな。お前にも世話になってばかりで」

「いいから今はそういうのは、ホラ、さっさと行った行った」

自分も新学期からは慣れない土地での高校生活が始まるというのに、良く気が付く奴

だ。自分を兄貴と慕ってくれる御幸に感謝しながら、甚田は姫野の所へ向かう。

ベンチに座り、子供達の様子を微笑みながら見守っている。異形型の個性故にその顔立ちは初めて会った時と然程変わっていないが、その表情には何処か疲れがあるように見えた。

最初に自分を見つけ、育て、ゴジータとしての一步を踏み出した切っ掛けを与えてくれた恩師で、誰よりも迷惑を掛けてしまった人。胸中に渦巻く罪悪感を今はその時でないと押し殺しながら、甚田は遠慮がちに隣に座った。

「——いよいよね。貴方が施設から巣立つのは」

最初に言葉を発したのは、姫野からだ。疲れてはいるが、一つの大仕事をやり遂げた様に呟く彼女に甚田は一言「ああ」とだけ返した。

「星の都もその頃には新しく建設される予定だし、次に顔を会わせるのは新居に引っ越ししてからになりそうね」

「……………ちゃんと、顔を出しに来るよ」

現在星の都には新たな施設建設の計画が進められており、来月の甚田の独立に合わせ、工事は開始される予定となっている。

新たに施設が建てられるのは受け入れる子供達の数が増えてきた事と、万が一地下にある重力室に立ち入られる事を防ぐ為である。今後地下の重力室は閉鎖し、その機能を

完全に停止させる。それが、施設から出ていく時に話した甚田からの提案だった。

これで、自分も後を濁さずに巣立てる。今日まで育ててくれた恩師に迷惑ばかり掛けてきたが、それでも一つの区切りは付けられそうだった。

「——ダメね、私は」

そんな時、姫野の口から自嘲の笑みが溢れる。

「結局、私は貴方の苦悩を分かかってあげられなかった。貴方が苦しんでいる時も、辛かった時も、何もしてあげられなかった」

葵が思い出すのは、必死に跪く甚田の姿。自身の情景に吞まれ、押し潰されそうになり、それでも強くなろうと自身を傷付けながら尚跪く。そんな痛々しい甚田をただ見ていることしか出来ない自分を、ダメで情けないと言い捨てる。

「貴方は、貴方自身の力で立ち直って見せた。沢山の友達と先生達のお陰で、あの雄英を首席で卒業して見せた。私は、ただ貴方を苦しめただけ……」

「先生……」

「何より、自分以外の何者かに成ろうとした貴方を……気持ち悪いと思ってしまう。ごめんなさい、ごめんなさい」

最初に自らを傷付け、血だらけになった自分。激しい痛みと苦しみにそれでも心配ないとゴジータとして笑って見せたあの時の自分、それが葵の心に深い傷を負わせてし

まっていた。

「ごめんなさいと謝り続ける葵、涙を流しながら俯く彼女に甚田は前を見据えて言葉を返す。

「——俺はさ、多分あの時生まれてなかったんだよ」

「——え？」

「俺と葵さんが初めて出会った時、あの時は初めて自分という自我を自覚した。それからは葵さんと出会う前の事を思い出そうとしても……何~~も~~思い出せなかった」

これは、半分嘘だ。甚田が甚田として自己を認識する前、
 ベッドで死を待つばかりだった。??????
 だった頃の自分は病院の

けれど、それからどうやって自分がこの世界に生まれ落ちたのか、それがどうしても思い出せない。今となつては別に気にしてもいないが、それでも葵に気持ちを伝える上では、この話は避けては通れなかった。

「だから、俺の始まりは先生、貴方と出会えたからなんだ。先生と出会えたから、俺は後藤甚田として、ゴジータとして始められるようになったんだ」

「でも、その所為で甚田は……」

涙目で、堪えるように言葉を紡ぐ姫野に甚田は静かに首を横に振る。

「これは、俺が決めたこと。俺が強くなる為に俺から始めた事なんだ。先生はただ俺の

「目的に巻き込まれただけ、それだけなんだ」

「ち、違つそれは違うわ甚田！ 私は……！」

「うん。そうだな、きつと俺がそう言つても先生はきつと納得しない。だから——見て欲しいんだ」

「——え？」

「貴方のお陰で今日まで鍛えて来られた俺が、今後どうやって生きていくのか。恩師として、親として、どうかこれからも見守つて欲しいんだ」

「——」

「これからも沢山迷惑を掛けると思う。でも、約束するよ。これからはもう、先生を悲しませたりしない。だから——見届けてくれないかな？」

「——母さん」

「——あ」

その言葉に、今まで止めていた堰が外れた気がした。ポロポロと溢れる涙は大粒のモノとなり、姫野の頬を伝つて落ちていく。

「う、うう……甚田、甚田ア」

「ハハ、相変わらず泣き虫だなあ。その泣き癖、そろそろ治しておけよ？」

「うう、うわぁーん!!」

「あー！ ゴジータがまあた先生泣かしたあー！」

「ヒーローが人を泣かせてるー！ いーけないんだいけけないんだ！ せーんせいと言つてやる!!」

「その先生が絶賛大号泣なんだが？」

「ハッ!？」

声を張り上げて泣き出す葵、そんな彼女の声を耳にした子供達が拳つて甚田の所へ駆け付けてくる。

異形として生まれ、家族や親族達から疎まれ続けてきた人生。異形故に子供には恵まれない体と知り、今日まで生きてきた姫野葵。

そんな彼女に今日、最強で無敵の息子が出来た。

自分は間違つてきた。けれど、全くの無駄ではなかった。それを教えてくれた息子達に囲まれながら、姫野葵は泣き疲れるまで嬉し涙を流すのだった。



それから、暫くして。

「いやー、今日もいい天気だなあ。昼寝したら気持ち良さそう」

雄英を卒業し、サイドキックとしての経験を経て、無事に独立を果たした甚田は、その日交通整理に勤しんでいた。

甚田の拠点としているのは何も無いのが特徴的な典型的な田舎、近くにコンビニもスーパーもないその地で、後藤甚田は出てきた欠伸を噛み締める。

「先日ノシたヴィラン、マス何とかって奴、個性ばっかの単純野郎だったし、やっぱヴィランってのもピンキリなんだなあ」

思い返すのは先日珍しくこの田舎に現れたヴィランを退治した時の事。あの時は独立して初めてのヴィラン戦だったのでついその気になったのだが、実際はワンパンKO。必死の形相で突っ込んでくる筋肉達磨のヴィランにゴジータは拳を一発腹部にめり込ませるだけで終わってしまった。

見掛けはまあまあ強そうだったのに、とんだ肩透かしである。いや、平和そうな田舎で拠点を構えている時点で、ある程度の肩透かしは予想していたけれども。

「出てくるならもう少し強くなつてからにして欲しいよなあ、未だに自分がどれだけ強くなっているのかすら知らないとか、流石に不味いからさあ」

雄英を卒業して早一年。未だに全力を出したことの無い甚田は、今の自分がどれ程の強さになっているのか、未だに計り知れないでいる。

強くなるためには、自分の全力をキチンと把握しておく必要がある。今後自分の成りたい自分の為にも、そこら辺は決して無視できないが……。

まあ、そんな暇もあってゴジータの代名詞であるあの技の研究も、その為の試作品も着々と進められているのが幸いなのだが。

「……………ま、焦る必要もないか。その時になったらその時の全力で頑張ればいい、諦めない心こそが肝要つてね」

あの日の白い女性の言葉を思い出す。焦らず、広く健やかに視野を保つ。彼の亀の仙人の教えにもそんな教訓があつた筈。

人生を面白可笑しく過ごすには、適度のメリハリこそが重要。今更ながら思い出す偉大な教えに、甚田は乗っかる事にした。

そんな矢先、先日助けた少年をあしらっていた甚田にある光景が目に入る。

「うおっ、デツケー隕石」

突如として現れた超巨大隕石。規模も質量もこれ迄見てきたモノとは隔絶された物体に、流石の甚田も驚きを露にする。

しかし、その内心は全く乱れていない。距離感が狂う程の巨大な隕石を前に、これ迄絡んできた少年は腰を抜かし、近隣住民達も驚愕し、言葉を失っている。

そんな彼等を一瞥すると、甚田は軽く屈伸運動をして……………。

「そんなじゃ、いっちょよやってみつか」

黄金の炎を纏い、金髪碧眼の超戦士となり、大空を舞う。

——これが、後藤甚田の始まり、ゴジータの本当の始まりである。



「——ギター、おい、ゴギター！」

「……………んあ？」

「漸く起きやがった。つか、こんなところで堂々と寝てンじゃねえよ」

「もうすぐ試験の結果発表だというのに、なんとまあ大胆な」

「……………あー、今日って仮免試験の日だったっけ？　もう終わったの？」

「これから結果発表よ！　全く、折角のジエントルの晴れ舞台なのに、何で寝てるのかしらこのNo. 1は！」

「まあまあ、良いではないかラブラブ。それよりもゴギター、随分と気持ち良さそうに寝ていたが、何かいい夢でも見ていたのかね？」

「……………ん？　まあな。随分と懐かしい、夢をちよつとね」

「つたく、相変わらず呑気なヒーロー様だよ全く！」

「か、かつちゃん、もうその辺で」

「ハハハ、それじゃあ結果を見に行こうか」

懐かしい夢を見た。未熟で、愚かで、それでも大切な昔の記憶。

あの日に抱いた情景を胸に、甚田は今日も進んでいく。その背中に幾つもの希望を背負いながら、希望の象徴は緩やかに、けれど決して足を止める事なく進んでいく。

記録78

ヒーローを指す少女達が挑んだ仮免試験から数日。現在日本中の人々はこのイベントに注目していた。

ヒーロービルボードチャートJ.P。先日オールマイトの実質的な引退から初となる今期のヒーローランキング、日本中が今回のランキングを注目する中、その男は不気味に嗤う。

「ああ、今回もダメだったか。やっぱもう不動の二位は揺るぎようがねーな」

テレビの向こうで口を開かないヒーロー、エンデヴァーを見て、ツギハギの男は呆れと蔑み、そして僅ばかりの同情を滲ませながら口元を笑みで歪ませる。

「まあ、それも仕方ねーか。不世出と謳われたオールマイトを超えちまう本物の化け物が出てきたんだから」

身体のアチコチから焦げ臭い匂いを漂わせ、ソファァーに寝転ぶ男の名は茶毘。ヴィラン連合の一人であり、青い炎を操るその男はエンデヴァーの次に映し出されるNo.1

の姿を見て、忌々しそうに舌を打つ。

「全く、本当にムカつく野郎だぜ。コイツのお陰で此方の目論見がほぼご破算になっちまってる。……………やっぱ、最高傑作を直接殺す方針の方が合ってるかなあ」

エンデヴァーや自分とは違う、黄金に輝く炎を身に纏うその姿は、茶毘から見ても忌々しい事この上無く、可能ならばエンデヴァーよりも先に始末したい程に茶毘は常日頃からNo. 1ヒーロー——即ちゴジータに殺意を抱いていた。

「……………茶毘、ここにいたのか」

「ああ？ ……なんだテメエか。何の用だよ、死柄木」

そんな茶毘の下へ、顔に手を嵌めたヴィランが一人。ヴィラン連合の一人である死柄木弔が佇んでいた。

「ドクターが呼んでる。例のサンプルが漸く形になりそうなんだってよ」

「例の？ ……ああ、あの何とかって細胞か」

「G細胞、あのでたらめ野郎の細胞が漸く実用可能段階まで漕ぎ着けたらしい。お前も来い」

「——ま、今暇だったし、別にいいか」

先の神野での一件で、少なくとも仲間がヒーローどもによって捕まってしまっている。コンプレス、トゥワイス、トガヒミコ、中々に愉快で見ている面白かった連中も、今

頃は揃って檻の中。

現在のヴィラン連合は、自分と目の前の死柄木を含めてたった二名しか残されていない。組織瓦解も秒読みかと思われた所への呼び出し、せめて自分の目的達成の為の薪になつてくれよ。と、茶毘はほくそ笑む。

先行く死柄木の後を歩きながら、茶毘は惰性的に付き従うのだった。



仮免試験、ヒーロービルボード。続けて行われる大きなイベントは無事に消化され、人々は現在表向きは平和な日々を享受していた。

オールマイトの引退という大きな穴、それはゴジータという存在が補ってくれている

から表面上目立った混乱はない。が、それでもほんの僅ではあるけれど、ヴィランによる犯罪件数が増加傾向にあるのもまた事実。

このまま、一人の英雄に頼りきりではいけない。オールマイト引退以降、明確に突き付けられた問題に、警察やヒーロー公安は頭を悩ませながら向き合い続けなければいけない。

そんな中。

「——マジか」

ゴジータこと後藤甚田は、自宅の玄関にて目の前の人物に驚きを顔にしていた。

「確かにインターンの話は聞いていたし、俺も受け入れるつもりだったけど………マジで来たのか焦凍君」

「君はいらねえ。これからインターンとしてお世話になります。宜しくお願いします」

丁寧な挨拶と共に頭を下げてくるのは、紅白という独特な髪色をした雄英のヒーロー科の一年生、轟焦凍。仮免試験を乗り越え、無事にインターン生として活躍していく筈だったヒーローの卵は、ゴジータの自宅へとやって来ていた。

「………因みに、爆豪は？」

「昨日緑谷と喧嘩して、今は謹慎中」

「何やってんのアイツ」

本当なら二人で来る筈だったのに、今は轟一人しかいない。気になって訊ねてみたら色々アレな理由に流石のゴジータも手で顔を覆った。

「でも、緑谷が言うには尋常な勝負って話だったらしい。元々相澤先生も承知していたみたいで、爆豪の謹慎自体も今日までで、明日以降は此方にくるみたいだ」

「…………ふん？」

緑谷と喧嘩したという話の裏には爆豪なりに考え、行動したモノがあるらしい。事前
に担任である相澤に話を通していた辺り、どうやら爆豪は色々と自分の気持ちを整理す
るための準備をしていたようだ。

「ま、取り敢えず上がれよ。先ずはお前達の近況を知りたい。茶でも出すから、今日から
いはゆっくりしようぜ」

「あ、はい。お邪魔します」

初めてやって来たN.O. 1ヒーローの自宅。緊張しながらも誘いに応じた焦凍はゴ
ジータの後を追う。

大きな背中。父とは違った逞しさを感じさせるその背に、焦凍は自身でも知らない内
に笑みを浮かべていた。



その後、ゴジータとの雑談を終えた焦凍はNo. 1ヒーローの案内の下、地下のトレーニング室へと赴いていた。綺麗に整備された一室、地下でありながら充分な広さを確保されているその空間に、焦凍は戸惑いながら踏み込んだ。

「此処が、ゴジータの特訓部屋………なんか、スゲーな」

「何に圧倒されてんだよ。……さて、今日は爆豪もないからお前を重点的に鍛える方向性で行くが、取り敢えず焦凍、お前どこまで“アレ”を維持できるようになった？」

ゴジータが地下の特訓室に焦凍を招き入れたのは、先日必殺技の指導を行った時、ゴジータがもたらしたアドバイス、その成果を確認するためのモノ。

確認する為だけならジェントルの試験の時に使った所もあるが、今回は人目を避ける為に敢えて自身の敷地内にある地下を選んだ。

「……取り敢えず、なにもしなければ30分程は維持できるようになった」

「実戦に換算するとせいぜい10分弱か……よし、ならもうちつと延ばせるように頑張ってみようか。その後はうちのジェントルとの組手な」

「オッフ、もしかしなくても私を呼んだのはその為であつたか」

ゴジータの後ろで肩を落とすジェントル、彼も先日の仮免試験で合格を果たし、晴れてヒーロー見習いまで漕ぎ着ける事が出来た。夢への一步を進めた彼は現在ヒーロー名を考案中である。

「ジェントル、お前もヒーローを目指す今の雛鳥達の勢いをよく見ておけ」

「ウム、しっかりと拝見させていただくとも」

「……それじゃあ、始めます」

そうして、轟焦凍は自身の力を解放すべく意識を集中させていく。ゴジータから教わった個性の使い方、半冷半燃という個性の新たな拡張と解釈。

『轟、お前の個性は半冷半燃、相反する個性を持つ扱いの難しいモノとされているが……実は結構違うんじゃないかと俺は思う』

『……………というところ？』

『燃やす炎も凍らせる氷も、全ては熱を操る所から始まる。炎と氷、つまりは十と一の関係性だ』

『つまり、熱を主軸にした必殺技が俺の目指すモノだ？』

『その通り。だから先ずは、お前が得意としている……つまりは凍らせる力の応用から始めたいと思う』

『十と一、熱という力を操るお前は矛盾という自然法則から逸脱した力を操れるようになる……かもしれない。だから、先ずはその力を完全にモノにして見せろ』

『——ああ、分かった。やって見せるよ、ゴジータ』
『楽しみにしてるぜ』

炎と氷、相反するエネルギーを持つとされる轟は、今後更なる飛躍を求められている。エンデヴァアの息子ではなく、轟家の最高傑作としてではなく、純粹に自分という存在を見てくれる人。学校の皆や担任である相澤に支えられた焦凍はこの日ある完成形を見せる事になる。

「——よし」

「へえ、上手く扱えてるじゃん」

「なんと流麗な」

胸元からX状に伸びる青白い光、ユラユラと揺めきながらそれでいて美しい輝きに、ジェントルは勿論ゴジータすらも素直に称賛している。

「『赫灼熱拳・燐』 取り敢えず、今はそう名付けている」

「赫灼熱拳……ね、いいんじゃない。カッコいいぜ轟」

轟家の根の深い家族事情は、ゴジータも何となくではあるが察している。それでもその上でエンデヴァーの技の名称を使っている内に焦凍も心境の変化はあったらしい。

必殺技だけでなく、轟の内面の成長を鑑みたゴジータは、それ以上何かを言う事はなかった。

「さて、それじゃあその状態で戦ってみようか。ジェントル、お前の今の課題は分かっているな?」

「ウム、衝撃や物質の衝突による干渉だけでなく、熱や概念的な現象への干渉を可能にするること、であつたな」

「そうだ。災害救助の現場で熱による干渉は決して無視して良いモノではない。お前の個性は物理的干渉には滅法強いが、自然現象に関する影響はまだ把握し切れていないからな。今回の轟のインターン中に可能な限り対策を取れるようになれ」

「相変わらず無茶振りが激しい。……だが、やって見せましょう」

ゴジータに言われ、肩を竦めながらジェントルは轟へ歩み寄る。そのやる気に満ちた瞳に轟もまた不敵な笑みを浮かべる。

「……それじゃあ、宜しくお願ひします。ジェントルさん」

「敬語は無用。我等は共にヒーローを志す同期、であれば当然遠慮も無用だよ」

ゴジータに鍛えられ、既に実力は並みのプロヒーローを凌駕しているジェントル、独特な構えをする彼に倣い、轟も不格好ながら構えを取り……地面を蹴る。

不可思議な軌道を描きながら間合いを詰めてくるジェントルに対し、轟もまた絶対零度の力で応戦するのだった。

「——所で焦凍君、君が此方に来ることをお父様はご承知しているのです?」

「?」 なんて俺のインターンに親父が出てくるんだ?」

「おっふ」



——その日、緑谷出久はとあるヴィラン収容施設へと赴いていた。

仮免試験を乗り越え、幼馴染みである爆豪との因縁も一先ずの決着を迎え、オールマイトから紹介されたヒーローは、嘗てオールマイトのサイドキックも勤めていたとされ

るサー・ナイトアイ。

「自分にも他人にも色んな意味で厳しいとされる彼の下でインターンとして活動していく。そんな環境に気を引き締めていた緑谷が最初に待っていたのは、とあるヴィランとの面会だった。

曰く、「ここに收容されているヴィランが、お前との面会を強く求めている」そう説明され、ナイトアイと先輩である通形ミリオと共に緑谷はそのヴィラン收容施設へと赴いていた。

「——私達の同行は此処までだ。デク、此処から先はお前が一人で行くんだ」

通路の先にある扉、その先に自分を待つていヴィランが自分を待つている。犯罪者と二人きりになることを余儀なくされた緑谷は、不安を表情に出すまいとしているが、目の前のベテランヒーローには通じなかった。

「……あちら側の強い要望でな。自分の持つ情報と引き換えにお前との対一の面会を望んでいる。……安心しろ、既に武器の類いは全て此方が回収している。何かあつても、お前の安全は我々が保証する」

「は、はい！」

「頑張れデク！ 俺達は監視カメラで見守っているから、何かあつたらすぐに駆け付けるからね！」

ナイトアイとミリオからの励ましを受け、意を決した緑谷は扉の向こうへと足を進めていく。

生まれて初めてのヴィランとの面会、緊迫した面持ちで扉を開き、部屋へと入る。

そこは、頑丈な素材で作られた特殊なガラス張り仕切られた部屋。仕切りの向こうには嘗て対峙したヴィランの少女がいて、その目には暗い底無しの闇を抱えていた。

そして……………。

「緑谷君、今日も素敵ですね！結婚しよう!!」

「緑谷君、好き!!」

「うーん圧縮言語ツ!!」

自分を見るなり目を輝かせるトガヒミコに早くも心が挫けそうになる緑谷だった。

記録 79

少女——渡我被身子にとって、世界は息苦しい檻だった。普通に笑っているつもりなのに、笑顔が気持ちが悪いとされ、好きなものになりたいという衝動から来る行いは、他人も両親からすらも不気味に思われるようになっていった。

生きにくい。自分の「好き」な気持ちに正直に生きていく事、それがこの世界では何と生きにくい事か。とうとう両親から拒絶され、罵倒され、見捨てられた少女は、その日を境にヴィランとして活動。自分の欲求が求めるままに生きていくようになり、そして……。



「ああ、ああ！ 推しのイズクキゅんが目の前に！ あ、凄いまた筋肉量増える。童顔な顔して脱いだら凄いか、なんてエツツツ!! これはもう、次世代の18禁ヒーローを目指すしかないですね！」

「おお、言葉の暴風」

顔を赤くさせ、テンション高めに捲し立てるトガヒミコ。凶悪なヴィランである筈なのに何故か憎めない彼女に、緑谷は初っ端から圧倒されていた。

しかし、このままだからだと時間を掛ける訳にもいかない。限られた時間の中でヴィラン連合の情報を少しでも抜き取ろうと、緑谷は表情を引き締める。

「——トガヒミコ、どうして今回の面会で僕を指名したの？」

「えっ、急にキリツとしたイズクキゅんカッコよ。……ゲフンゲフン、それは勿論イズクキゅんとお話したいからですよ！」

「そう、なんだ」

相変わらぬ高いテンション、初めて出会った時から良く分からない好意を向けられてきた出久としては戸惑う他ないが、相手は現在大きな社会問題であるヴィラン連合の

元構成員。

未だに逃亡している死柄木弔と茶毘の行方を知っているかもしれない彼女との面会は、情報を引き出すまたとない好機。相手の自分に対する好印象を損なわず、情報を聞き出す。

危険且つ難易度の高い任務だが、やり遂げる意気込みはある。まずは会話を重ねて警戒を緩めさせ、相手の懐に入る所から模索する。

「僕も君と話をしてみたかった。良ければ色々聞かせてくれないかな」

「え？ イズクキくんが私を知りたがっている？ これはもう両想いなのでは？」
「違うよ」

何故だろう、女子に対しては其処まで耐性は高くない筈なのに、何故か目の前の少女には辛辣になってしまふ。これも雄英の育成プログラムの賜物か。恐らくは違う。

何故なら、出久は本能的に見抜いていたからだ。トガヒミコの抱える闇、その奥にある暗く悲しく、寂しがり屋な本質を……………。

「トガヒミコ、どうして君はその……………ヴィラン連合に属していたの？」

「おお、いきなりですねえ。直線的なアプローチ、嫌いではありません」

いきなりの核心部分、端からみても唐突な緑谷の質問に、監視カメラで監視している人達は息を呑んだ。これでは余計な警戒心を抱かせるだけだと、静観しているナイトア

イトルミリオンを除いた大人達が内心慌てている中、緑谷は真っ直ぐの視線を外すことなく目の前のトガヒミコを見据えている。

そんな真剣な眼差しを推しに、彼女の口は少しだけ軽くなった。

「イズク君は、今の世の中をどう思います？ 息苦しく感じたり、狭く感じたりしませんでしたか？」

「……………」

「私はありません。ただ好きな事を好きといえず、かあいいものをかあいいと呼べない」

「……………」

「私の『好き』はこの世界では受け入れられないモノでした。私にとってはそれがとても息苦しく、生き辛い。だから——」

「だからヴィラン連合に、死柄木弔に与したの？」

緑谷の問いを、トガヒミコは否定も肯定もせずに笑みで答える。それはこれ迄の狂気に染まった笑みではなく、何処か寂しくて諦観した自嘲の微笑みだった。

そんな彼女の微笑みが、緑谷にとって……………。

「弔君は言いました。今の社会のシステムが俺達を生き辛くしているのなら、その全てを壊してやるって。私もそれが良いと思ったので……………」

俯き、下を見るトガヒミコの表情は見えない。けれど、彼女が凶悪なヴィランである

事実には変わりなく、彼女の行動の裏には沢山の人が傷付いたのも揺るがない現実。故に、緑谷出久の口からは慰めの言葉は出てこない。

「トガヒミコ、君はこれ迄多くの人達を傷付けてきた。例え君の過去に何があろうと、その事実が消えないし、その罪もまた消えない」

分かつていた事だ。自分の生き辛さを理由にしても、誰かを傷付ける免罪符にはなりはしない。トガヒミコが求めたのは、自分をこの生き辛い世界からの解放ではなく。

『どうしよう、私、人間じゃない子を産んじゃった!!』

ただ、寄り添ってくれる人とのほんの僅かな共感を得ただけ。好きを言える勇気と、かあいいと言葉に出きる勇氣、そのどちらもが自分には足りないモノだった。

だから。

「だから、もし君がこの施設から出てこられた時は、僕のサイドキックになつてみない？」

「……………」

その差し伸べられた手に、何の反応も出来なかつた。

時間が止まる。そんな錯覚を覚えたのはトガヒミコだけじゃない。監視カメラ越しに眺めていた施設職員達は騒然となり、ナイトアイは眼鏡を外して目頭を抑えている。

唯一ルミリオンだけは、満面の笑みを浮かべて手を叩いていた。

「……………あの、言っている意味が分からないんですけど？ え？ 今イズクきゅんからプロポーズされました？」

「イヤ違うから」

思わず素で反応してしまったのを誤魔化すように惚けるトガヒミコだが、その口振りにいつもの余裕はなく、その目には明らかな動揺が色濃く滲み出ていた。

「どういふつもりですか？ 私をサイドキックに誘うなんて」

「だって、君の個性は凄いいじゃないか。血を摂取することでその人の外見を得られるなんて、色んな活躍の場がありそうだなって」

トガヒミコの個性は「変身」、相手の血液を摂取することで外見をその人と同じモノにするという色々汎用性が高そうな能力。潜入捜査とか特別な才能を求められる場合、彼女の個性は非常に有用であると、個性オタクでもある緑谷は、すぐに彼女の個性の使い方を模索する。

だが、対するトガヒミコは面白くないのか、これ迄推しである筈の出久に対して憤怒の表情を浮かべており、その鋭くなった眼光には憎しみすら込められている様に見えた。

「なんなんですか？ バカにしてるんですか？ 私はヴィランで、貴方はヒーローで

しよう?」

「ヒーローがヴィランを更正させちゃいけない、なんて法律も無かったけどね」

緑谷が脳裏に思い浮かぶのは最近某動画サイトに投稿しているNo. 1ヒーローの姿。これ迄チンピラヴィランとして認識されていたジェントル・クリミナル、そんな彼をヒーローとして育て上げ、数々のトップヒーローにも認められ、遂には仮免試験に参加させ合格させたという実績を叩き出していた。

誰かを助け、救いたい。その方法はヴィランを倒したり、災害から人を守るだけじゃない。個性という超常の力を持って余し、人生を振り回されてヴィランになるしかなかった人達に、一つの選択肢を与える事も必要なのだと、緑谷は思い知った。

No. 1^ゴヒーロー^{ジー}の猿真似^タと言われればそれまでだが、それでも目の前の少女を救いたい、そう思ってしまった以上、緑谷出久は止まらなかつた。

しかし、悪意に深く染まっていた少女には届かない。

「アハハ、成る程それは予想外です。ならイズクきゅん……私の為に血をちうちうさせてくださいますか?」

深く、三日月の様に歪んだ笑みを浮かべるトガヒミコ、獲物を見付けた捕食者の眼光を有し、喜悦と狂喜が孕んだ表情を浮かべる。

母に人間じゃないと罵られ、父親からも化物扱いされてきた。誰にも理解されず、誰

にも好かれる事の無い自分の笑み。

この笑顔こそが、自分の狂気の根底。不気味がられ、気持ち悪いとされてきた自分の笑みを目の当たりにした緑谷は……。

「え？ いいけど？」

即答で、自分の首筋を差し出してきた。全くの違和感、忌避感を感じさせずに……。

その行動にトガヒミコは言葉を失った。何故、そんな純粹な眼差しを向けてくる？ 何故気味悪がらない？ 戸惑いながらどうしてと訊ねるトガヒミコに対して……。

「そう、かな？ 僕からみたら、君の笑顔はとても素敵に見えたけど？」

「――」

あっけらかんと応える緑谷に、トガヒミコは言葉を失った。これ迄化物と呼ばれ、産みの親にすら人間ではないと断じられてきた少女、これまで人の悪意と蔑みに晒されてきたトガヒミコにとって、目の前の少女には眩しさが過ぎた。

「――ヴィラン連合、AFOは複数の組織と繋がりがあつた形跡があります」

「っ！」

「私から言えるのはそれだけ、それ以上は分かりませんし、興味もありません。………それでは」

「待つて、トガヒミコ！」

面会時間も終わりに近付き、席から立ち上がるトガヒミコ。そんな彼女に緑谷は呼び止めるが、今の彼にこれ以上トガヒミコに掛ける言葉は持ち合わせていない。

しかし、そんな緑谷にトガヒミコは一度だけ振り返り。

「ふふ………ばーか」

悪戯に笑みを浮かべ、今度こそトガヒミコは施設の奥、收容されている一室へ戻っていくのだった。

その笑みは何処か憑き物が落ちたようで、その微笑みに緑谷は一瞬見惚れていた。



「全く、肝を冷やしたぞ。一体誰の影響を受けたんだか」

「いやー、やるね緑谷。まさか女の子とはいえヴィランを口説くとは」

「ち、ちちちちちが！ 別に口説くとかそんなつもりは!!」

面会も終わり、施設を後にするナイトアイ達三人は、とある作戦実行の埋め合わせをするべく、大阪へと赴いていた。

緑谷の勝手な言動を諫めつつ、それでも引き出してくれた有用性の高い情報を精査しながら、ナイトアイは眼鏡をかけ直しながら口を開く。

「トガヒミコが残した台詞、A F O が関わったとされる複数の組織。その内の一つが、現在我々が調査に当たっている組織である可能性が高い」

「ッ！」

「名を死穢八齋會。嘗ては極道と呼ばれたヴィラン団体の一つ。ヤクザだ」

「や、ヤクザですか」

「確か、例の個性消失弾の出所も其処から、という可能性が高いんですよ？」

「あくまで可能性の範疇だな。しかし、裏取りの根拠も揃いつつある。鍵となるのは一人の少女、彼女を救い出すことが今後の我々の総合的な目標になる事だろう」

手渡されるのは一枚の写真、ボロボロの写真に包帯だらけの銀髪の少女、額から伸びる刺のようなモノが特徴的な小さな女の子。

恐らくは例の死穢八齋會なる組織の根幹を担っているのだろう。ヴィラン組織が抱える闇の深さに触れた緑谷とルミリオンは表情を強張らせるが、気負いすぎだとナイト

アイから諫められる。

「これから我々が向かうのは、今回の作戦に必要なと判断した面々との顔合わせ……並びに作戦の打ち合わせだ。お前達二人にも働いてもらうことになるかもしれない。気を引き締めろよ」

「はい！」

助ける。既に自分達のやるべき事を見据える二人に、ナイトアイも自然と笑みが溢れる。そんな若きヒーローの卵に安堵しながらヒーロー達が待っている扉を開けると。

「おー、やっぱプリキ○ア好きなんだな。ウチのチビ達も好きだからもしかして思っ
て借りてきた甲斐があつたな」

「しつつかし、それにしても細すぎや。この頃の女の子ならもうちつとふつくらしてた方が健康的なんやで？ ほら嬢ちゃん、たこ焼き食うか？」

「いや、見た感じ何日も飯食わせて貰ってなさそうだし、あまり重いものはオススメし
ねえぞ？ くず湯とかどうだ？」

「今用意してるところだクソが！ つうかこのペスト野郎の処遇を決めるのが先だろう
が!!」

多くのヒーロー達が遠巻きにしている中、中心で屯っている二人のヒーローとイン
ターン生に注目が集まる。彼等が守るように囲んでいるのは与えられた人形を大事そ

うに抱える一人の少女。

そして、そんな彼女を抱えているのはN.O. 1ヒーローことゴジータその人であった。

和気藹々とした雰囲気、そんな彼等の横に簀巻きにされて転がされているペストマス
クを着用している男が目を回している。目の前の状況に理解すること数秒、ナイトアイ
はピクピク震えるコメカミを抑えながら……。

「お前、ほんつつつといい加減にしろよ？」

割りとは本気でキレそうになっていた。

記録 80

「——それで、どういう事が説明して貰えるか？」

「まあ待てよナイトアイ、先ずは落ち着いて話を聞けるようになってくれ。怖いから、インテリヤクザみたいでめっちゃ怖いから」

額に青筋を浮かべ、詰めてくるナイトアイ。その極道顔負けな迫力を見せ付けてくる嘗ての先輩ヒーローに、流石のゴジータも苦笑いを浮かべざるを得ない。

「落ち着け？ やらかした張本人が良くも言う。其処に転がっている男は治崎廻、死穢八齋會のトップだ」

ナイトアイが見下ろす視線の先には、両手両足を縛られ、未だに白目を剥いたままのペストマスクの男。治崎廻と呼ばれる男の素性を知らされたゴジータはアハハとやはり苦笑いを浮かべるのだった。

「あ、やつぱり？ なーんか前に聞いていた情報と似ていた奴だったからもしかしてと思ったけど……成る程ね、コイツが例のオーバーホールって奴か」

「本来なら要請に伝えてくれたヒーロー達と連携し、組ごと連中の身柄を抑える筈だった。なのに……貴様と来たら、どうしてそう先走るのだ！」

「ちよ、ナイトアイそう怒鳴らんでやってくれんか。子供の前やぞ」

堪らず怒鳴るナイトアイだが、それをファットガムが諫める。ゴジータからファットガムへと預けられ、彼の腕の中で怯えている様子の少女に、ハッと我に返ったナイトアイがバツが悪そうに下を向く。

「済まない。……だがゴジータ、私は以前にも同じことを言った筈だぞ。一人で出来ることは限られている。例えそれがオールマイイトであつたとしてもだ。だからこそ他のとの連携も重視しろと」

「ああ、覚えているよナイトアイ。アンタから教わつた教えは一言一句忘れてもいなければ、軽視したつもりはない」

嘗て、ゴジータはインターン先でナイトアイの事務所にも所属していた。当時はまだ荒んでいた頃で、ナイトアイの忠告にも耳を貸さなかつたゴジータだが、心の余裕を取戻し、自分なりのヒーローを目指すことにしたゴジータは、ナイトアイの言葉にも注視するようになっていた。

ゴジータがナイトアイから教わつたのは、他人との連携だけ。常に一人で何でも出来ていたゴジータにとって、他人と足並みを揃えるのはある種の苦痛を伴う事であり、ゴ

ジータの実力を間近で見っていたナイトアイは、だからこそその他のヒーローとの連携を大事にするようゴジータに念押ししていた。

今となつてはその忠告の重要さも理解できているゴジータだが、それでも譲れないモノは確かにあった。

「答えろゴジータ、何故お前は勝手に行動した」

「助けてと、そう言われたからだ」

力強く断言してくるゴジータに、今度はナイトアイが息を呑んだ。自分の行動は大局から見れば間違っているかもしれない。それでも、目の前の少女を助けた事に対する後悔は微塵もない。

そんな不敵の笑みを浮かべるゴジータの横顔を、幼き少女は目を逸らせなかった。



——走る。暗い暗い闇の中を、必死に逃れようと少女は走る。背後から迫る怖い人達から逃げ出したいが為に、少女は必死にその小さな脚でひた走る。

(逃げなきゃー！ もう、もう痛いのはいやー！ 怖いのはいやー！)

少女の手足に巻かれた包帯。走る度に激痛が走り、塞がれた筈の箇所から血が溢れだし、そのような感覚が襲ってくる。

何度も体を壊され、その度に直されてきた。自分の体から血と細胞を削り、その男は言った。

『エリ、お前は呪われた存在なんだ。お前が抵抗すればそれだけ人は死ぬ。もし逃げたりしたらそれだけ人が死ぬ。何故って？ それはお前が呪われた子供だからだ』

嘗て、少女は実の父親を消してしまっている。無意識に、無自覚に、産まれながらに備わっていた個性の力で、少女は自身の父親を消してしまっていた。

それから忌み子として捨てられ、母親からも見捨てられた少女は、母と血縁関係である極道の親分へ預けられる事になる。無自覚に父を消し、母親からも捨てられた少女は心を閉ざし……そして、ある日その男は現れた。

男は少女の力の価値に気付き、衰退しつつある組を建て直すために少女を利用した。

そこに一切の情け容赦はなく、徹底して少女の心を砕きに掛かった。

助けなど求めさせない。誰かに助けを求めれば、それだけ人は死ぬ。そんな洗脳にも似たやり方で男………治崎廻は少女の体を壊して、その度に直していった。

もうイヤだ。痛みと恐怖に撞り潰されてきた少女はその日、僅かな可能性に掛けて逃走した。自尊心も自意識も薄れ、残された生への執着、それだけを頼りに少女は差し込んで来る光に向かって走り出していた。

(助けて、お願い、誰か……！)

「——エリ」

「ッ!?!」

ゾクリ、と。背後から聞こえた声に一度だけ振り返る。薄暗い路地裏の影から現れるカラスの男。ペストマスクを付けたその男は真っ直ぐに自分を追いかけてきている。

恐怖が少女に押し掛ける。怖さと恐ろしきで硬直しそうな脚を、それでも動かして少女は走る。

——何のために？

父を消し、母に見捨てられ、何もかも失った自分が、今更何に縋ろうと言うのか。

少女自身、良く分かっていない。何もかも諦めたら、それならそれで楽になれるかもしれない。これ以上足掻いても無駄だと言うのなら、いつそ……！

——それでも。

少女は、その手を伸ばさずにはいられなかった。

走り、躓き、汚れても走り続ける。我武者羅に走り続け、伸びてくる治崎の手から必死に逃げ延びようとした少女は……。

「お？」

「あ？」

「つと、どうしたチビツ子。いきなり走ってきたら危ないだろう？」

その日、太陽の様な人と出会った。力強く抱き上げられ、初めてされる高い高い。笑いながら見上げてくるその人に、少女は力の限り声を張り上げる。

「——お願い、助けて！」

それは、叫びと言うには剩りにも小さな声。掠れたその声は目の前の男にしか聞こえてはいないだろう。

しかし、ポロポロと涙を流す少女の訴えは男——ゴジータへ確かに伝わり。

「もう大丈夫、何故って——」

ニカツと、No. 1ヒーローは嘗ての相棒に倣って、安心させるように笑った。



「——と、その後はやって来たその治崎にこの子の事情を問い詰めていたら襲ってきたのでやむなく対処、無力化したって訳」

「——理屈は分かった。お前ならそうする事だろうというのみな。しかし、それでも……」

「もつと他にやり方はあったって？ 残念ながら無いな。ヒーローとして助けを求められた以上、其処から見過ごす選択肢なんて俺にはない」

「しかしだな」

「それに、この少女には幾つもの虐待された形跡が残されている。それだけでも保護する理由には充分なんじゃねーか？」

「しかもただ虐待されただけじゃねえ、このチビの体からは明らかに非合法の治療の痕が確認されている。ドンだけ胸糞な案件だか知らねえが、ヒーローが介入する余地は言うに及ばねえだろ」

堂々と反論するゴジータに、それでも食い下がるナイトアイ。そんな彼を納得させようと、両隣に控えていた爆豪と轟が話を付け加える。

「だが、それでは今日の為に集まってくれた方々に申し訳が立たんדר」

各方面から忙しい時間にも関わらず、ナイトアイの呼び掛けに応えてくれたヒーロー達。そんな彼等を差し置いて単独で行動するのは強い力を持つヒーローの悪癖である。

そう断じるナイトアイの肩を、静観していたファットガムが割って入る。

「まあまあ、女の子を無事に保護できた事、それ自体は喜んでおこうや。ワイらから、別手柄だけが欲しくて集まってきた訳やないんやから」

「後から来るリユーキュウ達には俺からも伝えておくからさ、そう目くじら立てないでよ、サー」

「むう……」

死穢八斎會の件でこれ迄世話になっていたファットガムにまで説得されてしまったのは流石のナイトアイも黙り込むしかない。加えてインターン生であり愛弟子でもあるルミリオンからも宥められては師としての立場もない。

それに、やってしまったものは仕方がない。ナイトアイが抱えていた苛立ちはゴジータへのやらかしに對してだが、昔と違って今のゴジータは言動に理屈と筋が通っている。

だったら仕方がないと、深いため息を溢して目の前の状況を呑み込もうとして……。

「——なあ、今更の疑問なんだが」

「んあ？ どしたんロックロック。子供へのプレゼント相談か？」

「いや、その治崎は死穢八齋會のトップなんだよな？ ……そんな奴が例の少女と一緒に長時間いなくなるとか連中、大人しくしていられるか？」

「——あ——」

固まった。ナイトアイも、ファットガムも、爆豪や轟、ルミリオン、デク、そしてゴジータが声を揃えて固まった。

次いで。

「大変だ！ 死穢八齋會の連中が総出で大阪府警に押し寄せて来ている！ ヒーロー達は至急応援を頼む!!」

部屋へ勢い良く入ってくる塚内の言葉により、その場の全員の視線がゴジータへ向けられる。やつちまった。ダラダラと冷や汗を垂れ流しながら、ひきつった笑みを浮かべるゴジータは……。

「い、急いで鎮圧してきまーす！」

超サイヤ人になりながら、急ぎ現場へと急行する。

そんな彼の後を、皆呆れ顔で付いていくのだった。

記録81

「オラアツ!! ウチの若頭をさっさと出せえ!!」

「情報はアガってんだ、隠し立てしても容赦しねえぞ!!」

大阪府警に押し寄せる大勢のヴィラン、声を張り上げ、怒声を吐き出しながら押し寄せてくるヤクザ者達の行進に、警察は自らの防衛に手一杯になっていた。

若頭を出せ、解放しろ。ヤクザ達の言葉の意味を理解出来ない警察は、ただ困惑しながら対処に当たっていた。

そこへ、空から大きな影が警察側を庇うように地上へ下り立つ。大きな翼と鋭い爪、爬虫類の様な目をしたそれは物語に出てくる西洋風のドラゴンに酷似している。

リユークユウ。ヒーロービルボードにランキング上位に名を連ねている彼女が、複数のインターン生と共に大阪府警前へ降り立った。

「三人とも、もうすぐゴジータがここへ来るから、決して無理はしないように! 安全を最優先にしてね!」

「了解！」

「フロツピー、私達は警察の人達の援護に！」

「ケロ、了解したわ」

「私も行くよー！」

巨体であるリューキュウの体から飛び降りる三人娘、ネジレチャンを先頭にウラビテイ、フロツピー。彼女達の錬度の高い連携は、勢いだけの素人でしかないヤクザ達を翻弄していく。

しかし、勢いだけとは言え相手は個性を使うことを躊躇しない極道ヴィラン。特に若頭なる人物を取り戻すと息を巻いている一部のヤクザは、それこそ命を掛ける覚悟でリューキュウ達へ雪崩れ込んでいる。

「いけえ力也ツ！ ヒーローも警察もまとめて蹴散らしやがれ！」

「おおよっ！」

そんな中、一際巨漢の男がリューキュウへと迫る。首筋に何かのアンブルを注入すると、周囲の警察やリューキュウは途端に力が喪われるのを感じた。

(な、急に体から力が抜けて……まさか、今のが昨今噂のブースト薬?)

目の前の力也と呼ばれるヤクザの個性は活力吸収。本来なら触れた相手の活力を己の力とする異能力であつたが、首に射たれたアンブル——ブースト薬なる違法薬物を

用いた事に個性を変化させ、周囲の人間を敵味方問わず活力を奪っていく。

見境なく活力を奪っていく一方で、力也の力は増していく。聽て体軀も増していき、リユークユウすら上回る彼のパワーは察するに余りある。

リユークユウの顔が引き吊り、警察達も怖気付く中……。

「取り敢えず、ギリセーフかな」

黄金の炎を纏うゴジータが、体当たりを仕掛けてくる力也の体を片手で押し留めていた。

「ッ!？」

「ゴ、ゴジータ!!」

「ゴジータ、来てくれたんや!」

「ケロ、間に合ってよかったわ」

唐突に現れたNo.1ヒーローに、今度はヤクザ側が凍り付く。特に、自身の出せるフルパワーを以てしても微動だにしないゴジータに、力也は隔絶な力の差に絶望すら抱いていた。

「さて、ご近所の目もあるし、取り敢えず全員……寝ておけ」

そんな力也の心情など知る由もなく、ゴジータの回し蹴りが力也の胸元に突き刺さる。鋭く、重い。巨体となった自身の体が浮き上がる程の衝撃を受けた力也は、抵抗す

る素振りも見せず地に沈む。

組の中でも主戦力だった力也が一撃で沈められた。No. 1ヒーローの実力を初めて目の当たりにした一部のヤクザは腰を抜かし、殆どの構成員が戦意を失う中。

「ウラビテイ、フロッピー！ 無事!?!」

「デク君！」

「ケロ、爆豪君にショート君もいるのね」

「俺もいるぜフロッピー！」

後からやって来た同じインタース生の緑谷達やヒーロー達も応援に駆け付けてくれた事により、事態は収束していくのだった。



「助かったよヒーロー、特にゴジータ。君の生の活躍を見れるとは思ってもなかったよ。帰ったら息子に自慢できそうだ」

「あ、うん。そっすか」

駆け付けてきたゴジータとヒーロー達の活躍のお陰で、暴徒と化した死穢八齋會のヤクザ、その全員を取り抑える事に成功した。握手を求めてくる警察のお偉方に若干目を泳がせているゴジータに大阪府警に直接赴いていたりユーキウ達は首を傾げている。「ゴジータ、なんか居心地悪そうだけどうしたん?」

「あ、アハハ、まあちよつと……ね」

まさか自分の行動で一つの組を暴走させたとは言えない。訊ねてくる麗日にデクは苦笑いで誤魔化すしかなかった。

「ともあれ、これで死穢八齋會も終わりか」

「まだだ! まだ終わっちゃいない!」

若頭である治崎も確保し、これで旧きヴィラン組織も潰える。誰もがそう思われ一人の警官が呟いた時、一人の青年が声を張り上げる。

「俺達の、廻の夢は終わらない! 死穢八齋會の、極道の未来は、まだ、潰えちゃいねえ!!」

「あれは?」

「構成員の一人、玄野針。死穢八齋會の一人で、若頭である治崎廻の側近です!」

金色のペストマスクの奥から見せる激情、玄野と呼ばれる青年の瞳にはゴジータに対する怒りが滲み出ていた。

「ゴジータ、お前さえいなければ何もかも上手く行ってたんだ！ 廻の夢、組長の願親父い、全てが叶っていたんだ!! それを!!」

「その結果、年端もいかない幼女に暴行虐待……ねえ？ はっ」

玄野の語る若頭と組長の夢、それがどれだけ高尚で尊いモノだとしても、それがあの傷だらけの少女に繋がるのであれば、ゴジータとしては鼻で笑うしかない。

「笑わせんなよ。お前の語る夢つてのは、一人の少女の犠牲に成り立つモノなのか？ だとするならお前は……ほとほと救いようがねえな」

「ッ!？」

ゴジータの脳裏に過るのは施設に住まう子供達。皆、それぞれの理由で両親から捨てられ、心身に大きな傷を負っている。そんな子供達を元気に健やかにしようと、日々奮戦している姫野葵には本当に頭が下がる思いだ。

ゴジータ……後藤甚田にとって、彼女こそが大人としての理想像。自身に至らぬ所があつても、それでも子供達の為に努力を続ける彼女こそが、大人そのものだった。

自分も、そんな姫野に救われた。……だから。

「小さな女の子一人、継らなきやならねえ組織なんざ……とつとと滅びろ」

この瞬間、死穢八斎會はゴジータの明確な敵となった。

「うう、うわあああつ!!」

「ツ、コイツ、葉を!!」

ゴジータの言葉に何一つ言い返せなかった玄野は、拘束された手足を無理やり動かしながら懐にある一本のアンプルを取り出す。

手錠で填められた手を無理に動かした事で手首周辺から血が噴き出してくるが、玄野は止まらない。

直ぐ様拘束しようと周囲の警察及びヒーローは動くが、それよりも早く手にしたアンプルを自身の首に打ち付けると。

瞬間、力が濁流となつて溢れ出る。濁流は暴風となり、周囲を吹き飛ばしていく。目の前の現象に既視感のあるゴジータは目を見開き、ファットガム達は驚嘆している。

「コイツは……………」

思い返すのは神野での一戦、城鐘兄妹達の父を凶暴化させた時の事。目の前の現象にはそれと幾つも類似しており、何より……。

「は、ハハハハ、何だよこの力、スゲエよ!! こんなんじゃあ他の奴がゴミみてえに見えちまうのも仕方ねえよなあ!!」

白い炎を纏い、筋骨隆々となり、髪の逆立った玄野を見てゴジータは確信する。

「———どうやら、してやられたみたいだな」

死穢八斎會、そこに通じている組織。そこには自分の血を利用して何やら目論んでい

る輩がいることはこれ迄の調査で分かつていた。

だが、目の前の実用化に至るまでまだ暫く時間を有すると思つていた。奴の——
A. F. O に与する研究者と言うのは、思つていた以上に面倒な奴らしい。

舌打ちを打つゴジータに、力を得た玄野は笑みを浮かべる。

「これなら、すぐにでも廻を助け出せそうだ。俺の命に変えても、アイツの夢を叶えさせる。そうすれば組長………親父だつて、認めざるを得ない筈だ」

「させると思つてンのか！」

手錠を訳もなく引き裂き、一瞬にして自由の身となつた玄野は、改めて廻を助け出そうと警察へ向き直る。力に溺れ、尋常ならざる眼をした玄野に警察一同は怯むが、そんな事に構わず爆豪が彼奴の頭上に躍り出る。

死角からの強襲、しかも頭上からの完璧な不意打ち。しかし、とある細胞を注入された玄野の五感は極限まで研ぎ澄まされている。迫り来る爆風を前に玄野は爆豪へ視線を向ける。

「出来るさ。少なくとも、此処にいる全員を皆殺しには出来るだろうね」

刹那、背後からの声に爆豪は目を見開き、驚愕していた。今まで、玄野は自分の眼下にいた筈。それなのに爆風に視界が一瞬だけ遮られたかと思えば、奴は自分の背中に回っている。

(ンだ、この速さは!?)

「かつちゃん!!」

「爆豪!!」

咄嗟に走り出した緑谷が振り上げた玄野の腕に蹴りを入れ、轟が氷で動きを止める。二人の本気の一撃はしかして玄野を止めるには至らず。

「邪魔だ」

「「ツ!?!」」

軽くその腕を震うだけで氷は弾け飛び、三人は吹き飛んでしまう。

「あ、危ない!!」

「何の任せい!!」

吹き飛ぶ三人をファットガムがすかさずキャッチ。クツシヨン性のある彼の体に取りまった三人は事なきを得るが、既に玄野は次の手を打っていた。

「全員、暫く止まってる」

玄野針の操る個性は「クロノスタシス」。葉で超劇的に強化された彼の個性は、頭髪の一本一本まで個性の力が宿っている。自在に伸びるその短針と長針に触れられたものは須く遅くなり、その影響力は自由落下等の物理的現象にすら及んでいる。

無数に伸びた短針は悉くヒーロー、警察の面々に射していき無力化していく。向こう

一時間自由を奪われた面々は目を見開き固まってしまっている。

「は、ハハハハ!! この力さえあれば俺は無敵だ!! 何人も、俺達の夢を阻ませは………
!」

「おい」

「ツ!?!」

「お前、ちよつと調子に乗りすぎたな」

その中で、唯一短針から逃れていたゴジータは呆れとも侮蔑とも取れる視線を玄野に向ける。だが、その程度で玄野が止まる訳もなく、いつまでも余裕の態度のゴジータを如何にして崩してやろうかと言う獰猛な思考で埋め尽くされていた。

「ああ、そりや乗るだろうよ。こんなスゲエ力を独占しちまったらよお!!」

それは、最早瞬間移動とも呼べる速さだった。ゴジータとの間にあつた距離を一瞬で零にまで縮め、振りかぶった拳には特大の殺意を込めて振り下ろす。

直撃すれば地盤もろともゴジータを叩き潰せる。それだけの威力を込めた一撃は………。

「——舐められたもんだな」

しかして、当たることにはなかった。

「がっ、あつ………?」

懐に潜り込み、玄野の腹部へ肘鉄を振じ込む。カウンターを利用しての一撃は、玄野の体を硬直させるには充分な威力を秘めており。

「ただ力を得た。それだけで俺と張り合えると驕るその思い上がり、叩き潰してやるよ」
「や、やあめ——」

「シッ」

玄野の口から溢れる懇願、それをゴジータは蹴りを以て吹き飛ばす。瞬く間に遙か彼方へ吹き飛んでいく玄野、数秒後には日本を一望できる高さまで吹き飛んでしまう彼の背後から、更なる一撃が襲い掛かる。

「フンッ」

「——ッ?!?!」

握り締めた拳を振り下ろし、玄野の背中へ直撃する。その衝撃と痛みで既に意識を失った玄野は、泡を吹きながら地上へ落下。

既に回り込んでいたゴジータが、片手でキャッチ。意識不明となったヴィランを無造作に地面へ投げ捨てると、改めて警察へ逮捕を促す。

「——チッ、嫌な予感がするな」

端から見ればゴジータの完全勝利。しかし対照的に、ゴジータの表情は何処か暗かった。

「それで？　今後は君の協力を仰げると、そう判断しても良いのかね？」
「勿論。自分としても、かのNo. 1ヒーローは色々と目障りですので」
「……そうか、なら精々期待するでしょう」

——
ホークス。

記録82

死穢八齋會。裏社会に通じ、闇の中で一人の少女に非人道的な行いをしてきた嘗ての侠客組織は若頭である治崎廻を始め、幹部、構成員達含めヒーロー達の活躍により拘束された事により日本の古くから続くヴィラン組織は解体された。

ゴジータを筆頭に活躍したヒーロー達のお陰で、一つのヴィラン組織が崩壊した。その報せはマスコミによつて大々的に報じられ事で人々は流石と感心し、ゴジータ以外のヒーローにも称賛を送つた。

これでまたヴィラン組織が減つた。しかし、一方で懸念するべき材料もまた増えている。

「——ブースト薬とは異なる新たな違法薬物、か。相変わらず、悩みの種を増やすのが得意な男だ」

ヒーロー公安委員、その中枢。個性という異能社会を表裏問わず支え、時には監視している公安。

その幹部職員の一人である強面の男性は苦虫を噛み潰したような表情を晒しながら、新たに浮上する問題に直視していた。

「服用したとされている玄野針は、薬の副作用とも呼べる効果により、身体に異常な迄の老化現象が起きているとのことです」

映写機によつて会議室の壁一面に映し出される光映像。ベッドの上で横たわるのは身体中が萎び、頭髪は白髪となり、顔は皺と弛みで80代と見間違ふほどに老化した玄野針だった者が映し出されている。

その衝撃的な映像に公安委員達の表情が引き吊る。

「——この劇薬、今後も使用してくる奴は」

「出てくるだろうな、間違いなく。個性の強化ではなく身体能力の強化、それをあんなに分かりやすく効果が現れたとあっては、欲しい奴は必ず手を出してくる」

資料に載せられている情報、其処には白い炎を身に纏い超人染みた身体を披露する玄野針。超常社会である現代において、尚超人と称されるその力は幹部達に否応なくあのNo. 1ヒーローの姿と最悪の未来を予見させた。

もし、もし万が一この劇物が量産されれば間違いなく現在の社会は崩壊する。個性、無個性問わず、必ず欲しがらる輩は出てくる。

何せ、この薬の原材料となっているのは現No. 1ヒーローの血液から作られている

のだから。

「……………ゴジータは、なんと?」

「自分の不始末は自分でケリを着ける。と、珍しく殊勝に言ってきた時は別人かと思見間違えたな」

この事実を知るのは、ゴジータ本人とこの場にいる一部の幹部のみ。秘匿情報の中でもトップクラスに扱いを考慮しなくてはならない機密事項に、公安の幹部職員達は揃って頭を悩ませている。

「ゴジータにも言ったが、今回のこの薬物についてはブースト薬以上に機密として処理しなくてはならない。一般の市場にも出回らないよう、常に見張る必要性がある」

「当然だな。間違つて一般家庭に流入してしまつたら、服用した瞬間悲劇が待っている。No. 1ヒーローの力、その謳い文句は人々にとつて猛毒の一言になる」

数多の犠牲の果てにNo. 1ヒーローと同じ力を得られると知つたら、果たして人々は手を出さずにいられるだろうか。最悪の未来を予見しながら、その対策と方針を打ち立てようと彼等の長い話し合いは続く。

一刻も早く、薬物の処理と敵連合の対処に当たらなくては。長丁場になる事を覚悟しつつ、彼等の会議は今日も続く。



——その頃、某市街では。

「ほれ、お前さんのワンちゃんだ。ちゃんと手綱を確り握つとけよ？　ワンちゃんも、あまりご主人を振り回してやるなよ」

「ありがとう、ゴジータ！」

「ワフン！」

インターン生である爆豪と轟を引き連れて、街中のパトロールへとやってきていた。現在は事故になりかけた案件への対処、大型犬に引きずられ、猛スピードで交差点に入ってくる大型トラックに激突寸前の所をゴジータによって防がれていた。

片手でトラックを持ち上げ、もう片方の手で大型犬を抱き抱え、飼い主の少女に手渡

す。いつぞやの日に体験した出来事を重ねつつ、トラックの運転手に嚴重な注意を終えたゴジータは、後からやって来た三人へと向き直る。

「よお、やつときたな」

「二———二」

挑発の籠った煽りに爆豪、轟、そして緑谷の三人は答えない。そんな余裕なんて微塵もなく、汗を大量に流しながら息を整えるので精一杯だった。

「こ、これが、次世代No.1ヒーローの実力、分かっていたけど………ゼエ」

「はあ、はあ、レベルが、違いすぎる」

（クソが、前の時よりもずっと速エ………！）

雄英に入学し、ヒーローの卵として成長し続けてきた緑谷達。以前の自分とは違うと自負する彼等でも、目の前の聳え立つ壁NO.1ヒーローは余りにも巨大だった。

「とまあ、こんな感じで世の中の理不尽なのは日常の中でも割りとゴロゴロしているものだ。そう言った一つ一つの危機に対しても、俺達ヒーローには迅速な対応するのが求められている。中でも重要な要素は………緑谷、分かるか？」

「は、はい。スピード、つまりは速さかと思えます」

呼吸が整ってきた所を見計らって問いを投げる。そんなゴジータに緑谷は肩で息をしながら答えると、ゴジータは満足そうに頷く。

「より正確に言えば速さと判断力、だな。目の前で変化する状況に対して瞬時に最適な手段と方法を判断し実行する。それまでの実行過程を一瞬とも呼べる時間の中で自分の中で構築しなければならぬ」

加えて、その構築される過程の中で自分に出来る事を把握しなければならぬ。ヒーローに求められる事の多さ、その責任の重さに改めて若きヒーローの卵達は戦慄する。それでも、誰一人屈してはいない。No. 1ヒーローに振り回され、心身ともに疲弊していながらもそれでも三人には怖じ気づいた様子はなかった。

そんな三人を見て笑みを浮かべながら、ゴジータは続ける。

「ま、要するに行動あるのみって事だ。インターンの間は俺が確りケツ持ちしてやるから、午後からはお前達三人が前に出てパトロールをしてみろ」

「は、はい！ 頑張ります!!」

「No. 1にそこまで言われちゃ、退くわけにはいかねえよな」

「当然だ」

気力も申し分なく、やる気に満ちている三人。青くも力強い彼等に、ゴジータはその前にと腕に付けた時計を見て続きを促す。

「その前に、腹拵えだな。時間も良い頃合いだし、どつか近くの飯屋で済ませるぞ」

「あ、もうそんな時間なんですね」

「チツ、流れをブツた切るなよ、萎えんだろうが」

「悪い悪い。けど、実際腹減ると普段より動きが鈍くなるだろ？」

「確かに腹が減ると動きが悪くなるよな」

「だろ？ そんな訳で何処か飯が食える場所を探すぞ」

やる気に満々な三人に水を差してしまった事に軽く謝罪しながら、四人は気ままに街を練り歩く。そんな時、ふとゴジータからある話題が持ち掛けられてきた。

「そう言えば緑谷、お前ナイトアイからあれから何か言われたりしてんの？ 一応今は俺の預かりつて事になってるけど……」

「あ、はい。何でも先の死穢八齋會の後始末が残っているみたいでして、その辺のゴタゴタが終わるまでゴジータの厄介になれ……とだけ」

死穢八齋會。その組織の調査と摘発、並びに問題の少女である壊理の確保兼保護。これ等の段取りと準備に追われていたナイトアイだが、意図もなくゴジータがゴリ押しで解決してしまつた為、ナイトアイは諸々残された問題を解決するために弟子であるルミリオンと共に後始末に奔走している。

それ以外にも色々々と忙しいナイトアイは緑谷の面倒を見る程の余裕もなく、本人も酷く申し訳なさそうにしながら、緑谷のインターンの一時拒否を提示した。

あくまで一時的な処置であり、流星にそれでは緑谷が気の毒だと思つたナイトアイ

は、色んな意味で元凶であるゴジータに緑谷の面倒を依頼。ゴジータ本人も半ば仕方がないと諦めながら、緑谷のインターンを受け入れる事にした。

「ま、俺も似たような事を言われたから別に良いけど……：……：オールマイトが何て言うかなあ」

あの人、何気に嫉妬深い所があるからなあと、電話越しでハンカチを噛み締めてくる相棒兼友人を思い出してゲンナリとなる。

「あの、それよりもゴジータ。エリちゃんの事なんですけど……」

恐る恐ると言った様子で緑谷が訊ねてくるのは、件の死穢八齋會……：否、治崎廻の被害者となっていた少女。

彼女の持つ特異な異能の所為で、壊理——エリは、文字通りその体を幾度も切り裂かれてきた。そんな彼女の体の一部を使って造られたのが、例の個性消失弾である。

エリの個性は「巻き戻し」その力を悪用すれば今の個性社会を根底から破壊しかねない威力を秘めている。当然この事は決して人に知られてはならないトツプシュークレツトだし、今回の件に関わったヒーロー、警察には絶対的な箝口令が敷かれている。

もし万が一外部にその事を知られれば、公安は徹底的に情報の出所を探り、その者に嚴重な処罰を下す事になっている。

だが、そんな特異な個性を持つエリは、だからこそ慎重な対応が求められており、現

在彼女は某病院にて隔離されている。

悪意に晒され続けてきた彼女が今後どうなるのか、不安に思って訊ねる緑谷だが、ゴジータの方は意外と声音は軽かった。

「そうだなあ、訳を説明すれば姫野さん辺りが引き取ってくれるだろうけど……持つている個性が個性だからなあ。暫くは個性を暴走させないように訓練させるのが目的になりそうだな」

「じゃ、じゃあ、個性を使いこなせるようになったら!」

「そりゃ自由の身だろうよ。これ迄あの子はずっと辛い目にあっていたんだ。だったらその後は幸せにならなきゃ、釣り合いが取れないだろう?」

恐らく、彼女が自分の個性を制御するには多大な労力が必要となるだろう。その為には少なくとも時間を必要とするだろうし、その苦勞は彼女をより苦しめるかもしれない。

けれど、彼女を気に掛ける人は今回で多く出てくるだろうし、ファットガムやリユークユウ、二人のインターン生も時折面会に行くと言っている。対個性最強である相澤も、今回の件には非常に協力的で、エリの個性掌握に一役買ってくれる事を了承している。

きつと、この後の彼女の未来は明るいだろう。そう思える程の安心感が、ゴジータの

不敵な笑みにはあつた。

なら、きつと大丈夫なのだろう。自分にも出来る事を探そうと、緑谷が意気込みを新たに一步踏み出した時。

「相変わらず、呑気な面をしているな。ゴジータ」

ふと、威圧的な声が聞こえてきた。

振り返ると、ゲツと表情を歪めるゴジータと、若干不機嫌になる轟。明らかに嫌悪感を示す二人の視線の先には……………。

「ちようど良い、貴様には聞きたいことがある。少し顔を貸せ」

なにやら、炎を纏って此方を睨むN.O. 2ヒーローの姿があつた。

「——どうしよう轟君、普通に嫌なんだけど」

「断つてくれていいですよ」

「何故だ焦凍オオオツ!!」

どうしよう。ちよつと不安になってきた緑谷だった。

記録83

ゴジータの下でのインターン。それは緑谷、爆豪、轟にとって色濃い体験の連続であり、同時にN.O. 1ヒーローの実力を直に体験出来る貴重な時間でもあった。

特に轟は現在はN.O. 2へ返り咲いた実父であるエンデヴァーの下での経験もあって、N.O. 1ヒーローであるゴジータとの差異に色々と考える事が増えていた。

爆豪と緑谷、共に自分と同等以上の個性と力を持つ学友達と共にヒーローになる為の切磋琢磨できる時間は、轟焦凍にとって掛け替えのない時間となっている。

圧倒的実力者であるゴジータの下でのインターン実習。帰ればゴジータ直々の鍛練等、汗水処か嘔吐すら吐き出している激動の日々は、焦凍含めた三人に濃密な経験値を与えていた。

そんな大変ながらも充実した毎日に、今日も頑張ろうと今朝まで意気込んでいた轟焦凍、並びにゴジータ達は……………。

「ヤッホー焦凍君！ 久し振りだねー！」

「お久し振りですバーニンさん」

「君達も良く来てくれたね」

「歓迎するよ」

「ど、どうもありがとうございます！」

「——ッス」

エンデヴァーが開設したヒーロー事務所へとやって来ていた。

日本を代表するトップヒーロー、その中でもN.O. 2として知られるエンデヴァーの事務所だけあって、その規模は大きく、また様々なサイドキックが在籍していた。

様々な個性、多様なヒーロー達の姿に緑谷は眼を輝かせている一方、爆豪と轟はやや不満気味だった。本来なら今頃必死にN.O. 1の背中を追っ掛けている最中だったのに、それを途中で中断され、手持ち無沙汰となったのだ。

謂わば不完全燃焼。悪態こそ吐かないものの、見るからに機嫌の悪そうな……特に爆豪に、我に返った緑谷は焦り始める。

「つーか、俺達何の用で呼ばれたんだよ」

「ちよ、かつちゃん流石に此処では喧嘩腰は止めて!!」

「るっせえ、こちとらN.O. 1の背中を追っ掛けるので必死なんだよ。時間は幾らあっても惜しいんだ。無駄な時間は使いたくねえ」

No. 2ヒーローの事務所以案内され、それでも崩さない爆豪。あまりにも尊大且つ無礼な態度の幼馴染みに緑谷は口から心臓が吐き出されかけたが、隣の轟も似たような事を言い出した。

「親父の……エンデヴァーの用件はゴジータにあるだろうが、それにしたって急過ぎるだろ。そもそも、用件つてのは一体なんなんですか？」

言葉遣い自体は爆豪よりマシではあるが、表情が不機嫌さを全開にしている為に空気は更に重くなっていく。あまりにもあんまりな二人に緑谷は軽く胃の痛みを覚えたが、場の空気が払拭する様な笑い声により、粗な痛みは和らいでいく。

「アツハハハハ！ 流石はNo. 1ヒーローの秘蔵っ子だ。向上心の塊、私達も見習いたいモンだよ」

「ああ？」

「バーニンさん」

翠色に揺れる炎のような髪を靡かせながら三人に近付くのは、エンデヴァー事務所に於けるサイドキックの一人、バーニン。そのヒーロー名通り、火の個性を扱う彼女は感心感心と爆豪達を見やる。

「いやーごめんね。なんかエンデヴァーがゴジータに【だけ】どうしても外せない用があるらしくてさ、アタシ等も詳しく聞いてないんだよ。時間を貰って悪いけど、こ

こはグツと堪えてくれないかな？」

お詫びにお茶菓子位なら出すよ！　そういつてあからさまにご機嫌取りをしてくる先輩ヒーローに何も言えなくなつた爆豪は、鼻を鳴らしてソファアに座る。

そんな幼馴染みの態度に苦笑いしつつも、緑谷は轟と共にエンデヴァアのデスクへ通じる扉を見る。

ゴジータへの外せない用件、余程重要な案件なのだろうか？　胸中に湧き出る漠然とした不安を抱えながら、緑谷はその扉から視線を外せなかつた。



「それで、貴様と冬美はどういう関係なのだ？」

「サラツと何を宣つてやがるファイヤー親父」

エンデヴァアの部屋、二人だけの空間となつた場所に最初に口火を切つたのはN.O.

2の方だった。

その眼をギリリと光らせ、睨み付けてきながら追及してくるNo. 2にゴジータは心底呆れた様子で返した。

「惚けるな、貴様と冬美に何らかの関わりがあることは以前のやり取りで把握している。さあ吐け、いつ娘と知り合った！ 何処で！ 何のために！ 何故冬美に近付いた!?!」
 「顔を近付けん暑苦しい!! なんだアンタ、いつからそんな親バカにシフトチェンジしやがった!?!」

「娘が悪い虫にすり寄られて、黙っている父親はいない!!」

「マジでブチのめすぞ temeエ!?!」

一方的に呼びつけておきながら悪い虫呼ばわりに、流石のゴジータも激昂した。一般的な父親としてなら正しい反応かも知れないが、相手は色々と後ろ暗い要素のある轟家の大黒柱。

ゴジータの脳裏に体育祭で聞いた焦凍の言葉が思い浮かぶ。オールマイトというヒーローを超える為、個性婚という手段を取ったエンデヴァー、自らの子供をオールマイトを超えるさせる為だけに産ませたと語る焦凍の言葉は今思い出しても中々に衝撃的な台詞だった。

そんな後ろ暗い要素満載なファイヤー親父が、自分の子供達の為に憤慨している。新

たに見せ付けられるエンデヴァーの一面に若干の戸惑いを覚えつつも、ゴジータは改めて要件を問い詰めた。

「———で？ マジで一体何の用なんだ？ 生憎と此方は忙しい身なんでね、なるべく早く面倒ごとは片付けたい」

「……………」

いい加減に話を進める。そう目で語るゴジータにエンデヴァーも言いたいことを呑み込み、自身のデスクへ向かう。漸く話が進められると溜め息を溢すゴジータに、一冊の本が投げ渡された。

「なんだこれ？ ……………異能解放？ 矢鱈と付箋が貼られているみたいだが……………これは？」

「先日、ホークスから送られてきた調査報告書。その結果だ」

「ホークスが？」

本の中を見てみると、其処には個性という異能に目覚めた人類に対する思想本。所々過激な要素が盛り込まれ、啓発本というより洗脳に近い宗教本に思えた。

如何にもな本の内容に見ただけで辟易となる思いだが、エンデヴァーの言葉によると重要なのは其処ではないらしい。

ホークス曰く、付箋を貼られた所が要点を纏めた所らしい。言われるがままに付箋の

貼られたところを読むと、事前に書き込まれた内容に違和感を覚え、次に其処に隠された意図にゴジータは目を見開いた。

「おい、これって……………」

「異能解放戦線、或いは超常解放戦線。そこに記されているのはホークスが死に物狂いで調べあげた……………ヴィランどもによる総攻撃の決行日とその詳細だ」

異能解放、超常解放、逃げ延びて未だ行方が掴めない敵連合、裏社会で密かに開発されている違法サポートアイテム、開発された自身の血から造り出された劇物、そして……………A・F・O。

全てが繋がっていくような感覚、そしてその直感は決して間違いではない。幾つも繋がっていく欠片に戸惑っている……………ふと、ゴジータの懐から着信音が鳴る。

エンデヴァーに一瞥すると向こうもヒーローとしての直感が働いたのか、出てみると促してくる。音声スピーカーに切り替え電話に出ると、相手は職場体験の際に知り合い、連絡先を交換したグラントリノだった。

『ゴジータ、良かった。出てくれたか』

「グラントリノのじっちゃんか、どうした？ アンタが掛けてくるなんて珍しい」

『ああ、実は少し此方で敵連合に関する進展があつてな。折り入ってお前さんに協力して欲しい事がある』

「協力？」

『ああ、敵連合の幹部の一人、黒霧を捕まえた。序でに奴の正体もな』

状況が加速的に進んでいく。二転三転していく状況にゴジータは予感を覚える。

即ち、ヒーロー対ヴィランの全面戦争。超常黎明期から続く負の遺産の発露、その瞬間がもうすぐ迫ってきているのだと。

ゴジータもエンデヴァーも、犇々とそれを感じるのだった。



「ふふふふ、いいぞ、良いぞ！ やはりワシの見立ては間違いではなかった!!」

「マキア！ そして死柄木弔！ お前達なら、お前達であるならば、きつと耐えられる!!

新たな生命体として、この星に君臨出来る!!」

「そうならば、全てがお前達の思うがままよ!!」

薄暗い闇の中で、賢しき悪意は嗤う。眼前に広がる血の海に、その中で悶え苦しむ二体の怪物。

彼等こそがA・F・Oが願ったもの。彼等こそが、自分達が思い描く最高傑作。

【最強】

彼等が一度目覚めれば、それだけで現在の社会は崩壊する。その事を想像するだけで絶頂する悪意は、今日もおどろましき笑みを浮かべながら作業を続ける。

日常の崩壊、ヒーロー社会の崩壊まで後僅か。その日が来ることを夢見ながら、二体の怪物は悶え、苦しみ、そして………嗤い続けた。

記録 84

「やれやれ、別支部とはいえまさかまた此処にくるとはな」

日本本土より離れた人工島、個性による凶悪な犯罪を犯したヴィラン達を収容する監獄「タルタロス」—— A. F. O. が収監されている所とは異なる支部——に、ゴジータは訪れていた。

相変わらず開放的な海辺に在るとは思えない巨大で重厚な扉、その前に降り立ったゴジータは扉の前にて待っていた人物に片手を上げて挨拶を告げる。

「よお、グラントリノのじっちゃん。久し振りだな」

「おう、よく来てくれたなゴジータ。神野での一件では世話になったな」

年老い、小柄でありながら未だに現役で前線で身体を張る老兵グラントリノ、ゴジータの親しげな挨拶に心地よく返すも、その表情は何処か暗い。

自分を呼び出した事といい、余程重大な話なのだろう。真剣な面持ちのヒーローにゴジータも真面目に訊ねた。

「——で、マジなのか？ 例の黒霧を取っ捕まえたつてのは」

「ああ、塚内達警察の地道な調査の賜物だ。アイツ等の奮闘がなければ、黒霧の逮捕はもつと難航していただろうな」

案内するように先行くグラントリノの後を追い、タルタロスの中へと入っていく。

黒霧は塚内達の労力のお陰で捕まえられた。グラントリノのその言葉に日頃から色々と世話になっているゴジータは流石だと舌を巻く。

「じゃあ、奴からなんか情報でも得られたんか？ 例えば現在の敵連合の潜伏場所、とか」

「それなんだがな」

黒霧という敵連合の中でも重要な立ち位置にいらっしゃるだろう人物の捕縛、それに伴って尋問等の聞き取り調査により、ある程度の情報は得られるとゴジータは考えていた。

しかし、口ごもるグラントリノを見るに、状況はそんな単純なモノではないらしく………。

「ここだ。此処に黒霧達がいる。入ってくれ」

「おう。………ん？ 【達】？」

辿り着いた重厚な扉、グラントリノの言葉に違和感を覚えながら、開かれる扉の先へ足を踏み入れる。

其処には……強化ガラスの向こうにて拘束され、個性を含めた一切の身動きを封じられた黒い靄に顔を覆った黒霧と。

「来たか、後藤」

「酷く憔悴した嘗ての担任である相澤消太とその相方、山田ひざしが沈痛な面持ちで待ち構えていた。」



「この黒霧が、先生達の元同級生だと？ マジなのか、それ」

グラントリノに呼び出され、黒霧を収監したというタルタロスへ赴いたゴジータが、そこで待っていた相澤達から聞かされたのは世にもおぞましい話だった。

嘗て、ヒーローを目指す際に相澤達も通ったインターン生活。ヒーロー見習いとして活躍していた相澤達は、しかし唐突に悲劇に見舞われる事になる。

インターン当時、大型ヴィランの突然の強襲。それにより殺された同級生の白雲隴。相澤や山田と同じヒーローを志し、同じ事務所で活躍しようと約束していた嘗ての仲間。

その嘗ての同級生が肉体を改造され、黒霧として利用されていた。悪い冗談としか聞こえない話だが、生憎と相澤先生にそんな事が口に出来る性分で無いことはゴジータもよく理解している。

それに、隣で意気消沈としている山田も似たような顔をしている事から、どうやら本当の話らしい。呼び出されて早々に重すぎる話にゴジータは溜め息を溢しそうになるが、本人達の手前グツと堪えた。

「それで、先生達が俺をここへ呼び出したってのは……もしかしなくても？」

「ああ、神野で見せた虹色の光、あの仮面の脳無にやった同じことをコイツにもしてやって欲しい」

「頼む後藤、元生徒であるお前に縋るのは情けないことこの上ないが、どうか白雲を

……俺達の友達^{ダチ}を救つてやつてくれ。これ以上コイツを、ヴィラン達の思い通りにさせないでやつてくれ」

A. F. O. が神野でゴジータに差し向けた仮面の脳無。元となる人物の個性により、これ迄年単位で改造されてきた脳無の中でも一際異質な存在。

度重なる改造を施され、最早嘗ての面影も無くなっていた脳無だが、ゴジータの放つ虹色の光——【ソウルパニッシャー】のお陰で、元の姿に戻る事が出来た。

仮面の脳無——弟分である城鐘御幸の父親だった彼は、現在も意識不明の状態となつているが、それでも相澤と山田の二人が縋るには充分だった。

どうか、嘗ての級友を元に戻してやつて欲しい。そう目で語り掛けてくる嘗ての恩師達に、ゴジータは申し訳なく思いながら口を開いた。

「——期待させといて申し訳ないが、あの技は別に死者蘇生の効果は付随していない。アレはあくまで浄化の業、その人に纏わり付いた不純物を取り除き、元の状態に可能な限り戻してやるってだけのモノだ」

ゴジータが長年時間を掛けて完成させた業、【ソウルパニッシャー】。それは邪悪を取り除き、悪しき魂や怨念を浄化させる神業である。

しかし、それは言うなれば歪んだモノを正常に戻すだけの話であり、死者を甦らせる代物じゃない。寄せられた期待を裏切る様で申し訳ないが、既に死んでいるだろう人物

を元に戻す手段は流石のゴジータにも持ち合わせていなかった。

「俺の力では、精々昔の姿に戻してやれるのが精一杯だ」

「――」

ゴジータが城鐘兄妹の父親を救えたのは、偏に彼が死んでいなかっただけ。既に死亡し、肉体を改造された黒霧改め白雲にソウルパニツシャーを施しても、物言わぬ死体に成り下がるだけである。

「そう……か、そう、だよな」

項垂れ、地面に座り込む山田、嘗て自分を教え導いた教師が此処まで弱るのは見たことがない。相澤も心此処に在らずといった様子だ。

そんな二人にどう声を掛けたらいいか分からずにいると、ふとグラントリノが口を開いた。

「けどよゴジータ、この黒霧……いや、白雲か。仮に仮死状態で改造されてたとしたらよ。その場合はどうなるんだ？」

「え？ いや、うーん。そりゃあやつぱり……神野の時みたくなるんじゃないやねえの？」
仮に死亡と確定していた筈の白雲が仮死状態だった場合、その結末はゴジータにも分からない。ただ、肉体が死亡した場合個性因子がどうなるのか、人道的配慮もあつて未だに明らかになっていない部分が多いのもまた事実。

もし、白雲臚の現在の状態が死亡ではなく仮死状態で、その上に黒霧という別人格、個性が張り付けてある状態だというのなら、万が一の可能性があるのかもしれない。

「……………正直、これに関して俺がとやかく言うべきじゃないと思う。仮にグラントリノの言う通りだとしても、実行するには俺よりも二人の方が色々と気持ちの整理を付けた方がいいんじゃないか？」

だが、人一人の生死を左右させるには、現時点では不足に過ぎる。何せ、今ここでゴジータがソウルパニッシャーを施すと言うのは目の前の親友を二度も殺す事に繋がってしまうからだ。

脳裏に甦る嘗ての光景。自分を庇って殺された嘗ての級友を思い返しているのか、相澤の表情は暗い。

白雲を活かすか殺すか。突然突き付けられる選択肢、微かな希望が出てきてしまったが故の苦悩を前に、山田と相澤は……………。



「悪かったなゴジータ、結局無駄足させちまった」

「気にすんなよグラントリノ。幸い黒霧……いや白雲か。彼から有益な情報を得られているんだろ？ それを聞かせてもらっただけでも来た甲斐はあった」

タルタロスの門を潜り、外へと戻ってきた二人。グラントリノからの謝罪を受け取り、その上でゴジータは気にするなと返す。

実際、詳しい情報はまだ精査されていないから聞かされていないが、黒霧状態の彼を尋問した際、有益な情報を得られたという事実はグラントリノから耳にしている。

恐らくは今頃超常解放とやらのヴィラン組織に潜入しているホークスと極秘のやり取りをしているのだろう。彼の負担を考慮するなら、余計な手出しはせずに静観するのも一つの手だろう。

「——それに、此方のやるべき事もあるからな。断片的とはいえ、情報が共有出来ているのなら、やりようはある」

ホークスからエンデヴァーを通してもたらされた情報。数カ月後に待っている大規

模ヴィラン組織との抗争が待っているとゴジータは予想する。

——本来なら、自分一人が敵組織に乗り込んで力づくで解決するのがベストなだろう。しかし、それではいけないと昨今の社会情勢は学習しつつある。

一人の超人が活躍するのではなく、一人の人間に責務を押し付けるのではなく、ヒーロー全員が挑み、乗り越える。その決意と覚悟を世論に証明する為にもこの作戦は必要なのだろう。

だから公安委員はゴジータに敵連合に関する情報は可能な限り抑えてきた。全ては人が個性という異能とキチンと向き合い、ちゃんとした社会を形成するために。

だから、ゴジータは無理に敵アジトを聞き出す真似は止めた。

「お前さんがそう言ってくれると儂等としてもやり易い。済まないが、色々頼んだぞ」「おう。面倒な書類仕事以外なら任せとけ」

それだけ言ってゴジータは空を飛び、遙か彼方へ飛翔する。相変わらず頼もしい後輩に安心感を抱きながら、グラントリノも次の行動へ移るのだった。

「——しかし、超常解放戦線ねえ」

空を行くゴジータは思う。これ迄のヴィラン達の動を、裏で蠢く悪意の思惑を。

今まで、ゴジータは相手を思いやって戦っていた。本気で殴れば触れただけで殺しかねないから、相手が気絶するギリギリの力加減でその力を奮ってきた。

ヒーローだから、誰もがNo.1ヒーローである自分を見て、ヒーローとして相応しい行動を心掛けていたからである。

けれど、それでもヴィランの犯罪件数が無くなる事はない。減ることはあっても、オールマイイト一強だった頃よりも僅かだが増えている。

何故か？ ゴジータが若いから？ 経験の浅いヒーローだから？ それとも……自分の血を手に入れたから？

理由は思い付く。けれど結局の所、最大の要因は一つしかない。

詰まる所……舐められているのだ。自分は、ゴジータというヒーローは、決して自分達を殺しはしないと、侮っているのだ。

「——上等だ」

嗤う。誰もいない空の上で、ゴジータは不敵に笑みを浮かべる。

ゴジータは最強である。昔とは異なり、程度の差はあっても後藤甚田の根底にある自身の最強の渴望は今もこれからも変わりはしない。

そんな甚田が、自分の憧憬が侮られていると知って平然としていられるのか。

答えは……否。

「最強つてのを、見せてやる」

侮るといふのなら見せてやる。そう決意するゴジータは急ぎ出久達の元へ戻り、心身

ともに鍛えていくのだった。